PL
755
.35
S5
v.7

Shin gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

新群書類從 第七

河內枚方高橋湘園架藏之印

PL
755
.35
S5
v.7

國書刊行會之印

UNIVERSITY OF TORONTO
JAN 27 1964
East Asiatic Studies Library

一書目の讀書者に於ける、猶海圖の航海者に於けるがごとく。其の重要にして缺く可からざるや論無きなり。然るに書目の爲し易からざる、亦猶海圖の爲し易からざるが如し。これ其の世おのづから應に具はるべくして而も却つて闕けて存せざる所以なり。特に小說瑣記の類の叢脞細碎の書に至つては、風流にして才を愛するの士は、之を讀む有れども之を錄する有る無く、老實學に篤きの人は、之を鄙視して之を重視せず。爲に其の書目の撰せらるゝものある無く、時に或は撰せらるゝ有るも而も刊せらるゝ有る無し。本卷收むるところの書目類總べて十七種、必ずしも皆完璧にあらずと雖も、或は其の未だ撰せられざるを撰し、或は其の未だ刊せられざるを刊す。聊か以て讀書者に小補を爲すべしと云ふ。

一江戸狂歌書目。　狂歌は實に德川氏文學の一大分科なり。然れども其の書目に就ては成書あるを聞かず。野崎城雄氏狂歌を嗜むこと年有り。而して後咏吟の餘始めて此の狂歌書目の撰あり。是皆同氏の目擊手錄するところに係り、一浮泛空疎のところ無く、深く信憑するに足る。採錄するところ京阪所刊の書を缺くを以て一方に偏するに似たれども、狂歌は天明前後に振ひ、天明前後の狂歌は江戸を樞軸とせるなれば、其の撰殆ど璧を取り櫝を舍てたりといふべし。

一俳諧書籍目錄。　元祿寶永に亘りて京都井筒屋刊するところの俳諧書籍目錄あり。漆山氏俳諧書目、同書を基礎として、增加するに同書の刊後明治に至る間の俳書の目を以てし、之を音に準じて排列し、搜索に便ならしめたり。其の詳細は本書例言を見て知るべし。

一浮世草子目錄。
一續吉原書籍目錄。
一草雙紙書目。
一笑話書目。
一洒落本目錄。
一中本書目。
一人情本目錄。以上七種大久保葩雪氏撰するところにかゝる。此の類の書目世に一の成書ある無し。大久保氏の撰、先づ後人の爲に基石を置くものといふべし。
一好色本目錄。
一吉原書籍目錄。以上二種共に柳亭種彦の手錄、大久保氏の增訂にかゝる。
一增補青本年表。

一増補續青本年表。以上二種は刊本無しと雖も、世もとより其の書あり。然れども傳寫の久しき、誤脱錯亂を生じて、人々其の佳本無きに苦めること久し。大久保葩雪氏複を削り遺を補ひ、誤を正し疑を決し、記載の範圍を擴張し、編輯の體裁を畫一にし、作者畫工書肆の事より風俗流行の瑣聞に至るまで、苟も關渉あるものは綿密に注記し仔細に考證し、人の爲めにすること親切叮嚀、勞を效すを吝まず。終に大に舊態の陋蕪を改め、井然として觀る可きに至れり。今一々之を擧示せずと雖も、同氏用意の痕は、具さに本書に就て之を知るべし。

一讀本年表。 所謂讀本は徳川期小説の大成せるものにして、其の編述の歳月、數年若くは十數年若くは數十年に亘る。讀本年表採録洽からざるの憾無きにあらずと雖も、之を記する一々明細、これ亦後の好事者の爲に基石を安んぜるの新撰にして、此の類の

嚆矢といふべし。

一合卷外題集。　外題集は寫本を以て世に傳ふ。續青本年表と出入することと甚だ少からずと雖も、體裁おのづから別なるを以て倶存するを妨げず。本卷收むるところ、一に舊本に依り、間々誤謬の明白なるものを正したり。

一淨瑠璃外題年鑑。　外題年鑑刊本三種あり。本卷收むるところ、三を會して一に歸し、彼我對照點檢の勞を省く。

明治三十九年初夏

幸田露伴識

新群書類從第七目次

書目

江戶狂歌書目凡例……一
江戶狂歌書目……二
俳諧書籍目錄凡例……一三
俳諧書籍目錄……一四
浮世草子目錄例言……一一七
浮世草子目錄……一一八
好色本目錄小引……一四五
好色本目錄例言……一四六

好色本目錄……一四七
吉原書籍目錄例言……一七三
吉原書籍目錄……一七四
續吉原書籍目錄例言……一八五
續吉原書籍目錄……一八六
增補青本年表緒言……一九五
增補青本年表凡例……一九六
前期青本書目凡例……一九八
前期青本書目……一九九
增補青本年表……二〇五
增補續青本年表凡例……二三五

増補續青本年表……三三八
索引……四六三
合卷外題集……四六九
草雙紙書目例言……五五七
草雙紙書目……五五八
笑話書目例言……五七九
笑話書目……五八〇
洒落本目錄緒言……六〇九
洒落本目錄例言……六一一
洒落本目錄……六一二

中本書目例言……六三七
中本書目……六三八
人情本目錄緒言……六三五
人情本目錄例言……六五五
人情本目錄……六五六
讀本年表凡例……六六五
讀本年表……六六六
參考今昔操淨瑠璃外題年鑑引……六九一
參考今昔操淨瑠璃外題年鑑凡例……六九二
今昔操淨瑠璃外題年鑑叙……六九三
參考今昔操淨瑠璃外題年鑑……六九五
終……

新群書類從第七

書目類

江戸狂歌書目凡例

一ひとたびおのれの目に觸れたる江戸古今の狂歌集書目を年代にわかちて掲ぐと雖も端本の月並集又は歳旦の摺物の如きものは大かた省きて載せず

一序文又は書中よみ人の名前等にて大かた其年代のおしはからるゝものは口口年間と記してその年號のうちに加へ全く時代の明かならざるものは卷末年代未詳の部に記入せり

一冊數のうち只大とも小とも記さゞるは普通の半紙本なり、冊とあるべき處に帖としるせしは折本仕立のものなり

一此書を編むに當りて我が本町側の諸子おのれが見聞の足らざるを補ひ給ひたること多し茲にその厚意を謝す

明治卅三年初春

蟹の家老人識

江戸狂歌書目

野崎左文編

明和以前

天明年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
若葉集	二冊	唐衣橘洲選	—	天明二年	江戸近江屋本十郎
萬載狂歌集	二冊	四方赤良選	—	同三年	同須原屋伊八
徳和歌後萬載集	二冊	同上	—	同五年	同同上
故混馬鹿集（一名狂言鶯蛙集）	二冊	朱樂菅江選	—	同上	同蔦屋重三郎
狂歌才藏集（一名才和歌集）	二冊	四方赤良選	—	同上	同同上
狂歌三十六人選	大一冊	同上	未詳	同三年	同巴人亭藏版
狂歌角力草	二冊	普栗釣方飯盛 膾盛方光等	—	同四年	同
狂歌狂文老萊子	中五冊	四方赤良編		同上	同蔦屋重三郎
狂文寶合の記	三冊	元杢網、平秩東作、竹杖爲輕	北尾政演 同政美	同三年	同上總屋利兵衞
狂歌評判俳優風流	横本三冊	赤良、菅江、橘洲選	頭光	同五年	同蔦屋重三郎

狂歌百鬼夜狂	一冊	平秋東作以下十四人	—	同上	同同上
濱のきさご	袖珍一冊	元杢網	—	同三年	同同上
狂歌いたみ諸白	同一冊	大門喜和成追善狂歌集	—	同四年	同同上
狂歌江戸の花海老	小一冊	四方赤良選	十三歳宗松 鄰三 南外名	同二年	同本屋清吉
狂歌四藹二賛	一冊	白鯉館卯雲 手柄岡持		同上	同
四方赤良めでた百首	小一冊	四方赤良咏	—	同三年	同今福屋勇助
新玉狂歌集	中一冊	同人選	—	同六年	同蔦屋重三郎
狂歌千里同風	一冊	同上	—	同七年	同同上
十才子明月詩集	小一冊	同人批	—	同五年	同同上
狂歌知足振	小一冊	普栗釣方	—	同三年	同まん〳〵堂藏版
狂歌天明睦月	中一冊	朱樂菅江選	—	同六年	同鴈金屋久兵衛
狂歌千代のためし	一冊	同上	—	同八年	同
八重垣縁結	一冊	同上	—	同上	同山崎屋金兵衛
狂歌鸚鵡盃	大一冊	同上	—	同上	同八重垣連藏版
天明新鐫五十人一首 狂歌文庫	大一冊	宿屋飯盛編	北尾政演畫 蜀山人書	同□年	同蔦屋重三郎
天明新鐫百人一首 古今狂歌袋	大一冊	同上	同上 同上	同□年	同同上
狂歌猿の腰掛	一冊	濱邊黒人編	—	同三年	同三河屋利兵衛
狂文棒歌撰	三冊	鳴瀧音人選	吉 重?	同五年	同須原屋茂兵衛
狂歌天の川	中一冊		—	同七年	同蔦屋重三郎
落栗庵月並摺	中一冊	元杢網選	—	同三年	同 —

寛政年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌部領使	二冊	橘洲、飯盛、真顔、定丸選	—	寛政三年	江戸 蔦屋重三郎
狂歌四本柱	二冊	頭光選	—	同四年	同 山中要助
狂歌上段集	二冊	同上	—	同五年	同 蔦屋重三郎
晴天闘歌集	二冊	同上	歌數闘外名	同八年	同
狂歌初心抄	中一冊	唐衣橘洲著	—	同二年	同 蔦屋重三郎
狂歌二妙集	大一冊	同選	—	同七年	—
狂歌初まなび	大合本一冊	同著	—	同十二年	同 醉竹庵蔵版
狂歌東西集	二冊	三陀羅法師	—	同六年	同 西宮新六
狂歌三十六歌仙	大一冊	同上	辰齋	同上	同
年始物申どうれ百首	中一冊	鹿津部眞顔	末詳	同五年	同 蔦屋重三郎
狂歌にせ物語	二冊	曼鬼武、山東京傳	—	同三年	同 咸和亭蔵版
狂歌太郎殿犬百首	二冊	頭光選	—	同五年	同 山中要助
狂歌伯樂春帖（癸[illegible]号）	一帖	同上	等淋、俊満	同四年	同 伯樂連蔵版
金撰狂歌集	一冊	鐵屋金埒	政美	同八年	同 蔦屋重三郎
狂歌仙臺百首	中一冊	同上	—	同七年	同 同上
狂歌柳の絲	大一帖	淺草庵市人	—	同九年	同 同上
狂歌東遊	大一冊	同上	北齋	同十一年	同 同上

新古今狂歌集	二冊	元杢網	―	同六年	同 同上
狂歌杓子栗	四冊	便々館	―	同十一年	同
狂歌梢の雪 菅江追善	一冊	菅江門人	北斎	同九年	同 淮南堂藏版
狂歌東來集 初編	一冊	酒月米人	―	同十一年	同 吾友軒藏版
同 二編	一冊	同上	―	同十二年	同 同上
狂歌太郎花者	一帖	麥原笛成	―	同九年	同 一榎庵藏版
闇雲愚抄	袖珍一冊	奇々羅金鷄	―	同十二年	同 英信堂
繪本吾妻遊	三冊	同上	北川歌麿	同十四年	同 蔦屋重三郎
百千鳥狂歌合	二冊	同上	同上	同上	同 同上
繪本蟲えらみ	一冊		同上	同上	同 同上
同 汐干のつと	一冊		同上	同上	同 同上
同 和歌夷	一冊		同上	同上	同 同上
同 狂月望	一冊	起定丸序	同上	同上	同 同上
同 銀世界	一冊		同上	同上	同 同上
同 普賢像	一冊		同上	同上	同 同上
狂歌年代記	兩面摺一枚	山陽堂山陽	―	同十二年	同 山陽堂藏版
今日歌白猿一首	一冊	烏亭焉馬	春英	同十一年	同 上總屋利兵衞
狂歌めし合 小雪多丸の文跋あり	中一冊	朱樂菅江	―	同三年	同 ―
白猿狂歌集 一名友なし猿	一冊	市川白猿	―	同九年	同 蔦屋重三郎
狂歌花鳥集	二冊	千種庵選	易祇、北馬、宗壽等	同十年	同 山中要助

書目	册數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌春興帖	中一帖	森羅亭	北京[illegible]	寛政年間	江戸森羅亭藏版
美満壽組入	中一冊	鳥亭焉馬	清長等	同九年	同上總屋利兵衛
燭夜文庫（くだかけ）[illegible]	二冊	奇々羅金鶏	數名	同十二年	同須原屋安兵衛
花ぐはし[illegible]狂歌集	折本一冊	狂歌堂選	重政	同七年	同蔦屋重三郎
狂歌數寄屋風呂	中一冊	同上	――	同三年	同同上
春日廿四孝	大一冊	同上	――	同七年	同清涼亭藏版
[illegible]三十六歌選	大一冊	節松嫁々序 窓村竹[illegible]	豐廣	同上	同高須惣七

享和年間

書目	册數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
五十人一首 五十鈴川狂歌車	大一冊	三陀羅法師	長政	享和二年	江戸蔦屋重三郎
狂歌醉竹集	二冊	唐衣橘洲	――	同上	同醉竹側藏版
狂歌觿初編	中一冊	式亭三馬	――	同三年	同萬屋太治右衛門
狂歌東來集三編	一冊	酒月米人	――	同二年	同吾友軒藏版
狂歌言の葉種	中一冊	同上	――	同元年	同蔦屋重三郎
狂歌東海道	一冊	手柄岡持	――	同三年	同松下堂藏版
堀川太郎百首狂歌集	三冊	四方眞顔 千秋庵三陀羅		同上	
狂歌新手集	二冊	千種庵霜解	北馬	同年間	同山中要助
紀行 布毛登濃夷歌	一冊	山陽堂	――	同元年	同和泉屋市兵衛
狂歌幕之内	二冊	千種庵	北馬	同二年	同山中要助

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌蓬ヶ島	二冊	三藏樓	――	同上	名古屋 永樂屋藤四郎
狂歌千年松の葉	大一冊	天廣丸	――	同年間	江戸 醉亀亭藏版
狂歌三十六題集	二冊	醉竹庵、芍藥亭千種庵選	――	同二年	同 松葉亭藏版

文化年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌百人一首	大一冊	六樹園選	北溪	文化年間	江戸 福の屋藏版
狂歌百人一首	大一冊	同上	繁昌	同六年	同 角丸屋甚助
狂歌畫像作者部類	大二冊	同上	五淸	同八年	同 同上
狂歌五十八人一首	大一冊	同上	北溪	同年間	同 六極園藏版
職人盡狂歌合	二冊	同上	北溪其外	同五年	同 蔦屋重三郎
自賛狂歌集	一冊	同上	北溪外數名	同八年	
飲食狂歌合	二冊	同上	北溪	同年間	同 須原屋茂兵衛
萬代狂歌集	四冊	同人校 塵外樓編	――	同上	同 岡田屋嘉七
狂歌堀川太郎百首	一冊	六樹園選	北齋外數名	同九年	同 蔦屋重三郎
狂歌堀川次郎百首	一冊	同上	北鶯外數名	同十年	同 同上
四方のあか 赤良文集	二冊	同人編	――	同五年	同 同上
狂歌廿日蛭子 一名每月集	二冊	同人選	一向舍 繪馬屋	同九年	同 角丸屋甚助
狂歌蜀山百首	大一冊	四方赤良	――	同三年	同 杏花園藏版
千紅萬紫	中一冊	同上	――	同十四年	同 角丸屋甚助

萬紫千紅	中一冊	四方赤良	文化十五年	江戸 岡田屋嘉七
狂歌武藏風流	二冊	狂歌堂選	同　二年	同 萬屋太輔
狂歌續武藏風流	二冊	同　上	同　三年	同 竹川藤兵衛
類題俳諧歌集	中六冊	同人編	同 十一年	同 上總屋利兵衛
俳諧歌老若百首	二冊	同人選	同 十五年	同 西宮彌兵衛
同　親子百首	二冊	同　上	同 十二年	同 同　上
同　兄弟百首	三冊	同　上	同 十三年	同 同　上
蘆荻集五篇家集	四冊	燕栗園編	同 十二年	同 同　上
滑稽鹿島詣	中一冊	一九詠　一九自畫	同　四年	未　詳
繪本狂歌山滿多山	三冊	炭方編　北齋	同　元年	未　詳
もとの雫 本阿彌追善集	一冊	梅園靜廬	同　八年	
狂歌玉のいさご家集	一冊	白銀いさ子　不詳	同 十二年	江戸 鶴屋喜右衛門
狂歌花の雲 千代徳若追善集	一冊	六樹園序	同 十四年	同 美都徳人藏版
狂歌五百題	袖珍一冊	奇々羅金鷄	同　十年	同 大和田安兵衛
古今狂歌集	大二冊	淺草市人	同　六年	同 山中要助
狂歌題林抄	中四冊	酒月米人	同　二年	同 上總屋利兵衛
狂歌濱荻集	同三冊	便々館	同　三年	同 角丸屋甚助
袖玉狂歌集	同二冊	同　上	同　四年	同 大和屋久兵衛
狂歌不卜集	同二冊	同　上	同　元年	名古屋 永樂屋藤四郎
狂歌後杓子栗	四冊	同　上	同 十二年	江戸 和泉屋吉兵衛

關東百題狂歌集	二冊	芍藥亭 一京傳三馬 九外數名	同十年	同 萬屋傳次郎
狂歌いそ千鳥 一名百人十首	二冊	悠々館湖遊	同五年	同 悠々館藏版
しみのすみか物語	二冊	六樹園未詳	同二年	同 永樂屋藤四郎
狂文 吾嬬なまり	二冊	同上	同十年	同 須原屋茂兵衛
梅がえ物語	大一冊	同上未詳	同七年	同 蔦屋重三郎
北里十二時	大一冊	同上北溪	同年間	同 ―
此書後ちに半紙本とし且遊里の狂歌を加へて出版せしに此本大に行はれしと云ふ				
四方戯歌名盡	一冊	山陽堂	同六年	同 山陽堂藏版
狂歌江戸砂子集	四冊	祭和樽	同八、九年	同 ―
狂歌秋の野良	一冊	大屋裏住	同十年	同 竹川藤兵衛
同文狂歌 百餘ぐるま	中一冊	三友亭	同五年	同 三友亭藏版
狂歌吾妻集	一冊	千秋庵辰齋	同二年	同 ―
白猿追善 珠數の親玉	中一冊	烏亭焉馬北齋等	同四年	同 石渡利助
奴師勞之	一冊	蜀山人	同十五年	寫本
平荷隨筆	一冊	手柄岡持	同六年	同上
四方歌垣戯文草	一冊	眞顏文 柳齋ちまた編集	同七年	同上
狂歌茅花集	二冊	狂歌堂	同元年?	同 蔦屋重三郎
狂歌新草集	二冊	狂歌堂 山陽堂	同二年?	同 同上
狂詠 住吉紀行	一冊	狂歌堂	同八年	同 吉田新兵衛
狂歌菫菜集	二冊	同上	同四年	同 萬屋太次右衛門

狂歌當載集	二冊	三陀羅	―	文化六年	江戸 前川六左衛門
狂歌當叢集	二冊	同上	―	同七年	同 同上
狂歌蓬萊集	二冊	玉光舍占正	―	同四年	同 西宮彌兵衛
堀川初度狂歌集	三冊	六樹園	北溪	同年間	同 ―
堀川後度狂歌集	三冊	同上	定岡	同上	同 ―
狂歌花の莚	一冊	三豔樓	北馬	同三年	同 ―
狂歌かはごろもの記	大二冊	鐵格子波丸	藍江	同五年	同 蔦屋重三郎
狂歌濟百首	中一冊	天廣丸	―	同元年	同 ―
百囀	一冊	桑楊庵	北齋?	同二年	同 西村屋與八
狂歌竹川集	三冊	二世漢江	―	同十一年	同 ―
狂歌都鳥集	中一冊	六樹園序 鶴龜亭選	―	同上	同 連藏版
武者盡狂歌合	一冊	六樹園	陳芬館	同年間	同 玉光舍藏版
狂歌諸方獨案內	橫本一冊	芍藥亭	―	同元年	同 松葉亭藏版
江戸紫最負鉢卷	中一冊	烏亭焉馬	清長 春亭	同八年	同 ―
俳諧歌觽	中二冊	式亭三馬	―	同十三年	同 西宮彌兵衛
狂歌若綠岩代松	一冊	時雨庵	北馬	同九年	同 大垣德太郎
狂歌弄花集	大一冊	故橋洲序 蘆邊田鶴丸選	墨僊 外數名	同十四年	名古屋 菱屋久八
狂歌五手船	一冊	芍藥亭選	―	同十二年	江戸 松葉亭藏版
狂歌江戸名所畫本	一冊	十返舍一九	一九	同十年	同 ―
狂歌道中記	一冊	六樹園選	北馬	同上	同 角丸屋甚助

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌鷹後編	中二冊	式亭三馬	—	同 二年	同 萬屋太治右衛門
狂歌江戸砂子集	二冊	鈍々亭編	—	同 八年	同 須原屋伊八
片糸縫女追善集	一冊	蜀山人序 菱花堂編	—	同 五年	同 菱花堂藏版
新古今狂歌集後編	二冊	元杢網	—	同 七年	同 鶴屋金助
橘洲先生七回忌追善狂歌集	一冊	尋幽亭編	肖像 實吉畫	同 五年	同 —

文政年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌名寄細見	小一冊	式亭三馬序 錦糸亭輯	口畫 北溪	文政元年	江戸 錦糸亭藏版
以代美滿壽	中一冊	烏亭焉馬	—	同 上	同 —
狂歌棟上集	二冊	同 上	國貞	同 二年	同 竹川藤兵衛
岡持家集我面白	二冊	手柄岡持	—	同 上	同 和泉屋金右衛門
狂文四方の留糟	二冊	蜀山文集 四方眞顔編	—	同 上	同 西宮彌兵衛
狂歌著聞集	三冊	六樹園序 司馬園著	未詳	同 三年	同 —
狂歌百鬼夜狂再版	一冊	平秩東作 以下十四人	—	同 上	同 二世萬屋重三郎

此書天明年間に出版せしものなれど其版木燒失せしかば是年蜀山、定丸、飯盛、眞顔等の序跋を加へて再版せり

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
新居狂歌集	一冊	六樹園選	北溪	同 三年	同 五側藏版
あさくさ／＼ 市人追善	大一冊	蜀山人序	—	同 上	同 壺側藏版
興歌考	大二冊	源眞楫	—	同 四年	名古屋 花山文庫藏版
新曲撰狂歌集	三冊	六樹園選	—	同 上	大坂 鹽屋長兵衛

狂歌笛竹集	二冊	六樹園選	―	文政六年	大坂江戸 鹽屋長兵衛
新撰東西集	二冊	便々館選	―	同四年	―
草のはら（雫餘子追善集）	一冊	六樹園選	北溪	同三年	同 彷徨亭藏版
狂歌五十人一首	大一冊	紀乎佐丸選	重信	同六年	同 田宇樓藏版
南畝帖、	大一冊	加茂季鷹序	孔寅	同七年	大坂江戸 秋田屋太右衛門
狂歌奇人譚	大六冊	岳亭定岡	定岡	同上	大坂屋茂吉
狂歌奇人譚歌の部	大一冊	同上	―	同上	同 同上
狂歌花鳥風月集	一冊	六樹園選	北齋 北泉	同上	同 ―
狂歌百將圖傳	不詳	西來居未佛 蓬萊山人	國直	同九年	同 新泉園藏版
狂歌今昔物語（[illegible]）	大二冊	金亭正直	定岡	同十年	同 西村屋與八
俳諧歌三友會	一帖	桂居音高	千春	同十一年	同 桂居藏版
狂歌近來風體集	二冊	二世森羅亭	―	同年間	同 西村源六
狂歌水滸傳	三冊	臥龍園	定岡（彩色摺）	同十二年	同 青陽堂藏版
狂歌水滸傳	合本一冊	六樹園序 福の屋選	定岡	同十一年	同 七寶連藏版
狂歌三玉集	三冊	湖濤園	相覽	同十二年	同 ―
狂歌書畫帖	二冊	六樹園序 福の屋選	諸家	同年間	同 福の屋藏版
四方歌垣翁追善集	一冊	森羅亭選	―	同十二年	同 四方側藏版
狂歌新杓子栗	中二冊	便々館選	―	同十三年	同 ―
狂歌明題集	中二冊	同上	―	同上	同 前川六左衛門
狂歌人物誌	二冊	芍藥亭	柳川重信	同十年	同 菅原連藏版

書名	冊數	撰者	畫工	年代	板元
狂歌關東驛路鈴	二冊	臥龍園	北溪	同十三年	同 花園連藏版
狂歌眞木柱	一冊	淺草庵外二名合選	—	同上	同 春友亭藏版
頭書重寶家内安全集	二冊	十返舍一九	英笑	同上	同 —
狂歌江戸の花	中二冊	蘆邊田鶴丸	—	同十三年	同 英平六
狂歌桂花集	一冊	四谷庵選	—	同十二年	同 —
狂歌五十鈴川	一冊	橘庵田鶴丸	定岡	同十三年	扇屋利助
今様職人盡歌合	二冊	六樹園狂歌堂	紹眞	同八年	江戸 新泉園藏版
夷曲ことし俵	二冊	田原船積	一九	同四年	同 伊藤與兵衛
略畫職人盡	一冊	文々舍	定岡	同九年	同 詞花堂藏版
狂歌二十四剛	一冊	千柳亭	北溪	同十三年	仙臺 梅菊連藏版
俳諧歌貴賤百首	二冊	狂歌堂	—	同二年	江戸 —
俳諧歌若草集	二冊	同上	—	同年間	同 —
俳諧歌美草集	三冊	同上	—	同上	同 —
狂歌長嬴集	一冊	六樹園	北溪	同四年	同 —
新宅一會狂歌合	一冊	同上	—	同十年	同 —
楚漢狂歌合	中一冊	六樹園序 春の屋編	定岡	同年間	同 春の屋藏版
新曲撰狂歌集後編	三冊	六樹園選	—	同五年	大坂 鹽屋長兵衛
狂歌畫像陸奥百歌選	一冊	六樹園序 千柳亭選	未詳	同二年	仙臺
狂歌評判記	黑表紙横本 一冊	六樹園判	—	同五年	江戸 亙側藏版
狂歌甲斐家裘	一冊	西來居選	北溪	同十二年	同 玉光舍藏版

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
新撰狂歌百人一首	一冊	西來居選	重信	文政年間	江戸 西山居藏版
狂歌四方之巴流	一帖	狂歌堂	千春	同十一年	同
狂歌歳時記	一冊	聽風軒編		同十三年	
俳諧歌堀川太郎百首題	十冊	四方歌垣	—	同年間	江戸 四方側藏版
俳諧歌堀川次郎百首題	未詳	同上	—	同上	同 同上
狂歌江戸橋盡	中一冊	醉龜亭選	—	同三年	同 (三)連藏版
三才花百首	一冊	六樹園選 外八名	北溪	同十一年	同 春友亭藏版
狂歌讀本詠咏奇譚	三冊	三世萩の屋選 外二名	岳亭春信	同四年	同 本町側藏版
狂歌續伊勢海	大五冊	二世淺草庵選	—	同年間	同 —

天保年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌窓の雪 菅江追善	一冊	二世漢江	—	天保元年	江戸 の連藏版
狂歌劇場百首	一冊	芍藥亭	柳川重信	同三年	同 菅原連藏版
狂歌花街百首	一冊	同上	同上	同上	同 同上
狂歌戀百首	一冊	同上	同上	同四年	同 同上
狂歌紅絲集	一冊	同上	同上	同六年	同 同上
芍藥亭詠藻廣陵集	二冊	同上	同上	同三年	同 護心亭藏版
狂歌秋の寐覺	一冊	同上	青萍	同七年	同 菅原連藏版
名數狂歌集	一冊	同上	重信	同十年	同 武隈庵藏版

狂歌言葉の八街	一冊	武隈庵同上	同五年	同同上
狂歌今樣源氏	一冊	青雲亭同上?	同三年	同―
狂歌春のなごり 六樹園一周忌追善集	一冊	塵外樓 西來居 北溪	同二年	同―
十符の菅薦 六樹園塵外樓追善集	一冊	綠樹園 諸家	同七年	同 梅多樓藏版
俳諧歌清涼集 眞顔追善	一冊	狂歌堂梅廼門 葛垣合選 北溪	同十二年	同 四方側藏版
瀬川ぼうし 瀬川路考追善集	一冊	琴通舍 國貞	同三年	同 鶴屋喜右衞門
狂歌春の晩鐘 佐野渡追善集	一冊	瀧の本千丈 外二人選 佐野渡 肖像あり	同八年	同―
俳諧歌苧環集	一冊	歌垣綾麿―	同四年	同―
狂歌阿淡百人一首	大一冊	故六樹園選 定岡	同三年	阿波 旭櫻園藏版
伊勢狂歌百人一首	一冊	伊勢荻の屋 重信	同十年	津 濱荻連藏版
柳巷名物誌	大一冊	淺草庵春村 二世元成	同五年	江戸―
紅叢紫簇	一冊	同上 嗆々其一	同六年	同―
壺すみれ 壺側狂歌系圖	一冊	同上―	同八年	寫本
倣故追詠	一冊	同上 未詳	同六年	江戸―
狂歌秋帛集	一冊	千東庵 武隈庵―	同十二年	同 白絲園藏版
狂歌扶桑集	二冊	西來居選―	同年間	同 西村屋與八
狂歌正流鯉鱗集	一冊	綠樹園選 未詳	同上	同 五側藏版
狂歌六々書像集	一冊	秋長堂物梁 四方瀧水 眉山	同上	同 大船亭藏版
歌道手引草	三冊	淺草庵春村―	同上	同 向陽樓藏版
狂歌墨田川波	一冊	昌平庵選 肖像廣重	同四年	同 の連藏版

狂歌今人[illegible]跡集	中一冊	二世戀川春町	—	天保年間	江戸 —
櫻間狂歌集	大一冊	綠樹園	廣輝	同八年	同 六曉園藏版
七夕狂歌集	一冊	唐樹園南陀羅	英齋	同三年	同 —
狂歌百人一首	中一冊	故蜀山人 蘆間蟹彦編	—	同十四年	大坂 柏原屋善兵衛
狂歌大體	中一冊	故朱樂菅江	—	同十年	江戸 —
狂歌一字題百首	一冊	芍藥亭	柳川	同年間	同 —
狂歌草野集	七冊	檜園選		同四年	同 檜垣連藏版
狂歌怜野集	六冊	同上		同五年	同 同上
狂歌續數傾集	一冊	至清堂選	蹄齋	同十一年	同 新鶯園藏版
狂歌四方之巴流	二帖		北溪	同七年	同
蓬花狂歌集	一冊	千種庵選	青洋	同二年	京 玉兎園藏版
狂歌寛玉集	一冊	聽風軒選	國芳	同五年	
狂歌よそひ草	一冊	便々館選	未詳	同七年	江戸 松竹園藏版
おもほへ傳 狂歌花五百首	一冊	橘樹園選	—	同十年	同 橘樹園藏版
俳諧歌朝日の影	一冊	蔦垣眞蔦	北溪	同十四年	同 常磐園藏版

弘化年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌作者評判記 吉書始	横本二冊	至清堂、燕栗園、花の屋選	未詳	弘化三年	江戸 三玉堂
蜀山狂詠 千歳の門	中二冊	蘆間蟹彦	—	同四年	大坂 柏原屋義兵衛

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
芍藥亭文集	二冊	芍藥亭	重信	同 元年	江戸 ―
拾遺廣陵集	一冊	同 上	同 上	同 上	同 ―

嘉永年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
興歌手向の花（芍藥亭追善集）	一冊	鳳鳴閣編	爲齋	嘉永三年	江戸 山水連藏版
狂歌略畫百人一首	合本一冊	檜園梅明	春洋	同 四年	同 春友亭藏版
甑雀追善 はなし鳥	二冊	二世琴通舍	豐國 外數名	同 五年	同 琴通舍藏版
狂歌江戸日千兩	三冊	天明老人	廣重、國芳、豐國	同 六年	同 盡語樓藏版
狂歌百物語	八冊	同 上	龍齋	同 上	同 同 上
狂歌琴の緒集	一冊	何の舍編	龍淵 香以	同 上	同 垣內連藏版
狂歌三十六歌仙集	一冊	燕栗園 檜園	一信	同 年間	下總 鳰連藏版
伊達茂夜雨（八代目三升餞別狂歌集）	一帖	六朶園選	豐國	同 二年	江戸 ―
狂歌畵像鯉鱗集	一冊	檜園	未詳	同 七年	同 春友亭藏版

安政年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌江戸名所圖會	十六編迄十三冊	天明老人	廣重	嘉永ニヨリ安政ニ亘ル	江戸 盡語樓藏版
狂歌四季人物	四冊	同 上	同 上	安政二年	同 同 上
狂歌やまと人物	五冊	同 上	同 上	同 四年	同 同 上

狂歌四季遊	四冊	天明老人	廣重	安政五年	江戸 盡語樓藏版
狂歌百人一首 百千鳥	一冊	同上	同上	同 年間	同 同上
狂歌扶桑名所名物集	六冊	檜園梅明	芳虎 廣重	同 四年	同 春友亭藏版
狂歌東海道名所圖會	未詳	同上	廣重	同 年間	同 檜垣連藏版
狂歌錦葉集 學の門追善	一冊	同上	素眞	同 四年	同 學門連藏版
狂歌都賀の山松	一冊	通用亭	同上	同 三年	下野 通用亭藏版
狂歌茶器財集	一冊	安滿の門	廣重 國芳	同 二年	江戸 清流亭藏版
狂歌錦花集	一冊	同上	好寅	同 五年	同 同上
狂歌初かうむり	大一冊	春友亭	廣重 芳虎	同 三年	同 檜垣連藏版
歌の友ぶね	二冊	梅屋農選 曾根松古編	國貞	同 年間	同 本町連藏版
狂歌謠曲集	一帖	花の屋香壽	素眞	同 上	同 花の屋藏版
狂歌假名文庫	合本一冊	二世繪馬屋	鄙人	同 六年	同 響連藏版
狂歌一代男	一冊	梅農屋	國芳	同 年間?	同 本町側藏版
狂歌器財集	一冊	同上	重信	同 上?	同 同上
狂歌鯉鱗集	一冊	檜園	未詳	同 元年	同 春友亭藏版
狂歌寐覺草	一冊	狂歌堂島人 外十五名選	口繪 花月	同 二年	同 ―
狂歌奥の海	二冊	千柳亭選	―	同 四年	仙臺

萬延年間

文久年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌早引節用集	四冊	面堂安久樂外五名	南鄰	文久元年	江戸春友亭藏版
狂歌弓張月	二冊	二世繪馬屋	鄙人	同上	同彎連藏版
狂歌三都集	一冊	雪の門春見	廣重	同二年	同 ―
狂歌六帖題詠集	三冊	面堂安久樂外二名	同上	同三年	同檜垣連藏版

元治年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
狂歌甲子月次集	三冊	面堂安久樂外三名	―	元治元年	江戸檜垣連藏版
狂歌乙丑月次集	三冊	同上	―	同二年	同同上
狂歌一字題詠集	三冊	同上	―	同元年	同同上
水魚連狂歌雙六	中一冊	鶴廬序	是國眞芳	同年間	同水魚連藏版

慶應年間

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	發行年月	發兌元
俳諧歌廣幡集	大一冊	面堂日歲庵選	是綾眞岡	慶應二年	江戸岩上亭藏版

明治年間

年代未詳

書目	冊數	著者又ハ選者	畫工	備考
鷄聲				
花燈籠				
狂歌新五十人一首				
狂歌新古今百人一首				
春の色				
狂歌ひゝな草				
休息歌仙				
八十宇治川				
狂歌まさり草				
狂歌歸化種				
狂歌千歳集				
狂歌太平樂				
都幾與美男				
江戸紫				
かしく米				
金埒猿百首				
山陽堂白實百首				
狂歌同賦				

右は寛政十二年臘月の出版に係る山陽堂の『狂歌年代記』に掲げたる狂歌書目中にて未だ予の眼に觸れざるものなり

江戸狂歌書目終

俳諧書籍目録

凡例

俳諧書籍目録は阿誰軒の編するところのものを嚆矢とし、其の後多少添増して京都の書估井筒屋より出板せるものあり。然れども寶永以後其の事絶えて、終にまた俳諧書目の大成せるものあるを聞かず。此の篇は井筒屋板俳諧書籍目録に本づきて之に加ふるに寶永以後の著撰にかゝるものを以てし、繙閲の便を圖りて五十音順に排列せるものなり。

明治丙午　編者識

俳諧書籍目錄

阿誰軒編
漆山天童補

俳諧畫像鶯谿百人集一卷　全吾編　安政五年
鶯宿梅　素檗句集　文政三年
鸚鵡集十卷　梅盛作　明曆四年
あがたの三月よつき　大江丸著
寛政十二年大江丸八十一歲にて東下の紀行なり
茜掘　春梢庵梅丸著　天明二年
俳諧赤裸二卷　雨洗亭風竹編　正德三年
赤紫二卷　道弘作　寛文十一年
俳諧秋田路一卷　許虹
秋つしま一卷　團水作　元祿三年
俳諧秋の月一卷　柳陪評　寛保三年
堺天滿宮奉納一萬句集
秋花千句二卷　沾德
はいかいあきびより一卷　石田賦泉著　安永二年
秋の日　曉臺　安永元年
俳諧秋の綻一卷　由和亭編
秋の夜　不玉　延享四年
俳諧芥川一卷　合歡堂沾山著　天保十二年
あくた舟一卷　芥舟作　元祿五年
揚かざり一卷　藤本六英編　天保七年
明鴉　几董、馬南　安永二年
曙庵句集一卷　秋擧著、東雅編
朱紫　越谷吾山　天明四年
蛙口亭集一卷　草村曉臺著　寶曆十三年
あこめ垣　尋香　嘉永三年
淺香市集一卷　賞月亭多代子編　文化十四年
俳諧朝起一卷　吏登

淺川集	宜麥	享和三年
淺川早引集二卷附合		・
あさがほ集二卷	旦暮庵野巣編	天保三年
あさがり	涼莵	正德四年
麻刈集		寛政五年
淺草	成美	寛政元年
淺草千句集		安永七年
淺草はうこ	成美	寛政十年
前句笠附淺ごま一卷	小西來山點	
朝茶湯一卷	茶淳	
阿沙野二卷	村瀬大阜編	文化八年
あさのみ一卷	舍羅	元祿十二年
あさふ一卷	范學、吾中	寶永元年
淺緑	風律	寛延三年
俳諧足揃一卷	弄松閣只丸著	元祿五年
貞德年代記非言		
足揃一卷	車要作（存疑）	元祿四年
蘆の角一卷	文丸作	元祿五年
安詞洒比斗茂渡（アシノヒトモト）一卷	谷川護物著	文化十年

芭蕉の幻住菴記を注せるもの

盧分船	不角	延寶三年　又元祿七年
俳諧飛鳥山一卷	寸長	
俳諧阿次可屋万一卷	尾谷	
俳諧あすならふ二卷	越谷秀直撰	
寛政十二年再版	文化十四年三板	嘉永三年四版
雅言俗語翌檜二卷	越谷吾山著	安永八年
あだち千句一卷	重次作	
あだ花千句一卷	立圃作	
あたらね	渭北	元祿十六年
熱田三歌仙		貞享二年
熱田三歌仙一卷	草村曉臺著	安永四年
熱田日記	草々庵雪川著	寛保三年
吾嬬海道一卷	巽我	
吾妻搨	巴靜	享保十九年
俳諧東千句一卷	魚貫、沽山	
東日記一卷	言水作	延寶六年

俳諧東のつと二卷	鶴錢	
俳諧發句吾都麻布理（アヅマブリ）二卷	洞海舍涼谷編　一具庵一具校	文政十一年
東風流七卷	紫隱春來編	寶曆六年
東茂登里一卷	晝夕庵見推撰	明和年間
東六風一卷	柳後園吾仲編	寶永五年
俳諧あづみ山一卷	芭蕉	
蛙囊鈔二卷	米倉某著	
阿難話	支考	正德元年
淡き水一卷	宜朋編	寬政六年
合せ鏡	隆志	延享四年
淡路島二卷	風竹	元祿十一年
粟津の原	桃隣	寶永七年
阿波出集四卷	友次	
阿波出集續三卷	友次	
あはゝ千句	西武作	寬文五年
阿波摸墨直會式集一卷	橋舍	文政六年
淡雪	七里	享保八年

俳諧相生集一卷	蒼々園可松編	
相腹中一卷	萑宿	延寶六年
油糟一卷	貞德	寬永二十年
俳諧天の川一卷	青日樓楚田編	
あまのこのすさび	惟中	天和三年
天の逆鉾一卷	不及子編	元文四年
海士釣舟三卷	谷遊軒作	延寶二年
雨夜物語一卷	梅園著	
あみだ笠	何來	天明二年
行脚怪談袋		
行脚文集	三千風著	元祿二年
行脚戻一卷	五桐、涼苑	元祿十六年
菴犬集		享和三年
掌中俳諧安政附合集一卷	栢隱新甫編	安政五年
安政發句六百題		安政四年

鹽味集一卷　西吟作　元祿元年
安樂音四卷　富尾似船
雨あがり二卷　一雪
あめ子一卷　定道作　元祿三年
雨のおち葉一卷　山之編　享保十八年
雨の月　陸花　天明三年
俳諧雨の日數一卷　麥阿
雨の恵　千鹿　寛延二年
雨のやどり　閑鷗　安永八年
あやうき一卷（しイ）　一晶、秋風　天和二年
綾錦三卷　崔下菴沾涼撰　享保五年
又享保十七年　又延享三年
あやの松一卷　芳水作　元祿四年
あや卷一卷　延寶八年
あやめ集　天保十二年
荒田の原　舞奥作　元祿五年
曠野集三卷　荷兮作　元祿二年

あらの後集二卷　荷兮作　元祿六年
洗朱　調和　元祿十一年
あらむつかし　林鴻　元祿六年
荒小田一卷　舍羅　元祿十四年
有明濱二卷　讃州觀音寺　寶永二年
有磯海一卷　內藤丈草編
有礒海二卷砥並山附　浪化作　元祿八年
蘿葉后集蟻塚三卷　横井也有著　明和七年
俳諧ありのすさみ一卷　丈士房道一著　享和元年
俳諧ありのすさみ一卷　丈石齋宗順著　享和元年
蟻の宿一卷　台軒　延寶三年　又寶永三年
在原文庫一卷　買山編
有馬日書一卷　鬼貫作　貞享元年
青柿千句一卷　喜得
青葛集一卷　美雀　元祿十二年
青すだれ　秋香亭矩久編　元祿十六年
青根が峯　芳雁　天明五年
青ひさご　白芹　文化八年

青蜜柑一巻　未詳　寶永四年
俳諧青筵二巻　除風編　元祿元年　又元祿十三年
誘心集　種寛作　寛文十三年
山菁文集一巻　星野花外等編　慶應元年
俳諧遊覽志一巻　羅扇子著　安永七年
團欒集七巻　櫻田臥央編　寛政十一年
渭江話四巻　千石廬元坊編　元文元年
いかのうぶ湯　魯丸
俳諧いかほ山一巻　枕鼠
幾人水主一巻　素覽　元祿十六年
いけのむかし　烏明　寛政五年
いこしき八巻　蝶々子
生駒堂一巻　燈外作　元祿三年
十六夜集　順墨　寶永六年
いざ白山　文島　明和三年

俳諧石車一巻　西鶴作　元祿四年
石舍利二巻　普安
石をあるじ　樗良　安永七年
伊勢紀行　去來
伊勢新百韵一巻　中川乙由等編
伊勢便一巻　梅室撰　安永三年
俳諧いせ路記一巻　自笑
いせ通し駕籠一巻
伊勢長帳四巻　正友作
俳諧伊勢の噺一巻　凉袋
いせみやげ一巻　心友　延寶八年
いせ踊五巻　加友作　寛文七年
俳諧礒の波一巻（一名一夕俳談）　百足山人著　天保十二年
いそのはな一巻　早見晋我編　寛政五年
伊丹生俳諧派　蟻道、青人、百丸等　元祿五年
伊丹發句合　才麿評　正德四年　又享保十九年

俳諧一葉集九卷　湖十、佛兮編　久臧校　文政十年
俳諧一言庭訓一卷　祇德
俳諧一字題二卷　杜菱著　寶曆十一年
一字般若　柏舟　安永元年
一巡百韻一卷　除風　寶永三年
一日三百韻一卷　春澄作　天和元年
市の庵　洒堂　元祿六年
俳諧一枚起請一卷　許六
一枚起請一卷　宗重作　元祿四年
一味贅語一卷　雪浪亭頌花著
俳諧一物連歌　素外　天明八年
一夜四歌仙又一夜四唫　安永二年
　蕪村、樗良、几董、嵐山の歌仙四卷
一夜松　巴人　享保十八年
一夜流行　成美　天明八年
蕉門中興俳諧一覽集一卷　ノ左編　文久三年
一樓賦　風瀑　貞享二年
一翁四哲集二卷　惺菴西馬編
　芭蕉、其角、嵐雪、去來、丈草の句集

乙酉墨直し　蝶夢　明和二年
俳諧いつか月一卷　一色坊編　延享年間
一夏百步　蓼阿　天明七年
嚴島奉納句集　馬老　文政元年
一句立　桐原　寬延元年
俳諧一串鈔二卷　六平齋亦夢著　天保元年
俳諧一切經一卷　元祿十三年
一茶句帳
俳諧一茶百話　其水　天明七年
一茶發句集　文政年間　又嘉永元年
一茶聯句集
一丁墨　寥和　寶曆二年
一丁鼓一卷　定之作　元祿四年
乙丑句集二卷　黃花庵升六編　文化年間
一幅半二卷　岩田凉菟編　元祿十三年
何迄草　西武作
いつまでも一卷　晴々齋序禮編　文化八年
いづれ都の一卷　惟中
逸淵發句集二卷　兒玉信則編　慶應三年
いつを昔 一名俳番匠　其角撰、去來校　元祿三年

温泉津日記二卷	飯田愼平著	文政三年
俳諧糸切齒二卷	春耕處士著	寶暦十二年 又安永五年
糸屑	重安	延寶三年
俳諧糸屑	轍士	元祿六年
糸屑	淡々	寶永六年
糸ごろも一卷	東洞齋	
俳諧いとまき大成二卷	起丸編	寛政七年
糸柳二卷	而咲堂練石編	享保年間
いなご集二卷	北村季吟	明暦二年
いなぶね	浮毫	享保元年
いなむしろ二卷	清風作	貞享二年
犬保一卷	三浦爲春著	
犬古今	素蛤	文化九年
犬居士一卷	鬼貫作	元祿三年
犬居士	淡節	天保十四年
犬櫻一卷（百吟五百韻）	益翁作	延寶六年
犬櫻兩吟千句二卷	益翁	
犬新山家一卷	巽窓湖十編	享保十八年
俳諧犬椿葉集一卷	局巷	
犬筑波一卷	山崎宗鑑	永正十一年
犬丸一卷	瓠界作	元祿三年
俳諧いのこ草一卷 八犬傳中の人物を題として讀める俳句集	盧明巷編	文久三年
犬子集五卷	松江重賴撰	寛永十年
岩壺集二卷	井原正興	寶永四年
岩囊	正興	享保四年
石見限	巨海	元祿十四年
石見人名錄二卷	石田田鶴等編	天保二年
俳諧飯富士一卷	風狀	
伊吹四時一卷	美濃ノ大川	元祿十六年
俳諧家之槃一卷		

俳諧家の杖一卷　草叟　寶曆三年
家見舞一卷　支考　寶永三年
俳諧庵櫻二卷　水田西吟編　貞享三年
庵の記　露川　享保四年
庵之節句集一卷　柳傘子三遷編　享保六年
俳諧庵の野分一卷　幸流
庵の花一卷　露川　寶永四年
今七部集　庚年　天保八年
今の聲　水月　弘化二年
俳諧今はむかし一卷　蓼太編　明和年間
今宮草　來山　享保七年　又享保十九年
今樣すがた六卷　重賴　寛文十二年
今井舟一卷
射水川二卷　高岡十丈編　元祿十四年
韻塞二卷　許六、李由　元祿五年
又元祿九年　又元祿十一年

芋がしら一卷　一宇編　享保十二年
伊豫の國道の記一卷　齋藤白樹著
入日記二卷　雲鈴　元祿十六年
入船　高田幸佐撰　寶永年間
入聟集　喜田村立以作
いろ杉原二卷　加賀ノ友琴作
故人發句いろは集　一柳園素徹編　文政六年
水滸俳諧宇加禮奇人集二卷前編　青林亭錦人著　天保八年
浮草　季範作　貞享五年
浮世長刀一卷　一與　寛文元年
浮世の北二卷　可吟　元祿九年
鶯笛五卷　隨流作　寛文十三年

うさぎはいかい二卷	立圃作	
牛飼五卷	燕石作	萬治元年
後様姿一卷	言水	天和二年
はいかいうしろひも一卷	卷菊堂編	
うそかへ	百堂	文政七年
うたゝ音四卷	小野紹廉著	寶暦五年
俳諧うたゝね二卷	立羽不角編	
卯辰集二卷	北枝作	元祿四年
俳諧靈名寄一卷	不及子	
宇陀の法師一卷	許六、李由共撰	元祿十五年
俳諧歌まくら一卷	支考著	
往すがた四卷	信徳作	元祿五年
打曇砥一卷	秋風	天和二年
俳諧うちでの小槌一卷	似空軒安靜著	
俳諧內海二卷	百州	
俳諧卯月庭訓三卷	露月	
卯月まで一卷	定直作	貞享二年
うつ蟬	柳軒	寶暦四年
俳諧報隨筆一卷	岡田米仲著	寶暦九年
鶉衣	也有作　六林編	安永八年
鶉衣後編	也有作　六林編	天明二年
鶉衣續編	也有作　乖穗編	文政六年
鶉衣拾遺	也有作　乖穗編	文政十二年
うでおし雨吟一卷		
俳諧有渡日記一卷	馬光	
卯のこよみ	舊徳	享保八年
鶉の音	馬來作	寬政三年
俳諧卯の花衣一卷	蓼太	
卯花月二卷	椎本ら室編	元文四年
鶉のまね一卷	曲作	延寶八年

産衣		元祿十一年
馬の上	道彥	享和二年
梅ヶ香一卷	野紅	寶永三年
俳諧梅かゝ見二卷	富鈴	
俳諧梅咲時一卷	秋瓜	
梅さくら一卷	朱摺	元祿十一年
俳諧梅日記三卷	沾耳	
梅の雨百韻		延寶九年
梅の絢一卷	絢堂素丸編	天明五年
梅能牛一卷	一浮齋盛永編	延享四年
梅の草紙		明和八年
梅の嵯峨一卷	三種	元祿十二年
梅の春一卷	中川宗瑞編	元文年間
楳文庫二卷	谷川護物編	文政十年
梅柳	易難	安永九年
梅のわかれ	支考	正德五年
梅和讃一卷	梅窩歸來編	
俳諧埋木一卷	北村季吟著	延寶元年
うもれ木	既白	明和二年
埋艸五卷	成安作	寬文元年
俳諧有耶無耶關	芭蕉	明和元年
浦鳥	士朗	文化六年
浦の賀一卷	松尾風後編	
俳諧古學浦やどり一卷	半嶺閑祇中等編	延享二年
宇らわか葉一卷	榎本其角編	
俳諧瓜明月一卷	昇角	
俳諧瓜作一卷	柳川琴風編	元祿四年
瓜の蔓	珪山	明和四年
瓜の實	一音	安永三年
賣若菜		元祿五年
鵜鷺千句二卷	幸和作	正保三年

拳花千句		
俳諧要録	梅人	文化七年
俳諧得手前帆一巻	秋瓜	
江戸寛		享保元年
江戸今八百韵一巻	默々齋青峨編	享保十九年
江戸大坂通し馬	梅朝	延寶八年
江戸歌仙合	貞佐	享保十年
江戸河	素外	天明四年
江戸三吟一巻	桃青、信德、信章	延寶六年
江戸十歌仙	自悦	延寶六年
江戸新道	言水	延寶六年
江戸新八百韻一巻	紫隱春來編	寶暦六年
江戸水道	維舟	延寶五年
百歌仙江戸菅笠八巻	立羽不角編	明和二年
江戸俳諧合二巻	其角、杉風	元祿三年
江戸八百韵一巻	蝶々子	延寶六年
江戸廣小路	不卜	延寶六年
江戸蛇の鮓	言水	延寶七年
江戸辨慶一巻	言水	延寶八年
江戸宮笥一巻	中田心友編	延寶八年
俳諧江戸土産一巻		元祿十年
江戸紫一巻	立圃作	
俳諧江戸紫一巻	蝶々子	享保十七年
江戸名所集三巻	貞山	
江戸名所繪入俳諧一巻	果然編	延享二年
江戸名物鹿子	露月	享保十八年
烏帽子箱四巻	立以作	
延享二十歌仙一巻	巽宰	延享二年
延寶廿歌仙	芭蕉判	延寶八年
臨味集一巻	西吟作	元祿元年
老の腎二巻	定直作	
老の寢覺	鬼貫	享保元年

俳諧おが玉の木一卷　豐島露月編　享保十年
おきあがり一卷　巨稚編
俳諧翁草一卷　榴松軒里圃編　元祿九年
俳諧翁附一卷　甘井編
翁文集　蝶夢　天明二年
翁反古　天明三年
翁反故塚碑記　天明三年
置宮笥一卷　笠亭訥子編　寛保三年
貞德翁俳諧奥義一卷
奥羽行五卷　以哉坊編
奥の枝折　椰條　享和三年
奥の細道一卷　芭蕉著　元祿二年　又元祿十五年
奥の細道拾遺一卷　荷兮
奥細道菅菰抄一卷　蓑笠庵梨一著　安永七年
俳諧おくの近道二卷　角鹿蕉一鼠編　享保十一年　又天保十四年
おくれ雙六一卷　清風編　延寶九年

おくれ馳二卷　朱拙　元祿十一年
嗚呼立千句一卷　重軌作　寛文七年
俳諧筏の花二卷　桂夕、半雪
おしてな月　秋屋　寛政十年
俳諧御田祝讃一卷　谷素外撰
乙二七部集四卷　爲誰菴由誓編
斧の柄、我佛、耳さらへ、箱館紀行、蕪村發句解、發句てには草、松窓句集、
俳諧落葉合一卷　清水超波撰　享保十六年
落葉考一卷　高桑闌更撰　明和八年
落穗集七卷　梅盛編　寛文三年
落松葉一卷　貞木作　元祿三年
鬼瓦一卷　正春作　元祿四年
鬼貫句選二卷　太祇編　明和六年
鬼貫獨言一卷　上島治房著

鬼の目一卷	西吟作	延寶九年
おのが光り一卷	車庸	元祿五年
俳諧追風一卷	[illegible]	
[illegible]二卷	穗香編	天保十五年
笈さがし	三千風	元祿十五年
追鳥狩一卷	合羅	元祿十四年
笈日記三卷	支考	元祿八年
笈の小文一卷	芭蕉著、乙州編	寶永六年
篗の若葉一卷	摩詰庵雪鈴編	正德年間
生松集一卷	栗本玉屑編	
大阪引導集		
大阪獨吟集二卷	宗因判	延寶三年
大阪俳歌仙		延寶元年
大阪八百韻二卷		
大上戶一卷	似船作	延寶四年
大硯一卷	保友作	
大路車一卷	可俊作	元祿三年
大長刀二卷	水雲子作	延寶五年
大原三吟		正保四年
俳諧大三物		元祿元年
大湊一卷	幸佐作	元祿五年
大矢數	西鶴	延寶四年
大矢數二卷	紀子作	延寶五年
大横手一卷	西吟作	延寶八年
朧月夜一卷	定直作	元祿三年
おぼろ豆腐	巣兆	享和元年
大井川[illegible]四卷	維舟作	延寶三年
俳諧御傘十卷	松永貞德　慶安四年	又萬治二年
御傘雜句	壽來	寶曆十一年
俳諧溫故集二卷	蓮谷撰　正德二年	延享五年刊
溫故日錄	友春	延寶三年
音頭集四卷	三保作	寛文十二年
恩の夜話一卷	綠山老人著	
表のなごり二卷	北枝	元祿十一年
俳諧面問答一卷	積翠著	

思出草六卷	蝶々子作	寛文元年
思出千句	立志	延寶二年
親うぐひす一卷	貴志沾州編	享保二年
おらが春一卷	小林一茶著	嘉永五年
阿蘭陀漬一卷		
阿蘭陀漬二番舟二卷	宗圓	延寶八年
海音集	方設	享保六年
諧歌集	瓢水	寛延元年
詩歌連俳季寄注解改正月令博物筌四卷	鳥飼洞齋著	
俳諧海内人名錄一卷	鼎左、含川共編	萬延元年
かいづの海	淡々	元文五年
向榮文集	宗因	明曆二年
耕作集	沾石	正德二年
鮫州集	春秋樓	天保十二年
鮫州抄	千分	天保二年
向日品		
庚申墨直し	此秋等	寛政十二年
校正七部集	龍堂	嘉永四年
蘿頭奥之細道二卷	春星堂鶯宿	安政五年
高低屆二卷	而咲堂編	延享三年
江都近東名所集二卷	松翁・漁編	
嘉永五百題		嘉永二年
家雅見種一卷		安永三年
安永三年現在俳家點師史傳		
俳諧鏡之花一卷	石川幸丸壽、蓼太讃	安永七年
聖廟奉納俳諧鏡之間一卷	魯雞編	元祿十五年
かゞみまく一卷	三樂	元祿四年
桃表紙三卷	吾中	元祿十五年
俳諧桃莚一卷	宗瑞、咫尺	
俳諧かくし簾一卷	風狀	
鶴聲帖一帖	醉室其成編	文政十年
角柱	胤及作	

隱簑　似船作　延寶五年
隱笠影七尺一卷　是有坊編　文政三年
俳諧籠わかな二卷　嘉庭
笠何祖集一卷　瓢堂編
新撰こし草一卷　岡田萩風編　文政七年
萱の露　不角　元祿十四年
昔之花五卷　稻津祇空編　寛保三年
かさのはらひ一卷　寺村二川編　文化年間
鹿島紀行一卷　芭蕉作　貞享四年
何上草　山上西武
風の上 嵐雪追善　寶永四年
俳諧風の末一卷　寥和
歌仙合　元祿二年
歌仙俳諧抄一卷
歌仙俳諧摘一卷　季吟　寛文六年
歌仙俳諧獨合　蘿水作
歌仙發句二卷　季吟作、正章判

有入春公二卷　一雪作　延寶五年
片言　正章作　慶安二年
かたみぐさ一卷　秀松園素園編　寛政九年
かたみ富士百韻句集　安永四年
片輪車二卷　立圃作
郭公の辨一卷　一寸坊五明編
葛三句集　雉啄　文政元年
かつしか俳諧十葉抄一卷　其日庵白芹編　文化元年
葛飾蕉門分脈系圖九卷
俳諧かつしか素振一卷　其日庵我泉編　文化四年
俳諧勝鹿圖志一卷　鈴木金堤編
甲子吟行　素堂　安永八年
桂川一卷　正春作　元祿三年
俳諧かづらの藤二卷　角田秀德著
葛里發句集一卷　梅喃校
[illegible]嘉定蒲團一卷　山口羅人編
俳諧金あぶら一卷　米仲

金澤紀遊一卷	鷗嶼編	天保五年
俳諧假名字彙一卷	雪裡校	
かなしみの卷一卷	時兆作	元祿四年
俳諧かな遣ひ	蘭山著	弘化四年
假名朗詠集一卷	五雙編	安政二年
鐘筑波二卷	宮紫曉編	寛政元年
鹿野山集一卷	狂花園蝶二編	
歌俳百人選	石雲居海壽輯	明和年間
歌俳百人選	種員	天保十二年
皮籠摺二卷	岩田涼菟編	元祿十二年
川掃除		天保六年
川尻名月一卷	肥前川尻連	寶永二年
河内羽二重二卷	幸賢作	元祿五年
蛙合又可般圖合一卷	仙化作	貞享三年
蛙はし一卷	處輕蘆	寶永元年
歌發百撰集三卷	壽翁編	
かはづ袋	文鳴	寶曆十三年
俳諧川鼠一卷	空翠	
河舟德萬歲一卷	立圃作	承應二年
かはり狂言一卷	瀧野瓢水軒編	元祿十五年
俳諧替狂言一卷	釋誓岸編	元祿十五年
貝おほひ三十番俳諧合	芭蕉	寛文十二年
貝おほひむさし千句二卷		
俳諧かべに耳一卷	鹿島白羽評	
歸稻四卷淡々追悼句集	富天編	
歸花千句一卷	立圃作	元祿十四年
俳諧歸ル日一卷	秋瓜	
俳諧家譜二卷	早川丈石編	寛延四年
俳諧家譜拾遺	十口	明和七年
俳諧家譜後拾遺一卷	十口	寛政九年
俳諧家風二卷	雲鼓	
風狂文章雅文雜志五卷	田中友水著	嘉永二年
雅文せうそこ一卷	滄浪居主人編	

許六、野坡往復の俳諧論
賀文章俳諧一卷　早川丈石　享保二十年
夏孟子論一卷　絢堂素丸編　寛政二年
鎌倉三百韻一卷　宗因
鎌倉物語　喜雲　萬治二年
紙鳶　貞佐　享保十四年
俳諧紙鳶一卷　清水超波撰　享保十八年
上京染　享保十年
神子の舞一卷　立圃判　寛文四年
紙つひえ 上元句集　文政十二年
神之笛一卷　松木淡々編
紙袋二卷　龜井底盧著　寶暦九年
神法樂集二卷　正友作
紙屋川水車　隨流　寛文元年
乜巳己巳　蝶々子作
閑子鳥　三居庵　寶暦七年
閑子鳥　岳輅　文化四年

絶屑七卷　胤及作　萬治二年
俳諧漢和　元祿三年
漢和燈吟　杜川子素兆　安永三年
俳諧かめ草紙　竹枝　文政八年
龜の友一卷　櫟原方絜編
寒門集　朝叟　寶永元年
鴨矢立
加賀使者は一卷　宗貝作
鱶洋篇有、六枚聯句
唐扇子一卷
寒礫二卷　立圃撰　慶安二年
かりがね集二卷　清雄編　文久三年
かり座敷一卷　直風作　元祿五年
俳諧假すまひ一卷　風來
俳諧雁のつて一卷　寸長

假はし一卷　明水編　元祿三年
かり舞臺　千春作　延寶七年
枯野塚一卷　野坡、哺殿　寶永二年
俳諧枯野問答一卷　百梅
枯尾花二卷　其角　元祿七年
俳諧歌論二卷　高田與清著　文化九年
癸酉六百題　良子　元祿六年
九折集　言水　享保三年
休息歌仙一卷　立圃作
牛刀毎公編二卷
牛馬問　白蛾　寶曆五年
紀行俳諧廿歌仙三卷　淡々
紀行俳仙窟一卷　涼袋著　寶曆七年
其角・周忌集　秋色　寶永五年

其角句解一卷　莊丹著　正德三年
其角七回忌　沾德序
俳諧其角七部集一卷　西村源六編　天明七年
其角十七條　其角　元祿二年
其角直指傳　二柳庵　安永三年
其角發句集二卷　坎窩久臧校　文化十一年
開蓋　風狀　寛延三年
季吟俳諧集　延寶四年
棊局手段草
幾久いたゞき　周竹　正德四年
菊苗集二卷　來梠編　正德二年　又文化七年
菊の香一卷　風國編　元祿十年
菊の香　樗良　安永五年
菊の香　桃居　寛政十二年
菊の十歌仙一卷　伯兎撰　正德四年
俳諧菊の塚一卷　枕鼠
菊の道二卷　紫晏　元祿十三年

象潟　蓬萊軒　享保十四年
象潟行一卷　雨後庵里杏編
如月二卷　季範　元祿五年
木曾の麻衣六卷　立羽不角著
木曾の麻衣　千貫　享保十四年
木曾の谷一卷　野坡、是舟　寶永二年
北の山一卷　句空作　元祿五年
高蔭亭の樓一卷　行過著　天保五年
木津乘合舟二卷　一風作　延寶五年
几董月並十番左右句合　蕪村判一卷
几董句集一卷　高井几董著
奇南篇一卷　貴志沾州編　寶永六年
記念題二卷　露川作　元祿十一年

神岡子　西坡　天明三年
吉備中山　梅員作　元祿五年
錦江稿本三十三卷　其日菴錦江編
素秋の傳、俳諧六義傳、蓮池雜貞、蓮池和詩集、茶器名物の傳雜話抄、葛飾文通、千樹波抄後案、蓮池百首、續蓮池發句集、續桃の葉數、美和の枝折、秘傳梅の枝折、搖籃寶聚、積年の集解、難之箱、萬可准繩集、思夢院車塵遊記、いはでよし、葛飾正風、賦物之口訣、貞德翁筆記、寒川入道記
荳、江湖　素玩　文化十年
金花山一色百吟前集一卷　三千風　延寶八年
俳諧金花傳二卷　椿康工編　安永二年
俳諧錦繡段　其角　元祿十年
俳諧金臺錄二卷　來川　享保十九年
はつ、銀の月一卷　塘濤由評
俳諧金平百韵一卷　夢太
近來風體三卷　惟中
金蘭集二卷　甘井編　文化十年
金蘭抄　文化四年

金龍山四卷　東鷲編　正德二年
狂遊集二卷　三井氏
俳諧狂菊抄一卷　天明三年
京三吟　延寶六年
京三吟一卷　仙庵　天和二年
京七百五十韻一卷
行事板一卷　延寶八年
京日記一卷　言水作　貞享三年
京の曙一卷　杏酔作
京の水二卷　助叟作　元祿四年
俳諧京羽二重二卷　堀江林鴻編　元祿四年
京童部六卷　喜雲作　明曆四年
京童跡追六卷　喜雲作　寬文七年
玉海集七卷　貞室　明曆二年
玉海集追加七卷　正章作　寬文七年
玉江集　卜琴　延寶五年
俳諧清鉋八卷　立羽不角編
玉函集　文政十年
玉簑集　享和二年
俳諧季寄扇一卷　唐波
俳諧季寄きゝ盃一卷　風状
季寄袖鑑　蘆中　嘉永四年
俳諧季寄圖考　來鶯　天保十三年
玉池雜藻　素外　文化八年
玉池發句集四卷　素外著　文政三年
玉田集午心遺稿　文政二年
去來伊勢紀行一卷　嘉永三年
許六句集
俳諧去來今一卷　水光
去來三部集三卷　向井兼時著　天保九年
去來抄三卷　曉臺　安永三年
去來丈草發句集　蝶夢　明和八年
去來發句集一卷　去來
俳諧梧の一葉二卷　芭蕉
桐の一葉　一之　享保十五年
きれ／＼打込四卷　白雪　元祿十四年

木男さらひ三巻　常辰作　萬治三年
俳諧初學祇園拾遺物語二巻　兒玉松春著　元祿四年
古今俳諧問答　切字てにをは
何安奇禹度(アキウド)三巻　竹斎編　文化七年
莟華集二巻　雪中庵對山編　文政二年
空林風葉二巻　自悦作　天明三年
公界集一巻　櫻井軒
俳諧句鑑拾遺　津富　天明六年
句兄弟三巻　其角著　元祿七年
俳諧句雙紙二巻　菅原重厚編　天明六年
草刈笛三巻　支考、牧童　元祿三年　又元祿十六年
草蔓籠一巻　風子作　元祿五年
俳諧草のふる根一巻　豹林編　明和七年
俳人五松追懐句集
草の道一巻　野坡　元祿十三年
草まくら一巻　支考作　元祿十年　又元祿十六年

藥喰一巻
弘誓舟　季吟作　延寶六年
俳諧九世戸一巻　其日庵錦江編　天保十四年
俳諧句選一巻　水光洞祇徳編
俳諧句占　松蔭齋　文化十四年
俳諧句餞別一巻　芭蕉　元祿元年
俳諧口ごたへ一巻　林鴻著　元祿七年
口まね草五巻　梅盛撰　明暦元年
愚痴問答　素風　寶暦十三年
葛濃阿楚飛一巻　桂影舎露葉編　文化元年
葛の松原一巻　支考作　元祿五年　又天保八年
國跡追一巻　涼菟　寶永二年
國の花八巻　美濃派　寶永二年
久仁布里集一巻　深田兼松編
俳諧くぬきずみ一巻　圓齋

九百韻一卷　立圃作　萬治三年
熊坂一卷　維舟作　延寶八年
くまなき影一卷　皎々舍梅嵶編　慶應三年
熊野がらす一卷　小中南水　玉置安之　共編　元祿七年
句脈要領一卷　遠藤曰人著
雲くらひ一卷
雲の臺　晋雲　享保十四年
俳諧倉之衆三卷　露月　享保十七年
栗雀二卷　左道、正秀　寶永元年
車路一卷　吐庵作　元祿十二年
樞集一卷　西武撰　寬永十三年
黑うるり一卷　輟士作

懷舊千句集　元祿十一年
魁春帖　成美　天明六年
廻文俳諧百韻一卷　石田未得著
弘化三靈祀一卷　鷲仙、洒羅編
俳諧頓題菖蒲札　弘化發句輯二卷　椎本庵編　弘化四年
光月集　東潮　元祿十年
黃昏隨筆四卷　南兮著
黃山雨法會一卷　自活省琴等編　寬保三年
轟瀧集一卷　一路
禾葉俳諧集五卷　雙雀庵禾葉編　天保十四年
華月一夜論一卷　無花坊編　明和二年
花月俳諧二卷一名花月千句　立圃門人　慶安二年
花月六百韻　白鷗序　享保四年
花讃女句集　萬舊　天保元年
花實集　鬼貫　元祿十六年
華實年浪草十五卷一名俳諧三餘抄　鵜川飽文撰　天保三年

草苅集二巻　雀々堂一丸編　寛保四年
俳諧畫像集　帥中庵希水編　文久二年
畫像百人集　竹意庵　嘉永六年
花鳥千句一巻　立圃判
花鳥篇　蕪村編　天明二年
花鳥樂事一巻　大野庵竹有編
桑之林三巻　丁夢庵碧松著　寛政十二年
發句花園一調二巻　三千坊鵬雲編　弘化二年
俳諧畫讃集二巻　黄園五岳編　天保七年
寛五集五巻　元順作
勧進牒二巻　路通作　元禄四年
寛保百韻　自主　寛保元年
寛八集一巻　青流洞編　寛政七年
花洛六百韻一巻　自悦等　延寶八年
俳諧觿五十巻　素蹄園牛成等編　明和五年
誹伊半都志島一巻　一炊庵編
掛劍集一巻　桂叢老人著
鷄口集二巻　入江樵風著　弘化二年
俳諧教訓百首一巻　絢堂素丸著　文化四年
俳諧曉山集二巻　應々翁編　元禄十三年
曉臺句集一巻　枇杷園士朗編　文化六年
曉臺終焉記 一名落梅花　寛政五年
曉臺七部集　帯梅　文政十二年
罌粟合一巻　松倉嵐蘭　元禄五年
げすの知慧
俳諧月居七部集二巻　江森月居編　文政十一年
結何一口一巻　爲一編　文政七年
月信集　文化八年
月底翁句集一巻　蓼光庵著　嘉永三年
削かけ　支考　享保元年　又享保十五年

毛吹草五卷　重賴撰　正保二年　萬治元年刊
毛吹追加三卷　重賴撰　正保四年
けふの細布四卷　安靜作　明曆三年
けふの昔一卷　朱拙作　元祿十二年
犬硯集　保友　延寶六年
俳諧玄々前集二卷　羊葉
幻住庵之記　芭蕉　元祿四年
幻住庵俳諧有也無也の關一卷
俳諧源氏供養一卷
源氏はいかい一卷
源氏鬢鏡二卷　素伯作　萬治三年
元除春遊一卷　馬場絢堂撰
源氏繪貫枕　正德三年
言留集二卷　錦舍素柳編　天保九年
俳諧玄燈一卷
滑稽辨惑原俳論一卷　北條浮世著　寛永四年
俳諧見物左衛門三卷　苔翁
俳諧玄峯集二卷　旨原　寛延三年

研北集一卷　蕉齋梅當編　安政三年
玄武菴發句集二卷　啼鳥舍千里　寛政十二年
彥陽十境集一卷　深山飛川編　寛政元年
元祿拾遺一卷　佛狸齋轍士編　元祿元年
碁打花見一卷　立圃作
紅梅千句一卷　貞德作　明曆元年
孤雲上
俳諧悟影法師二卷　陸田一貫編　天保八年
吳江奇覽　馬場仲文編
攝津吳服里の名所を詠める詩歌俳句集
小柑子二卷　野紅　元祿十六年
俳諧發句小鑑　蓼太述、三鶴編
俳諧小かゞみ一卷　雲裡
俳諧古學要談一卷　造化庵德雨編　安永三年
俳諧古學臺裘抄二卷　一名俳諧切字論　櫃之本北元著　天保五年

五ヶ國一卷	宗旦	天和元年
木がらし一卷	風國	元祿八年
五吟紅葉鮒		延寶三年
古琴俳諧集一卷	諾自編	享保十七年
こきりこ千句一卷	立圃作	
盧空集一卷	波山	元祿十六年
鹿溪の橋一卷	松意作	
俳諧背の花	巴明	天保四年
五元集八卷	其角著、旨原編	延享三年
五元集拾遺	旨原編	延享四年
五元集脫漏	江由誓撰	
五湖庵句集一卷	伊藤祇明編	寶曆四年
俳諧こゝの所一卷	斗墨坊編	安永四年
俳諧古今句鑑四卷	谷素外編	安永六年
古今四季友二卷	立靜作	寬文七年
俳諧古今抄五卷	支考著	享保十五年
古今短冊集	手[illegible]	寶曆元年
古今俳諧歌解	支考　元祿十年	天明三年再版
古今俳諧墨蹟集		安政六年
古今俳諧明題集五卷	建部綾足著	
俳諧古今片歌明題集五卷	建部綾足編	寶曆十三年
古今墨蹟後集	鳥喰	安政二年
古今發句手鑑三卷	蔚古山人編	安政年間
心の蝶々一卷	[illegible]浪	
俳諧心の種一卷 堺神明宮五千句集		
心ひとつ一卷	貞義	寶永三年
心比東津二卷	曉雨窓齋編	寬政三年
俳諧五子稿一卷	蘆陰舍大魯閱	安永四年
言水、去來、素堂、沾德、來山の句集		
五色墨一卷	白兎園宗瑞編	享保十六年
乞食ぶくろ一卷	重厚編	天明七年
俳諧古辭談一卷	林珪山著	明和七年
發句註解俳諧故事談二卷	菊岡沾涼編	
越路草		
俳諧五十韻	素堂、知幾	

五十三驛亭圖畫俳句一卷　嘉永五年
五十三次
五十人一首　珍茶　享保六年
俳諧古集之辨三卷　遲日菴著　寬政四年
五十番句合　糖塚翁判　延寶三年
故人句鑑略傳三卷
故人五百題二卷　松露庵編　天明七年
天保十年再版　文久三年三版
俳諧故人續五百題二卷　一具庵撰　文政十二年
五車反古召波追善集　天明三年
五條百韻一卷　正章　寬文三年
標蘿談二卷　角醒秀億著　寶曆十三年
俳諧小相撲五卷　野々口立圃點　寬文七年
五節句一卷　順也作　延寶九年
又元祿元年　又寬延元年
俳諧古選一卷　三宅嘯山編　寶曆十三年
俳諧火燧びらき一卷　不求

木玉集六卷　梅盛撰　寬文三年
俳諧骨書　李雨　天明七年
小槌大成　豐蒲　明和七年
小華籠　也有　明和二年
滑稽太平記八卷　北藤浮生編
俳諧滑稽百箇條二卷　笠古道左簾著
滑稽銘鉄集二卷　沙門馬州編
俳諧五出船一卷
胡蝶判官一卷　信德、重德合作
小手卷四卷　忠直作　延寶六年
四季句帳
湖東問答一卷　去來編　元祿十二年
五德一卷　西翁編　延寶六年
言羽織　一雪作　延寶四年
言葉の栞　天保十一年
俳諧詞友三卷　種寬作　寬文十年
詞の友達　加近作

詞よせ七卷　立圃
特牛一卷[illegible]　圓水作　元祿三年
小鳥掛
此ほかつき達磨連歌句集　安永四年
このごろ一卷　示春作
俳諧此如月集一卷　槇山
木の葉駒　來山　享保三年
木の葉漬二卷　石介、巨郭共編　享保年間
此花集　當牧　元祿六年
木葉百韻　梅室　文政九年
此日集　轍士　元祿七年
誹諧今四家發句集二卷蒼虬、雪蝶、木梅、方和句集
[illegible]諧堂其成編　文政八年
このむれ　湖十　正德三年
俳諧小春笠二卷　富鈴
小春の笠二卷　百葉泉門人　元文五年
懸燭吟　淡々　享保二年

俳諧戀のしほり二卷　鶴北元著　文化十二年
俳諧戀の百韻一卷　無序
五百韻一卷　宗因作　延寶四年
五百三歌仙一卷　如雲作　天和元年
俳諧五百題　嘉永六年
護物發句集二卷　菊守園見外編　嘉永五年
小文庫二卷　史邦　元祿九年
四季名寄合類俳諧忘貝一卷　仲世編　弘化四年
俳諧こまざらえ三卷　千載堂丈士編　寛政七年
こまざらへ二卷　芙雀　元祿十五年
小町をどり六卷　立圃作　寛文五年
小松原一卷　只丸作
小みの集　望月　文化八年
俳諧根源集一卷一名史記滑稽傳通俗解　谷素外著　寛政九年
俳諧根源集補佚　和月　天保十二年

崑山集十三卷　令德　慶安二年
今人五百題　天保十二年
今人發句集　禾木園　文政十一年　又天保十年
言水句集
言水晩山等評前句一卷　錦文流點
俳諧米の守一卷　立羽不角編　寛延元年
薦獅々集一卷　巴水　元祿五年
姑射文庫　暮雨庵社中　明和五年
曆の裏二卷　茨木素因著　天明四年
古來庵句集　存義　安永六年
五老井發句集一卷　指芝蔭編　天保五年
語類　蝶夢　安永六年
是天道一卷　高政作　延寶八年

西海春秋三卷　紅霜庵編
西行櫻二卷　西吟作　延寶三年
西鶴五百韻一卷　延寶七年
　西鶴、西六、西花、西吟、西友句集
西花集二卷　支考　元祿十二年
歳花集　紀逸　寶曆七年
俳諧細見記一卷　月心齋等評
西國七部集三卷　釋西國
　野梅、鳴戸梅松、よまむ、ひなた路、蓬路、雪づくし、
　ひこ鯛、
俳諧歳時記栞草二卷　曲亭馬琴著　享和三年
歳旦[illegible]二卷　寛永十六年
歳旦帳　露言　延寶六年
歳旦牒　天和元年
歳旦帳　祇德　明和二年
歳旦發句集十卷
細訂增續山の井　蘭山　文化十三年
西馬發句集二卷　志庫俊門著　文久四年

峯府日記二巻　　杉風編
西鶴十百韻西山宗因千句　　延寶元年
草庵集二巻　句空作　元祿十三年
桂園集一巻　桑々畔貞佐編　寶暦九年
蒼虬句集　梅室　天保十年
蒼虬附合集　新甫編　文久元年
蒼虬翁俳句集二巻　成田南無庵著　過日庵祖郷編　嘉永五年
雑巾一巻　常矩　天和元年
俳諧桑々畔發句集二巻　有佐　寛延元年
桑韓槃　鷺谷　元祿十五年
東北句集　園村　文化十四年
蕉門俳諧集十二巻　早川丈石編　明和年間
早梅集六巻　梅齋撰　寛文三年
辨名集　文政六年
俳家草名集二巻　大鶴庵編　安政四年
さかづき合一巻　文政年間
俳諧嵯峨日記一巻　芭蕉

酒はやし一巻
境海草四巻　境ノ頓成作
こきはひ帖一巻　貞松編
沙金袋六巻　西武作　明暦四年
沙金袋後集五巻　西武作　延寶三年
俳諧作意早傳授一巻　半??庵??水著
一名俳??良材
俳諧作者二一巻　一雪
俳諧作者の名寄　種寛作
咲や木の花一巻　竹窓菊子編　元祿六年
櫻覚　享保十九年
俳諧櫻狩一巻　李?、一舛評　寛保三年
天満宮奉納一萬五千句
櫻勸進　亜象　寶暦九年
櫻千句一巻　鑑翁撰　天和二年
櫻の首途　陶里　享和二年
櫻のゆるし五巻　百茶坊稽古編　天明二年
櫻山伏一巻　支考作　元祿十四年

俳諧さゝめごと一卷　安樂坊春波著
篗山千句二卷
さゞれ石五卷　梅盛撰　寛文七年
砂川集二卷　諷竹作　元祿十二年
俳諧皐月の雨一卷　古中庵彫波著　明和七年
皐月のゆめ二卷　富春館桃仙編　享和二年
俳諧皐月晴二卷　瀾堂佳一編　弘化四年
雜談集一卷其角雜談集　蕭山編　元祿五年
雜話抄　紀逸　寶曆四年
さとしぐれ　五休　安政二年
佐渡日記　旦水　安永四年
　曉臺、旦水の紀行
さびしをり三卷　嘵居士一音編　安永五年
俳諧寂栞　白雄　文化九年

さぼん一卷　除風作　寶永元年
山海集一卷　賀子作　延寶九年
三盤集一卷　壽堂編　天保七年
俳諧三箇津一卷　天和二年
三顔合歌仙行一卷　元文年間
三家發句解三卷　茱窓莊丹著　寛政八年
　芭蕉、嵐雪、其角句解　又文化八年
山琴集　巴兮　正德四年
三句のわたり一卷　大江丸　寛政二年
俳諧ざんげ二卷
俳諧參語　爲大、百化　文化元年
三湖抄三卷　寛文四年
三五野蟲句合一卷　唯默齋編　安永八年
俳諧三才全書
三冊子　服部土芳遺稿　享和元年
　闌更編　安永五年再版
　白双紙、赤双紙、黒双紙
三四考二卷　閑日庵鵬里編　天保七年

三十三句	蟲々	元文四年
俳諧三十棟	源内	明和八年
俳諧三十六歌仙二卷	林草堂李天編	寶永七年
俳諧三十六歌撰一卷	鶯村編	寬政十一年
三十六句合一卷	立圃	
三十六歌仙	野田本春	萬治二年
三十六人發句合一卷		
三十六番句合	菊岡沾涼	享保五年
三上吟	其角	元祿十三年
俳諧三狀句合一卷	木兒	
三春日記	蓼太	安永四年
三千化三卷 芭蕉追悼の句集	支考編	享保九年
三千折	惟然	享保四年
俳諧三體集四卷	應泉老人編	弘化五年
三朝吟四卷		
自不求三度笠四卷	夏音舍格里著 梅曉舍里鶯編	寬政十二年

三人蛸一卷	文□□	天和三年
三番續一卷	不夜庵	寶永二年
三疋猿一卷	支考・□□	寶永三年
杉□句集一卷	探□□□八編	天明五年
三幅對	□□	嘉永四年
俳諧三部抄二卷	□中作	延寶五年
俳諧三部集一卷	蝶二	
三部集一卷	首□吾牧十編	寶曆十一年
俳諧三部書		寶曆八年
三僊五色墨一卷	練水舍□□編	安永七年
俳諧三名所	其外	文政三年
三鷺七部抄一卷	秦三□集解	
三箭未來記		安永二年
佐夜中山集五卷	松江重賴編	寬文四年
佐夜の中山	道□	寬保二年
沙羅句集二卷	沙羅庵玄樹著	文政元年

又安政元年
更科紀行　芭蕉　元祿元年
更科紀行　羅城　寛政五年
さるたまがは一巻　無事庵在碩　寛政五年
猿談義　文鳴　明和元年
俳諧猿轡一巻　随流著　延寶八年　明和七年再版
猿舞師一巻　種文　元祿十一年
猿簑集二巻　去來作　元祿四年
猿簑さがし七巻猿簑集注解　東杵庵稈村注
萬延元年
猿簑爪じるし　杜勤　天明七年
俳諧茶話　顧言　安政元年
詞友集四巻　種寛
詞友集追加一巻　種寛
俳諧次韻一巻　芭蕉編　延寶九年
枝葉集　拈德　正德元年

秋香亭句集二巻　森傘露著　安永三年
俳諧叢談一巻　信杖坊著　寶曆七年
俳諧秋錦現世草二　卷動水編　寛政二年
修身俳諧不朽集二巻　森素直著
俳諧袖珍抄　默池　嘉永四年
袖珍抄後編　默池　嘉永五年
秋風庵句集　寛政五年
秋風庵文集二巻　月化著　天保四年
又天保十一年
四海句艸紙一巻　芝山　文化元年
四海名家發句競一巻　宇品庵編
一名宇品庵行脚之記
鹿ぎゝ一巻　雲峰編　享保十二年
四家集　文政六年
四歌仙南吟一巻
松水、松曠、松律、松意句集
似我蜂　懐士作
俳諧四季言葉寄

色紙屑一卷	馬山子杉更編	享保年間
俳諧四季の岸二卷	雪岸	
俳諧四季の詞一卷	雪浪	
四季の友一卷	白毛、千圍等編	
四季文集	井眉	文化八年
俳諧四季發句集四卷	永之其澄編	安永二年
俳諧四季名類一卷	千光	
紙魚日記一卷	風律著	明和元年
四季句題集		文政三年
俳諧四季部類百詠集三卷	朝歸堂九起編	
俳諧時宜鈔一卷	英屋	
時雨笛	博良	安永五年
時雨文庫		嘉永元年
重類獨吟千句	維舟	慶安三年
重賴獨吟百首一卷	重賴撰	
四國猿一卷	律友作	元祿四年
俳諧自娛文草五卷	方境千梅著	寶曆九年

四五枚集一卷	遠藤曰人	
四山藁二卷	夏目成美著	文政四年
四山集一卷	蕉洲	元祿十六年
鹿鳴集五卷	春陵作	寬文元年
俳諧四時觀一卷	石霜庵	享保十年
四衆懸隔一卷	一晶作	延寶八年
四十三番時代不同發句合		
梯晉問答其角去來俳論	去來編	
獅子物狂二卷	山鄰著	享保八年
師說錄一卷	越人	
七十二物諍一卷	季吟作	
俳諧七百集四卷	曉臺編	天明元年
七百五十韻	春澄作　延寶八年	又天和元年
俳諧七百五十韻二卷	下鄉知足編	寬政三年
七百五十韻次韻二百五十句	芭蕉、其角、揚水作	延寶九年

七百五十韻綴藏　一晶作　寛文五年
七部搜　蓼太　寶暦十一年　又安永四年
俳諧七部集二卷　志太、野坡等撰
七部集打聞　岡本保孝著
七部集大鏡七卷　月院社何丸著　文政六年
七部集連句早見一枚　河田寄三編　嘉永元年
七部拾遺二卷　菊舍編　享和二年
初懷紙、野ざらし紀行、三歌仙、一橋、桃の實、其袋、初便
俳諧七部通旨十四卷　其日庵錦江著
七部礫噺一卷　遠藤曰人著
七部婆心錄六卷　曲齋著　萬延元年
俳諧七部餘錄二卷一名芭蕉翁新七部集　寄松編　文政十一年
田舍句合、常盤屋句合、續ヶ原、武藏曲、別座敷、雪
丸氣、桃の白實、
七名八體付合要錄　梅人　天明三年
十家集　寛政十一年
十歌仙　春澄編　延寶六年
俳諧十家類題集四卷

十會集一卷　季吟撰　寛文五年
十會獨吟集一卷　宗因
十會百韻一卷　宗因
十調發句集二卷
十種千句二卷　玄札、白鷗　明暦元年
俳諧十百韻　惟中　延寶四年
志津屋敷三卷　箕十　元祿十五年
子姪に俳諧を戒むるの文一卷　成島信遍著
枝等集　清德　正德元年
品えらび　定雅　寛政四年
自然堂千句　鳳朗　天保六年
俳諧師之恩二卷　喜蟲庵編　寛政元年
しのゝめぐさ　橘方　天保元年
しのふくさ一卷　清長

篠山千句	曲肱、好貝、如折等	延寶三年
芝香一卷	似春作	天和元年
芝集		寛政五年
師走比一卷	天龍作	元祿四年
師走月夜三卷	季吟作	
草ぼし一卷	正興	元祿十五年
俳諧字引節用集	逸我	文政七年
俳諧撰集一卷	鶴鈴江桂丸	文政年間
椎本先生語類一卷	椎本才麿述	
誰うたは一卷	ある法師作	延寶三年
灑園扇返答二卷	椎中作	延寶五年
發句付合俳諧拾葉集二卷	五仲庵編	
俳諧十牛圖一卷	眼我編	
拾玉集四卷	元治作	萬治元年
俳諧四幅對一卷	桂花園東恕編	享保七年
拾花集二卷		
十三歌仙一卷	許六編	寶永三年
[illegible]追善句集		
俳諧十三條東登遺稿	蓼太編	明和四年
十七回	流々	享保八年
十二歌仙	蓼太	明和六年
俳諧十二題	北溟	寛保四年
十二夜話	五竹坊琴左	
俳諧十二番四卷	古川更千編	
十番左右句合	蕪村判	天明元年
几董、月居の句合		
十分一、二卷	方圓齋編	安永七年
灑よつ手一卷	其文編	文化七年
十六夜集	順擧	寶永六年
俳諧十論二卷	支考著	正德四年
俳諧十論衆義一卷	信被坊著	
十論衆議拾遺	些兮	安永二年
十論拾遺	支考	享保十四年
十論代斷志	仙鼠	寶曆三年
十論禪問答一卷	溝口素丸編	享和二年
十論爲辨抄二卷	支考	享保四年

四壁堂句抄	由誓	嘉永二年
潮とろみ一巻	涼菟、柴友	寶永三年
汐干潟一巻		
島筑波	青流	寶永六年
島の都一巻	三斛庵秋瓜編	延享四年
蠶集一巻	其角	貞享元年
信德、其角、千春、只丸等句		
紙魚日記一巻	風律著	明和元年
しみはらひ一巻	猩々庵	弘化四年
辛酉墨直し	麓逆等	享和元年
新石などり	湖十	寶暦二年
新犬筑波十巻	季吟	
新蛙合	不二庵等	寛政十二年
新花信帖一巻		
新神田集二巻	神田庵小知	享和二年
新行子板一巻	定宗作	元祿四年
新玉海集七巻	貞恕作	延寶七年
新玉集七巻		
新清水	千春作	
俳諧新句兄弟一巻	魚貫	元文元年
新古山川集	龍雀	正德二年
新五子稿	享	寛政十二年
俳諧新五百題	護物	文政二年
新始射文庫三巻	曉臺編	
新雜談集一巻		
新三百韻一巻	其角編	元祿三年
晉子一傳錄一巻	豐山	天保二年
俳諧新十家發句集一巻	素柤、六輿共編	
新十家類題集	六轡	文化十年
俳諧新式一巻		
俳諧新式大全	鷺水	元祿十一年
新十鳥懸集一巻	碓井且松編	天保十一年
晉子發句撮解	栞窓叟莊丹著	
俳諧新々五百題二巻	田喜庵護物編	文化二年
俳諧新々式	闌更	安永三年
俳諧新選四巻	三宅嘯山編	安永二年

新撰猿筑波集　谷素外　安永六年
新撰犬和詞　支考　享保十四年
新増犬筑波集一巻 一名淀川　貞徳撰　寛永二十年
俳諧新増番匠矩一巻　柳園
新續犬筑波十巻　季吟編　萬治三年　又寛文七年
玉韻獨吟二巻　重徳編　延寶三年
新題林發句集　享和元年
新王箒筒　鷺水　寶永六年
新花波　寛保三年
俳諧新附合　西治　延寶七年
新村合二葉集二巻
新鶴芝　維淵　享和元年
新獨吟二巻　重徳撰　寛文十一年
信徳京三吟一巻
信徳十百韻一巻　延寶三年
新二百韻　其角　天和三年
新花摘　蕪村　天明四年
新花摘　馴道　寛政四年
新花鳥一巻　好春作　元禄四年
新百韻一巻　支考　元禄十一年

新百人一句二巻　重以作　寛文十一年
新深川集　文化九年
俳諧人物便覧二巻　三浦若海編
新編俳諧文集一巻　獅守編　文政三年
新編俳林良材一巻　平橋庵敲永著　安永十年
新道一巻　吉水作　延寶年間
新虚栗　麥水　安永五年
新湊一巻　杏酔作　元禄五年
人名録　長嶺　文化九年
俳諧人名録二巻　黒川惟草編　天明七年
新山家一巻　其角　貞享二年
新雪みどり　享保二年
親鸞　沾州　享保二十年
新類題發句集　蝶夢編　寛政四年
讃麓夜話一巻　珪山編　安永七年
四名集六巻　諸虚作
霜月歌仙　陽川、童中等　元禄六年
霜の光二巻　支考　元禄十七年

俳諧霜夜塚一卷　志山
俳諧仕樣　元隣　寛文二年
匠材集　慶安四年
尚歯會　秀國　天明五年
正直集　如元作
俳諧仕樣帳　活燕是網著　天保六年
正德俳諧一卷　應々翁方山等　正德六年
正風江戸菅笠　不角　元文元年
正風集　不角　享保十五年
正風竹林句集　寶暦七年
正風彥根體　許六　正德二年
正風論一卷　猩々庵原松著　元文五年
正門昔語集　既白　明和二年
俳諧四夜稿一卷　祇照
釋迦汁一卷　高政　延寶八年
釋教百韻一卷　西山宗因編　延寶二年
釋教百韻　鴨之椄　安永七年

寂砂子集二卷　一具庵夢南編
鵲尾冠　越人　享保二年
洒落堂記一卷　洒堂珍碩著
舍利風語　花の本梅通編　弘化二年
麥慰舍隨筆、梅室隨筆、蒼虬翁遺事の三部を収む、
朱白集三卷　湖白庵浮風編　寶暦年間
春興一卷　茂園春禪撰
春秋稿　白雄　安永九年
春秋俳諧集　元祿六年
春朧一卷　幻蓮庵編　嘉永三年
春泥句集　召波　安永六年
俳諧書一卷　寛政十一年
松花集四卷　一見作　寛文十三年
誹諧花鳥卷一卷　丹頂堂寒瓜編　寶暦六年
松窓乙二發句集二卷　一具庵一具編　天保六年
俳諧初學抄一卷　德元作　寛永十八年
俳諧職業盡二卷　雪水軒茶靜編　天保十三年

俳諧職人盡一卷　周尺庵守和編　延享二年
職人盡發句　二卷　五升庵瓦全編　寛政九年
諸公書讃一卷　岡田半沖編　寶暦四年
諸國翁墳記一卷
諸國藏日帖三卷　天明四年
諸國獨案內二卷　季吟作　寛文十一年
諸國因吟集二卷　山岡元隣編　寛文十二年
初心俳諧百人集一卷　鴫立庵評　安政五年
初心もと柏一卷　池西言水著　享保二年
俳諧書籍目録三卷　阿誰軒編　元祿十五年
書籍目録拾遺二卷　阿誰軒編
俳諧書籍目録續編
士朗句集　文化元年
次郎五百韻一卷　延寶六年
士朗七部集　文化二年
次郎太郎千句二卷　惟中
白川文庫　等躬　元祿元年
白[illegible]紙　三冊子の內一卷
白根嶽　調賓　貞享二年

白雉句集　碩布編　寛政五年　弘化四年補刻
白雉夜話　蓮々編　天保四年
詞林抄　水旭　嘉永元年
しるしの竿　淑瞳　寶永二年
白うるり一卷　天護作　元祿三年
紫苑集　宇呂庵　享和元年
しをり萩　曉臺　明和七年
すがた哉一卷　遠舟
管見草五卷　體安　明暦二年
杉のしをり　杉風　文化八年
杉の村立一卷
杉丸太一九　野坡、佐越　寶永二年

杉やき一卷 西鶴作 延寶六年
雀子集六卷 銀竹作 寛文二年
雀のもり一卷 和及作 元祿三年 又寛延三年
捨子集四卷 梅盛作 萬治二年
俳諧捨舟四卷 常矩作 寛文十三年
俳諧寸濃字一卷 支考編 寶永二年
寸の字集 鬼貫 寶永二年
炭俵二卷 芭蕉 元祿七年
壽身俵注一卷 達磨日人著
俳諧墨直一卷 秋天
俳諧墨なをし一卷 吟流
住吉千句一卷 蓼太編 安永五年
住吉踊 団水作 元祿五年
俳諧重寶摺火打一卷 齋藤如泉編 元祿五年

俳諧するが百韻一卷 稲中房 寛文十年
隨葉集
水玉集
西瓜三ッ一卷 鬼貫作 元和元年
俳諧水滸傳五卷 遲月庵空何著
隨齋諧話 成美 文政二年
俳諧水織一卷 直親作 延寶九年
西瓜の返事
蕣賓條一卷 定明作 貞享五年
俳諧末の露一卷 其日庵錦江編
末若葉 其角 元祿十年
俳諧井蛙問答一卷 半溪
青於杉集三卷 一樹庵楚山編 享和三年
青海波 梧山 享和十六年
晴霞句集 多代女 嘉永六年
井華集 几董 寛政元年

俳諧正語抄一卷	浪化著	文政十二年
西山三籟集	昌翅	享保十九年
正章千句二卷	貞德判	慶安元年
成美家集二卷	包壽編	文化元年
成美句集	寸珍編	文政元年
成美發句集	久臧編	文政九年
畢竟法華日蓮句一卷	顧阿編	安永六年
青流句追悼		享保十八年
俳諧蜻蛉遊文稿二卷	故見著	
清話抄二卷	蓬萊庵著	文政三年
俳諧小式	元隣	寛文二年
俳諧小筌	老柏	天保十一年
俳諧關相撲三卷	未達作	貞享四年
關の手形一卷	幻遊庵魚佛編	安政年間
石皮集一卷	朱樹叟士朗編	文化五年
俳諧石牌六行會一卷	野坡	
須布發句集二卷	可布庵逸淵編	安政二年
せきや帖	巣兆	享和二年
俳諧世說五卷	闌更	安永二年　又天明五年
勢田の長橋六卷	似舟作	元祿四年
節文集	童平	享保十八年
俳諧雪華集一卷	雪中庵完來編	
雪華集	見淵	安政四年
雪月花二卷	角呂	元祿十二年
雪月花	見龍	元文元年
雪月花		寛政三年
俳諧雪月花一卷	楓窓子編	弘化四年
雪中庵嵐雪文集一卷	嵐雪著、蓼太編	
せとの曙	定直	天和元年
世美家一卷	白老編	文化十年
せみの小川一卷	晩得作	元祿二年
蟬丸	柴居	文化元年

俳諧萃一巻	丈石	
千句一巻	守武撰	天文九年
俳諧千句二巻	立圃作	承應二年
千句一巻	胤友	寛文十二年
千句一巻	青清	
千句集	昌舊	文化四年
千句附	遠舟	延寶八年
千句の跡一巻	車鵬、一牛	元祿十二年
俳諧線衣	文刻堂	文化九年
前後園一巻	言水作	元祿二年
俳諧前後園一巻	雪章著	
前車集七巻	貞德	
仙臺大矢數三巻	三千風	延寶七年
今人俳諧千題發句集四巻	方圓齋梅室編	
俳諧選擇集一巻	五尺庵著	
洗濯もの六巻	一雪作	寛文五年
仙つばめ一巻	寸虎	元祿十四年
仙都紀行	巣兆	文化八年
沾德句集		
千日塚一巻	除風	寶永元年

俳諧前文集一巻	望駿臺胡燕著	文政二年
餞別五百韻二巻	立吟作	元祿四年
		又元祿十二年
俳諧千本集一巻	寸長	
千本鑓一巻		
千枚分銅一巻	長井伴自編	寶永元年
泉陽俳諧作者部類	芹帆	正德三年
俳諧千里獨歩二巻	虬戸庵素綾著	寛政十二年
俳諧千里の友一巻	桃蘭	
餞籠賦一巻	百里	寶永二年
世話燒五巻	皆虚作	明暦二年
土佐圓滿院、仕様付合		
蕉句雙説二巻	花莱庵蓬山著	天保八年
蕉尾琴五巻	其角	元祿十五年
		寛保三年再版
蕉風無格辨三巻	蘇室久安著	慶應二年
蕉門一夜口授	麥水	天明二年
蕉門格外辨	車蓋	寛政二年

蕉門古人眞蹟		寛政元年
蕉門杉家印可傳	幻齋	天保十年
蕉門師說錄	風朗	文久二年
蕉門諸生全傳一卷	遠藤日人編	
蕉門附句注解抄	麥水	安永四年
蕉門頭陀物語	涼袋著	寶曆元年
蕉門俳諧語錄二卷	蝶夢著	安永三年
蕉門花傳授三卷	五老峰故貝著	安永七年
蕉門むかし話一卷	既白編	
蕉翁句解過去種四卷		
蕉翁句選年考	積翠園	
蕉翁消息集一卷	半化坊闌更編	天明六年
蕉翁發句說叢大全五卷	絢堂素丸著	安永二年
宗因千句二卷		寛文十三年
增補御傘兩學		延寶四年
增補歲時記栞草二卷	青藍補	嘉永四年
增補俳諧所名集二卷	躬之編	文化六年

俳諧曾我二卷	白雪	元祿十二年
續明がらす	几董	安永五年
續阿波手集二卷	蘭秀軒橫船編	
續有礒海一卷	浪化	元祿十一年
續一夜松前集	几董	天明七年
續今宮草	來山	天明二年
續うづら衣一卷	橫井也有著	
續江戶筏 一名二十七歌仙	青峨	享保十五年
續片相手卅六歌仙一卷	浮齋永我編	寶曆四年
續寒菊	杏廬	安永九年
續枯尾花		天保十四年
續境海草五卷	顯成作	寛文元年
續清鉋十二卷	立羽不角編	延享二年
續五元集四卷	旨原編	寶曆二年
俳諧續五色墨一卷	馬光	寶曆元年
續今人五百題	爲山	弘化二年
續姑射文庫五卷	暮雨庵社中	寛政十年

續五論一卷	支考著	元祿十一年
續曝日一卷	梅樹軒逸人編	文化九年
續猿蓑集二卷	芭蕉遺稿	元祿十年
續猿蓑注解一卷	尺木堂公石著	
續猿蓑注解	月院社何丸著	文政六年
續詞友集五卷	種寛作	寛文十二年
續四歌仙四卷	几董編	天明七年
曉臺、几董、月溪、青蘿ノ歌仙		
俳諧續七部集二卷		享和三年
卯辰集、韵塞、韵ふたご追加、砥並山、有磯海、小文庫、千鳥掛		
續新百韻	乙由	延享四年
俳諧續仕樣	玄如作	延寶六年
續新山家一卷	觀水作	元祿二年
續士朗七部集三卷	批把園士朗撰	文政七年
續其袋	蓼太	寶曆六年
續誰が家	百里	寶永七年
續千代尼句集	既白	文久三年
續蔦が本二卷	金令舍道彦著	天保九年
續獨吟集二卷	重德編	
續獨吟集	玖也	寛文二年
續となみ山二卷	浪化	元祿十一年
續俳家奇人談	玄々一著	天保三年
續花摘二卷	深川湖十編	享保二十年
續濱の眞砂一卷	白應	
續百番句合二卷	馬光	
俳諧續粘飯篦二卷	立羽不角編	寶永二年
續深川集一卷	採茶庵梅人編	寛政三年
續福壽一卷	菊岡沾涼編	
續別座敷二卷	杉風	元祿十四年
續まさご一卷	白應編	享保十五年
續增山之井	季吟作	寛文三年
續水の面集	蓼太	天明六年
續みなし栗二卷	其角作　貞享四年撰	元祿三年
俳諧續む玉川一卷	紀逸	
讀大和順禮五卷	正辰作	寛文十二年
續山之井五卷	季吟作	寛文七年
續山びこ二卷	助然	寶永二年
續余花千句	沾德	享保六年
續連珠	季吟	

續連珠	安靜	延寶四年
素丸發句集二卷	德布編	寛政八年
續續歌仙	宜麥	文化八年
曾谷集	俗木	寶永二年
底ぬけ臼二卷	幸和作	寛永廿一年
そこの花二卷	支考、萬子	元祿十四年
そゞろごと	道彦	寛政六年
俳諧袖かんな一卷	蘆中	
袖双紙	奇淵	文化八年
袖ざうし	能阿彌	文政九年
俳諧袖の浦	洪水	明和四年
袖土產	盧元坊	享保二十年
袖土產集一卷	片石編	元文元年
外の海一卷		
素堂句集		
素堂文集	坎窩久臧編	

磯馴松一卷	轍石作	貞享三年
その石ずゑ二卷　楚石翁追善句集	松壽坊編	文政七年
俳諧發句其甲斐一卷	五湖庵校	文化十四年
俳諧其傘三卷	貞山著	元文三年
俳諧其菊一卷	仙急	
其砧	有佐	寛保元年
其木枯二卷	淡齋	元祿十五年
其便二卷	泥足	元祿七年
其燈	含朶	寛政元年
俳諧園の梅一卷	蝶々子	
其杜	貞佐	享保八年
其蓮集	紫紅	享保四年
その濱木綿(ユウ)一卷	嵐雪、朝叟	寶永二年
其日歌仙	盧元坊	享保十八年
其袋二卷	嵐雪撰	元祿三年
其雪影	几董	明和八年
そのよもぎ四卷	團齋著	安永五年

曾波可理一卷 一名巣兆句集 國村編 文化十四年
素檗發句集一卷 若人 文政六年
染糸 炭翁 元祿十六年
染川集一卷 殿哺 元祿十一年
曾らうそ五卷 銀竹
祖翁百回忌十卷 蝶夢 寛政六年
俳諧第一義集二卷 鼻中庵三力著 寛政二年
太夫櫻 遠舟 延寶八年
太夫新話一卷 絢堂素丸編 明和七年
俳諧大概 種寛作
大海集八卷 寛文十二年
大元式一卷 柳水作 元祿四年
大悟物語一卷 鬼貫作 元祿三年

題砂子 天保十二年
帶扇橋二卷 天座
俳諧發句題叢 椿丘太笻編
大八百韵一卷
太蕪發句集二卷 相籟庵霜後編 寛政二年
題林一句 調和 貞享元年
唐辛子百韻一卷 宗因作 元祿十六年
當座挪一卷 播州ノ千山
唐人をどり四卷 立圃 延寶五年
桃青二十歌仙二卷 草村曉臺編
俳諧當世男 蝶々子 延寶四年
道中俳諧
當流籠ぬけ 宗旦編 延寶六年
當流俳諧勝句一卷 閑酔子友白編 寶永元年
當流俳諧小傘一卷 兒玉松春編 元祿五年
田植唄 萬季 寶永五年
俳諧田植笠一卷 田中魚江評
高野集一卷 麥阿編 享保十九年

誰が家一卷	其角作	元祿三年
誰袖二卷	蘭臯編	
鷹筑波七卷	西武撰	寛永十五年
俳諧鷗の白尾四卷	一廬庵青天著	安永五年
誰が身の秋一卷	吾仲編	寛永二年
寶藏	元隣	寛文十一年
寶錢一卷	釣寂作	元祿五年
寶の市一卷	中村鬼睡編	寶永五年
俳諧寶の槌三卷	露月	
俳諧寶の山一卷	砦翁	
俳諧寶船一卷	雲鈴	
瀧おぼろ集一卷	遠藤曰人著	
抱籠	小網居園二	元文三年
武芝集一卷	嵩居編	天保四年
竹の友	瑞石	天明七年
蛸壺塚一卷	山李編	
田毎の日	桃雨	寛政十年

俳諧田毎の日一卷	山奴著	
たころがさ	一棟	元祿五年
俳諧他流句	素外	文政二年
俳諧多識篇	鼎柯	文政十年
黄昏日記	紀逸遺稿	寶曆十年
忠峯觀俳諧一卷	立圃	
但馬道之記一卷	竹裏軒雪山著	
橋日記	士朗	寛政十年
立聽一卷	蝶々子	
たつか弓一卷小西來山追善句集	井上布門編	享保十四年
たづき集	長慶子作	
龍雀	文哉、雙雀	嘉永四年
俳諧龍の裏一卷	青鱸	享保十九年

誹諧伊達衣二卷　等躬編　元祿十二年
蓼摺古義　沖翼　明和八年
竪並集　都貢選　明和六年
俳諧棚さがし一卷　蓼太著　寶曆十三年
種おろし　堤亭　天明元年
俳諧種茄子二卷　雪水軒茶静著　弘化四年
種瓢　來川　享保十二年
俳諧種瓢一卷　沙羅庵玄樹編　文化元年
俳諧たのもの梅一卷百梅堂
俳諧煙草集一卷　枕流亭一澄編　慶應元年
把菅　風和　正德二年
戲謔草五卷　良保撰　寬文七年
俳諧淫書讃　織月　享保七年
旅衣四卷　友意作
旅寢論一卷　去來撰

旅寢論　湖桂校　安永七年
旅のねざめ一卷　素丈坊編　享和三年
旅のひとつ一卷　横山德布著　天明六年
旅ぶくろ二卷　車徒　元祿十二年
俳諧旅袋集二卷　路廸編
旅枕三卷　令慶作　寬文元年
俳諧答問抄一卷　鈴木羊素著　延享五年
玉匣　池田是誰　寬文二年
多まづくし　宮崎如銳　寶曆六年
俳諧玉手箱　蝶々子　延寶四年
俳諧玉苗集二卷　三幹編　安政二年
はいかい玉のひかり一卷　黑樹園道隹著　天保十二年
魂まつり一卷　吾仲編　元祿十五年
俳諧玉藻集　蕪村編　安永二年
文政五年補刻
短綆集二卷　重榮作　延寶二年
探荷集初編　宇平　天明三年

探荷集二編、三編	白應	天明六年
探荷集四編	星衣	天明七年
探荷集五編	午心	天明八年
探荷集六編	午心	寛政元年
斷橋詞藻一 集句集		安政二年
手向草一卷		
たんこしう二卷	重榮	
俳諧談笑隨筆一卷	輕子	延享三年
淡々雜談集	淡々	享保八年
淡々文集三卷	森三楊編	寛保二年
淡々發句集二卷	分外編	延享三年
俳諧斷注集一卷		
當舞袋一卷	團水作	元祿四年
談林三百韻	高政作	延享年間
談林十百韻一卷	松意	延寶四年
談林俳諧批判二卷		
溜池河御座一卷	維舟作	延寶六年
溜池十歌仙	江翁	延寶六年

俳諧太郎川一卷	午寂	享保十五年
太郎五百韻一卷	一時軒作	延寶六年
太郎月一卷	月守作	
多羅葉集一卷	扶嵩久臧編	文政元年
たれが家	其角	
手折菊四卷	菊舍尼著	文化九年
晝錦抄一卷		享保年間
俳諧近道二卷	三宅飛良著	明和五年
近道集	古音	寶曆九年
俳諧冠嗡ちから瘦一卷	淺茅庵編	
竹馬集	祇德	元文三年
俳諧竹林一卷	西鬼作	延寶九年
兒の峰集		元祿九年

池心亭一卷　如泉
雉啄日々稿　雉啄　文化五年
父の恩　二代目三升　享保十五年
俳諧千鳥掛二卷　知足編　正德二年
俳諧千鳥の園一卷　千梅
薙髮集　阿誰　延享四年
椿花文集二卷　栖鳳編　天明七年
茶一ぱい一卷　溶々等編　弘化二年
長櫃集一卷　閑齋編　文化十四年
貞享式　支考　寶永七年
貞享式海印錄六卷　曲齋著　安政六年
貞享三ッ物　梅盛　貞享三年
丈草發句集一卷　內藤丈草著　安永三年

俳諧長者杜一卷　買明
長壽集士朗七十の賀集　應汀　文化五年
丈水遺草　丈水門人編　文化七年
俳諧茶九連寺一卷　北溟
俳諧茶杓竹二卷幅紗一卷附共三卷　椋梨一雪著　寬文三年
茶すり小木　乙二序　文政四年
茶のさうし一卷　雪丸　元祿十二年
俳諧茶ノ花集一卷
俳諧茶話稿一卷　竹郞、蓮之
俳諧中庸姿一卷　高政作　延寶七年
千代尼句集一卷　寶暦十三年
千代尼句集　大夢編　安政六年
千代尼句集　既白編　文久三年
千世の古道　晩山作　元祿三年
樗木集　親立志作
樗良句集　玄化　天明四年

樗良七部集二卷　無爲庵樗良著　天明三年
我庵集、時雨笛、月の夜、石をあるじ、
年尾集、菊の香集、花七日集　寛政五年再版
俳諧樗良拾遺一卷　無爲庵樗良　天明三年
樗良發句集　甫尺　天明八年
塵集二卷　都水作　元祿五年
塵塚二卷　重德編　寛文十二年
塵塚五卷　成之作
塵塚塵一卷　永田雲梯著　天保三年
塵取一卷　常矩　延寶七年
ちりひぢ土塵集六卷　令德作　明暦二年
智惠車一卷　瀧瓢水等評
ついすへ子　西武作　慶安五年
俳諧通言一卷　並木五瓶著　文化四年

俳諧通俗志二卷　兒嶋胤九著　享保二年
俳諧通俗志注解十一卷　椎本才麿編
通天橋　雁山　享保二年
月影塚集　安永四年
月の跡一卷　鈍子　元祿十三年
月の夜　樗良　安永五年
繼はし一卷　採茶庵梅人編　寛政四年
俳諧繼琵琶一卷　翠紅
頭巾俳諧
繼尾集二卷　不玉　元祿五年
俳諧附合小かゞみ　蓼太、牛家著　安永四年
附合双玉集　天保四年
附合しやう集一卷
附合手引蔓　几董　天明六年
杜撰二卷　嵐雪編　元祿十四年
筑紫貝　魯魚　文化八年
筑紫題林抄四卷　高田春坡編　文化六年

筑紫ノ海四卷	橋水作	延寶六年
筑紫野集二卷	吾鼠編	享保二十年
筑紫發句集二卷	對竹庵少哉編	嘉永三年
筑紫土產一卷	倉田葛三編	文政六年
筑波紀行一卷	蓼太	天明三年
筑波紀行櫻之實		享保五年
俳諧筑波法錄一卷	芭蕉著	元祿六年
はいかい頭陀行一卷	長野江西房編	寬延三年
頭陀袋	雲峰	寶永元年
俳諧頭陀物語一卷	涼袋	
土大根一卷	季水	寶永二年
續の原一卷	不卜作	貞享五年
包井一卷	流水作	元祿元年
つゝら折一卷	立圃作	
苞のかたみ一卷	曾我木然編	天明六年
		文化六年再版
繫橋一卷	彌彦賴嘯編	文政元年
俳諧繫花一卷	百木	
つのもじ	午寂	元文四年
俳諧角文字三卷	湖十	
つばさ一卷	角呂	貞享三年
遲八刻		明和八年
摘草鈔	悅水	享保二年
摘菜集一卷	幻降庵塵人編	延享四年
爪じるし	二疊庵蘭芝	天明七年
露陀羅尼	寥松	文化九年
俳諧露六歌仙一卷	大梅	
鶴芝集五卷	朱樹翁著	享和元年
俳諧鶴の遊一卷	貞陸	

鶴の歩　其角　貞享三年
鶴の歩　鶴歩　享保二十年
鶴のよはひ　桃葉庵　天保十一年
追加延五集　春澄作
追善九百韻一卷　立圃作　寶永十四年
追福一集一卷　溶々編　弘化二年
俳諧杖のさき一卷　都園編　延享二年
杖の名殘　金毛　享保十五年
亭々筆記一卷
貞德永代記五卷　隨流作　元祿五年
俳諧貞德家訓二卷
貞德槌一卷
みなし栗批言
貞德俳諧記二卷　一雪　寛文三年
諸國作者評判
貞德百韻自註一卷

貞德奉前集七卷　延寶三年
貞德和句解五卷　未得撰
丁卯集一卷　芳賀一晶編　貞享四年
蝶々庵除元集一卷
嘲哢集二卷　及加作
天久里舟七卷　顯成作　寛文十二年
手瀧紙一卷　渡井盧角編　延享三年
手松明一卷　出口貞水
俳諧手桃燈二卷　盧丸舍貞山編　延享年間
哲阿彌句藻一卷　清談林朝四著　寛政十年
てつゞみ一卷　落葉軒白羊編　寶永四年
鐵割一卷　享保五年
俳諧天爾波抄六卷　富士谷成元著　文化三年
口合秘事手引草二卷　梅亭等編　安永十年
俳諧手引種　谷素外　文化四年

俳諧手引の糸一巻	志水	
蝶すがた一巻	助然	元祿十四年
俳諧蝶つがひ一巻	自應	
蝶々庵俳諧一巻	百花撰	
俳諧蝶の遊三巻	北花	
蝶夢和尚文集四巻	五升庵蝶夢著	
天狗杖一巻春樹句集		文政十年
俳諧天狗話	谷素外	寛政七年 文化九年再版
天狗問答	蓼太	安永二年
點式標一巻	六平齋亦夢著	
俳諧點心集一巻	鬼雲等著	天保十二年
天神法樂集一巻	友貞作	寛文五年
天神奉納集二巻	元正作	
俳諧傳授天地人二巻	正木鶉江著	明和六年
天水抄五巻	宗養、昌林合作	寛文十一年
天滿千句一巻	宗因作	延寶四年
天王寺名所彼岸櫻	豐流	貞享二年
寺の笛三巻	一通編	寶永元年
俳諧新始一巻	助叟編	元祿五年
東櫻集三巻	無礙庵遜阿編	
俳風東遊一巻	三笑亭可樂編	天保四年
東海道二巻	何狂編	享保六年
同光忌	柳居	寛保三年
東花集三巻	支考	元祿十三年
東花式	支考	享保十四年
東西夜話三巻	支考	元祿二年 又元祿十五年
俳諧冬扇一路		
東朝八僊集二巻		享保十一年
俳諧東武三千句二巻	越川丹志	
東武六歌仙一巻	霜露觀有橋編	文政五年
髑髏一巻	西鶴作	延寶六年
灯籠卷一巻芭蕉追善句集祖月編		寶永三年

俳諧時津風二卷	時々庵	延享二年
常磐草		
常盤屋句合一卷 杉風句合 芭蕉判	延寶八年	又貞享二年
都曲集	言水	享保五年
時世粧六卷	松江重頼編	寛文十二年
俳諧德所新樂事	素外	文化五年
俳諧獨搖車一卷	心月菴對鏡著	
俳諧獨吟集二卷	寺田重德編	寛文六年
獨吟十百韻二卷	宗因點	
俳諧獨吟千句一卷	馬淵重治著	
獨吟千句抄	紹巴	寛文三年
獨吟百韻	東潮	元祿七年
獨吟百韻	鬼貫	享保十五年
俳諧獨吟百句一卷	羅人	
獨吟二百千句	元順作	延寶五年
獨師集二卷	重德編	
俳諧とく〱の句合二卷	素堂	正德元年
德萬歲一卷	立圃作	承應二年
德萬歲一卷	巢兆	寛政十二年
篤老園自撰句帖二卷	飯田利矩著	文政二年
土佐土產	博長	正德五年
年浪草	麁文	天明三年
東しのなか葉一卷	連阿房等編	
吐綬鷄一卷	秋風作	天和元年
吐屑庵句集		安永五年
獨歩集	良保作	延寶四年
刀奈美山一卷	浪化編	元祿八年
俳諧とはず口一卷	服部勘助	
鳶の目集		文化三年
遠あるき一卷	常牧作	元祿元年
とほし馬二卷		
遠千鳥集	伊丹社中	享保三年
遠のく	百里	寶永五年

俳諧遠干潟一卷	霞裎	
遠目鏡一卷	良詮作	元祿四年
遠山鳥二卷	宗旦作	延寶三年
十日菊一卷去來追善句集	卯七編	寶永二年
とみの札一卷	定之等評	
俳諧友胡床一卷	釆々	
俳諧兎も角も一卷		
友衞集	月村	嘉永五年
友なし猿	市川白猿著	寛政年間
俳諧友音鶴一卷	立羽不角編	元文四年
俳諧鳥合一卷	安都作	寛文八年
鳥おどし二卷	荷兮	元祿十二年
鳥なし三吟一卷	祇德著	寛保元年
鳥の道二卷	玄海	元祿十一年
俳諧鳥の都一卷	秋風	
屠龍之枝一卷	酒井抱一著	文化年間
鳥山彥二卷續錦後編	菊岡沾涼著	享保十一年
長うた	兎全	文化十一年
俳諧媒口		享保八年
長刀一卷		
長かもじ	北村立以	
長月集一卷一名無射集	翠臺編	
千代尼三十三回忌俳句集		
長ばなし	北村立以作	
俳諧前句長ふくべ一卷	不及子編	享保十六年
長持男	道彥	享和二年
中やどり一卷	涼莵	寶永二年
なげさかづき一卷		
俳諧梨の園四卷	貞佐	
茄子喰さし一卷	信房作	貞享四年
夏衣	尙白作	元祿五年

南都紀行		
夏ごろも一卷	支考著	寶永五年
俳諧夏座敷一卷	一定	寶永二年
夏の月一卷	松本雨イ編	寛政二年
夏の日一卷	爲邦編	享保二十年
夏引集	桃鏡	寶暦十一年
近世俳句名摘草二卷	九起、梅民編	天保十五年
俳諧夏山伏一卷	麥阿	
名取川四卷	維舟	延寶七年
俳諧七草二卷	大朗著	天保十一年
俳諧七車二卷	鬼貫著	天明三年
七車集	轍士	元祿七年
七時雨	柳几	寶暦十年
七瀨川一卷		元祿五年
七異跡集一卷	珠來	寶永三年
奈爾登野羅	春雄坊	安永六年
なにとを	吟江	安永九年
俳諧何の姿一卷	椒花	
難波畊四卷	宜休	寛文十一年
難波櫻一卷	西吟作	貞享五年
難波色紙百人一句一卷		
難波風	旨恕	延寶六年
難波曲二卷	自問作	元祿五年
難波丸	賀子作	元祿五年
難波辨慶	東柳軒遠舟作	延寶四年
奈に布くろ一卷	今日庵一峨編	文化九年
菜の花一卷	西吟作	元祿五年
俳諧名のみの塵一卷	其香編	
苗代水五卷	似船作	元祿二年
繩すだれ二卷	昨非作	元祿四年
奈蒲津波止	里仲	享保三年
浪の手一卷	朝叟	寶永二年

並松一卷	竹宇	寶永三年
南谿集一卷	松童窟文二編	
難陳二百韻一卷	棟糵閣蘇守編	享保八年
南無俳諧	文考	寶永四年
俳諧南北新話二卷	凉袋	寛政九年
二葉集一卷	惟然	元祿十五年
二歌仙一卷	松吾編	寶暦七年
俳諧二冊子三卷	水間沾德編	寛政十一年
俳諧錦のきれ一卷	松雨	
俳諧廿歌仙一卷	湖十	
廿會集	季吟	
にしとうち一卷	淇水編	文政年間
西の奥	菊鈴	寛保三年
西の雲一卷	加賀ノの松	元祿四年
俳諧西の空一卷	文華堂北志編	享和二年
俳諧二十五箇條一卷	芭蕉	享保年間
俳諧二十五箇條注解一卷		享和二年
二千折一卷芭蕉追善句集	久世殿貝	
俳諧二重染三卷	露月	
俳諧日々草四卷	梅民編	天保十四年
俳諧耳底記	風之編	
二弟準縄一卷		安永二年
庭の卷	立詠	寶永五年
俳諧二番鷄	了我	元祿十五年
二番船二卷	高田幸佐編	
二百千句二卷	元順	
鴫の二聲三卷	素文、可風著	明和六年
鴫の昔	青夏坊	延享四年

俳諧日本行脚文集七卷　三千風著

俳諧日本國一卷　齋藤如泉等評　元祿十六年

如意寳珠八卷　安靜作　延寳二年

俳諧にゐ一卷　款之、壺月

俳諧ぬかぶくろ二卷　吏登

幣ぶくろ一卷　枇杷園士朗著　安永三年

南瓜一卷　木節　元祿十二年

ぬれがらす一卷　一禮、益友等著　延寳七年

根合一卷　昨非作　元祿三年

俳諧饒舌錄二卷　李阿彌著　文化元年

寐轉草　丈草選　元祿七年

寢覺集二卷　常矩作　延寳六年

寢覺廿日　西吟作　天和三年

根なし草　草士　寶永六年

根無草二卷　柏原瓦全著　文政年間

根なし桂　長角　寶永元年

俳諧ねぶの雪一卷　立圃

年賀集六卷　松木淡々編　寶曆三年

寢物語二卷　湖翁作　元祿四年

閨の梅　露三　享保十二年

俳諧野あそび一卷　吏登編　元文二年

能静子　荘丹　文政六年
俳諧農をとこ集一巻　半化坊編
俳諧野がらす一巻　湖月齋萩石編　元祿十五年
軒端獨吟二巻
軒端の獨語　松意　延寶八年
鋸屑六巻　一雪作　明暦二年　萬治三年
野ざらし紀行 一名甲子紀行　芭蕉　天和元年
野ざらし紀行抄　桃隣　文化十年
俳諧望日記一巻　梧詩
後かなし文　古巣　文化十三年
後紅梅千句二巻　貞屋　寶暦二年
　松永貞徳百回忌追悼句集
俳諧後桃花集一巻　阿月庵桃二著
後の大矢數五巻　西鶴　天和元年

後の五百韻一巻　宗因
俳諧後の時雨一巻
後の千句二巻　宗因
後の旅一巻　如行　元祿八年
後のつき日一巻　常盤潭北編　享保七年
後の文塚　明和七年
後餘花千二百句二巻　穂向軒徳能編　享保六年
信親千句　立圃判　明暦元年
のぼりつる一巻　沾州　寶永元年
俳諧乗合舟一巻　石壽堂市楓編
法の言葉　二遂　寛政五年
法の花三巻　松苔軒作　寛文十三年
俳恩記　鳳樹　文化九年
俳諧合六巻　季吟判　明暦二年
俳諧師手鑑　延寶四年

書名	著者	年代
俳諧師名寄一卷		
俳諧重寶記一卷	如泉	
俳諧排太郎二卷	調十	
はいかいほ一卷	可孝	
俳諧問答	許六	元祿十一年
俳家奇人談二卷	玄々一著	
俳家奇人談三卷續編	玄々一著	
俳家大系圖二卷	生川春明著	天保九年
いろは引俳家道の栞一帖	華壚漣々編	嘉永六年
梅菊餘情	護物	天保元年
梅原集一卷	江水作	元祿四年
俳ざんげ二卷	安井舊國著	寛政二年
俳集良材三卷	正由作	寛文三年
俳字節用	高井蘭山著	文政六年
梅室家集一卷	櫻井梅室作	天保七年
梅室句集		天保十年
梅室附合集二卷	菊所編	文政十二年
梅室雨吟		文政二年
いろは引俳字袋二卷		文化十一年再版
俳人通名錄	雪交齋	嘉永四年

書名	著者	年代
俳人百人一首一卷	松羅堂良阜編	安政二年
俳人百家撰一卷	綠亭川柳著	嘉永二年
		又安政二年
俳書見聞の記一卷	越谷吾山著	
俳仙	梅盛作	
俳仙三十六人一卷	梅盛作	萬治三年
俳仙集	蕪村	寛政十年
俳則二卷	白兎園宗瑞著	天明四年
俳度曲集一卷	水間沾德編	享保七年
俳枕	幽山	延寶八年
俳名郎鑑一卷	几董	天明六年
俳質一卷	湘夕著	寛政七年
俳理贈答一卷	一馬園著	
梅林茶談一卷	梅室素信撰	天保十年
俳林小傳一卷	中村光久編	嘉永六年
俳林不改集	調和	安永八年
俳林良材集二卷春夏之卷	又雀庵永壺編	
		安政五年
俳林良材集二卷秋冬之卷	又雀庵永壺編	
		安政六年

俳論	秋月下白露著	寛政十年
梅翁發句集二卷一名梅翁宗因句集	西山宗因著　谷素外編	自天明元年至文政六年
蠅打五卷	乾貞恕著　茶杓竹批言	寛文四年
方圓發句集	梅室	天保十三年
芳艸集二卷	禾木園	天保十一年
芳春帖一卷	午心	文化五年
寶暦句集一卷	風窗湖十編	
馬鹿集六卷		明暦二年
俳諧歯かため一卷	谷素外著	天明三年
博多百合一卷	西鶴作	延寶六年
萩笠集二卷	素明編	
萩の露一卷	其角編	元祿六年又安永二年
萩花集	西武作	承應三年
萩まつり	夏月成美	文化年間
俳諧掃寄集二卷		天明年間

白眼	轍士作	
莠沙汰	只丸	元祿五年
白山奉納集二卷	伊勢慶產神主	延寶六年
白山奉納集追加菊酒付合		延寶六年
柏掌千句	蒼狐	天明二年
白扇集		寶永六年
泊船集六卷	風國編	元祿十一年
泊船集解說五卷	其日庵錦江著	
白陀羅尼一卷	支考編	寶永元年
白兎餘稿要錄一卷	採茶庵梅人著	天明年間
白馬奥義解	月居	享和二年
白馬集二卷	正秀、洒堂	元祿十五年
俳諧覲物語一卷	吉川不桂著	元祿五年
由太郎返答		
麥林集三卷	中川乙由著	
麥林集後編		寶暦九年
麥林舍發句集五卷	中川乙由著、麩浪校	
白話傳難陳	也有	
白翁文草	千梅	安永八年
馬光發句集	素丸	明和四年

波計輪以天　巴靜　寶永三年
はし立のあき一卷　閑雲樓鷺十編　明和三年
俳諧橋立の松一卷　知木
橋もり二卷　荷兮　元祿十一年
俳諧破邪顯正二卷　中島隨流著　延寶七年
破邪顯正自註評判返答
破邪顯正返答一卷　惟中　延寶八年
柱暦鶯永句集　元祿十年
はしらだて一卷　正立
俳諧蓮のおとづれ一卷　和舟
蓮の葉一卷　淵瀨作　元祿三年
蓮の葉風　支考　享保九年
蓮の實一卷　賀子作　元祿四年
破燒集一卷　順水作　元祿三年
芭蕉庵小文庫一卷　史邦編　元祿九年
芭蕉庵再興集一卷　蓼太　明和八年

芭蕉其角嵐雪點印論　几董　天明六年　又安永二年
芭蕉句解二卷　蓼太著　寶暦七年
芭蕉句集　蝶夢　安永三年
芭蕉句選二卷　華雀　元文四年
芭蕉句選拾遺一卷　麥鄉觀寛治編　寶暦五年
芭蕉句墳　巴明　天保四年
芭蕉袖草紙二卷　花屋庵奇淵校　文化八年
芭蕉袖日記二卷　虬戶庵素綾編　寛政十年　又文化元年
俳諧芭蕉堂記一卷　祇德
芭蕉堂三代發句集二卷　公成編　安政四年
闌更、蒼虬、千崖
芭蕉談一卷　釋文曉著　享和二年
俳諧はせをたらひ集一卷　菊岡有隣著　享保九年
芭蕉俳諧集　蝶夢　安永五年
正風俳諧芭蕉葉布禰一卷　芙蓉樓廣陵著
芭蕉文集一卷　小林風德編　安永二年
俳諧芭蕉林一卷　笠翁
芭蕉林俳諧集一卷　朶雲編　寛保三年

芭蕉翁一週記一卷　嵐雪　元祿八年
芭蕉翁歌僊二卷　曉臺編　天明七年
一名桃靑二十歌仙
芭蕉翁行狀記一卷　勸進、路通　元祿八年
俳諧芭蕉翁行狀記一卷　義仲寺考
芭蕉翁句解參考五卷　月院社何丸編　寶曆七年
芭蕉翁句解大成　何丸　文政九年
芭蕉翁句集一卷　佛兮、湖中、久臧等編
芭蕉翁繪詞傳三卷　蝶夢　寬政五年
芭蕉翁古式俳諧　其日庵　享保三年
芭蕉翁三等之文一卷　五明　寬政十年
芭蕉翁七書三卷　文化十二年
行脚控、二十五箇條、十六編、句合、嵯峨日記、奧細
道、發句集
芭蕉翁眞蹟集　蓼太　明和二年
芭蕉翁正傳一卷　竹二房著　寬政十年
芭蕉翁消息集　闌更　安永三年
芭蕉翁付合集二卷　蕪村編　安永五年
俳諧芭蕉翁同光忌二卷　柳居
芭蕉翁手鑑　去來　嘉永三年

芭蕉翁遺言三冊子三卷
芭蕉翁文反古　大峨　天明三年
芭蕉翁文集　蝶夢　安永五年
芭蕉翁反故文二卷花屋日記　釋文曉編　文化七年
芭蕉翁略傳一卷　幻窓湖中編
二十日艸三百韻一卷　宗因作
二十日鼠一卷　谷水丸作　天和三年
癸丑初懷紙一卷　桑々畔貞佐編　貞享三年
初懷紙一卷　寬政十三年
八景集一卷　鵬一作　貞享五年
初蟬二卷　風谷　元祿九年
初蟬集　野坡　享保二年
俳諧八仙觀一卷　市川
はつ便一卷　米揣、知方　元祿十五年
初茄子　吳天　享保十三年
初日の出　渭角　寶曆十一年
八百韻一卷　元祿五年
俳諧初元結五卷　是誰　寬文二年
はつ夢一卷　村瀨海翁編

鳩來度一卷			
華商人一卷	故晃著		
花いくさ一卷	秭寛作		
花盧木一卷	露川作	元祿二年	
花おほご	常陽	享保十四年	
花筐		寛保三年	
花かたげ一卷	梛墨尼編	安永九年	
鼻紙袋		延寶五年	
花供養	柏葉	寶暦十年	
花供養集一卷	公成編		
花車一卷			
花故事	闌更	寶暦十三年	
花さきの傳一卷	心水編	寶暦二年	
貞應百年忌追福句集			
花櫻帖	蕪村	天明二年	
咄相人	几圭	寶暦七年	
花拾遺	信安	享保十一年	
花千句二卷		延寶三年	
俳諧華たんす一卷（一名正花集）	明石庵百井著	寶暦二年	
花摘一卷	其角編	元祿三年	
花摘京五吟二卷	其角		
花摘百句二卷	其角		
花七日	傳良	安永六年	
俳諧花日記一卷	古道		
翁の翁	半化坊	天明三年	
花の雲一卷	姫路千山	元祿十五年	
花の首尾一卷	木叉	享保十一年	又寶永四年
花のちり一卷	此一編	慶應二年	
花の露四卷	道什作	寛文元年	
俳諧花の林一卷	風草		
葉南能派留一卷	松露庵烏明編	寛政十一年	
俳諧發句華廼井集四卷	五仲庵有節編	慶應二年	
はなび草一卷	立圃撰	寛永二十年	
はなび增補一卷	立圃	明暦二年	
鼻火大全	譚加軒作	寛文四年	
はなび大全綱目一卷	小河景三撰	延寶三年	
花百句	谷素外	天明二年	

鼻笛	一イ子作	
花ぶくろ	菊塢	文化十四年
はなふゞき一卷	敬齋編	文政四年
花時鳥	其角	貞享元年
花見車四卷	轍士	元祿十五年
花見三吟一卷	常矩作	延寶八年
花見次郎	升六編	寛政十二年
花見數寄一卷	西國作	延寶七年
花見のり物一卷		延寶九年
花見辨慶一卷	重德作	元祿四年
花無津見一卷	一無庵丈左編	寛政八年
俳諧花紅葉二卷	羅人	
花紋日	言石	享保□□
はなれ鳥二卷	晩柳	元祿十四年
葉の雫	倫里	享保十年
はゝそばら二卷	句空	元祿五年
法々華經曉臺七回忌		寛政十年
俳諧濱の眞砂一卷	竹犬、白應	
濱ひさし一卷	存古麥阿編	文化元年
俳諧濱松枝二卷	洁山	
俳諧濱みつぎ一卷	文鴻	
破魔弓		嘉永五年
濱荻一卷	立圃	寛文八年
雪香齋盤谷四季發句一卷	巢居栖鶴輯	寛延二年
万國燕一卷	半時庵淡々著	享保十三年
俳諧番匠童一卷	齋藤如泉著	元祿二年
番匠童增補一卷	和及	
坂東太郎二卷		寛文七年
俳諧坂東太郎	才麿	延寶七年
萬水入海一卷	芳賀一品編	天和元年
沖水園句集		元治元年
半入獨吟集		延寶四年
早引發句集	見外	嘉永四年

はらぬき集二巻		
破詈魔三巻	是誰作	明暦二年
播磨杉原	可申作	
播磨姫路三巻	是誰	
春一巻	遠舟作	
春清千句一巻		
俳諧春の言一巻	立羽不角編	寛保四年
春雨一巻	椿子作	貞享五年
春の鹿二巻	魯九	寶永三年
俳諧春の田二巻（一名治聾酒）	岡目蜂杢著	天保十二年
春の日一巻	荷兮	貞享三年
春の光一巻	玉屑編	
春の水	水鳥	享保十一年
春のもの一巻	鷺水作	元祿五年
晴小袖四巻	一雪作	寛文十二年
俳諧葉分の風一巻	和切著	天保十三年
東山墨直	支考	正徳元年
東山万句	支考	寶永三年
東山名所記一巻	汲淺編	延寶二年
彼岸の月二巻	路通、雪丸	元祿十二年
鄙諺集八巻	荻野安靜作	寛文元年
非言抄三巻		
ひこは盈一巻	和及作	
肥後名所一巻	竹翁	
ひさご一巻	珍碩作	元祿三年
眉山集	吟夕	元祿五年
非支考一巻	内山沽山著	文化二年
支考の俳諧十論批言		
俳諧非十論	松浦文泰著	寶暦十三年
常陸帯一巻	兒水作	元祿四年

ひぢ笠　燈外作　元祿五年
俳諧ひと時雨一卷　古池庵
俳諧一橋　清風作　貞享三年
ひとつ松四卷　尙白作　貞享四年
人の花一卷　元文年間
一葉塚二卷　乙貫、虎州編　寶曆六年
　嵐雪五十回忌追悼句集
俳諧一筆鳥一卷　麥阿
人眞似二卷　道鑑　明曆三年
ひとめぐり　月譚　文政元年
一本草五卷　未得作
被箏物斗集一卷　中山鶯室編　安政年間
ひとり步行　五明　寬政七年
俳諧獨喰五卷　三宅嘯山編　寬政十二年
俳諧獨稽古二卷　眞松齋樓川著　文化十一年
　文政十一年再版　天保十二年三版
獨言四卷　卜琴作
ひとりごと二卷　鬼貫著　正德三年
　享保三年再版　天明四年三版
ひとりずまひ　祇德　寬保元年

獨發句二卷　高橋喜臺編
俳諧ひな筑波一卷　汝光
鄙鶴　露月　享保十年
雛笘物語一卷　祖月作　元祿九年
批判四笑一卷　延寶三年
枇杷園句集　秋擧、卓池編　文化七年
枇杷園士朗七部集十卷　朱樹翁著　文化十一年
枇杷園隨筆一卷　秋擧編　文化七年
枇杷園類題發句集　梅間　文政八年
火吹竹一卷　似舟作　延寶七年
俳諧眉斧目錄一卷　湖十
鬢かゞみ　北邊宗賢作
備後表一卷　山田無文　寬文十二年
便船集七卷　高瀨梅盛編　寬文九年
俳諧非無漏毛理一卷　池田正式　正保三年
・氷室守　貞室　寬文六年

俳諧品彙四卷	疎々庵霞打編	
秘問集一卷	浪化著	
兵庫船	吳來	享和二年
萍窓俳諧堂句集		文化九年
萍水奇書二卷	暮雨庵帶梅著　萬籟北齋畫	文政元年
俳諧百庵主詠集二卷	過日庵祖卿　融々處卜早編	嘉永七年
俳諧發句百友集四卷	朝陽堂九起編	安政四年
俳諧百一集	康工	明和二年
俳諧百韻かるた一卷		
百韻自註一卷	正章作	寬永十九年
百歌仙四卷	天座	元祿十六年
俳諧百歌仙五卷	旨原編	
俳諧百家仙一卷	丑甍編	寬政八年
百からす一卷	宇中	寶永三年
俳諧百曲	市山	享保二年

俳諧百郭公一卷	陸子	
俳諧百壽讃二卷	松尾隆弘著	文化十三年
百華實二卷	菊岡沾涼編	享保八年
百五十番句合一卷	蓼太、吐月	明和年間
百卅番句合	淡々	寶曆四年
百川集	芹舍	嘉永二年
俳諧百仙集		文久元年
百千萬三卷	貫志沾州編	享保十一年
俳諧百題集一卷	希因、凉袋	
俳諧百太郎二卷	牧童著	寶曆五年
百人一句二卷	重以作	萬治三年
百人一句一卷	江水作	元祿四年
俳諧百人一集		嘉永三年
俳諧百人一首一卷	里喜庵北冏編	
俳諧百人首書發句叢一卷		
俳諧百人童一卷	白州	
俳諧百番句合二卷	祇空	享保十七年
百福壽	菊岡沾涼編	享保二年
素囊發句百蓮集解説四卷	其日庵錦江著	・

ひようたん集 一名宋屋句集	嘯山編	明和六年
平包二卷	和田東潮編	元祿九年
平水引	發句翁作	元祿五年
ひるあみ二卷	宗因	
晝寢隨筆	陶丘	享保二年
晝寢の種三卷	荷兮	元祿七年
俳諧晝の錦一卷	芭蕉	
ひろ葉一卷	雪堂拾翠編	享保八年
寅年至巳年 俳諧廣原海二十二卷	立羽不角編	元祿十六年
ふいの柳一卷	五升庵蝶夢編	
風狂文艸五卷	田中友水著	寶曆二年
風月集六卷 一名伽羅庵句集	無極庵留倫編	安永六年
風月帖二卷	萬子編	寬政八年
十指追加 風月の童一卷		
風俗集三卷	良保	寬文六年
風俗陀羅尼	尺龍	寶曆十年
俳諧風俗文集一卷	後北花	
風俗文集昔の反古	蘆中	天保八年
風俗文選	許六撰	寶永三年
風俗文選犬注解	介我著	嘉永元年
風俗文選拾遺二卷 一名自墮落先生文集	山崎俊明著	
風俗文選通釋十七卷	其日庵錦江著	
俳諧風體集	惟中作	延寶五年
風羅念佛	曉臺	天明三年
俳諧笛わらべ一卷	貞橘	
深川一卷	洒堂	元祿六年
深川三會三卷	祇南、五葉等編	明和六年
俳諧福ゝ滿二卷	五始	
ふくさ物一卷	一雪	

福神通夜物語	不角	元祿十四年
鵲俵	嘯白、竹司	享保六年
俳諧袋四卷	舊國編	享和元年
袋角一卷	魯九、嘯風	寶永三年
梟日記三卷	支考	元祿十二年
俳諧俗表紙二卷	秋毫庵其明編	安永二年
俳諧扶桑車一卷	前田流水著	寬政五年
俳諧扶桑の松一卷	鳳朧	
富士石題四卷	岸本調和編	延寶七年
富士筑波集	祇德	安永六年
富士の雪一卷	寸松堂林石編	寬延三年
富士詣	三千風	貞享三年
富士詣一卷	桂影舍露菓編	文化十四年
蕪村一夜四歌仙一卷		
蕪村句集二卷	蕪村著、几董編	天明四年
蕪村句集	忍雪等編	文化十三年
蕪村三十六歌仙一卷	谷口蕪村編	文政十年

蕪村集一卷	谷口信章編並書畫	文政九年
蕪村終焉記 一名から檜葉	几董	天明四年
蕪村七部集 其雪影、明烏、一夜四吟、桃李、續明烏、花鳥篇、 五車反故		文化六年
蕪村發句解一卷	松窓乙二著	天保四年
蕪村翁文集二卷	其獨亭忍雪等編	天保八年
二色草紙	定雅	享和二年
二木櫻一卷	爲鄉作	元祿五年
ふたきの春	秋瓜	安永九年
俳諧双子山	立羽不角編	
俳諧二子山三卷	露月	
二ッ盞一卷	隨流作	延寶八年
二つの竹	子葉	元祿十五年
二柱集一卷		
二葉の松	不角作	元祿五年
二俣川二卷	乙勝作	元祿四年
增補集注俳諧一見貝四卷	金馬僊松雨編 鵲巢微翳註	嘉永元年

二見筥二卷	發句翁	元祿四年
ふたもとの花一卷	五重軒識月編	享保九年
俳諧二夜歌仙一卷	祇德、祇明	
二夜歌仙	烏鼠	明和五年
俳諧二人笠	八菊	寶曆四年
ふたりづれ	杜口	安永八年
藤枝集	維舟	延寶二年
藤波集一卷	一存作	元祿四年
藤の首途三卷	支考編	享保十五年
藤の實一卷	素牛	元祿七年
藤の元	五桃庵	明和三年
二日三百韻一卷	白悦	
二日醉一卷		
筆の試一卷	浴泉廬鳥掌著	安永八年
筆の塵	馬瓢	享和元年
筆の道一卷	漆澤園美谷編	
懷子十卷	松江重賴著	萬治三年
懷日記一卷	竹原	寶永二年
船庫集二卷	風雲舍東椎編	寶永七年
船だより	沾德	享保二年
船のみち一卷	東明窓鷄語編	寛政年間
不白翁句集一卷	振々亭三駱編	寛政十年
文塚集	毎日庵	寶曆十二年
文月往來一卷	坂嵐枝編	享保十一年
俳諧書の埃二卷 一名御溝閣隨筆		
文久五百題		文久三年
文久新六百題		文久三年
文久六百題		文久二年
分外集	豔士	元祿十六年
俳諧文集	蕪庵盤守	文政八年
四時必用俳諧文章車一卷	梅古老人編	天保十二年

文章視友錄二卷	加藤梅樹編	文化十一年
文星觀三卷	仙石廬元坊編	享保十七年
文政俳諧一卷	雪中庵對山著	文政十二年
文政發句集		天保三年
冬かづら一卷	杉風	元祿十四年
冬かづら一卷	採荼庵梅人撰	寛政二年
俳諧冬籠集一卷	雲蝶	
俳諧冬籠二卷	此花庵鶯宿編	嘉永五年
冬椿集	自然堂社中	弘化二年
冬の花一卷	除風	寶永二年
冬の日一卷	芭蕉作	貞享元年
冬の日解	木蔭庵	寛政六年
冬の日解	成美	文化六年
冬の日注解二卷	黄華庵升六著	寛政八年
		又文化六年
冬牡丹一卷		天保五年
俳諧冬紅葉一卷	苔路	
芙蓉文集	雪瓜園耳得選	寶曆十三年

ふりつむはな四卷	長翠編	
古いけぶり	對成	文政五年
古鏡二卷	木春撰	
梅鶯門人編吟		
俳諧古紙子一卷	虎角著	享保十年
古硯三卷	巴龍舍編	明和五年
俳諧古簾一卷	巽窓湖十編	寛保三年
丙寅紀行一卷	風瀑編	貞享三年
米恩集		天明二年
米壽集一卷	月池軒我笑編	延享二年
絲瓜草六卷	高瀬道甘編	寛文元年
糸瓜集	木節	元祿十二年
俳諧別座敷一卷	子珊	元祿七年
ノヽ集二卷	玉廉文翁著	安永四年

紅粉皿一卷	田中夕山作	延寶四年
蛇の助五百韻		
蛇のすし一卷	言水作	
片歌二夜問答一卷	建部綾足著	享保十八年
弁説集五卷	良保作	寛文元年
篇つき一卷	李由	元祿十一年
篇突集返答一卷	去來	
鳳巾の晴十卷	安田以哉坊編	安永三年
暮雨句集一卷	遠藤曰人	寛政三年
蜂蝶集	平時庵	寶暦七年
奉納歌仙一卷	市露庵北海編	寶暦二年
奉納集一卷	露川	元祿十五年
奉納百韻	桃青	延寶六年
類題鳳朗發句集二卷	惺庵西馬編	嘉永三年
蓬萊嶋	去來	安永四年
甫鶴集	也白	享保九年
北枝發句集		天保三年
墨水兩岸行	蓼太	
卜晴集二卷	流芝編	
俳諧木念一卷	杏花	
步荒神二卷	空門子作	慶安三年
慕綮集四卷	重以作	萬治三年
反古搜	百二	文化十年
俳諧反古拾遺二卷	常盤潭北	
反古談	沾涼	寶永二年
星合	朱搗	寶永六年
俳諧星月夜集二卷	加藤原松編	元文四年
星月夜集辨難一卷	松盧、松佐著	
ほし星一卷	昨非	
星まつり一卷	昨非作	元祿四年

發年頁二卷	三暢編	天保五年
發願文	支考	正德五年
發句小鏡	蓼太	天明七年
發句石[illegible]道	白雄	文化四年
發句三從集二卷	亭々坊車蓋編	寛政六年
雙土、瓊音、闌更の句集		
發句三代集	弘化二年	嘉永四年再版
發句下書一卷	四時堂志誌編	文化七年
俳諧發句十六篇一卷	芭蕉	
發句新葉集		天保三年
發句千題集四卷	朝陽堂九起編	文久二年
發句題叢	太節	文化四年
發句題林十二月抄		文化十四年
發句帳十卷		寛文六年
發句帳四卷	立圃撰	寛文十年
發句方題集四卷	冬至庵庚年編	天保十二年
俳諧發句類聚二卷	青顏庵了補編	文化四年

俳諧發句帳題二卷		
發心集	蝶夢作	元祿五年
北國曲集七卷	森巻耳編	
郭公十二歌仙	調和	延寳八年
本式及古式		寶暦九年
本朝八僊集		享保十一年
本朝文鑑九卷	支考撰	享保二年
暮柳發句集四卷	希因著、後川編	明和三年
堀川の水八卷繪入	富尾似船著	元祿七年
望一千句一卷		慶安三年
望一後千句一卷		寛文七年
梅嵩庵入日記二卷	吉井雲鈴	

俳諧捲簾一卷　弄花　元文二年
眞木柱　擧堂　元祿十年
幕づくし一卷　松意　延寶六年
眞葛春懷紙二卷　西村定雅編　文政二年
枕かけ二卷　露川、寄木　元祿十五年
俳諧枕双紙一卷　春稍庵梅丸編
枕筥　原風　元祿四年
柾木葛　西鶴　延寶四年
柾木のかづら　千翁　享保十七年
俳諧眞砂歌一卷　蓼太著　安永四年
眞砂集十卷　兀峰豪山編
正友千句二卷　寛文六年
正信千句二卷
十寸鏡一卷　田中久次撰　慶安五年
尾張當世俳諧滿壽鏡一卷　加藤荷足編　文政二年
俳諧眞澄鏡一卷　高山鞏文編

増山之井二卷　季吟　寛文三年
増山之井補註一卷　闊文來庵著
又乞食袋　素丸　延享三年
又花の雲一卷　千山　寶永二年
又深川　紫出　寶永四年
松かさ集　東潮　元祿七年
松島一色雨吟集一卷　三千風作　延寶八年
松島紀行　泉明　明和六年
松島紀行一名若葉の奥　白翁千梅著　文久四年
松硯　羅城　寛政八年
松たけさう一卷　千春作　延寶八年
俳諧まつの色一卷　柏日菴立砂編　天明年間
松の奥　素堂作　元祿三年
松の榮　如泉　元祿十三年
松の栞　野逸　文化十年
松の波一卷　車要　元祿十五年
松の花一卷　國壽　寶永三年
俳諧松のはやし一卷　林石

松源集	江水	元文四年
松本集四卷	西村水安	
まにふんで一卷	堀田六林著	
前句大全一卷	井上布門評	
粉川寺奉納一萬句集		
前句附自在嚢		安永八年
前句附寶船	露月	元祿十六年
幻の庵一卷	湖南連中	寶永元年
丈草追善句集		
まゝこ立三卷	武川作	萬治三年
萬句十卷	立圃作	承應元年
萬歳樂二卷	常牧作	元祿三年
萬人講一卷	小西來山評	寶永二年
滿目集		慶安二年

三日月歌仙	支考	寶永二年
三日月集		享和二年
三日月日記一卷	芭蕉著	享保十五年
三日月日記一卷	支考著	享保十五年
三河小町二卷	白雪	元祿十五年
見かへり駒一卷	夏葉編	享保年間
みかへり松	祇空	正德四年
俳諧有紫三卷	鹿島白羽編	延享二年
みさご	茶静	文化八年
未習有格	團水作	貞享元年
御田扇	心友	天和二年
俳諧道連一卷	立野作	寛文十一年
道づれ草	乍遊	寛延二年
陸奥千鳥	天野桃隣	元祿十年

みち奥日記一卷　巴陵、二日坊著
道の便　月居　文政五年
道の露　昌周　安永七年
俳諧道の枝一卷　孤山人卓朗著　文久三年
道の雪　如默　寶曆六年
道彦七部集七卷　金令舎道彦著
鶴芝、馬の上、灕四手、そゞろごと、蔦の眼、置洗濯、
略くろねき
三日歌仙一卷　芝仙　寶永二年
俳諧水かゞみ一卷　小野紹蓮著　享保十五年
みづかゞみ　阿雪　寛政七年
水かけ草一卷　梁川宣苗編　安永八年
みつから集一卷　賀子作　天和元年
三鐵輪一卷
西翁、西鶴、西夕三百韻
三月もの一卷
水莖の岡一卷　和及作　元祿四年
水車六卷　隨流作
俳諧水車一卷　蓮之

水杉原二卷　友琴
水の月一卷　靑蘿著、不木編　寛政三年
氷の友　正秀　享保九年
水比目魚　艶士　元祿十一年
三物記　季吟作　寛文十二年
三物句解二卷　蓼太門人編
みとせ草　助叟　元祿十年
みなし栗二卷　其角作　天和三年
俳諧皆白砂一卷　嵐雪
湊舟十万句五卷　重親作　寛文十年
美南武須比一卷　事紅問、也有答
簑笠二卷　轄羅　元祿十二年
美濃郡上一卷　立圃作
美のゝたけ桃溪翁發句集　羅竹編　寛政三年
箕吹草　蓁阜　弘化元年
身延詣　貞佐　享保六年
身ノ樂千句二卷　元隣作　寛文元年

みはしら	白堂	文政七年
壬生忠岑	立圃作	
壬生山家	雨林	寶暦九年
身ほどの笠一卷	水國	
身程の日記一卷	水國	
耳さらひ	梅窗	天保二年
耳さらへ	一具	天保十二年
俳諧耳の底一卷	宗磬	
民歌行四卷	浦川富天編	寛延三年
眠寤集二卷	正由作	
俳諧宮遷二卷	露月	享保十二年
名目抄	宗順	寶暦九年
茗荷集二卷	雪水軒茶靜校	文政五年

宮城野三卷	釣竿	延寶三年
都案内者	中川喜雲	寛文二年
都畔三卷	由徳作	寛文五年
みやこ鳥	德則	天保十四年
俳諧都の梅一卷	曲庵	
宮古の栞	立志	元祿五年
都のつと	魯石	享保十四年
都曲二卷	言水作	元祿三年
太山嵐(ミヤマ)一卷		
三よき舞一卷	流芝撰	天保四年
俳諧未來記	蓼太	明和二年
未來記	周竹	明和六年
水尾杭一卷	繁水作	元祿三年
道坂古文庫五卷	川村左卅著	明和四年
六日の菖蒲一卷	野々口立圃著	

六日飛脚一巻		
夢鶴堂遺稿二巻	呂伴著	
昔合草一巻	井上士朗編	寛政八年
俳諧昔の道三巻	渭北	
向が岡	不卜	延寳八年
俳諧麥ばたけ一巻	李趙	
葎亭壽讃集一巻	三宅嘯山著	享和元年
鐙引出集	沙白、非吹	元文元年
無言抄	應其	慶安三年
俳諧無言抄七巻	梅翁序	延寳元年
むさしの八巻	意竹子作	寛文十三年
武藏野二巻	維舟作	延寳四年
武藏野三歌仙三巻 堀雛井、武藏野、逊水	蓼太	天明三年
武藏曲一巻	千春撰	延寳九年　又天和二年
無盡經一巻		元祿四年
新撰折句むすび艸一巻	三万堂馬雨編	文化十二年
俳諧無想集	淡々	享保十五年
俳諧夢想扇一巻	佳風	
夢想百韻一巻	貞德	萬治二年
俳諧武玉川一巻	紀逸	
夢中行脚記一巻		
夢中問答	何狂	享保六年
六浦笠	闇齋	元文二年
六ッ花	以之	享保十一年
六指	紫紅坊拍舟	明和三年
無分別一巻	西六	延寳八年

俳諧無門關	蓼太	寶暦十二年
無名集	玄化	天明五年
村雀	不角	寬延三年
宅陰百韻一卷	季吟作	延寶七年
名家畫帳子	龍守	嘉永四年
名家頭題集	組卿	嘉永二年
俳諧明鏡一卷	立圃作	延寶三年
名月集一卷	浪化	元祿六年
明骨集	由平	延寶六年
明心集		寶暦二年
名所小鏡	蝶夢	安永八年
名所撰句俳諧漫畫一卷	爲永春水著	
俳諧名所附合二卷	重俊作	寬文三年
名所方角集	素外	安永四年
名所百句一卷	宗祇	
名所發句集四卷		寬政九年
名所發句集初編	護物撰	天保十四年
二編、三編　嘉永三年		
俳諧名數一卷		享和三年
俳諧名知折二卷	素外撰	安永十年
俳諧名物鑑	果然	明和八年
俳諧名物鹿子三卷	露月	
名目抄	丈石齋宗順作	寶暦九年
明和俳諧一卷	武然等	明和二年
乳母	重頼	萬治三年
面んばこ一卷		
面々硯	調和	元祿十一年
俳諧蒙求	石齋	延寶三年
俳諧蒙求	一時軒惟中作	
俳諧蒙求	逸人	明和六年

俳諧蒙求三卷	堀樗庵著	
藻刈船		文化三年
藻汐袋	沾涼	寛保三年
毛登柏言水句集		享保二年
本たわら	一水	延享二年
もとの清水一卷	簑笠庵梨一著	
もとの水	重厚	天明七年
喪の名殘	北枝	元祿九年
物の親二卷	水莖庵葛人編	天明三年
物見車四卷	可玖	元祿二年
物見車返答	團水	元祿三年
物見塚記一卷	知足坊一瓢編	文化年間
物忘艸五卷	蝶々子作	明曆三年
紅葉合	李井	寶曆四年
門静曲一卷	松跡湖照編	
俳諧問答五卷	芳鷹編	寛政十二年
俳諧問答	月居	文化十二年
俳諧問答	文哉	嘉永三年
俳諧桃櫻二卷	宗阿	
俳諧百さへづり一卷	風竹	
桃李集	蕪村、几董	安永九年
俳諧百千鳥一卷	白應、蝶々子	
百千鳥	隨流	
俳諧百千鳥一卷	岡村陸馬著	寛政六年
もゝとせの冬	古琴	寛政四年
桃盜人一卷	柳士編	
桃ねぶり一卷	路通	元祿九年
もゝの親	束登	安永七年
桃の首途三卷	支考	享保十三年
俳諧桃の酒はやし一卷	晴朝	
桃の白實	車蓋	天明八年
俳諧桃の鳥一卷	百櫻	
桃の實一卷	兀峰	元祿六年

戀の百韻 百羽搔	蓼太	天明三年
百羽搔千句百韻是有集		文政九年
守武千句		慶安元年
俳諧晋の秋一卷	田浦	
也有翁三書一卷	横井也有	
的なし、けにのろみ、梁上君子		
野行集二卷	定鐵作	慶安三年
野鶴頌一卷		寶暦十二年
誹諧やさおは根一卷	梅尺、鱗那著	明和二年
俳諧糸切歯最論		
也哉抄一卷	無腸子著	天明七年
也足單漢和俳吟	友次作	
八千代の春一卷	桂影舍露菜編	文化十一年

やつこ俳諧一卷		
八嶋	野坡	享保十一年
屋土里塚		寛保三年
彌の助一卷	閑水作	
野梅集一卷	宗旦作	貞享四年
野坡吟草	文下	寶暦九年
やはぎ堤一卷	露川	元祿八年
野馬臺	知石	享保四年
夜半亭發句帖二卷	雁宕著	寶暦五年
夜半帖	蕪村	明和元年
藪うぐひす一卷	馬光	
藪香もの二卷	春流作	寛文十一年
藪の井	麻生	
八重ひとへ一卷	遠舟作	元祿五年

山幸　龍水　明和二年
山下水五卷　梅盛作　寛文十二年
山田俳諧二卷　利清、望一等　慶安三年
山太郎一卷　元祿五年
千代の古道批言
俳諧大和笠一卷　舊山　延寶二年
大和狐一卷　大弓作　元祿四年
大和順禮三卷　正辰作　寛文十年
山中三吟一卷
山中集一卷　涼菟作　寶永元年
破れ笠六卷
破枕集三卷　良保　寛文三年
夜話ぐるひ一卷支考、小松　元祿十七年
ゆかたやま一卷　松平曲肱作　貞享二年
ゆきあひた四卷　正木風狀撰　寶曆四年

ゆきおろし一卷 一名江戸二十歌仙　蓼太編　寶曆元年
又明和八年
雪五歌仙一卷　蓑虫庵雪芝編
雪十句二卷　寛文五年
雪白川二卷　魯丸
雪白川集二卷　曇華房白河編　享保年間
雪千句二卷
俳諧雪の梅一卷　竹犬、苔翁
雪の翁　半化坊　天明三年
雪の韈一卷
俳諧雪のかづら一卷　半場里丸編　文政四年
雪の下二卷
雪の薄二卷　眠郎編　安永六年
雪の旅一卷　藏六園龜世編　寛保二年
雪の葉一卷　一吟　元祿十四年
雪の光　百花　正德五年
雪の尾花　遊五　延享元年
雪まろげ　周德　元文二年
雪丸げ　闇更校　安永四年

雪の薄前編	桃鏡	明和五年
俳諧湯島集二巻	有佐	
夕暮集一巻	閑貫十	寶永二年
夕紅	鬮和	元祿十年
俳諧夢がたり一巻	莆道	
夢三年	桧雨	寛政十二年
俳諧夢の蹤三巻	也有編	天明五年
夢の名殘	海業	寶永二年
夢ひらき	百萬	明和四年
夢見草	體安	明暦二年
ゆめみぐさ五巻	空存	
俳諧夢物語一巻	來川、半路	
はいかいゆりの集三巻	幾曉編	寛政四年
搖松葉一巻	一草園蒐什編	寛政十二年
四五百森	示因	元祿七年
用友集三作	蝶々子作	
鷹燕集一巻	手垣愼我編	
用章筒二巻	文光堂菅蛙編	
俳諧世吉の物競	素外	寛政五年
餘花千句	沾徳	寶永二年
よざくら一巻	佛狸齋翰士編	寶永三年
俳諧夜寒の碑一巻	紀逸	
吉野山獨案内六巻	元隣作	寛文十二年
俳諧寄垣諸抄大成一巻	青木鷺水編	元祿八年
俳諧四ッのさへづり一巻	徐甫	
四鉾辻	貞佐	寛保元年

淀川 一名新増犬筑波集	貞德	寛永二十年
四人法師		延寶六年
梅翁、葎宿、佳口、元順句集		
世のため一卷	轍士作	元祿五年
俳諧世中百韻一卷	松籟庵麥阿編	元文二年
俳諧四方のむつ美一卷	璞亭哂我編	文政六年
俳諧賴政一卷		延寶八年
破邪顯正答		
より柳一卷	水音	元祿十六年
夜の錦一卷		延寶四年
夜のはしら	曉臺	天明八年
俳諧夜の花一卷	瓢水、蘭州評	寶曆八年
よるひる一卷	又十作	
來山句集		
浪花發句集		慶應元年
老山集一卷	坊芹	
俳諧老樹談一卷	李山	
蘿葉集三卷	横井也有著	明和四年
洛陽集二卷	自悦作	延寶八年
落花集五卷	以仙作	寛文十一年
閑更句集	蟠水	天明七年
嵐外發句集二卷	嵐外著	嘉永元年
俳諧嵐山集	春亭	嘉永二年
嵐雪句集	百萬編	延享三年
嵐雪撰集		元祿十五年
嵐雪俳諧集		延寶八年
嵐雪文集	蓼太	安永三年
嵐雪發句撮解	熊野莊丹述	文化三年
嵐亭句集	富屋	文化八年

里亭俳話　里亭　文化十年
俳諧流行七部集二卷　文政三年
俳諧流行發句集五卷　菅原長成編　天保五年
柳居發句集三卷　佐久間柳居著
流川集一卷　露川　元祿七年
李邊文選四卷　有李堂桃溪編　寶曆十二年
立圃句集二卷一名雀つぶて　慶安二年
吏登句集　三鴒編　天明七年
吏登撰集　享保十七年
雨吟一日千句一卷　西鶴、友雪雨吟　青木友雪編　延寶七年
俳諧雨吟集二卷　沾州
俳諧雨吟集二卷　北村季吟　萬治三年
又寛文四年

雨吟集二卷　宗因
雨吟集一卷　嵐雪、定直合作　延寶五年
雨吟百韻一卷　芭蕉、松倉　獨庵寛定編
天明六年
雨隱集一卷　曉臺舍龐鴻編　天保十四年
雨圖曲　無說　享保二年
俳諧良材集　貫水　元祿十年
雨節吟一卷　沾蘭編
涼袋編吟集　寶曆四年
南部餅祭　治天　享保元年
良保千句一卷　寛文元年
旅宿三百韻一卷
梨園　貞佐　享保十六年

留守見舞	其角	元祿九年
類柑子三卷	其角著	享保四年
類柑文集一卷	其角編	享保四年
俳諧類句辨	素外	天明元年
類句辨後編	素外	文化十一年
類船七卷	重德作	延寶五年
俳諧類題落穗集二卷	潮堂住一編	
俳諧古今類題群玉集四卷	小簑庵碓嶺編	萬延元年
類題狹蓑集四卷	小簑庵碓嶺編	天保十四年
類題發句集	蝶夢	安永三年
類題名家發句集		嘉永元年
蓼太句集二卷初編	吐月編	明和六年
二編天明五年　三編寛政五年		
蓼太吐月高點集	三駱編	安永八年
俳諧丁の琴一卷	林子	
歷代滑稽傳一卷	許六著	正德五年
俳諧歷木集	蟹守	文政四年
俳諧聯句百韻	鬼貫	安永八年
俳諧蓮花會		安永年間
蓮二吟集		寶曆五年
蓮二房斎川之送書翰一卷		
連俳合掌二卷	瑞信作	延寶四年
蕉門中興俳諧六家集十六卷	菊舍其成編	寛政八年
六花集二卷	支考	寶永二年
六歌仙一卷	鋤立作	元祿四年
六方俳諧二卷	可德作	
六百韻	淡々	享保四年
六百五十韻	信德	延寶三年
六百番俳諧發句合	季吟、任口	延寶五年
六十賀集	園女	享保八年
六部集	蝶々子	元祿十二年
俳諧六物記一卷	閑樹園菊雄編	嘉永五年
俳諧六物集一卷	紀逸	

六々庵發句集四卷	如是庵理然著	寛延二年
蘆花集四卷	似舟作	寛文五年
露月集一卷	豊島貞和編	享保九年
露川歌仙	陽川、壺中等	元祿六年
露川貴一卷	支考著	享保四年
魯竹文輯三卷	岡島隣子著	寶曆五年
王の春	巣兆	文化六年
横平樂	治天	享保二年
我が庵一卷	轍士作	元祿四年
わがいほ	傳良	寶曆十二年
俳諧若えびす一卷	青木鷺水編	元祿十五年
若鏡加蜂集一卷	空山編	文化九年
俳諧若狐二卷	川崎友直編	承應元年
徳元、立圃、玄札ノ三吟		

若狹千句一卷	一馬	元祿元年
和歌竹五卷	古唐軒由雪著	万治三年
若竹笠一卷		
俳諧若壯二卷	超波、湖十	
若葉	嵐雪 元祿八年	又元文三年
結柳	朝叟	寶永二年
俳諧わか葉一卷	芭蕉	
若葉合一卷	其角編	元祿九年
わか葉集	羨乎	享和三年
俳諧若葉の奥一卷	千秋	
吾がほとけ二卷	時節庵八鶴編	寶曆十年
我身鏡	言水	寶永四年
若水一卷	嵐雪	貞享三年
和漢田鳥集	三千風	元祿十三年
和漢俳諧集	花央	文政十二年
和漢文操七卷	支考撰	享保十二年
俳諧和歌連歌二卷	梛居	
俳諧膓歌仙一卷	森田抱齋編	嘉永七年

和句解五卷		
俳諧和久加志波三卷		
籆纑輪（ワクカセワ）六卷	方竟叟千梅著	寶曆三年
和訓三體詩三卷	許六著	正德四年
俳諧或問	石川積翠著	
俳諧或問珍一卷	吏登	享保十七年
忘貝	露月	元祿十五年
忘水一卷	董子編	
わたし船	旨恕	延寶七年
渡し舟一卷	順水作	元祿四年
わだち一卷	轍士作	元祿五年
わたまし一卷	風山作	元祿五年
わたまし抄一卷	双吟堂春色編	元祿五年
渡鳥集一卷	卯七編	寶永元年
和東西一卷 一名話答在又和唐材	郭蓮社氷几編	寛政七年

俳諧和の錠	由和	明和三年
和便集	野坡	享保二年
わらづと集	騏六	文化八年
藁人形二卷	會木	寶永元年
笑ひ續け一卷	絢堂素丸編	明和八年
田舍句合 其角句合	芭蕉判	延寶八年
爲名我樂集二十卷	梧者庵卜窓編	
田舍わたゝび	風雲子	寶永四年
惟然坊句集一卷	廣瀬鳥落人著 囂庵秋擧編	文化九年
居待月二卷	麥曉舍爲溪編	
麥浪追善句集		
俳諧繪合二卷	高政作	延寶三年

繪合往聲二卷　高政作

繪歌仙一卷　川路宜麥編　文化七年

畵兄弟　竹人　享和元年

ゑくぼ　才麿　元祿四年

繪空ごと一卷　加友作

繪大名　格枝　享保四年

俳諧藝能錄一卷　鬼貫　延寶六年

繪貝皿二卷

繪俳諧一卷　牛圖編

繪屛風一卷

俳諧繪文匣　立詠　享保七年

繪本ことしの花　露月　天明七年

繪本草二卷　市月洞其龍編　寶曆七年

繪本世吉の物競三卷　谷素外編　喜多川歌麿畫

遠舟千句附一卷　遠舟作　延寶八年

小川千句一卷　貞竹作　延寶二年

俳諧小傘一卷　板春、未達合作　元祿五年

小倉の塵一卷　稻本房麿編

小倉百韻一卷　重榮作　延寶六年

をだまき一卷　竹亭作　元祿四年

苧環　潮十　延享元年

をだまき拾遺一卷　丈石

をだまき大成二卷　享保十七年

遠近集　西村長慶子編　寛文六年

俳諧男草子一卷　月院祉何丸編
男風流二卷　天乘　元祿十二年
斧の柄　乙二　文化八年　又文政六年
尾蠅集一卷　服部定淸作　萬治四年
尾張句帳二卷　不存作　慶安四年
尾張五歌仙　文化十年
尾張八百韻一卷　無能子編　萬治元年
女の童　溪屋　嘉永元年
折句式大成一卷　九花
折目高一卷　輕廬　寶永三年

俳諧書籍目錄終

浮世草子目錄

例言

一本書目は、世に稱する浮世草子の種類を蒐輯せしものなれど、未讀の書殊に多ければ、他種の混入せしものも多かるべし。

一初期に屬する浮世草子中には、或場合に好色本と區別し難きもの多數を占む、これらは別に『好色本目錄』の存するに拘はらず、本書中に收錄したり、其解題、考證等は同目錄に詳なれば參照するを便なりとす。

一書目に收錄する所凡て四百十種、仔細に精査せば尙多少增加すべきものあらむ。

一西鶴の著作中には、餘人の僞作と稱せらるゝ物間間あり、されどこゝには其著書に署名あるものは其名を記し置くに止め、妄に眞僞の批判を加へず、餘人の著書またこれに倣ふ。

明治三十九丙午歲二月　大久保葩雪識

浮世草子目錄

大久保豐編

天和二壬戌年

書目

繪入好色一代男　八　西鶴　吉田半兵衛畫

板元は大坂思案橋荒砥屋孫兵衛と、大野木市兵衛開板との二種ありといへど、孰れが原板なるやを知らず。

貞享四年江戸にて之を重刻す、畫は菱川師宣が筆なり、俗に江戸板と稱す。

貞享元甲子年

書目

好色二代男　八　西鶴

一名『諸艶大鑑』

貞享二乙丑年

書目

近年諸國咄　五　西鶴

一名『西鶴諸國ばなし』

又の名『大下馬』

貞享三丙寅年

書目

繪入好色一代女　六　西鶴　源三郎畫

西鶴唯一の傑作と稱へらる。

繪入好色五人女　五　西鶴

一名『當世女容氣』

繪入好色三代男　五　西鶴

一名『諸國三代男』

本朝二十不孝　五　松壽

一名『新因果物語』

好色諸國心中女　五
後『貞女白無垢』と改題す。

〇

西鶴が超凡雄健の筆になりし好色本は、流行其極に達し、翁が最得意の全盛期なりしに、本年遂に好色本差止めの令は當路の有司より下されぬ、好色の文字ある書名の改題されしも畢竟之が爲めなりと云ふ。

二百幾十年を經し明治の今日すらも、西鶴物を以て春書と同一視する無學の徒輩ある程なれば、其當時に於ては之を禁遏するも亦已むを得ざる手段にして、寧ろ正當の方法なりしならむ、而も怪しむべきは明治の現代尙其風習を持續することにて其眞意殆ど解すべからず、文學史や風俗史上に重大の關係ある是等の著書に對して、不潔の汚名を冠し、强て研究の道を杜絕し、二百年以前の當時と同一の待遇を夢みるに至ては、時勢を觀るの明なきものにして、また史學の何たるをも理解し得ざる蠻族と異る所なかるべし、

昔時誰やらが『西廂記』の評語中に「淫者之を目して淫書と呼び、文人之を閱して妙文を稱す」と言ひしは至言と謂つべし、されば在野の學者にして、西鶴本を目するに卑猥の淫書を以てする者あらば、予も亦た其士を目するに淫者を以て酬ゐんとす呵々。

貞享四丁卯年

書　目

武家義理物語　六　鶴永
鶴永は西鶴の別號なり。

好色破邪顯正　三　白眼居士
好色本の流行を憤慨しての作なり作者は東山の僧侶なりと云ふ。

武道傳來記　八　鶴永

好色旅日記　五

梅のかほり　五　夢遊軒追序

金銀萬能丸

本朝若風俗　八　西鶴
一名『男色大鑑』

好色一代男　四　西鶴　師宣畫

天和二年の重刻にて江戸板なり、板元は日本橋靑物町大津屋四郎兵衞。

後年之を二冊づゝに分ち、

好色倭繪の根元

日本風ぞく繪本

と名づけ師宣筆にて畫を大きく描き出板せし由なるも年代は詳ならず。

色の染衣　四　松月堂不角　鳥居淸信畫

『男色の染衣』ともいひし歟。

男色大鑑　八　西鶴

一名『本朝若風俗』

去年まで婦女子を材とせし作に失敗し筆の自由を失ひし粹法師、今年は筆を飜して衆道の妙を說き、婦女を目して眼の汚れと喝破し、一面には筆に自由の餘地あるを示し、また一方には時の有司に對して、これは什麼ぢやと揶揄し去る所、有繫に西鶴の氣風豪放にして不屈の勇あるを見るべし、本書の序文の如きは、西鶴の俤を眼前に見るの心地せらるゝなり。

懷硯　五　西鶴

元祿元戊辰年（貞享五年改元）

書目

色里三所世帶　西鶴

日本永代藏　六　同上

好色注能毒　三

好色文傳授　五　由之軒政房

後に『風流奴評判』と改題す。

一書に元祿十二年の出板とす。

好色盛衰記　五

後に『西鶴榮花ばなし』と改題す。

繪入新可笑記　五　西鵬

西鵬は卽ち西鶴なり。

元祿二己巳年

書目

本朝櫻陰比事　五　西鶴

好色床談義　六

一目玉鉾　四　西鶴

一名『西鶴囘國道之記』

元祿三庚午年

書目

好色眞實伊勢物語　三

元祿五壬申年

書目

好色年八卦　四

後『傾城三島暦』と改題す。

世間胸算用　四　西鶴

好色錦木　五

新百物語　五　俳林子

花の染分　五

元祿六癸酉年

書目

浮世榮花一代男　四　西鶴

當流風體男色千鑑　五

延享三年之を『和國小性氣質』と改題し六冊物となし出板す。

好色傳授車　三　西鶴

西鶴置土產　五　同上

○

今年秋八月十日井原西鶴歿しぬ、享年五十二歲、阪地浪華八町目寺町誓願寺に葬る、法號仙皓西鶴居士、辭世の句あり「浮世の月見過しにけり末二年」

元祿七甲戌年

書目

好色罌粟鹿子　五　水月庵

風流鎌倉土產　五

織留　六　西鶴

六冊の内前二冊を『本朝町人鑑』後の四冊を『世

の人心』といへり。

元祿八乙亥年

書目

香のかほり　三　九思軒　師宣畫歟

俗つれ〴〵　五　西鶴

元祿九丙子年

書目

好色和すれ葉那　五　如醉

古今武士鑑　五　一雪

好色小柴垣　醉狂庵

萬の文反古　五　西鶴

正德二年再板せり。

元祿十丁丑年

書目

西鶴冥途物語　五　洛下泡影

好色大福帳　五　桃のはやし

好色萬金丹　五

元祿七年三月の序文あり本年出板す。

元祿十一戊寅年

書目

好色飛鳥川　四

小夜嵐物語　十　西鶴

新色五卷書　五　西澤與志

花鳥風月　四

『好色四季咄』の改題再板なりといふ。

籠耳　五

元祿十二己卯年

書目

好色井戸車　五

後『新娵かゞみ』と改題す。

好色必傳授　五　由志軒政房
元祿元年板との說あり。
色道小鑑　五　放氣堂序

元祿十三庚辰年

書目

風流御前義經記　八　西澤與志
浮太郎冠者實名與志編とあり。
後編『風流女丹前記』元祿十五年出板す。
本書は寶永年間に再板せしといふ。

元祿十四辛巳年

書目

遊女の名よせ傾城色三味線　枕本　五　祐信風畫。
八文字屋七三味線の內。
好色百物語　五　櫻花軒
風流倭莊子　五　都の錦
好色河念佛　五　如水軒

○

八文字屋始めて『色三味線』を出だす、是八文字屋が浮世草子を出板する最初の物なり、爾後引續き安永の頃比まで七十餘年間、絕えず新作を梓行し、所謂八文字屋本の名稱を今日に傳へしは、其功偉大なりと謂つべし、蓋し八文字屋の盛んになりしは、實際の作者江島屋其磧の功勞に基くなるも、自笑にして人を觀るの明あらずんば、容易に成效せざりしならむ、幸にして作者と板元との意氣投合し、而して文壇に臨みし以上は、讀書界を風靡せしむること素より難きにあらず、殊に其磧の如き天來の妙筆を揮ふ作家ありし八文字屋の、世に持囃されしは素より當然なるのみ。

さて實際の作者たりし江島屋其磧は、八文字屋自笑との約束にもよりしならむが、其著書には最初は署名することなく、寶永六年頃より自笑の作名のみを著書に記し、次で正德四年に至り、一時自笑と確執を生じ、分離して自身江島屋の板元となり、著作を出板するに及び、初めて其磧と署名せしが、享保四年自笑との和議成りてよりは、自笑、其磧

連名にて作者の名を列記することとなしぬ、故に其磧一人の作名を記しある著書は、自笑と對抗中の著作と看て差支なきなり、自笑作と明記あるも皆他人の代作にして、自身の著作は一部もあらねど、空名にせよ後世に其名を傳へ得しは、全く文學に従事せし身の餘德なるべし。

元祿十五壬午年

書目

五ヶの津餘情男　五　都の花風
　一書に秋花堂久澄作とす異名同人歟。
風流好色十二段　六
元祿曾我物語　六　都の錦
　一名『東海道敵討』
女大名丹前能　八　西澤一風
　一名『風流女丹前』
　元祿十三年板『御前義經記』の後編なり。
好色智惠袋　五　花松軒序
遊里橋太皷　六
元祿太平記　八　都の錦
寛濶曾我　西澤與志
風流女丹前　八　西澤一風
　一名『女大名丹前能』

元祿十六癸未年

書目

士農工商男色木芽漬　六　漆屋圓齋
傾城仕送大臣　六
傾城百人一首　六
風流源氏物語　五　都の錦
好色敗毒散　五
　桐壺より帚木の卷まで。
好色大振袖　五　團水
立身大福帳　七　唯樂軒
風流夢浮橋　六　雨滴庵松林
風流今平家　六　西澤與志
　一名『町人身の手鑑』

寶永元甲申年（元祿十七年改元）

書目

風流連三味線　五　風音堂

一名「數めがね」

八文字屋の三味線類に非ず。

好色夕顔利生草　五

誰袖の海　六　由之軒政房

心中大鑑　五

寶永二乙酉年

書目

傾城連三味線　五

七三味線の內。

長者機嫌袋　六　福富言粹

寶永千歳記　五

棠大門屋敷　五　錦文流

新色三ッ巴　六

御前獨狂言　六　西鷺

風流今兼好　五　錦文流

寶永三丙戌年

書目

宇津山小蝶物語　八　森田吟夕

傾城武道櫻　五　西澤與志

御伽百物語　六　白梅園鷺水

和氣の裏甲　五　臨川亭舟月　奥村文角書

熊谷女編笠　五　錦文流

寛政九年再板す。

玉箒木　六　林義端

寶永四丁亥年

書目

大峰山上參色道懺悔男　六　善教寺猿算

和漢善惡男色比翼鳥　六　奥村政信書

近代因果物語　六　青木鷺水

達髮五人男　枕本五　西澤與志

書夜用心記　六　鳳城團粹

寶永五戊子年

書目

野傾友三味線　五　西澤與志
一名『風流友三味線』
八文字屋の三味線物に非ず。
茶傾ひぞり顔　四　西澤與志
本朝古今新堪忍記　七　白梅園鷺水　西川祐信畫
好色手柄噺　五　錦文流
關東名殘袂　五　政信風畫
風流三國志　五　西澤與志

寶永六己丑年

書目

傾城伽羅三味線　五　西澤朝義
一說に五年板とす。
八文字屋七三味線に之を加へ八三味線と呼べり。
紅白源氏物語　五　梅翁
御前二代曾我　六　西澤與志
日本桃陰比事　七
今樣二十四孝　六　月尋堂
月尋堂の作中第一の名作と呼ばる。
兄弟善惡車　六　月尋堂
傾城王子酒　五

寶永七庚寅年

書目

傾城傳受紙子　枕本五　八文字自笑
八棟大島臺　六　道春
後年本書を抄出して『歡樂、時勝負』を出板す。
野白內證鏡　枕本五　八文字自笑
序文に始めて「作者八文字自笑」と署名す。

正德元辛卯年（寶永八年改元）

書目

色道大全傾城禁短氣　枕本五　自笑
其磧の傑作なり。
文化十二年再板す。
後編『傾城情之手枕』寛保四年出板。
二編及び三編明和二年出板。
好色入子枕　五　柳枝

正德二壬辰年

書目

當世智惠鑑　六　徃悔子
武道三國志　八
萬の文反古　五　西鶴
元祿九年の再板なり。

正德三癸巳年

書目

本朝女二十四貞　四
百姓盛衰記　四　自笑

今川一睡記　五
西海太平記　五
當世信玄記　五
今川當世狀　六
本朝智惠鑑　五　團粹和南
鎌倉武家鑑　六
近世長者鑑　五　團粹
一名『新永代藏』
日本新永代藏　五　團粹
一名『近世長者鑑』

正德四甲午年

書目

世間自慢顏　五　增舍大梁 牛井金陵
都ひながた　三
國家諸士鑑　二　雲雨散人
敷疊百八十疊　三
『都ひながた』の上卷なりと云ふ。

正徳五乙未年

書目

丹波太郎物語　三　其磧
世間子息氣質　五　同上
氣質物の初作なり。
野傾旅葛籠　五　其磧
風流誹平家　枕本五　自笑
義經風流鑑　枕本五　同上
義貞勳功記
新小夜嵐　三

○

其磧、自笑との衝突は昨春に始まり、其磧は其子江島屋市郎左衞門の名を以て書肆の板元となり、其磧作と署名して『役者評判記』を出板し、從前八文字自笑の作名ある著書は、悉く其磧の作なる旨を發表し、自笑も亦た自家の評判記に其然らざる旨を杭爭せり、然れど草子物を出板するの暇はなかりしにや、去歳に其作は見受けざりしが、今春は雙方共に草子を出板し茲に競爭の端を開きぬ。其磧の才筆に賴りて僥倖にも虚名を博せし自笑の狼狽は大方ならず、遂に無名の作者を雇聘して其磧に對抗し、草子の著作は出板なせど、到底其磧の筆に及ぶべくもあらず、作物に於ては終始受太刀なるも、たゞ賴む所は數年賣込來りし八文字屋てふ一個の看板あるのみ。

其磧は之に反し、縱橫の才筆を揮ひ、殊には大敵に杭する大事の場合とて、著作に一層の注意を拂ひ、作品に於ては遙に自笑を壓倒し得たるも、弱點といふべきは其店の新規なるにありて、肝心の賣行き面白からず、之には其磧も閉口の體らしく、世間の讀者の盲目多きを慨歎しながらも、尙ほ飽くまで敵抗すべく其著作を年々出板し居りぬ、

享保元丙申年(正徳六年改元)

書目

分里艶行脚　枕本五　自笑
庭訓染句車　五　松代柳枝
今源氏空船　五

西鶴傳授車　五　天狗堂轉達
當世名代男　五　其磧
世間娘形氣　五　同上
秋夜長物語
　原板は元和頃にて其四版なりといふ。

享保二丁酉年

書目

國姓爺氏朝太平記　六　其磧
忠義太平記大全　十二　吉川盛信畫
今和藤内唐土船　三　閑樂子
野傾髪透油　五　自笑
傾城野群談　枕本五　同上
野傾咲分色孖　枕本五　同上

享保三戊戌年

書目

色縮緬百人御家　五　西澤一風
　一名『後室色縮緬』
猿源氏色芝居　六　鱗長
役者不斷容氣　五　其磧
亂脛三本鎗　六
後室色縮緬　五　一風
　一名『色縮緬百人後家』

享保四己亥年

書目

傾城竈昭君　枕本五　自笑 其磧
艶道通鑑　五　増穗殘口

○

正德四年以來確執反目せし自笑と其磧とは客歲和睦し、今春より二人連名の草子を出すこととなりたり。前に記せし如く板元書肆たる自笑は其磧に去られて其作者に困じ、其作者其磧は板元の書肆となりて賣行に困じ、作家、板元の位地相轉倒して、始て互に其不利を悟り、忽ち和約を結びしは、大に趣味ある抗爭なりしなり。其平和克復の宣言書

とも云ふべき本年春出板の評判記「役者金化粧」に、二人連名にての序文中に「傾城買のくせつも我思ふ者とならではせぬ物ぞかし」と其磧の苦言はもつとも可笑し。

享保五庚子年

書目

風流宇治頼政　五　自笑其磧

役者色仕組　五　其磧自笑

享保六辛丑年

書目

雛鶴源氏物語　六　水月堂梅翁

日本契情始　五　自笑其磧

享保七壬寅年

書目

手代袖算盤　三　自笑

風流七小町　五　其磧

享保八癸卯年

書目

櫻曾我女時宗　五　其磧

享保九甲辰年

書目

互先碁盤忠信　五　其磧自笑

享保十一丙午年

書目

婚禮名護屋吾妻日記　五　舞閣

出世握虎昔語　五　自笑其磧

享保十二丁未年

書目

女將門七人化粧	五	自笑 其磧
大內裏大友眞鳥	五	其磧 自笑
竹齋行脚袋 一名『新竹齋』	五	
略平家都遷	五	其磧

享保十三戊申年

書目

北條時賴開分二女櫻	五	自笑 其磧
面影曾我傾城盛衰記	六	松風堂
本朝會稽山	五	自笑 其磧
記錄曾我女黑船	五	同上

享保十四己酉年

書目

繪本茶話鑑	三	其磧　西川祐信畫
熊坂今物語	五	西澤一風

享保十五庚戌年

書目

渡世勘辨世間手代氣質	五	其磧
善惡身持扇	五	同上

享保十六辛亥年

書目

風流諱軍談	五	祐佐
風流東大全	五	其磧
奧州軍記	五	同上

○

此年五月西澤一風歿す、享年六十七、大坂下寺町大蓮寺に葬る、法號常寒貞寂禪定門、辭世の句あり「散りゆくや風に常磐の木の葉雨」。

一風は山本氏、名は朝義、氏次郎といひ、通稱を正本屋九右衞門と呼び大坂の書肆なり、淨瑠璃の作

者となり西澤一風を作名とす、又朝義、貞志等の號にて草子を著はせり、落日庵西吟、錦文流と共に享保の文者三傑と稱せられし名家なり。

享保十七壬子年

書目

名護屋吾妻日記　五　舞閣

本年再版せし歟

傾城歌三味線　枕本五　自笑其磧

七三味線の內。

楠軍法鎧櫻　五　其磧

曦太平記　五　同上

享保十八癸丑年

書目

那智御山手管瀧　五　自笑其磧

鬼一法眼虎之巻　七　其磧

立身招福商人軍配團　五　同上　川島信清畫

傾城女三味線　枕本五　其磧

七三味線の內。

風俗遊仙窟　四　克齋主人

享保十九甲寅年

書目

梅若丸一代記　五　其磧自笑

都鳥妻戀笛　五　自笑其磧

享保二十乙卯年

書目

愛護初冠女筆始　五　其磧自笑

風流西海硯　枕本五　自笑其磧

風流軍配團　五　其磧

風流連理櫁　五　同上

咲分五人娘　五　同上

元文元丙辰年（享保二十一年改元）

書目

世帯佛法渡世身持談義　五　其磧

諸譯名女たば粉　五　華亭

武道近江八景　五　其磧

浮世親仁氣質　五　其磧自笑

後編『世間長者形氣』其笑、瑞笑作にて寶暦四年出板す。

○

此歳夏六月江島屋其磧歿す、享年七十歳。是よりして、八文字屋本には、其磧の遺作を除くの外、また稀有の才筆を弄するの作を見る可らざるに至れり、唯短期間ながらも、南嶺子が筆のみは、多少八文字屋に援を與へし觀あれど、それすら最早往日の盛んなるに及ばずして止みぬ。

元文二丁巳年

書目

渡世傳授車　五　都塵舍

兼好一代記　五　其磧自笑

高砂大島臺　五　自笑其磧

元文三戊午年

書目

御伽名題紙衣　五　其磧

善惡兩面常盤鐙　五　自笑

其磧置土產　五　其磧

元文四己未年

書目

丹波與作無間鐘　五　自笑

武遊双級巴　五　同上

多田南嶺の代作。

元文五庚申年

書目

忠盛祇園櫻　五　自笑 其笑
龍都俵系圖　五　同上
夕霧有馬松　五　同上

寛保元辛酉年（元文六年改元）

書目

宇治川 藤戸海 魁對盃　五　自笑 其笑
善光倭丹前　五　同上

寛保二壬戌年

書目

夫乞獅子 東なまり 風流返魂香　五　田中某
名玉女舞鶴　五　自笑 其笑

寛保三癸亥年

書目

鎌倉諸藝袖日記　五　自笑 其笑

多田南嶺の代作。
後編『教訓私儘育』寛延二年出板す。
女非人綴錦　五　自笑 其笑
雷神不動櫻　五　同上

延享元甲子年（寛保四年改元）

書目

其磧諸國物語　五　其磧
傾城情の手枕　五　同上
『傾城禁短氣』の後編なり。
娘楠 契情太平記　五　自笑 其笑

延享二乙丑年

書目

阿漕浦三巴　五　自笑 其笑
今昔出世扇　五　同上

○

十一月八文字自笑歿す、享年八十餘、京二條寺町本

覺寺に葬る。

延享三丙寅年

書目

勸進能舞臺櫻　五　自笑 其笑

和國小性形氣　六　九二軒鱗長

元祿六年板『男色千鑑』の外題替にて原板五冊物なりしを六冊物とし板行せり。

曾根崎情鵲　五　自笑 其笑

延享四丁卯年

書目

自笑樂日記　五　自笑 其笑

彩色歌相撲　五　其笑 瑞笑

寛延元戊辰年（延享五年改元）

書目

昔女化粧櫻　五　其笑 瑞笑

盛久側柏葉　五

寛延二己巳年

書目

義貞艶軍配　五　其笑 瑞笑

花楓劍本地　五　同上

寛延三庚午年

書目

教訓私儘育　五　其笑 瑞笑

寛保三年板『鎌倉諸藝袖日記』の後編なり。

○

九月十二日多田南嶺歿す、享年五十三。

寶暦元辛未年（寛延四年改元）

書目

優源平歌囊　五　其笑 瑞笑

道成寺岐柳　五　同上

寶曆二壬申年

書目

世間母親容氣　五　梅嶺翁

多田南嶺の遺稿なり。

教訓雜長持　五　青柳山人

寶曆三癸酉年

書目

檀浦女見臺　五　其笑 瑞笑

歲德五葉松　五　自笑

寶曆四甲戌年

書目

世間御旗本形氣　五　升瓢

諸國珍話彥禪初庚申　五　硯田舍紀逸

赤染衞門綾華　五　一瓢軒

世間長者形氣　五　其笑 瑞笑

元文元年板『浮世親仁形氣』の後編なり。

風流川中島　五　其笑 瑞笑

風流髪花形　五　同上

無而七癖　三　車尋 梓遊

寶曆五乙亥年

書目

地獄樂日記　五　自笑

榮花金夢合　五　其磧

寶曆六丙子年

書目

中將姬誓絲遊　五　其笑

御伽太平記　五　其笑 瑞笑

寶暦七丁丑年

書目

謠曲百萬車　五　十歩齋一口

花色紙襲詞　五　其笑 瑞笑

寶暦十戊寅年

書目

陽炎日高川　五　自笑 李秀

寶暦十庚辰年

書目

今昔九重櫻　五　李秀 自笑

寶暦十一辛巳年

書目

歌行脚懐硯　五　自笑 白露

寶暦十二壬午年

書目

柿本人麿誕生記　五　自笑

畊千里新語　五　松木主膳　雪鼎畫

阿釋内證噺　三

此書絶板せられしといふ。

寶暦十三癸未年

書目

風流庭訓往來　五　自笑

風流菊水卷　五　其樂齋

明和元甲申年（寶暦十四年改元）

書目

今昔諸國咄　五　自樂

明和二乙酉年

書目

後編古實今物語　五　淺凉井

前編刊行の年詳ならず。

傾城禁短氣　二編三編

大傳馬町鶴鱗堂の開板なり。

明和三丙戌年

書目

諸道聽耳世間猿　五　和譯太郎

世間妾形氣　四　同上

和譯太郎は卽ち上田秋成なり。

契情𢌞反古　四

明和五戊子年

書目

世間學者氣質　五　無跡散人

明和六己丑年

書目

略緣起出家形氣　五　自笑

一名「法談出家氣質」

一角仙人四季櫻　五　福隅軒蛙井

當世法談出家氣質　五　自笑

一名「略緣起出家形氣」

明和七庚寅年

書目

當世銀持氣質　五　永井堂龜友

風流茶人氣質　五　龜友

孝行娘袖日記　五　同上

倭織錦船幕　五

明和八辛卯年

書目

世間化物氣質　五　增谷大梁 牛井金陵

世間侍婢氣質　五　蛙文臺
當世傾城氣質　五　增谷大梁
傾城戰國策　五　大樂子
風流酒吸龜　五　龜友

安永元壬辰年（明和九年改元）

書目

赤烏帽子都氣質　五　龜友
武道眞砂實記　五　月尋堂
遺稿若しくは再板物なるべし。
福德過報噺　五　龜友
女武者修行　五　萩坊奧路
遺放三番續　五　自笑

安永二癸巳年

書目

三千世界色修行　五
小兒養育氣質　五　龜友
世間姑氣質　五　龜友
榮花世繼男　五
世間用心記　五　月尋堂
遺稿若しくは再板物なるべし。

安永三甲午年

書目

町家繁榮世間旦那氣質　五　龜友
笑談醫者氣質　五　同上
本朝墓物語　五　墨褊散人

安永四乙未年

書目

珍術罌粟散國　五　其鳳

安永五丙申年

書目

安永六丁酉年　書目

世間仲人氣質　五　鈍友
浮世一分五厘　自笑
當世芝居氣質　四　半井金陵
立身銀町蔓卷　四　鈍友

安永七戊戌年　書目

月華通鑑　五　其鳳

安永八己亥年　書目

實話東雲鶏　五

天明元辛丑年（安永十年改元）　書目

當世宗匠氣質　五　其鳳

天明二壬寅年　書目

徒然粹が川　五　艶好法師
太平記秘訣　五

天明三癸卯年　書目

當世風俗諸藝獨自慢　五

天明五乙巳年　書目

粹宇瑠璃　五　盧橘庵

天明八戊申年　書目

梅若丸一代記　五
再板なるべし。

寛政三辛亥年　書目

坂田金平太平記　八

寛政四壬子年　書目

星兜鎌倉山　二

寛政八丙辰年　書目

諸國武道容氣　四

裸百貫　五　粹川子

寛政九丁巳年　書目

熊谷女編笠　五　錦文流
寶永三年の再板なり。

文化十二乙亥年　書目

傾城禁短氣　六　自笑
正徳元年の再板なり。

年次不明　書目

忠義武道播磨石　五
元祿末年板

風流吉日鎧曾我　八　鷺水
寶永板

傾城二挺三味線　五
七三味線の内
頼朝三代鎌倉記　五
富士淺間裾野櫻　五
三浦大助節分壽　五
安倍晴明白狐玉　五　其磧自笑
當流曾我高名松　五
右大將鎌倉實記　五
近世忠義諸士興廢記　八　九二軒鱗長
新武道傳來記
元祿板
武道張合大鑑　五　團水
一名『おとこだて』
寶永板
風流曲三味線　五
七三味線の内。
寶永板
風流鑑三味線　五
七三味線の内。
野澤名所燒蛤　五
一名『名物燒蛤』
歡樂一時勝負　三　岸松堂貫玉
明和七年『八棟大島臺』の抄錄物なり。
女曾我兄弟鏡　五
好色一代曾我
風流御伽曾我　五
風流釆女物語　五
男女伊勢風流　枕本五
大系圖蝦夷噺　五
小野篁戀釣船　五
物部守屋錦輦　五
十二小町曦裳　五
本朝藤陰比事　七
萬福富貴自在　五
色情あひ雛形　五
魂膽色遊懷男　五　西川祐信畫
吉原一言艶談　四
和漢遊女容氣　五
寛濶役者氣質　五　其磧
風俗俳人氣質　五　龜友

文武君ヶ代硯石　六　石別子
武道繼穗梅　五　石川流宣　自畫
元祿板
衆道戀慕櫻　三　西澤一風
寶永板
野傾百物語　五　西澤與志
寶永板
男傾城みゝ枕　五　西澤與志
寶永板
おとこだて　五　團水
一名『武道張合大鑑』
寶永板
商人家職訓　五　其磧
享保板
義經倭軍談　五　其磧
享保板
花實義經記　五　其磧
享保板
相合烏帽子　五
一名『安倍晴明記』

傾城三島暦　三
元祿五年『好色年八卦』の改題なり。
安倍晴明記　六
內
一代記　三卷
天文卷　一卷
人相卷　一卷
日取卷　一卷
南木莠日記　五
楠三代壯士　五
百合若錦島　五　其笑瑞笑
賴信琉軍記　五
賴政現在鵺　五
執盛源平桃　五
於國歌舞妓　五
雲州松江鱸　三
傾城播磨石　五
契情蓬萊山　五　自笑李秀
廻國一夜宿　六
商人世帶藥　五

子孫大黒柱　六　月尋堂
長生伏木隱　五
當世誰身上　五　自笑
眞實曲輪錦　五
愛敬昔色好　枕本六
好色優天狗　五　桃隣紫石
潤色榮花娘　五
風流東海硯　枕本五
逆澤瀉鎧鑑　五
荊萱二面鏡　五
當世南面鏡　五　落月堂操巵
忠孝壽門松　五
世間義理櫻　五
怪談御伽櫻　五　都塵舍雲峰
弓張月朧櫻　五
薄雪音羽瀧　五
花競淸水詣　五
諸分床軍談　五　川島信淸畫
丹前艶男　青木鷺水
寶永板

名物焼蛤　五
一名『野澤名所焼蛤』
家內幸歳　五　隱士元隣
續小夜嵐　六
亂晴天狗　三　風來山人
男色通鑑　三
風流東鑑　五
風流騎軍　五
御伽平家　五
夫婦氣質
一夜船　五　闇水
寶永板
正月揃　六　白眼居士
寶永板

後に闇水作として入木し出板せしとのことなるが此白眼居士は東山の僧にして闇水とは別人なりといふ。

浮世草子目錄終

好色本目錄

小引

柳亭種彥の博覽多識なる、世既に定評あり、其古書に接するや、最も深切叮嚀、熱心に解題考證し、時に評語を附するを例とす、此『好色本目錄』の如き、蓋し其一種なるも、未だ梓に上らず、寫本として今日に傳へられしなり、其記述する所、もとより自己の備忘錄として手記せしものに過ぎざれど、其考證の正確周密に、且つ着眼の廣濶精鋭なる點とに就ては、後の讀書家殊に考古家を稗益すること頗る大なりとす。然るに文華の旺盛を唱へ、遺玉の拾集を期する明治の今日、未だに公刊せられざりしは其故何ぞや。

由來好色の文字は、學者、君子の公然之を筆にするを忌むの弊あり、之れ一應理無きに非ざるも、而も時代に新古の差あり、又た其著書に良否の別あり、一概に之を非難し排去するは、文事に不忠なるのみならず、時に研究の途を杜塞するの虞あり、是等の弊をして盛んならしめんか、德川風俗史の大部分、特に下層若くは社會裡面の風俗史は、書冊の散佚と共に研究の途を失ふに至るべし、故に今日之が保存講究の策を劃するは、當に學者の本分なるべし、然るに、徒らに好色の文字に拘泥し、陽に之を遠くるの傾向あるは、大に慨歎すべきの事ならずや。

今種彥の記述する所を視るに、是等書冊の解題考證を試み、決して輕々に看過讀了し去らざる痕あるを感ず、殊に考古の資料を是等の書中に求むる如きは、全く讀書の趣味に富めるものといふべく、又其考證に就ても『連理松』の如き、其文中に「正月七日の巳の日云々」とあるより、丙は元祿五年または八年なれば、其頃の作なるべしと考證せし類の鑒識は、後世に一種の範を貽せしものにして、また種彥傳の一部を補する所あるなり。

明治三十九丙午歲春三月

大久保葩雪識

好色本目錄

例言

一此『好色本目錄』は、天保年間柳亭種彥の手記する所にして、寫本の儘に傳存せられたり。

一原本としては橫尾文行堂の藏本を以て之に充てたり、同本の奥書に據れば、松雲堂鹿田氏書入本を得て書入れ、中川得樓氏藏本を以て校すとあり。

一魯魚の誤りは知り得る限り之を訂正し、又文字の配列を一定する爲め、順序を變更し、若しくは假字を眞字に改め、句點を施せしは、見易からむを主とせしが爲めなり。

一本書錄する所の好色[illegible]百二十種、内一種は松雲堂の補する所なり。

一松雲堂の書入諠に予が二三の私註は（補註）として其條下に收錄したり。

葩　雪　誌

好色本目錄

寶永元年まで印本のみなり、書巻寫本の類は載せず。

柳亭種彦翁手記

秋夜長物語

『群書類從』三百十一に載せて、誰々も知る書なれば委しうはいはず、是男色本の初めなるべし、『庭訓往來』と同作といひ傳ふ、其是非は知らず、古書なることは論なし、さて此書四版あり。

活版本　時代不知、元和の頃歟。

古印本　寛永十九年

繪入本　年號不載、畫風を以て考ふるに萬治、寛文の頃なるべし。

繪入新板　正德六年

『類從』に入れられしは、此寛永本にて正しからざる本なり、穢土をさいどゝ誤るの類最多し、はじめの三本はさまで異同なし、正德本は大に異なるところあり、其奥書は「古來の板行ところ〴〵ちがひある故に本書のうつしを以て改めはべる」云々とあり、實に古寫本を得て刊行なしゝならんと思はるゝことあり、予も天正前の古寫本を藏す、此寫本と正德本にのみとうろうとあり、はじめの三本はてうちんとあり、後人の書改めしなるべし。

鳥部山物語

松帆浦物語

右二書とも男色なり、『類從』本同卷に載せたり、『松帆浦物語』の古印本は、正保、慶安の頃なるべし、其書の奥書に、兼載在判とあれども、恐らくは僞書、さまで古きものとは見えず。

花の緣物語　二冊　作者器之子　寛文六年

『鳥部山物語』の男色を女色に引直して作りし書なり、其書ざま草子物に似て好色本ともいひがたし、故に引下げて茲に記す。

『一本菊時雨の緣』

『はもちの中將美人くらべ』

是等の書は、好色本に似たれど、是は冊子物ま

た棚倚本ともいひて書振り違へり、故に冊子もの、目録に載せ、其内にても『うす雪物語』『うらみのすけ』の二書は、まさしく好色本の趣きあり、故に此末に載せたり。

古今若衆　一冊　刻梓年號なし

男色の事を古今の序にならひて作れり、巻中に天正の年號あり『我衣』といふ随筆の追加に、此文を載せて、細川幽齋の作と記したり、さもあらむ歟、末に載せたる歌は、雄長老狂歌百首なり、後人彼と是と取合せて刻梓せしものなるべし。

田夫物語　繪入一冊　刻梓年號なし

男色と女色の論なり、寛永年間の梓行なるべしと思はるゝことあり、承應元年より前の書なり。

うらみのすけ　繪入二冊

葛の恨之助といふもの清水へ詣て、雪の前といふ女を見染ることを書きたり、後世の好色本に似たれば好色の部に加ふ、巻中に慶長九年の年號あり、北野へ行て國の歌舞妓を見むといふことも見えたれば、古き作なるべし、此書わくのある本とわくのなき本と二種あり、わくのなき本は原板なるべけれど、年號のある本を未見、わくのある本は古板の書を其儘用ゐて、筆耕はかり書改めて重彫せしものなり、明暦二丙申閏四月吉日高橋清兵衛開板。

明暦板は古板よりすこし大形の本なり、古板の畫を用ゐしゆゑ、畫のところの枠は二重にあり。

〔補注〕松雲堂云、近時入手の本左の年號あり、明暦本の後重彫と見ゆ。

寛文四甲辰年三月吉日　山本九右衛門板

わく入れて繪も重彫ならん。

附曰、今は此書知るもの稀なれど、昔は行はれしとおぼし、其證左に擧ぐ、

『俳諧沙金袋』　西武撰　明暦三年

葛の葉やうらみのすけが下重ね　正伯

『俳諧枯尾花』　其角撰　元祿七年

附合の句

はら〳〵と恨之助をとりさかし　風國

『風流色芝居』　元文三年求之とあり原の年號知れず、

むかし女のしつぼくなることを前置きに、『勞さ

ひの下地も病いたしぬれば、此の氣をはらさんために、恨之助、大正ざうし、もの草太郎、鉢かつぎ、やまと言葉文章の節にして、ちわぶみの手本にうす雪ものがたり云々」などいふこと見えたり。

友人柳庭に此書を貸したる時、考を書ておこせり。

信充按、此冊子の首に、慶長九年夏の末とあれども、九年に書きしものにはあらず、十四年の後に書きしものなり、其證據は、雪の前二歳の時秀次が事ありて、雪の前の父木村常陸も亡びし由記し、十六歳にて雪の前死せしといふ、秀次が事は文祿四年秋の事なり、其時二歳なりといへば、十六歳は慶長十四年なり、また服部庄司の後家の年を考ふるに、自殺せしは三十九にて、雪の前七つの時に十九年連添ひたる夫と別れたりといふ、また十六歳より相馴れしといふを合せ考ふれば元龜二年の生れなり、元龜二年より三十九は慶長十四年なり、之によれば此草子の首に慶長九年の字は誤り歟、但しわざと年を錯誤せしにや、實は慶長十四年より後ちになりしこと論なかるべし。

柳亭曰また此後一板を見る奥書

寛文甲辰年十二月九日　山本九右衛門

是れは壽も筆耕も新たになして刻したるものなり。

以上三板

薄雪物語　繪入二冊　寛文九年印本

是れもある男清水へ詣で、薄雪といふを見染め、遂に本意はとげたれども、かの薄雪身まかりければ、男は髪をおろし、れんしやう法師と名乗り、高野の山に入る事を記して、粗ぼ『恨之助』が物語に似たり、若し慶長、元和の頃實に斯かる事ありしを、夫も是も名をかりて作り物語となしたる歟。さて此書も冊子物の中へ加ふべしと思ひしが、此書多板ありてかぞへつくしがたし、おほしきものはゑどり本なり、ゑどり本とは墨にて摺りたる上を、丹、綠、靑、藍の類を筆にて彩色したるをいふ。

奥書　寛永九年壬申十二月吉日　中野氏道也梓

寛文の年號あるものあり、また小本あり。

『新薄雪物語』後人の作なり、淨瑠璃本にも同名あり。

〔補註〕松雲堂云
延寶八庚申暦彌生
右の奥書本も見たり。
〔菴曰、右は『薄雪物語』の奥書本にて、『新薄雪物語』には非ず、念の爲めに附記す。

若衆物語

或曰『若衆短歌』
此冊子の原板未見、予藏する寫本に寬文八年とあり、原板の年號歟、寫せし時の年號歟未だ知らず。後年鱗形屋再刻にて、『若衆物語』『西明寺百首』といふものを合本して出だせり。『辨疑書目錄』及び鱗形屋本に此『若衆物語』を宗祇作と記せり。
柳亭按ずるに、是慶長、文祿頃の作にて、宗祇が名をかりし歟、好事の人の洒落ならむ歟。『群書類從』三百十一に、『兒敎訓』として入れしは、蜀山人の藏書にて、彼鱗形屋の再刻本にて、所々闕けたる所ありて好本ならず、はかけにてとあるを、ほうけにてと誤る、其外鱗形屋にたがふこと多し。

柳亭再按に、此冊子『犬短歌』といひし物なるべし、『犬つれ〴〵』承應三年印本に「犬たんかと云ふものあり、其はじめに、先第一にかの□（ママ）そのたしなみがきらひにて人にはすねていふりにてといひ云々」とあり、此短歌にてしかいふことのあればなり『犬たんか』といふを思へば、是より先の『兒の敎訓』の短歌ありて、それが宗祇の作なりしも、其書世に絶えて、終に『犬短歌』に宗祇の名を負はせしものなるべし。『子孫鑑』寬文十二年寒川正親作に曰く「十一二三四五六七よりの心もち大事なり、まづ童子敎を讀ませ、因果の道理を知らすべし、宗祇法師の短歌を見べし、また今川壁書を得とくすべし云々」こゝに宗祇法師の短歌といへる物、彼の『犬たんか』なるべし、されば宗祇の作と僞りしは、承應の後より寬文の前なるべし。『宗祇小鏡』予が藏する古寫本にかくの如し、是鱗形屋が合刻したる短歌『最明寺百首』と同本なり、例の僞書なること論なし、うちに守武が『世の中百首』の歌一首あり、これ大永の詠なるべし、後人の仕業なる證とすべし。

これは兒の教訓の歌なれども、男色の行はれたる故に詠じたるなるべし、故に此書目錄に加ふ。

附曰、今より二百年前に斯かる冊子行はれしと覺しく、予が藏書に『草短歌』といふ書一冊あり。慶元頃の古寫本にて、女子への教訓の歌[illegible]たる　近年江戸湯島の邊に住める人、寬文年間の古寫本『宗祇短歌』といふ物を彫して好事の人へおくれり、予もそれを得て合せ見るに、異同はあれども全く此『草たん歌』と同本なり然れば是も『宗祇短歌』といひし物なるべし。再び考ふるに『草短歌』を假字にて書きたる本を、後人きの落字と思ひて斯く呼び誤り、遂に『犬短歌』にまで宗祇の名を負はせたるもの歟、予が藏書には古き外題の儘にて『草短歌』とあり。

按ずるに、草は下書きといふものにて、ざつとしたるといふ程のことなるべし、源氏卷の名と香の圖のみを記したる古き冊子に、『草源氏』と題したるあり、今いふ草冊子の草の字と同じく一つなるべし、此『草短歌』は女子の教訓にて、此目次へ加ふべき書にあらず、若しこれが實に宗祇の作にて、是に傚ひて少年の敎を後人の作り設け、『犬たんか』と名附けしも知るべからず。

修身演義　一冊

一名『人間樂事』

春□刻本のはじめなるべし。

卷の初は、ぼう內祕傳、美女良法、次に□書を載する、之は華本の翻刻なり、また次に活字板平假名にて『眞蘇妙論』及び藥法を附す。

予が見たる本は、白うすくれなゐ薄はなだのたぐひ、色紙へきらをひきたるに摺りたるにて、光悅本の謠本に似たり。

心友記　半紙本二冊

奧書に、寬永二十年癸未仲秋吉辰

男色の事を書ける物なり、『書目錄』に『心友記』といふ書見えず、例の外題直し歟未考。

柱(本の小口なり)に若道とあり、天和元年の『書目』に、『若道物語』二冊八分とあるは是れ歟。

仁世物語　繪入二冊

『伊勢物語』に傚ひて書けるものなり『書目錄』に烏丸光廣卿の作とす、此書も二板あり、年號のあ

る本未見。

犬つれ〴〵　繪入二冊　承應二年印本

男色の事を書きたるものなり、此書の外に「犬つれ〴〵」といふ和文めきたる隨筆あり、此書中に引書に「美人婦」といふ書あり、是も男色の事を書けるもの歟、未見。

馬場の書の「美人草」にはあるべからず。

「補注」松雲堂云、此「美人草」此頃京都にて一見したり、繪入の冊子なり。

まだれかけ　繪入半本六冊

此書は井江の坊が由來、茶道の始め、淨瑠璃の起りの事などありて、五の卷まで好色本にあらず、ただ六の卷に歌舞伎野郎の事ある故に、元祿の「書目錄」に好色本のうちへ加へたり、年號いと紛らはしき故左に錄す。

寛文三年洛陽の隱士江流の序あり。

六の卷の末に承應二年梅條軒

寛文五年　五條寺町　中野太郎左衛門板行

按ずるに、慶安二年に四の卷まで編りしか、「まだれかけ」と名づけたるは、古人の涎をなむる意にて、好色にかゝはりし事にはあらずといふ事江流の序にあり、さて五之卷まで稿成りて後、承應元年若衆歌舞伎法度になり、少年の前髪をおとされたり、次の年に夫々の事を、六の卷に書き附けたりしなり、作はさながらをかしき書なり、慶安二年四冊まで書きたるなり、承應二年六之卷書、次「——」寛文三年序を書き、同五年に印行したるなるべし。

錦木　繪入　大本五冊

年號のある本未見、寛文年間なるべし、戀のあづくしなれども、古歌を引きしものにはあらず、世話詞などありて、考ふべきこと所どころ見えたり、「書目錄」に淺井了意作とあり、「江戸名所記」「武藏あぶみ」等の作者なり、「御伽ほうこ」を作りし了意とは同名異人なり。

ねごと草　繪入　二冊

卷尾　寛文二年寅霜月吉日

「薄雪」「恨之助」の類の冊子にて、遠江の國白須賀に住む松風といふ女を、與之助といふ男戀わたり、きんといふを具して下だり、松風の下女を媒介と

して本意を遂ぐる物語なり、澤庵の詩歌を引きたれば、さまで古き作にはあらず。

若衆伽羅枕　　二冊　　延寶六年印行

男色の□書なり、頭書に詞ありて香具若衆の□など見えたり、畫風は菱川に似たり。

枕ものぐるひ

闕本にて寫年時代知れず、是も菱川の畫風に似たり。

都風俗鑑　　四冊　　延寶九年

一名『都色欲大全』

京都の人の作なり、序跋ともに名を匿せば何人の作なりといふことを知らず都の女風俗を書きたる書なり。

浪花鉦　　六冊

一名『諸分店風』

刻梓の年號ある本未見ず、延寶□年寫本『色道大鑑』の引書に見えたれば、當時の書なるべし。

大阪新町の事を書きたるものなり、西鶴作とあるは後人の筆入れし物なれば、これは信じ難し、されども實に西鶴歟猶考ふべし。

或人曰く、予が藏書『なには鉦』は、古く摺りたる本にて左の如く年號あり。

延寶八年申三月水月庵迷色居士かな序、一生軒不埒後序、文中に作者の名青水庵無底居士と見えたり、卷尾に銘下南華軒の跋あり。

戀のつり針業平　　一冊　　鱗形屋板

畫人の名は見えざれども、菱川に疑ひなき□畫なり、吉原の事など多くありて、春□中にては面白き本なり、末に業平祕傳といふことを載せたれば、外題に業平の名あるなるべし、梓彫の年號なし。

按に、天和元年の『書目』に「戀のつり針　一冊二匁（中ノ四十四オ）」とあれば、延寶の印本なるべし。

源氏きやしや枕　　三冊（或は一冊）　　延寶四年

一名『若紫』

源氏繪の春□なり、菱川なるべし。

たきつけ（上）
もえぐゐ（中）　　横本三冊　　延寶五年印本
けしずみ（下）

和文めかして好色の事を書きたる本なり、西鶴が『二代男』また『色道大鑑』下に載せたる『好色伊勢

物語一等の引書にも見えたれば、行はれしなるべし

四十八手作　延寶七年

大傳馬町三町目　鶴屋吉右衛門

朱雀遠目鏡　半紙本二冊　延寶九年正月

島原松梅の評判。

標題に知らるゝ如く、島原の遊女の評判なり、序の次に島原の總圖、遊女の名、書は正月遊びの所僅に一葉、さて夫より評判なり。

太夫十四人　格子五十四人　かこひ五十三人

はし百四十八人　同二百七十八人　外ニ　北白十五人

とあり、今に比べては人少なり。

吉原にのみかゝりし冊子、また評判のたぐひは、別に目錄の部に分つ、島原の評判は多く見ざるゆゑ、先づこゝに加ふ。

戀の中宿

外題如斯、うちに『身繼の人和氣』また一冊には『身繼』につくる、三冊を綴分け四冊。

男色、女色打交て話三條あり、更に面白からず、作者一慧軒、江戸板、元祿始めなるべし、書に兩國の花火踊りの船あり。

花の名殘　畫入半紙本　五冊　天和四年印本

始め傾城の姿繪に心をかくる事などありて、好色本に似たれども、末は冊子物の體裁にて、あさるの方といふ女の事を記せり、面白からず。

好色一代男　八冊　天和二年作

大坂板なるべし。

作者西鶴、畫人吉田半兵衛、筆耕西吟なりと云ふ、跋は落月庵西吟とあり。

世之助といふ者の一代記にて、好色本中の絶作なり、此書大に流行して、江戸にて重彫をなしたる本あり、原板は大本なり、江戸板は半紙本にて菱川の畫なり。

江戸重板の奥書　貞享四丁卯暦九月上旬

大和繪師　菱川吉兵衛師宣

日本橋青物町　大津屋四郎兵衛板

又〇好色やまとゑの根元　上下

〇日本ふうぞく繪本　上下

といふ書あり、是も菱川が畫にて、『一代男』の繪を大本に書き、文章を約めて頭書になしたるものなり、闕本のみ見たれば卷數は知らざれども、取

集て四冊なるべし。
按に、初めに『繪本一代男』として四冊刊行なしたるを、後に二冊づゝ引分て『やまと繪の根元』『風俗繪本』と名を附けたるもの歟。
〔補註〕松雲堂云、一本に左の奥書あり原板ならむ。
大坂住　大野木市兵衛開板

遊里櫓太鼓　繪入橫本六冊
柱に「けいせい櫓太鼓」とあり。
卷尾に、元祿十五年ノ九月吉日
京寺町通り　榎並甚兵衛
江戸中通川瀨石町　須藤權兵衛
全本は見ざれども、是も『一代男』の略本といふべきものなり、是等を以て『一代男』の行はれしを思ひやるべし。又『一代男後日』と云ふ書あり、八文字屋橫本のうちへ加へたり。
『俳諧士師の梅』　八虹撰　寶永元年印本
前　腹へ鼠のくんで落ちけり　東里
附　西鶴はいづれ一代男にて　伴自
是れ行はれたる證なり。

二代男　繪入大本八冊　貞享元年印本
『諸艶大鑑』
是も西鶴が作にて『一代男』に續て行はれしと云ふ。

諸國三代男　繪入半紙本五冊　貞享三年印本
同じ西鶴が作なれども、之は餘り行はれざりしや、今は本甚だ稀れなり。

床のおきもの　大本一冊
菱川筆、狂畫の枕口なり
鱗形屋板にて卷尾に菱川の名あり、年號ある本未だ見ず。
〔補註〕葩雪曰、本書二卷に分ち上卷を『しあはせよし』下卷を『たからくらべ』と名づくと云ふ。

枕口大全　大本三冊　天和二年
山形屋板。
菱川なるべし、上の卷は扇の形、團扇形、色紙形のたぐひ、いろ〳〵なる枠にて仕切り、中の卷よりさゝ無くて頭書を加へたり、端本を取集めたるやうなれど、柱に樂と同じやうにあれば、さにてもあるべからず。

古今好色男　大本二冊　天和二年

江戸板。
下の巻に「右此枕口双子は杉村氏治信實情秘術をつくし彼是集めて巻冊となし自序を加へ云々」とありて菱川が畫風に似たり、曳尾庵の印本『江戸圖鑑』浮世繪師の部に杉村治兵衛といへるあり、彼が筆なるべしといへり、『圖鑑』には正高とあり、治信後に正高と改めしか猶考ふべし、頭書に吉原通ひの馬の事、吹矢町見世物の事ありて、江戸板なること疑ひなし。

小夜衣　繪入 半紙本 五冊　天和三年印本
作者城坤散人茶屋子　江戸板
戀のみ盡しなり、五の巻遊女のみには考べき事少しはあれども面白からぬ書なり。
元祿板『貞女衣』とは別本なり。

東茶屋友歌
元祿の『書目』にあり、三冊なるべし、中の巻一冊を見る、九丁目より二十四丁目に終る、一葉に一人宛のことあれば、上の巻八丁に序文、下の巻二十五丁目より三十六丁に終る、高臺寺前、八坂、清水坂等の茶屋女の評判なり、姿繪丁毎にありて、狂詩と發句を題し、よしあしを論ず、句の調畫風を以て考ふるに、天和の頃の印本なるべし、八百屋お吉といふ女あり、八百屋お七同時代にて相似たる名なり。

好色しのすゝき
上の巻ばかり見たり、天和頃の刊行なるべし、二條后と業平、源氏と若紫の類古事を今作□に書きたり、畫人不知拙畫なり。

好色一代女　繪入六冊　貞享三年
西鶴が作なれば考へとなるべきことありて、面白き書なり。

好色五人女　繪入五冊　貞享三年
一の巻お夏清十郎、二の巻樽屋おせん、三の巻おさん茂兵衛、四の巻八百屋お七、五の巻さつま源五兵衛。
西鶴が作に似て面白し、之は寛文より貞享の初めまで、實にありし事を綴りたり、作意は加へたれども、實説に近き事も略見えたり。

好色諸國心中女　繪入五冊
後年外題替『貞女自無垢』

洛下寓居序とのみありて作者の名なし。
卷尾　貞享三年孟春吉祥日　京都の梓行なり。
標紙にのみ好色の字あり、是は書房のさかしらなるべし、好色の咄も無きにあらねど、多くは貞女の話にて、あながちの好色本とは異なり、作者は貞徳風の俳諧師にて、歌の道も少しは心掛し人なるべし、筆もよくまはりて頗る可笑しき本なり、短き咄しを多く集め、其うちには實説もあるべく見ゆ、目錄は「ふたつ文字牛の角行時參り寐ぬ夢に見る戀しりのさと」なんど、俳諧の長句、短句にて記したり。

男色大鑑　八冊　貞享四年印本

西鶴作。
初めは素人若衆の事、末は歌舞伎若衆の事を集めたり、淺草慶養寺の事などあれば、作り物語のみにもあるべからず、世に知る所の如く、面白き冊子なり。

男色の染衣　四冊　貞享四年の印本

江戸松月堂不角作　鳥居彦兵衞畫。
島津數馬といふ少年主の[illegible]を殺したりと、無實の罪に陷り、鈴ヶ森にて罪せられし事を書きたり、作振り大に趣きあり、當時の街說なるべし。
〔補註〕蘆雪曰、『杏花園書目』には、之をいの部に收め、單に『色の染衣』となして男の字を冠し居らず。

好色破邪顯正　半紙本三冊　貞享四年印本

作者白眼居士。
好色本の世に行はるゝことを、よからざる事なりと難せし書なり、さて此白眼居士は東山の僧なり、西鶴が門人團水が別號を白眼居士といひ、殊に同時代の人なれば、思ひ誤りつる事あり。『正月揃』といふ書も、此僧白眼居士の作なるを、後に團水作と入木して彫あらためし本なり、是書房のさかしらなり。
〔補註〕松雲堂云、此『正月揃』『舊年子』が家より平瀨家へ納む、今同家の珍藏なり、いとをかしき參考の書なり。

好色旅日記　繪入五冊　貞享四年

好色なる男、京より江戸まで下だる物語なり、六鄉の橋の事水口吉久が事などあり

旅枕　　横本一冊

上方板。

年號ある本未見、貞享五年印本『好色注能毒』に『旅まくら』といふ名見えたれば、貞享の印本なることは論なし、末に歌舞伎若衆の口書あり、又春□ならざるもあり、惜い哉例の書肆が、古板と見ゆることを厭ひて、歌舞伎役者の名を書きたり、されど紋所に考ふれば、上村吉彌、竹中吉三郎、立役にては坂田藤十郎等が姿繪なり。

好色しなの梅

全本未見、元祿の目錄に四冊とあり、中に外題を書かず、二の卷吉三良、三の卷ちかとなりなど、直ぐに目錄を書き、枠のなき本にて繪入なり、拙作にて面白からず、是も上に見ゆる『注能毒』に見えたれば、貞享の印本なり。

好色訓蒙圖彙　繪入小本三冊

貞享二年と序にあり。

吉田半兵衛畫作なり、遊女、手かけ、娘など、、其姿繪を書き、ことわけを書きたるものなり。

此書元祿以前のものなり、さるは元祿九年の印本『小柴垣』といへる書に、「これほどがてんのゆかぬことそとしあんしてみれば夫よ好色きんもうづゐと外題して□門の品々書たる本あり、これにてなぞがとけた」と見えたり、『小柴垣』に此書を引たるを見るに、此書は元祿以前、寛文頃の刊本と知るゝなり。

〔補註 龍雪曰、序に、洛下の野人作書、無色軒三白居士自序とあり。又末尾に、貞享三年丙寅後彌生吉日、花洛銅駄坊　三右衛門　高辻　毘陽軒板とあり。此書後ちに再板せしなるべし。

好色貝合　繪入小本

貞享四年秋九月　書林清兵衛 三右衛門開板。

全本を見ざれば冊數は知らざれども、元祿の『書目錄』に二冊とあり、是『訓蒙圖彙』の後編なり、先に同じく半兵衛が畫作にて、前編に漏れたるものを集む。

男色十寸鏡　繪入小本二冊

序に貞享四年七月吉日　洛陽野人夢軒好善居士。

上の卷兄分勸學の卷、下の卷若衆勸學の卷、身のたしなみの事、伊達心得の事なんど見ゆ、若衆へ

の教も書たり、次に載せたる『洼能毒』に『好色揃鏡』と見えたるは此書歟。
因に云、俳書にて『十寸鏡』といふ物あり、之は稻田九郎兵衛の家士田中伊太夫久次が獨吟にて、末に九郎兵衛句をも加せたり、慶安五年の印本二冊あり。

諸國色里案内並因縁あげやしうくらい附　小本二冊

序に客也軒一夢とあり。
按るに、是匿し名にて吉田半兵衛が作歟、京都の板なれば島原の事は甚だ委し、吉原の事は委しからず、誤りもつとも多し、諸國の事猶更いぶかし、元祿『書目錄』に三冊とあり、下卷に諸國の色里の圖を載せたるが闕けたるなるべしと思ふ事名面に見えたり。

好色四季ばなし　四冊　年號なし

外題がへ『好色堪忍記』　元祿十一年
又改めて『花鳥風月』　正德三年
目錄は別に彫り改めたり、此の如く三度外題を改めたり。一の卷は春の事、二は夏、三は秋、四は冬の事を書きたり、『四季ばなし』は元祿五年の『書目錄』に見え、外題を直せしが元祿十一年なれば、貞享の印本なること論なし、作振りなか〳〵面白き書にて、後年八文字屋自笑が作にて、世に行はれし『榮花男まめしち』といふは、此書より出でたるものなるべし。
さて此書二の卷三丁目の板を失ひしゆゑ、一の卷の三丁目を二枚摺りて、二の卷へもそれを入れたるものにて、二の卷の三丁目は缺けたり、三本あるを見るに皆同じ、やうやく近年古く摺りたるを見たり。

好色年八卦　繪入半紙本

外題替　『傾城三島暦』『傾城みゝ反古』
是も三度外題を改めたり、原摺りの本は四冊なり、丁數の少なき書ゆゑ又合本一冊になしたるものなり、年號のある本は見ざれども、元祿の『書目錄』にあれば、貞享の印本なるべし、西鶴作の『みゝ反古』とは別本なり。
蜀山人曰、予藏書の『年八卦』は、これとは別本なり。

好色盛衰記　繪入半紙本　五冊　貞享五年

外題替「西鶴栄花はなし」

西鶴が作振りに似て面白き本なり。

傾城百人一首　繪入横本

三の巻と四の巻とを見たり、五冊か六冊なるべし、三ケの津の遊女を集めて、今の世の道外百人一首の如きのもぢり歌を、團扇形のうちに書き、其間々へ八文字屋調の讃を書入れたるものなり、書風を以て考ふるに、貞享か元祿頃の上方板なるべし、吉原の遊女の歌を二つ三つ左に書載せて置きつ、

格子
女郎のこゝろもしらず（以下缺）
身はすもどりの蚊にくはれけり
江戸龜甲屋與左衛門内
あきしの

格子
戀すてふわが名はまぶにたちにけり
人しれずこそおもひそめしか
江戸山口七郎左衛門内
春日野

格子
はゝきゞのあとさへなくば女郎の
かゞみを見てもうらみざらまし
江戸三浦屋四郎左衛門内

さつとせ
此外三浦屋四郎左衛門内格子しらさき、巴屋三郎左衛門内格子いこく、三浦屋四郎左衛門内格子楓かえ、巴屋三郎左衛門内格子ちさと、同格子なつ山、長崎屋平左衛門内格子はつせ、同屋三左衛門内格子さかたなんどいふ名見えたり、高尾、薄雲等太夫の部は一二の巻にあるなるべし。

〔補註〕龍雪曰、此書六巻にて、元祿十六年出板なり。

好色注能毒　繪入小本三冊　貞享五年印本

序文に「好色増かゞみ」「しなの梅」「青梅」といふ冊子、近頃出でたる事見えたり、また文章のうちに『京くれなゐ』といふ一冊子、おつつけ出板いたし候とあり。

〔補註〕「好色京くれなゐ」四冊其後出板せり。

作彌といふ歌舞伎若衆、女の姿となりて、ある家の娘に忍び逢ふ事、おさく物語と名づけたる一段あり、拙作といふ程にもあらねど面白からず。

前にあり
戀の中宿　繪入半紙本三冊を四冊に綴分たり

うちには「身躰の人和氣」また「實情五人和氣」など

書てあり、男色、女色の話三つあり、作者一慰軒、江戸板なり、さまで面白からず、年號はなし、貞享か又は元祿の初めの印本なるべし。

色三番（好色太平記 好色太夫敬）　横本一冊

元祿十一戊寅年月日出度月日　慕幕堂羅動

初めに口根と口門の合戰あり、故に一名を『太平記』といふ歟、末は好色のおとし話なり、何者の作か知らず三つ四つは面白き話あり。

『男色高名記』『衆道用文章』あとより出し申候といふことあり。

繪入 好色錦木　半紙本五冊　元祿五年

京板なるべし。

標題に幷に狂言づくしとあり。

予此本は、或る家にて外題のみを寫し置き、其後借らんとしたりしかど、失ひたりとて貸さず、了意『錦木』とは別本。

好色わすれ花　五冊　如醉作

卷尾に、元祿九戊子年六月吉旦

京下立賣大宮西へ入町　和泉屋八左衞門
尾州雨替町本町角　木村六右衞門

按『阿念佛』『品定』等の作者如水軒とは別人なるべし、是等の作より拙作なり。

作中作、一段ぎりの話なり、一の卷に、おやよ姫と花村伊之助といふ者、互に思ひ染めしが、其戀かなはず、兩人とも髮を剃り落し、老て身延山にてめぐり逢ひし事を記したり。

好色伊勢物語　四冊　繪入本（半紙形より大きし）

『吉原伊勢物がたり』とは別本。

當世好色の事を『伊勢物語』にならひて編し、流言の語釋注解ありて、なか〳〵可笑しき作振なり、貞享三年の印本『三代男』を引たれば、元祿初めの印行なるべし。

後年外題替『いくの丶さうし』

好色年男　繪入 半紙形

殘本を見たり四冊か五冊なるべし。

卷中に、元祿七戌の年やうやくにくれ云々、又當年も五月が二つあつて云々、是にて時代は能く知る丶なり。

全部の旨趣は何某といふ男、五條の天神の夢想をかふむり、俄に著く美形になりて、お染といふ女

の姿にやつし、ほしいまゝに遊樂する事を書たり、拙作といふにもあらねど面白からず。

好色井戸車　繪入 半紙本 五冊

作者不知。

元祿十二卯ノ彌生

御幸町通三條上ル二丁目

小松勘兵衛

松田太郎兵衛 版

大和國長束永庵一子小八郎といふ美少年、學問の爲め京に出で來り、島原へ通ひ、好色者となりし彼が噂、末まで同じ話なり。

一の卷に、露の五郎兵衛露休が辻ばなしの圖あり、拙作といふ程にはあらざれど、閨房の事をあらはに書て、さまでに面白き冊子にもあらず。

外題替『新娵かゞみ』末に諸國遊女の直段、春形ロ悅道具圖等を增したしたり。

好色後家ばなし　繪入 半紙本 五冊

元祿今年正月吉日とあり。

元祿五年の『書目錄』に見えたれば、元祿初めの印本なるべし、さて此書詳しきことあり、五の卷はじめに『好色かる口ばなし』とあり、別本の板を取合せし物かと思へば、柱も「後家ばなし」とありて同本なり、同本かと思へば、五卷の一冊は好色かる口ばなしにて後家の事見えず。

按に、五の卷の板を失ひ、別本を是について、柱のみ入木して彫入れしものにやあらむ、拙作にて面白からず。

好色床談義　圖入 半紙本 六冊　元祿二年

序に『好色重寶記』『好色旅枕』この『床談義』を合せて、三部の書といふとあり、これもさまで面白からず。

花の染分　繪入 半紙本 五冊　元祿五年

『染衣』とは別本。

京三條兩替屋善兵衛が一子花之助といふもの、男色より女色に移る物語にて拙作なり、畫風を以て考ふるに江戸板なるべし、序文に琴の名書あり、是は序文を書きたる人にて全部の作者にあらず、此書中に俳諧師吟山といふ名見えたり、全部の作者歟尙考ふべし。

〔補註〕此序は松月堂不角なるべし。

京大坂茶屋雀　横本一冊

『諸分重寶記』いろほんや三助もつこうやいん二人の編。
元祿六年二月吉日開板。
京大坂の色茶屋の事を書ける者なり、色茶屋の圖、また座敷、勝手にてつかふ諸道具の圖などあり。

當流風體男色千鑑　五冊　元祿六年

外題替『和國小性氣質』六冊　延享三年
作振りは中々面白き書なり、さて原板は五冊なるを、後に一の巻を一冊添え六冊となし、歌舞伎役者の類ひ、はや人々の眼をつきて、古板なりと知るゝ故に、ところ〴〵入木して彫改め、繪も今樣にかき改め、『和國小性氣質』と名づけし、本には延享の年號あり。

好色産毛　繪入半紙本五冊

作者雲風子林鴻。
林鴻は京都の俳諧師にて、『京羽二重』『永代記反咎』『あらむつかし』(以上三種俳書)等の作者なり、『花見車』に、林鴻子書畫を能くせし事を引きたれば、これ自書自筆なるべし、西鶴には遙に劣るといへど、名もなき作者にくらべて勝れりと云ふべし、梓彫の年號は見えざれど元祿初めの印本なるべし。

好色萬金丹　繪入半紙本五冊

元祿七年戌三月六日と序にあり。
中の上作にて、素人の作る物とも見えず、林鴻等の作歟。

好色夢之助　繪入中本

紙數二十枚程あるを綴分けて上下とす、
鱗形屋板。
夢之助といふ者、花より姫を戀ひわび、末に夫婦となる物語なり、壽風菱川に似たり、江戸作なるべし、己が見たる本は、年號を削りたる跡のみあり、元祿年間の印本と思はる、作は今少し古かるべし、

好色仕合揃　繪入半紙本五冊

作者、年號ともに無し、坂田藤十郎、山下半左衛門、水木、荻野の名あれば、元祿の印本ならん、拙作にて面白からず。

姥揃　繪入五冊

序に東都愚民遊色軒とあり。一人は傾城には眞實なき者ゆゑ、廓へ立寄るまじといひ、一人は傾城にも誠あるものなりといふ兩人の問答なり。

菱川風の繪を入れたる本あり。又た繪は摺る時除きて、筆耕を織合せたる本あり、原摺の年號ある本は、序に嵐三右衛門、伊藤小太夫の噂あり、又卷中に澤田おきち、菱川等の名あれば、元祿年間の作なること疑ひなし、後に享保寅の春と入木したる本あり、また此冊子も何とやらん、外題を替へしと、蜀山の『さゝちまき』にありしが、今抄錄を失ひたり。

風流鎌倉土産　五冊　元祿七年印本

本目長作。

江戸板にて書振り面白からず。

香のかほり　半紙形三冊　元祿八年

作者九思軒　畫菱川なるべし。

紅梅之助といふ者、白菊といふ娘に馴染むる事を、和文やうに書きたり、考べきこと多くは見えず。柱に(白)といふ字あり、按に例の外題直しにて『白菊物がたり』といひたる歟。

好色法のともづな　元祿二年印本

作者磯貝捨君　畫者菱川師宣。

五冊なるべし、繪本のみを見る。

好色小柴垣

作者花洛醉狂庵、是匿し名なるべし。

卷尾に、元祿九年丙子孟春日とあり。

拙作といふにはあらねど、さまで面白き書にもあらず。

御前獨狂言

殘本を見たれば卷數不知、畫の趣を以て考ふるに、元祿中ばの印本なるべし。

是は女郎と客と取替はすみなり、其みのうちにさま〴〵の物語あり、中に音羽といふ天神の女郎、實の親を親と知らず、客に取りて馴染を重ね、其事を知つて自害せし咄しなどあり。

卷中に扇流しといふ事見えたり。

好色ざんげ咄し　繪入半紙本五冊　元祿九年

江戸板。

拙作にて面白からず、一段宛きれ〴〵の話なり。

好色飛鳥川　繪入半紙本四冊　元祿十一年印本
作者は京師の者なるべし。
中作なり。
因に云、『飛鳥川』といふ書多種あり、

飛鳥川　三冊　慶安五年印本
花陽軒中山三柳著
性理の道を教えたる隨筆なり。

八助飛鳥川
未見ども好色本なるよしは、『辨疑書目錄』及び元祿五の『書目』に見えたり、『辨疑』には一冊物、『目錄』には二冊とあり。

飛鳥川
寶曆年間に印行せし小歌本、横本一冊なり。

飛鳥川
寶曆頃の寫本なり、或る老人の書集めし見聞の隨筆なり。

飛鳥川當流男
好色本なり、末に載せたり。

『飛鳥川』といふ書以上六部。
また『飛鳥川』と云ふ戀のみづくしを見たりしに、抄錄を失ひて、いつ頃の書歟忘れたり。

好色江戸紫　半紙本五冊
作者石川氏。
中に畫人古山師重の名あり。
〔補註〕蓜雪曰、卷尾に、貞享三年八月吉日とあり

俗むらさき　繪入半紙本五冊　元祿十一年印本
畫師畫俳軒流宣。
流宣が畫作なるべし、流宣は江戸の人なり。
さて此冊子は、元祿四年正月十三日芝白金の敵討なり、是より先き『江戸紫』といふ冊子出板せし旨跋にも見えたれば、俗は續の假字歟、また文章の俗なりといふこと歟。

新色五卷書
序に元祿十一寅葉月難波堂書生蘆做□與志編とあり。
按、西澤一風の事歟。
此冊子一冊ぎりに終る、話五つありて五卷なり、是皆當時の街說と覺しく、中々可笑しき書振りにて、三の卷は世に知る三勝半七の物語なり、閨房のことをあらはに書ける所あり。

卷尾　元祿十一戊寅歳清月吉日
大坂本町二丁目萬屋仁兵衛板行

色道小鑑　半紙本五冊　元祿十二年
京都の板なり。
名にも似ずかたくるしき書なり、面白からず、序に貪氣堂無現の名あり、是は序文をのみ書きたる人にて、全部の作者の名なし。

好色文傳授　繪入半紙本五冊　元祿十二年
作者洛陽山之軒政房、末に載せたる『誰が袖の海』と同作なり。
此書も後に『〃〃の評判』と外題改めし本なり。

御前義經記　繪入八冊　元祿十二年
又た寶永の年號を入木したる本あり。
西澤與志作とあり、西澤一風軒歟、『義經記』を浮世の事にとりなして編める書なり。

風流女丹前記
『御前義經記』の後編なり、作者同人、缺本五冊を見たれば、卷數また年號不知、是も八冊歟。

五ヶ濃津餘情男　繪入五冊　元祿十五年
作者秋花堂久澄。
一の卷は京の事、二は大阪、三は江戸、四は堺、五の卷は長崎なり、故に五ヶの津と名附けたるなり、此書は多く好色に關はらぬ話なり、されども餘情男と標題に呼ぶ故に、好色本の内に加ふ、卷中に嵐三右衛門の死したる事あり、初代は元祿三年十月八日死す、法號源譽嵐壽照といふ、元祿十三年役者評判記『談合衛』に見えたれば、元祿三四年の作なるべし。
再按に、二代目三右衛門も、親に押續いて、元祿十四年十二月死と『玉のしり』と云ふに見えたり、此『餘情男』にいふは、二代目三右衛門なるべし。

清少納言犬枕　三冊
一名『ふでかくし』
卷尾　元祿十五年壬午正月吉辰
武陽書林平野屋吉兵衛板
團扇形のうちに書ありて、女色の事を和文のやうに書きたる物にて、草子物ともいひ難く、好色本とも見えず、面白からぬ書なり。
按ずるに、未だ見ざれども、『こゝ（本ノマヽ）犬枕』といふ冊子あり、又た『吉原狄枕』といふもあり、それは吉

原の目次に加えたり、『筆かくし』といふ草子に、書房のさかしらして此名を負はせたる歟、寛永十一年の印本『尤の草紙』の序に「かの清少納言が枕のさうしをまねびて書きたるものあり其名を犬まくらといへるなり」とまた元祿四年印本『俳諧瓜作』撰者琴風の跋に「誰かいふ枕草子は此道の寶なりまた犬まくらもをかし犬の草子は彼枕の文字にひとかたを殘し」などある『犬まくら』は、この『筆かくし』の事にはあるべからず、慶長の作（本ノマヽ）小瀨甫庵は、『童蒙先習』の一名を古くは『犬枕』といひたる歟、是も予がおしあての考へなり。

繪入 都女品定　半紙本藏書二冊

或人曰三冊なりと、中卷缺たるなるべし。

卷尾に、元祿十五年三月下旬　書林洛陽木村氏

筆を白川の流れにさらし如水軒坂騎角

標題にも知るゝ如く、富家の妻、娘より舞子、茶屋女、下女はしたに至るまでの品定めなり、されど小袖の染色を始め、すべて女の風俗には考べき事多し、されども取立て珍らしきことは見えず。

〔補註〕作者如水軒坂騎角を、次の『河念佛』には坂驛角とせるは、素より傳寫の誤りなるべきも、孰れが正しき歟疑を存す。

好色阿念佛　繪入 半紙本

予が藏せるは一二三四と四冊あり。

書振り面白く考べき事あり、初名は甚太郎、後ち夏夕といふ者の一代好色物語なり、また或人の藏書に二三五とあり、則ち五の卷終りとて、元祿十四年如水軒坂驛角白川に筆を揮ふとあり、一の卷と四の卷を彼方へおくり、此方へ五の卷を借らんと望みしかど許さず、今は其人卒したり、前の『品定』同作なり、天保の今年に五の卷を得て全本となる。

〔補註〕莚雪曰、此書の外題『阿念佛』とあり、二三の異本を對比するに皆然り、されど『杏花園書目』は之をかの部に收め、『河念佛』と記しあり、草體の爲めに河を阿と誤りしまゝに傳へられしならむ歟、また前項に記せし如く、作者如水軒坂驛角と坂騎角の誤りも、未見の書なれば今正すによしなし、原本に接せば是等一目明瞭すべし。

好色酒呑童子　繪入 半紙本　五冊

江戸みすや又右衛門板。

作者江戸の俳諧師にて、伊勢の産にはあらずやと思はるゝことあり、拙作なり、考ふべき事なし、好色なる者を酒呑童子になぞらへて作りし冊子なり、或人曰、元祿十年序に桃林堂印のうちに蝶麿とあり。

『好色榮花女』酒呑童子の外題替なりと云ふ。

好色艶虚無僧

一の卷のみを見る、五冊なるべし、作者桃の林、印に蝶麿とあり、前の『酒呑童子』と同作、おいくと曰ふ貌美き娘と、大原伊織といふ若男の物語、さまで面白き冊子にあらず。

連理松　繪入

全本未見、作者桃隣堂とあり。

『むつちどり』を著したる桃隣とは別人なり。

書振り前の冊子に似たり、隣は林の假字同人なるべし。

江戸若松町今川政之助といふ者、正月七日巳の日なれば、池の端辨天へ參詣する事、此さうしの起りなり、正月七日巳の日に當るは元祿五年また八年なり、其頃の作なるべし、是も面白き冊子にはあらず。

好色日本鹿子　繪入 半紙本

闕本にて卷數、年號、作者知れず、是も『阿念佛』と同じ頃の印本歟、うちに『好色扶桑鹿子』三の卷

七十五匁地藏一體　大ャ女は坊主をいやがる

道理とぞすぐに引道うちしきにひだりめんの二

布施主は是後家なり

此樣なる目次あれど、作は中作なり。

好色大振袖　繪入 半紙本　五冊

序なし。

目錄に、元祿十六年未正月十六日

洛下好色軒圓水作

もとより匿し名にて、圓水の字を似せたるなるべし、さて作振りさまで面白からねど、功のいりしもの書きたりと覺し、すら〳〵として上作なり、一段〳〵ときれ〴〵の話なり、また落し咄めきたる所も多し、江戸吉原の事もあれども、京都の人の作なるべし、閨房の事をうちかすめて書きたり。

好色智惠袋　　　　　　　　繪入五册　　元祿十五年印本
　京　永田四郎兵衞　大野木市兵衞合板
序に新齋、印に花松軒とあり、是は序の作者、全文の作者の名なし、一の卷の段落に智惠袋と云ふこと二所まで見えたれば、外題直しにあらず。此書江戸流宜筆作には勝れたれど面白からず、好色本の作に暇なきなどいふ事あれど、さほど行はれたる人とも思はれず、昔を考べき事もなく、五の卷の末に、好色和尙たばこだんぎと云ふことを載せたり。

好色敗毒散　　　繪入半紙本五册
序に元祿壬午九月。
卷尾に元祿十六未年正月。
作者の名なし。
　　　　　　浪華　淺草彌兵衞
　　　　書肆　華洛　中村治郎兵衞
　　　　　　　　　金谷平左衞門
作振り中作なり、林鴻が『産毛』に似て夫よりは拙なし、卷中にも元祿十四年號見えたり。

好色甘露丸　　繪入
全本未見、册數不知。
橘仲之丞といふ者、北野の通夜なし、梅は女と化し、松は男と化し契をこむる事二の卷にあり、上方作にて面白からず、元祿年間の印本なるべし。

好色十二八男
殘本三の卷を見る、好色男話二つあり、然れば合本は二册歟、さまで面白からず、また捨つべきにもあらず。

男色木目漬　　　　五册　　　元祿十六年
辰閑齋自然坊と序にあり。
書中今弘法といふ事あり、例の繪入本にて男色の話なり、さまで面白からず。

風流連三味線　　　繪入五册　　元祿十七年
一名『數めがね』
作者風吾堂。
全く好色本にて、後年八文字屋板にて、世に流行せし三味線ものとか唱へし讀本の類に非ず。

誰袖の海　　　　繪入六册　　元祿十七年
由之軒政房作。
上に見えたる『色傳授』と同作なり、此二種の外、

由之軒の作未見。

富家是八といふ好色者、江戸に下る物語にて、吉原の事などあり

拔に、作者由之軒、貞享五未元祿の初めの頃江戸へ下り、其時吉原の樣を見て、さて京へ歸りて後に作りしなるべしと思はるゝ證あり、友人に此書を持てる者二人あり、何れも闕本にて西の卷未だ見ず。

標題に、由之たが袖の海開初て見る未の正月

如此ありて好色の文字なし。

好色夕顔利生草　繪入 半紙本五冊　元祿十七年印本

夕顔觀音の利生にて、父の仇を討ちし物語にて江戸作なり。夕顔觀音の事予隨筆に委し、强て好色本といふにはあらねど、標題に好色の字あればここに加ふ。

以下は或人の藏書なり予は未見。

めざまし草たか笑　小本一冊 繪入　寛文九年印本

好色の落し話なり、『書目錄』にはなしの部に出だしたれど□畫なり。

戀の息うつし　大本一冊 □畫　延寶五年

鱗がた屋板。

歌仙枕　大本一冊

三十六番狂歌入□畫。

大和のおほよせ　大本一冊　天和三年月日

江戸堺町物の本屋　柏屋與市板

春□ならぬ好色の繪本、頭書に歌などあり、序跋ありて、文中に菱川畫と見えたり。

好色通變占　繪入 半紙半切本　貞享五年

闕本下の卷のみ、『書目次』に三冊とあり、下卷は追加にて『好色合鑑』とあり、板本、

京　帳屋喜兵衛

藤屋藤四郎

江戸日本橋　伏見屋兵左衛門

好色日用食鑑　繪入 半紙本五冊

天和、貞享頃の物歟。

樂事祕傳抄　繪入 小本

卷中に日用食性の事見えたれば、彼さうしの趾歟。

好色百物語　半紙本五冊　元祿十四年板

作者櫻花軒。

好色今美人　半紙本五冊

一の卷闕、京板。

伊藤小太夫、貞享中狂氣して身まかりし事、追加に、好色和尚夢物がたり、貰茗ゐせいあらそひと云ふ事あり。

花の盃　大本一冊

菱川風の畫。

衆道綸鑑　闕本上

男色の春□詩發句。

好色桐の小枕　五冊　元祿十五年

桃林作。

賢女明野の夢　半紙形二冊　元祿十年

作者倫閑堂主虎翁沉水と序にあり。

好色優天狗　半紙形五冊

江戸作、長谷川町近江屋九兵衛板。

序に桃の林紫石、印に蝶ㄏろ。

柳亭も近年見たり、更に興なき書振りなり。

標題知らず　元祿八年印本

柱にむらくとあり、夢樂坊といふ者の事をつくる。

作者、板元『やさ天狗』と同じ、面白からず。

〔補〕

さゝげ繪枕　大形本一冊　延寶板

師宣畫、春□なり。

吉原ものは別に目次あり、歌舞伎野郎の評書は、歌舞伎ものゝ中に入れて、こゝには載せず。

好色本目録終

吉原書籍目錄

例言

一『吉原書籍目錄』は、柳亭種彥の編に係り、寫本を以て世に傳へられたり。

一目錄に收載する所、計五拾五種、大概寶永以前の物のみを採れり、其以降に係る物は、追補中に僅あるを見るのみ。

一他は『好色本目錄』の例言と異なる所なければ、茲には略しぬ。

明治三十九年孟春　　葩山人誌

吉原書籍目錄

柳亭翁編

吉原伊勢物語　小形の半紙本二冊　寛文二年
山田市兵衞板。

標題にも知らるゝ如く、吉原の事を『伊勢物語』になぞらへて書けり、紙數五十餘張、繪は張附の彫にてあとより挿込みたるものゆゑ、初めに摺りたるは繪少なく、後ちに摺りたると覺しきには繪多く、文章も所々入木して彫改めたるあり、延寶の寫本箕山が『色道大鑑』の引書に、『をかし男』とあるは、此册子の事なるべし、元祿の『書目錄』に載せてあり。

按に、『新町をかし男』といひし草紙のそこゞを彫り改め、吉原の事に直しゝなり。

柳亭所藏の本に端書に、元祿五年の『書目錄』に『吉原伊勢物語』二册とあるは是なり、可惜下の卷を闕く、按ずるに寛文の末の印本なるべし。

文政壬午春三月十日柳亭種彦記

半分はかすみがくれか伊勢ざくら

發句の調も寛文を眞似たり一笑々々。

吉原くぜつ艸　繪入中本一册

一名『吉原用文章』

年號のある本未見、畫風を以て考ふるに、萬治年間の册子歟、寛文ならば元年より五年の間なるべし、寛文の末にてはあるべからず。

吉原の遊女のみの文を集めし册子なり、下に載せたる『吉原しつつゐ』の引書に見えたり。

吉原六ぽう　小本一册

闕張本を見て全本未見、年號闕てなし。

歌舞伎に六法と云ふ事流行して、其の詞を集めし册子あり、夫よりさま〴〵の物に移りて『いとなみ六ぽう』といふ小册あり、商人職人の類を書き、其上に彼の六法詞を書きたるものなり、此『吉原六ぼう』は、本の形も書き樣も『いとなみ六法』に似て一枚毎に女郎の姿繪ありて詞書を題す、寛文八年より前なり、其證下に見えたり。

吉原心亂抄

未見、寛文十年の『書目錄』『吉原しつつゐ』の引書に見えたり、假名にて書ける所は『こゝろみだれ抄』とあり

吉原花露

未見、『讃嘲記』『しつつゐ』等の引書に見えたり。

吉原袖鑑

未見、遊女の評書なり、『讃嘲記』『よぶこどり』等に見えたり。

『吉原鑑』とは別本、遊女紋づくし。

吉原根元記

未見、延寶六年の印本、遊女の姿繪ある所『吉原鑑』に似たり。

吉原大全

未見、『袖鑑』と『根元記』を合せて增補なしたる物なり、『しつつゐ』『つねゞ艸』等の引書に見えたり、近年上木なしたる『大全』とは別本なり。

以上四種、寛文七年よりは前の印本なり。

吉原讃嘲記時の太皷　繪入 中本 一冊

紙數三十七張、遊女評判の書、卷尾にうろこ形屋加兵衞開板とあり、刻梓の年號なし、されど寛文七年の印本なる證卷中にあり。序に曰く「爰にある人吉原袖かゞみ、吉原根元記を集めなして大全といふさうしをたづさえ來りて此さうしのうちに花のあと枝となりて折らぬやつもあり新樹のわかばえの出來たもおほし所々に墨ていくれよといふ云々」とありて、卷中に『袖かゞみ』に曰く『根元記』に曰くと書て其あやまりを論ず、されば『袖かゞみ』と『根元記』の二書を合せて『大全』をつくり、又それを補ひし冊子なり。末に犬枕と題して、今の物は附ともいふべき事を載せたり、延寶五年の印本『もえぐゐ』『けしずみ』に、犬枕のあとを追ひ、おもて裏ある詞をならべ云々とありて、此たぐひの事を記したれば、昔は行はれし冊子なるべし、箕山が『大鑑』の引書にも此『讃嘲記』を載せたり。さて、今傳はる『袖鑑』『根元記』等を見るに、『讃嘲記』に曰くと云ふ事ところゞにあり、是は『讃嘲記』出板の後に『袖かゞみ』『根元記』ども、そこゝを彫り改め、再び賣りたるものと覺し、是等の冊子のみに限らず、あるは增補なし、或は外題を替

えたる物あり、心をつけて見るべきなり、『袖鑑』の末に、替り共枕といふことを載せたるあり、是等は全く『讃嘲記』出板の後に彫添えたる事、替りとあるにて明かなり。

再按ずるに、『根元記』『袖かゞみ』『讃嘲記』の三本、寫本にて一端流布したるなり、それ故に延寳六年の印本『根元記』に七年の印本『讃嘲記』の事あり、是寫本のうちの校合なり。

〔補註〕蓜雪曰、本書は『色道大鑑』の著者畠山箕山の作なりと云ふ。

吉原よぶこ鳥　　中本一冊

紙數三十九張。

卷尾に、皐月中旬うろこ形屋加兵衛開板。

卷中に、寛文申のとしとあり、是寛文八年なり『讃嘲記』開板次の年の印行にて同じ板元なり、『讃嘲記』に説き漏らしゝなど記して、かこつけの松のことあり、すべて『讃嘲記』に似たる遊女の評判にて、是にも末に物は附のやうな事あり、跋に云「尻もむすばぬ絲ながら、折々に之を綴りまたこそ『吉原六ぼう』にあらまし、猶くはしくは『袖鑑』にこそ」、此文たしかには聞えがたけれど、『袖かゞみ』は既に前に見えたり、されば『吉原六ほう』も、是より先きに出でし册子なるべし。

遊女の大概

未見、右に記したる『よぶこ鳥』に「名ごりの雁そひねのつゝじ云々そのこと江戸にひろまりて今遊女の大がいと云ふ物の本にくはしく見えぬ」といふ事あれば、寛文八年より前に、斯かる册子のありし歟。

吉原鑑　　一册

寛文『書目錄』に見えたり。

竹本氏藏書、萬治の印本、遊女の姿繪に何歳ととしを記してありとぞ。

萬治三年の印本、鱗形屋板、紙數三十八葉、八張目までは今の細見に似たり、それより太夫の姿繪、手管の名目ともいふべきことを記したり。

吉原歌仙　　一册

未見、寛文『書目錄』に見えたり。

友人の藏書に、標題不知古寫本あり、其うちに、吉原の遊女の名をたて入れし俳諧の歌仙あり、寛

文中の物と見ゆ、もしこれ歟。

吉原床入　一冊

上に同じ。

芝切通の書房云ふ、一冊の春口なり、萬治三年の印本と語れり、是非は知らず。

好金集

未見、『しつゝゐ』の注に見えたれば、延寶二年より前の書、寛文の末の印本歟。

吉原失墜　繪入 中本

延寶二年甲寅二月中旬。

大傳馬町三丁目　九左衞門板。

吉原の事を『つれづれ草』になぞらへて書きし冊子の初めなり、『鐵槌』にならひて自注あり、故に『失墜』と號すよし序に見えたり、注釋には、昔を考へべき事ありてをかしき冊子なり、惜むべし此冊子、今傳はること稀なる歟、竹本氏の藏書のみにて、類本未だ見ず。

引書くさぐあり、『くせつ草』『心亂抄』『好金集』『花の露』『大全』の事は前に見えたり、また『御江戸物がたり』『奴もんだふ』などいふ事見えたり、吉原のさうし歟、又さもなき冊子か定め難きにより、別に目錄には擧げず。

『奴もんだふ』は、『吉原雀』に載せしと同書歟。

吉原くらべ物

未見、延寶三年より前の冊子なり。

『袖かゞみ』の引書に見えたれば、寛文中の印本なり、また『吉原大ざつ書』にもところぐに此書名見ゆ。

吉原大ざつ書　繪入一冊

紙數四十五張。

卷尾に、延寶三年壬卯四月中旬。

吉原の圖を、例の繪のうちに書き、吉原將中段など、すべて雜書のおもむきに綴りし遊女の評書なり、『くらべもの』に曰くといふ事所々に見えたれば、是より先に『くらべ物』といふ冊子またありしなるべし。

吉原雀　繪入二冊

紙數三十七葉。

二十一葉まで上の卷、二十二葉より下の卷。

寛文七年初春　通油町ますや開板。

『つね〴〵草』の引書に見えたり。

これは遊女の評書にあらず、「うき世ぐるひおもひそむる事」「身うけのこと」「初春買の事」なむどゝ目錄を分けて、客のしな〴〵、遊女の心持、さま〴〵の事を書きたり、末にまた或問といふ事を載す、或人何々の事と問ふ○それはかやう〳〵との答なり、其事「失墜」に引たる「奴問答」と同じ、若し是が『奴問答』といひしものか、また別に『奴もんだふ』といふものありて、それより書拔きたる歟、此冊子、少しは和學なぞしたる者の作歟、俗なるうちに雅言の交りしところあり。

吉原三茶三幅一對　繪入一冊　延寶九年印本

太夫、格子を載せず、散茶といふ遊女のみの評判なり、三幅對とは、當時さんちや女郎をさしていふなり、天和板菱川の『百人女郎』にあり、近くは『石井盟どうし』（龍雪曰、石井明道士の事か）にありとぞ

是亦「胡椒頭巾」の類にて、散茶ばかりの評書なり、此冊子に吉原の圖あれども、散茶見世のある處ばかりなるゆゑ、全圖にはあらず。

新吉原つね〴〵草　半紙本　二冊

卷尾に、元祿二巳年三月吉日

大坂呉服町　深江屋太郎兵衛板

是も吉原の事を『つれ〴〵草』のおもむきに書きなして自注あり、この冊子もつとも訝しき事あり、予が見たる本は、二本ともに寶曆四甲戌年吹田屋太四郎求板とあり、畫風を以て考ふるに、元文、寛保頃の印行なり、されども作りたるは、貞享か元祿の初めの頃、上方の人江戸に來りて書ける物に疑ひなし、卷中に延寶、天和の年號あれば、恐らくは貞享なるべし、「さん茶ばかりひさしきはなし散茶とかくはふらぬといふ心なり是近年のしたし云々淺草門に近年かの里へ通ひぶねをこしらへ大かた艪を二挺たてけるなりこのちん二匁五分云々」。是のみに限らずすべて後年に作りし冊子にはあらず、されば古印本のありしを再彫なしたる歟、また寫本にて傳はりしを、後に板に彫りたるものなるべし、また卷中に爰の噂の書物「よし原丸裸」「同大全」「同雀」同源氏」などといふもの近年の作なりとあり、『吉原大全』『よしはら雀』は前に見えたり、他二書は未見。

此『源氏』は『五十四君』の事なるべし、されば淨書したるは元祿元年とおぼし。
吉原の冊子を大坂にて刻したるは珍らし、若し大坂の俳諧師の作歟、此深江屋太郎兵衞は、俳書の板元ゆゑ爾か思ふなり。

吉原丸裸

未見、右の『つね〳〵草』の引書に見えたり。
『役者丸裸』は、延寶二年京板なり、あからさまに評したるの意、佛書に『あみだまる裸ものがたり』あり。

吉原源氏

上に同じ。
元文二年の印本『源氏六拾帖』とは別本なり。

吉原草摺引　繪入半紙本六冊

卷尾に、元祿七年正月吉日作筆鈴木武平。
遊女の評判の書、可笑しからざる冊子なり、此書絕板、作者も板元も罪せられたるよし、御當家の法例に見えたり。
按ずるに、是より遊女を白地に譏る冊子は、作者もなく、刻する者もなく、且つ評判に係はらざる冊子にても、遠慮したりとおぼしく、古き寛文、延寶の冊子は、多く今に傳はれども、却て、此元祿七年より寶永の初めまで、十餘年の間の年號ある本を見ず、絕て無きと云ふにはあらねど、昔よりは少なきゆゑ、予が目には觸れざるものなるべし。

吉原つれ〴〵草　寫本二冊

作振りをかしき冊子なり、名は記さゞれども俳諧師なるべし、寶永六年頃の作なるべし。
『つれ〴〵草』は、前々の印本に較ぶれば、遙にをかしき冊子なるを、何の故に刻する者のなかりし歟、丁數多き故歟。
〔補註〕萢雪曰、元文二年に出でし『吉原傾城つれ〴〵草』は全く別本なり。

きのふの夢　寫本一冊

作者、于時延寶五巳年十月日順風隨時軒可申子とあり、又た憐庵可習といふ者の跋あり。
之は若き男と老たる男と、吉原より歸るさに、遊女の論をなしゝを聞書きにしたるなり、和文めきたる書きざまなり、面白からねど印本の俗アト缺

吉原小唄總まくり　一冊

梓彫の年號ある本未見。

或人此冊子を再彫し、『吉原繁榮ざうし』と外題を直し、其序に寛文二年と年號ありしが破れたりと書きたるは信じ難し、予古き印本を見るに、年號は無く、序といふべき所に、道哲が俗なりし時は島田重三郎といひ、高尾が菩提の爲め發心なしゝ事を記し、是三浦屋二代高尾が墓なり、法名轉譽妙心、萬治三年より寛文二年まで僅に三年、此文面は、昔しがたりの事を記したるにて、近き事をいふにはあらず、土佐の淨瑠璃『三世二河白道』の行はれし後の冊子なるべし。

此冊子に、吉原通ひの馬の駄賃附あり、また延寶六年の印本『吉原戀の道引』にも駄賃附あり、照し合せて看るに、『道引』よりは『總まくり』に記したる方、直は高し、斯かる事は、次第に價の昻るものなれば、これ延寶六年の後なる證なり、恐らくは延寶の末、天和の頃の印本なるべし。

伏見町、堺町の出來たるは寛文八年なり。

柳橋より堀までのちよき船の料、寛政のはじめまで百文、寛政の末より百二十四文、享和の頃より百五十文、今に其價なれど、船頭に酒代を取らせねば歩行よりは遲し、かの駄賃も其例にて、次第に高くなりしなるべし。

寛文二年と序にあり、天和、貞享の頃一葉彫り足したり、それに島田重三郎の事、駄賃附等あり、また『吉原繁榮冊子』としたる再刻本ありて人の知る所なり、かの駄賃附ある一葉は、寛文二年のものならず、其證別にいふべし。

〔補註〕蓮雪曰、某書には、之を萬治三年板となし、寛文二年を再板とし、寛政年間『壽繁榮草紙』と改題出板し、文政二年には最初の『總まくり』の名にて三板を出せしとあり、尤も文政の三板の序文かにも、萬治三年を初板と記せしやに記憶せり。

されど言ふまでもなく、柳翁の考證の如く、延寶、天和頃の出板なる事勿論なれど、立派に萬治三年云々と明記あるにより、疑惑を來さゞらむが爲め、ことさらに蛇足を添へしなり。また『繁榮草紙』の方は、壽の字を吉原と訓せしもの

なるべし。

吾妻物語　　一冊

もと吉原細見ともいふべき冊子なり、寛永十九年印本、翌二十年末の所を刻改めしもの二本を見る、聊か異同あり、當時は江戸に板木師少なかりし故にや、板屋淸兵衛とあるは、京二條烏丸通りなり、書半葉づゝ三ところ、また半葉彫りたしたるものあり、紙數二十餘張、増補ありて定め難し、原板は二十五張半なるべし。

さん茶評判
胡椒頭巾　　一冊

紙數三十五張半歟。

卷尾に　延寶八庚申孟春　鶴屋板

標題の意は、口をあかせぬといふ事なるべし、序に「近年開板のらいでんに載る所の女郎は大かた略す云々」、末にさんちや本草として、遊女を食類に見立しことあり、近年何れの人か再刻したる一枚摺りに『吉原本草』といふあり、延寶八年と記し、是には高尾を始め太夫、格子の名見えたり、此冊子にはさんちや女郎ばかりなるゆゑ、太夫、格子を一枚摺りにして出だしゝものなるべし。

らいでん

未見、右の『こせう頭巾』の序に、近年開板とあれば、延寶五六年頃の印本歟、役者評判にも『いかづち評判』といふありて、きびしく評したる題意なり、是もさん茶女郎の評書なるべし。

吉原あくた川

作者都鳥。

闕張本を見て年號は知れざれども、次に載せし延寶九年の印本『下職原』に、此頃出でしよし記したれば、延寶八年頃の印本なるべし。

せんしやうなる哉十王は硯の墨に筆を染め浮名をながす芥川、と書き初め、作者ゑんま王とあり、遊女の善惡をたゞす例の評書なり。

按ずるに、元祿四年とある『吉原蕃揃』とある冊子は、此外題直しなり、其證は、引書に『袖かゞみ』『くらべ物』等あり、斯かる流行の冊子に、二十年前の冊子を取出でゝ云ふいはれなし、されどところ〴〵彫改めしか委しくは不知、此二書を得たまふ人あらば、照し合せてたゞさるべし、『下職原』に『芥川』をいふ所、『蕃揃』に露たがはず。

萬年暦
『あくた川』の引書にあり、未見。

古狐
上に同じ。

けし鹿子
上に同じ。

まづゐ石
未見、『醒翁二奇跡考』『高尾考』の引書にあり。

吉原戀の道引　大本一冊　延寶六年
菱川畫
人の知る所なれば委しくは言はず、此書と『役者物語』を上下としたるあり、それには延寶の年號を削り、元祿と入木す。

吉原下職原　一冊
紙數三十三張。
卷尾に、延寶九年酉三月上旬　さうしや　權右衛門開板
作者は例の隱し名か、若信述と序にあり、『職原抄』に倣ひ、遊女の位を別ちての例の評書なり、前に出板せし『芥川』の作者を盲目なりと嘲けれども、此作者もさまでに筆はしらず、狂歌やうの事最も拙し、天和三年菱川の畫本『若木盡し』の引書に見えたり。

吉原買物調　一冊
畫三張とも紙數十五張
天和二年なるべし。

吉原大豆俵　一冊　天和三年初夏
例の評書なり、卷尾に、此あとに『つぼね開山記』『さん茶たいないさがし』『惣まくり』出來とあれども、印本なりしか否やを知らず。
此年に淨書せし『紫の一本』に、高尾、小むらさき今はなしとあり、此『豆だはら』に高尾、小紫なし、『一本』に記しゝに合す、此冊子『五十四君』の引書に見えたり。

鏡が池
未見、『五十四君』の引書に見えたれば、貞享の初めの印本なるべし、また寶永の初めの印本に『鏡が池』といふ讀本あり。

吉原五十四君　一冊　貞享四年
菱川畫名なし　其角作自筆耕。

西鶴が『一代男』『二代男』の作振りにならひて書きしゆゑ、常の俳文とは異なり、其角が筆の自在を見つべし。
貞享四卯年其角と奥にあり、末に起請文を出して四國太郎とあり。

吉原百人一首　一冊　年號不知

新古二板あり。
古は、初めに淺草觀音の圖半張、吉原の圖半張、あとは半張を三つにしきり、頭に百人一首の歌を書き、下にそれをもぢりたる狂歌あり、畫風を以て按ずるに、元祿頃の册子と覺し、『草摺引』前の印本歟、また評書にあらざるゆゑ、其後ちの刻歟。新は、近藤助五郎清春の畫にて、享保年間の印本なり。

吉原大黑舞　橫本六册　寶永六年己丑板

武陽豐島郡眞土山の住　作者流宣

吉原一言艷談　半紙本

半紙本一二三四を見る、一册闕て五册なるべし、畫風を以て考ふるに、寶永年間の印本と覺し、名はあからさまに記さねども、紀文が扇流し、節分の豆撒きの事などありて、作振り頗るをかし、此册子、故朝寐坊夢羅久藏書、類本未見、紀文現在の册子なれば、若し是も絶板歟、佛書に『一言芳談』あり、芳を艷に換えたる標題の附け方にて、拙作ならざるは思ひやるべし。

繫情あやめ草　五册

正德六年五月の作
是れは近き册子なれど、知る人多からざるが故に記す、其外正德より享保に至りては、册子の數種々ありていとうるさく、且つ人の知る事なれば、こゝには重ねていとまあらば、校正して又記し添ふべし
〔葩雪曰〕左記の各項は追補に係るものなるべし。

吉原大笑遠慮

『大遠慮落し咄』これ歟。
落し咄、一册なるべし、畫風を以て考ふるに元祿なるべし、遠慮といふは、みだりがはしき作もある故なり、吉原の事ならざる作も交れるが故に、前の目錄に加へ難し。

外題不知
吉原の繪の折手本、尤も板元の名も無し、全本或
闕本かも不知、元祿の末か寶永の初めの物と見ゆ。

吉原七福神　小本
東武眞土山麓雲軒、
此冊子のうちに、三浦、山本この兩家は、此廓の
古跡と稱したり
〔補註〕原書目、本書は五冊物にて、正德三年出
板なり。

吉原飛鳥川
箕山作。

えにし染

吉原庇姑手

吉原玉手筥

吉原小手卷

吉原調叢圖彙

吉原大全　五冊
醉卿山人東江先生作、明和の頃。

吉原書籍目錄終

續吉原書籍目錄

例言

一本書目は柳亭種彥翁の「吉原書籍目錄」の後を承け收錄するを以て「續吉原書籍目錄」と名づけたり。

一初めは種彥翁の如く解題をも添ゆる計畫なりしに、收集する所の物意外に尠く、細見の類多數を占め、且つは完備に近き物を編まむには、多くの日子を要することを感じ、已むを得ず、僅々小數の書目を記するのみに止めしは大に遺憾にして且つ標題に對し深く耻づる所なり。

一青本並に洒落本を始め、吉原に關する他の書籍は二三種の外此目錄には收採せず。

一蒐錄する所の書目僅に一百二十種、其脫漏誤謬等は、他日機を俟ち增補改訂して大成せしめむことを期す乞ふ是を諒せよ。

明治三十九丙午歲四月　　編者誌

續吉原書籍目錄

大久保葩雪編

い

入相の花　一　寶暦五年板

細見

五十路松　一　鳳來山人序　天明八年板

品川細見

遊里不調法記　一　礁音成著　寛政六年板

遊女大學教草　一　翠川子著　竹原春泉畫　文化四年板

遊女五十八一首　二　安田蛙文著　月岡丹下畫　寶暦三年板

遊里百八一首　一　神谷蓬洲畫作

は

花橘　一　寶暦七年板

細見

初緑　一　寶暦十一年板

細見

ほ

北州列女傳　五　河南遊子　井蛙著　寶暦六年板

北女閭起原　二　俳人徒流著

『洞房語園』の補記にして俗に天明の増益本と呼べり。

北里見聞錄

と

洞房語園　二　庄司勝富撰　享保五年稿成

寫本にて傳へられしが明治に至り印行せらる、元

文板あるにより之を異本と呼べり。

洞房語園　三　庄司勝富撰　元文三年板

洞房語園補遺　一　活東子輯

之も寫本なりしが明治に至り異本と共に刊行せられたり。

東房語園　一　寶暦七年板

細見

とらが文　一　延享三年板

細見

ち

沈香記　一　寶暦八年板

細見

り

柳花通誌　一

寫本にて世に傳ふ。

艷詞雨巴巵言（一名雨都妓品）　一　擊鉦先生著　鳥居淸信畫　享保十三年板

一書に十五年板とす。

後編『史林殘花』同十五年出板す。

擊鼓先生は呑舟軒喦山箕山なり。

雨都妓品（一名雨巴巵言）　一

享保十八年『史林殘花』と共に之を合刻す。

を

鴛の思羽　一　寬保元年板

細見

岡場所考　二　石塚豐芥子著　歌川國貞畫

於見なめし　一　南仙笑杣人序　戊年板

品川細見

わ

若榮帳　一　寶暦十二年板

細見

か

合刻兩都妓品　一　享保十八年板
遊戲堂梓行　寛政五年之を再板す。
「兩巴巵言」「史林殘花」の二書を合刻せしもの。

かぶろ松　一　寛延二年板
細見

香名傳本　一　寛延三年板

假宅細見　安永元年板
細見

諸國遊里好色由來揃　五　出板年次不明

かくれ里の記　二　石塚豐芥子著
天保七年稿成　歌川國貞畫
一書に四方赤良作とす。

當代全盛高名再撰　一　嘉永六年板

金多里　一　寶暦初年板
細見

よ

吉原七福神　一　正徳二年板
評判

吉原えにし染　正徳三年板

吉原丸鑑　一　享保五年板
評判

吉原大全　五　醉郷散人著
著者は卽ち澤田東江なり。

今樣吉原たん歌　二　安永五年板

吉原雜話寫本

吉原雜考寫本　一　太田南畝著

吉原評林　一　原雀著　元文二年板
一名「吉原源氏六十帖評判」

吉原十二時　一　石川雅望著　岩窪北溪畫

今昔吉原大鑑　二　石塚豐芥子編　天保五年板

吉原年中行事　一　十返舍一九著　喜多川歌麿畫

吉原源氏六十帖　一　原雀著　元文二年板
一名「吉原評林」

吉原出生鑑　一　寶暦四年板

吉原由緒書寫本　一
　享保十年廓名主より町奉行に差出せしものなり。
吉原たいへん　一　雷門舍爺叟序　安政二年板
　圭屋山三崩板
　彼安政強震の災に罹り亡歿せし妓女、樓主、花車、
　禿等を細見仕立になしたるものなり。
吉原風俗通寫本　一
吉原掟證文寫本　一
　寬政七年規定せしものなり。
吉原都鳥　二　寶曆五年板
吉原大黑舞　五　寶永六年
吉原讃言記　一

た

巽大全初編　山東京傳原稿　天保四年板
　一名『深川大全』　石塚豐芥子補
高尾考寫本　一　加藤雀庵著
高尾考寫本　山東京山著
　嘉永二年己酉仲春稿成

高尾年代記　一　柳亭種彥著　嘉永二年板
玉菊傳　一
多智姿　一　寶曆四年板
　細見
袂の花　一　寶曆四年板
　細見
瀧の鯉　一　寶曆六年板
　細見
道中菓子陸　一　寶曆十二年板
　細見
大盡舞考證　一　山東京傳著

そ

袖見臺　一　寶曆九年板
　細見

つ

金鏡の調　一　安永七年板

細見

な

菜の花　一　元文四年板

細見

う

浮船草　一　享保二十年板

細見

く

廓の茶話　明和八年板

花街百人一首　一　安政三年板

花街漫錄　二　西村藐庵著　雨華庵抱一序　文政八年板

花街漫錄正誤　一　花の本にし村　文政八年三月稿

廓祕事

や

陽臺三略　一　舘度子著

ま

丸山土產　一　寬保三年板

細見

け

繫情菖蒲草　享保元年板

一書に六年板とす。

見物左衞門　一　元文三年板

細見

傾城つれ〴〵草　一　原雀著　元文二年板

傾城新色三味線　三　正德二年板

傾國の言　一

傾城觿　一　山東京傳著　自畫　天明八年板

ふ

深川大全 初編　一名『巽大全』　山東京傳原稿 石塚豐芥子補　天保四年板

深見川 細見　一

こ

五色仕 細見　一　寶曆十年板

滸都洒美選　一　志水燕十著　天明三年板

五葉の松 細見　一　天明五年板

古今細見　一　粋山人著　天保八年板

え

煙華漫筆　一　張葛居辰著

煙花小筆　二　風狂先生著　元治元年板

あ

安滿能家和 細見　一　元文三年板

飛鳥川 細見　一　延享元年板

曙(アケノ)が原 細見　一　寶曆三年板

秋の夕榮 細見　一　安永八年板

天の浮橋 細見　一　風來山人序

嗚呼御江戸 細見　一　風來山人序　午の初春板

さ

櫻鏡　一　享保十九年板
淺草奥山に櫻樹を植ゑし際の遊女の句集なり。

三改松　一　元文三年板
細見

里鹿子　一　寛保二年板
細見

里の家名記　一　寛延元年板
細見

吉原書合　一　寶暦元年板
細見

吉原燕　一　寶暦二年板
細見

里の把清　一　寶暦十二年板
細見

里の緒環　一　安永元年板
細見

き

虚實柳巷方言　一　香具屋主人著　寛政六年板

め

名廓盛衰記　二

み

美名の川　一　明和五年板
細見

美里の春　一　延享三年板
細見

し

史林殘花　一　畠山箕山著　享保十五年板
「南山屋書」の後編なり、享保十八年同書と合刻再板す。

新吉原細見の圖　一　享保十三年板

志家位名見　一　享保二十年板
細見

志奈定　一　延享二年板
細見
寶語教　一　寶暦十年板
細見
一書に十一年板とす。
新吉原略說正誤　一　曲亭馬琴著
文政八年夏六月稿
娼妃地理記　一　道蛇樓麻阿著　安永六年板
一名『青樓名娼圖會』

ひ

百人女郎品定　一　西川祐信筆　享保八年板
萍花漫筆　二　桃花園三千麿著

も

紋づくし　一　寶暦七年板
細見
元吉原圖說　一　曲亭馬琴著
文政八年正月稿
元吉原之記

せ

全盛鏡　一　享保十九年板
細見
青樓心得草　一　蓬萊山人著

す

粋の袂　一　くだかけのまだき著　安永九年板

續吉原書籍目錄終

増補青本年表

緒言

徳川時代に於ける文明史の資料たるべき書、由來乏しからずと雖も、能く上下人情の推移、風俗の變遷を描寫せるの書冊夫れ幾許かある。筆に人情を述べ、書に風俗を寫し、自然のうちに一部の風俗史を形造りし物は、青本の初めより明治年間に亘りし草雙紙なるべし。然れども、素より片々たる戯作の一小冊子、殊に婦女童幼の翫弄物たるの觀ありしために、多少識者に排斥せらるゝの傾向ありしが、近時に至り、其眞價は一般の知る所となり、文學上より、或は風俗上其他の方面より、之が研究に從事するの士漸く多きを加へ、片々たる冊子什襲珍藏さるゝに至る、また盛んなりと謂つべし。今や此佳期に際し、本書を公にするを得しは、是等書冊の爲め予の欣喜に堪へざる所なり。

明治三十九年仲春上澣

大久保豐識

増補青本年表

凡例

一増補青本年表の稿を起すに當り、最初に原本となすべきものを選擇するが爲めに、數本を集めて對比せしに、各書ともに異同錯誤頗夥しく、孰れを採らむか其選定に迷ひ苦しみしも、査覈の末稍可なりと認められしは、楢崎海運君の舊藏本なる『青本年表』なれば、該書を以て増補すべき原本と定めたり。

一參考本としては、專ら燕石十種中の『戲作外題鑑』並に野崎璜璉君所藏の故假名垣魯文翁の藏本『青本年表』を始め、其他雜書を以て之に充てたり、但し魯文翁藏本は、天明の前半期迄にて、以後を闕きしは遺憾なりし。

一『青本年表』は編者の氏名を詳にせず、ただ漣水散人の編輯なりとのことを耳にするのみ。

一『戲作外題鑑』も亦編者の署名を闕けり、楢崎君舊藏本の前書に依れば『此書戲作外題鑑と改題して活東子が燕石十種第五輯卷の十にあり、楢崎生』と記しありたり。

一該二書孰れも寫本にて傳へられあるが、元來異名同種なれば、其先後は詳ならざるも、必ず其一が原本なるべし。

一蓋し『青本年表』は、元來『稗史年表』の一部にして、比志島文軒翁の輯錄する所なり、『稗史年表』五卷のうち第三卷青本部のみを拔採し、『青本年表』の名を附し寫本にて世に傳へられしなり、而して編者比志島文軒は、名は良貴、字を士有、通稱を文左衞門と呼び、徳川旗下の臣加藤某の家士にて、池の端仲町に住す、因て漣水散人の號あり、天保の『著家人名錄』に備、小說と見ゆ、其歿年は今之を詳にせず。

一右二本と増補せしものとの書目數の比較は次の如し

青本年表	一千四百七十四種
戲作外題鑑	一千四百三十六種

増補青本年表　一千六百七十四種

一増補は可及的原書に據るを主とせしも、一部をも洩さず縉閲するとは、最早今日に於ては不可能的の事に屬し、散逸して傳存せざるものも多かるべく、又安永、天明年間の書册には出版の年次、作者竝畫工の署名を明記せざる者多く、或は傳存の册子と雖も題簽を剝去しある爲めに、其書名すら容易に知り得ざる等の困難尠からず、されば一見簡易の業の如くして、實際の繁勞は夥しく、稿を更むること已に三次、爾かも尙ほ、補者自身私に滿足を以て擱筆脫稿せしむるを得ざりしは、予の淺見寡聞の爲めとはいへ、大に遺憾とするところなり。

一原本は書目のみを主とし、作者竝に畫工の略傳、板元及び雜記等の各項は、皆之を掲記せず、是等は悉く今回の增補に係る、蓋し多少參考に資する所あらむとてなり。

一其著書に關して、參考となるべき事項を存するものは、多少繁冗の嫌ありしも、其書目の傍に註記したり。

一原本竝に『外題鑑』中註記あるものは、其儘に之を收錄せり。

一本書に洩れたる書目、竝に尙ほ考校改訂を要すべきもの等蓋し多かるべし、是等は切に識者の補足是正に竢つ。

明治三十九年二月　　　大久保葩雪誌

前期青本書目

青本はこれを前後の二期に區別するを便とす、年代を以てすれば安永三年以前を前期とし、安永四年以後を後期とすべし。而して、其前期の青本なる物は俗に黒本と呼ばれ、青本と其種を異にするの觀あるも、全く表紙の異稱に過ぎずして、其內容は青本と同一なり。其所以は本年出板の青本は、翌年更に黒表紙を附して發賣し、一目して新板にあらざることを明にせし故なればなり。故に青本は新板物に限り、黒本は古板の再摺を示すの目標なれば、作に青黒の區別は存せざるなり。

前期の青本は其作數詳ならざるも、三四百種は無論存するならむ、されど其書目すら今知ること難し、次に輯錄する所の物は、僅に予の見聞に係る物のみにて、其幾分に過ぎざるも、後期の青本年表を增補するの緣に因み、其系統を顯はすの微意に過ぎざれば、覽者其杜撰を深く尤むること勿れ。

明治丙午歲二月

葩 亭 誌

前期青本(黑本)書目

大久保葩雪輯

正徳三癸巳年

書目

たろい おせん江戸物狂

ぶん太物語　二十二葉

延享二乙丑年

書目

渡邊綱物語　二

朝比奈勇力鑑　三　鳥居風書

延享四丁卯年

書目

振袖蟬丸對面之琵琶　三　鳥居清滿書

新板盛景兩面鏡　奥村文志書

新板紫式部　二

寳暦元辛未年

書目

島原傾城枕軍談　三

寳暦二壬申年

書目

新板男色鑑　二　鳥居清倍書

鬼熊退治　二　山本義信作　自書

寳暦八戊寅年

書目

浦島七世孫　三　鳥居清重畫

寶暦十庚辰年

書目

楠末葉軍談　三　和祥作

寶暦十二壬午年

書目

風流妖相生之盃　二　富川吟雪畫

相比奈草摺實記　二　同上

蜷川新左衛門　三　同上

於萬ヶ紅粉　二　和祥作　鳥居清滿畫

一名『戀の紅染』

寶暦十三癸未年

書目

妖怪雪之段　三　吟雪畫

明和二乙酉年

書目

風流女山岡　三

五たいそう　二

上綿木綿　二　吟雪畫

明和三丙戌年

書目

伊達染重襖　二　丈阿作　鳥居清經畫

明和四丁亥年

書目

本草綱目春霞清玄鳳　三　清經畫

金胎兩部仁王門之礎　三

今昔浦島噺　三

明和五戊子年

書目

爺と婆と有たとさ大鳥毛庭雀　二　丈阿作

吾妻男那都詮　二

明和六己丑年

書目

鶴九元服朝比奈　二　吟雪書

市原鬼童臥夜黒牡丹　三　清滿書

明和七庚寅年

書目

源五平於婦婆嫁納諏訪湖　三

二面勝関草苅鎌　二　吟雪書

化物飛んだ茶屋　三　同上

殺生石水晶物語

雪女瀬川の結綿　二　清經書

化物一家髭女　二　吟雪書

明和八辛卯年

書目

湯尾峠孫杓子男色太平記　三　清滿書

安永元壬辰年

書目

さの〳〵金毘羅節　二　吟雪書

安永三甲午年

書目

天女龍女娜二代鉢木　五　清滿書

沓掛峠　三　吟雪作　自書

出板年次不明

書目			
支毅諸式 遠眼鏡茂右衛門	三		鳥居清經畫
鯉の鳴神蛸の絶間 海河水魚交	二		
化物三目大ほうい			
風流新板 龍宮曾我物語	二		富川吟雪畫
陰陽十二支記噺	二	鳥居清滿作	
豐歷陰陽道之勢		吟雪作	
伊勢物語榮華枕	一	同上	
若葉青例之釣初	二	同上	
運附太郎左衛門	三	同上	自畫
浮世宿替女將門	二		清經畫
大辨才天そりそ	二		
源氏重代友切丸	五		
伊勢三郎物見松	二		
風流猫書之物語	三		
雨乞小町名歌榮	二		
熊阪長範古跡松	二		吟雪畫
仇敵打出之小槌	二		
諸願圓滿連理噺	二		吟雪畫
妖物山人嗣屋敷	二	吟雪作	

「嗣屋敷」の再板なり。

大昔 新田義貞芝居	二		清滿畫
農人孝人 敵討垣衣摺	二		清經畫

安永六年「敵討嗚呼孝哉」と改題再板す。

東遷木捻刀作	三		吟雪畫
貞女戀目雙六	三		同上
小夜姫望夫石	二		
武田信玄初軍	二		
妻戀稲荷物語	二		
ゑヽろ谷物語	二		
曾我之矢の根	二		
ゑわん坊道無	二		
傾城蜷織物語	二	丈阿作	
五百八十七曲	二		

文化九年櫻川慈悲成に飜案の作ある歟。

角丸寶劍 威德物語	二	吟雪作	自畫
忠臣節分儺	二	丈阿作	
秀郷龍宮巡	二		清滿畫
鉢冠嫩振袖	三		同上
遠霞平安城	三		同上

名將智勇鋒	二		清滿畫
三鼎倭孔明	五	睦酒亭老八作	勝川風畫
倭語會稽山	五		鳥居風畫
辨慶の誕生	二		鳥居風畫
角丸の名劍	二		吟雪畫
源平鉢冠姫	二		同上
二つ鷹の葉	三		清經畫
七色保命丸	二		
四季土用干	三		
實盛一代記	五		
義經一代記	三		
景清一代記	三		
鎌倉三代記	二	吟雪作	自畫
大搭宮物語	二		清經畫
仁心蟹物語	二		
中將姫物語	二		
百合若軍記	二		
義與矢口社	三		
義經千本櫻	二		
通俗三國志	十		

山入桃太郎	二		
周防の內侍	二		清滿畫
繪本太平記	十		
雪中竹の子	二		
獅子の大王	二		
大磯地藏斬	二		
執着駒繋櫻	二		
敵討美女窟	二		
うばらの淵	二		
小夜之中山	二		
增補甲陽軍記	三		
坂田金平	三		吟雪畫
臼井貞光	二		同上
振袖辨慶	二		同上
鎌田又八	二		同上
王子長者	三	米山鼎我作	清經畫
大野長者	二		
金の長者	三		吟雪畫
化物車引	二		同上
山姥物語	二		

英雄物語	三		
都鳥物語	五	丈阿作	
鬼女物語	三	吟雪作	自畫
堅田の龜	二		吟雪畫
鼠の縁組	二		
猿犬出入	二		
さら談記	三		
吉野内裡	二		
三千三百	三		
蓬莱山	二		吟雪畫
鷹塚村	二		同上
富貴草	三		同上
三本刀	二		同上
盛衰松	二		同上
大峰櫻	三	丈阿作	
霞の松	三		吟雪畫
桃と酒	二		清經畫
兵物語	二		同上
一對男	二		
生不動	三		

剛屋敷　二　吟雪畫
後に「妖物出入剛屋敷」と外題を改め再板す

前期青本(黑本)書目終

增補青本年表

漣水散人編輯
大久保豊増補

安永四乙未年

作者

戀川春町　倉橋氏、名は格、通稱壽平、別號壽山人、一に春町坊と號す。狂名酒上不埒、松平安房守の家士、小石川春日町に住す、因て作名を戀川春町と呼べり。延享元年出生、本年三十二歳。

柳川桂子　柳川氏、耕雪亭と號す、桂子は其作名なり。

畫工

鳥居清滿　通稱半三、鳥居清信の二男なり、一に清倍の男とす。葭町に住し、三絃の業を營み、後に鳥居氏の三世を嗣ぐ。享保二十卯年に出生し、當年四十一歳なり。

鳥居清長　通稱關新助、のち市兵衛と改名す。書肆白木屋市兵衛の男なり。本材木町三町目に住し、鳥居清滿の門に入り、嗣で鳥居氏の四世となる。俗呼で新場の清長と稱せり。其出生寶暦二申年にして、今年二十四歳なり。

鳥居清經　鳥居清滿の門人なり。一說に始祖鳥居清信の門人とせり。

富川吟雪　山本氏名は房信、通稱を九右衛門と曰ひ大傳馬町二町目の書肆なり。其後本鄉に移居す。西村重長に就て畫を修す。畫名を吟雪といひ、豆繪を以て名あり。

戀川春町　戯作者春町は畫を鳥山石燕に學び、後勝川春章の門に入り、自著の外に他の册子をも畫けり。當年三十二歳、尙本年作者の項を參照すべし。

板元

鶴屋喜右衛門　通油町居住、小林氏なり。仙鶴堂と號す。屋標は鶴の丸の紋所を用ゆ。俗稱鶴喜

鱗形屋孫兵衛　通旅籠町（通稱大傳馬町三町目）南側

にて家世々暦本を出板し、萬治以前より引續きの地本問屋なりしが、天明年間に至り廢業せり。屋標は□の中に三鱗なり、通稱鱗形屋。

伊勢屋次助　山下町に住す。屋標は分銅中にいせ次と記せり。俗稱伊勢次。

奥村源六　通鹽町に住す。故畫工奥村政信は此家の主人なりしと云ふ。屋標は立瓢簟を用ゆ。俗稱奥村。

西村屋與八　馬喰町二町目に住し、正德以前よりの書肆なり。永壽堂と號す。屋標は山形の下に三巴なり。通稱西與。

雜　記

式亭三馬生る。

鹽亭晋米生る。

四世鶴屋南北始めて金井三笑の門に入る。時に年二十一歳。

○

大川中洲埋立地町屋家屋新築成る。

去年頃より投扇興流行し、本年投壺の技行はる。

淺草奥山に於て蘇州産山嵐始て見世物に出づ。

十二月新吉原松葉屋遊女三代目瀨川、烏山檢校に受出さる。

岡場所全盛、當時六十四箇所の多きに及ぶ。

書　目

金々先生榮花夢　二　春町作　自畫

式亭三馬選定名作二十三部の内。

寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。

此草紙容前の好評にて之より青本の趣向は總て一變し、戯作の面目を漸次發達せしめたり。

（作者鈴木朋之兄弟）天晴梅武士　二　清經畫

春遊機嫌ばなし　二　春町作　自畫

多武峰爪黑之笛　三　吟雪畫

木竹ごた交軍談　二　同上

源氏重氏劍宮皆　二　清經畫

足柄山手拵山姥

三人而者眞敵討　三　清滿畫

一書に清經畫とあり

（武運長久）萬代矢口渡　二　桂子作　清經畫

（四十七疋）忠臣鼠穴藏　二

鵲祭望媛腹鼓　二　清滿畫

風流はなし龜	二		吟雪畫
風流はなし鳥	二		同上
富士淺間物語	五		
穴色通がらし	二		
晴宗有明琵琶	二		吟雪畫
外濟善知鳥物語	三		清滿畫
六道水車智惠筐	三		清經畫
新撰兒女智惠海	二		
本朝俚諺世帶道具	二		
一休和尚悟乳柑子	三		清滿畫
名月全盛吉原饅頭	二		
大福富突始	三		清經畫
艶道富士袴	二	桂子作	同上
高名太平記	二		吟雪畫
初戀松竹梅	二		清經畫
義貞智仁勇	二		同上
光明千矢前	二		清滿畫
朝比奈島渡	三		吟雪畫
若緑色曾我	二		清經畫
軍法伊澤硯	二		吟雪畫

名君矢口社　二　清經畫

出世やつこ

風流物者附　二　清長畫

序文に辻才、又名下の印に橘町の二字あり。

風流瀨川諦　二　桂子作

瀨川菊之丞追善の戯作なり。

二代目瀨川菊之丞は世に王子路考と呼べり。

安永二巳年閏三月十三日三十六歳にて歿せり。

源家再榮小烏丸　三

鉦男金紙屑　二　清滿畫

○

蓜雪曰、享保の頃藤田秀素が「繪本桃太郎」の畫作ありしより、鳥居清信、奥村政信等亦起ちて所謂赤本なるものに筆を着け、江戶文學に一異彩を放ちたるも、爾かも幼稚の時代に屬し、單に兒童の玩弄品たるに止まりしが、文運の趨勢と時世の風潮とは、決して歩を止むることを許さず、延享寶曆の時代よりは、赤本の稍進歩し且つ變裝せる黄表紙、卽ち青本と、黑表紙所謂黑本とに筆を染むるの徒もやゝ多きを加へ、合戰物、一代記類の

述作頗れ、觀水堂、丈阿を始め通交、和祥、文子及び鳥居派の畫工等、盛んに筆を此方面に走らせしも、其行途たる皆一條の軌踏を辿るのみにして、毫も作意に可笑味とては有らざりしなり、試みに丈阿が著作中戯述と明記ある冊子を閲するも、僅々二三の書入れの語に、戯言らしき節あるを感ずるのみにして、其作意に毫も戯作らしき點あるを認むること能はざるなり。然れども其當時にあつては、此二三の語句も、同時の他の作に比較しては、戯述の資格あるものと作者自身も信じ、讀者も亦備かく承認せしや否や、开は今日容易に之を推知し得べからざるべし。

寶暦時代に於ける黄表紙、黒本の戯述なるものは、斯の如き實狀なれども、其種子は明和年間に至りて萌芽を發し、鳥居清倍、同清經、同清滿並に富川吟雪等之が培養者となり、大に着想を斯の方面に注ぎ、稍々滑稽の趣味に想を及ぼせしとはいへ、其取材や樣式に於て、互に腹稿を作るに餘念なきもの丶如く、其考案は延て安永の初年に亘りたり。然るに本年卽ち安永四年春、意外にも鱗形屋より出版發市せし『金々先生榮花夢』は、戀川春町の手になりし純粹の滑稽作にして、其鋭利なる筆鋒は太く當世の中心を衝き、寫實と諷刺とを左右に操りつゝ、巧に滑稽の妙味を發揮し、此作の萌芽をして能く成育發達の佳期に入らしめたる技倆は、優に世人の歡迎する所となり、從來婦女童幼の手中にのみ玩弄されし是等の冊子をして、漸く大人君子の掌上に緖かるゝ迄に進歩せしめたり。されば春町の功蹟は德川文學史中に特筆大書すべき事項なるのみならず、玆に青本史上に世紀を區劃せしものなりと信ぜらる。

故に此『青本年表』も亦此戯作ありし本年を以て起原とし、これより年次其實況と變遷推移とを併記するを以て至當なりと確信す。

偖本年出板に係る稗史三十七種中の多數は、全く黒本に類する著作にして滑稽趣味の戯作尠きが如し。开は言ふまでもなく、前年來の作風を襲ぎ、未だ舊套を脱せざるの著述多ければなり。而して此作風はたゞに本年のみに止まらず、尚は數年間持續せられ、一部分舊式の讀者の需めに供せられ

たるも、漸を以て逐年其數の減じゆくを見る。蓋し讀書界の風潮に誘はるゝと、又文華の盛運に向へるが爲めならむのみ。

安永五丙申年

作者

戀川春町　三十三歳
柳川桂子
米山鼎我　米山氏文溪堂と號し、筆耕を業とす、鼎我を作名とせり。
東西南北
富川吟雪　小傳は四年畫工の項參看すべし。
木鷄

畫工

鳥居清經
鳥居清長　二十五歳
鳥居清滿　四十二歳
富川吟雪
戀川春町　三十三歳
北尾政美　赤羽氏、通稱三次郎、杉皐と號す。北尾重政の門人にて、後師家を襲ぎ、北尾氏を冒す。小網町に住し、後葭町河岸に轉じ、更に神田於玉ヶ池に移れり。晩年鍬形蕙齋紹眞と改名し、略畫式を創始し、尋で松平三河侯の抱繪師となる、然るに主家に蕙心院と稱する名前あるにより、蕙齋を改め、羽赤と曰へり。其出生寶曆十一巳年にして、本年十六歳なり。

板元

鱗形屋孫兵衞
鶴屋喜右衞門
村田次郎兵衞　通油町に住し、榮邑堂と號す。屋標は○の中に村の字なり。通稱村次。
伊勢屋次助
松村彌兵衞　通油町に住す。屋標は篆體の松の字。俗稱松村。
奥村源六
伊勢幸　通稱伊勢幸、橘町三町目に住す。屋標は□の中に三つ星なり。

雜記

當時黄表紙卽ち青本の代價は、新板紙數五葉一冊

物にて八文、二冊物十六文にて、三冊物は二十四文なるが、古板再刻物は一冊七文の割合なり。寶暦明和の頃は新板にて一冊六文の割合なり。

○

今年三月下旬より秋の初まで痲疹流行す。清長畫にて著作出づ。

柳橋船宿若竹屋の妻一產に三女を生む。翌年鼎我に作あり。

當時銀の延煙管流行す。

此頃語尾に「ダンノウ」と言ふ童謠流行る。

阿蘭陀福輪糖、三國一の霰糖、の菓子及び與擲平の膏藥賣等去年より流行す。

書目

高慢齋行脚日記　三　春町作　自畫

名作二十三部の内

寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。

駿河清重伊達紙子笈捨松　三　清經畫

往古新日桃滑雀道成寺　二　同上

養老の瀧唐文章三笠月　三　同上

うどんそば化物大江山　二　春町作　自畫

風流上下之番附　二　清經畫

浮世風便女敵討　三　鼎我作　同上

本朝盃踊之濫觴　三　同上

今樣吉原たんか　二

佐夜中山我身鐘　二　清經畫

初笑福德ばなし　二　同上

菅原傳授手習鑑　五　同上

豐年錢塚之由來　二　桂子作　同上

太平出世名古屋　二　清長畫

木曾街道从義仲　三　清經畫

石川五右衛門譚　二　吟雪畫

東土產五色唐織　二　清經畫

福笑惣領之甚六　二　桂子作　同上

洒肴花鳥確蓮坊　二　春町作　同上

之は自墮落先生の傳に擬して作りしものなりと云ふ。

後三年松島八景　三　鼎我作　清滿畫

一書に清經畫とあり。

風流新四角四面兵衛　三　吟雪畫

新撰奥州古戰物語　三　鼎我作　清經畫

風流桃太郎手柄噺	二		清經畫
篠塚五郎忠臣矢口渡	三		清滿畫
古今名筆其返報怪談	二	春町作	自畫

蓜雪曰、先年鳥居清信の作に『古今名筆化物噺』二冊物出板あり、其作に對しての著作なるゆゑ、其返報の文字を外題に冠せしなり。

船軍源氏勝閧	三		
今樣後家氣質	二	春町作	自畫
おとしばなし	二		清經畫
風流化物鳴神	二		吟雪畫
御強小兒石部金吉	二		清經畫
江戸自慢機關屏風	二		同上
伊豆熱海溫泉緣起	三		同上
唐倭書傳鑑	三	春町作	自畫
書集津盛噺	二		清經畫
夜明茶呑噺	二		同上
御伽百物語	三		同上
風流友世車	二	南北作	同上
名玉青海浪	二		同上
孝心女子鑑	二	吟雪作	自畫
萬福長者玉	二		清經畫
今樣女景清	三	桂子作	同上
當世四國猿	二		清長畫
童麻疹之後	二		同上
山之主我獨	二	木鷄作	政美畫
新田系圖梅	二		吟雪畫

此書以前五冊物なりしを、四五の卷二冊を上下となし、外題を改め出せしものなり。淨瑠璃の『相撲入道千疋犬』は其原本なり。

天狗初庚申	二		政美畫

川柳書本なり。

皿屋敷	三	桂子作	清經畫

○

蓜雪曰、本年清經の畫、總部數の過半を占む。作者不明中に清經の自畫作も多數あるべし。

安永六丁酉年

作者

戀川春町　三十四歳
柳川桂子
米山鼎我
明誠堂喜三二　平澤平格、名は常富、通稱平角、後平荷と改む。又亀山人又韓山人と號す。狂名手柄岡持、俳名を月成と呼び、狂詩に韓長齢と曰ひ、天壽、道蛇樓麻阿、虎耳窟等皆其別號なり。享保二十年に生れ、秋田侯の留守居役を勤む。傍戯作を好み、喜三二を其作名となす。本年四十三歳なり。
深川錦鱗　其傳詳ならず。或は戀川春町の變名なるべし。
鳥居清經　安永四年畫工條下參照。
鈴木吉路
蓬萊山人亀遊　此作者の名稱に就ては大に疑はしき點あり。幵は此以外に蓬萊山人亀遊女といへるがあり。又七曲舍の說には、蓬萊山人歸遊女、後二世喜三二と改名す、とありて、類似の名前三人あるが如し。然れど歸遊女と曰へる作名ある册子は一部も見受けざれば、假に七曲舍の誤謬なりと定め、亀遊と亀遊女の二人に就て考按するに、予は同一の作者なるべしと想像す。其所以は亀遊の作は本年に始まり、翌々安永八年に一作あり、又亀遊女の作は安永八年より一年を隔て天明元年に始まり、同四年には喜三二門人として署名しあるを見ても、殆んど同時代に此兩名の作者ありとは思はれず。全く同一の作者たるべく。其人は蓋し後の喜三二即ち二世喜三二なるべしと信ず。併し二世の喜三二は明和五年出生なれば、本年は齢僅に十歳著作し能はざるは勿論なれど、世に持囃さるる本阿彌光悦の愛兒なれば、所謂旦那藝にて代作者は蓋し喜三二其人なるべしと想像せらるゝも、別に確證なく又牽强附會の嫌なきにあらざれば、玆には予の臆說となすに止め、二世喜三二の小傳は寛政元年の條下に記すべし。

畫工
戀川春町　三十四歳
鳥居清經
鳥居清滿　四十三歳
鳥居清長　二十六歳
富川吟雪

蓬萊山人龜遊　本年作者の項參看すべし。

板元

鶴屋喜右衞門
鱗形屋孫兵衞
村田次郎兵衞
伊勢屋次助
松村彌兵衞
丸屋小兵衞　通油町に住す。屋標は小判形の中に丸小の二字。俗稱丸小。
奥村源六
西村與八

雜記

畫工二世歌川豐國(源藏國重)生る。
初て黄表紙の袋入出づ。其體裁は大半紙二つ截に摺り、藍摺の一重表紙を附し、紫色の絲にて綴ぢたるなり。

○

三月二十日より六月朔日まで淺草寺觀世音開帳す。
芝愛宕山圓福寺にて出羽湯殿山於竹大日如來開帳す。
親和染此頃流行す。

書目

三升増鱗祖　三　春町作　自畫
名作二十三部の内。
鼻峰高慢男　二　喜三二作　春町畫
名作二十三部の内。
寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。
桃太郎後日噺　二　喜三二作　春町畫
名作二十三部の内。
親敵討腹鼓　二　喜三二作　春町畫
名作二十三部の内。
寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。
文化二年竹塚東子作に同名の外題あり。
女嫌變豆男　二　喜三二作　春町畫
一書に春町の自畫作とあり。
妖怪仕内評判記　二　春町作　自畫
南陀羅法師柿種　二　喜三二作　春町畫
花見歸鴫呼怪哉　二　錦鱗作　同上

親是有者を松明	二	清經作	自書
按其後白髮公時	二	桂子作	清經書
往古昔猿之仇討	三	同上	同上
甲子待座敷狂言	三		同上
桃太郎かんこ鳥	三		吟雪書
四天王石熊退治	三		
大鐵御存知荒事	三		吟雪書
子寶勇士の實生	三		
歸花十八公の英	三	桂子作	清經書
朝日出木會の棧	二		同上
下總國紗見寺 月星千葉功	三	青路作	春町書
葛飾前寶暦前 戀濃弓張月			清經書
花源氏後日卷 賴朝七騎落	三		同上
八百屋お七 戀櫻操芝居			同上
翼名附惡 上總七兵衛			清滿書
猿利考浮世噺			清長書
靜舞末廣源氏	二		同上
三保崎鯉富樂	二		
大平出世鉢木	三	桂子作	清經書
狐馬乘出世壽	三		
四天王勇力傳	二		清經書
日待御利生 此頃昔語	三		清長書
王德寶備 源家長久	三		
珍獻立曾我	二	喜三二作	春町書
雙面芭蕉花	三		清經書
持遊太平記	二		同上
後日菅原鑑	三	桂子作	同上
相州白籏社	三		
花粧對兄弟	三	桂子作	清經書
懷胎用心 壽春袋	三	喜三二作	同上
童子養育 金父母	三	清經作	自書
新是流撰 なぞ盡	一		
新版嘶 買言葉	二		
新版嘶 雨夜友	二		
伊勢北條五館 優美源氏鐵雛形	三		清經書
魚初物 里家大夜位平樂	三		清長書
手うた物 色摸樣三人娘			同上
今様繪起 走書淺草繪馬	二	清經作	自書
觀音開帳 三寶利生初竹		鼎我作	清長書

淺草觀世音千五年（蓮雪曰千百五十年）に相成、開

帳の節見勢物に出でし飛んだ靈寶大當り、其外當時流行の賣yうり菓子賣三つ子出生の事など取交へ戯作せしなり。

一書に清經畫とせり。

糸櫻本町育　二　桂子作　清經畫

淨瑠璃太夫人形遣ひ連名殘らず記せり。

糸櫻本町育　二　清長畫

初幕淺草の場より大切小石川迄、二冊物なり。

敵討嗚呼孝哉　二　清經畫

外題『農人孝人敵討垣衣摺』といへる書の再板。

金平娘（外題不明）　三　清長畫

紅皿缺皿往古噺　二　清滿畫

一書に丈阿作とあり。

絹川堤清田の鎧　三　桂子作

翌天明七年更に再板せし歟。

敵討女鉢木　龜遊作　自畫

一書に『お竹大日利生記』とし、畫を清經風とせり。

當年芝愛宕山境内に於て出羽國湯殿山黃金堂玄良坊佐久間お竹大日如來開帳。其節の戯作なり。

江戸贔負八百八町　二　龜遊作　自畫

蓜雪曰、本書は二代目市川八百藏中車追善の戯著にて、中車は本年七月三日四十三歳にて病歿し、淺草觀龍院に葬る、と他書に記しあれど、本書には享年四十二歳にて四軒寺町くわんそう院に葬り、法名を實應中車眞解居士と稱する由を記せり。

新板桃太郎　袋入一　喜三二作

七曲舍云、袋入の始なるべし。藍摺表紙、五丁、紫糸綴。

○

蓜雪曰、明誠堂喜三二本年より青本を著作し、春町と共に滑稽趣味を鼓吹し、黒本風の著作物は、漸次流行後れの傾向となり、勢を失ふに至る。されど、今年は尙ほ出板物の六分を占め居れり。因に記す、喜三二の明誠堂と號するは人の知る所なれど、稀に朋誠堂と記せる書あるを見たり。明と朋と字畫相似たるによりて謬れるにや、先輩の說もあれば此書には明誠堂とせり。

安永七戊戌年

作者

戀川春町　三十五歳

柳川桂子

鳥居清經

明誠堂喜三二　四十四歳

勝川春章　勝川春章は畵工なり。名は祐助、李林と號す。初勝宮川氏を稱す。後故あり勝川氏に改む。享保十一年江戸に生れ、畵の傍戯作を出せり。當年五十三歳。餘詳畵工部。

薪葉　傳詳ならず。或曰ふ畵工湖龍齋の假號ならむと。

林生

物恕齋於連

鳥居清長　畵工清長は鳥居氏四世なり。通稱關新助、後市兵衞に改む。挿畵の傍、自畵作の冊子を出せり。寶暦二申年江戸に生る。本年二十七歳。餘詳安永四年畵工部。

墨蝶亭可立

金巾齋

芳川友幸

吳増左　傳詳ならず。或は畵工清經の作名ならむ歟。

幾久

金花

畵工

戀川春町　三十五歳

鳥居清經

鳥居清長　二十七歳

勝川春章　通稱祐助、初勝宮川氏、後故ありて勝川に改む。旭朗齋西爾と號す。勝宮川春水の門人なり。又高嵩谷に就き、畵法を習得す。所用の印形に因み、世に壺屋と稱せり。享保十一年年に生る。今年五十三歳なり。

勝川春常　勝川春章門人なり。

勝川春童　林氏、名は春道、蘭德齋と號す。二世宮川春水の門人にして、勝宮川を稱せしも、後春章の門に入り、勝川春童といへり。又蘭德、及び春道をも畵名に用ゐぬ。

芳川友幸

北尾政演　通稱岩瀬傳藏、卽ち作者山東京傳の畵名

なり。北尾重政門人にて、葎齋と號す。また菊亭とも號せり。寳暦十一巳年を以て生る。本年十八歳なり。餘は安永九年作者の條下に記せり。

谷久和

湖龍齋　磯田氏、通稱庄兵衛、湖龍齋と號す。小川町土屋家の浪人にして、西村重長の門に入り、畫を學び、大に得る所あり。後法橋に敍せらる。後年兩國藥研堀に住し、東都藥研堀の號あり。

板　元

鶴屋喜右衛門

鱗形屋孫兵衛

伊勢屋次助

丸屋小兵衛

芳屋太兵衛　馬喰町一町目住なり。屋標は○の中に太の字。俗稱芳屋。

岩戸屋源八　淺草茅町二町目に住す。屋標は○の中に岩の字。通稱岩戸屋。

西村屋與八

奥村源六

蔦屋本店　大傳馬町二町目に住し、細見板元にて、蔦屋重三郎の本家なるべし。此家は書肆山本九右衛門、即ち富川吟雪の跡なりといふ。屋標は入山形の下に喜の字。通稱蔦喜。

雜　記

中村芝翫(三代目歌右衛門梅玉)生る。

○

めくり骨牌益々流行す。

六月一日より回向院に於て信州善光寺阿彌陀如來開帳す。

鬼娘、飛んだ靈寶等の見世物出づ。

七月一日より湯島に於て野島地藏尊開帳す。

十月頃より翌春にかけ「松茸賣なら這入らしやんせノウ」といへる童謠流行す。

「いきまのちよん」又は「いきちよん」などの通言行はる。

書　目

三幅對紫曾我　三　春町作　自　畫

名作二十三部の內。

手鞠唄三人長兵衛　三　金中齋作　春常畫

寬政六年蔦屋重三郎之を再板す。

金錢先生 昔語先生 夢中之印斷　二　春章作　自畫
大豆之助 稲荷山 松井貴親方　二　薪葉作　湖龍齋畫
お花 半七 開帳利益札遊合　二　政演畫

七曲舎案に、京傳十五歳にて作畫者未詳追可考。蘢雪曰、政演當年十八歳なり。本書は當時めくり骨牌の流行と、橘町の藝者が風俗を紊すといへる事實とを諷刺せる著作にて、作者自序の末に「耆張堂少通辭人」と署名あり。果して初舞臺の政演が戯作なるや否やは多少疑ひなき能はず。併し北尾政演畫と銘記しあるゆゑ、畫工政演の初筆なることは論無きなり。

黄金山福藏實記　三　林生作　清經畫
芋太郎屁日記話　二　春町作　自畫
蛭子大黒壯年過　二　喜三二作　春町畫
安永七郎大福帳　二　お連作　春童畫
庵御靈清和源氏　二
名代干菓子山殿　三　清長畫
神田與吉一代噺　三　清長作　自畫
薄化粧七人美女　二
鈴鹿山鬼丸物語　三　幾久作　清經畫

青樓吉原ばなし　二　可立作　自畫
忠臣四十七文字　三　清經作　自畫

享和三年北尾重政本書を改作し、「天哉義臣之平生」を出板したり。

螢師傳 洒落頭巾 吐染昔八丈　清經畫
評判 雨國 娘ー兒の趣向草　二
七ツ目 ゑと 人似子眞似　金中齋作　春常畫
お長 はん 右衞門 桂川嫁噺　二　友幸作　自畫
新兵衞 玉子 夢中海原　三　清經畫
大内 義隆 柳の夫婦論　三　同上
本田 善光 夢中御利益　三　吳增左作　同上
觀世音 御利生 職助風始

蘢雪曰、職助風とは蓋し織助風の誤筆にして、折介風即ち奴風の謂なるべし。其所以は奴風の起りは、安永中頃よりとの傳説あれば、想ふに當年頃に創始せしを直に作意せしにはあらぬか。

清盛 入道 歡樂之日記　三
新板 落語 梅の惠顔　二
辭闘戰新根　三　春町作　自畫
間違曲輪遊　三　同上　同上

酒天寶易占　三　清經畫
化物箱根先　二　清長畫
掘出天保皮　三　清經畫
其數々酒湊　三　友幸作　自　畫
　一書に春常畫とあり。
名玉里人談
戀歌お萬紅　二　桂子作　清經畫
敵討昔今川　清長畫
豆男榮花春　三　清經畫
吉原大黒舞　二　金花作　同　上
通人爲眞似　二
　春町の自畫作なるべし。
　本書每葉の柱には「はつゆめ」と記せり。
四天王昔扇　二　桂子作　清經畫
筆累絹川堤　三　桂子作　同　上
　蘢雪曰、一書に可笑作清長畫とあるも、桂子前年の作に『絹川堤清田の鐙』あるが故に、筆累と外題に冠らせ、再板せしにはあらぬ歟。
敵討目貫獅子
吉原藝者曾我　春常畫

藤澤入道熊坂傳記　三　清經畫
雷臍喰金　三　同　上
怪談夜行　三　清長畫
善光寺御本尊傳來記　二
ゑびす大こく日出度春　二　谷久和畫
市川五粒追善記　湖龍齋畫
四代目市川團十郎(夜雨庵五粒)は、安永七年二月二十五日七十歳にて歿せり。

○

蘢雪曰、本年頃に新作家の數を增せしも、著作の數は前年に及ばず。されど、黑本物と戲作物とは、恰も互角にして作數相等しく、清經一人黑本側に立ちて對抗するものゝ如し。

安永八己亥年

作者

戀川春町　三十六歳
吳增左
文溪堂　米山鼎我の別號

金巾齋
喜三二　四十五歲
柳川桂子
物愚齋於蓮
蓬萊山人龜遊
市場通笑　市場通笑、名は寧一、字は子彥、通稱小平二、俳名竹筆、教訓亭と號す。元文四年江戸に生れ、岡附鹽町に住し、表具屋を業とし、常に戲作を好み、通笑を以て作名とせり。本年四十一歲。
黄山堂　雀田氏、名は安兵衞、又易兵衞に作る、黄山堂は其號なり。狂名一節千杖、寶曆七丁丑年江戸に生れ、本所に住し、後神田富澤町に移居す戲作及び繪畵に巧みなりしが、後年狂歌の判者となり、戲作を絕てり。其作名に多く南陀伽紫蘭の名を用ゆ。本年二十三歲。
伊庭可笑　伊庭氏、名は猪與八、堪亭と號す。延享四年江戸に生る。可笑は其作名なり。當年三十三歲。
白馬

畫　工

戀川春町　三十六歲
北尾政演　十九歲
鳥居清長　二十八歲
鳥居清經
勝川春章
湖龍齋
鳥山豐章　姓は源、鳥山氏、名は信美、字は豐章、通稱勇助、後勇記と改む。紫屋と號す。狂名筆の綾丸、志水燕十、及び奈蒔野馬鹿人等は其作名なり。畫工鳥山石燕の男にして、父の畫法を受け、喜多川歌麿と稱し、名手と呼ばる。燕岱齋裡町齋、一窓主等を畫號に用ゆ。始め根津に住し、辨慶橋に移り、久右衞門町に轉じ、後馬喰町三町目に移轉すと云ふ。寶曆三酉年を以て生れ、本年二十七歲なり。爾餘は天明元年作者の項、志水燕十の條下に記せり。

板　元

鱗形屋孫兵衞
鶴屋喜右衞門
伊勢屋次助

岩戸屋源八

蔦屋重三郎　通油町に住す。喜多川氏。耕書堂と號す。屋標富士山形の下に蔦の葉なり。俗稱蔦重或は蔦十。

奥村源六

西村與八

雜記

二世巴扇堂生る。

○

橘町藝者辨天お豐等喧傳せらる。

神田小柳町生花の師匠某、其門人の小女を犯し獄に下る。流行唄市中に傳はる。翌年此事實を基とし『世諺花師匠』の戯作出板す。

歌念佛の飴賣出づ。「なまいだ飴」とて流行す。六年頃よりなりと云ふ。

去年夏頃より出でし「あんけらこんけら糖」賣の唄流行す。

書目

夫は楠木是は嘘氣　楠無益委記　袋入三　春町作　自畫

名作二十三部の內

青樓いきちよん〳〵　二　政演畫

一書に政演畫風、名不出とあり

はやりうたあんけらこんけら止而道致虛錄

虛言彌二郎傾城誠　三　通笑作　清長畫

栗津原新吉原旭緣起那須野傢　三　喜三二作　春町畫

傾城常陸藝者お照浮世奢判官　三　呉増左作　清經畫

善光寺御利生通鳧寢子美女　二　黃山堂作　豐章畫

蓜雪曰、一書に窪田春滿の畫作とあり。本書卷末に黃山堂作と署名し、且つ其名下の印に片假字にて［シユンマム］とあれば、俊滿の作に相違なきも、畫工の名は署しあらず。

金銀先生再寢夢　三　春町作　自畫

姉二十一妹戀婿　二　可笑作　清長畫

曲輪雀大通先生　三　金中齋作

七人藝浮世將門　二　清經畫

懸直なし正直噺　三　通笑作　清長畫

大中黑名香勝凱　二　文溪堂作　清經畫

廓花扇之觀世水　袋入三　喜三二作　政演畫

天明元年『通開扇子花』と外題替にて再板す。

腹京師食物合戰　二

一書に、春町歟未詳と見え、又他の書には清經畫歟と記せり。

安房州里見合戰　三

黑本の再板なるべし。

案内手本通人藏　二　喜三二作　春町畫

此戲作大當りなり。後年忠臣藏の異作多しといへども、皆是に倣ふて著作す。

籠目〳〵籠中鳥　三　通笑作　清長畫

日照雨狐の嫁入　二　同　上　同　上

文化二年豐國畫にて外題を『五風十雨狐嫁入』と改め再板す。

卯花重奥州合戰　三　桂子作　清經畫

黑本外題直し也。

鴨呼勇四人輿市　三　桂子作　清經畫

黑本外題直し也。

名取菊黄白長者　三　政演畫

一書に、政演自畫作とあり。

日東國三曲之鼎　二　政演畫

豐芥子云、十寸見河東、竹本春太夫、富本豐志太夫（二代目豐前太夫）此三太夫を呉魏蜀に擬して戲作す。

東都見物左衞門　二　清經畫

一書に松龍舍作、北川豐秀畫とあり。

隅田川梅若物語　三　清經畫

黑本の古板直し也。

眼明仙人髯仙人　袋入二　通笑作

寛政十二年外題を『謀得世人情』と改め再板せり。

翌安永九年、此後篇『傾城貫三略之卷』を出板せり。

とんださぶれ金平異國巡　三　呉增左作　清經畫

神力應護蟻通御本地　三　文溪堂作　同　上

[illegible]天竜若紳子　三　同　上

黑本の古板直しなり。

敵討鞍馬天狗　三　文溪堂作　清經畫

親父香早學問　二　お連作　春章畫

其數々酒の癖　二　通笑作　清長畫

御物好薄雪染　三　呉增左作　清經畫

初夢富士高根　二　同　上　同　上

甚三紅絹由來　三

一書に春町自畫作とあり。

七曲舍按に、安永六年新板『甚三紅』

桃太郎元服姿　二　通笑作　清長畫
又『昔語鬼十八』といふ外題にて出す。
今昔俗我面影　三　可笑作　春町畫
本書毎葉折目柱には「にた山そが」とあり。
三歳繰珠數暫　袋入　湖龍齋畫
七曲舍云、木場白猿追善の戯作。
蓜雪曰、木場白猿の歿せしは文化三年なれば、是は四代目團十郎五粒の追善作なるべし。四代目は安永七戌年二月二十五日歿せるなり。然るに外題に三歳繰とあるに因れば、本書の出板は蓋し安永九年の方當らむ歟。なれども暫く原本の儘本年の部に掲げ置きたり。
怪談豆人形　二　文溪堂作　清經畫
毬唄雛御山　二　同上　同上
七福神親方　三　同上
大強化羅敷　白馬作　政演畫
古々路の鬼　二　龜遊作
心能春雨晰　二　清經畫
大通人穴救　三　通笑作　清長畫
壽渡海物語　清經畫

御伽太平記　十
廓噺晦日月　三
洒落本の名作『契情虎之巻』を草双紙に出せし初めなり。此後追々出板。
昔扇金平骨　二　桂子作　清經畫
黑本の外題直しなり。
仇競夢浮橋　二
新内節を草双紙に作りしは是を最初とす。
朝顔姫物語　三　清經畫
黑本の外題直しなり。
彈的東風俗　三　文溪堂作　清經畫
白拍子お豐の傳、洒落本に二板、草双紙に二板あり。大に行はれしものと見ゆ。
いろは短歌　一　清經畫
一書に清長畫とあり。
教訓譬幸　二　清經畫

○

蓜雪曰、市場通笑、伊庭可笑、並に南陀伽紫蘭、同時に作家として顯はれ、戯作界は漸次勢力を得るに反し、黑本側は益萎縮し、依然清經一人代表

者となりて、古作の黒本を再板し、新勢力に對峙し、殿戰力めたるも、僅に四分の勢力を維持したるに過ぎず、遂に殿軍の將たる清經も、本年限りに畫筆を折りて、潔く戲作者の軍に其城郭を明渡しぬ。

而して、旭日沖天の活氣ある戲作界は、益時好に投じて頗る旺盛なるが、其取材は、花柳界殊に藝者の穿ちと、又一面には大通の洒落とにありて、可笑味で專らにすると、諷刺を主とするもの、竝に穿ちを得意とする者等は、作者の長所によりて各差異はあるも、概して所謂軟派を作意となす者多かりしなり。金々先生の作出てより僅四年にして、黒本は終に滅ぼされぬ。

安永九庚子年

作者

喜三二　四十六歲

市場通笑　四十二歲

南陀伽紫蘭　二十四歲（八年黄山堂の項參看）

文溪堂

物愚齋於連

伊庭可笑　三十四歲

四方屋本太郎　四方山人一時の假號なるべし。山人は太田氏、通稱直次郎、後八右衞門と改む。名は覃、字は子耜、南畝と號す。狂名四方赤良、作名を四方山人と稱す。蜀山人、杏花園、巴人亭、遠櫻山人、竹羅山人、石楠齋、及び南極老人等皆其別號なり、寬延二巳年三月三日江戶に生れ、牛込に住し、後駿河臺に移居す。狂詩狂文に長じ、殊に狂歌の中興者たる事、普く人の知る所なり。其戲述多からざるも、概して佳作多し。本年三十二歲。

一竹齋達竹

芝全交　山本氏、通稱藤十郎、交遊と號す。芝神谷町に住し、大藏流の狂言師にて、赤羽觀世座に出勤せり。作名芝全交、又司馬全交、或は月池とも稱せり。

常磐松

女嬪堂

四國子
米山鼎我　文溪堂と同人。
窪春滿　南陀伽紫蘭と同人。
勝川春旭　畫工勝川春章門人にて、稀に自畫作の草紙を出せり。
勝下逸人
王子風車　或は市場通笑の假名ならむ歟。
松泉堂　馬喰町二町目書肆永壽堂西村與八の號なるべきも、只一時の假號にして、代作者の假設にかゝるものなるべし。
山東京傳　岩瀨氏、名は醒、字は酉星、幼名甚太郎、後傳藏と改む。初灰田を氏となす。寶曆十一年に生る。始め畫工たりしが、戯作に從事し、遂に一家をなせり。山東庵と號す、醒齋、甘谷、菊軒、醒々翁等其別號なり。又狂名を身輕折助と呼べり。作系詳ならざるも、芝全交の作意を愛慕せしものゝ如し。本年二十歲なり。
北尾政演　前出山東京傳の畫名なり。本年より自畫作物を出せり。

畫　工

北尾政演　二十歲
北尾三二郎　即ち政美なり。本年二十歲。
北川豐章　二十八歲
勝川春常
鳥居清長　二十九歲
勝川春旭　勝川春章門人なり。
勝川春好　通稱傳次郎、左筆齋と號し、勝川春章門人にて、世に小壺と稱せり。長谷川町に住す。左筆に名あり。後二世勝川春章を襲ぎしが、晚に遁世し、麻布善福寺に入り、春好坊と呼べり。
北尾重政　北畠氏、通稱久五郎、のち佐助と改む。幼名太郎吉、橫山町の書肆須原屋三郎兵衞の二男なり。大傳馬町二町目に住し、晚年根岸大塚御嶽山向に卜居す。紅翠齋、恒醉夫、一陽井、台嶺、花藍、及び醉放逸人等の數號あり。書道の他に㕝本板下の筆耕に巧みなりしといふ。元文四未年に出生し、本年四十二歲なり。
勝春朗　中島氏、名爲一、通稱鐵藏、幼名を時太郎と呼べり。安永六年勝川春章の門に入り、又私に狩野友川に就き畫法を受く。事露れ勝川を逐はれ、

尋で友川の爲めに破門せらる。乃ち去て住吉廣行、及び司馬江漢等の門に遊べり。傍ら戯作を著し、時太郎可候、是和齋、魚佛、白山人等の作名を用ゐ、別に不染居及び九々蜃等の別號あり。其畫名最多し。即ち勝川春朗、勝春朗、叢春朗、群馬亭、魚佛、可候、二世菱川宗理、辰齋、辰政、雷信、雷震、雷斗、戴斗、葛飾北齋、錦袋舍、爲一、畫狂人、卍翁及び卍老人等なり。頗曲畫に長ず。而して住居を轉徙するの奇癖ありて、一生に九十三回の多きに及べりとぞ。其出生は寶暦十庚辰年九月甲子の日にして、本年二十一歳なり。

門牛齋秋童
一竹齋達竹

板元

奥村源六
西村與八
蔦屋本店
蔦屋重三郎
丸屋小兵衞
伊勢屋次助
岩戸屋源八
村田次郎兵衞
鶴屋喜右衞門

雜記

三代目尾上菊五郎生る。

〇

四月朔日より回向院に於て目黒祐天寺阿彌陀如來開帳す。可笑に作あり。

當時淺草寺境内因果地藏尊靈驗ありとて參詣者群集す。草紙中に地藏の事往々見えたり。安永四年十二月頃より參詣者はあり。

婦女の燈籠鬢流行す。

「大きにお世話へ」の唄流行す。

書目

虚言八百萬八傳　三　本太郎作　清長畫
名作二十三部の内。一書に清經畫とあり。

鐘入七人化粧　袋入三　喜三二作　重政畫
名作二十三部の内
天明元年『漉返柳黑髮』と外題替再板す。
此冊子大當りに付、翌年青本三冊物となし、改題

再板せしなり。

はやりうた大きにおせわ金金金平　二　達竹作　自畫

上の一表紙裏に「深川根元四季のうた所三下りぶし大きにおせわへ」斯くありて流行唄を出す。䕃雪曰、一書に此作を馬琴の初作とせるは奈何にや、馬琴は今年十四歳なり。作は兎に角挿畫は到底不可能ならむ。蓋馬琴の別號に迷はされし故なるべし。本書卷尾に一竹齋達竹戲書戲作と明記しあれば、馬琴の筆にあらざること明らけし。又此流行唄「大きにお世話へ」は、裏表紙の内面にも八首を記し、上表紙の裏面の分とも、都合十五首を掲げ載せたり。

一生德兵衞三の傳　三　通笑作　春朗畫

古今吉原噺之繪有多　袋入　紫蘭作　政演畫

浦島太郎二度目之龍宮　二　通笑作　清長畫

鎌倉山紅葉浮名　三　文溪堂作　同上

威氣千代牟物語　二

口合ばなし目貫

津以曾無弟甚六　三　通笑作　清長畫

山谷通伏猪の床　三　同上

大通一寸廓茶番　三　春常畫

時花兮鷄茶曾我　三　全交作　重政畫

十二支鼠桃太郎　三　鼎我作　三二郎畫

世の噂花の師匠　二　春旭畫

三世左右大雜書　通笑作

東育御江戸の花　三　清長畫

艶摸樣曾我雛形　三　政演畫

一書に政演自畫作となし、他の一書に常丸作とあり。本書毎葉柱に「いとう」とあり。

銀世界豐年鉢木　二　お連作　秋童畫

一書に清長畫とあり。

山入鼠桃太郎噺　三　三二郎畫

寛政四年『山入桃太郎昔噺』と改題再板せり。

祐天和尚念力功力絹川物語　三　可笑作　清長畫

目黑祐天寺開帳に由り著作せしと見えたり。

白井權八幡隨長兵衞比翼塚　一

彈手餘多谷音本調子　三　俊滿作　三二郎畫

團子兵衞おばゞ燒餅噺　二　政演畫

親父布子鳶擢　三　通笑作　清長畫

飛間違矢口噂　二　可笑作　同上

千秋樂鼠嫁入　二　清長書
振袖近江八景　三
落噺茶呑友達　三　三二郎書
本の能見世物　三　通笑作　清長書
寛政二年再板せし歟。
傾城買三略卷　袋入三　通笑作
前編『眼明仙人替仙人』は安永八年出板なり。
蔵雪曰、式亭三馬所藏せし原本に、「安永の頃流行せし袋入草双紙なり」と三馬の書入れあれば、當時好評ありし作なるべし。
大通間違曾我　三　喜三二作　重政書
蔵雪曰、天明二年出板の『恒例間違曾我』は、此書の外題替再板にあらざる歟。
腹中能同士　二　女嬪堂作　清長書
一書に少振堂作とあり。
俵化狐夜話　二　可笑作　清長書
此冊子『俵化狐通人』と同一なるべし。
伊達模様見立蓬莱　二
遊人三幅對　二　政演書
大通其面影　二　常磐松作　清長書

龍都四國噂　三　喜三二作
頓作時雨月　三　清長書
諸事米の飯　三　通笑作　同上
近頃島巡り　三　同上　同上
珍說女天狗　二　同上　同上
憎口返答返　袋入二　同上　同上
通略三極志　三　四囲子作　同上
通人三極志　三　春旭作　自書
青樓三蒲閣　五　春好書
今樣喜還城　二　清長書
野黄之穴扒　袋入二　通笑作
桃太郎寶噺　三　三二郎書
通者云此事　三　政演書
新狂言梅妻　三　春常書
大通人好記　袋入三　喜三二作　春町書
本書は紙數十八葉なり。
笑語御臍茶　三　臍下逸人作　政演書
一書に政演自畫作とあり。
夜野中狐物　二　風車作　政演書
天明三年通笑の名にて、『間違狐女郎買』と改題再

板せり。

掇化狐通人　三　可笑作　清長畫

此書『掇化狐夜噺』と同一なるべし。

藝者呼子鳥　二　松泉堂作　豊章畫

『藝者虎之巻』と同書にや、辨天お豊お富の噂ばなしなり。畫工北川豊章は北川歌麿の師なるべし。洒落本をも畫く。

蓜雪曰、豊章は歌麿の畫名なれば、想ふに彼の代作にして、結局歌麿の自畫作なるべし。

いろは歌　一

扇屋かなめ 傘屋六郎兵衛 米饅頭始　三　政演作　自畫

洒落模様飛羽衣　三　政演畫

薬物見立御世話　二　同上

顔而知勸善懲悪　三　春常畫

本書毎葉柱には「梅姿」とあり。

娘敵討古郷の錦　三　京傳作　政演畫

本書巻尾の印章に、京傳戯作の文字あり。

夏祭其翌年　三　政演畫

豊芥按に、此六部作者の名不知、畫工政演畫作なるべし。

蓜雪曰、政演畫と記せしもの及び畫作と明記せしもあれど、春常の畫も交加はれり。

○

蓜雪曰、作者として芝全交、京傳、四方山人等新に出で、又重政、春朗並に春好は畫工として顯れ出で、文壇愈賑かにして、作家と畫工は、相互に其筆を揃へて天明の期に進み入りたり。

天明元辛丑年（安永十年改元）

作者

芝全交
南陀伽紫蘭　二十五歳
伊庭可笑　三十五歳
喜三二　四十七歳
市場通笑　四十三歳
北尾政演　二十一歳
蓬萊山人龜遊女
王子風車
四方屋本太郎　三十三歳

當世　翌二年に見えし古風と曰へる作者と同人にて、畫工政美の假名なりとの説と、又畫工春朗、即ち北齋の匿名ならむとの説あれど、果して然る耶否を識らず。

在原艶美　又蘂平艶美と曰へり。洒落本にも作あり。

是和齋　春朗即ち北齋が一時の假號なり。當時「これわいせい」といへる唄の囃子詞流行せしに因みて、戯れに命名せしなりと云ふ、本年二十二歳　小傳天明二年畫工春朗の條下に記す。

志水燕十　畫工鳥山豐章、即ち喜多川歌麿が作名なり。本年二十九歳

「狂歌知足振」には「筆の綾丸を歌麿となし、志水燕十を鈴木庄之助、根津住戯作者と記し、明自に別個の人となせるも、大に訝しき事なり。歌麿が狂名を筆の綾丸と呼び、作名に志水燕十、或は馬鹿人等の名を用ゐる事、黄表紙のみならず、洒落本等に尠からず、然れど「知足振」に斯く別個に記さ・れあるに由り、特に附記す。尚餘の略傳は、安永八年畫工豐章の條下に記せり。

畫工

北尾重政　四十三歳
北尾政演　二十二歳
北尾政美　二十一歳
北尾三二郎　二十一歳（即ち政美なり）
鳥居清長　三十歳
勝川春常
喜多川千代女　喜多川歌麿門人なり、
南陀伽紫蘭　二十五歳、畫名は即ち窪春滿なり。

板元

西村與八
奥村源六
松村彌兵衛
岩戸屋源八
伊勢屋次助
蔦屋重三郎
鶴屋喜右衛門
村田次郎兵衛

雜記

林屋正藏生る。

畫工岩窪北溪生る。
四方山人黄表紙の評判記『菊壽草』を著す。巻中に曰く、「草双紙は大人の見る物となりたり」と。

○

十月二十日より淺草寺觀世音開帳す。翌年出板の作に此事を書込みし草紙あり。
語尾に「これわいせい」といふ囃子詞ある小唄流行す。

書目

大違寶船　三　全交作　重政畫
名作二十三部の內。
本書毎葉柱には「龍宮」とあり。
南州北州遊客古事附太平記　三　紫蘭作　政演畫
おめでたい古呂利山椒味噌　三　可笑作　清長畫
變入一代記吉原傳授仕習鑑　袋入三　全交作　重政畫
榮花程五十年蕎麥價五十錢見德一炊夢　三　喜三二作　同上
此作大當りなり。
身貌大通神略縁起　袋入　可笑作　清長畫
運附太郎左衛門噺　三　通笑作　政演畫
一書に政美畫とあり。

蓕雪曰、安永初年頃に富川吟雪自畫作にて、「運附太郎左衛門」あり。書名同じ樣なれど、作者畫工及び作意は全然異なれり。
富士屋淺間屋煙競蕎麥屋槇　三　全交作　政演畫
一書に政美畫とあり。
大通故事附含我　當世作
異國針命の洗濯　通笑作
敵討壬生寺望月　三
針程事棒程目鏡　二　紫蘭作　自畫
當世大通佛開帳　三　全交作　重政畫
山本喜內天狗噺　二　政美畫
通人いろは短歌　袋入一　全交作　政演畫
家內手本町人藏　袋入　艶美作　同上
目出たし粉屋鼠　二
女郎買糠味噌汁　三　通笑作　政美畫
一書に政演畫とあり。
化物世繼の鉢木　五　可笑作　清長畫
四方山人の評判記『菊壽草』に、本書を三冊物とせしは非なり。
息子妙薬一粒萬金丹　二　喜三二作　政演畫

雀敵討冷水灰毛猫　二　全交作　清長書

田鼠化鶉の白拍子　二　可笑作　政演書

雙蝶全盛毛生太郎月　三　同　上　清長書

紅皿欠皿奥州ばなし　三　同　上　同　上

かゝみ様内にか寳生房撰多　三　通笑作　同　上

おさな兄弟敵討魚名劍　三　同　上　政演書

知不意ノ珍御世之御寳　袋入三　同　上　清長書

外にはないぞや極通人由來　二　可笑作　同　上

大通開通光運開扇子花　三　喜三二作　政演書

安永八年板、『廓花扇之觀世水』の外題直し、再板なり。

本性名所有難通一字　二　是和齋作　政演書

蘢雪曰、四方山人の『菊壽草』に、政演の書とあれど、一説に春朗の自書作ならむといへり。

化物二世物語　袋入二　燕十作

突渡最惠來榮　三　通笑作　清長書

七笑顔當世姿　三　政演作　自　書

朝比奈唐子遊　三　可笑作　清長書

古寳家ヒ加減　三　同　上　同　上

初夢寳山吹色　三　同　上　政美書

久知滿免登里　二　政演作　自　書

桃太郎一代記　五　政美書

此書上作の評あり。

福徳夢想大黒銀　三　可笑作　三二郎書

異國出見勢吉原　三　紫蘭作　政演書

一書に政美書とあり。

俚諺もちは餅屋　三　通笑作　清長書

寛政二年慈悲成作にも是に似し外題の書あれど別種なるべし。

東都土産大津名物　二　可笑作　政演書

嗚呼不儘世之助噺　三　龜遊女作　清長書

一書に重政書とあり。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

大通時代丹の嫁入　二　通笑作　清長書

一書に政美書とあり。

漉返栅黒髮　三　喜三二作　重政書

前年出板『鐘入七人化粧』の外題替再板なり。

其後瓢箪物　二　風車作　政演書

前年出板『夜野中狐物』の後編なり。

年始御禮帖　二　本太郎作　千代女書

歳旦狂歌集なり。

耶鄲夢之枕	三	通笑作	清長畫
龜鶴見向面		同　上	
通一聲女暫	三	全交作	重政畫
ほへと短歌	三	通笑作	政美畫
交古世昔噺	二	全交作	同　上
紙屑身上噺	袋入三	可笑作	同　上
間違月夜鍋	二	通笑作	同　上
烏行水彥草	三	同　上	同　上
化物鼻が挫	二	同　上	同　上
通增安宅關	二		同　上
化物箱入娘	二	可笑作	同　上
緣組連理簓	三		政美畫
振袖江戸紫	三		春常畫
敵討駿河花	三	可笑作	政演畫

一書に政演自畫作とあり。

鬼の子寶	三		清長畫
交雜講釋	五	可笑作	重政畫
落噺菊壽盃	三	同　上	政美畫
常々草	袋入三	通笑作	

通笑に果して此作あるや疑はし。

○

文軒翁云、稗史の作者益競出て滑稽を競ふ。全交可笑紫蘭等其名高し。年代記に草双紙いよ〱洒落る事を第一とす。當世風體此時より初まると云ふ。又今年四方山人草双紙評判記を著し、『菊寿草』と云ふ。草双紙は大人の見るものとなりたりといひしは此時の事なり。袋入の双紙の名を得たるを翌年の春青本に直して出すこと初まり、『柳の黑髮』は去年袋入の『鐘入七人化粧』なり。此類數多あり。清長は當世の女風俗に妙を得たり。『世繼鉢木』に猫の女に化けし處、半面を女半面を猫に畫きし趣向最妙なり。後世の變化物の圖に種々の巧みを爲す濫觴と云ふべし。南陀伽紫蘭は前年に窪春滿といへる同人なり。後年は狂歌を專らにして尙左堂俊滿と號す畫をも能くす。

天明二壬寅年

作　者

北尾政演　二十二歳
南陀伽紫蘭　二十六歳
伊庭可笑　三十六歳
喜三二　四十八歳
戀川春町　三十九歳
市場通笑　四十四歳
芝全交
是和齋　二十三歳
在原艶美
金中齋
宇三太　喜三二門人なり
萬象亭　中原氏、名は中良、字は虎臣、始森島甫齋と曰へり。桂林と號す。狂名竹杖爲輕。平賀源内の門に入り、作名を源平藤橘と呼び、淨瑠璃の作あり。後二世風來山人、二世天竺老人の號を襲ぎ、又芝全交の門に入り、月池老人、築地善好等の號あり。戯作には森羅亭萬象、竹杖爲輕、萬象亭、及び善好等の數號を用ゐたり。寶曆四戌年に生る。本年三十一歳。
幸井山椒

瓢露
古風　天明元年の當世といへる作者と共に、北尾政美或は春朗の假名ならむとの説あるも、當否審ならず。
櫻川杜芳　岸田氏、芝神明前に住し、櫻川と稱す。杜芳は其作名なりと。寛政年中歿すと云ふ。
北尾政美　小傳安永五年畫工の項に記せり。本年二十二歳。
四方山人　三十四歳
風物
豐田里舟
魚佛　畫工春朗が一時の假名なり。本年二十三歳。
窪春滿　南陀伽紫蘭の畫名なる事前に出せり。
兒童軒雪岨

畫工

北尾政演　二十二歳
北尾政美　二十二歳
鳥居清長　三十一歳
戀川春町　三十九歳
北尾重政　四十四歳

勝川春常
春朗　二十三歳
勝川國信
勝川春英　磯田氏、通稱久次郎、新和泉町の家主なり。勝川春章の門人にして、九德齋と號し、明和五子年を以て生る。本年十五歳なり。

板元

村田次郎兵衛
岩戸屋源八
伊勢屋次助
蔦屋重三郎
松村彌兵衛
西村屋與八
奥村源六

雜記

四方山人、今年亦黄表紙評判記『岡目八目』を著し、冊子を月旦す。

〇

三月七日三井親和歿す。草双紙挿畫中の屏風幅物等に親和筆など記されしにても、當時流行の書家なりしことを知らる。

此頃地口の變體なる語呂流行す。

書目

手前勝手御存商賣物　三　政演作　自畫
下戸上戸いろは短歌　政美畫
花が見たくば吉野の由來　三　紫蘭作　政演作
唐土魂日本作石千屋繁昌　三　可笑作　清長作
一書に重政の畫とせり。
嘘から出た傾城の貞女誠から出た町人の男氣名高江戸紫　五　可笑作　重政畫
龍宮方便淺草利生網大慈大悲換玉　二　宇三太作　同上
岩井杜若松本錦孝大坂土産大和錦　萬象作　春英畫
萬亭曰、天明四年以前に萬象亭に青本の戯作ある筈なけれど、原本に掲げあるゆゑ、茲に載するものゝ、頗る疑はしく思はる。又松本錦江岩井杜若が此頃大阪より歸京の點、調ぶるに所見なし。追て考ふべし。
夫は小倉山是は鎌倉山景清百人一首　二　喜三二作　重政畫
何處の紺屋で染たやら雛形意氣眞顔　三　春町作　自畫
思付たり替つたり五郎兵衛商賣　三　紫蘭作　政演畫
天竺德兵衛石川五右衛門花珍奴茶屋　三　山椒作　春常畫

[illegible]我頼人正直	三	春町作	自畫
[illegible]御夢想鯉窟		瓢露作	
[illegible]雙蝶紋所	二	通笑作	清美畫
春狂言御仕着恒例間違曾我	三	喜三二作	重政畫
安永九年板「大通間違曾我」の再板なるべし。			
寫男昔通風作勢物語	三	可笑作	清長畫
一枚外題二返摺なり。			
風雷神天狗落種	二	奄交作	政美畫
飯嫌女着同斷何	三	杏園作	同上
花の春上手談義	四	通笑作	清長畫
四天王大通仕立	二	是和斎作	春朗畫
昔々岡崎女郎衆	二	通笑作	清長畫
地獄沙汰金次第	二	可笑作	同上
樂和富多數奇砂	三	同上	同上
故事附千本花王		杜芳作	同上
助六利生ばなし	三	政美作	自畫
隅田川土手青柳	三		政美畫
昔噺灋言桃太郎	三	可笑作	清長畫
なついぞ金持曾我	袋入三	通笑作	同上
菅原神詠尾上塚再評判	袋入三	艶美作	政演畫

一書に天明三年の出板とせり。

落噺福わらひ		四方山人作	
一書に喜三二作春町畫とあり。			
御代參丑時詣	三	通笑作	清長畫
舌切雀三の切	二	同上	同上
化物通人寢言	二	政美作	自畫
十二支大通話	袋入二	金中齋作	春常畫
化物曾我物語			
七福人大通傳	二	可美作	政美畫
一書に政演畫とあり。			
敵討染分手綱	三	可笑作	政演畫
一書に政美畫とあり。			
染直鴬色曾我	三	喜三二作	春町畫
古板の外題替再板なるべし。			
豆男江戸見物	袋入三	通笑作	清長畫

葩雪曰、豆男を材とせる黄表紙中にて其畫の巧みなるは此册子を最とす。豆男の所在を發見し難きやう苦心せしものと見えたり。就中五葉目の裏の挿畫最巧妙なり。

去御子様御望に付猫嫁入	二	通笑作	清長畫

金涌物壬歳　三　全交作　重政畫
男株毛氈帽　三　風物作　清長畫
長生虎之巻　三　通笑作　同上
煙草擧言葉　三　同上　政演畫
家傳壽命樂　袋入二　同上　重政畫
教訓蚊之咒　三　同上　政演畫
擲討鼻上野　三　杜芳作　國信畫
藝者五人娘　二　可笑作　清長畫
當世菊壽語　三　通笑作　同上
名響鐘龍頭　二　政美畫
珍說雷婚禮　二　可笑作　清長畫
鎌倉通臣傳　二　魚佛作　春朗畫
市川三升圖　三　杜芳作　政演畫
翌三年後編『能時花升』出板せり。
祝堺縞壽棚　三　可笑作　政演畫
一書に春町作とあり。
本書は二枚外題にて古風殘れり。
蜀魂三津啼
初代阪東三津五郎追善の作なり。三津五郎は天明二年四月十日三十八歳にて歿せり。

通人擲物語　二　春滿作　清長畫
寛政十二年本書を『昔男意氣成平』と改題して再板せり。
敵討梅と櫻　三　里舟作　清長畫
文化二年楚滿人作に同名の書あり。
落語玉手箱
四方山人の作なりと云ふ。
阿部清兵衛見通占　三　通笑作　清長畫
道樂世界早出來　袋入三　里舟作　同上
通神寶船　三　雪嶋作　政美畫

○

文軒翁云、今年も四方山人評判記『岡目八目』を著す。草双紙の評判記、此兩年に限る歟外に見當らず。京傳戯作の『御存商賣物』に初めて畫作の名を顯し、文化の末まで四十餘年の間妙作多し、實に稗史作者中の一人と稱すべし。『俄の誕生』に投牌の眞圖あり、翌年に出たる『毛通人』又後に京傳作『むだがるた』其餘の本にも投牌賭博の圖所々に見えたり。此頃は斯かる事も憚らず書きしが寛政の初めよりは憚りて書き出さぬこととなりたり。又

稗史の寓言は勸善懲惡の一端にして、何事をか說き何事をか書かざらむや。享和以後に敵討の本出てより、卷毎に人を殺し、火を放ち、種々の慘毒の體を極めたり。人を殺し火を放つは刑の大なるものなり、投牌賭博は刑の小なるものなり、後世の稗史、刑の大なるを憚らずして、刑の小なるを憚る事、理に違ふと謂ふべき耶。

天明三癸卯年

作者

喜三二　　四十九歳
戀川春町　　四十歳
芝全交
岸田杜芳
南陀伽紫蘭　二十七歳
四方山人　三十五歳
市場通笑　四十五歳
伊庭可笑　三十七歳
在原艷美
文溪堂
深川錦鱗
豐田里舟
山東京傳　二十三歳

奈蒔野馬鹿人　志水燕十、即ち畫工喜多川歌麿の作名なる事前に記せり。當年三十一歳。

南仙笑楚滿人　通稱楠彥太郎、志循房と號す。別號柚人、又待名齋今也と稱せり。芝宇田川町に住し手跡指南を業とす。尤他書に據れば、書肆と曰ひ板木師と曰ひ、或は醫師なりと曰ひ、今孰れか其眞なるを知るに由なし。專敵討の著作に長じ、斯界一方の文傑と稱せらる。寶延二巳年を以て生る。本年三十五歳なり。

東雲齋　武州與野の住なりとの外知るに由なし。

鎌好　或人曰く、嫌好なるべしと。然れども其傳詳ならず。

宿屋飯盛　石川氏、字子哲、通稱五郎兵衛、始め七兵衛と曰へり。父は畫工石川豐信、小傳馬町三町目旅店糠屋の家を襲ぎ、後故ありて退轉し內藤新宿に移居せり。六樹園と號し、又五老齋、五老蛾術齋

等の別號あり。後狂歌の宗匠號を允許せられ、弟子三千人を有せりといへり。戯述の書多しと雖も、黄表紙の作は僅に二三種に過ぎず。寶暦三酉年十二月十四日亥刻を以て出生し、本年三十一歳なり。

蝸牛房屯ト

井久治茂内　又幾智茂内と書せり。其傳審ならず。

鄰生　戀川春町の假名ならむ歟。

無中點作

雀千聲　鶴一聲と號す。伊庭可笑の門人なり。

新杜　四方山人の門人なり。

畫工

北尾政美　二十三歳

北尾政演　二十三歳

鳥居清長　三十二歳

戀川春町　四十歳

北尾重政　四十五歳

勝川春道　即ち春童なり。

勝川春林　勝川春章門人なり。

勝川春潮　通稱吉左衛門、中林舍と號す。勝川春章門人なり。馬喰町に住し、中頃日本橋大工町に轉じ。其後瀬戸物町に移れり。此頃尙左堂俊滿の門に入りしにや。吉左堂俊潮と改號せり。また左筆を能くせりと云ふ。

喜多川歌麿　三十一歳

板元

鶴屋喜右衛門

鱗形屋孫兵衛

村田次郎兵衛

和泉屋市兵衛　芝神明前に住す。由中氏、甘泉堂と號す。屋標は泉市の文字にて、通稱も同じく泉市なり。

伊勢屋次助

岩戸屋源八

蔦屋重三郎

松村彌兵衛

西村屋與八

奥村源六

伊勢幸

江崎屋

雜記

柳亭種彥生る。

四月二十五日竹杖爲輕、元の木阿彌及び平秩東作催主となり、戯作者狂歌師を相會し、「寶合」の第二回を柳橋河內屋半次郎の樓上に開會す。其出品百十餘種內主品五十餘種は催主の出品にして、爾餘は客品に係る。

六月二十日伊庭可笑歿す。享年三十七。四谷大木戶理性寺に葬る。法號玄如院要山日昭居士。

○

此頃より京都烏丸枇杷葉湯賣江戶市中を賣步行くと云ふ。

書目

長生見度記　二　喜三二作　春町畫

名作二十三部の內。

寛政四年蔦屋重三郎之を再板す。

（右通題簽）多雁取帳　三　馬鹿人作　歌麿畫

名作二十三部の內。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

（昔時通神當時通人）三太郎天上廻　二　喜三二作　重政畫

（湯島の歸綱八島の入水）猿蟹遠昔噺　二　春町作　自畫

（難波の通者江戶の野暮）鶴の者の雄　二　全交作　重政畫

一書に政演畫とあり。

（大通天皇野暮親王）謀叛大和功　三　喜三二作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

（視聽）御無文字片脊噺　二　政美畫

一書に天明四年板とせり。

（きん平こん平）仕合な孝行　二　春町作

（放蕩張本）日本多右衛門　三　杜芳作　政演畫

（能三升圓功後編）能時花升　二　同上　淸長畫

一書に政美畫とあり。

前編「市川三升圓」は天明二年出板なり。

混雜武者愚者噺　三　全交作　政演畫

仇名草伊達下谷　三　紫蘭作　政演畫

返々日出鯛春參　三　四方山人作　春潮畫

八景卯來世能夢

仲の町晝夢見草　三　杜芳作　政美畫

敵討三味線由來　三　楚滿人作　同上

千里走虎之子欲　二　通笑作　淸長畫

願ほどき小豆餠　二　同上　政美畫

御先觜下手横好　三　可笑作　同上

早速貝三右衞門　三　可笑作　政美畫
作意妖恐懼感心　三　同上
金山寺大黑傳記　二　春町作　自畫
下總國八幡不知　三
木曾義仲一代記　五　楚滿人作
化物山加羅佐登　二
七夕姬戀の玉章　通笑作　政美畫
讀と歌通の一字　二　艷美作　同上
蓙雪曰、本書序文には『世中通會合』と記し、且つ毎葉の柱にも「よりあい」とあれば、或は孰れかゝ外題替なるべし。
間違狐の女郎買　三　通笑作　淸長畫
安永九年板「夜野中狐物』の外題替再板なり。
野暮大臣南廓遊　二　文溪堂作　春潮畫
一書に天明四年の出板とせり。
龜屋萬歲浦島榮　袋入二　錦鱗作　春町畫
鶴千歲龜萬歲儺長壽謂
此書は『龜屋萬歲浦島榮』と同一ならむ。
富貴有天牡丹餅棚有　三　通笑作　政美畫
千歲萬歲御舟之吉例　三　東雲齋作　同上

一書に天明四年の出板とせり。
遊君世界是男度比女　二　鎌好作
一書に天明四年の出板とせり。
豐前豐後兩國の名取　袋入二　飯盛作　春林畫
一書にホコ長作春英畫とあり。
立歸猿人眞似　乇卜作
文月さゝげ畑　通笑作　政美畫
新錢戲樂通寶　二　楚滿人作　同上
本所二十四孝　三　通笑作　政演畫
縱筒放唐の噺　三　同上　淸長畫
吾妻花妓女鑑
下手癖永物語　二　非久治茂内
もふ／＼怖噺　二　通笑作　政美畫
一書に天明四年板とせり。
年中故事附錄　袋入二　杜芳作　淸長畫
寛政四年之を再板せりといふ。
惡拔正直曾我　三　春町作　自畫
一書に通笑作とあり。
咸陽宮通約束　二　文溪堂作　春潮畫
一書に天明四年板とせり。

草双紙年代記	二	杜芳作	政演畫
南仙笑楚滿人の序文あり。			
柳小野ゝ助鳳箏角力	二	四方山人作	
料理献立頭天合有	三	同　上	重政畫
珍紫羅毛通人	三	全交作	清長畫
廓簸費字盡	三	春町作	自　畫
鎌倉草紙略	三	里舟作	清長畫
通言神代卷	三	春町作	自　畫
今開花御帳	二		
鐘は上野歟		京傳作	政演畫
通春歳旦開	三	杜芳作	同　上
教訓不仕候		通笑作	
大食壽命爲	三	同　上	政美畫
能息子内榮	三	同　上	重政畫
落噺玉の春	二	可笑作	
化物仲間別	二	同　上	重政畫
諸事此樣物	三	通笑作	
寶船福正夢	袋入二	春町作	自　畫
客坊客寐取	二	隣生作	春町畫
姿見淺茅原	二		

邯鄲之夢枕	二	里舟作	清長畫
兄弟大通榮	二		
壽鹽商婚禮	二	四方山人作	政美畫
賴朝一代記	五	楚滿人作	
源平總勘定	袋入二	四方山人作	歌麿畫
天明四年『梶原再見二度の賭』と改題再板せり。			
飛田高慢噺	三	里舟作	清長畫
一書に政演畫。又異本に清經畫とせり。			
新例矢口渡	袋入三	杜芳作	清長畫
寛政四年外題を『於昔今商樓通臣』と改め再板せり。			
現金猿ヶ餅	二	通笑作	政美畫
一書に重政畫とあり。			
新作今年噺	三	通笑作	政美畫
一書に政演畫とあり。			
戀名用文章	二	通笑作	
一書に錦鱗作春町畫、異本に春町作となし、他の一本には春町の自畫作となせり。			
華都末廣扇	二	點作	春道畫
一書に天明四年の出板とあり。			

紅葉の雛形　二　雀千聲作

一書に天明四年の出板とあり。

櫻草野邊錦　袋入三　飯盛作　春林畫

蓙雪曰、本書は『兩國の名取』と同一ならむ。开は單に『兩國の名取』に見えし四方赤良が跋文に因て爾かく想像するのみなるが、富本の流行を基として、同時に二種の作を出すも、不粹なるべし。或は袋入を靑本に改めて出せしものか、又は別に出せし歟、未だ二本を對照せざれば斷言し難し。又一本に、本書を天明五年の出板となせり。然らば本年の『兩國の名取』を袋入になし、外題を改め再板せしやも知れず。

富士筑波二人孝行　三　通笑　重政畫

一書に『二人孝行』を『二人同行』とあり。

通人講釋　京傳作

客人女郎　三　可笑作　政美畫

通人寶盡　三　新杜作　春潮畫

能魂膽氣

節季夜行　袋入三　春町　自畫

一書に天明四年出板とせり。

一書に寛政元年作とあり。

天の川

○

文軒翁云、楚滿人敵討を作る、此年に始まる、文化頃の敵討稗史の嚆矢と謂ふべし。『雁取帳』を『億說年代記』に喜三二の作とするは誤りなり。又『萬八傳』をも喜三二とす、是も誤りなり。『年代記』誤り多し。前靑本中吟雪と房信と別人とす。又湖龍齋靑本を畫かずと云ふも、戌年の『松茸賣』の畫は湖龍齋なり。又春常春潮も往々靑本に畫あり。

蓙雪曰、當時の戲作に通人を材料とするもの愈々多し。これ畢竟藏前連の所謂大通の全盛期なるによつてならむも、其實況を描寫する所の作家や畫工も、亦た通人の列に伍し居たるなるべし。只面白可笑しく書かむとのみにては、苦心の痕も多少あるべきに、圓轉輕妙の作のみ多きは、經歷より來りし爲めなるべし。併し文章としては取るに足らず、觀るべきは只着想のみなることは勿論なり。

天明四甲辰年

作者

竹杖爲輕　三十三歲
戀川春町　四十一歲
市場通笑　四十六歲
幾智茂內
岸田杜芳
山東京傳　二十四歲
四方山人　三十六歲
喜三二　五十歲
窪春滿　二十八歲
芝全交
萬象亭　三十三歲（卽竹杖爲輕なり）
北尾政演　二十四歲（卽山東京傳なり）
南仙笑楚滿人　三十六歲
蓬萊山人龜遊女
飛田琴太
里山
古河三蝶
唐來參和　加藤氏、通稱和泉屋源藏、伊豆亭と號す。別號唐來山人、狂名を質草少々と曰ひ、三和を作名とせり。本所松井町の娼家に入夫し、業を營めり。寬延二巳年に生れ、本年三十六歲なり。
むだ書好部
宮村杏李
常丸
鍋町
二本坊霍志藝
自惚黄山人　淺野氏、通稱幸右衛門、始池田屋久三郞と稱せり。號北水、又自惚齋、自慢齋とも號せり。横山町一町目に住し、煙草商たり。作は喜三二の門下なるべき歟。
半片　市場通笑の匿名なるべし。
黑鳶式部　山東京傳の妹なり。名は米女。黄表紙に唯一部の作あるのみ。明和八卯年に生れ、本年十四歲なり。
紀定丸　吉見氏、名は義方、通稱儀助、太田南畝の甥なり。淸水家の臣、牛込輕子坂に住し、後小日向水道端に移る。幕府の御勘定組頭を勤仕す。狂名野原雲助。後紀定丸と改む。寶曆九卯年の出生

なり。本年二十六歳。

書工

勝川春英　十七歳
勝川春童
勝川春旭
勝川春道　即ち春童なり。
勝川蘭徳　即ち春童なり。
北尾政演　二十四歳
北尾政美　二十四歳
北尾重政　四十六歳
北尾三二郎　二十四歳即ち政美なり。
鳥居清長　三十三歳
戀川春町　四十一歳
古河三蝶
春朗　二十五歳
嫌好
喜多川歌麿　三十二歳

板元

鶴屋喜右衛門
村田次郎兵衛
鱗形屋孫兵衛
伊勢屋次助
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
松村彌兵衛
奥村源六
西村與八
伊勢幸

雜記

黄表紙の袋入出づること漸多し。價一部五十文乃至六十四文。

○

富籤を各社寺にて多く興行し、漸次大流行となる。
こいつは日本などゝ、凡て愉快、美麗、上等などの意味に「日本」といふ言葉流行す。
八人藝川島歌命、當時評判高し。
三月二十四日佐野政言老中田沼山城守を營中に刺す。

書目

夫從以來記　三　爲輕作　歌麿畫

名作二十三部の内。
寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。

夫は未載是は狂歌萬歳集著微來歷　二　春町作　自畫
天笠本覺日本開帳三國・大通本地　三　琴太作　三蝶畫
一書に天明五年の出板とし黒鳶式部の作とあり。
夫は二十四孝是は符帳問大位智恵親玉　三　里山作　三蝶畫
一書に天明五年の出板とし、三蝶畫作とせり。
留守居大通家老大通其見乎有難山　二　琴太作　三蝶畫
一書に天明五年板とせり。
あはゝの三太郎あとへゝ十太郎敬褒傳　三　通笑作　重政畫
歳々花似營鹿歳面八代目桃太郎　三　三蝶作　自畫
一書に天明五年板とせり。
生德手助身儀奉助壽御夢想妙藥　三　三蝶作　自畫
一書に天明五年板とせり。
晛加羅久里義經廻　三　幾智茂内作　春朗畫
末世雜不通志傳記　三　同　上　春旭畫
小田箱竹廻之出世太平記　五　春道畫
大千世界牆之外　二　三和作　重政畫
吉備能日本智惠　二　春町作　自畫
通世界二代浦島　二　琴太作　三蝶畫

諸事無世話曾我　二　通笑作　政美畫
忠臣藏十二段目　二　同　上　春英畫
狂言好野暮大名　三　杜芳作　政美畫
花春出世十二支　二　好爾作　春道畫
鞍馬天狗三略卷　三　杏李作　同　上
大黒上福來福神　三　蘭德畫
夜が書星の世界　二　常丸作　雄好畫
新作落語笑上戸　二
大江山大通山入　袋入二　鍋町作　春童畫
嘘八百濕故知新　二　清長畫
太平記萬八講釋　三　喜三二作　重政畫
本書は二枚外題なり。
寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。
不案配卽席料理　三　京傳作　政演畫
黑鳶式部の序あり
假名手本忠臣藏
一書に天明五年板とあり。
一の富見德の夢　三　政演作　自畫
一書に天明五年板とあり。
三ヶ通傘持客氣　三　雀志藝作　政美畫

一書に通笑作とあり。
又天明三年板と同五年板との説あり。

萬象亭戲作濫觴　三　萬象亭作　政美畫
文化元年山東京傳之を校合し、改題再板す。『提徑太平記』卽ちこれなり。

昔今萬歲の島臺　三　黃山人作　政美畫
蘢雪曰、天明七年にも同じ外題の書出板あるも、五冊物にて政美の畫なり。或は增補再板せしものならむ。

卯曾我實同姉妹　三
天明三年の出板にあらぬ歟。

辰春二度目正月
同穴野狐宿屋女房移乘述之とあり。

一ッ星大福長者　三　半片作　春英畫
一書に通笑作とのみあり。
天明六年に『太印天上見物』と外題を改め再板せり。

狐令安意嗟鳴御開帳　二　　政美畫

漢國無體此奴和日本　三　四方山人作　同　上

浦山太郎兵衛新龍宮巻　三　俊滿作　三二郎畫

辰さこざい口惠方道　　政美畫
節原仲貫の序あり。

親動性桃太郎　三　全交作　淸長畫

人不知思染井　二　黑鳶作　歌麿畫

跡目論噓實錄　三　杜芳作　政演畫

天光地潛地探　　三蝶作　自　畫

江戶花名畫譽　二

馬鹿邪水犬傳　二　霍志藝作　政美畫
一書に天明五年板とせり。

髮手本通人藏　三　霍志藝作　政美畫
一書に里山作とあり。
本書を天明三年板といふと、又同五年板なりといふ說とあり。

昔斷河童物語　三　通笑作
本書は『正說河童兒』と同書なるべし。

梶原再見二度の賭　二　四方山人作　歌麿畫
天明三年板『源平總勘定』の外題替再板なり。

鎌倉親玉燒飯由來　三

化物御家髭松明　三　楚滿人作　重政畫

硯石出雲皿屋敷　三

龜遊書草紙	二	龜遊女作	歌麿畫
天慶和句文	二	京傳作	政演畫
惡癖莫言穴	三	通笑作	清長畫
閻羅三茶替	三	全交作	重政畫
復讐二葉松	五		政美畫
怪物晝寢餅	二	通笑作	清長畫
新田通戰記	二	定丸作	歌麿畫
運開扇花香	二		春朗畫
全盛大通記	三	杜芳作	政演畫
八橋調能流	三	楚滿人作	同上
化物七段目	二	幾智茂内作	清長畫
吉原大通會	三	春町作	自畫
時行諺問答	三	杏李作	
桃太郎再驅	二		
其昔龍神噂	五	春町作	自畫
新建哉龜藏	二		蘭德畫
新米提薩業		二本坊作	
金平一の富	二		
日域數入始	三		春道畫
德本養老瀧	三		同上

本書は『日域數入始』の外題替なるも、兩書とも本年同時に出板なりしや否や、疑はし。

飲中八人前　三　通笑作　清長畫

一書に天明五年板とあり。

正說河童兒　三　通笑作　重政畫

一名を『昔噺河童物語』といふ歟。

噓無誠一卷　袋入二　爲輕作　政演畫

一書に寛政元年板とあり。

○

文軒翁云、萬象亭一に竹杖爲輕と號す。『以來記』を著して大に名あり、『年代記』に曰ふ萬象亭の作可笑味を重にとる、或人曰萬象亭は古風來山人の門人なり、『戲作濫觴』の首に出せる淨瑠璃は風來の作なりとぞ、文化の初頃に、京傳が校合して上梓せる『捷徑太平記』これなり。唐來三和此年より出る、寛政の中比まで年々二三部づゝ著す、作數多からざれども妙作多し、『きるなのねからかねのなるき』廻文の外題世に名高し。袋入の本此頃にて止む、これより後の袋入は、其年青本の上本を先づ袋入にして出し、一月程經て直に青本にし

て出すことゝなれり。四方山人の作此年の內に二三部を見るのみ。

天明五乙巳年

作者

唐來三和　三十七歲
芝全交
喜三二　五十一歲
竹杖爲輕　三十四歲
戀川春町　四十二歲
山東京傳　二十五歲
市場通笑　四十七歲
叢春朗　二十六歲(卽北齋なり)
群馬亭　二十六歲(卽北齋の前名なり)
戀川好町　北川氏通稱嘉兵衞萬葉亭と號す鹿杖山人、狂歌堂、好屋翁、四方歌垣、等亦其別號なり狂名を鹿津部眞顏と稱し四方山人の高足たり、又戀川春町の門に入り作名を戀川好町と曰へり、數寄屋河岸の家主にして始め汁粉屋を業とせり、後年飯盛と共に狂歌の宗匠號を允許せられ斯界の双璧を以て目せらる、寶暦三酉年を以て都下に生る當年三十三歲なり。
蓬萊山人歸橋　通稱河野某上州高崎侯の藩士にて最洒落本に名あり狂名大の鈍金無寬政の初年に至り君侯の命により戲作に筆を絕ちたりと云ふ。
鐐山人信鮒　又信普と記せり傳詳ならず。
夢中夢助　寢言先生と號す。
眞顏　戀川好町の項に記述せり。
鳴瀧音人　通稱常二郎銀座に住せり。
吉田魯芳　櫻川杜芳の門人なり。
東雲亭
二水山人

畫工

春朗　二十六歲
群馬亭　二十六歲卽ち春朗なり。
勝川春英　十八歲
勝川春旭
勝川旭光
北尾政美　二十五歲

北尾政美　二十五歳
北尾重政　四十七歳
北尾柳郊　龍向齋と號す式上亭及び柳郊山人等の別號あり北尾重政門人なり。
鳥居清長　三十四歳
勝花
喜多川歌麿　三十三歳
喜多川道麿　喜多川歌麿門人なり。
喜多川行麿　喜多川歌麿門人なり。
喜多川千代女

板元

奧村源六
西村屋與八
松村彌兵衛
伊勢屋次助
蔦屋重三郎
鶴屋喜右衛門

雜記

東里山人生る。
花笠文京生る。
澤村曙山生る
畫工春朗名を群馬亭と改む
四月三日鳥居氏の三世初代清滿歿す、享年五十一。淺草南松山町法成寺に葬る、法號□善院要道日達信士　十月十四日蔦の唐丸會主となり、深川油堀土師搔安の家に於て狂歌百鬼夜行を開催す。戯作者狂歌師等會する者多し。
六月朔日より回向院に於て嵯峨釋迦如來開帳す。
六月十五日より湯島に於て野島地藏尊開帳す。

書目

頃廻能名代家莫切自根金生木　三　三和作　千代女畫
名作二十三部の內。
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
御手料理御知而已大悲千錄本　袋入一　全交作　政演畫
名作二十三部の內。
嘉永末年更に之を再板せり。
甑雪曰、此作は名作二十三部中の最傑作と稱せらるるだけありて出板當時に於ける評判は盛んにして忽地板木を磨滅せしめたりと聞ゆ嘉永の再板は

新に板木を刻したるゆゑ原本に比ぶれば挿畫甚しく劣れり併し今日は再板の物すら稀になり容易に眼に觸れぬやうなりしは倚持囃さるゝが爲めなるべし此再板に就て奇聞あるも玆には略しぬ。

袖から袖へ手なへて じつと引〆二十二人書集芥川々　二　三和作　道麿畫

傾城買談 飛多怪物 馬鹿文盲圖彙　三　全交作　重政畫

翁山柴刈 婆川洗濯 鬼堀大通話　三　喜三二作　行麿畫

あの子 どこの子 長者の飯食　三　好町作　千代女畫

一書に歌麿畫とあり。

千崎 早野 殼鐵砲桃灯具羅　袋入一　爲輕作　政演畫

一書に京傳作とあり。

元利安賣鋸商内　二　好町作　千代女畫

向島佐々木久助　袋入一　喜三二作

大通箱入之痞積　袋入一　春町作

四牒半飛分茶人　袋入一　好町作

梅花おりは乞目　袋入一　同上

俠中俠悪言鮫骨　袋入一　京傳作

八被般若角文字　袋入一　同上

新義經細見蝦夷　袋入一　爲輕作

其由來光德寺門

閒似合噓言曾我　三　歸橋作　清長畫

賣買平親胴性能　三　政美畫

百鬼夜講化物語

鬼通意噓島物語　三　信鮒作　旭光畫

星月夜坊主道行　二　同上　同上

讀見三十一文字　二

千秋樂下司の噺　二　通笑作　春英畫

手鞠唄古事來歷　三　同上　同上

魚と水通和者交　三　同上

故事附杜撰物語　三　夢助作　勝花畫

江戸生艷氣樺燒　三　京傳作　政演畫

此作非常の好評にて自惚漢を艷治郎、低き鼻を京傳鼻と呼ぶこと皆此冊子より創れり。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

誕繰當字之清書　袋入一　眞顔作　政美畫

此書は眞顔の初作にて是も大當りなり。

天地人三階圖繪　袋入一　京傳作

一書に天明六年の出板とせり。

落噺普來太鼓持　政美畫

寛政元年にも清遊軒作にて同名の作あれど畫は政

美、柳郊、榮之、蘭德、春朗、豐國の六名なれば更に板を替えて再出せしものならむ。

(金太郎桃太郎)昔々噺問屋	袋入一	好町作		
一書に天明六年板とあり。				
(唱歌語)人眞似道成寺	三	鳴瀧作	政美書	
(全體平氣)賴光邪魔入	袋入一	三和作	同上	
(鎌倉山)女相撲濫觴	三	彝芳作	同上	
氣散治夢物語	三	喜三二作		
寶山金々譮討		好町作		
七轉八興小町				
二度生掘出物	三	通笑作	重政書	
無物喰狐聟入	三	同上		
怨念宇治螢火	三	春朗作	自畫	
呼子鳥名彭祖	三	東雲亭作	政美畫	
(全盛◐へ)廓中丁子	袋入二	京傳作	政演畫	
(三國傳來)無匂線香	三	同上	同上	
鮹入道佃沖	袋入一	喜三二作	歌麿畫	
双紙五牒夢	袋入一	三和作		
大通戒菝止	三	二水山人作	柳郊畫	
金平子供遊	二		千代女畫	
通鶴奢半勘	三	通笑作	政美畫	
親讓鼻高名	三	群馬亭作	自畫	
爲朝飛島廻	二		春旭畫	
天竺倩之筋	二	通笑作	春英畫	
噓皮初音皷	袋入一	好町作		

一書に杜芳作とし又天明六年板とあり。

○

文軒翁云、「噓つき曾我」の兄弟が工藤に對面の條は、當世の人情權貴に阿諛する樣を寫せりとぞ、近世の人情にも斯かる事有りしといふは誠にや知らず、又下卷に娼家の厨房の樣を圖せし密書あり、此後に豐國國貞など斯かる圖を巧みに畫せども、淸長此頃既に先鞭を畫きたり。

七曲舍云、此年元祖喜三二終る歟春町の友にて名人なり。

再考天明八年卒す。歸遊女改名二代目喜三二。

蓜雪曰、喜三二の歿せしは、文化十年五月にして天明八年には非ず、偖當時は、戲作の大家竝び行はれ、天明六家と呼ばれし作者打揃ひ、青本の全盛期とも謂つべき時代にして、書名に奇なる外題を

附けしも、此頃多かりしなり。

天明六丙午年

作　者

戀川好町　三十四歳
唐來三和　三十八歳
喜三二　五十二歳
萬象亭　三十五歳
古河三蝶
岸田杜芳
市場通笑　四十八歳
蓬萊山人歸橋
伊庭可笑　遺稿なるべし
山東京傳　二十六歳
群馬亭　二十七歳
飛田琴太
宮村杏李
雀千聲
竹杖爲輕　三十五歳（卽萬象亭）
四方山人　三十八歳
芝全交
自惚黃山人
山東鷄告　山東京傳假名二十六歳
榎雨露住　四方山人門人
薜蘿館
芝甘交　大伴氏通稱寛十郎一拂齋と號す芝全交門人
白雪紅　群馬亭が一時の假號なるべし。
半片　假設人物にて再板物に其例多し。
浮世伊之助
石山人　物蒙堂禮の別號なりと云ふ狂歌師なり。
白山人　群馬亭が一時の假號なり。

畫　工

群馬亭　二十七歳
北尾政美　二十六歳
北尾政演　二十六歳
北尾重政　四十八歳
鳥居清長　三十五歳
勝川春英　十九歳
勝川蘭德

古河三蝶

戀川好町　三十四歳（本年作者の項參看）

春朗　二十七歳

歌川豐國　倉橋氏通稱熊吉一陽齋と號し歌川豐春門人なり、日本橋上槇町河岸に住す明和六丑年に生れ本年十八歳なり。

板元

奥村源六

西村屋與八

松村彌兵衛

伊勢屋次助

蔦屋重三郎

榎本屋吉兵衛　號は豐榮堂（？）通稱榎本。

鶴屋喜右衛門

雜記

塵外樓清澄生る。

畫工歌川國貞生る。

黒鳶式部歿す享年十六山東京傳妹よね女なり。

四月二十一日烏亭焉馬昔噺の會を始て向島武藏屋權三郎方に開く。

○上野山下に放下師鶴吉出で諸種の品玉を演じて名高し、萬葉亭好町に此作あり。

書目

天狗一人 小僧八人 羨百慢童龍神詠　　好町作

契情貫 卯圓角 世諺々晦日之月　三　通笑作　清長畫

東産 返報 通町御江戸鼻筋　三　三和作　政演畫

後外題を『繰返艶物語』と改め再板す。

喜三二 夢物語 去程扨其後　三　三和作　政美畫

『一氣散治夢物語』は天明五年喜三二作にて出板せり。

新建立 忠臣藏 天道大福帳　三　喜三二作　政美畫

寛政六年蔦屋重三郎之を再板す。

白木屋 おこま もゝんじい　袋入　一　萬象亭作

爺山松 婆川竹 昔々相生松　三　三蝶作　自畫

本書毎葉柱には「たかさご」とあり。

首尾松 神の梅 平假名盛通記　二　杜芳作　三蝶畫

寛政元年にも五冊物政美畫にて同名の作出板あり改作せしものならむ。

二一天作二進一十　三　通笑作　春朗畫

鶴岡勸進御富興行曾我　三　鶏告作　政演畫
壁見細身御太刀　三　歸橋作　政美畫
東都銅訛天神記　可笑遺稿？
四天王荊棘鬼斷　袋入一　萬象亭作
與若女意志雜話
江戸春・夜下雨　三　京傳作　政演畫
鳩八幡豆兼徳利　二　好町作　自畫
腹中掃除五臟夢　三　三蝶作　自畫
懐中しわみの紐　三　通笑作　政美畫
御承知猫與杓子　三　同上
四人詰律義八片　三　雨露住作　政美畫
敵討浮木之龜山　五　藤蘿舘作　同上
蛇腹紋腹の仲町　二　白雪紅作　群馬亭畫
我家樂之鎌倉山　三　群馬亭作　自畫
七福神伊達船遊　三　萬象亭作　政演畫
一書に政美畫とあり。
明矣七變目景清　二　京傳作　政演畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
大江山二期之榮　三　琴太作　三蝶畫
後『見越丹波埋政』と外題を改め再板せり。

庵相千萬家輕業　三　通笑作　春英畫
一書に天明四年板とあり。
大昔野暮人時分　三　通笑作　政美畫
一書に天明四年板とあり。
人面疔藤共談合　二　通笑作　政美畫
一書に天明四年出板とあり。
通人の外仙人通　二　通笑作　重政畫
本書毎葉柱に「仙じゆつ」とあり。
高砂屋尾上の傘　二　通笑作
一書に半片作とあり。
大笑止悋氣鐘入　二　萬象作　政美畫
卷中畫甚古し古板を再摺し外題を改めたるものならむ。
五臟町細見繪圖　二　三蝶作　自畫
本書は『腹中細見五臟夢』と同書なるべし。
舊事化草摸紋化話　三蝶作　自畫
弓削何某愈高鼻皇都　二　杏李作　蘭徳作
馬平古文紺屋話化語　三　三蝶作　自畫
寛政六年「戲場嘉語百物語」と改題再板せり。
さんふけんぎ　袋入一　石山人作

總角繪二印籠　袋入二　三蝶作　自畫

御物好茶臼藝　三　通笑作　春英畫

一書に天明四年出板とあり。

無據五人道行　三　通笑作　政美畫

一書に政美自畫作とあり。

太印天上見物　三　半片作　春英畫

本書は天明四年板通笑作『一ツ星大福長者』の外題替再板なり。

嘘實說故里歸

卷中畫甚古し外題替の再板物なるべし。

可然苦者樂種　三　通笑作

御誂南國信田染　二　鷄告作　政演畫

馬鹿等推道笑雙六　三　廿交作　清長畫

景清搭之寐　二　萬象亭作　政演畫

上州七小町　袋入一　喜三二作　政美畫

落噺笑男子　三　伊之助作　同上

心鞭走生孫　三　通笑作　重政畫

持來糖長日　二　好町作　政演畫

善惡正札附　三　通笑作

積孝雪振袖　三　千聲作　蘭德畫

化物一代記　五　清長畫

前々太平記　五　自惚作　春朗畫

教訓持病痒　袋入一　通笑作　春英畫

阿房者寐待　袋入一　爲輕作

一書に天明七年出板とせり。

無束話親玉　袋入一　萬象作　豐國畫

翌天明七年『從長崎强飯』と改題出板せり。

手練僞なし　袋入一　四方山人作　政美畫

一書に天明四年出板とあり。

通言武者揃　三　全交作　重政畫

四方山人の序文あり。

大々太平記　廿交作

天明八年にも同名の作あり孰れの年か疑はし。

當字片書指南所　三　杜芳作　政演畫

はなし鳥　三蝶作　自畫

大佛左捻　一　白山人作

本書は袋入茶表紙なり。

一書に寛政の出板とあり又寛政五年に再板せしとも云ふ。

骨髓芝居好　二　通笑作　春英畫

一書に『風流芝居好』とし且つ天明四年の出板となせり。

○

文軒翁云、『天道大福帳』に造物者を指して天道様と名附け、其形を日輪の浄衣したる姿に書き出せしより、後の稗史皆これによる、『早染草』も是に基く、これより稗史教訓を專とすることゝなれり『年代記』に草雙紙段々理屈に落つるといふ是なり。

天明七丁未年

作者

唐來三和　三十九歳
岸田杜芳
芝全交
喜三二　五十三歳
山東京傳　二十七歳
萬葉亭好町　三十五歳
山東鷄告　二十七歳（卽山東京傳）
萬象亭爲輕　三十六歳
南仙笑楚滿人　三十九歳
石山人
雀千聲
戀川春町　四十四歳
自惚黄山人
幾智茂内
芝甘交
物蒙堂禮　狂歌師なり。
七珍萬寶　樋口氏通稱福島屋仁左衞門南湖子と號す、狂名七珍萬寶を以て作名とす、芝櫻田久保町の菓子商なり、森羅亭萬象門人にて後其號を襲げり、寶暦十二午年に生れ當年二十六歳なり。
虚空山人
稻坊
祉樂齋萬鯉
三陀羅法師　赤松氏名は正恒字己巳後左官職某の養嗣となり清野氏を稱す、號は千秋庵、薙後三陀羅法師に改む、頭光の高弟にして狂歌師中錚々の名あり、神田於玉ヶ池に住居す、享保十六亥年を以て生れ、本年五十七歳なり。

畫工

歌川豐國　十九歳
北尾政演　二十七歳
北尾政美　二十七歳
北尾重政　四十九歳
北尾柳郊
鳥居淸長　三十六歳
勝川春道
泉有昌

細田榮之　姓は藤原細田氏名は時富（一書に時當に作る）治部卿と稱す、鳥文齋を書號とし榮之を名とす、始め狩野榮川の門弟たりしが、鳥居文龍齋の門に入り、浮世畫を學べり、日本橋濱町に住し、後本所割下水に移れり。

北尾龍向齋　卽ち柳郊の別號なり。

板元

鶴屋喜右衛門
榎本屋吉兵衛
蔦屋重三郞
伊勢屋次助
西村屋與八
西宮新六　本材木町一町目に住し箭月堂と號す、屋標は○の中に十なり俗稱西宮

雜記

畫工鳥居氏の五世鳥居淸峰生る。

畫工柳川重信生る。

曲亭馬琴初て洒落本『猫謝羅子』を著す。

山東京傳今春出板の『田舍芝居』に就き其作者萬象亭と絕交す。

從來袋入本の表紙藍摺なりしもの此頃より茶色となれり。

○

碑文谷法華寺仁王尊此頃より參詣者群集し十年以上も流行れりと云ふ。

書目

自笑請合本八文字正札附息子容氣　三　三和作　政美畫
假名手本不通人藏　二　杜芳作　政演畫
親分小分御目出太平樂　二　同上　政美畫
茶歌舞伎茶目傘　三　全交作　同上
芝全交智惠之程　二　同上　政演畫

龜山人家之妖物　三　喜三二作　重政畫
三筋緯客氣植田　三　京傳作　政演畫
色男十人で三文　三　杜芳作　政美畫
出世蜜茶太平記
三千歲成云蜻蛇　二　京傳作　榮之畫
世の中諸事天文　二　堂禮作　政演畫
陰德兩方吉事計　袋入　萬寶作　豐國畫
日本一阿房の鑑　二　好町作　政美畫
享和元年出板式亭三馬作に同名の書あれど全く別作なり。
葉手嫌息子好々　二　鷄告作　政演畫
山東京傳の序文あり卽ち自畫作なり。
話錦畫長崎強飯　一　萬象作　豐國畫
天明六年出板『無束話親玉』の外題替出板なり。
宇治川古渡日記帳　二　楚滿人作　政美畫
戀婦積種是氣儘作種　二　石山人作　政演畫
一書に京傳自畫作とあり。
夫は楠木之は朽木大平記　三　千聲作　春道畫
艶男其所此處　三　萬象作　淸長畫
古道具穴掃除　三　盧空山人作　龍向齋畫

今渡唐織曾我　二　春町作　政美畫
榮増通な物なり　三　稻坊作
昔今萬歲の島臺　五　自惚作　政美畫
天明四年に同名の作三册物出板あり或は其改作なるべし。
昔話稚種軍談　四　幾智茂内作
源平軍物語　三　楚滿人作　政美畫
現金青本通　三　甘交作　同　上
島臺眼正月　二　萬鯉作　政演畫
敵討南枝花　二　杜芳作　政美畫
作習酒佐字　袋入　萬象作　豐國畫
面向不背御年玉　二　同　上　柳郊畫
是高是人御喰爭　三　杜芳作　政美畫
新作落噺德治傳　二　　有昌畫
百文二朱寓骨牌　二　京傳作　政演畫
おとし噺　袋入一　三陀羅法師作

○

文軒翁曰、『家の妖物』に喜三二が肖像あり、重政が筆眞に迫ると謂ふべし。稗史中作者の小傳に擬するもの、春町が『其返報怪談』に初り『芝全交智

恵の程』『萬象亭戯作濫觴』『京傳浮世醉醒』『一九戯作種本』其餘尚種々あるべし。

七曲舎云、此頃より袋入表紙茶色となる、此前は藍摺の摸様あり。

蘆雪曰、大通を材に取りし戯作漸く衰へ、通人の名稱も亦珍らしくなくなりしにや、本年杜芳が出せる『色男十人で三文』は、通客の失敗を擧げて散々に冷評を加へ、十人で三文なりとの評價を附するに至れり、されば戯作の大概は、唯一の滑稽を主とするものと、多少教訓の意味を其作中に含ましめたる物のみなれど、奇警の天材と輕妙の健筆に富みし作家にありては、其取材を何等かに求めつゝあるに似たり、其着眼點果して那邊にある耶。

天明八戊申年

作者

戀川春町　四十五歳
喜三二　五十四歳
山東京傳　二十八歳
七珍萬寶　二十七歳
宮郡杏李
市場通笑　五十歳
山東鷄告　二十八歳（即山東京傳）
廬空山人
唐來三和　四十歳
石山人
櫻川杜芳
雀千聲
南仙笑楚滿人　四十歳
幾智茂内
山東唐洲　二十八歳（即山東京傳の變名）
甲龜
千差萬別　森羅萬象門人
櫻川慈悲成　八尾氏通稱大五郎芝樂亭或は暫亭と號す、金工杉浦如泉の門に入り名を則久と曰ひ、芝宇田川町に住せり、初め親の慈悲成といひしが、櫻川杜芳の門人となり櫻川と改む、焉馬と共に落語の中興者たり、晩年多く戯作を出さず狂歌師の列に伍せり、明和四年出生し本年二十二歳なり。

笑給

内田新好　通笑内田屋新三郎初め茅場町に住し後本所石原に轉じ、晩に神田小柳町に移り帆綱商を營めり。別號魚堂又魚道、新江等の號あり作名を內新好と曰ひ、享和に至り白銀臺一九と改む。

龜山人　五十四歲(卽喜三二の別號)

畫工

群馬亭　二十九歲

歌川豐國　二十歲

勝川春英　二十一歲

勝川春童

勝川蘭德　卽ち春童なり

北尾政美　二十八歲

北尾政演　二十八歲

北尾重政　五十歲

鳥居淸長　三十七歲

細田榮之

喜多川歌麿　三十六歲

喜多川行麿

板元

鶴屋喜右衞門

鱗形屋孫兵衞

榎本屋吉兵衞

村田次郎兵衞

岩戶屋源八

蔦屋重三郎

西村屋與八

雜記

仙鶴堂生る。

親の慈悲成杜芳の門に入り櫻川と改む。

五月櫻川杜芳歿す。

今年喜三二自ら筆を靑本の作に絕ち號を門人芍藥亭に與ふ。

○

大川中洲家屋取拂となる。

此頃長谷川町にて賣出せし梅が枝でんぶ名物なり

京傳に此外題の戲作あり。

安永の初年頃より二挺皷始まり年を追て流行すと云ふ。

書目

悦贔負蝦夷押領　三　春町作　政美畫

名作二十三部の內。

文武二道萬石通　三　喜三二作　行麿畫

名作二十三部の內。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

此作時世當込みの戲作なりとて市中の評判頗る非常にして、その發行部數前古無比と稱せられしと云ふ。

將門秀鄉時代世話二挺皷　二　京傳作　行麿畫

仁田四郎富士之人穴見物　三　同　上　政演畫

山東唐州の序文あり。

やれ出たそれ出た龜子が出世　二

扇蟹目傘轆轤狂言末廣榮　三　京傳作　歌麿畫

悪一心通看板苦者樂元〆　二　萬寶作　豐國畫

首尾松見越松安女廓八朔　二　唐州作　歌麿畫

山東京傳の序文あり

名物梅ヶ枝傳賦　三　京傳作　政演畫

會通己恍惚照子　三　同　上　同　上

蝦夷渡表經實記　三　杏李作

板垣三郎出世壽　三　同　上

無僞看板之立引　三　杏李作

二昔以前の酒落　二　通笑作　政美畫

小倉山時雨珍說　二　京傳作　政演畫

今日現金湯起請　三　鷄告作　同　上

齡長尺桃色壽主　三　甲龜作　榮之畫

昔々お艶云踊子　三　通笑作

見可德言門上下　三　虛空山人作　蘭德畫

大願成就下戸の藏開　二　萬別作　政美畫

引訣諺解六玉川流榮　二　喜三二作

眞字手本義士の筆力　三　京傳作　政演畫

一體分身扮接銀煙管　三　同　上　同　上

戲作書初天筆阿房樂　二　慈悲成作　豐國畫

人間萬事二二天作五　二　通笑作　同　上

寛政十二年道笑作と改め再板せり。

摸文畫今怪談　五　三和作　榮之畫

姦顔取堪忍袋　三　虛空山人作　蘭德畫

酒宴哉妖怪會合　二　石山人作　政演畫

一書に寛政元年出板とあり。

塵功記二疋睦月　二　群馬亭畫

寛政十二年にも北齋自畫作にて同名の書出板あり

蓋し再板ならむ。

洒落管巻太平記　二　萬寶作　政美畫

落話下司の智恵　二　通笑作　同上

落話一富士二鷹參茄子　三　杜芳作　同上

鎌倉太平序　二　春町作

海中箱入娘　三　萬寶作　政美畫

書雑春錦手　三　千聲作　同上

復讐後祭禮　三　京傳作　政演畫

一谷嫩軍記　五

三茶太平氣　二　楚満人作　政美畫

蛤金久連里　三　幾智茂內作　蘭德畫

化物大通記　清長畫

義經異國噺　三　春町作　政美畫

三藥太平記　二　笑給作　蘭德畫

夭怪差別帳　二　政美畫

一書に『天怪着到帳』とあり差別と着到字書相似たり恐らくは着到帳の方可ならむか。

大々太平記　五　虚空山人作　重政畫

蓮雪曰、一書に嘘亭主人作とありて繪本太閤記の青本なりとあり、天明六年にも甘交作に同名の書あれど其作意は閲せねば知らず本書も亦閲讀せぬゆゑ断言し難きも北尾重政の自畫作なりとの事を耳にせり。

夫德斉玉得　三　笑給作　春童畫

一書に貫齋作とあり。

怪談小夜嵐　五　春英畫

一書に此作の出板年月不明とあり。

怪談四更鐘　五　三和作　榮之畫

『摸文畫今怪談』と同書なりと云ふ。

唐倭傘之濫觴　三　蘭德畫

餅酒合戰　二　萬別作　政美畫

妹退治　二　新好作　春英畫

○

文軒翁云、此頃の稗史に、營中の遺事に擬して作る物多しと云ふ、『萬石通』『贔負蝦夷押領』など其類なるべし、是等は草莽の人の知るべきにあらず、されば識者に問て辨ずべし、又袋入に『世直大明神』『天下一面鏡梅鉢』などあり、是等も同じ趣なるべき歟。

豐芥云、親の慈悲成といふ名初て見ゆ、後に櫻川

と改め沓亭と號す。

七曲舍云、本書誤、擊亭なるべし、和訓うちていなり、擊亭慈悲成。今年以來通人の名目なし。初代喜三二終る。

活東子云、うちてい誤りなり、暫亭と書てしばらく亭と讀むなり、又芝樂亭とも書す。

芭雪曰、慈悲成の號を、沓亭或は擊亭と誤りしは、畢竟沓擊暫の三字ともに草體にては見紛はしきのみならず、誤讀又は傳寫等に由つて謬られしなるべし、慈悲成の暫亭と號せしに異論なきなり。

さて、通人種の戲作もやゝ時行後れとなり、新なる材料の選擇に着眼せし、春町、喜三二等が提へ來りし題目の一部分は、本年公表せられたり、即ち時の施政に對する作、今日の所謂政治的諷刺の著作なり、由來戀川春町が着想は、初よりして時弊を諷刺するの筆に長せしと見え、從來の戲作書中にも、往々其筆鋒をほのめかせしが、玆に及びて眞向より其正體を露はし立てり、朋誠堂喜三二亦同時に諷刺の旗幟を飜しぬ。

當時の閣老松平定信は、時弊の極點に達するを慨歎し、之を矯正するの念慮よりして、第一に、武士道の頽廢振興の策として、文武二道の研究を一般に嚴命したり、彼の「世の中にかほどうるさきものはなし、ぶんぶといふて夜も寐られず」との狂詠は、蓋此事をいへるものにして、遊惰に耽りし當時の武士には一打擊たりしなるべし。かゝる時期に接せし喜三二、春町等は、いかでか此好題目を逸し去るべき、喜三二先づ『文武二道萬石通』を著はして諷刺の氣燄を吐けり。春町は『悅贔負蝦夷押領』を出して、江戶を蝦夷になぞらへ、當時の饑饉に際し、時の有司が米麥の買占めに、巨利を博せし事實ありしを素破拔き。京傳も亦『時代世話二挺鼓』に、田沼と佐野の刄傷事件を書き著はしぬ。斯の如く片々たる草雙紙にして、時の政治或は權勢の有司を題目となし、縱横に筆を奮ひし作者の意氣壯なりと謂つべし、されば、前古無比の喝采を博し、是等青本の賣行の盛況なりしも亦偶然にあらざるなり。然るに此作よりして、喜三二は主家より多少の威壓を受け、遂に自ら戲作場裡より退くの運命を招き、再び靈筆を青本界に上

さずなりしは、實に惜むべきのことなりとす。

寛政元己酉年（天明九年改元）

作者

芝全交
戀川春町　四十六歳
山東京傳　二十九歳
岸田杜芳
市場通笑　五十一歳
深川錦鱗
唐來三和　四十一歳
七珍萬寶　二十八歳
竹杖爲輕　再板物
內田新好
山東鷄告　二十九歳
櫻川慈悲成　二十三歳
浮世伊之助

戀川行町　傳詳ならず、諸說を綜合するに、通稱小川市太郎別號李庭亭幸町又雪町と號し、大丸新道或は馬喰町に住し、作は春町門人にて後二世戀川春町を襲ぎ、畫は喜多川歌麿に就き、歌麿歿後其寡婦に入夫となり二世の歌麿と號せしもの丶如し、然れど行町、幸町、雪町、幷に二世春町及び二世歌麿は果して同一の人なるや否や疑はし、尙他日の考究を要す、寛政七年畫工の部參看。

二世喜三二　本姓菅原氏通稱本阿彌次郎右衛門幼名三太郎光悅七世の孫なり、潜亭と號す、下谷三橋に住するを以て三橋山人、三橋亭とも號せり、明誠堂喜三二の門に入り蓬萊山人の號あり、今年二世喜三二を襲ぐに及び淺黃裏成の號を讓らる、狂名を芍樂亭長根と稱し狂歌の判者たり、別に花咲乙女、猿猴坊月成等の號あり、作名には世俗三橋喜三二と呼び以て初祖喜三二と別てり、明和五子年を以て生れ今年二十二歳なり。

陽春亭慶賀　今泉氏名は戶守庄內藩の家臣にて下谷池の端に住し烏亭焉馬の門人なり。

石部琴好　松崎氏通稱仙右衛門本所龜澤町に住し幕府の用達商人なりしが、著作の爲め奇禍に觸れ遂に江戶拂となれり。

和歌林泉
傳樂山人
伐木丁々
美足齋象睡
蒂野横好
錦森堂軒東
莞津喜笑顔
清遊軒　畫工北尾政美の假號なるべし。
三橋山人　卽ち二世喜三二なり。

畫工

春朗　三十歳
長喜　榮松齋と號す後ち子興と改名す鳥山石燕門人
なり。
歌川豐國　二十一歳
北尾政美　二十九歳
北尾政演　二十九歳
北尾重政　五十一歳
北尾御郊
鳥居清長　三十八歳
細田榮之

戀川春町　再板物
勝川蘭徳
勝川春英　二十二歳
勝川春泉　勝川春章門人なり。
蒂野横好
喜多川歌麿　三十七歳
喜多川千代女

板元

大和田安兵衛　大傳馬町二町目に住す一に安右衛門
とす、屋標は入山形に篆體の本の字なり俗稱大和
田。
鶴屋喜右衛門
鱗形屋孫兵衛
榎本屋吉兵衛
伊勢屋次助
西村屋與八
蔦屋重三郎
西宮新六
秩父屋　淺草茅町に住す。

雜記

美圖垣笑顏生る。

七月七日戀川春町歿す享年四十六、四谷新宿淨光寺に葬る、法號寂靜院廓譽湛水居士辭世あり「生涯苦樂、四十六年、即今脫却、浩然歸天、」

今春發賣の稗史中時勢を批判せし書二三を絶板せしめられ、作者幷書工中罪を被ふる者あり。

○

三河島不動尊效驗ありとて參詣者多し。

百眼流行す。

天明初年より甘藷のふかし芋賣初めしが漸次流行して燒芋も出るに至れり此事戲作中にも見えたり

山吹茶漬安直なりとて繁昌す、三年全交に此當込作あり。

書目

顚解而下紐哉 拜壽仁王參　二　全交作　政美畫

名作二十三部の內。

鸚鵡返文武二道　三　春町作　政美畫

名作二十三部の內。

天明八年板喜三二作『文武二道萬石通』の後編なりとて前編に勝れる賣高なりしと云ふ。

時宗はおなぐさみにもすけなりと 木のめ春雨ふる書集千鳥蝶　二　行町作　政美畫

かち〳〵山 ちよん〳〵幕 弓返狸之忍田妻　三　全交作　同上

二代目 艷次郎 碑文谷利生四竹節　二　京傳作　政演畫

淀屋寶物 東都名物 鷗呼奇々羅金鷄　袋入一　同上　歌麿畫

寛政二年『福種笑門松』と改題再板せり。

三升艾 路考艾 江戸花俳優贔負　三　鷄告作　政美畫

飛脚屋忠兵衞 假住居梅川 奇事中洲話　三　京傳作　同上

此作大當り。

藥師 利生 交見世八人一座　三　鷄告作　政美畫

地獄 假宅 二口〆勘定緣記　二　二世喜三二作　蘭德畫

無垢 世界 縞黃金肌着八丈　三　慶賀作　政美畫

首尾松 袖の梅 平假名盛通記　五　政美畫

本書と同名の作天明六年杜芳作三蝶畫にて二冊物出板あり、本書は其增補再板にもあるまじ姑く疑を存す

早雲小金 輕業希術 艶哉女僊人　三　京傳作　政美畫

世直大明神 金塚之由來 黑白水鏡　袋入二　琴好作　政演畫

此書禁忌に觸れ絶板となり作者並書工刑罰に處せらる。

かるくちかたいはなし　二

無天口以人言喔當百年目 八葉
龍亭曰、本書は田沼佐野の刃傷を骨子として作述せしものなるが餘りに直入的なりし爲めか出板せられず、草稿の儘にて傳存せらる、惜哉作者の名を掲げあらず。

一百三升芋地獄 二 京傳作 政演畫
大千世界牆人藏 二 二世喜三二作 春泉畫
花東頼朝公御入 三 京傳作 政演畫
武者修行押強者 三 杜芳作 豊國畫
一生入福兵衞幸 三 京傳作
御贔負他之三升 二 慈悲成作 豊國畫
福來留笑顔門松 二 通笑作 春朗畫
三河島御不動記 二 京傳作 重政畫
世之中承知重忠 袋入一 林泉作 豊國畫
十千萬両貨殖金 三 錦鱗作 蘭徳畫
妙智力紫華鉢木 二 傳樂山人作 同上
太平權現鎮座始 三 伐木丁々作 同上
六歌仙虚實添削 三 春朗畫
流行謠混雜唱舞 二 象睡作 同上
眞價千本小人藏 三 同上

大黒上富來福神 三 春英畫
天明四年『大黒上福來福神』の書直し再板歟。
早道節用守傳來 三 京傳作 清長畫
明治三十七年大坂鹿田靜七再板す。
冠言葉七目趁記 三 三和作 歌麿畫
明治三十七年大坂鹿田靜七再板す。
孔子縞于時藍染 三 京傳作 政演畫
此作非常の當り也後篇並三篇翌寛政二年出板せり
大笑止浮氣鐘入 三 萬寶作 豊國畫
天明六年萬象作に『大笑止悲氣鐘入』あり。
親之敵現夢也 三 全交作 柳郊畫
文化六年式亭三馬此作に筆を入れ『無根草夢談』と改題なして出板せり。
天下一面鏡梅鉢 袋入一 三和作 長喜畫
此作も亦忌諱に觸れ絶板せられたり。
其句義紆眞實情文櫻 三 京傳作 政演畫
夫れ御覽嘘無箱根先 二 萬寶作 豊國畫
一書に再板物なりと云ふ。
畧銀自在貍の金毘羅 三 横好作 自畫
三國傳來面向不背釜 三 鷄告作 政美畫

桃太郎昔日記	三		政美畫
敵討於花短冊	三		
臭氣靡擬倉榮	二	軒東作	春朗畫
百福茶大年噺	三		
落話節季夜行	三	春町作	自　畫

天明三年の再板ならむ。

鳴蛤 嗚呼辛氣樓	二	三橋山人作	蘭德畫
仙傳 延壽反魂談	三	京傳作	政演畫
落噺 樽酒聞上手	二		千代女畫
落話 御臍の煮花	二	笑顏作	
落話 嬶開噺口切	二	伊之助作	歌麿畫
落話 新米牽頭持	二	清遊軒作	政美畫

葩雪曰、本書は天明五年の再板なるべきも一書に據れば本年の挿畫を政美、柳郊、榮之、蘭德、春朗、豐國の六名の寄合畫なりといへば本年出板の分には政美の外に、以上の畫工を增加し畫組を改めしものならむ。

又他の一書に據れば本書二册を上下に別ち上卷を『笑ふ門』『清遊軒作北尾政美畫となし下卷を『笑ひなんし』杉皐政美自畫作と記し且つ上下二卷共に政美自畫作ならむと附記せり、後説の方或は是ならむ歟參考の爲め特に玆に記す。

源平英筆記	三		
繪本武者揃	二		
平治太平記	三	通笑作	
無嘘誠一卷	二	爲輕作	政演畫

一書に天明四年板とあり或は本年再板せしものならむ。

高芋專芋 芋世中	三	新好作	榮之畫
比文谷噺	袋入一	琴好作	長喜畫

○

文軒翁云、『鸚鵡返』『孔子稿』『太平權現』などは、當年の遺事に擬作せしなるべし。『地獄一面』は袋入の『天下一面』の標題を假りて又一奇をなす。『中洲話』は土山何某と十七屋なる者の遺事に擬して、中洲の禁前の光景を寫す。又此頃碑文谷の仁王利益ありしに由つて、作る所『仁王參』又『四竹節』等あり。又三河島の不動此頃靈驗ありしと云ふ。

安永年間に淸經、吟雪など書きし一代記の類を再摺し、錦繪の摺外題を押して板行するもの多し、

又青本に白紙摺の外題を押したる物同く再摺あり、此比迄は黒本をも製して販出せしが、寛政の中比より絕えて見當らず、文化に合卷行はれてよりは、青本までも稀になりたるは惜むべし。

龜雪曰、本年時勢の諷刺作は五六種に上り、遂に絕版の令を被ふるに至れり、これぞ青本に對する制裁の最初なるべし。春町が『鸚鵡返文武二道』は、前年喜三二の出せる『萬石通』の後編に擬しての作なれば、所謂文武のお世話を主題となし、以て怯弱遊惰の武士を微塵に罵倒せし痛快の諷刺作なれば、洛陽の紙價を動かせし賣行にて、好評嘖々たりしも、亦主家の壓迫に遭ふのみならず、一身の進退に關係を及ぼさむ勢なりしに、今秋七月を以て不歸の客となりしは、賀すべき歟はた弔すべきか、兎に角昨今二年に、文壇は喜三二、春町の名を再び見るを得ざるに至りしは、眞に痛歎に堪えざる所なり。

寛政二庚戌年

作者

芝全交
戀川行町
山東鷄告　三十歳（卽山東京傳）
山東京傳　三十歳
七珍萬寳　二十九歳
二世喜三二　二十三歳
櫻川慈悲成　二十四歳
虛空山人
千差萬別
鎌山人信普　鎌山人信鮒と同人なり。
紀定丸
市場通笑　五十二歳
石山人
一瓢齋勝圃
時鳥館主人
櫻井文橋
竹塚東子　千住在竹塚の農人なり風水坊と號し俳諧を越谷五山に學べり、別號素速齋又東紫と曰へり、作系は山東京傳の門人なるべし。

樹下石上　通稱梶原五郎兵衛市中山人と號し山形藩士にて江戸に住せり、烏山石燕風の畵を能くす、此人の戲作大概富貴安榮の作意に基く物多數を占む、又一奇なり。

蔦唐丸　喜多川氏通稱重三郎名は柯理本姓丸山氏煙蘿館と號し通油町書肆耕書堂蔦屋の主人なり、狂名蔦唐丸を以て作名とす、然れども大率他の代作に賴れり、其出生寛延三午年にして本年四十一歲なり。

有西

畵工

長喜

美治

龜毛　山東京傳門人とあれど同人の匿名なるべし。

歌川豐國　二十二歲

北尾政演　三十歲

北尾政美　三十歲

北尾柳郊

北尾重政　五十二歲

勝川蘭德

櫻井文橋　一書に櫻川とあり。

喜多川歌麿　三十八歲

板元

大和田安兵衛

榎本屋吉兵衛

村田次郎兵衛

鶴屋喜右衛門

蔦屋重三郎

伊勢屋次助

西村屋與八

西宮新六

秩父屋

雜記

爲永春水生る。

秋山亭馬琴始て山東京傳の門に入る。

十一月草双紙等に時勢の雜說等著述せし物賣買停止並版改めの件につき取締の法令を發布せらる。

○

深川永代寺境內に於て壬生狂言の興行あり遂に市中に流行す。

蹴轉と呼べる土妓此一二年前に絕えたり。

書目

遊妓寔卵角文字　三　全交作　重政畫

名作二十三部の内。

毎葉の柱に「大客」とあり

大福長者三元堂鑿壻眼鏡徳　三　行町作　政美畫

大森輕業楠鬼女了本能見世物　三　全交作　柳郊畫

葩雪曰、本書同名の作安永九年通笑作清長畫にて出板あり本年果して全交に此作ありしや否や按に鬼娘の事實は安永七年六月回向院にて信州善光寺阿彌陀如來開帳の際に出でし見世物なれば通笑の作と云ふ方正しかるべし、然るを全交の如き名作家が通笑の作意を其儘に襲ふべき道理なければ畢竟戌年板とある所より年代を取違へて本年に組入れ且つ作家を全交と誤認せしにはあらざる耶或は作者畫工の名を改めて再板せし書肆の姦計に出でし歟今之を知るに由なし前後の二本を對比して其實否を判定し得れば幸なり。

見たきもの化物樂屋巽帳　二　鷄告作　政美畫

一書に物蒙堂禮改石山人作政演畫とあり。

多武峰大明神正一位織冠　二　勝圃作　蘭德畫

三人寄れば文珠の智恵　二　文橋作　自畫

太平記吾妻鏡玉磨青砥錢　三　京傳作　歌麿畫

此作好評あり。

大極上請合賣心學早染草　三　京傳作　政美畫

此作非常の大當りにて翌三年後編出板せり。

孔子縞後篇盤返行義霰　三　京傳作　龜毛畫

此作も大當りなり、前編は寛政元年出板なり。

孔子縞三篇淺草の繪馬磨光世中魂　三　東子作　龜毛畫

第二編と共に是も亦當り作なりと云ふ。

俵藤太振出百樂　三　全交作　政美畫

山鵰鳩蹴轉破瓜　三　京傳作　同上

冷哉汲立清水記　三　同上　政演畫

京傳憂世之酔醒　三　同上　龜毛畫

文武二道重忠嘶　一

五體惣〆而是程　三　萬寶作　政美畫

新吉原聖賢畫圖　三　二世喜三二作　文橋畫

御存知夜討蕎麥　三　萬寶作　豐國畫

意濃張智惠艶出　二　慈悲成作　同上

人間萬事西行猫　三　石上作　政美畫

磁鐵頓智才兵衞　三　虚空山人作　同上

蝶千鳥最負達紋　三　美治畫
本樹眞猿浮氣噺　三　唐丸作　歌麿畫
一書に唐丸自畫作とあれど歌麿の代作にして、結局歌麿の自畫作なるべし。
先時怪談茶事加減役割番附　三　萬寶作　豐國畫
花芳野犬斑　三　京傳作　政演畫
地獄一面照子淨頗梨　三　同上　同上
此作大當りなり。
武道立役艶事雨三廻　二　時鳥館作　蘭徳畫
一書に櫻井文橋自畫作とせり。
邇道之早學問路無語帖　三　萬別作　政美畫
根元角觝大全　三　蘭徳畫
持來餅者餅屋　二　慈悲成作　豐國畫
芝全交の序文あり。
天明元年にも通笑作にて似寄の書名あり。
ばけものつわもの二日替　三　慈悲成作　豐國畫
櫻川杜芳の序文あり。
昔話勸善富藏雀　二　信普作　政美畫
ひだり甚五郎龍一談　三　萬寶作　同上
染直大名縞　一　信普作　長喜畫

雄長老壽話　三　定丸作　歌麿畫
忠孝遊仕事　三　通笑作　同上
即席耳學問　三　同上　重政畫
聽從淺黄餅　三　二世喜三二作　文橋畫
世中豐年藏　三　石上作
何糊琥珀塵　三　有西作　政美畫
紅白勳功競　三
春遊獣會我　三
新作徳盛噺　三　石山作　政演畫
一書に通笑作畫者不明とあり。
福種笑門松　二　京傳作　歌麿畫
寛政元年板「嗚呼奇々羅金鷄」の外題直し再板なり
呼繼金成植　二　時鳥館作
一書に序文京傳、畫作同とあり、他の一書には櫻井文橋の自畫作とせり。

○

文軒翁云、『早染草』に善玉惡玉といへる事を始めて書出し、京傳が妙作殊に教訓の意深く、大に行はれて二編三編に至る、後世に善玉惡玉といふ言葉は此時に起る歟。『青砥錢』に谷風の肖像あり、此

書も當時の樣に擬して作る、此翌年よりして斯かる事を憚り、絶えて作り出さぬ事となりたり、白猿秀鶴の似顏あり、畫工歌麿。

葩雪曰、本年尙ほ時勢に關する諷刺物出で、人氣に投ずるの傾向止まざりしかば、十一月令を發し、始めて青本等の戲作に對する出板法を嚴命せらる、政治的諷刺の著作は玆に於て絶えたり。

寛政三辛亥年

作者

山東京傳　三十一歳
七珍萬寶　三十歳
櫻川慈悲成　二十五歳
芝全交
竹塚東子
春朗　三十二歳
內田新好
樹下石上
二世喜三二　二十四歳
千差萬別
芝染交　芝全交門人なり。
大榮山人　曲亭馬琴の前名にて山東京傳門人とす、本年二十五歳なり、馬琴の小傳は寛政四年作者の項に記せり。
龜玉
夜道久良記
秋收冬藏　通稱□□文之進佐野家臣なり、內田新好の門人にてもある歟。
蘭德齋春童　林氏名は春道浮世繪師勝川春童なり、又春道と記せり畫系等安永七年の條下に記せり。
荒金土生

畫工

春朗　三十二歳
菊亭　三十一歳卽ち山東京傳の別號なり。
歌川豐國　二十三歳
勝川春英　二十四歳
勝川蘭德
北尾政美　三十一歳
北尾政演　三十一歳

北尾重政　五十三歲
北尾柳郊
櫻井文橋
樹下石上　鳥山石燕の畫風を能くす、其略傳は寛政二年作者の項に載せたり。
歌川豐廣　通稱藤次郎一柳齋と號し歌川豐春門人なり、芝片門前に住せり、明和元申年に生る本年二十八歲なり。

板元

和泉屋市兵衞
榎本屋吉兵衞
鶴屋喜右衞門
伊勢屋次助
西村屋與八
蔦屋重三郎
西宮新六
秩父屋

雜記

七代目市川團十郎生る。

山東京傳書肆蔦屋重三郎相謀り表袋に教訓讀本と題し「仕懸文庫」及び「錦の裏」なる二種の洒落本を發行せしに事露はれ、此夏六月京傳は手鎖五十日板元蔦重は身上半減の闕所に處せらる。

此冬馬琴京傳の家に寄食し、翌春出板すべき稗史を代作す。

正月十八日宿屋飯盛旅人宿同業者の處罰に係る寃罪を受け連座して江戸拂に處せらる、後ち五郎兵衞と變名し私に内藤新宿に住し次で隱居す。

○

中澤道二翁心學の講筵を茅場町に開き漸次隆盛となれり。

書目

（京傳勸請／新神名帳）八百萬兩金神花	三	京傳作	政美畫
（中村秀鶴／面影跡咲）御評判高尾文覺	三	萬寶作	同上
（おてう／半右衞門）眞顔貌老之仇浪	二	染交作	豐國畫
（狂傳和尚／廓中法話）九替十年色地獄	三	京傳作	柳郊畫

一書に淸長畫とあり。

（夫色事／是喰事）御存知高麗屋傳	三	慈悲成作	豐國畫
（廿日餘／四十兩）盡用而二分狂言	二	大榮山人作	同上

馬琴初作にて當り物なり。

壬生狂言唐本音言直議見臺萩　三　全交作　柳郊畫
一書に春英畫とあり。
惡魂後編人間一生胸算用　三　京傳作　政演畫
寛政二年出板「早染草」の後編にて當り作なり。
高慢敎訓至無我人鼻心神　三　東子作　政美畫
卷末に京傳作とありて自己の名は懸物に竹塚東子とあり、狂歌を持ちし人物も京傳なりと一書に見えたり。
開運七ツ目十二支春の友　二　龜玉作
餅好酒呑何書目附　二　　政美畫
天滿宮之御作敵討道々巡　三　久良記作
龍宮洗濯噺芋鮹の由來　二　春朗作　自　畫
壬生里響色名代の振袖　二　新好作　春朗畫
鼻毛長百首細大馬鹿拔目　二　慈悲成作　豐國畫
本書一名を「運附たから福物語」といへり。
文化六年式亭三馬其作「打諢譚」の角書は本書の角書を用ゐしと見ゆ。
箱入娘面屋人魚　三　京傳作　豐國畫
道外北條五代記　三
京鹿子娘泥鰍汁　三　全交作　同　上
化物夜更顔見世　二　慈悲成作　豐國畫
福德入紋三津引　二　石上作　豐廣畫
御請合戲作安賣　二　萬寳作　同　上
笑增厄災除講釋　三　同　上　春英畫
信田褄時代摸樣　二　同　上　豐國畫
鎌倉山料理獻立　三　同　上　春英畫
世諺鳥混雜賞賦　二　同　上　豐國畫
石上三之助幸抱　三　石上作　自　畫
枯木華作者誓願　三　萬寳作　豐國畫
擲交野郎之蒲鉾　三　二世喜三二作　同　上
壬生踊戲作面目　二　慈悲成作　同　上
世上洒落見繪圖　三　京傳作　菊亭畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す但一枚落丁。
盧生夢魂其前日　三　京傳作　重政畫
一書に柳郊畫、他の一書に政美畫とあり。
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
運附太郎福物語　二　慈悲成作　豐國畫
前記「大馬鹿拔目」と同書なり。
縣々時々比來降涌金　三　冬藏作　文橋畫
内田新好の序文あり。

落噺腹筋問答	二	新好作	政美畫
今昔緣氣白綾	三	慈悲成作	豐國畫

芝全交の序文あり。

手遊張子虎之卷	三	慈悲成作	豐國畫
馬鹿長命子氣物語	二	同　上	同　上
爲朝島巡り	三	萬別作	
純友勢入船	二		蘭德畫
有職鎌倉山	三	蘭德齋作	自　畫
將門冠初雪	三		蘭德畫
金銀太平記	二	土生作	文橋畫
話染廓色揚	三	京傳作	豐國畫
落噺笑書拔	二		
宮柱七福對	二		
敎訓指相撲		新好作	

○

文軒翁云、京傳作此頃より大に行はれ其名高し。又此頃壬生踊といふもの流行して、是に擬する作多し。北尾政演が青本を書く事此年にて止む。葩雪曰、去冬の嚴令發布以來、諷刺に代ふる題目は、一變して市井に流行する雜事を當込みし物多く、當時市中に喧傳せらるゝ心學乃至壬生踊を材に取るが如く、多少復古の傾ありしも、書中の文章は昔時に比してやゝ長文となりしが如し、又敎訓的の作風も行はれしゆゑ、理窟臭き觀も往々あれど、可笑味に長所を有ちし全交もありて作振一樣ならず、たゞ全盛期と謂つべきは山東京傳一人にして、他人の作を書かずなりしは、大作家の位地を占めしとの自信よりしてなるべき耶、要するに當時は全交、京傳の舞臺なりしならむ。

寛政四壬子年

作　者

芝全交	
山東京傳	三十二歲
唐來三和	四十四歲
樹下石上	
岸田杜芳	再板物
七珍萬寳	再板物

櫻川慈悲成　二十六歳
南仙笑楚滿人　四十四歳
見得坊　七珍萬寶門人なり。
黒山人黒木　氏名詳ならず黒木の作は本年唯一種あるのみなるも、常に京傳方に寓し京傳が著述の片腕と呼ばれし士なりと云ふ、後東海道三島の宿に歿すと云ふ。
梅山人　一説に鶴屋南北の別號ならむといへり、されど詳ならず。
氣象天業　四方山人門人にて狂歌を能くす。
井上勝町
信夫蹉彥
曲亭馬琴　瀧澤氏名は解通稱清左衞門後瑣吉に改む、蓑笠翁と號す、又信天翁、魁蕾子、傀儡子、玉亭光峨、玄同、愚山人、逸竹齋達竹、大榮山人、狂齋、篁民、蠹齋、閑齋、及び彫窩主人等の數號あり初め飯田町に住し中頃神田末廣町に轉じ、晩年四谷信濃町に移居す、一時山東京傳の門人と稱せしも素より業を受けたるに非ず、されど後に之を悔ゆるもの丶如し、明和四亥年六月九日に出生し本年二十六歳なり。

畫工

春朗　三十三歳
菊舟　再板物なれば誰人かの假名なるべし。
歌川豐國　二十四歳
勝川春英　二十五歳
勝川春常
北尾政美　三十二歳
北尾重政　五十四歳
鳥居清長　再板物

板元

鶴屋喜右衞門
和泉屋市兵衞
西村屋與八
伊勢屋次助
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
秩父屋

雜記

一筆斎可候生る。

二世烏亭焉馬生る

五月五日山東京傳書畫會を柳橋萬八樓に開く、會する者約二百名次で居を銀座一町目に移す。

十二月八日勝川春章歿す享年六十七淺草西福寺に葬る法號勝譽春章信士。

○

於福の面流行す。

書目

形容化景唇動鼻下長物語　三　全交作　政美畫

名作二十三部の內。

神田利生王子神德女將門七人化粧　二　京傳作　政美畫

此書は本町二町目角玉屋景物用として戲作せしものなり。

天神川桂川鶴千兩龜萬兩　三　政美畫

昔々桃太郎發端話說　三　京傳作　春朗畫

霞之隅春朝日奈　二　同上　重政畫

優長源氏物草嘶　二　三和作　同上

一心土手之紅葉　三　春常畫

浮世操九面十面　三　全交作　豐國畫

戀女房染分茶漬　三　慈悲成作　同上

爲恐肝心堪忍袋　三　見得坊作　春英畫

軍略深雪武田菱　三　石上作

假名手本忠臣藏　五　春英畫

天明四年板の再出なるべし。

山入桃太郎昔話

安永九年板『山入鼠桃太郎嘶』の外題替再板なり。

於昔今南樓通臣　三　杜芳作　清長畫

天明三年板『新例矢口渡』の外題替再板なり。

新春花作者再咲　三　萬寶作　春英畫

先年出板せし『其返報豐年貢』といへる袋入の外題替再板なり。

實語敎幼稚講釋　三　京傳作　春朗畫

一書に重政の畫とあり。

此書實は馬琴の代作なり。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板せり

女莊子胡蝶夢魂　袋入二　黑木作　春朗畫

葩雪曰、序文の末に「本屋の應需て朋友馬琴子の筆をかり山東京傳識」とあり之に就き式亭三馬は其藏本の首に「友人曲亭馬琴子いまだ京傳子の舍に食客たりし頃代作せし序文なり」と自書しあり。

果報寐待物草太郎月　二　三和作
夏浴衣開七縞　三　慈悲成作　豊國畫
鵺賴政名歌芝　三　楚満人作　春朗畫
年中故事附錄　二　杜芳作　清長畫
　天明三年板の再出なるべし。
孝行蒲公英小徑　三　梅山人作　政美畫
怪物徒然草　二　京傳作
源平軍物語
梁山一奇談　三　京傳作　重政畫
勇士怪談話　三
天剛垂楊柳　三　京傳作
御存之化物　三　慈悲成作　豊國畫
神仙路考油　二　天業作　政美畫
　一書豊國畫とあり。
唯心鬼打豆　三　京傳作　重政畫
　文化元年外題を『七色合點豆』と改め再板せり。
名木二代鑑　三　勝町作　自畫
　享和三年外題を『伊呂見草浮世頭木』と改め再板せり但三光作とあり。
眞素民濃鏡　前三 後二　蹉彥作
　むめ山人の序文あり。
　此書一名を『天神七代記』と稱せり。
花春虱道行　二　馬琴作　春朗畫
　葩雪曰、本書に就ては、世の馬琴通皆本書の出板を疑ひて、否定さるゝものゝ如し、彼の寛政十二年出板の『花見話虱盛衰記』以外に、此種の作有ることなしと、然れども本書は春朗の畫にて山口屋之を出板し、『盛衰記』は豊國の畫にて蔦重之を出板せり、此作と『盛衰記』と別個に出板せしと明なり、且つ京山が『蜘蛛の糸卷』には「花の春虱の道行全二冊（但一冊五枚宛）春朗畫にて（今の北齋）蔦屋出板、馬琴自序に京傳門人とあり（此本我家にありしが類焼の時失せぬ）此雙紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ」と見えたり、素より馬琴に敵意あり、且老耄せし京山の筆とはいへ、一概に否認し去るべからず、想ふに此作大當りなりし爲めに、其後更に作意を改めて『虱盛衰記』を案出せしにはあらざる歟、『虱道行』にして今日傳存するもの、一本たりとも有りたらむには、斯かる疑ひはあるまじきものをと、思ひ出る儘を附記して世の讀書家の是正を俟つ。

○

文軒翁云、芝全交が『長物語』大に名あり、此前に杜芳作に同じ趣向あり、外題年號を遺す、追考して記すべし、全交作は之に擬して出藍なり、此後築地善好が『小田原相談』續物と云ふべし。『梁山一奇談』は水滸傳の繪双紙なり、纔に六冊十回迄にして止む、近世の水滸傳の繪本すべて是に倣へり。『眞素見濃鏡』は神代卷天神七代の間を記す、此後一九が續記する『地神五代記』あり。此頃化物噺の本行はる、是より四五年の間に怪談物多し、又一代記軍書の類行はれて、今年の出板、軍書怪談類多くして戯作少し、此頃より世間の風俗街談等を綴る事を憚りし故、是等の作に移り替りたるなるべし。

蘆雪曰、去歳青本に筆を執り初めし曲亭馬琴、今年京傳の代作物に筆を馴らしつゝあり、京傳の勁敵者たる馬琴の腹案に忙しき時なるべし。

寛政五癸丑年

作者

芝全交

山東京傳　三十三歲

櫻川慈悲成　二十七歲

曲亭馬琴　二十七歲

戀川好町　四十　歲

唐來三和　四十五歲

鹿杖山人　四十一歲（卽戀川好町）

南仙笑楚滿人　四十五歲

七珍萬寳　三十二歲

樹下石上

四方山人　四十五歲

桃栗山人柿發齋　中村氏名は利貞通稱和泉屋和助本所相生町五町目に住し大工職たり、烏亭焉馬と號し又立川焉馬、談州樓等の號あり、狂名鑿釿言墨曲尺、性落語を好み遂に中興の祖と稱せらる、又狂歌の判者たり、戯作は其數多からず、寛保三亥年を以て生れ當年五十一歲なり。

虛呂利　芝山人と號す。

畑芋助

傀儡子　馬琴門人とあるも其馬琴なること前に記せ

り本年二十七歳
春道草樹　渡船郎と號せり。
勝川春英　磯田氏通稱久次郎九德齋と號す浮世繪師なり、本年二十六歳、天明二年畫工の條下參看。
陽明亭鶴成

畫工

春朗　三十四歳
歌川豐國　二十五歳
勝川春英　二十六歳
勝川春潮
北尾政美　三十三歳
北尾重政　五十五歳
樹下石上
鳥居清長　四十二歳
時太郎可候　三十四歳即ち春朗なり。
根津優婆塞　蓋し歌麿の匿名なるべし。

板元

和泉屋市兵衞
榎本屋吉兵衞
大和田安兵衞
村田次郎兵衞
鶴屋喜右衞門
蔦屋重三郎
西村屋與八
伊勢屋次助
西宮新六
秩父屋

雜記

五柳亭德升生る。
六月十八日芝全交歿す。
曲亭馬琴居を飯田町にトす。
○
谷中七福神參詣始る。
小人島女の見世物出づ。

書目

十四傾城腹の内	三	全交作	重政畫
名作二十三部の內。			
富士之白酒安部川紙子新板替道中助六	三	京傳作	淸長畫
頬被即席菩提料理四人詰南京傀儡	三	同　上	重政畫
美満壽親玉天狗礫鼻江戸子	三	柿發齋作	豐國畫

長物語後編 白髭明神御渡申　三　全交作　重政畫

前編『鼻下長物語』は寛政四年出板なり。

正本伊達競 床本襤褸錦 宿昔語筆操　二　京傳作　政美畫

のしの書初 若井の水引 先開梅赤本　三　同　上　重政畫

一名を『新玉の梅の赤本』といふ歟。

敵役睦月 朝比奈茶番曾我　三　慈悲成作　豐國畫

浮世街道 御茶漬十二因縁　三　馬琴作　同　上

一書に春英の畫とあり。

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

奈良大佛江戸見物 袋入一　虛呂利作

一書に寛政十一年とす。

䖊雪曰、此作竝に『東大佛楓之名所』とに就て私考あり後に揭出す。

酒の佐の字 盃の左の字 七八上戸　二　慈悲成作　豐國畫

大谷德次 道化百人一首　三　好町作　同　上

罌粟入胡麻入 壽常盤仙米　二　全交作　同　上

御目さまし 出世之角松　二　……　春英畫

忠臣藏壁樂書 人唯一心命　三　三和作　優婆塞畫

傚勝春英意根津優婆塞畫とあり。

今日は廿八日 尻摩御用心　二　全交作　豐國畫

寛政十年・九の書にて再板せし歟。

皐下旬蟲干曾我　三　京傳作　重政畫

福德果報兵衛傳　三　同　上　同　上

再會親子錢獨樂　三　三和作　政美畫

花之笑七福參詣　二　京傳作　同　上

大仕掛三階曾我　三　鹿杖山人作　豐國畫

莿萱墨染衣日記　三　楚滿人作

染相性男女占衿　二　全交作　豐國畫

將棊指揮太平話　三　萬寶作　春英畫

年寄之冷水曾我　三　全交作　豐國畫

十二神樂稚輕業　三　芋助作　同　上

日永話御伽古狀　三　萬寶作

市土產於多福神　二　石上作　自　畫

荒山水天狗鼻祖　三　馬琴作　政美畫

銘正夢楊柳一腰　三　傀儡子作　同　上

堪忍袋緒〆善玉　三　京傳作　重政畫

『心學早染草』の三編なり。

貧福兩道中之記　三　京傳作　春朗畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

歌化物一寺再興　二　春英畫

春英の自畫作なりと云ふ。
茶成抹茶番狂言　二　萬寶作　豐國畫
鹿杖山人の序文あり。
花團子食氣物語　三　馬琴作
馬琴自序の末に「於曼鬼武亭閑山東京傳」と署名し巴山人の印を捺し又卷尾に「京傳校」と記しあり。
鼠子婚禮塵劫記　三　馬琴作　豐國畫
京傳の序文に「曲亭何某前に予が隱里一つ穴に寓居し一つ皿の油を嘗て友としよし」又「母屋を借して廡をとられ舊鼠かへつて猫をはむ云々」多少注目すべき文字なるべし。
智惠次第箱根話　三　草樹作　春朗畫
序は渡船即ち草樹の文なり。
東大佛楓之名所　三　全交作　可候畫
一書に寛政十一年出板とす。
菴雪曰、『奈良大佛江戸見物』の項に記せし如く本書の作に就ての私考は別に先に記すべし。
夫者七小町是者虎子餅馬鹿功　二　萬寶作　豐國畫
頓智愚子六通半略卷　三　同　上　同　上
浦島太郎龍宮羶鉢木　三　京傳作　重政畫

本書は曲亭馬琴の代作なり。
増補毬越登坂賓山道　三　傀儡子作　政美畫
一名を『増補伊賀越物語』と曰へり。
酒田金時遊氣之酒夢　二　春英畫
春英の自畫作ならむ。
猿尻金平牛房　二　慈悲成作　豐國畫
春遊七福曾我　二　春英作　自　畫
身爲着寶洪福　二　鶴成作　春英畫
七珍萬寶の序文あり。
小人國穀櫻　二　京傳作　政美畫
二代大中黒　二　楚滿人作　春英畫
文覺勸進帳　五　同　上　豐國畫
變化物春遊　二　慈悲成作　同　上
絲瓜皮歌袋　二　同　上　同　上
音聞七種噺　三
紺丹手織縞　三　芋助作
昔語銚子濱　三　萬寶作　豐國畫
萬福長者傳　三　石上作
流行七福參　三　四方山人作　春潮畫
果して春潮の畫なるや疑はし。

青樓育咄雀　二　桃栗山人作　豐國畫
鹿杖山人校とあり。

忠臣藏　二　萬寶作　豐國畫

新玉の梅の赤本　三　京傳作　重政畫
此書『先開梅赤本』と同一なるべし。

增補伊賀越物語　三　傀儡子作　政美畫
此書一名を『登坂寶山道』と曰へり。

○

文軒翁云、曲亭馬琴出る、是より年々續て著述多し。鹿杖眞顏後に狂歌堂と號し俳諧歌の宗匠たり。桃栗山人は一號烏亭焉馬落噺の中興たり。

大佛の著作に就て

蘆雪曰、本年大佛に關する戲作二種出でたり、即ち虚呂利作の『奈良大佛江戸見物』と全交作の『東大佛楓之名所』（一に大佛餅東大佛楓名所とあり）となるが、之に就て幾多の錯雜せる疑問を生じたり。此事實は、南品川海晏寺に、盆にて大佛の像を造り、之に雨合羽を覆ひし見世物興行ありて、合羽大佛と呼び當時の評判となりし事を作りし戲著なるが、『武江年表』は之を寛政十年の條下に載せたり、故に前記二種の戲作を一書に寛政十一年の出板となせど、作者の一人全交は本年歿去したれば、十一年に其作あるべき道理なし、是ぞ第一の疑問なりしが、取調の結果合羽大佛の事實は寛政四年にして、前記の二書及び別に全交の著せる半紙本の『合羽大佛略縁記』も、共に本年の出板なるを確實にして、『武江年表』の誤謬なることを確め得たり、其證は當時山東京傳が、本町一町目鳳榮堂村上太兵衞の爲めに、同店發賣の洗粉の報條を草したる文中に明かなり。

「されば合羽の大佛樣も白毫の銅盥にて清めの御手水なさるゝ節は紅葉袋にませたまひ品川育ちの淺草きつて御風聽遊ばされ門前にいちの權現靈寶の網の目から手を出す如く大流行

とありて、此文は寛政六寅年出板せし『ひろふ神』といへる小冊に見えたれば、此疑問は幸に氷解したれど、次に不明瞭なるは書冊と作者の孰れもが、揃に揃ひて曖昧なる一條なり。

『奈良大佛江戸見物』は、冊袋入にて芝山人虚呂利の作とあれど、原本は果して然るや否やを知らず。

また、

『大佛餅東大佛楓名所』は三冊物全交作にして可候の畫とあり、されど、予が藏本によれば、此書は袋入にして其内容は正しく前記の『江戸見物』なれど、訝しきは八葉目の裏面にて、他板らしき大佛の半身像ある畫を貼附しあるも、文の讀續き板下の工合等は、八葉前と同樣にて、同一の板としか思はれず、されど其紙末に芝全交作とあれど、熟視すれば全の字の中左右に二點を小さく加へ、拙なる金の字となせしさへ奇怪の極みなるに、九葉目の表に當る部分には、大佛餅の畫にて右方に十五葉目の柱書ある半葉を、裏表紙の表面に貼附しある等訝しきこと限りなし、而して八葉の裏面と、此九葉目の半葉とは、又袋入の紙質にて、通常三冊物の漉返紙に非ず、且つ予の藏本は、後に所有者が手を加へて改綴せし物とも見えず、綴絲も賣出し當時其儘なれば、最初より此裝釘にて出せし物なる歟、丌は別として本書を通讀するに、文章といひ假名遣といひ、拙劣至極のものにて、虛呂利や全交の作にあらざること明白なり。又可候の畫とあれど如何にや、尤も一說に據れば、天明六年白山人の名にて、春朗即ち可候が出せし『大佛左捻』の再板こそ、此『楓名所』なりといへり、若し然りとせば、尙以て其正體を知るに苦まざるを得ず。

要するに此二書に就ての疑問を擧ぐれば

全交を金交となせし理由。

『江戸見物』と『楓名所』とは別種の出板物なりしや否や。

『合羽大佛略緣記』以外に全交の著作あるや否や。

『楓名所』は天明板の『大佛左捻』の改題再板なるや否や。

予が藏本は果して完全の書なるや否や。

にあり。今各種の原本を對照するを得ば、或は容易に其眞相を識別するを得るならむも、未だ其機會に接せざれば、遺憾ながら疑團を續くるの外他に途なし、世の青本通にして、丌が解釋を與ふるに吝ならざれば蓋し至幸なり。豈獨り予の爲めのみならむや

寛政六甲寅年

作者

山東京傳　三十四歳
唐來三和　四十六歳
虚呂利
曲亭馬琴　二十八歳
芝全交　遺稿
市場通笑　五十六歳
森羅亭萬寶　即七珍萬寶なり三十三歳。
櫻川慈悲成　二十八歳
樹下石上
戀川好町　四十二歳
萬象亭爲輕　四十三歳
千差萬別
式亭三馬　菊地氏通稱太助後太輔と改む本町庵と號す又四季山人、洒落齋、遊戲堂、哆囉哩樓及び四季亭等の數號あり本町二町目に住し後藥舖を營み化粧品類を鬻げり烏亭焉馬の門に入り式亭三馬を以て作名とす安永四未年に出生し本年二十歳なり。
築地善好　即ち竹杖爲輕なり本年四十三歳。

古河三蝶　再板物
本膳亭坪平　氏名詳ならねど山東京傳の門人にて本町に住居せしは事實ならむ、此一二年前より多く日本橋邊の飲食店の引札文を草し、殊に寛政五年七月下旬本町二町目に開業せし蕎麥屋松桂庵の爲めには七月と九月との兩度に引札の文案を草し、又七年には其戲作中に松桂庵の廣告的を書込む等何等かの關係あるならむ、作名と飲食料理店の引札を多く作るとに由り考ふるに坪平も亦料理店の主人にてもあるならむ歟、偶坪平が草せし引札文のみを集めし一小册を閲して斯くは想像せしなり。葩笑再按するに、坪平の居所は本石町四町目大横町にて堀野屋仁兵衛といひしやうに想はるれど、全くの推測なれば斷言は出來ず。

畫工

長喜
春朗　三十五歳
歌川豐國　二十六歳
勝川春英　二十七歳
北尾政美　三十四歳

北尾重政　五十六歳
古河三蝶　再板物
十返舍一九　三十一歳其小傳は載せて寛政七年作者の部中にあり。

板元

西宮新六
西村屋與八
蔦屋重三郎
鶴屋喜右衛門
和泉屋市兵衛
榎本屋吉兵衛
村田次郎兵衛

雜記

畫工歌川國安生る。
三代目市川門之助生る。
近時黄表紙の定價は一冊十文二冊物二十文三冊物は三十文に騰貴す。

書目

大入目青本 見得山時鳥 初役金烏帽子魚　袋入二　京傳作　一九畫
菜で喰ふ 盡も好々 三桝太夫七人娘　三　同上

榮花夢 後日話 金銀先生造化夢　三　京傳作　重政畫
安永四年板戀川春町作『金々先生榮花夢』の後編に擬しての戲作にて京傳當り作の一なり。
忠臣藏 十一段續 大道具鱗幕無　三　三和作　豐國畫
風流 五丁夢 芝全交腹之内　一　虚呂利作
夫は水虎 是は野狐 根無草筆芿　三　京傳作　重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
忠臣藏前世幕無　三　京傳作　重政畫
福壽海無量品玉　三　馬琴作　春朗畫
天道浮世出星操　三　三馬作　豐國畫
全交法師當々草　三　全交作　重政畫
眉間尺三人泥醉　三　京傳作　同上
人間一心覗替繰　二　三馬作　豐國畫
金生樹心之接穗　三　虚呂利作　長喜畫
忠臣藏即席料理　三　京傳作　重政畫
小人島七里富貴　二　春朗畫
竹齋老寶山吹色　三　善好作　重政畫
御馴染花咲雛交　三　通笑作　豐國畫
第一御德用物語　三　慈悲成作　同上
工面壁観師大通　三　森羅亭作　政美畫

敵討伊吾二十卷　二　慈悲成作　豐國畫
百人一首戲講釋　三　全交遺稿　同　上
　山東京傳の跋文あり。
旨趣向棚牡丹餅　二　石上作　政美畫
　文化三年再板せりと見ゆ。
戲場嘉話古手返　三　三蝶作　自　畫
　一名『戲場嘉話百物語』
　天明六年板『紺屋話化語』の外題替再板なり。
揚屋町伊達豆腐屋　三　好町作　豐國畫
馬鹿等舖親々道成寺　二　爲輕作　政美畫
鎌倉頓多意氣　二　慈悲成作　豐國畫
春遊相撲將門　二
仙傳秘法趣向氣工　二　萬別作　政美畫
大福長者嬿　袋入三　石上作　同　上
繪本阿房袋　三　慈悲成作　豐國畫
覗見喩節穴　二　坪平作　春朗畫
百福壽老人　三　石上作　政美畫
源平布引瀧　三　春英畫
　後編『旭出幼源氏』も本年出板なり。
旭出幼源氏　二　春英畫
　前編『源平布引瀧』も本年出板なり。
鉢冠物語　三　慈悲成作　豐國畫
氣の藥　二

○文軒翁云、式亭三馬出で全交の趣を慕ふて世俗の風を穿つことを得たる妙作多し、樹下石上福壽の趣を年々に作りて能く行はる、是も亦稗史の一家なり、按に年の始に出る物は人々目出度事を好む故に永く行はれしもの歟

寛政七乙卯年

作者

櫻川慈悲成　二十九歲
四季山人　二十一歲（卽式亭三馬）
曲亭馬琴　二十九歲
築地善好　四十四歲
本膳亭坪平
唐來三和　四十七歲
南仙笑楚滿人　四十七歲

森羅亭萬寳　三十四歳
市場通笑　五十七歳
戀川行町
黄鶴
笑丸　櫻川杜芳の別名なりといふ。
十返舎一九　重田氏名は貞一通稱與七幼名を幾五郎と呼べり、別號醉斎十返舎一九を作名とす十偏舎、十遍舎、又は十偏齋とも書せり、狂歌并に浮世畫を能くし自畫作殊に多し、一九明和元年申年を以て生れ今年三十二歳なり。
一書に曰く「一九の妻女は名をお民といふか、作書の書中にまゝ見えたり畫面には随分婀娜者なり、一笑」と樂天家たり磊落漢たる一九なればこそ堂々妻女を作中の人物に組入れ、平然として呵々大笑し得るなるべし、妻女の妍醜は知り得ざれども予も亦其繪組の民女に接する毎に抱腹せざることなし、一九の無邪氣さ大概斯の如くなるべし。

書工

春朗　三十六歳
長喜
歌川豊國　二十七歳
北尾政美　三十五歳
北尾重政　五十七歳
細田榮之
戀川行町　寛政元年作者の項に記せし如く其履歴混雜して詳ならず、又一説には通稱を鐵五郎といひ貴家の隱居なりとも又醫師なりともいひ、馬喰町住とも下谷坂本町に住めりともいひて審ならず、尚寛政元年を参照すべし。
十返舎一九　三十二歳

板元

村田次郎兵衛
和泉屋市兵衛
榎本屋吉兵衛
鶴屋喜右衛門
西村屋與八
蔦屋重三郎
西宮新六

雜記

欣堂閑人生る。

畫工歌川國直生る。

曲亭馬琴初て讀本を著す『高尾船字文』これなり。

○

此頃「しんぐい〳〵」といふ唄流行す。

書目

(源九郎狐 葛の葉狐)如何辨慶御前二八　二　慈悲成作　豐國畫

(姉は宮城野 妹はしのぶ)碁太平記白石噺　三　四季山人作　同上

寛政八年『白石噺後編』出板せり。

文政三年後編と共に再板せり。

(兼讀本 草双紙)作爾爰身成金書　三　馬琴作　重政畫

文化二年再板せり。

(外郎 外言)相州小田原相談　三　善好作　重政畫

寛政四年全交作『鼻下長物語』に摸擬せし作なり。

(先世界 忠臣藏)手前漬赤穗鹽　二　慈悲成作　春朗畫

怪物つれ〴〵雜談　二　黃龜作　榮之畫

(財布の紐)しわみうせ藥　三　坪平作　春朗畫

(昔怪談 謳歌謡)心學膝莊子　三　馬琴作　重政畫

奇妙頂禮胎錫杖　三　一九作　自畫

善惡邪生大勘定　三　三和作　重政畫

古手妻品玉手箱　二　慈悲成作　豐國畫

桃太郎大江山入　三　慈悲成作　豐國畫

大昔化物ばなし　二　同上　同上

萬歲諸神娃立　三　森羅亭作　行町畫

德若水緣起金性　三

根無草曾我和物　三　笑丸作　長喜畫

桃食三人子寶噺　二　通笑作　同上

浮草双紙洗小町　三　行町作　同上

花笑顏相指南枝　三　森羅亭作　政美畫

昔料理狸之吸物　二　慈悲成作　豐國畫

寛政十年外題を『黑手八丈狸金性水』と改め再板せり。

弘法大師御本地　一

此書古板の再摺なりと云ふ。

(自由 自在)新鑄小判𥿻　三　一九作　自畫

山枡太夫物語　二　慈悲成作　豐國畫

內辨慶攄忍帳　三　慈悲成作　同上

(落語 和賀)笑美壽

心學時計草　三　一九作　自畫

嫁入桐長持　二　慈悲成作　豐國畫

壽鼠之嫁入　二　長喜畫

敵討義女英　三　楚滿人作　豐國畫

此作非常に大當りにて敵討中興の作と稱せられたり。

かるかや　一

落噺百囀 袋入 一

子執盛　一

○

文軒翁云、楚滿人の義女の英は大に名あり、十餘年廢れたる敵討を再興し、是より年々に續出し、文化に至りて大に行はるゝは、楚滿人の功と云ふべし。十返舍一九出る、作の體可笑味を專一とす、年々に著述し文政に至る、又酒落本の膝栗毛は大に名あり。

七曲舍云、一枚摺京傳僞作多く流行す。

寬政八丙辰年

作者

曲亭馬琴　三十歲

築地善好　四十五歲

樹下石上

山東京傳　三十六歲

春道草樹

四季山人　二十二歲

十返舍一九　三十三歲

櫻川慈悲成　三十歲

南仙笑楚滿人　四十八歲

笑丸

樂亭馬笑　式亭三馬の門人にて樂山人と號し淺草田町日本堤下に住居す、後四世竹本倉太夫の名を襲ぎ義太夫語りの太夫となれり。

望月窓秋輔

寶倉主

鴨羽白

likou堂景則　喜多川菊麿の門人なり。

畫工

春朗　三十七歲

歌川豐國　二十八歲

北尾政美　三十六歲

北尾重政　五十八歲

十返舍一九　三十三歲

板　元

西宮新六
蔦屋重三郎
岩戶屋源八
鶴屋喜右衞門
榎本屋吉兵衞
和泉屋市兵衞
村田次郎兵衞

雜　記

五世鶴屋南北生る。
六月鳴瀧音人歿す。
〇
泉岳寺開帳す。
く〳〵り猿流行す。

書　目

赤本昔/俳優青本 怪化競箱根戲場	三	馬笑作	豐國畫
式亭三馬校とあり。			
御了簡方/御好に付 會席料理獻立	三	秋輔	政美畫
胡盧〳〵笑春の山。			

泉岳寺/曼荼羅 開帳話南志	一	鴨羽白作	豐國畫
虛呂利校とあり。			
小需雨見越松株	三	馬琴作	重政畫
堪忍五兩金言語	三	同上	同上
曲亭增補萬八傳	二	同上	同上
中華手本唐人藏	三	善好作	同上
千里一刎勇天邊	三	一九作	自畫
初登山手習方帖	三	同上	同上
油斷敵役切能書	三	同上	同上
蟲看鑑野邊若草	三	同上	同上
初日影七福郎生	二	同上	同上
替錢通用壽護錄	三	同上	同上
早野勘平若氣誤	二	同上	同上
多來福萬兩分限	二	石上作	豐國畫
朝比奈御髭之塵	二	慈悲成作	春朗畫
身代開帳略緣記	三		
淺草寺之一家裏	二		政美畫
嗚呼可笑糠分類			
四遍摺心學草紙	三	馬琴作	重政畫

『心學早染草』の四編に擬して作りしなり。

譽田川柳の禿筆　二　馬琴作　重政畫
一書に享和二年板とあり。
酒神餅神鬼殺心角樽　三　京傳作　重政畫
雷門再興御膳淺草法　二　一九作　自畫
文化五年「瀧返淺草法」と改題再板す。
增補執柄太郎　三　楚滿人作　豐國畫
常盤國風土記　三　一九作　自畫
埴覗本草盲目　三　同上　同上
御誂向鼠嫁入　二　同上　同上
歌箏功雀高名　三　寶倉主作　豐國畫
化物年中行狀記　二　一九作　自畫
怪談家內奇狐狸　三　草樹作　豐國畫
一書に一九作とあり。
諺下司話說　三　京傳作　重政畫
兵夫酒醼榮　二
星兜八聲帳　二
化物小遣帳　二　一九作　自畫
青海波龍宮　三　同上　同上
擲打變術卷　三　同上　同上
擽會入雲鳥　二　同上　同上

浮世賽錢箱
信有奇怪會　三　一九作　自畫
落話風の神　二　同上　同上
鳶油揚攫構　同上　同上
人心鏡寫繪　三　京傳作　重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
昔話狐娶入　三　景則作
一書に重政の畫風とあり。
花鬪戰梅魁　二
笑丸の序文あり。
白石噺後編　二　四季山人作　豐國畫
前編「碁太平記白石噺」は寛政七年出板なり。
文政三年前編と共に再板せり。
報讐癩狂夫　三　馬琴作
一名を「敵討於蘭之狂尾」と曰ふ歟。
怪談筆始　二　一九作　自畫
花ぐるま　二　笑丸作

○

文軒翁云、北尾政美青本を書く事此年止る、是より後畫風を變じて、蕙齋鍬形紹眞と稱し、略畫式を

著して大に行はる。
七曲舍云、今年草紙問屋改極印あり株式の始め歟。
蓜雪曰、此頃の戯作は、理窟めきし物と妖怪物のみ多くなりて、最早天明の盛りを夢にだも視ることを得ざるやうになりぬ、また敵討物もちらほら出で初め、戯作に一變化を來すの兆候も見ゆるに至れり、此際獨り腕を奮ひ居るは十返舍一九にて、今年四十九種の出板中、二十種の自畫作を出だして賑はし居れり。

寛政九丁丑年

作者

曲亭馬琴　三十一歳
樹下石上
樂亭馬笑
式亭三馬　二十三歳
山東京傳　三十七歳
傀儡子　三十一歳（卽曲亭馬琴）
蔦唐丸　四十八歳
十返舍一九　三十四歳
櫻川慈悲成　三十一歳
南仙笑楚滿人　四十九歳

畫工

歌川豊國　二十九歳
葛飾北齋　三十八歳卽ち春朗なり。
北尾重政　五十九歳
十返舍一九　三十四歳

板元

西宮新六
岩戸屋源八
西村屋與八
蔦屋重三郎
和泉屋市兵衞
村田次郎兵衞
榎本屋吉兵衞
鶴屋喜右衞門

雜記

松亭金水生る。
墨川亭雪麿生る。

畫工歌川豐清生る。

畫工歌川廣重生る。

十一月十五日畫工歌川國芳生る。

五月六日蔦唐丸歿す享年四十八淺草山谷正法寺に葬る。

○

近頃「れん／＼」節流行す。

書目

阿倍清兵衞一代八卦	三	馬琴作	重政畫
長生講合金々世界悖入寳山吹	三	石上作	豐國畫
源氏日切平家靈聞今昔狐夜噺	三	一九作	自畫
新夜新作話之繪合三才智惠	二	慈悲成作	豐國畫
噓八百萬神一座	二	馬笑作	同上
唯頼大悲智惠輪	三	三馬作	同上
三歳圖會稚講釋	三	京傳作	重政畫
加古川本藏綱目	三	馬琴作	同上
庭荘子珍物茶話	二	同上	同上
大黑檻黄金柱礎	二	同上	同上
押繪鳥凝漢高名	二	同上	同上
龍宮苦界玉手箱	三	同上	同上
武者合天狗俳諧	二	馬琴作	重政畫
彦山權現誓助劔	五	傀儡子作	
三世相朗滿八算	三	楚滿人作	豐國畫
太平記無禮講中	三	一九作	自畫
夜目遠目笠之内	三	同上	同上
釣惠比壽水揚帳	二	同上	同上
家内安全鼠山入	三	同上	同上
福德壽五色目鏡	二	慈悲成作	豐國畫
押強者何茂八文	二	同上	同上
鹽賣文太郎物語	三	同上	北齋畫
古昔花咲勢親父	二		
和藤内三升若衆	三		
猿茂延命龜萬歲	二		
富士色板絞曾我	三	楚滿人作	豐國畫

一名を『風流板〆曾我』と曰ふ歟。

无筆節用似字盡	三	馬琴作	重政畫

寛政十年後編『鹿想案文當字揃』出板せり。

天保十年本書を再板せり。

和荘兵衞後日話	三	京傳作	重政畫

此書當り作なり。

身體開帳略縁記　三　唐丸作　重政畫
寛政八年板『身代開帳略縁記』と同書ならむ歟。
北國順禮唄方便　三　馬琴作　重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
楠正成軍慮智輪　二　馬琴作　重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
親々孝經唐本之疑言　袋入三　三馬作　豐國畫
享和二年『御覽親孝經』と外題を改め再板せり。
芝全交夢寓言　三　三馬作　豐國畫
今度者鬼息子　二　楚滿人作　同上
千早振紙屑籠　三　一九作　自畫
文化三年板『七福神屑籠』は本書の改題再板歟。
化物大閉口　三　楚滿人作　豐國畫
正月故事談　三　京傳作　重政畫
薯蕷鰻鱺樂　二　一九作　自畫
閻思獸境界　二　同上　同上
化物見越松　二　同上　同上
金生水拔幹　二　同上　同上
風光花桂男　三　同上　同上
花筐勇者命　二　同上　同上

貧福水掛論　三　一九作　自畫
諺東埔寨掌　二　同上　同上
壽金太郎月　二　同上　同上
楞師直開帳　三　同上　同上
時花澶拔井　二　同上　同上
忠臣店請狀　二　同上　同上
天保四年再板せり。
敵討姥捨山　三　楚滿人作　豐國畫
文化三年更に增補再板せり。
虛生實草紙　三　京傳作　重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
兒噺舌切雀　二
古板の直し物なりと云ふ。
玄猪節　袋入三　一九作　自畫

○

文軒翁云、京傳の作、今年は四部、孰れも敎訓を專にして戲作の體にあらず、是より勸懲を專にす。
葩雪曰、當年出板五十三種中、馬琴は十一種、一九は十九種を出だせり、一九の作中『時花澶拔井』と云へるがあり、抑江戶市中には以前堀拔井戶はあ

らざりしに、天明の末より此工事を職とする者、江戸に來りて井戸掘を創始せしが、市中之を便なりとし、各所に井戸を掘始めしといへば、當時は既に各町に其設けありしに因みて、此作を出せしものなるべし。

寛政十戊午年

作者

式亭三馬　二十四歳
曲亭馬琴　三十二歳
樹下石上
山東京傳　三十八歳
櫻川慈悲成　三十二歳
十返舎一九　三十五歳
芝全交
唐來三和　五十歳
南仙笑楚滿人　五十歳
傀儡子　三十二歳（卽曲亭馬琴）
蔦唐丸　寛政九年四十八歳の作本年出板。
烏亭焉馬　五十六歳
九年坊　壁前亭と號す著作本年一年のみにて止む。
楊見
巴扇堂　姓は藤原名は長賞通稱連彦右衞門某侯の仕を辭し筆匠を業となし、市ヶ谷に住す、初祖巴扇堂の門に入り狂歌を學び、鷲毛亭萬年と曰ひ、又筆の當持と號せり、後師名を襲ぎ二世巴扇堂と號す、安永八亥年を以て生れ本年二十歳なり。

畫工

歌川豐國　三十歳
北尾重政　六十歳
細田榮昌　細田榮之門人なり。
勝川春亭　山口氏通稱長十郎（一に中川氏）松高齋と號す、又た勝汲壺と號せり、勝川春英の門人なるも後には歌川豐國の畫風に似せて描けり、始和泉町に住せしが後馬喰町二町目に移居す、明和七寅年出生本年二十九歳なり。
十返舎一九　三十五歳
時太郎可候　三十九歳（卽ち北齋なり）

板元

山口屋忠右衛門
鶴屋喜右衛門
和泉屋市兵衛
村田次郎兵衛
榎本屋吉兵衛
西村屋與八
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
西宮新六
竇屋大吉　淺草茅町に住す、後に馬喰町に移轉せし如し。

雜記

山東京傳初て讀本を著作す、『忠臣水滸傳』卽ちこれなり。

○

婦女髱挿しを使用すること再ひ流行し、髮の結振一變す。

五月朔日品川沖にて鯨を捕獲す、長九間一尺高一丈餘と云ふ。

書目

富士劍術 新井柔術 吾嬬街道女敵討　三　三馬作　豐國畫
人間一生 善惡邪正 磨淨頗理心照子　三　同上　同上
めりやす なかうた 二文字鬼角文字　二　慈悲成作
京鹿子 江戸紫 其跡幕婆道成寺　三　三馬作　豐國畫
似字畫 後編 篦想案文當字擶　三　馬琴作　重政畫

前編『无筆節用似字盡』は寛政九年出板なり。

天運循環 寶生金榮花鉢植　三　石上作　豐國畫

文化二年之を再板せり。
後編『金生樹繼穗子寶』は寛政十一年出板す。

東海道五十三次 人間一生五十年 凸凹話　三　京傳作　重政畫
加賀見山 草履打 榮增照降町　三　一九作　自畫
三角雪 燒酎狐火 腹鼓臍囃曲　三　三馬作　豐國畫
產品圖面 難病一變 卽席御料理　三　九年坊作　榮昌畫
黑手八丈狸金性水　二　慈悲成作　豐國畫

寛政七年板『昔料理狸の吸物』の外題替再板なり。

南川 合羽大佛略緣記　一　全交作

蘢雪曰、本書は半紙本にして體裁は黃表紙に非ざるも其內容は純粹の黃表紙物なると、且つは寛政五年の條下に揭げある『東大佛楓の名所』及び『奈良大佛江戸見物』の兩作に關聯したる著作なると

る故を以て、特に茲に採れり。

又曰、寛政五年の條下に遞べし如くなれば本書の出板も寛政五年の部に出すべきを、最初に今年の部に組入れしは補者の杜撰なり、讀者之を諒せよ。

熊坂長半物見松御休所　三　一九作　自畫

一刻價萬両回春　三　京傳作　重政畫

大雜書抜萃縁組　三　馬琴作　同上

曾我物語嘘實錄　三　三和作　同上

御慰忠臣藏之攷　二　馬琴作　同上

百化帖準擬本草　二　京傳作　同上

百合若多武之眼　二　楚滿人作　豐國畫

君子威德富貴機　三　九年坊作　同上

鬼燈提灯穀捷徑　三　同　上　同上

假名文章女忠臣　三　一九作　自畫

御德用黄金草鞋　二　同上　同上

十返舍戯作種本　袋入二　同上　同上

增補獮猴蟹合戰　二　傀儡子作　重政畫

三助待爲運次第　三　一九作　自畫

一名を『價千金榮花夢相』と曰へり。

家内手本用心藏　三　三和作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

賽由伏北狐修怨　二　唐丸作　重政畫

曲亭馬琴之を代作す。

浴衢一口淨瑠璃　三　揚見作　重政畫

本書每葉の柱には「心中咄」とあり。

時代世話足利染　三　傀儡子作　重政畫

後編『足利染拾遺雛形』も本年出板せり。

足利染拾遺雛形　一　傀儡子作　重政畫

前編『時代世話足利染』も當年出板せり。

價千金榮花夢相　三　一九作　自畫

一名を『三助待爲運次第』と曰へり。

座敷仙術須臾之間方　二　春町遺稿　重政畫

兎角一生人唯樽底拔　三　一九作　自畫

雨宮風宮出儘略縁記　三　同上　同上

一狂言狐書入　二　楚滿人作　豐國畫

敵討柳下貞婦　三　同　上　同上

昔噺赤本狂歌　巴扇堂作

落咄無事志有意　蔦馬判

筆津蟲音禽　二　京傳作

怪談奇發情　二　鶴聲作　豐國畫

雲上道中記　三　一九作　自畫
素後壯雪信　二　全交遺稿
奇遇雌雄器　三　九年坊作　榮昌畫
摹書筆回氣　三　同　上　同　上
㑚湊寶乘合　五　同　上　同　上
一陽來伏帳　二　一九作　自畫
忠臣星月夜　二　同　上　同　上
義光夜功珠　三　同　上　同　上
河童尻子玉　三　同　上　同　上
福神江島臺　三　同　上　同　上
取得貨德用　二　同　上　同　上
初賣大福帳　二　同　上　春亭畫

商家景品用としての作なり。

尻操御要愼　三　一九作　自畫

寛政五年板芝全交作に『尻操御用心』あり。

前度往昔軍　二　一九作　自畫

文化十二年外題を「往昔こんな物語」と改め再板せり。

化物和本草　三　京傳作　可候畫

畫名に可候の名を稀に用ゐたり。

兒訓影繪喩　三　京傳作　重政畫

一書に清長の畫とあり。

鼻下長生藥　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す

太郎冠者　三　一九作　自畫

○

文軒翁云、『東海道娘敵討』豐國が畫絶妙なり、是より豐國大に行はる。璧前亭九年坊妙作多し、總に一年にして止む惜むべし。

寛政十一己未年

作者

曲亭馬琴　三十三歲
式亭三馬　二十五歲
樹下石上
山東京傳　三十九歲
十返舍一九　三十六歲
櫻川慈悲成　三十三歲
南仙笑楚滿人　五十一歲

清遊軒　畫工北尾政美の假號なるべし。
戀川春町　遺稿或は再板物ならむ。
橘香保留　通稱三河屋彌平次元飯田町に住し煙草店を營む　別號は奇南樓後に蘭香亭と號せり。出生明和六丑年にして本年三十一歳なり。
雁英
蘂邑亭

畫　工

勝川蘭德
勝川春亭　三十歳
歌川豐國　三十一歳
北尾重政　六十一歳
北尾政演　再板物
戀川春町　遺稿與再板物なるべし。
十返舍一九　三十六歳
子興　榮松齋長喜の改名せしなり。

板　元

鶴屋喜右衛門
榎本屋吉兵衛
和泉屋市兵衛
村田次郎兵衛
西村屋與八
蔦屋重三郎
岩戸屋源八
西宮新六

雜　記

樂亭西馬生る。
土橋亭りう馬生る。
岩井粂三郎生る。
正月五日式亭三馬並書肆西宮新六の二家よ組鳶人足の爲めに破壞せられ遂に公事となり、後人足數名は入牢し新六は過料作者三馬は手鎖五十日に處せらる、其起因は客歳鳶人足間に闘爭の事實ありしに基づき、今春『俠太平記向鉢卷』の作を出せしに、其書中によ組の鳶を誹謗せし點ありしとて此騷擾を惹起せしなり。然れど三馬は之が爲めに大に其名を高めしとなり。

○

二月十五日より向嶋三圍稲荷開帳す。

書　目

六代目市川三升團十郎追善東蔭名卑月落際 二 馬琴作 豐國畫
發
六代目市川團十郎は寛政十一年五月十三日二十二歲にて歿せり。

芝全交寺戯作開帳咥如來萬八緣起 三 三馬作
實生金後篇金生樹繼穗子實 三 石上作 豐國畫
前編『實生金榮花鉢植』は寛政十年出板なり。

夫婦木是嘘氣俠太平記向鉢卷 三 三馬作 豐國畫
此作に由りよ組の鳶人足の暴行を蒙りたる末三馬は手鎖五十日の刑に處せらる。

心教訓悟談續引返譬幕明 三 三馬作 重政畫
赤本鼠黑本狐兩評娵入抄 二 一九作 自畫
源八渡平太堤三十石艤始 三 同上 同上
前編『露深淀引船』も本年の出板なり。

作者根元江戶錦 二 慈悲成作 豐國畫
無雜作行形曾我 三 楚滿人作 同上
彼岸櫻勝花談義 三 馬琴作 重政畫
鯨魚尺品革羽織 三 同上 同上
風見草婦女節用 三 同上 同上
竹本義太夫武士 二 一九作 自畫
鳩叢試轟書賞宴 三 同上 同上

御聖代節用學問 二 莊英作 豐國畫
金春德和歌隱居 三 石上作 同上
式亭三馬の序文あり。

無間鐘梅枝傳譜 三 京傳作 政演畫
天明八年作の再板なり。

料理茶話卽席說 三 馬琴作 重政畫
每葉柱には「胴人形」とあり。

京傳主十六利鑑 三 京傳作 重政畫
文化十二年外題を『十六利鑑略緣起』と改め再板したり。

兩頭筆善惡日記 三 京傳作 重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

殿下茶屋聚仇討 三 一九作 自畫
天保二年畫を豐國に更め再板せり。

世諺口紺屋雛形 三 馬琴作 重政畫
一書に子興の畫とあり。

假名手本胸之鏡 三 京傳作 豐國畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

中村傳九郎追善 二 清遊軒作 子興畫
此中村傳九郎は何代目なるや詳ならず三代目らし

けれど殘年に相違あり。

〔夜守昔語〕幸給闇膽神　三　楚滿人作　豐國畫
〔教訓善惡〕いろは短歌　二　榮邑亭作　子興畫
敵討沖津白浪　三　楚滿人作　豐國畫
星月夜鎌倉山　二　一九作　自畫
腹內養生主論　三　同上　同上
畫本替鐵算圖　二　春町作　同上

古板の再板なるべし。

〔增補〕分福茶質問　二　一九作
五體和合談　三　京傳作　豐國畫
敵討住吉詣　二　一九作　自畫
善惡兩良樂　三　同上　同上
大福茶呑嘗　二　同上　同上
正眞印功紙　三　同上　同上
運開大黑傘　三　同上　同上
穴賢狐綠組　二　同上　同上
大鯨豐年貢　二　同上　同上
敵討巖の松　五
穿幹吹出笑　三　香保留作　蘭德畫
八百八後家　一九作

太閤記筆連　五　莊英作　春亭畫
花軍梅先陣　五　一九作　自畫
露深淀引船　三　同上　同上

後編「三十石艇始」も本年出板せり。

無茶畫押兵　三　馬琴作　重政畫

龍雪曰、寛政元年櫻川杜芳作豐國畫にて「武茶修行押強者」三冊出板せしが、其後再板せりとの由なれど年月詳かならず、然るに是の外題に似寄りし本書の作はあれど、馬琴にて重政の畫なれば異作なるべしと信ぜらるゝが本年西宮よりの出板にも、

〔世話字時代蔵〕無茶揃押兵　三　三馬作

といへるも見えたり、孰れも似通ひし外題なれば、三書對照の上ならでは其異同を辨別すること難かるべし。

○

文軒翁云、天正より以後の事を書し上梓する事、享保以前には憚らざりしにや、『大坂軍記』其外數多見えたり、享保以後は上梓を憚る事となりしに、此頃に至りて、浪花の玉山が『繪本太閤記』上梓して大に行はる、夫れに倣ひて今年『筆の連』を著は

し、又豐國が『太閤記』の錦繪出て、共に行はれしが、幾程もなく前の如く憚る事となりたり。去年品川浦にて鯨を獲たり、其事に擬して作る本二部『品革羽織』『豐年貢』あり。『俠太平記』俗に『いさみ太平記』と云ふ、三馬が妙作なりしが、障事ありて少しの間に發板を止む、故に世上に此本少し。七曲舍云、今年西宮目錄有て不出板問屋衰微可見。葩雪曰、實際目錄のみにて本年出板せざる物、卽ち『三馬樂日記』の類もあらむ、然れども『俠太平記』等四五種の著作は、西宮より出板しあれば、七曲舍の言は非なるべし、又問屋の衰微と謂つべき兆候も、格別に見受け難く想はる。

寛政十二庚申年

作者

樹下石上

山東京傳　四十歲

曲亭馬琴　三十四歲

橘香保留　三十二歲

十返舍一九　三十七歲

櫻川慈悲成　三十四歲

南仙笑楚滿人　五十二歲

時太郎可候　中島氏通稱時太郎後鐵藏に改む、天明元年是和齋の名にて初作あり、寶曆十年九月甲子日を以て生る本年四十一歲なり。天明二年書工春朗の項參看。

虛呂利館美明　寛政五年より出し虛呂利と同一の人なりと云ふ說あるも詳ならず。

道笑　一書に市場通笑門人とあるも疑はし、古板再出の場合に其作者名の字畫を變改するの例多ければ、道笑も其類にして實に其人あるに非ざるべし。

紫いろ主　別號鹽屋艷二品川に住し書を能くす又洒落本に名あり。

祭和樽　源陶氏名は直常通稱武藏屋元次郎後新六と改む鈍々亭と號す、神田小柳町に住し髮結職なり、三陀羅法師に就き狂歌を能くす、狂名祭和樽を以て作名とす。

一片舍南龍

永壽亭　馬喰町二町目書肆西村屋與八が堂號なり、著作は素より名義のみにて代作者あること、安永九年に於けると同じなり。

書　工

子興
歌川豊國　三十二歳
北尾重政　六十二歳
十返舎一九　三十七歳
時太郎可候　四十一歳

板　元

西宮新六
西村屋與八
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
鶴屋喜右衛門
榎本屋吉兵衛
和泉屋市兵衛
村田次郎兵衛
山口屋忠右衛門

雜　記

畫工歌川國次生る。
市川團十郎七代目を襲ぎ白猿と號す。

○

四月十九日大通吉田文京歿す、享年六十八下谷大音寺前長國寺に葬る。

秋頃より「チョイ〳〵節」流行す、「猫ぢや〳〵」「蝶々蜻蛉や」の類なり。

書　目

黄金長者 白銀長者 二幅對榮花春袋　三　石上作　豊國畫
人間萬事二一天作五　二　道笑作　同　上
天明八年通笑作の再出なり。蔭中曰、通笑の通の字を道の字に改めしは書肆の姦策なるべし、「課得世人情」も本年再板物の一なるが是も道笑に改めあり或二三の書に道笑を通笑の門人なりとせしは何か確固たる證跡ありて記せし歟
通寓言 愚妄言 金世界擶能艷　二　美明作　子興畫
白井権八 金松權七 男達東錦繪　五　一九作　自　畫
夫は京 是に東 昔男意氣成平　二　俊滿作
天明二年板「通人擶物語」の外題替再板なり。
去御方の 御好に付 稚衆忠臣藏　三　一九作　自　畫

日盲仙人/日明仙人 謀得世人情　二　道笑作

安永八年通笑作『目明仙人聾仙人』の外題替再板なり。

日中の不曇鏡 甘哉名利研　三　京傳作　重政畫

道笑の名の姦策に出ると前に記せり。

夫京都是東都 見物左衛門　二　色主作　豐國畫

安永八年『東都見物左衛門』清經畫にて出板あり。

人間萬事塞翁馬　三　馬琴作　重政畫

二重織子三德本　三　慈悲成作　豐國畫

五體不具毒解藥　三　香保留作　同上

明眼千人盲仙術　二　一九作　自畫

男一面髭拔鑑　三　色主作　豐國畫

花見話虱盛衰記　三　馬琴作　同上

孝行曰子息金持　三　石上作　同上

出世鯉四方瀧水　二　一九作　自畫

半奈手本萬歲藏　一

增補大江山物語　五　一九作　自畫

今此奈緣唐有乎　三　同上　同上

譬諭義理與褌　三　馬琴作　重政畫

金の蔓掘出分限　三　一九作　自畫

一名『昔話味緣熟』と曰へり。

文化四年再板せり。

春長閑千金玉物　二　香保留作

長閑春道の序文あり。

子を產金七夜祝　二　和樽作　豐國畫

一書に橘香保留作とあり。

大江山幾野紀行　五　一九作　自畫

『增補大江山物語』と同書なるべし。

間合俗物譬問答　三　南龍作　子興畫

卷尾に自詠の歌あり曰く「なべて世の見る人許せ今年より描き筆に染る言の葉」。

竈將軍勘略之卷　三　可候作　自畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

平假名錢神問答　三　京傳作　豐國畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

備前擂盃一代記　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

胴人形肢體機關　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

運次第出雲緣組　三　慈悲成作

一書に一九自畫作とあり。

御手遊達磨心學　三　和樽作　子興畫

白雨や田を三圍の開帳噺　二　一九作　自　畫

娘敵討扇銀面　三　楚滿人作　豐國畫

食言の大木　三　慈悲成作　同　上

心學芋蛸汁　三　一九作　自　畫

化物見世開　二　同　上　同　上

貧福蜻蛉返　二　同　上　同　上

錢鑑貨寫繪　三　馬琴作　重政畫

福神金大帳　二　和樽作　子興畫

昔話味緣熟　三　一九作　自　畫

一名「金の蔓掘出分限」と曰へり。

文化四年再板せり。

祝藥霞報條　三　馬琴作　重政畫

天保八年再板せり。

臍煮茶呑噺　二　永壽堂作　一九畫

十返舍一九之を代作す。

怪談富士詣　一　永壽堂作　一九畫

十返舍一九之を代作す。

○

文軒翁云、「竈將軍」は北齋の書作なり、可候は假に設けたる名なり、是より二三年續て出る。「世人の情」と「二一天作五」は、天明の頃の板を再摺にして、外題と序を取替え面目を新にせしなり、此類の本折々出る事あり。「開帳話」に歌妓の長袖を着たる圖あり、歌妓の長袖此頃に限る歟、此後の本に見當らず。

七曲舍云、「塵功記」も再板と見ゆ。

享和元辛酉年（寛政十三年改元）

作者

橋香保留　三十三歳

式亭三馬　二十七歳

山東京傳　四十一歳

樹下石上

曲亭馬琴　三十五歳

十返舍一九　三十八歳

聞天舍鶴聲

時太郎可候　四十二歳

櫻川慈悲成　三十五歳
南仙笑楚滿人　五十三歳
祭和樽
傀儡子　三十五歳（卽曲亭馬琴）
玉亭子　三十五歳（卽曲亭馬琴）
竹塚東紫　卽東子の別名なり。
見越入道　十返舍一九の匿名ならむ歟。
笑丸
福亭三笑　森氏名は貞雄別號富久亭、牛込に住し手習師匠を業とす、式亭三馬の門人にて洒落本の作も見えたり。

畫工

子興
長喜　卽ち子興の前名なり。
春朗　四十二歳
笑丸
榮水　一樂亭と號す。
歌川豐國　三十三歳
歌川豐廣　三十八歳
葛飾北齋　四十二歳卽ち春朗なり。

北尾重政　六十三歳
樹下石上
十返舍一九　三十八歳

板元

西宮新六
蔦屋吉藏　南傳馬町一町目に住す、紅英堂と號し蔦屋重三郎の支店なりと云ふ、屋標は山形の下に吉の字、通稱蔦吉。
蔦屋重三郎
岩戸屋源八
西村屋與八
和泉屋市兵衛
村田次郎兵衛
鶴屋喜右衛門
山口屋忠右衛門

雜記

六月十五日より嵯峨釋迦如來囘向院に於て開帳す。
割烹店山谷八百善大に行はれ、且つ一般に料理の流行せしものと見え、戲作の外題に料理の文字を入れしもの往々あり。

書目			
本家唐土出店本朝廿四孝安賣請合	三	香保留作	子興畫
草莊子五蝶夢式亭三馬己惚鏡	三	三馬作	豐國畫
喩意馬筆曲馬假多手綱忠臣鞍	三	京傳作	重政畫
宇津宮四五卷五段淨瑠理酒肆	二	傀儡子作	豐國畫
前編『父讐宇津宮物語』も本年出板なり。			
藤江母右衛門田永邪右衛門敵討根笹雪	三	石上作	豐國畫
智惠女房御夢想丸馬鹿に附る藥	三	一九作	自畫
忠臣藏十一段續畫夏素人狂言	三	同上	同上
昔男生得道奇的見勢物語	三	京傳作	重政畫
陰德陽報福貴自在金年玉	三	石上作	豐國畫
忠臣藏四十八文字	三	一九作	自畫
鼻毛三尺智惠三文日本一癡鑑	三	三馬作	豐國畫
文化六年更に『打辭物語』と改題再板せり。			
天明七年板戀川好町作に同名の書あれど全く別種なり、併し寛政四年芝全交作の『鼻下長物語』の剽竊なることは歷然たり。			
嵯峨釋迦開帳延壽案華	三	一九作	自畫
京鹿子投其後從夫道成寺	三	三笑作	子興畫
春之駒象棊行路	三	馬琴作	重政畫
敵討布施利生記	三	楚滿人作	豐國畫
緣結千代之子寶	二	和樽作	子興畫
浪速粹光女芬輪	二	馬琴作	重政畫
買飴紙鳶野弄話	二	同上	同上
今古萬作豐年話	一	和樽作	
足手書草紙畫賦	三	同上	重政畫
教訓跡之祭盧單	三	馬琴作	同上
雲飛脚二代羽衣	三	東紫作	同上
武田勝賴一代記	三	石上作	自畫
下界嚏鼻落天狗	三	鶴聲作	春朗畫
敵討初嵐桐一葉	三	一九作	自畫
後篇『敵討操草菊之籬』も本年出板せり。			
敵討操草菊之籬	三	一九作	榮水畫
前編『敵討初嵐桐一葉』も本年の出板なり。			
父讐宇津宮物語	三	傀儡子作	豐國畫
後編『五段淨瑠理酒肆』も本年出板せり。			
曲亭一風京傳張	三	馬琴作	重政畫
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す但二葉落丁なり。			
兒童文殊稚教訓	三	可候作	北齋畫

毎葉柱には「眞平御免」とあり。

落噺三番叟福種蒔　二　一九作　自　畫
家内安全山神御祭禮　二　同　上　同　上
厄神西海原　二　笑丸作　同　上
色揚鼠嫁入　二　一九作　長喜畫
源平武者揃　重政畫
櫻川話帳綴　二　慈悲成作　豐國畫
競腰業平形　三　同　上　同　上
繪本報讐錄　三　玉亭子作　同　上
昔話枯木華　二
伊呂波短歌　二　一九作　自　畫
金寶身體直　二　同　上　同　上
春霞男達引　三　同　上　同　上
福徳三年酒　二　同　上　同　上
敵討蚤取眼　三　馬琴作　重政畫
敵討梅之接　三　楚滿人作　豐廣畫

一書に春亭畫とあり。

質流思外幸　三　一九作　自　畫

此書文化五年に『質流人行末』と改題再板せり。

敵討巖流島　三　一九作　自　畫

後篇『敵討後日話』も本年出板せり。

敵討後日話　二　一九作　自　畫

前編『敵討巖流島』も當年出板なり。
文化十一年前後編とも月麿畫に改め再板せり。

坂東七英士　三　一九作　春亭畫

後編『人武忠義功』も本年出板せり。

人武忠義功　二　一九作

一書に一九自畫作とあり。
前編『坂東七英士』も本年出板なり。

化物忠臣藏　三　見越入道作

十返舍一九校とあり。

人心兩面摺　三　一九作　豐國畫

一書に一九自畫作とあり。
此後編『裏面心抜路次』は享和三年出板せり。

享和二壬戌年

作者

式亭三馬　二十八歲
山東京傳　四十二歲

樹下石上
曲亭馬琴　三十六歳
內田新好
樂亭馬笑
市場通笑　六十四歳
南仙笑楚滿人　五十四歳
十返舍一九　三十九歳
櫻川慈悲成　三十六歳
魁蕾子　三十六歳（卽曲亭馬琴）
白銀臺一九　內田新好の別號なり。
松亭竹馬
椒芽田樂　神谷氏名は剛甫尾張名古屋の人醫を業とす、曲亭馬琴門人なり。
曼亭鬼武　前野氏名は曼七一書に曼助とす、初小笠原侯の家臣なりしが後仕を辭して浪人となれり、始飯田町に住し飯顆山人と號せり、後淺草千光院地内に移居す、谷文晁の門に入り繪畫を學び、著作は山東京傳に就て作習し、曼亭鬼武を以て作名とし、文化二年號を感和亭に改む、寶曆十辰年を以て生る本年四十三歳なり。

花道　馬鹿山人と號す。

畫工

長喜
子興　長喜の改名なり。
春喬　勝川春亭の門人ならむ歟。
勝川春亭　三十三歳
歌川豐國　三十四歳
歌川豐廣　三十九歳
北尾重政　六十四歳
式亭三馬　二十八歳三馬の小傳は寛政六年作者の部に記せり。
十返舍一九　三十九歳
喜多川歌麿　五十歳
喜多川菊麿　小川氏通稱六三郎、馬喰町に住し後小傳馬町脇新道に移る、喜多川歌麿の門に入り菊麿と曰ひしが、大原市女と改め次で月麿と改む、晩年筆を畫道に絶ち觀雪と號すと云ふ。

板元

鶴屋喜右衞門
和泉屋市兵衞

榎本屋吉兵衛
村田次郎兵衛
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
西村屋與八
西宮新六

雜　記

阪東簑助生る。
五代目瀨川菊之丞（多門路考）生る。
夏山東京傳手鑑を發し、自書讃千幅を限り、爾後筆を絕ち、且つ手署實印なき者は盡く贋物なる旨を弘告す。
十返舍一九の『膝栗毛』初編出づ。

○

八百屋於七の小唄流行す。

書　目

薩摩源五兵衛笹野三五兵衛増補五大力　三　竹馬作　長喜畵
文化元年『新曲五人切』と改題再板せし歟。
自先達御吹聽綿温石奇效報條　三　三馬作　豐廣畵
又燒直鉢冠姫稗史億說年代記　三　同　上　自　畵

藍雪曰、此書は天明三年板岸田杜芳作の『草双紙年代記』に則りしもの、記事に多少の誤謬あるも黃表紙の變遷を知るに便あり上作たるを失はず。
彼は時花曲是は奉納額封鎖心鑰匙　三　三馬作　豐國畵
一書に豐廣畵とあり。
市川團藏的中狂言早業七人前　三　京傳作　重政畵
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
金銀米錢多羅福長壽傳　三　石上作　豐國畵
筆𣉻作稿植著種蒔三世相　三　馬琴作　重政畵
御利生御利益告子之艷男　三　楚滿人作　豐國畵
急度心鐵鎖祝明花春爲化　三　新好作　歌麿畵
衣食住三箇國世帶評判記　三　馬琴作　豐國畵
明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。
春　通氣智之錢光記　三　京傳作　豐國畵
夏　呑込多靈寶緣記　三　同　上　同　上
秋　賢愚湊錢湯新話　三　同　上　同　上
冬　枯樹花大悲利益　三　同　上　同　上
藍雪曰、右四部を四季に準らへ同時に出板せり、尤此書に二種あり、一は上紙摺にて厚表紙を附して合卷となし、他の一種は並摺なるが黃表紙の表

に本年の干支に因み兒狗を薄墨摺とせしなり、一說に此冊子を合卷物の權輿なりといへど、嚆矢とは言難かるべし、然れど厚表紙を一部毎に附せしと黄表紙に繪摸樣を摺込みしとは、確に新機軸の意匠を出だせしことを認めらるゝなり、此書の好評を得たる所以も之に由るならむ。

挑燈庫闇夜七扮　三　田樂作　重政畫

旅恥辱書捨一通　二　一九作　自畫

一粒撰曉之種本　三　慈悲成作　豐廣畫

艶道無茶盛當話　二　楚滿人作　豐國畫

六冊懸德用草紙　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

本書は一紙を上下二段に別ち別個の作を記述せるに因り、六冊懸の外題を据えたるなり。

一九畫作圖七縞　三　一九作　自畫

一名を「夏衿男達縞」と曰へり。

後編「夏木立戀縞」亦本年出板なり。

御誂染長壽小紋　三　京傳作　歌麿畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

野夫鶯兒歌曲訛　三　馬琴作　子興畫

一書に重政畫とあり。

初老了簡年代記　三　馬琴作　重政畫

一書に長喜畫とあり。

金龜山寶案内子　三　石上作　豐國畫

一書に春喬畫とあり。

養得茄名鳥圖會　三　馬琴作　重政畫

此書の表紙亦狗兒を薄墨摺に出したり。

太平記忠臣講釋　三　魁雷子作　豐國畫

後篇「太平記後座之卷」同時出板せり。

太平記後座之卷　三　魁雷子作　豐國畫

前編「太平記忠臣講釋」も同時出板せり。

武茶盡混雜講釋　三　馬笑作　春喬畫

式亭三馬校閲並に同人の序文あり。

滑稽異漿寐醐種　三　鬼武作　菊麿畫

一書に一九畫とあり。

賣切申候切落話　三　馬琴作　重政畫

五大力三書訓讀　三　同　上　同　上

蔵書曰、一書に右二部を別に掲出せるも『六冊懸德用草紙』は此二書を合刻せし物なれば、別個に出板せられし物に非ず。

食類合戰和睦香之物　三　通笑作　重政畫
播州赤穗車川話種本　三　一九作　自　畫
虛宮太郎武者修行話　三　楚滿人作　豐廣畫
後編『舍弟之讐討』も本年の出板なり。
虛空太郎舍弟之讐討　三　楚滿人作　豐廣畫
前編『武者修行話』も亦本年出板なり。
豔次郎二代目通人寐言　二　一九作　菊麿畫
的中地本問屋　三　同　上　自　畫
增益山莊太輔　三　同　上
後編『昔話由良湊』も本年出板せり。
敵討松寄木　三　楚滿人作　豐廣畫
畵本歷世傑　馬琴作
武家物奇談　花道作　豐國畫
聞風耳學問　三　一九作　歌麿畫
屈伸一九著　三　同　上　自　畫
美男狸金箔　三　同　上　同　上
嗚呼愚鋪話　三　同　上
讐討夜居鷹　三　同　上　菊麿畫
敵討時雨友　三　楚滿人作　豐廣畫
金降豐年貢　三　一九作　子興畫

新板麿功記　可候作
七福今年噺　二　慈悲成作　豐廣畫
忠臣陶物藏　三　一九作　自　畫
玄德武勇傳　三　同　上　同　上
夏衿男達縞　三　同　上　同　上
一名を『一九畫作圖七縞』と曰ふ。
後編『夏木立戀鞆』亦本年の出板なり。
夏木立戀鞆　二　一九作　自　畫
前編『夏衿男達縞』も本年の出板なり。
昔話由良湊　二　一九作
前編『增益山莊太輔』も本年出板なり。
御覽親孝經　三　三馬作　豐國畫
本書は寬政九年板『唐本寐言』の外題替再板なり。
鐵草筆一本　五　馬琴作　春亭畫
一書に馬琴作としあれど果して馬琴に此作あるや否や疑はし。

○

文軒翁云、京傳作『錢光記』より『大悲利益』まで四部を四季と名附て出板す、尤始め上紙摺三冊を合卷にして、表紙も上の黄表紙に犬を墨摺にしたり、

是れ合卷の權輿とも謂ふべき歟。鶴屋の本此時より外題を横に長き形とす、年々同じ。楚滿人敵討大に行はれ「虚空太郎」「田形三郎」など六冊續にて出る、此以前敵討六冊物は皆實錄なり、作り物語の六冊は楚滿人を初めとす。

享和三癸亥年

作者

時太郎可候　四十四歳
十返舍一九　四十歳
櫻川慈悲成　三十七歳
南仙笑楚滿人　五十五歳
樹下石上
山東京傳　四十三歳
曲亭馬琴　三十七歳
福亭三笑
曼亭鬼武　四十四歳
竹塚東子
德永素秋
百亭貫斗
楓亭猶錦
萩原萩聲　號を萩庵といふ。
恒醉夫　畫工北尾重政の假號なり、紅翠齋の同音に因みて名けしものなるべし。
盧呂利
馬光仙
夢中庵作三
薄川八重成　柳橋に居住せる歟。
窮山甲
榮邑堂邑二
榮女　十返舍一九門人なり。
三光　再板物なれば假設人物なるべし。

畫工

長喜
舟調
榮水　一樂亭と號す
勝川春亭　三十四歳
勝川春英　三十六歳
歌川豐國　三十五歳

歌川豐廣　四十歳
葛飾北齋　四十四歳
北尾重政　六十五歳
時太郎可候　四十四歳、即ち北齋なり。
十返舍一九　四十歳
喜多川菊麿
喜多川秀麿　喜多川歌麿門人なり。

板元

西宮新六
西村屋與八
岩戸屋源八
蔦屋重三郎
榎本屋吉兵衛
和泉屋市兵衛
村田次郎兵衛
鶴屋喜右衛門
山口屋忠右衛門

雜記

本年より黄表紙中の佳作三四部を選みて半紙に摺り無地の厚表紙を附し袋入となし京阪地方へ賣出す之を上紙摺と稱す、定價一部壹匁より壹匁五分。
京傳菓子舗を淺草並木に開く尋で閉店す。

○

春二月より翌年に亘り淺草太郎稲荷參詣群集す。
六月朔日より淺草傳法院に於て信州善光寺阿彌陀如來開帳す。

書目

塵香記出來 三五十五張　胸中算用嘘店卸　三　可候作　自畫
千町田萬町田　福來雀金出來秋　三　石上作　豐廣畫
人間一代　悟道迷所獨案內　三　京傳作　重政畫
人相手紋　裡家算見通座敷　三　同上　同上
兩面摺後編　裏面心拔路次　三　一九作　自畫
前編『人心兩面摺』は享和元年出板なり。
忠臣藏後日　天哉義心平生　三　恒醉夫作　重政畫
本書は安永七年清經自畫作『忠臣四十七文字』の改作再板なり。
兩面出世姿鏡前編　恩愛猿仇討　三　虚呂利作　豐國畫
後編『娘敵討睦友綱』亦本年出板せり。
出世姿鏡後編　娘敵討睦友綱　二　虚呂利作　可候畫
前編『恩愛猿仇討』も本年の出板なり。

一書に樹下石上作歌川豐廣畫とあり、又後篇は文化元年の出板ならむ歟。

信濃賓客淺草主人侯待開帳話　三　馬琴作　重政畫
美濃近江盛衰榮枯果報寢物語　三　三笑作　豐廣畫
花洛之水浪速風雷腑沸西遊話　三　馬琴作　秀麿畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

兄弟善惡仇討備前德利　二　馬光仙作　舟調畫
八百屋お七加羅操狂言　三　邑二作　長喜畫
弓引方矢口渡大中黑本種　三　盧呂利作　同上
撰太〻後日話初寶兒嶋臺　二　一九作　重政畫
大道具幕なし怪物寶初夢　三　同上
鎌倉街道女敵討　三　石上作　豐廣畫
敵討攝州風屋敷　三　素秋作　同上
敵討攝州合邦辻　五　一九作　豐國畫
深山草化物言話　二　夢中庵作　春英畫
五人揃目出度娘　三　楚滿人作　豐廣畫
善惡角力勝負附　三　一九作　豐國畫
一陽來福鼠嫁入　二　同上　長喜畫
本國杜野狐復讐　三　同上　豐國畫
文宣先生珍學文　三　慈悲成作　同上

職流義仕上押繪　三　八重成作　長喜畫
敵討巖間鳳尾艸　五　楚滿人作　同上
分解道胸中双六　三　京傳作　重政畫
不厨庖卽席料理　三　可候作　自畫
阴鎰阴珍紋圖彙　三　馬琴作　重政畫
人間萬事吹矢的　三　京傳作　同上
色外題空黃表紙　三　榮女作
貧富一代之早替　二　貫斗作　菊麿畫

邑二校とあり。

舊土產吾妻錦繪　三　猗錦作　豐廣畫

前編『報讐四萬物語』も本年出板なり。

怪談摸摸夢字彙　三　京傳作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

三國昔話和漢蘭雜話　三　鬼武作　可候畫
苦貝十念鳴呼辛氣樓　三　同上　北齋畫
伊呂見草浮世之頭木　二　三光作

本書は寬政四年板『名木二代鑑』の外題替再板なり

田形前編讐討櫛葉山　三　楚滿人作　豐廣畫

後編『巖窟出世談』本年出板せり。

田形後篇巖窟出世談　三　楚滿人作　豐廣畫

前編『讐討櫟葉山』も本年出板なり。

開帳地口提灯　三　馬琴作　重政畫
書解平家物語　二
はしか草双紙　　東子作
報讐四萬物語　三　猶錦作　豐廣畫
　後篇『舊土産吾妻錦繪』も同時出板せり。
浮氣の鹿馬燒　三　榮女作
　十返舍一九校とあり。
　本書は今年出板の『色外題空黄表紙』と同書なるべし。
愼道迷盡誌　三　鬼武作　春亭畫
安部川敵討　五　一九作　榮水畫
通俗三呑志　三　荻聲作　長喜畫
敵討安積車　三　楚滿人作　豐廣畫
敵討裏襯錦　三　同上　同上
はしか落話　　穿山甲作
仇敵礫打手　三　楚滿人作　豐國畫
　一書に豐廣畫とあり。
鼠嫁入　二　石上作
　内新好の序文あり。

○

文軒翁云、此頃袋入の上本出る、是までの袋入は半紙に摺りたる本なり、此上本は糊入に摺りて、紙形も殊に大にして、表紙も厚し、製本異にして王侯に呈すべし、兒童の翫弄すべき物にあらず、此上本は並の袋にせずして、直に青本に直して出せり、後年合卷の出來たる後は、最初に上本、夫より合卷、夫より青本と三度に直して出せり。

蓜亭曰、敵討の作漸やく多く、本年出板數の約三分一を占むるの勢となれり、十年以前頃と比較すれば、其變遷の烈しきに驚くの外はあらず。

文化元甲子年（享和四年改元）

作者
山東京傳　四十四歳
曲亭馬琴　三十八歳
竹塚東子
樹下石上
曼亭鬼武　四十五歳

松亭竹馬
南仙笑楚滿人　五十六歲
十返舍一九　四十一歲
面徳齋夫成　南仙笑楚滿人の門人なり。
一說に楚滿人の匿名なりといへり。
待名齋今也　南仙笑楚滿人の門人なり。
是も亦楚滿人の匿名なりといふ。
春水亭元好
赤城山家女　通稱本屋忠五郎守信亭と號す、別號赤城山人小日向水道橋邊に住居す。
紀尾佐丸　諫皷堂と號し狂歌師なり。
三笑亭可樂　落語家なり馬喰町に住し金鶴樓主人と號せり。

畫工

長喜
勝川春亭　三十五歲
歌川豐國　三十六歲
歌川豐廣　四十一歲
葛飾北齋　四十五歲
北尾重政　六十六歲
葛飾北岱　盈齋と號し葛飾北齋門人なり淺草に住す
十返舍一九　四十一歲

板元

鶴屋喜右衞門
和泉屋市兵衞
榎本屋吉兵衞
村田次郎兵衞
蔦屋重三郎
岩戸屋源八
西村屋與八
山口屋忠介　馬喰町に住す。
西宮新六

雜記

岩井紫若生る。
二月十九日芝甘交歿す、法號對雲了喜樂仙信士。
五月幕府法令を發し、繪本草紙等は墨摺の外彩色を加ふるを禁じ、且つ天正以來の武者繪に名前紋所合印等を記すべからざる旨を嚴命す。
十返舍一九「化物繪本太平記」を著し手鎖五十日の刑に處せらる。

畫工喜多川歌麿亦秀吉清正等の錦繪を出だし爲めに三日入牢の上手鎖の刑に遭ふ其他の畫工春英、春亭、月麿及び豐國等も亦手鎖五十日の刑に處せらる。

曲亭馬琴其著『敵討二人長兵衞』の卷末に於て左の數語を特筆せり。

作者曰、喜三二が金々先生榮花夢より草雙紙に滑稽を盡したると、二十餘年中頃一變して不洒落となり、今又一變してまじめとなる黑繻子の帶がすたると思へば又流行り、長羽織が流行と思へば又すたる、草雙紙の流行も又其如し、是から後は大昔の金時化物にならふも知れぬ、御油斷なさるな。

○

叶福助を尊ぶこと流行す。

書目

薩摩下芋兵衞 砂糖團子兵衞 五人切西瓜斬賣　三　京傳作　長喜畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す

黃金長者 白銀長者 江戸砂子娘敵討　三　京傳作　重政畫

干支甲子 利生大黑 報親讎小槌本望　三　山家女作　北齋畫

はかた小女郎 戀仇討狐助太刀　三　一九作　豐國畫

熊坂傳記 東海道松白浪　十　元好作　同上

白石噺 色潤 風薰婦仇討　二　一九作　自畫

一書に永艃畫とあり。

榮花男二代目 七色合點豆　三　京傳作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

此書は寬政四年板『唯心鬼打豆』の畫風を變じ外題替にて再板せしなり。

小夜中山宵啼碑　三　馬琴作　豐廣畫

新研十六武藏坊　三　同上　重政畫

敵討猿番場柏餅　五　一九作　長喜畫

敵討名畢一文字　三　東子作　豐廣畫

妻之復仇千疋牛　三　楚滿人作　同上

敵討水潛蜀紅錦　三　同上　同上

親子塚冬雪物語　六　同上　同上

萬福長者寶藏開　三　石上作　同上

信夫摺錦伊達染　三　鬼武作　豐國畫

後篇『陸奧瞽女仇討』亦本年出板せり

作者胎內十月圖　三　京傳作　重政畫

此書佳作なり書中に「己も今年で卅七年戲作をす

る」と書入れに見えたり。

松株木三階奇談　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

敵討二人長兵衛　三　馬琴作　重政畫

明治三十七年大坂鹿田靜七之を再板す。

御伽怪談五人拍鄙言　三　馬琴作　重政畫

太郎稲荷婚禮　二　一九作

人慾看通卜筮　三　同　上　自　畫

敵討磐手躑躅　三　鬼武作　長喜畫

一書に豐國畫とあり。

後編「金澤彌三郎廻國奇談」は文化二年出板せり。

陸奥瞽女仇討　二　鬼武作　豐國畫

前編「夫信摺錦伊達染」は本年の出板なり。

化物繪本太閤記　三　一九作　自　畫

一名を「化物太平記」と呼びし歟。

此作に就て私見あり「化物太平記」の條下に記しあれば參照せらるべし。

敵討思亂菊　五　夫成作　豐廣畫

敵討桔梗原　五　一九作　同　上

仇報孝行車　五　楚滿人作　豐國畫

仇撃錦誰袖　三　石上作　豐廣畫

仇敵意寫繪　三　楚滿人作　同　上

叶屋福助話　二　同　上　長喜畫

地神五代卷　五　一九作　春亭畫

敵討蓮若葉　三　同　上　豐廣畫

後編「犀鯉緣之林」も同時出板せり。

犀鯉緣之林　二　一九作　豐廣畫

前編「敵討蓮若葉」も本年出板なり。

敵討春手枕　三　今也作　豐國畫

一書に待名齋今也の自畫作とあり。

新曲五人切　竹馬作　長喜畫

享和二年板「增補五大力」の改題再板歟。

化物太平記　三　一九作　自　畫

一名を「化物繪本太閤記」と曰ふ歟。

天保四年「化皮太鼓傳」と改題更に出板せり。

此書禁諱に觸れ絶板せられ作者一九は手鎖五十日の刑に處せられたり。

鮑雪曰、原板「太平記」の序文に據れば「繪本太平記と題號し」とあれど「太閤記」の爲めに處罰せられしは疑ひなきことにて當時の禁例に背けばなり、又

『化皮太皷傳』と改稱し天保四年出板せしに就ても化の皮と冠せ、太閤と太皷との音を借りて傳ときかせしやう想像せらる、然れば此作は一書兩名と謂つべきもの歟。

落噺年男笑種　尾佐丸作　北齋畫
敵討長太郎柳　三　楚満人作　豐廣畫
東都眞衞　可樂作
化物敵討　二　一九作　自畫
和藤内　同上

文桓翁云、敵討の本いよ／＼行はれ、京傳馬琴此年より始て敵討の作あり、今年の新刻敵討三分の二にして、其餘僅に戲作あり。

文化二乙丑年

作者

南仙笑楚満人　五十七歳
十返舎一九　四十二歳
面徳齋夫成
感和亭鬼武　四十六歳（即曼亭なり）
山東京傳　四十五歳
曲亭馬琴　三十九歳
式亭三馬　三十一歳
萩原荻聲
内田新好
竹塚東子
樹下石上　再板物
守信亭　即赤城山家女の別號なり。
傀儡子　三十九歳（即曲亭馬琴）
市場通笑　再板物
素速齋東紫　竹塚東子と同人なり。
内田新江　即ち新好なり

畫工

長喜
勝川春英　三十八歳
勝川春亭　三十六歳
歌川豐國　三十七歳
歌川豐廣　四十二歳
北尾重政　六十七歳

葛飾北周　葛飾北斎門人なり。
百齋貫斗　畫名久信葛飾北斎門人なり。
十返舎一九　四十二歳
喜多川月麿　即ち菊麿の改名せしなり。

板元

西宮新六
西村屋與八
蔦屋重三郎
岩戸屋源八
山口屋忠介
和泉屋市兵衛
榎本屋吉兵衛
村田次郎兵衛
鶴屋喜右衛門

雜記

五月三日喜多川歌麿歿す享年五十三淺草山谷某寺院に葬る。
曼亭鬼武號を感和亭と改む。
市川男寅二世市川門之助を襲名す。
此頃戯作者と浮世書師との見立番附を出す者あり所載の戯作者四十名畫工四十五名。

○

此頃煎茶の會流行す京傳の作「敵討煎茶の濫觴」の外題も是に因みしなるべし。

書目

御子さま方の御好にまかせ昔語桃太郎傳　三　楚満人作　百齋畫
金澤彌二郎廻國奇談　三　鬼武作　北周畫
前編「敵討盤手躑躅」は文化元年出板なり。
防州氷上妙見宮利益助劍　三　一九作　豐國畫
後編「星宮大内鏡」も本年出板せり。
防州氷上後編星宮大内鑑　二　一九作　豐國畫
前編「妙見宮利益助劍」も本年の出板なり。
寶茶翁祇園梶復讐煎茶濫觴　三　京傳作　重政畫
天保九年板丹頂庵鶴丸作の「假名茶話文庫」は本書の改作なりと云ふ。
二代顯禮兩度仇討奉打札所誓　三　馬琴作　月麿畫
老實製法滑稽妙劑親讎勝膏藥　三　三馬作　豐廣畫
渡邊綱一代武傳記　五　楚満人作　豐國畫
後年春亭畫にて改題出板す。
妙黄名粉穀道明寺　三　馬琴作　長喜畫

一人娘二人婿嫐訓歌字盡　三　三馬作　豐廣畫
御誂向叶福助金生木息子　三　一九作　自　畫
曼亭鬼武の序文あり。
在士自慢名產杖　三　京傳作　豐國畫
茶漬原御膳合戰　三　荻聲作　同　上
花紅葉二人鮟鱇　三　新好作　月麿畫
早替平氣之景淸　三　同　上　豐廣畫
返咲八重之仇討　三　鬼武作　北周畫
敵討岩手之梅香　五　東子作　同　上
悟迷惑心之鬼武　二　鬼武作　豐廣畫
金剛力士武道礎　五　守信亭作　月麿畫
復讐阿姑射之松　五　傀儡子作　豐廣畫
猫奴牧忠義合奏　三　馬琴作　豐國畫
敵討金絲之結縫　六　夫成作　豐廣畫
富士日記曾我社　二　同　上　春亭畫
武者修行木斎傳　六　馬琴作　豐廣畫
五風十雨狐嫁入　二　通笑作　同　上
安永八年板『日照雨狐之嫁入』の畫樣を改め外題替再板せしなり。
金生樹榮花鉢植　三　石上作　豐國畫
寬政十年作の再板なり。
殘燈奇譚案机塵　三　京傳作　重政畫
天明八年板『復讐後祭禮』の畫風と外題を改め再板せしなり。
滑稽しつこなし　三　一九作　月麿畫
後編は文化三年出板せり。
天怪報仇夜半嵐　三　鬼武作　北周畫
書中には『復讐化物世界夜半嵐』とあり。
父母怨敵現腹鼓　五　東子作　重政畫
一名を『敵討若松嘶』と曰へり。
安永六年板名作二十三種の一なる『親敵打腹鼓』に似寄し外題なり。
復讐阿部之花街　二　一九作　月麿畫
同後編戀仇被形容　二　同　上　同　上
同三編朧月安西堤　二　同　上　同　上
敵討怪談鬼武作物語　五　鬼武作　北周畫
敵討龍田山女白浪　五　楚滿人作
敵討丹州手々打栗　五　一九作　自　畫
淸談爰有身成金言　三　馬琴作　重政畫
寬政七年板『在爾爰身成金言』の再板なり。

景清漂泊日記　三　新江作
敵討蟒蛇榎　六　楚滿人作　豐國畫
敵討篠川衛　六　同　上　豐廣畫
仇報都印籠　六　同　上　同　上
怪談四更鐘　東紫作　百齋畫
源家武功記　二　楚滿人作　春英畫
落噺叶福助　一九作
敵討三組盃　九　楚滿人作　豐廣畫
豐岡觀扇亭の序文あり。
敵討物名作の一なり。
敵討若松嚙　五　東子作　重政畫
一名を「父母怨敵現腹鼓」と曰へり。
玉屋の景物　二　京傳作　豐國畫
此作は本町二町目紅問屋玉屋の景物用としての戯著なり。
仇討梅と櫻　三　楚滿人作　豐國畫
天明二年板豐里舟に之と同名の作あり。

○

文軒翁云、今年新梓彌敵討多し、戯作の本は纔に十餘部に過ぎず、翌年よりは殘らず敵討となりたり。

艶一目、敵討の流行に就ては、本年出板せし式亭三馬の「親讐胯膏藥」に於て、作者三馬は、憤慨の辭を掲げて同書の序文とせり、之を摘載すれば、

「大道廢れて仁義あり、大通廢つて野暮發る、頃日報讐の青本行はる……噫御江戸の名物たる戯作の道も、既に澆季に及んだり、衆人皆敵討の糟粕に醉へり、吾獨醒たりと、滄浪の水雜炊をすゝつて、三年毫を採らずといへども、屈原が聲色更に切落へおちず、……戯作者などには屁も放りかけず……ハッア時なる哉〱と、獨歎息し……久し振にて筆は採れども、老實ばかりの趣向では、戯作者の虚の字へ對して面目なしと、我意を立ぬく戯作の復讐……

又その本文中に、

「前の世で借りたを濟すか此世で貸すか、是非一度は報ふ、ナニ因縁因果は廻る車の如く、親を討たれ子を失ひ、讐を報ふと雖も、亦た後の世に生れ來て、討ては報ひ討たれては報ふ、さるが故に毎年毎歳草雙紙の趣向に、敵討の種つきると云ふ事なし、此敵討罪の滅ぶる迄は、生れ替

り〳〵て主となり家來となり、親子となり夫婦となりて苦しむ、又敵討の雙紙も、種の盡きる迄は、新板となり古板となり、燒直しとなりおツかぶせとなりて案じに苦しむは、是も作者と生れたる因果なるべし。

嘲罵好の三馬なれば、此位のことは當然ながら、更に板元の口を借りて

「高が草雙紙の作者だから腹は知れて居やす、あんまり白痴おどしに、ちんぷんかんはやめなせヱ、夫れだから敵討に世を奪はれた、喜三二、春町、全交、月池、三和と此五大家を調合して書いて居れば間違なしサ、大きに御世話だといふだらう……

例の如く其筆鋒を馬琴に振向けしは、餘りに酷なれど、此語こそ三馬の性格を代表せしものと謂つべし、自他の樂屋落を素破抜きて平氣なるは、京傳、馬琴、三馬ともに其短所たるを免かれず、殊に猜忌の念に富みしとは三作家ともに甲乙なく、度量の狹隘なりし事は蔽はれ難き短所なるべし。

兎に角三馬の此戯作は、抱負自信の大なると共に非常の佳作にして、蓋し三馬の傑作なるべし。

文化三丙寅年

作者

式亭三馬　三十二歳
山東京傳　四十六歳
曲亭馬琴　四十歳
竹塚東子
樹下石上
十返舍一九　四十三歳
面德齋夫成
南仙笑楚滿人　五十八歳
感和亭鬼武　四十七歳
眉壽亭
櫻鯛助
蘭衣
百齋貫斗　名は久信畫工北齋門人なり。
山旭亭間葉行

畫工

勝川春亭　三十七歳

歌川豐國　三十八歳

歌川豐廣　四十三歳

歌川國長　通稱梅干之助一雲齋と號す歌川豐國門人なり芝口三町目に住し後新橋金六町に轉居せり。

歌川國直　通稱鯛藏一煙齋また獨醉舍及び柳煙樓とも號し歌川豐國の門人にして麹町に住せり、後田所町に移りしが天保年間に氏名を吉川四郎兵衛と改め寫樂齋國直と稱し兩國米澤町に住居せり、寛政七卯年を以て生れ本年僅に十二歳なり、但し本年は再板物のみ。

北尾重政　六十八歳

百齋久信　また貫斗と號す。

葛飾北周

蹄齋北馬　通稱有阪五郎八もと星野氏なり、幕府御家人の隱居にして神田に住し、葛飾北齋の門に入り駿々亭と號し、左筆の曲畫を能くせり後ち淺草三筋町に住せり、其出生明和八卯年にして本年三十六歳なり。

十返舍一九　四十三歳

喜多川菊麿

喜多川秀麿

板元

西宮新六

山口屋忠介

蔦屋重三郎

伊勢屋藤六

岩戸屋源八

西村屋與八

榎本屋吉兵衛

和泉屋市兵衛

村田次郎兵衛

鶴屋喜右衛門

雜記

笠亭仙果生る。

草双紙の合卷物初て出で青本の體裁是よりまた一變す。

書目

紙衣助六 櫛卷總角 紫服紗茶人形氣　六　京傳作　豐國畫

淺草觀音利生仇討雷太郎强惡物語　十　三馬作　豐國畫
後再板し『雷太郎姦雄物語』又は『雷太郎姦惡物語』など曰へり。
葩雪曰、此書前後十卌物を合卷とせしかば當時非常の好評を博し斯界を驚動せしめたる由にて、三馬自身も終生自負せりと云へり、實に合卷物の嚆矢として斯道に忘るべからざるものなり。

串戲しつこなし後編　三　一九作　自畫
前編は文化二年出板せり。

河内老嫗火近江手孕村敵討兩輪車　六　京傳作　重政畫

報仇奇說響數千里虎尾峠　六　鬼武作　春亭畫

敵討安達太郎山　五　三馬作　豐廣畫

敵討柳四郎兵衛　六　楚滿人作　豐國畫

敵討日本一濤勢　袋入七丁　櫻鯛助作　國長畫

敵討粟田口由來　五　一九作　秀麿畫

敵討雛居寐物語　六　馬琴作　重政畫

敵討此方之世界　二　一九作　自畫

敵討奥州猿河原　六　京傳作　豐國畫

昔語姑獲鳥仇討　三　楚滿人作　豐廣畫

法誓輪廻之仇討　三　一九作　同上

銘者正宗刀珍說　六　楚滿人作　豐國畫
一書に一九作とあり。

片身打他力燒繼　六　東子作　北周畫
又『體敵他力之燒繼』と書せり。

甘趣向棚牡丹餅　三　石上作
寬政六年作の再板なり。

大師河原撫子話　六　馬琴作　重政畫
天保十二年之を再板せり。

鳳凰染五山桐山　五　山旭亭作　菊麿畫
一書に文化元年出板とせり。

五山桐山後篇跡着衣裳　五　一九作　菊麿畫

同三編操染心雛形　一　同上　同上

再板增補敵討姥捨山　六　楚滿人作　豐廣畫
寬政九年板の增補再板なり。

巨櫛筒二人奴　三　一九作　國長畫

朧月笑顔短歌　袋入七丁　櫻鯛助作　同上

敵討袴勝負革　三　石上作　同上

敵討孫太郎蟲　六　京傳作　重政畫
一書に豐廣畫とあり。

春告鳥後篇二葉松　二　眉壽亭作　重政畫

前編『敵討春告鳥』も本年出板なり。

怪談怖史記	三	百齋作	自畫
青嵐柳下蔭	五	一九作	同上
花聟大安賣	二	同上	
恰悧怪異話	三	同上	
復讐鴫立澤	二	鬼武作	北馬畫
復讐岐枝川	六	楚満人作	豊廣畫
仇報妹脊扇	五	同上	同上
親敵撃山魅	五	同上	同上
敵討三人姥	五	同上	同上
敵討旭霜解	六	夫成作	國長畫
敵討鼎壯夫	五	馬琴作	重政畫
敵討鶯酒屋	六	楚満人作	豊廣畫
敵討讀誠嚢	六	同上	同上
嵐山花仇討	六	一九作	同上
復讐箭指浦	六	同上	豊國畫

此後編文化四年に出板せり。

敵討春告鳥	三	眉壽亭作	重政畫

後編『二葉松』亦本年出板せり。

七福神屑籠	二	一九作	國直畫

寛政九年板『千早振神屑籠』の外題と書を改め再板せしなるべし。

文政元年之を再板せり。

虚氣の早替	三	蘭長作	北馬畫

十返舍一九校とあり。

又一書に北齋の畫とあり

虎屋の景物	七丁	京傳作	豊廣畫
猫の嫁入		楚満人作	同上

此書は通四町目虎屋宗三郎の景物用として作りし物なり。

○

文軒翁云、今年の開板する所、總て敵討となりたり、作者の名を記すに、戲作の戲の字を省きて、唯作とのみ書す、抑此戲作の戲の字は、寶暦の丈阿に始まり、安永の春町喜三二に傳はり、四十年用ゐ來りし戲の字、此時に至りて絶えたり、是も時運と謂ふべき歟、

此年三馬作『雷太郎』合卷の初めといふべし、此本出てより世上の稗史すべて合卷となれり、今玆に載する所は、今年合卷出できる前に發行せる本を

載せたり、合巻出てより後は、悉く次の合巻三部に出せり。

活東子曰、昔は青本と呼びしは藍表紙の事なるべし、宗因が誹諧談林(延寶四年撰)蹴合の句に

青表紙かさなる山を枕ねと　卜尺

一トふしかたる松の夜あらし　在色

按十二段、梵天國、大江山等の淨瑠璃本を其頃青表紙と稱したり、卽ち今の草紙の始まりなり、其後行成表紙となる、又た赤本と替る、黑本あり、寶曆の頃薄萠黃表紙となりたり、明和の頃黃表紙となる、文化年中黑本萠黃あり、赤本もあれど厚表紙にて繪外題を貼る。役者似顏の繪本は寶曆年間既に有り。世にいふ双紙、古代は雙本なり、上古は源氏物語、榮花物語、淸少納言、大鏡、水鏡等をいふ。足利將軍家の頃專ら雙流行せり、今の曾我物語、義經記などは夫れを全部したるものなり、故に實錄にはあらじ。青表紙の事淸輔が袋草子に見えたり、和歌の本をいひたるなり、平家物語も謠曲に作り盲人に與ふ、夫に節を附け謠物とす。享保二三四年の頃、漉返紙に胡粉地の表紙摸樣書にて外題を貼る、赤本の次ぎにや、淨瑠璃の正本なり。

保元物語、盛衰記の類も謠曲本なり、實錄にはあらず。唐土に稗史といふ物、我國にて讀本といふ。

年次不明

書目				
義家勇戰 怱摺九年	五			政美畫
駿河二丁目 金鷄名殘	二	時鳥館作	(寬政頃)	文橋畫
白拍子富民諍皷	二	南子作	(天明頃)	政演畫
敵討淺草利生記	三	玉亭光娥作	(享和頃)	豐國畫
人間境界心善惡	二	京傳作		
阿部睛明一代記	五			
和漢太平之春駒	二			
無茶志房辨慶縞	二			
御用心末廣扇	二	楚滿人作		
朝比奈一代記	五		(天明頃)	蘭德畫
其返報豐年貢	三	萬寶作		

此書改題なし寬政四年に再板せり。

敵討信田物語　二
此書古作の再板なりと云ふ。
敵討兩士孝行　三　一九作
是も外題替の再板物なりと云ふ。
萬たび物語　五　黄山人作　政美畫
牡丹餅七夕　二　光交作　豐國畫
武田三代記　石上作
將門一代記　五
新桂川實錄　五
敵討雪月花　三
曾我物語　五　蘭德畫
攫取話　二　一九作
甚孝記　二　焉馬作
幼曾我　二
匂ひ嚢　二

（一）

萜雪曰、安永四年より文化三年に至る其間實に三十二年、繼續し來りたる青本の體裁は、茲に一變して合卷物となり、亦其内容も全く變化して、戲作は敵討物となれり、奇警の諷刺や輕妙なる秀句は、最早今後に於て再び看ることを得ざるに至れり、架空の作意と寓言の戲作に目を慣されたる讀書界が、實錄體の敵討物を歡迎せしは事實なるも、其原因は又作家の筆が、天明時代に及ばざるが故なるべし、既に寛政中頃よりの戲作を閲るに、滑稽物と銘を打ちつゝ理窟に走り、戲作の名あるも敎訓を旨とせり、斯く勸善懲惡の一局を主義として筆を執るに至つては、大作家ならざる以上は、到底出世間的なる眞の滑稽作を出すこと能はざるべく、寧ろ勸懲主義の敵討物に如かず、楚滿人の着眼蓋し此點にありし歟、克く一般の喝采を博し、戲作壇を一蹴して、再び起たしめざるに至りしは、其着想大に敬服すべき作家ならずや。

要するに、滑稽といひ敵討といふも、素より作の種別に異ならず、内容の奈何を問ふの必要なきも、當時の戲作者にして、敵討物の流行を概歎し、滑稽物の不振なるを以て、罪を世人に稼するは妙といふべく、倘また他日筆を其敵討物に染め、幾十種の作を出だせしは最妙ならずや。されば文界の動靜流行は、作家の筆力に基く歟、將た讀者の眼

識に因るものなる歟、古來よりの變遷に就て、探究するも、亦趣味ある問題なるべし。

增補青本年表終

增補續靑本年表

凡例

一增補續靑本年表の原本は、五車書樓主人の輯錄せし續靑年本年表を以て之に充てたり。

一續靑本年表は寫本を以て世に傳へられ、他に異本あるを見ず、而して輯者五車書樓主人の氏名は、今之を詳にせず。

一原本輯錄する所は、文化四年より文政三年に至るの間なるも、文化十年以降は頗る粗にして、同年より文政三年まで八年間に掲ぐる所の書目は、僅僅三十七種に過ぎず。

一增補續靑本年表は、原本に從ひ文化四年に筆を起すも、終尾は天保十四年を以てせり、其所以は、天保末年に閣老水野越州侯の嚴格なる改革令に由りて、大打擊を與へられたる時期なればなり。

一原本と增補本とに掲ぐる所の書目の數は次の如し

續靑本年表	（自文化四年至文政三年）	三百九十四種
增補續靑本年表	（自文化四年至文政三年）	八百九十五種
	（自文政四年至天保十四年）	八百八十五種
	計	一千七百八十種

一作者竝畫工の小傳、雜記等の各項は、皆增補せしこと前編の例の如し。

一作者竝畫工にして、同名或は世代ある者、若しくは數號ある者は、錯雜を來さゞるが爲め、時に號を冠し、或は世代を加へ、或は舊名を採る等つとめて簡易を主としたり、例之ば古今亭三鳥と岡三鳥は岡山鳥の號のみを採り、十返舍一九の二世三世に於ける、楚滿人、の二世に於ける、東西庵南北（單に南北と記す）の四世鶴屋南北、五世鶴屋南北に於ける、畫工中北尾重政の初代二代、歌川豐國の三代、勝川春好の二世に於ける等尠からねば、作者竝に畫工等の各項に就き、時に其小傳を知悉するを要すべし。

一七世團十郎の如き、原書に市川三升作と記し、或は團十郎、或は白猿作等の數號を用ゆるも、本書は悉く團十郎の一名のみを採りし等の例他にも多

し、是亦注意あらむことを望む。

一本書中には青本、合卷並に草雙紙を併せ揭ぐるの順序となり、時に異樣の觀あるも、劃然區別を施すに由なき事は、夙に識者の豫知せらるゝ所なるべし。

一弘化以降慶應末年に至る迄の草雙紙書目は未だ稿を脫せざるも、系統を續けしめむが爲めに、附錄として之を卷末に附せり、讀者幸に其杜撰を責むる勿れ。

明治三十九年二月

大久保葩雪識

續青本年表

式亭三馬自筆日記に、文化四年より草双紙不殘合卷となるとあり、されど、青本は文政の中頃に至る迄、毎年合卷にまじりて板行ありしのみならず、草双紙中其新板を青本として發賣し、其後更に合卷に改めしものいと多し、それらの青本を集め、續青本年表と名づく、固より淺學寡聞漏れたるもの、或は誤れるもの多かるべし、識者の高教を仰ぐ、書目の上に朱書せしは編後訂正せし處なり。

五車書樓主人識

増補續青本年表

五車書樓主人輯
大久保[illegible]増補

文化四丁卯年

作者

南仙笑楚満人　五十九歳
十返舎一九　四十四歳
面徳斎夫成
感和亭鬼武　四十八歳
山東京傳　四十七歳
曲亭馬琴　四十一歳
竹塚東子
式亭三馬　三十二歳
解亭眉山　龍川氏號松前晋一號隨風軒又一亭琴馬とも號せり武州八王子に住す。
山東京山　岩瀬氏名は百樹字は鐵梅通稱利一郎鐵筆[illegible]し寛山、涼山、醉々軒、涼仙、蘭山及び方半酒士等皆其別號なり山東京傳の弟にして篆刻を能くせり、明和六丑年に生れ本年三十九歳なり。
東里山人　通稱細川浪次郎別號鼻山人一に九陽亭と號し麻布三軒家に住す、元幕府の與力たりしが後年芝切通に轉住し傳授屋を業とせりと云ふ、山東京傳の門に入り戯作を始む天明五巳年に出生し本年二十三歳なり。
関亭傳笑　関氏通稱平四郎本多侯の家臣にして築地門跡前に住せり、別號幽霊庵一に月池山人と號せり、始市場通笑を師とし後山東京傳の門に入る因て傳笑を作名とせりと云ふ。

畫工

蹄斎北馬　三十七歳
勝川春亭　三十八歳
歌川豊國　三十九歳
勝川春英　四十歳
歌川豊廣　四十四歳
葛飾北斎　四十八歳
北尾重政　六十九歳

歌川國長

歌川國貞　角田氏通稱龜田屋庄五郎、一に庄藏に作る、一雄齋と號すまた五渡亭、香蝶樓、桃樹園、北梅戶、富膽庵、月波樓、富望山人、英一蝶等の別號あり本所五ッ目に住し後龜井戶に移る歌川豐國門人にて後三世豐國を襲げり、また英一珪の門人ともなれり、弘化二年薙髮して肖造と改名せり、天明六年に出生し本年二十二歲なり。

鳥居清峰　通稱庄之助鳥居氏の三世郎ち初代清滿の孫にして鳥居清長の門人なり、新和泉町に住す、後二世清滿を襲ぎ鳥居氏五世となれり、天明七未年を以て出生す當年二十一歲なり。

十返舍一九　四十四歲

喜多川月麿

喜多川美丸　小川氏喜多川歌麿の門人となり美麿といひしが、歌麿歿後北尾政美の門に入り政美に薦められて二世北尾重政を襲名せり、日本橋新乘物町に住す。

板　元

西宮新六

西村屋與八

岩戶屋源八

蔦屋重三郎

山口屋忠介

森屋治兵衛　馬喰町二町目に住し錦森堂と號す、屋標は山形の下に角字の森の字なり通稱森治。

榎本屋吉兵衛

和泉屋市兵衛

村田次郎兵衛

鶴屋喜右衛門

江見屋吉右衛門　通稱江見屋此吉右衛門の考案によりて合卷物の繪表紙は創まれり。

雜　記

三月九日南仙笑楚滿人歿す享年五十九芝西久保心光院に葬る法號只但受樂翁居士。

此頃曲亭馬琴自著讀本の挿畫に就き大に葛飾北齋と紛爭す。

今年馬琴著作の讀本「雲妙間雨夜月」を明治十九年に米國人其本國に於て英譯出板せりと云ふ。

書　目

喧嘩屋五郎兵衛 朝比奈藤兵衛 敵討浪速男　五　一九作　豐國畫
　後編五冊文化五年出板す。
心學讀本 紙子頭巾嘉久助話　一　有軒作　豐廣畫
小はた小平次 安積沼後日仇討　六　京傳作　同　上
三人六部 蘇生嬰兒 敵討鼓瀑布　六　馬琴作　同　上
　一名「鼓瀧幼稚敵討」
夜光珠文 廻向書合 色摺新染形　二　一九作　春亭畫
　下谷上野町呉服店常陸屋の景物用としての作なり
一九新案の中形浴衣地など同店にて販賣する由往
々一九の戯作中に見えたり。
新作口合 はなしうなぎ　二　一九作　春亭畫
　卷尾に春町畫とあり、蓋し淨寫の畫損なるべし。
日高川清姫 道成寺傳奇　六　京傳作　豐國畫
敵討岡崎女郎衆　六　同　上　重政畫
敵討代九郎物語　六　夫戚作
敵討浮木龜ヶ瀨　五　東子作　國長畫
敵討島廻幸助船　六　楚滿人作　豐國畫
敵討三重忠孝貞　九　同　上　豐廣畫
敵討奥州千貫橋　二　同　上　國長畫
箱根靈驗蹇仇討　六　三馬作　豐廣畫

島邑蟹水門仇討　六　馬琴作　豐廣畫
化粧坂閨中仇討　五　鬼武作　北馬畫
清水寺利生仇討　六　眉山作　美丸畫
繪本巴女一代記　五　楚滿人作　豐國畫
遊君操連理餅花　二　馬琴作　北斎畫
不敵討神佛應護　二　鬼武作　春亭畫
仇敵手討新蕎麥　六　楚滿人作　豐廣畫
仁王坂英雄二木　六　鬼武作　同　上
其身益金持親玉　二　一九作　春亭畫
繪本大内家軍談　三　同　上　春英畫
江戸花三升格子　六　三馬作　國貞畫
讐討妹脊山物語　五　京山作　豐國畫
　後編二冊文化九年出板す。
敵討箭指浦後編　六　一九作　豐國畫
　前編六冊文化三年出板せり。
於六櫛木曾仇討　六　京傳作　豐國畫
　此作大當りなり。
諏訪海狐助太刀　三　一九作　春亭畫
　一書に豐廣畫とあり。
後編五冊文化五年出板す。

不老門化粧若水　袋入二　馬琴作　國貞畫
　下谷車坂紅白粉店萬屋四郎兵衞の景物用としての
　戯作なり。
金之蔓掘出分限　三　一九作　春亭畫
　寛政十二年作の再板なり。
於杉於玉二見之仇討　六　京傳作　豐國畫
復讐大全筆の山物語　六　東里作　春英畫
復讐連歌怪談　三　一九作　自畫
敵討髑髏首娘　六　楚滿人作　豐廣畫
敵討吉野龍田　六　同上　同上
欲の皮千枚張　袋入三　一九作　月麿畫
　序文に『面の皮千枚張』とあり。
皷瀧幼稚敵討　六　馬琴作　豐廣畫
　一名『敵討皷瀑布』
忠孝再生記　六　東子作
武德木曾棧　三　一九作　春英畫
化物の娵入　三　同上　同上
怪談梅草紙　三　傳笑作　國長畫
義經勇壯錄　三　一九作　春英畫
復讐嫁嚇谷　六　三馬作　豐國畫

朧月猫娵入　二　楚滿人作　清峰畫
敵討松の榮　六　同上　豐國畫
敵討蘇生娘　六　同上　同上
敵討遠森渡　六　同上　豐廣畫
敵討稚木櫻　五　同上　同上
敵討寐物語　五　傳笑作　國長畫
敵討仲間入　三　一九作　自畫
敵討再生種　六　東子作　春英畫
敵討大悲誓　五　一九作　豐廣畫
　先年出板『敵討兩士孝行』の外題と序文を改め再板
　せしなり。
敵討岬幽窖　六　馬琴作　春亭畫
　一名『賣茶郎談』
敵討衢玉川　六　京傳作　重政畫
　敵討物名作中の一と呼ばる。
菊童子配盃　六　東里作　豐國畫
賣茶郎談　六　馬琴作　春亭畫
　一名『復仇岬の洞』
髑た新形　三　東里作　美丸畫
○

蓮華曰、山東京山此年を以て初作を出だし、爾後引續き安政四年まで約五十年間、其著作を出さゞる年なく、其著二百數十種に上れり、然れども一も滑稽の作なく、敵討と實録體の物のみなるは、全く時の風潮に順ひしが爲めなるべし、作數の割にこれと稱すべき傑作を青本中に見ざれども、能く世に行はれしは、時流を追ひしがためならむも、蓋し筆達者の功ならむ歟。

文化五戊辰年

作者

十返舍一九　四十五歳
感和亭鬼武　四十九歳
素速齋東子
山東京傳　四十八歳
式亭三馬　三十四歳
山東京山　四十歳
曲亭馬琴　四十二歳
唐來三和　六十歳
關亭傳笑
福亭三笑
屏亭眉山
六樹園　五十六歳（即宿屋飯盛なり）
一溪庵
姥尉輔　通稱伊之助幼名源藏又勝次郎と稱す、號は北壽始め高砂町に住せしを以て高砂町人とも號せり、安永四年狂言作者金井三笑の門に入り時俵藏と呼べり、後文政の初年四世鶴屋南北の號を襲ぎ龜井戸に移り鶴東と號せり、寶暦五亥年に生れ本年五十四歳なり。
市二三　高麗井と號すとあるも或は氏ならむ歟。
錦久留丸　後一亭五蘭と改め、其後又長亭と改號せり、羅綾堂を別號とす。
神屋蓬洲　通俗春川吾七、一書に青本龜助と記せり、蓬萊亭と號す、初め本郷御弓町に卜居し後年京都八坂に移れり、俳優似顏繪を能くし出板多しといふ、性質頗器用にして著作、挿畫、筆耕、及彫板に至るまで我手に頼りて他を累はさゞりしと云ふ。
硯亭墨山

千代春道　橋本氏通稱德兵衛號は紫竹堂筆耕を業とし馬喰町に住せり、作名は千代春道後に橋本德瓶に改め晩に浮世喜樂と稱せり、其出生寶暦八寅年にして本年五十一歳なり。

川關琴川　川關氏通稱庄助川關樓と號す、曲亭馬琴の門人なり。

千歳亭松武　通稱山口屋藤兵衛馬喰町書肆錦耕堂山口屋主人なり、又千代松竹と號し後に藤壽亭と改號せり、本年四十餘歳。

東西庵南北　朝倉氏通稱力藏後藤八と改む、本所竹町に住み板木師を職とし傍戯作を出だせり、後居を芝金杉に轉ずと云ふ。

三芳野多賀安

畫工

鳥居清峰　二十二歳

歌川國貞　二十三歳

勝川春亭　三十九歳

歌川豐國　四十歳

勝川春英　四十一歳

歌川豐廣　四十五歳

葛飾北齋　四十九歳

北尾重政　七十歳

歌川國長

神屋蓬洲　本年作者の項參看すべし。

歌川國丸　通稱伊勢屋伊八後文治と改む本町二町目質商某の男なり、歌川豐國の門人となり一圓齋と號す、五彩樓、輕雲亭、及び彩霞樓等其別號なり、俳名を蘇蝶庵龍尾と曰ひ後浮世小路に卜居す。

勝川春扇　通稱清次郎登龍齋と號す、始め雪山堤等琳の門に入り春琳と曰ひしが、後に勝川春英の門人となり春扇と改む、麹町貝坂に住みしが淺草御隨門前に移り次で芝神明町に移轉す、後年師名を襲ぎ二世勝川春好と曰へり。

松爾樓　歌川豐春なるべし、豐春は通稱但馬屋庄次郎後新右衛門と改む、一龍齋と號し別號を潛龍齋とも號せり、師は鳥山石燕豐房にて師名豐の字をとり豐春と曰へり、世に西村重長の門人とし或は石川豐信の門とせるは皆非なりといへり、初芝三島町に居りしが中橋に轉じ後赤坂田町に住せり、晩年薙髮して昌樹と號し又一に潛翁と曰へり、享

保二十卯年に生れ今年七十四歳の高齢なり。

十返舍一九　寛政八年の再板物なれば三十三歳の時の書なり。

板　元

江見屋忠右衛門

山城屋藤右衛門　馬喰町に住す俗稱山藤。

伊賀屋勘右衛門　新和泉町に住す號を文亀堂といひ俗稱は伊賀屋。

鶴屋喜右衛門

村田次郎兵衛

和泉屋市兵衛

榎本屋吉兵衛

丸屋文右衛門　神田辨慶橋通に住し文壽堂と號す、通稱丸文。

近江屋權九郎

山田屋三四郎　芝神明前に住す。

西村屋與八

岩戸屋源八

山口屋忠介

蔦屋重三郎

森屋治兵衛

濱松屋幸助　通油町に住す。

西村屋源六　本石町四町目に住し文刻堂と號す、天保二年頃に淺草黒船町に轉せり、屋標は山形の下に西の字。

丸屋甚八　通油町に住す屋標は○の中に甚の字、通稱丸甚。

鶴屋金助　人形町通り乘物町に住し鶴屋喜右衛門の支店にして雙鶴堂と號せり、後ち新吉原廓内揚屋町に移轉せりと云ふ俗稱鶴金。

雜　記

十二月四日森羅亭萬象歿す、享年五十五芝二本榎上行寺に葬る。

○

閏六月二日俳優尾上松綠囘向院に於て古俳優小幡小平次の爲めに施餓會を修し其幽魂を弔すされど其後小平次の狂言を演ずる毎に怪異の變事ありと云ひ傳ふ翌六年烏亭焉馬に『緐後平次』の作あり。

書　目

小曾野綠三郎八重霞かしこの仇討　七　京傳作　豐國書

黒船忠右衛門 奴の小まん 三浦難波復讐	六	一九作	國貞畫
獄門庄兵衛 喧嘩屋五郎兵衛 朝比奈藤兵衛 浪速男後編	五	同上	同上
前編五册は文化四年出板せり。			
おしゆん 傳兵衛 有田唄お猿仇討	六	三馬作	國貞畫
三五兵衛 源五兵衛 復讐川字線由來	五	京山作	豐國畫
後編『其後日三五大切』文化六年出板す。			
三國傳來 墻壁之外 玉藻前龍宮物語	三	三馬作	春亭畫
一書に國貞畫とあり。			
東上總 夷隅郡 敵討白藤源太談	七	京傳作	豐國畫
十國子 の由來 女六部仇宇都谷	六	京山作	春亭畫
次郎殿犬 太郎殿犬 復讐油屋於染	七	同上	國貞畫
二人平太郎 二人おりう 敵討女夫柳	六	琴川作	春亭畫
關戸彌三郎 牛子鹽陀六 力競雜敵討	八	三馬作	
三浦兵庫鑑 山本勝山結 南禿對仇討	十二	同上	國貞畫
天狗利生 鬼兒島名譽仇討	八	同上	豐國畫
嶋川太平 御堂詣未刻太皷	六	同上	豐廣畫
彦山仇討 孝貞六助誓力働	六	眉山作	春亭國丸合畫
善惡邪正 復仇甚三之紅絹	五	琴川作	春亭畫
攝州有馬於藤の傳 妬湯仇討話	六	京傳作	豐國畫
安達ヶ原 那須野原 絲車九尾狐	九	京傳作	豐國畫
加田遮越 長介海鏡 敵討白鳥關	六	馬琴作	豐廣畫
谷汲觀音 利益仇討 難有孝行娘	三	三馬作	同上
金銅名犬 正宗名刀 敵討宿六始	十	同上	豐國畫
金花猫婆 化生屋敷 復讐雨膜塚	六	同上	國貞畫
天保九年大海舍金龍（實は畫工貞秀）之を改作し『金花猫婆化粧屋敷』と改題再板す。			
歌舞伎傳助忠義話	六	馬琴作	春亭畫
桑名屋德藏廻船話	六	一九作	豐廣畫
島川太兵衛犬神話	三	一溪庵作	同上
一名『奇談七里濱』			
金比羅 御利生 敵討乘合噺	六	尉輔作	國貞畫
高野山 矢木暖 仇討報蛇柳	六	三和作	北齋畫
名香柴 舟由來 復讐勝山結	五	京山作	國貞畫
伊賀越 御堂 時鳥相宿噺	六	松武作	同上
表題の畫は月麿なり。			
女俠三日月於仙	六	京傳作	豐國畫
絞染五郎强勢談	五	同上	同上
萬福長者榮花談	三	同上	豐廣畫
小鍋丸手石入船	六	馬琴作	豐國畫

玉藻前三國傳記　三　三馬作　春亭畫
蟒蛇於長鏸草紙　七　同上　國貞畫
寶入船七福大帳　二　鬼武作　松衛樓畫
宮戸川三社由來　七　久留丸作　春亭畫
岩井櫛粂野仇討　七　京傳作　豐國畫
孝行娘妹仇討　六　傳笑作　豐廣畫
熊女越路之仇討　六　京傳作　豐國畫
錦木塚孝女仇討　六　京山作　國貞畫
敵討天竺德兵衛　六　京傳作　豐國畫
敵討身代利名號　六　馬琴作　北齋畫
敵討小萬ヶ紅粉　三　蓬洲作　自　畫
復讐源五郎鮒魚　六　南北作　春扇畫
復讐富士之白酒　六　京山作　豐國畫
後編諏訪海孤談　五　一九作　春亭畫
　一書に豐廣畫とあり。
　前編三冊は文化四年出板なり。
復讐最上紅花染　三　多賀安作　國長畫
　感和亭鬼武校とあり。
甲州矢倉澤仇討　六　一九作　春亭畫
　一河の序文あり。

大津土產吃又平　八　三馬作　國貞畫
　一名「吃又平名畫助劍」
　此作非常の大當りなり。
天報正宗熊腹帶　六　京山作
　一名「復讐熊腹帶」
吃又平名畫助劍　八　三馬作　國貞畫
　一名「大津土產吃又平」
復讐奇談東雲草紙　二　墨山作　春亭畫
越中立山幽靈村仇討　五　一九作　豐廣畫
浪花[illegible]俠客双蝶々　九　京傳作　豐國畫
[illegible]漣返淺草法　二　一九作　自　畫
左馬五郎蛇淵之仇討　六　京山作　豐國畫
七役早替敵討記乎汝　三　六樹園作　重政畫
嵐山後篇春霞女囮國　五　一九作　豐廣畫
　前編「嵐山花仇討」は文化三年出板なり。
天報正宗復讐熊腹帶　六　京山作　豐廣畫
　一名「天報正宗熊腹帶」
息子株身持扇　五　京山作　國丸畫
敵討猿田ヶ淵　六　傳笑作　春扇畫
多羅福注文帳　三　一九作　豐廣畫

質流人之行末	三	一九作	春英畫

享和元年板『質流思外幸』の外題替再板なり。

復讐忠孝二筋道	七	一九作	淸峰畫
忠信草津老嫗餠	七	同上	豐廣畫

後編『武者順禮拾松噺』は文化五年出板せり。

勇略女敎訓	五	一九作	北齋畫
染替𨻶七縞	六	三笑作	春亭畫
妖怪一年草	三	一九作	春英畫
俗言種狐拳	三	同上	淸峰畫
珍說飛敵討	三	市二三作	重政畫
花曇都復讐	五	一九作	春亭畫
皷草花復讐	五	同上	重政畫
敵討兒手柏	五	馬琴作	豐國畫
敵討木曾棧	六	京傳作	
敵討女今川	六	京山作	豐國畫
敵討葛松原	六	一九作	豐廣畫
復讐絲小車	五	春道作	春亭畫
雷幸藏轟噺	六	東子作	同上
鏡山擧仇討	五	京山作	豐國 國貞畫
魁武功之花	二	一九作	春亭畫
奇談七里濱	三	一溪庵作	豐廣畫

一名『島川太兵衞犬神話』

商人金采配	三	一九作	自畫

十字亭の序文あり。

復讐熊腹帶	六	京山作	

一名『天報正宗熊腹帶』

三國誌	三	一九作	春英畫

○

蘐雪曰、敵討物は愈全盛を極むるに際し、一九のみは前年も本年も、敵討と戯作物の兩方を出し居るは面白し、殊に今年六樹園が出せし『敵討記乎汝』は萬綠叢中紅一點の觀ありといふべし、六樹園が青本の戯作はこれとともに前後二種あるのみ、而して此作を最終とす。

文化六己巳年

作者

感和亭鬼武　五十歲
十返舍一九　四十六歲

東西庵南北
櫻川慈悲成　四十三歳
素速齋東子
千歳亭松武
山東京山　四十一歳
山東京傳　四十九歳
式亭三馬　三十五歳
曲亭馬琴　四十三歳
東里山人　二十五歳
關亭傳笑
錦久留丸
姥尉輔　五十五歳
市二三
烏亭焉馬　六十七歳、寛政五年桃栗山人の項參看。
本野素人　東西庵南北の門人歟。
益亭三友　式亭三馬門人にて呉竹園と號し葭町に住せり、通二町目藤の丸膏藥を商ふ人の弟とのみにて通稱詳ならず。
岡山鳥　岡嶋氏名は長盈字は哲甫通稱權六後芳右衞門と改む幕府の旗下近藤金之丞の家士なり丹前舍

と號し又竹之戸とも號せり初め曲亭馬琴に就き節亭琴驢と號せしが後に式亭三馬の門に入り岡山鳥と呼び後三鳥に改む一號を五六々々とも曰へり。
松下井三和　其氏名詳ならず、音讀にせば唐來三和の名に似紛ふ所あれば或は同人の假名なるやも知れず、敵討物の作なるが爲め故に松下井と記せし歟、又は松下氏にて井三和と曰へる名の作者ありし歟、姑く疑を存す。
南仙笑楚滿人　遺稿
幽月庵元越
礫川南嶺　礫川山人と號す。
與鳳亭梧井

畫工

鳥居清峰　二十三歳
歌川國貞　二十四歳
歌川國丸
歌川國長
歌川豐廣　四十六歳
歌川豐國　四十一歳
歌川國滿　通稱熊藏芝口二町目に住し後田所町に移

れり歌川豐國門人なり。
北尾重政　七十一歳
勝川春亭　四十歳
勝川春扇
蹄齋北馬　三十九歳
盈齋北岱
百齋久信
柳谷
十返舍一九　四十六歳
喜多川美丸
喜多川月麿
喜多川式麿　東海林氏通稱平次右衞門小石川牛天神下に住す喜多川月麿門人なり。

板元

伊賀屋勘右衞門
山城屋藤右衞門
丸屋文右衞門
鶴屋喜右衞門
和泉屋市兵衞
近江屋權九郎
山田屋三四郎
榎本屋吉兵衞
村田次郎兵衞
山口屋藤兵衞　馬喰町二町目北側に住し錦耕堂と號す屋標は▶を用ゆ。
伊藤屋與兵衞
森屋治兵衞
蔦屋重三郎
岩戶屋源八
西村屋與八
若狹屋與市　芝神明前に住し若林堂と號す通稱若與。
丸屋甚八
西宮新六
鶴屋金助

雜記

式亭三馬其著『長壁姬明石物語』に就き畫工勝川春亭と口爭す。
尾上榮三郎名を松助と改む三代目菊五郎の前名なり。
合卷草双紙の裝釘稍〻美麗を主とし、小半紙に摺りし草紙に麗しく摺附け表紙を用ゐ好評ありしに

ぞ、終に上紙摺には剛人籠を使用するに至れり、價は壹匁より壹匁五分なり。

○

力持大女淀瀧見世物に出づ齢二十二歳にて身長鯨尺にて六尺七寸ありと。

書目

狐川の源九郎　千本櫻祇園守護　六　京山作　豊廣畫

志道軒往古講釋　六　京傳作　豊國畫

かちかち山の　腹鼓狸忠信　三　三馬作　美丸畫

於花半七傳　笠森娘錦之笈摺　六　京傳作　豊國畫

淺草寺觀音　略縁記稗史仇討　二　鬼武作　北馬畫

衣替谷仁王　兒雷也記　久米平内剛力傳　六　京山作　春亭畫

かりがねや　うかれ女傳　五人女都紅粉筆　六　同上　清峰畫

御嶽山讐仇討　七　一九作　月麿畫

業平塚由來　六　鬼武作　式麿畫

昔語紫色揚　六　京山作　豊國畫

古手屋八郎兵衛　敵討賽八丈　六　馬琴作　國貞畫

天保十二年之を再板す。

樋口五郎兵衛　復讐西海硯　六　一九作　國貞畫

小ひな半兵衛　二人茂右衛門　角兵衛獅子　六　南北作　春扇畫

お半長右衛門　鞵草娘庭訓　八　京山作　豊國畫

本町丸屋五郎兵衛　東男連理緒　七　一九作　國貞畫

文句は浄瑠璃　鳶凧子寶噺　三　慈悲成作　豊廣畫

岩戸神樂劔威徳　六　京傳作　春亭畫

累井筒紅葉打敷　八　同上　豊國畫

山中鹿之助稚譚　十　馬琴作　春亭　美丸畫

復仇和布刈濤門　八　一九作　春亭畫

大矢數意恨仇討　六　同上　春扇畫

五大力　其後日三五大切　五　京山作　豊國畫

前編「復讐川字線由來」は文化五年出板なり。

忠臣藏　落噺　春慶物茶番狂言　三　東子作　國滿畫

文化九年「一豊のいろは」と改題再板せり。

傳　金剛長五郎忠孝話　十二　三馬作　國貞畫

鏡山　寺由來　復讐處高砂　六　尉輔作　同上

喜右衛門之茶碗　七　南北作　春扇畫

八百屋お七傳　松梅竹取物語　十五　京傳作　國貞畫

お夏清十郎　風流伽三味線　十　同上　春亭畫

姉は　妹は　都廼花讐を往　六　京山作　豊廣畫

座頭之宮由來　三　一九作　同上

龍宮怪談錄後平治　三　焉馬作　月麿畫

唐土茶番狂言起原	三	一九作	月麿畫
鞍子三本 紅絹五疋 昔唄花街始	二	三馬作	
忠孝振分 道中双六 自然薯三吉	八	同上	
釣鐘 彌左衛門 奉加助太刀	十	馬琴作	豐廣畫
契情の松 宮女の櫻 操競双生渡	六	京山作	春扇畫
鳥羽戀塚 網島鯉塚 昔語夜船始	七	同上	春亭畫
おしゆん 傳兵衛 敵討戀友猿	三	一九作	國長畫
佛長兵衛 鬼太平治 力髮一對男	三	同上	春亭畫
おはん 長右衛門 敵討實語教	六	素人作	春扇畫
東西庵南北梭合とあり。			
岐蘇 反忍 闗野太郎物語	六	一九作	春扇畫
三峯 靈験 御猨の助太刀	七	同上	春亭畫
手生山 利勝記 敵討鶴見鄉	六	素人作	春扇畫
御伽 ばなし 小人島仇討	二	鬼武作	北馬畫
宮城野 信夫 小說娘楠樹	六	京山作	春亭畫
桃太郎子寶双紙	三	松武作	月麿畫
吾嬬織角紙大全	八	三馬作	國貞畫
長壁姬明石物語	六	同上	春亭畫
巖柳島手楽色揚	四	由鳥作	國貞畫
田舍物頓無禮話	三	東里作	月麿畫

孝行酒屋譽劔菱	七	京山作	豐國畫
加古川本藏建立	三	一九作	月麿畫
串戲狂言一夜漬	三	同上	自畫
東摸樣連理巢籠	六	南嶺作	春亭畫
柚物語仙家之花	二	楚滿人遺稿	國貞畫
復讐奥州瓶割坂	三	一九作	月麿畫
復讐大日坊物語	六	南北作	春扇畫
復讐女諸禮龜鑑	五	一九作	豐廣畫
復仇蝦蟆之妙藥	五	同上	式麿畫
復仇猫股橋由來	七	傳笑作	春扇畫
敵討十三鐘由來	六	鬼武作	式麿畫
敵討鷺娘之由來	七	一九作	春亭畫
反怨於半ヶ紅粉	五	鬼武作	美丸畫
面鏡仇を討志繪	三	久留丸作	國滿畫
花鳥風月仇討話	六	三友作	國丸畫
小女郎蜘怨苧環	十二	馬琴作	春亭畫
天保十二年豐國畫に改め之を再板す。			
匂全伽羅之柴舟	三	馬琴作	國貞畫
上野山下(石)油店開店景物用としての戲作なり。			
二日替連理花王	十	京傳 京山 合作	豐國畫

前編は山東京傳作後編は山東京山の作なり。

鼻毛は長し百銅は短し 打諢謔 一 三馬作 豊國畫

享和元年作『日本一痴鑑』の體裁を替え再刻せしものなり。

辨天利生 建久女敵討 三 梧井作 北岱畫
彦山靈驗 英獄仇討噺 六 一九作 國貞畫
一休話 草庵茶漬飯 三 同上 月麿畫
蝮五郎吉仇討後話 上州絹 三 同上 同上
開道初音仇討 三 京山作 清峰畫
兒ケ淵誓仇討 七 傳笑作 重政畫
石上布留仇討 六 一九作 春扇畫
復讐女用文章 六 同上 同上
猪熊入道物語 六 同上 同上
道成寺現在鱗 十 焉馬作 月麿畫
復讐双兒山 六 東子作 柳谷畫
反讐甚孝記 八 一九作 月麿畫
敵討讐手杜 三 同上 同上
敵討女鉢木 三 市二三作 春扇畫
奇談立山譚 三 素速齋作 久信畫
敵討眞見瀧 六 三和作 豊廣畫

勸善辻談義 八 京傳作 豊國畫
無根草夢談 三 三馬作 春麿畫

蓖雪曰、卷末に「古人芝全交舊案の増補」とある如く寛政元年板「親之敵現歟夢也」の飜案なるが、上卷三葉表に於て馬琴の口調を摸し曲亭を愚弄揶揄する條頗る妙なり、三馬ならでは斯かる筆を動かすこと能はざるべし。

七雛郎滅 七福譚 四 三馬作
紅葉七時雨傘 三 一九作 月麿畫
滑稽田舍鶯 二 元越作 春亭畫

十返舍一九校合とあり。

附祭踊子新書 五 元越作 美丸畫

十返舍一九校合とあり。

潮干土產 三 梧井作 北岱畫

一名「建久女敵討」

化物畫 四 一九作 自畫

○

蓖雪曰、本年出づる所の新作實に九十三種、斯く多數の新板ありし年は前後に比なく、僅に當年一回ありしのみ、蓋し其作振の深く讀者の嗜好に適中

せしが故なるべし。

文化七庚午年

作　者

東西庵南北
十返舍一九　四十七歳
感和亭鬼武　五十一歳
槊月窓秋輔
櫻川慈悲成　四十四歳
千歳亭松武
式亭三馬　三十六歳
山東京山　四十二歳
山東京傳　五十歳
東里山人　二十六歳
關亭傳笑
益亭三友
硯亭墨山
竹塚東子
曲亭馬琴　四十四歳
千代春道　五十三歳
川關琴川
礫川南嶺
岡山鳥
市二三
萬歳庵龜人
梅暮里谷峨　反町氏通稱三郎助後與左衞門と改む、別號犇亭久留米藩士にして黑田家大目附を勤め、本所埋堀に住す因て梅暮里と稱せり、尤洒落本に名あり、寬延三午年に生れ本年六十一歳なり。
柴舟庵一双　十返舍一九門人なり。
石齋年彥
橋本德瓶　卽ち千代春道なり五十三歳。
一亭五蘭　卽ち錦久留丸の改號なり。

畫　工

勝川春扇
勝川春亭　四十一歳
歌川豐廣　四十七歳
歌川豐國　四十二歳
歌川國貞　二十五歳

歌川國滿
歌川國丸
歌川國房　通稱多三郎歌川豐國門人なり。
歌川金藏　歌川豐廣の男にして豐國を師とす後名を
　豐清と改む寛政九巳年を以て生る本年十四歲なり
菊川英山　菊川氏名は俊信通稱近江屋萬五郎（萬吉
　又は爲五郎と他の書に見ゆ）麴町六町目に住し造
　花を業とす、畫を父英二に學び後其友岩窪北溪に
　就き畫法を究む重九齋と號し美人畫に名あり。
蹄齋北馬　四十歲
昇亭北壽　名は一政葛飾北齋門人なり、藥研堀に住
　す浮畫を其長技とす。
葛飾北嵩　島氏名は重宣蘭齋と號す別に閑々樓、醉
　醒齋等の號あり、明神下伊勢屋佐兵衛方に同居す、
　葛飾北齋の門人なり晩年東居と號す。
西川東子
喜多川美丸
喜多川月麿
喜多川式麿
勝川登龍齋　卽ち勝川春扇の畫號なり。

鳥居清峰　二十四歲
十返舍一九　本年の自畫作一種は寛政十年の再板物
　なり。
　　板　元
鶴屋金助
丸屋甚八
西宮源六　本石町十軒店に住す。
蔦屋重三郎
森屋治兵衛
若狹屋與市
西村屋與八
釜屋又兵衛　兩國米澤町三町目に住す、號を中金堂
　といふ。
伊藤屋與兵衛
榎本屋吉兵衛
和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛
村田次郎兵衛
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門
近江屋權九郎

山田屋三四郎
岩戸屋喜三郎　横山町に住す屋標は○の中に岩の字
伊賀屋勘右衞門

雜　記

春京傳馬琴『夢想兵衞』の記事に就き論爭し爾後相會せずと云ふ。

式亭三馬今年の作『於竹大日忠孝鑑』に就て再勝川春亭と紛爭し和せず、後山本忠兵衞其間に居り調停す。

播磨の漢儒五島惠廸所著『赤水餘稿』に筆を極め馬琴を酷評誹謗す、十年の後馬琴之を知り終生憤恨すと云ふ。

書　目

去程にこれは又 竹生嶋利生仇討 歌祭文於三茂兵衞	六	三馬作	國貞畫
土佐節の二河白道 豐後節の高尾懺悔 却說浮世之助話	六	同上	同上
吉田屋夕ぎり 藤屋伊左衞門 浪花浴衣閙七嶋	六	南北作	春扇畫
花崎吉六 鹿䰄お町 江嶋御利生對菅笠	六	京山作	同上
關取鬼王 契情月小夜 化粧坂懷忠龜鑑	八	京傳 京山作	淸峰畫
小太刀早業 兩刀達人 忠義汗絞染五郎	三	京山作	春扇畫
大文字の狐松 散し書の兒櫻 菅原流梅花形	五	山鳥作	

姉二十一代集 妹廿卷萬葉集 絲櫻本朝文粹	十二	京傳作	豐國畫

一書に淸峰畫とあり。

熊野浦の鯨船は 一の森の茶屋娘 艶容娘島田	三	山鳥作	國房畫
俠客莊金 契情瓢象 冠辭筑紫不知火	八	三馬作	豐國畫
井筒笑城 全盛合奏 一對男時花歌川	十二	同上	豐國 豐廣畫

豐國豐廣の不和を調停せむため三馬此册子を著はし、前編六册を豐國後編六册を豐廣に畫かしめしに、兩畫工とも熱誠を抽で筆を執りしかば、其出來非常に巧妙なりとて好評嘖く、頗る大當りなりしといへり。

紙屋次兵衞 紀伊國屋小春 通俗大雜書	六	一九作	豐廣畫
男江口 女西行 富士太郎梅隱香	八	京傳作	豐國畫
女夫池 おし鳥 時代摸樣室町織	二	鬼武作	北馬畫
首尾松 秋葉楓 照天姬黃昏草紙	六	東里作	春扇畫

每葉杜に「こがねの玉」とあり。

小野頼風 女郎花姬 歌字盡靑柳硯	八	京傳作	豐國畫
戀山崎與二兵衞物語	三	三馬作	美丸畫
富士左近 淺間左衞門 仇討金剛杖	六	一九作	豐廣畫
うてや鳴 むかし物語 巴のおせん	三	南北作	春扇畫
鳥獸魚蟲類 身振り聲色 腹筋逢夢石	一	京傳作	豐國畫

第二編文化八年出板す。

善悪両面於竹大日忠孝鑑　七　三馬作　春亭畫
於染久松読染歌舞妓摸様　六　京山作　國貞畫
小いな列兵衛夜鶴親父形氣　八　京傳作　豐國畫
二人娘賀八人新曲調の絲竹　二　山鳥作　國房畫
おむめ粂之助敵討高野楓樹　五　一九作　式麿畫

一書に月麿畫とあり。

松王丸明月姫昔語兵庫築島　六　三馬作　美丸畫

此作當り物なり。

婦女忠臣假名文章　三　一九作　自　畫
鷲頭山非人助太刀　三　傳笑作　國滿畫
佛寶兵衛藥科日記　三　龜人作　春扇畫
鐘巻市右衛門譽之助太刀　五　三友作　國丸畫
切拔繪本浮世七役早替胸機關　三　三馬作　豐國畫

嘉永六年『教訓むねのからくり』と改題し、三代目一九の序文を加へて再板す。

此書は讀本の部に入るものなるが、處々挿繪の上に別に一片の小形の挿繪の一部分を糊にて貼り、作意の表裏を示し得る仕掛は、又一奇軸を出せし物と思はるゝ儘に特に掲げぬ。

敵討大山道中二筋道　八　谷峨作　東子北嵩畫
十二支介料口技腹佳話鸚鵡八藝　一　京山作　豐國畫
彦惣古今昔雛女房形氣　六　同　上　國貞畫
お千代半兵衛初夢ばなし　三　南北作　春扇畫
清川文七物語傾城貞操鑑　六　德瓶作　英山畫
御伽ばなし仇を目附繪　二　墨山作　月麿畫
ひだり甚五郎腕雕一心命　三　三馬作　國滿畫

此作當りなり。

伊賀越仇討玉襷待合噺　六　一九作　美丸畫

一名『伊賀道中待合噺』

人間一生五十年伊吾物語　一　谷峨作
敵討忠孝大鷄塚　六　東子作　英山畫
打也敵野寺鼓草　三　馬琴作　春扇畫
繼子立身替音頭　六　京山作　同　上
三島娼化粧水莖　三　鬼武作　北馬畫
梅之於由女丹前　六　京傳作　春扇畫
鶉權兵衛俠客話　三　三馬作　英山畫
東都自慢花名物　三　秋輔作
八目鰻因緣物語　三　京山作　春亭畫
小野小町劇化粧　六　春道作　豐國畫

達磨大師花見氈　三　慈悲成作　豊國畫
親爲孝太郎次第　四　三馬作　美丸畫
親敵善知鳥乃俤　六　京傳作　豊國畫
劇場春牡丹燈籠　六　同　上　國貞畫
高尾丸劒之稲妻　六　京山作　同　上
千穀通稚智惠鑑　六　松武作　月麿畫
天保七年『復讐千穀取』と改題再板す。
吾妻染大和屋絞　三　南北作　春扇畫
一名『江戸染杜若絞』
男作三箇之太鼓　五　一九作　國滿畫
一名『總州墨塗話』
伊賀道中待合噺　六　一九作　美丸畫
一名『玉襷待合噺』
早替工夫の仇討　二　墨山作　月麿畫
此書の角書に竹田近江屋積之細工書と記せる如く普通の挿繪を二様に見せる仕掛にて、毎葉中央より竪に二つ折となし他面の繪組に合す工風なり、一々符號を記して組合せに便ならしめたり。
昔唄敵討雉子雄山　三　東子作　國滿畫
一書に國長畫とあり。

清川文七元結之濫觴　六　東里作　美丸畫
同來奇縁春霞園仇討　三　五蘭作　國房畫
婚禮三組昔形福壽盃　五　三馬作　美丸畫
二八文七五連立春屁　六　南北作　春扇畫
假名手本三度之清書　南嶺作　春亭畫
大慈大悲利劒助太刀　三　一九作　國丸畫
一名『利劒勳功』
善惡兩轉早引說要集　八　京山作　國貞畫
一名『小春紙治早引說要集』
後編『大福帳手代鑑』六冊文化十年出板す。
駿州清水觀音利劒勳功　三　一九作　國丸畫
一名『利劒助太刀』
桔槹久米皿山　三　春道作　春亭畫
勸善近江八景　六　傳笑作　北嵩畫
其昔矢口仇浪　三　一九作　北壽畫
窣月新刀名鑑　六　馬琴作　春亭畫
足柄山峰仇討　三　年彥作　國房畫
敵討越後獅子　五　一双作　月麿畫
身振いろは藝　三　南北作　登龍齋畫
江戸染杜若絞　三　同　上　春扇畫

一名「吾妻染大和屋紋」

紅毛影繪 於都里伎	一	一九作	月麿畫
鏡山後日俤	六	南北作	春扇畫
姥櫻女淸玄	六	馬琴作	春亭畫
奇哉夜光珠	三	市二三作	國滿畫
敎訓雜土産	三	東子作	國丸畫
積思女鉢木	六	京山作	春亭畫
曲輪育操松	三	一九作	月麿畫
千羽鳥蹊曙	三	墨山作	同上
敵討花粧水	三	松武作	同上
復讐今川狀	三	琴川作	國滿畫
總州曝塗話	五	一九作	同上

一名『男作三箇之太鼓』

筆始日出松	三	南北作	金藏畫

歌川豐廣悴金藏十二歳御目見得にて師豐國の口上あり。

貞操柳	三	一九作	北馬畫

○

蓙雪曰、此三四年以前より、外題の頭に角書を冠らするこ多く行はれ、爾來此風を用ゆるに至れり。

敵討の作遽に數を減じたるが如し、前年來世の趨勢に驅られ、敵討の濫作を招致したる結果、稍讀者の倦厭を來せる爲め乎。

文化八辛未年

作者

東西庵南北	
十返舍一九	四十八歳
柴舟庵一双	
時太郎可候	五十二歳
山東京山	四十三歳
瓮亭三友	
竹塚東子	
山東京傳	五十一歳
式亭三馬	三十七歳
橋本德瓶	五十四歳
一亭五蘭	
曲亭馬琴	四十五歳
東里山人	二十七歳

闗亭傳笑
硯亭墨山
岡山鳥
市二三
不眠齋雨聲　一書に不就齋とし異書に不乾齋雨戸に作れり、其是非は原本を閲せば一見明白なるべきも、未だ閲覽せざれば確むる能はず。
初音樓一炷　十返舍一九門人なり。
石川清澄　中村氏通稱清三郎塵外樓と號す、六樹園宿屋飯盛の男なり、父に嗣で狂歌の判者たり、戯作は唯本年一作あるのみ、天明六午年に生れ本年二十六歳なり。
紀の十子　紀伊國屋訥子の變名にて實は俳優澤村訥子の作名なり、訥子は幼名源之助と稱し本年四代目宗十郎を襲げり、戯作は代作者に賴て成りし物にして素より自著に非ず、訥子安永三午年に生れ本年三十八歳なり。
柳亭種彦　高屋氏名は知久通稱彥四郎足薪翁と號す、外に愛雀軒、修紫樓等の別號あり、俳名を木卯と稱し、狂名を柳の風成又心の種成と曰へり、俳優

坂東三津五郎の假聲に長ずるを以て、世俗三彥と呼べりといふ、幕府旗下の士なり、天明三卯年を以て出生し本年當に二十九歳なり。

畫工

鳥居清峰　二十五歳
菊川英山
葛飾北齋　五十二歳
葛飾北嵩
勝川春亭　四十二歳
勝川春扇
歌川豐廣　四十八歳
歌川豐國　四十三歳
歌川國貞　二十六歳
歌川國丸
歌川國滿
歌川國安　通稱安次郎一鳳齋と號し歌川豐國門人なり、村松町に住し後扇橋に轉ず、俳優繪に名あり、一時西川安信と稱せしが少時にして再國安に復せり、寛政六寅年に生れ本年十八歳なり。
歌川國清　江守氏通稱安藏一樂齋と號し歌川豐國の

門弟たり、幕府の小吏にして茶番狂言を能くし、藝名を松魚と呼べり。

歌川國次　中川氏通稱幸藏一應齋と號す、歌川豐國門人なり、銀座四町目に住す、寛政十二申年に生れ當年十二歳なり。

喜多川美丸

喜多川月麿

板元

西宮源六

鶴屋金助

丸屋甚八

森屋治兵衛

蔦屋重三郎

若狹屋與市

西村屋與八

大阪屋秀八

和泉屋市兵衛

山口屋藤兵衛

榎本屋吉兵衛

岩戸屋喜三郎

近江屋權九郎

鶴屋喜右衛門

丸屋文右衛門

村田次郎兵衛

伊賀屋勘右衛門

津村屋三郎兵衛

雜記

烏亭焉馬「歌舞伎年代記」を著す。

書肆文刻堂西村源六俳優澤村訥子の作名を附し、合卷の冊子を出板して好果を奏す、後ち爾餘の書店亦此奇策を襲用し漸次流行す。

澤村源之助四代目澤村宗十郎を襲ぎ訥子と號す。

十一月澤村鐵之助二代目澤村田之助を襲ぎ曙山と號す。

書目

げいこのお俊は御贔負の丁子車花角力白藤源太　六　京山作　國貞畫

夫は長柄之橋柱是は渡邊橋供養今朝御前操松枝　五　山鳥作　同上

唐犬權兵衛寺西閑心左文字輝義刀切味　五　三友作　國丸畫

何でも箇でも三國傳來茶釜前杓子物語　三　東子作　美丸畫

お露五郎兵衛お妻八郎兵衛曉傘時雨古手屋　六　京傳作　春扇畫

關羽勘兵衛 張飛五郎 花曇笠屋之連彈	六	南北作	春扇畫
今な初めの たびごろも 梅由兵衛紫頭巾	六	京傳作	豐國畫
瀧口右衛門 横笛姫 咲替花之二番目	六	同上	國貞畫
御子樣方へ 近道の教訓 堪忍五郎稚講釋	五	三馬作	美丸畫
平野屋德兵衛 天滿屋おはつ 三世相女手鑑	六	一九作	春亭畫
高尾楓 薄雲櫻 阿波大盡鳴戸寫繪	六	德瓶作	國貞畫
女雛男雛 淸川文七 五人揃紋日大寄	三	三友作	國安畫
關取梅川 契情梅川 艶競二人忠兵衛	六	三馬作	國貞畫
櫻屋小まん 笹野三五郎 五代力筆繼棹	三	京山作	春扇畫
梅堀由兵衛 小梅村小梅 鶴銀杏對山門	五	三友作	國丸畫
石川碁右衛門 祇園のお梶 昔語釜ヶ淵	七	三馬作	國貞畫
お梅 粂之助 若衆振水仙丹前	六	京山作	春亭畫
老媼餅 後篇 武者順禮捨松噺	六	一九作	豐廣畫

前編『草津老媼餅』は文化五年出板なり。

大日方 隅田夕立 扇蝶お染が簪	五	南北作	春扇畫
白髮戯男 墨染浮女 初昔濃茶口切	三	雨聲作	月麿畫

咸和亭鬼武校とあり。

加古川本藏 惡態の卷物 忠臣藏癡鑑	一	淸澄作	
笠屋三勝 赤根屋半七 戻駕忠義操	三	五蘭作	月麿畫
岩藤右衛門 尾上之助 男子草履打	六	京傳作	豐國畫

小栗後篇 和歌緑照天之松	三	德瓶作	國淸畫
梅川忠兵衛 三度笠江島遊	六	南北作	春扇畫
綱五郎小絲 劇春大江山入	五	京山作	淸峯畫
猪隈雷雲 蘭力之助 颪雲井物語	七	三馬作	國貞畫
新井閻魔附紐由來	三	一九作	美丸畫
梅澁吉兵衛發心記	六	馬琴作	春扇畫
茶番狂言 口切のせりふ	三	東里作	同上
六册掛 德川話 河州大森塚	三	傳笑作	國滿畫
女非人 復讐 美佐保雛形	六	一九作	春扇畫
金比羅 御利生 敵討稚講談	三	墨山作	
法界坊 野分姫 其寫繪劇傒	七	三馬作	豐國畫
新撰生姜市草創	六	傳笑作	豐廣畫
笑物黄金之島臺	二	三友作	國次畫
相馬內裡後雛棚	六	馬琴作	春扇畫
昔織博多小女郎	八	京傳作	淸峰畫
鱸庖丁靑砥切味	七	種彦作	北嵩畫
出世娘振袖日記	六	京山作	國貞畫
極彩色額の小三	五	同上	北嵩畫
出世櫻譽之詠歌	三	同上	國丸畫
稻妻摸樣堤鞘當	六	同上	國貞畫

武者修行英勇傳　五　三馬作　國丸畫
播州皿屋敷物語　六　京傳作　春扇畫
女俊寛雪廼花道　五　同上　國貞畫
偖其後稻妻物語　六　京山作　同上
駿州靈蛇之唐衣　三　一双作　月麿畫
娘景清襤褸振袖　六　京傳作　春扇畫
敵討法華合邦辻　三　一九作　同上
二人若衆娘權八　六　京山作　清峰畫
一名『比翼紋娘女權八』
近江源氏湖月照　六　十子作　國貞畫
岡山鳥之を代作す。
奴勝山愛玉丹前　三　京山作　國滿畫
口繪は歌川豐國なり。
山東京傳の序文あり。
腹の內戲作種本　三　三馬作　美丸畫
弘化三年式亭小三馬是を飜案し『戲作花赤本世界』の作あり。
腹筋逢夢石二編　一　京傳作　豐國畫
腹筋逢夢石三編　一　同上　同上
初編は文化七年出板なり。

比翼紋娘女權八　六　京山作　清峰畫
一名『二人若衆娘權八』
善惡兩道染和解手綱　六　京山作　國貞 春扇畫
美濃近江國境寐物語　七　一九作　春亭畫
お伽歌之助念猫物語　六　東里作　春扇畫
忠臣一代八卦　七　一九作　月麿畫
繪本下界頭會　一　南北作
小夜中山鍬話　四　德瓶作　英山畫
浮身姿女友盛　三友作　國丸 國次畫
昔噺手飼福狗　三　一九作　國丸畫
新編月熊坂話　三　時太郎作　北斎畫
懷兒夜の編笠　五　京山作　豐國畫
本調子直絲筋　京傳作　清峰畫
雛祭妹脊仇討　八　一九作　豐國畫
一書に式麿畫とあり。
物草姫昔雛形　六　京山作　春扇畫
一書に京傳作とあり。
人武士弓引方　三　一灶作　月麿畫
十返舍一九校とあり。
身延山誓仇討　一　一双作　月麿畫

十返舍一九校とあり。

頓秀胡蝶簪	三	東子作	美丸畫
復讐振合違	三	市二三作	國丸畫
老䅗二度榮	三	同上	同上
鎗權三梅魁	六	京山作	豊國畫
櫻姫筆再咲	七	京傳作	同上
滑稽奇談尾笑草	三	東子作	美丸畫
鸚鵡八藝臺所譚	一	京山作	國貞畫

○

葩雪曰、千篇一律なる敵討物は、茲に至りて世人の排斥を受け、作意を他に轉せしが如し。

文化九壬申年

作者

東西庵南北

不眠齋雨聲

十返舍一九　四十九歳

感和亭鬼武　五十三歳

櫻川慈悲成　四十六歳

山東京傳　五十二歳

東里山人　二十八歳

橋本德瓶　五十五歳

曲亭馬琴　四十六歳

山東京山　四十四歳

竹塚東子

一亭五蘭

式亭三馬　三十八歳

柳亭種彦　三十歳

益亭三友

德永素秋

闕亭傳笑

岡山鳥

市二三

姥尉輔　五十八歳

紫竹亭　五十五歳（即橋本德瓶別號なり）

振鷺亭　猪苅氏名は貞居字は與兵衞、本船町の家主なり、鳥居清長の門に入り畫を學び、洒落本及中本の著作あり、其戯作を通じて外題に一種の特異を帶び、奇なる書名を附する等頗る奇人の性格あ

るを見る、後年川崎驛大師河原鹽濱に居を移せり。
關東米　振鷺亭門人といへるも想ふに振鷺亭の匿號なるべし。
小枝繁　露木氏通稱七郎次絳山と號す又一に歡醻陳人と號せり、水戶家に勤仕し四谷忍原横町に住す、寶曆九卯年を以て生れ當年五十四歲なり。
綠亭可山　小林氏通稱健二郎越前家の藩士なり。
春亭三曉　始四方山人の門弟たりしが後式亭三馬に就き著作せり。
德亭三孝　式亭三馬門人にて一得齋と號す、狂名桃の種成小石川に住し米を商へり後新川に移居す。
古今亭三鳥　通稱三河屋吉兵衞、淺草花川戶に住し藥種の仲買業たり、式亭三馬の門に入り古今亭三鳥を以て作名とす。
鱗馬亭三千歲　鳥亭焉馬の門人なり。

畫工

北尾重政　七十四歲
鳥居淸峰　二十六歲
葛飾北偕
菊川英山
勝川春亭　四十三歲
勝川春扇
歌川豐廣　四十九歲
歌川豐國　四十四歲
歌川豐淸　十六歲卽ち歌川金藏なり。
歌川國貞　二十七歲
歌川國安　十九歲
歌川國次　十三歲
歌川國直　十八歲
歌川國丸
歌川國滿
歌川國長
柳川重信　鈴木氏通稱重兵衞、葛飾北齋の門人にして後に雷斗と號せり、志賀理齋の男なり、深川八名川町に住す故に柳川と稱す、後根岸大塚に移れり、天明七未年出生にて當年二十六歲なり。
喜多川美丸
喜多川月麿

板元

伊賀屋勘右衞門

津村屋三郎兵衞
丸屋文右衞門
鶴屋喜右衞門
岩戸屋喜三郎
村田次郎兵衞
和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞
西村屋與八
若狹屋與市
大坂屋秀八
森屋治兵衞
蔦屋重三郎
鶴屋金助
丸屋甚八
西宮源六

雜記

式亭小三馬生る。
市村家橘生る。
八月二十七日市場通笑歿す、享年七十四淺草松山町祝言寺に葬る法號覺法至心信士。
十二月八日四代目澤村宗十郎訥子歿す、享年三十九淺草誓願寺中受用院に葬る。
曲亭馬琴三たび葛飾北齋と紛爭し、遂に絶交すと云ふ。
岩井久次郎名を粂三郎と改む。

書目

（槐久松山 碇屋五郎作 鍬名屋德藏）夜蕎麥賣名代鈨菊　六　南北作　春扇畫
（十二月晦日五郎 六月朔日九郎）四月八日物語　三　振鷺亭作　國直畫
（富士の山程 嬉の千話文）美人膚雪城木屋　六　南北作　春扇畫
（二人左衞門 二人葛の葉）壽字染小萬紅筆　六　同上　同上
（團七黑茶碗 釣船之花入）朝茶湯一寸口切　京傳作
（於國が戲場 二階の正本）女合邦戀修行者　一　南北作　豐淸畫
山東京傳竝京山の序文あり。
歌川金藏改豐淸十六歲御目見得の畫なり、卷末に南北の歌あり「御贔負を富士の山ほど引受て日の出の繪師と譽とるべし」
（留袖は鹿に朝顏 振袖は衞に蝶々）虎雨晴大磯　六
（えびらの源太 けいせい梅ヶ枝）鶯姬梅合宿　三　南北作　春扇畫
（敵討 道成寺）淸姬太郎暠雨鹵　三　東里作　美丸畫
（大童子 熊太郎）武者修行銳勇傳　六　三馬作　國丸畫
（お房 德兵衞）三扇双人大和屋　六　德瓶作　春扇畫

鳴神左衛門絶間之助勇雲外記節	六	京傳作	豐國畫
揚巻助六七代つゞく家櫻霞引幕	六	同上	國貞畫
赤本傳來壽五百八十七曲	二	慈悲成作	國滿畫
諺有之日高野蝶三月貞金	三	紫竹堂作	國丸畫
瀬川路考澤村訥子兩面蓮華道	二	三馬作	國直畫
於半長右衛門浪葩桂夕潮	六	馬琴作	春扇畫
鳥籠山鸚鵡助太刀	六	同上	美丸畫
四國左司平千疋猿	三	市二三作	國丸畫
梅川忠兵衛二人虚無僧	九	京傳作	豐國畫
浦里時次郎明烏旭紅染	六	京山作	春扇畫
小ひな判兵衛咲替梅武士	八	同上	豐國畫
焦尾琴調子傳薄雲猫舊話	六	京傳作	國貞畫
梅若姫松若姫梅柳筆繼分	六	東里作	春扇畫
人孝奇談讃實錄	六	東子作	英山畫
隅田景圖梅若詣	三	可山作	春扇畫
出世之春千兩幟	五	德瓶作	國直畫
伊達娘常陸小杉	三	市二三作	國滿畫
蟲盡世話之移氣	三	五蘭作	國丸畫
鏡山化粧之紅筆	五	南北作	同上
妹脊山長柄文臺	六	京傳作	豐國畫
由良湊長者入船	二	雨聲作	月麿畫
女將門七變化粧	六	京山作	春扇畫
乘懸合羽雫仇討	二	山鳥作	國丸畫
天地[illegible]敵討濫觴	三	市二三作	春扇畫
鯆頓兵衛幻草紙	六	三馬作	國滿畫
小町櫻花之面影	三	東里作	國丸畫
女鳴神名歌短冊	六	京山作	清峰畫
妹脊山後之雛鳥	六	同上	美丸重政畫
先讀三國小女郎	六	同上	國貞畫
黑船染姉川頭巾	六	德瓶作	英山畫
敵討仇名物好奇	三	馬琴作	春亭畫
山莊太夫咲分娘	六	京山作	同上
京一番娘羽子板	六	種彥作	重信畫
玉藻前雲井檜扇	五	三鳥作	國次畫
千葉館世繼雜談	六	馬琴作	國貞春扇畫
籠釣瓶丹前八橋	六	京傳作	清峰畫
緣者異物味物好	三	一九作	月麿畫
甲州猿橋之由來	五	關東米作	春亭畫
浮樂鏡忠義見通	三	鬼武作	英山畫
戀女房仇討双六	六	尉輔作	國貞畫

丁子車引手妻琴　三　南北作　春扇書
髭大盡廓之全盛　五　三友作　國次書
敵討又はじまり　三
吾妻育露の荒事　三　三友作　國丸書
十人揃皿之譯續　三　小枝繁作　北岱書
後編『皿屋敷後日燒繼』素秋作にて今年出板す。
行平鍋須磨酒宴　六　馬琴作　春扇書
天保十一年松下樓麓谷(實は畵工貞秀)外題を『藻汐草須磨書替』と改め出板す。
皿屋敷後日燒繼　三　素秋作　豐廣書
前編『十人揃皿之譯續』小枝繁作にて本年の出板なり。
椀久松山歳男金豆蒔　九　京山作　國貞書
無間の鐘傾城道成寺　三　德瓶作　國丸書
今昔宿直物語　六　東子作　同上
昔語丹前風呂　六　三馬作　國直書
女合法辻談義　六　種彥作　清峰書
雷神丸劍稻妻　三　三曉作　美丸書
舊內裡眞鳥譚　六　三馬作　國貞書
梅櫻振袖日記　三　種彥作　國丸書

運輝長者萬燈　二　傳笑作　國長書
傾城道中双六　六　馬琴作　春扇書
戻駕故鄉錦繪　六　京山作　國貞國滿書
孝行雀心竹馬　六　同上　美丸書
天保十年白雲洞主人(實は畵工貞秀)外題を『櫻風呂花之半開』と改め出板す。
姉小谷妹小紅孝婦傳　八　市二三作　國丸書
位山譽橫綱　六　一九作　春亭書
今昔八丈揃　六　京傳作　豐國書
其俤昔八丈　五　京山作　國丸書
江戶水福話　六　三馬作　國滿書
升繫男子鑑　六　京傳作　春扇書
書習廓文章　五　三孝作　國次書
梅若姬物語　六　東里作　春扇書
定紋花輪違　三　慈悲成作　國直書
諺草籠中鳥　五　傳笑作　美丸書
大通人狐幸　三　一九作　同上
釣狐昔塗笠　六　京傳作　國丸書
口繪は歌川豐國筆なり。
春月薄雪櫻　三　三千歲作　春亭書

烏亭焉馬の序文あり。

豐のいろは　三　東子作　國安書

文化六年板『春慶物茶番狂言』の外題替再板なり。

善悪両道夢浮橋　三　一九作　國丸書

赤本再興花咲爺　三　三馬作　同　上

作者は赤本の文法に倣ひ書工は其筆意を寫せり。

○

芼蕚曰、文化の初年破竹の勢を以て戯作の壇上に肉薄し、終に其牙城を陷れて、一旗幟を飜して讀書界を睥睨したる敵討物は、其盛期僅に五六年にして、白旗を樹つるの運命に際會したり、蓋し當時の讀書界に在りては、寛政以來無味淡泊なる、而かも陳腐の洒落口合の戯作や、理窟勝ちの教訓物を無趣味なりとし、他作の新出を希望するの念ありしに乘じ、敵討物の顯はれしかば、拍手を以て一時之を歡迎したるも、歳を重ぬるに從ひ、餘りに其作の殘忍殺伐なるを嫌厭し、且つは千篇一律の作意に倦み、斯かる殺伐ならざる物を作家に要求したるもの丶如し、之に應ずる作者の用意は結局二派に分たれ、一は男女の情話を基礎とし、他は敵討以外の實錄體を作意とし、其孰れが可なるやを、今や讀者に試問するもの丶如し。

文化十癸酉年

作者

關亭傳笑
綠亭可山
式亭三馬　三十九歳
東里山人　二十九歳
山東京山　四十五歳
竹塚東子
山東京傳　五十三歳
柳亭種彥　三十一歳
益亭三友
曲亭馬琴　四十七歳
紫竹堂　五十六歳
振鷺亭
市二三
岡山鳥

東西庵南北
櫻川慈悲成　四十七歲
不眠齋雨聲
梅暮里谷峨　六十四歲
十返舍一九　五十歲
古今亭三鳥
五返舍半九　菓子商にて芝に住し、十返舍一九の門人なり、後深川六軒堀に轉居す。
莊周園花蝶　莊周堂とも號せり。
葛葉山人正二　篠田氏通稱金治、萬壽亭と號す鳳凰軒、戲場家等の號あり、竝木五瓶の門に入り後師號を襲ひ二世竝木五瓶と稱せり。明和五子年に出生し本年四十六歲なり。
醉月梅笑

畫　工

葛飾北嵩
柳川重信　二十七歲
勝川春扇
勝川春亭　四十四歲
歌川豐國　四十五歲
歌川國貞　二十八歲
歌川國直　十九歲
歌川國丸
歌川國房
歌川國滿
喜多川月麿
喜多川美丸
喜多川式麿

板　元

津村屋三郎兵衞
村田次郎兵衞
和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞
鶴屋喜右衞門
丸屋文右衞門
岩戶屋喜三郎
蔦屋重三郎
森屋治兵衞
西村屋與八
河內屋源七　俗稱河源。

丸屋甚八
西宮源六
鶴屋金助
東永堂

雜記

阪東秀佳生る。

五月二十日朋誠堂喜三二歿す、享年七十九、深川淨心寺中一乘院に葬る、辭世あり「狂歌よむ内は手柄の岡持よよまぬだんでは日がらの牡丹餅」

書目

鶴飼石奇瑞 試題目奇特 法花再度咲俊寛　六　可山作　春扇畫
大吉事花兵衛 大内留お三 義本浮世繪抄　三　振鷺亭作　美丸畫
隱家の花兵衛 丸山備太左衛門 大女大嵜 昔大山　三　同上　國丸畫
小野道風 獨鈷駄六 已巳已巳歌字盡　六　三馬作　國直畫
人心鏡寫繪 十體のうち 磯せせりの癖　三　一九作　春亭畫
酒は燗 酌は頬 進本氣戲作日閑　三　東里作　春扇畫
敵討餘世波與佳津多　三　一九作　春亭畫
信州戸隱御擁護奇談　二　傳笑作　國丸畫
紙治小春 後日話 大福帳手代鑑　六　京山作　同上

前編「早引説要集」は文化七年出板なり。

玉屋新兵衛 餘光之事跡 室育花之魁　六　東里作　春扇畫
一人娘 婿八人 七變人縁色絲　三　東子作　國滿畫
宮女菖蒲 遊女眞菰 賴政扇芝樂　三　可山作　春扇畫
鹿子娘八百屋振袖　六　南北作　同上
へまむし入道昔語　六　京傳作　國直畫
奴五斗平名擧瀧水　三　半九作　月麿畫
十返舍一九校とあり。
園梅〆もじの枝振　六　京山作　豐國畫
五情 染分 風流五思氣娘　七　同上　國直畫
玉菊 全傳 天岩戸曙艸紙　六　東里作　同上
折琴姫 宗玄 婚禮累簞笥　五　京山作　同上
薄化粧垣根卯花　六　梅笑作　同上
重井筒娘千代能　六　京傳作　美丸 國丸畫
弓張月筑紫之勳　五　山鳥作　國房畫
朝妻妻柳三日月　六　京傳作
子曳松一夜檢校　六　南北作　國滿畫
鼻木討誓羽團扇　三　東子作　重信畫
吾嬬花歌妓氣質　六　三馬作　國貞 國直畫
浪花瀉夜風濡衣　三　梅笑作　國丸畫

伊勢音頭戀手踊		一九作	月麿畫
富士太郎梅隱家	五	南北作	國丸畫
薄雲櫻古蹟之曙	六	京山作	國直畫
兒ヶ淵櫻之振袖	六	京傳作	同上
十三七ッ月之曙	三	東子作	國丸畫
花吹雪若衆宗玄	六	種彥作	春扇畫
石動丸高野紅葉	三	雨聲作	月麿畫
菅原流淸書草紙	六	一九作	春亭畫
四天王婦女山入	三	三友作	國丸畫
日高川淸姬物語	五	三馬作	國直畫
八面樹鼻の親玉	三	慈悲成作	國滿畫
昔譚宮城野信夫	二	雨聲作	月麿畫

感和亭鬼武校とあり。

二枚續吾嬬錦繪	六	三馬作	豐國畫

一書に文化八年板とあり。

方言修行金草鞋初編	六	一九作	月麿畫
方言修行金草鞋二編	六	同上	
方言修行金草鞋三編	六	同上	
葛葉姿寫磨直大內鏡	六	京山作	國直畫
六合雜劇樂屋すゞめ	二	東里作	美丸畫
海陸兩國往來	三	一九作	美丸畫
無間鐘娘緣記	六	京傳作	豐國畫
安達原氷姿見	六	同上	同上
女達嶋の於勘	六	谷峨作	北嵩畫
魁曾我筆命壽	六	三友作	國丸畫
早便梅川物語	五	京山作	重信畫
耳珠高野長命	三	紫竹堂作	國丸畫
春霞布袋本地	三	種彥作	重信畫
春角力花錦繪	六	京傳作	國丸畫

四の卷は歌川國直の筆なり。

敵討勝乘掛	六	馬琴作	春扇畫
玉柏二人男	三	一九作	月麿畫
昔語本田始	三	三鳥作	國直畫
追善對晴衣	二	花蝶作	國直 春亭畫
錦帶淮無間	六	種彥作	重信畫
合鏡二ッ巴	三	一九作	月麿畫
愛敬紺屋娘	六	正二作	國丸畫
增補忠臣藏	二	雨聲作	式麿畫
傾城高尾傳	六	市二三作	國丸畫
壽茶番狂言	三	慈悲成作	國直畫

洪蘭水揭帳　三　一九作　月麿畫
春花魁曾我　三　三友作　國丸畫
一名を「魁曾我筆命壽」といふ歟。
後編は萬葉山人正二作にて本年出板す。
敵討巖流島　五　一九作　月麿畫
享和元年板の挿畫を改め再板せしなり。
魁曾我後編　二　正二作　國丸畫
前編三冊は三友作にて本年の出板なり。

○

蓜雪曰、本年戲作數種出づるを見る、茲に於て讀者は孰れの作を迎ふるかに迷ひ、又作家は孰れの方面に筆を走せむかに惑ひ、其形勢を觀察して方針を定めむとするものゝ如し。

文化十一甲戌年

作者

東西庵南北
古今亭三鳥
十返舍一九　五十一歲
萬壽亭正二　四十七歲（卽萬葉山人なり）
式亭三馬　四十歲
山東京山　四十六歲
山東京傳　五十四歲
東里山人　三十歲
柳亭種彥　三十二歲
綠亭可山
曲亭馬琴　四十八歲
竹塚東子
春亭三曉
烏亭焉馬　七十二歲
振鷺亭
富山傳光
志滿山人　金子氏通稱惣四郎別號陽岳舍、また腰塊樓と號す、湯島三組町に住居し御小人目附を勤む、幕臣なり、歌川豐國に就て畫を學び自畫作の戲述を出す、後仕を辭して本鄉元町に移居す、志滿山人を以て作名とせり。

畫工

鳥居清峰　二十八歲

柳川重信　二十八歳
勝川春扇
歌川豐國　四十五歳
歌川國直　四十六歳
歌川國貞　二十歳
歌川國丸　二十九歳
歌川國房
志滿山人　通稱金子惣四郎一禮齋と號し歌川豐國門人にして歌川國信と曰へり、志滿山人は作名にて自畫作の戯述多し、後故あり師號一陽齋を特に讓られしと云ふ、尙本年作者の項を參看すべし。
喜多川式麿
喜多川美丸

板元

西宮源六
丸屋甚八
鶴屋金助
蔦屋重三郎
森屋治兵衞
西村屋與八
河内屋源七
和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞
岩戸屋喜三郞
鶴屋喜右衞門

雜記

正月十二日畫工歌川豐春歿す、享年八十、淺草南松山町本立寺に葬る、法號歌川院豐春日要信士。
八月八日三陀羅法師歿す、享年八十四、本鄕元町等正寺に葬る。
十返舍一九其著『金草鞋』第四編及び『膝栗毛』『發端』等に於て、墨川亭雪麿の著『稗史通』を稗史不通なりと喝破し、雪麿を罵倒す。
式亭三馬も亦所著『田舍芝居忠臣藏』第三編の序文三葉を擧げて、馬琴著作の讀本を暗に嘲罵し、馬琴を飜弄揶揄す。
尾上松助名を梅幸と改む。

書目

おつま八郞兵衞　繡谷歌舞妓條書　三　振鷺亭作　美丸畫

おしゆん傳兵衛 水馴棹浮名堀河	三	三鳥作	國丸畫
あづま與五郎 和合神所緣赤繩	五	三馬作	國貞畫
お千代半兵衛 庚申待女房献立	五	京山作	美丸畫
染分手綱尾花孫市 仕合吉輿細道	六	京傳作	國直畫
唐獅子牡丹之助 當升矢筈筋隈	六	同上	美丸畫
萬字屋玉桐燈籠番附	六	三馬作	國直畫
繪半切しもしの文月	五	京山作	同上
趣向は大幟振袖揚卷 若衆の助六	六	東里作	同上
小いな半兵衛 乘合船浪花噂	三	傳光作	同上
娘丹前奴忠衛 堀川唄女籠輿	六	種彥作	重信畫
ゑ生お再樂うき世 夢助魂膽枕	三	三馬作	國貞畫
衣川怪談三俣小說 累摸樣楓襠	六	同上	同上
百合若丸弓勢名譽	三	可山作	美丸畫
江戶形氣女蝶兵衛	六	南北作	同上
黃金花咲陸奧双紙	六	一九作	春亭畫
彥山靈驗毛屋村孝行男	二	同上	美丸畫
葉櫻姬卯月物語	六	東里作	春扇畫
面白黑心學草紙	三	一九作	國丸畫
守護於初天神記	六	正二作	同上
皿屋敷浮名染着	六	馬琴作	清峰畫
磯馴松金絲腰蓑	六	京傳作	豐國畫
成程根殼一九作	三	一九作	國丸畫
赤前垂祇園女御	六	京山作	國直畫
團七島於夏浴衣	六	南北作	春扇畫
驛路鈴與作春駒	六	馬琴作	國貞畫
滑稽穗寶惠美舺	三	東子作	國直畫
已鳴鐘男道成寺	六	馬琴作	豐國畫
都染於花の振袖	六	南北作	國直畫
隅田堤二人連彈	五	三曉作	國丸畫
蘆名辻簑之仇討	六	馬琴作	同上
不動丸劍之威德	三	一九作	國直畫
登客浮世心陽氣	三	東里作	春扇畫
其浦島七世孫助	六	三馬作	國貞畫
旅硯伊賀越日記	二	一九作	美丸畫
妻戀鹿火串端唄	六	三鳥作	國直畫
名總角二人助六	六	三馬作	國貞畫
梅薰筑紫之神垣	三	一九作	式麿畫
の｜進上水引草	三	振鷺亭作	國丸畫
當世織繽紛八丈	六	三馬作	國直畫
妙義靈驗女道草	二	一九作	國丸畫

幡隨法華任俠中男鑑	六	三馬作	國貞畫
不破名古屋稲妻表紙	七	京傳作	豊國畫
古今化物評判	六	焉馬作	國貞畫
今昔宿直物語	四	東里作	美丸畫
隅田春梅若詣	六	京傳作	豊國畫
御無事忠臣藏	三	東子作	國房畫
朝日櫛廓之曙	六	京山作	春亭畫
妻重男葛葉	三	可山作	國直畫
於臍福茶番	四	一九作	式麿畫
踊唄繁花街	三	正二作	國丸畫
會談三組盞	六	京傳作	春扇畫
忍賣對振袖	六	京山作	重信畫
奉納額小三	六	正二作	國丸畫
西都大内鑑	六	馬琴作	同上
無交凝安賣	三	三馬作	國直畫
室育婿入船	六	京山作	同上
女見臺錦蕾	三	志滿山人作	自畫
群鴉祇園林	二	正二作	春亭畫
金草鞋四編	六	一九作	美丸畫
金草鞋五編	六	同上	
金草鞋六編	六	一九作	國丸畫
金草鞋七編	六	同上	

○

葩雪曰、讀者の要求嗜好は、作者の普ねく知悉悟了する所となり、男女の情態を基礎とする世話物淨瑠璃の飜案物と、俠客其他を材とせる實錄物とを以て之に應じ、又滑稽趣味を帶びし戯作も稀に加へられしかば、讀者と作家は調和され、爾來文界に著るしき激浪を見ざるに至れり。

文化十二乙亥年

作者

古今亭三鳥

感和亭鬼武　五十六歳

東西庵南北

十返舍一九　五十二歳

萬壽亭正二　四十八歳

梅暮里谷峨　六十六歳

式亭三馬　四十一歳

橋本德瓶　五十八歳
山東京山　四十七歳
東里山人　三十一歳
山東京傳　五十五歳
春亭三曉
曲亭馬琴　四十九歳
綠亭可山
柳亭種彥　三十三歳
關亭傳笑
富山傳光
德亭三孝
志滿山人
振鷺亭
梅仙女史　山東京山の門人といへるも疑はし、蓋京山の匿名なるべし。
西川光信
岳亭丘山　通稱丸屋斧吉、一書字之吉に作る、八島氏なり、別號定岡、一に陽齋南山と號せり、狂名堀河多樓書名を春信と號し、自畫作の著述を出だせり、始青山久保町に住し後大傳馬町に移居す。

七代目市川團十郎　俳優なり俳名白猿後市川海老藏と改む、其戲作たる大概五柳亭德升及び花笠文京の代作に係る、寛政三亥年を以て生る當年二十五歳なり。

畫工

柳川重信　二十九歳
勝川春亭　四十六歳
勝川春扇
歌川國貞　三十歳
歌川國安　二十二歳
歌川國直　二十一歳
歌川國丸
歌川國信　志滿山人の畫名なり、文化十一年作者並畫工の項參看すべし。
歌川豐國　四十七歳
歌川貞幸　五町亭と號す歌川國貞門人なり。
歌川貞繁　後一雄齋國輝と號す歌川國貞門人なり。
富山傳光　自畫作の册子を出す。
志滿山人　歌川國信の作名なり。
竹齋龍子　葛飾北齋門人なり。

岳亭春信　通稱八島斧吉定岡居と號し岳亭春信を畫名とす、堤秋榮、葛飾北齋及び魚屋北溪等に就て畫法を受くと云ふ、尙本年作者岳亭丘山の條下を參照すべし。

喜多川月麿

喜多川美丸

板元

西宮源六

丸屋甚八

鶴屋金助

森屋治兵衛

河內屋源七

西村屋與八

和泉屋市兵衛

山口屋藤兵衛

岩戶屋喜三郎

村田次郎兵衛

丸屋文右衛門

鶴屋喜右衛門

雜記

八月五日唐來三和歿す、享年六十七、深川淨心寺に葬る、辭世あり「かりの世の地水火風を戾すなり、これで五輪の差引はなし」

八月二十二日鳥居清長歿す、享年六十四。

此頃より草双紙の表紙美を極め從て其價も一匁乃至五匁に騰貴す。

五世鳥居氏淸峰名を二世淸滿と改む。

尾上梅幸三代目尾上菊五郎を襲名す。

書目

三世相應 二世物語 女房氣質おつな赤繩　五　三馬作　國直畫

後篇『合鏡女風俗』五冊文化十三年出版す。

三浦高尾 お房德兵衛 伊達摸樣紅葉襠表　六　德瓶作　春扇畫

ぬれ髮お半 放駒長右衛門 桂川紅葉振袖　六　京山作　國直畫

目出度〳〵し二度目清書　六　東里作　國丸畫

人はみめがただこゝろ 敎草戲言試筆　三　同上　國信畫

三かつ 半七 相合傘屋雨濡事　六　可山作　美丸畫

吾妻 與五郎 新春草紙顏見世　三　振鷺亭作　國直畫

らん蝶 この糸 江戶櫻全盛色里　六　三鳥作　國安畫

女達磨之由來文法話　七　京傳作　豐國畫

睦まし月八百屋門松　六　京山作　國直畫

〔源平外傳〕源太梅ヶ枝物語	六	三鳥作	國直畫
〔龜ヶ瀬敵討〕十三塚之由來	三	鬼武作	國丸畫
〔猪之助若草〕仇競浮名一節	三	三曉作	美丸畫
〔若峠猪之助〕男梅ヶ枝花魁	三	南北作	龍子畫
〔戀の矢齋當り商賣〕息女草履打	六	同　上	春扇畫
〔苅萱道心石童丸〕花競化粧櫻	六	京山作	國信畫
〔先都名將深山怪童〕春山媼花鉞	三	丘山作	春信畫
三人長兵衛譽忠字	三	京山作	國貞畫
往昔者こんな物語	二	一九作	國直畫
大入角力一番太鼓	三	南北作	同　上
三寶荒神二見仇討	三	正二作	春亭畫

一名『操絲駒引錢』

〔お夏清十郎〕中昔戀道種	三	一九作	美丸畫
男達鹿子劇兵衛	六	正二作	春亭畫
異魔昔於露雜談	六	三馬作	國直畫
昔今猿之人眞似	三	傳笑作	國丸畫
龜王丸聆之嶋臺	六	馬琴作	國直畫
猿猴著聞水月談	六	京傳作	同　上
本朝育戲作淸書	三	三鳥作	美丸畫
冬編笠由緣月影	六	京山作	國直畫
赫奕姫竹節話說	六	馬琴作	重信畫
繪看板子持山姥	九	京傳作	豐國畫
敵討先程御笑草	三	一九作	月麿畫
芝居好家內安全	二	振鷺亭作	國丸畫
草履打所緣色揚	六	京傳作	美丸畫
兩面摺娘年代記	六	京山作	國貞畫
娘淸玄振袖日記	六	京傳作	豐國畫
比翼紋日黑色揚	六	馬琴作	同　上
夏が文開水無月	六	京山作	同　上
廓薰曲輪の梅川	五	三鳥作	貞幸畫
簑屋笠屋花雪降	六	南北作	豐國畫
籠釣瓶出世鯉口	六	京山作	國直畫
女護島恩愛俊寬	六	馬琴作	同　上
松春色出世景淸	三		同　上
春霞繼穗之梅枝	六	三鳥作	同　上
不死无止慾世界	二	一九作	國丸畫

文化十三年にも再板せりと云ふ。

十六利鑑略緣起	三	京傳作	豐國畫

寬政十一年板「京傳主十六利鑑」の改題再板なるべし。

比翼紋吾妻模様	二	梅仙女作	美丸畫

山東京山序文並校とあり。

正本製於仲清七	六	種彦作	國貞畫

天保五年再板せり。

此作は「偐紫田舍源氏」と共に種彦の名作なり。

伊達道具鳥羽累	六	七世團十郎作	國貞畫

此代作者詳ならず。

きく累返々壽草紙	六	東里作	春扇畫
昔々赤地法印	二	一九作	國丸畫
夏浴衣團七島	六	谷峨作	同上
蒲原入道蜀魂	二	一九作	美丸畫
女戯場時世粧	六	三馬作	國貞畫
女文字續文章	六	正二作	國丸畫
片言雜話田舍講釋	二	東里作	國信畫
梅川忠兵衛戀初旅	二	一九作	國丸畫
國性爺倭話	六	南北作	貞繁畫
滑稽樹鳥囀	二	種彦作	國丸畫
盛衰二筋道	二	一九作	春亭畫
敵討朝顏鏡	六	正二作	同上
假遊廓山門	三	傳光作	自畫
初暦歲德若	三	可山作	貞繁畫
都鳥吾妻育	三	三孝作	國直畫
姥池汀山吹	四	南北作	同上
拵伏見人形	三	正二作	春亭畫
通神百夜車	二	光信作	國安畫
戻駕再合肩	三	丘山作	春信畫
操絲駒引錢	三	正二作	春亭畫

一名「三寶荒神二見仇討」

破算女行列	六	團十郎作	春亭畫

此代作者詳ならず。

莿萱物語	六	志滿山人作	自畫

文化十三丙子年

作者

振鷺亭
梅仙女史
東里山人　三十二歲
志滿山人
橋本德瓶　五十九歲

山東京傳　五十六歳
曲亭馬琴　五十歳
緑亭可山
式亭三馬　四十二歳
山東京山　四十八歳
柳亭種彦　三十四歳
烏亭焉馬　七十四歳
古今亭三鳥
東西庵南北
市川團十郎　二十六歳（七代目）
十返舍一九　五十三歳
萬壽亭正二　四十九歳
玄光亭金聲　通稱金次郎志滿山人の門人ならむ歟。
五柳亭德升　關根氏通稱豐島屋甚藏戲樂と號す、鎌倉河岸の紙商なりしが後貸本商に轉じ、次で講談師典山の門弟となり呑耕師山樂と稱せしが、暫時にして之を罷め、御納魚所の書役となり、傍戲作を出だし五柳亭德升を作名とし、又俳優の代作を爲せり、寛政五丑年に生れ本年二十四歳なり。
一筆庵可候　池田氏名は義信字は英泉通稱善次郎後ち里介と改む、無名翁、玉春、櫻北亭等と號し又狂言作者となりて千代田才市と呼べり、畫名を溪齋英泉と曰ひ一筆庵可候を作名とす、茅場町植木店に住し後根岸に轉せり、其出生寛政四子年にして當年二十五歳なり。
樂齋山壽　鹽場氏名は林信通稱晋米藍亭と號す、一に米齋、晋米とも號せり後藍亭晋米、又は晋米齋玉粒と改號し文政八年二世司馬全交を襲名せり、始馬喰町四町目に住し後大傳馬町新道に轉居す、安永四未年出生にて本年四十二歳なり。
扇島德秀　橋本德瓶の門人なるべし。
中村芝翫　俳優芝翫は三代目中村歌右衛門の俳名なり、後梅玉と改む、家號を加賀屋と稱す、故を以て世に加賀屋梅玉または梅玉歌右衛門と呼ばれ梨園界の名手と稱せらる。後狂言作者となり金澤龍玉と曰ひしが、大阪に於て歿せり、中村歌右衛門の名を以て戲作の册子を出すも、花笠文京、墨川亭雪麿及び二世烏亭焉馬等之を代作せり、安永七戌年を以て生れ本年三十九歳なり。

畫工

勝川春扇
勝川春亭　四十七歳
柳川重信　三十歳
歌川豐國　四十八歳
歌川國貞　三十一歳
歌川國直　二十二歳
歌川國信
歌川國丸
歌川貞繁
歌川國芳　伊草氏通稱芳三郎後孫三郎に改む、號は一勇齋また朝櫻樓と號す、始め勝川春英の畵風を慕ひしが終に歌川豐國の門に入り其高足たり、常に國貞と伍角の勢力を持して時に龍虎の觀ありしといへり、始め白銀町二町目に住せしが兩國米澤町、長谷川町等に移り後に居を玄治店に定む、其出生寬政九巳年十一月十五日にして本年廿歳なり。
溪齋英泉　其小傳本年作者、筆庵可候の條下に記せり、菊川英山の門下に出で、本年二十五歳なり。
竹齋龍子
志滿山人　卽ち歌川國信なり。

板　元

喜多川美丸
鶴屋喜右衞門
丸屋文右衞門
山口屋藤兵衞
和泉屋市兵衞
岩戶屋喜三郎
河內屋源七
西村屋與八
森屋治兵衞
鶴屋金助
丸屋甚八
西宮新六

雜　記

九月七日山東京傳歿す、享年五十六、本所回向院に葬る、法號辨覺智海京傳居士。
此頃畵工喜多川式麿歿す。
○
伊豫染流行す。

書　目

歌の唄歌は蝶子の拍御／琴の調子は花洛の文藏 孫天狗俳諧 六 芝甑作 春亭畫
色と酒慾は／敵か花の頃 浮世街道敎近道 三 東里作 美丸畫
奥州大悲山利益／吉名村孝士玉市傳記 大蛇物語 二 美丸畫／國信畫
十返舍一九校とあり。
朝比奈藤兵衛／笑木藤兵衛 女曾我兄弟鏡 三 志滿山人作 自畫
夕陽伊左衛門／筑紫の權六 當磐松艷櫻草 六 德甁作 貞繁畫
竹井甚五郎／達衞於六 長髮姿蛇柳 六 京傳作 國貞畫
宮城の信夫／軍七の黑平 圍碁白市話 六 山壽作 國直畫
熊坂長兵衛／金賣於吉 花盛雛獻立 三 三鳥作 美丸畫
小ひな／半兵衛 紅仕立女達磨 六 南北作 重信畫
敵討 鹿島宮笥潮來節 三 德秀作 貞繁畫
橋本德甁の序文あり。
手鞠唄三人長兵衛 六 馬琴作 國貞畫
化納歌右衛門草紙 三 南北作 春亭畫
安倍晴明辻古草紙 二 東里作 國信畫
一軒八百屋娘姉妹 六 可山作 美丸畫
小倉山子／彦惣頭巾 大礒俄練物 六 京傳作 豐國畫
女房氣質／後篇 合鏡女風俗 五 三馬作 國直畫
前編一女房氣質おつな赤繩一五冊は文化十二年出板なり。

おはつ／德兵衛 路雪柳腰帶 六 京山作 美丸畫
法文通／書物語 松浦佐與姫 五 東里作 同上
お房／德兵衛 敎文女筆始 三 志滿山人作 自畫
むかし／がたり 丹波乃小雪 三 正二作 春亭畫
正本製／二編 小稻半兵衛 六 種彦作 國貞畫
梅幸茶婀娜染色 六 三馬作 同上
二人若衆對紫色 六 京山作 春亭畫
花紅葉一對若衆 三 種彦作 重信畫
梅與櫻二人權八 六 南北作 同上
子寶船七人兄弟 六 京山作
天岩戸初日門松 六 南北作 龍子畫
松春邊出世景清 三 山壽作 國直畫
二蝶々業花草紙 六 南北作 豐國畫
黄金花萬寶全書 六 京傳作 重信畫
綱手車花の藤澤 六 南北作 美丸畫
比翼紋紫の腰帶 二 梅仙作 國丸畫
忠臣藏曾我物語 二 山壽作 同上
靈應玄話御法花 三 一九作 國直畫
中將姫蓮之絲織 六 東里作 春扇畫
土蜘太郎一代話 六 南北作 同上

茶番狂言初子待	二	一九作	國丸畫
大時代唐土化物	三	振鷺亭作	春亭畫
あな手本通臣藏	二	焉馬作	國丸畫

表紙の畫は勝川春亭の筆なり。

色紙短冊名歌の重寶	三	金塁作	國信畫

志滿山人校とあり。

石井藤田姉輻龜山染	六	七世團十郎作	春亭畫

五柳亭德升之を代作す。

女摸樣稻妻染	六	種彥作	重信畫
開運牡丹餅男	二	一九作	國直畫
馬鹿多譯合鑑	二	東里作	豐國畫
蝶千鳥曾我傑	六	京傳作	國貞、國直、國芳合畫
熊王昔物語	二	志滿山人作	自畫
琴聲美人傳	六	京傳作	豐國畫
石枕春宵抄	七	同上	同上
花曇春朧夜	五	可候作	英泉畫
艶姿吉彌結	六	正二作	春亭畫
大當桂月弓	三	三馬作	國丸畫

○

蓏雪曰、二三年以前より二種以上の話說を組合せし卽ち「なひませ物」の著作多くなりぬ、此例年を經るに從ひ益々盛んとなれり。

文化十四丁丑年

作者

振鷺亭
志滿山人
柳亭種彥　三十五歲
橋本德瓶　六十歲
式亭三馬　四十三歲
曲亭馬琴　五十一歲
山東京傳　去年五十六歲の作本年出板。
岳亭丘山
綠亭可山
東里山人　三十三歲
福亭三笑
山東京山　四十九歲
東西庵南北
五柳亭德升　二十五歲

萬壽亭正二　五十歳
十返舍一九　五十四歳
五返舍半九
古今亭三鳥
感和亭鬼武　五十八歳
紀夏海　姓は平、紀氏にして名は夏海字は靜臧安瀾堂と號し狂歌を能くす佐渡相川に住す畫名を石齋と曰ひ自畫作を出せるも本年たゞ一種あるのみ。
茗溪庵　本鄉御茶の水に住す、故に茗溪庵を以て作名とせり。
澤村曙山　俳優なり、幼名鐵之助三代目澤村宗十郎の次男なり、文化八年二代目澤村田之助を襲名し曙山と號す、天明五巳年に生れ本年卅三歳著述は果して自作なるや疑はしけれど代作者詳ならず。
一亭穴狐　志滿山人の匿名歟。
陽齋南山

畫工

勝川春扇
勝川春亭　四十八歳
岳亭春信
柳川重信　三十一歳
歌川豐國　四十九歳
歌川國貞　三十二歳
歌川國芳　二十一歳
歌川國丸
歌川貞繁
歌川國重　通稱源藏一龍齋と號す、別號は後素亭歌川豐國門人なり、師の歿後二世歌川豐國と稱せしも、故ありて改名し歌川豐重と曰へり、後本鄉三丁目に陶器商を營めり、世に本鄉豐國または源藏豐國と呼ばれ國貞の龜井戸豐國（卽ち三世）と區別せらる、安永六酉年に生れ當年四十一歳なり。
志滿山人　卽ち歌川國信なり。
喜多川美丸
喜多川月麿
紀夏海　畫名石齋本年作者の項參照すべし。
歌川國信　卽ち志滿山人なり。

板元

和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞

岩戸屋喜三郎
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門
河內屋源七
西村屋與八
森屋治兵衛
丸屋甚八
鶴屋金助
西宮新六

雜記

二月山東京傳の古机を淺草奥山に瘞め碑石を樹つ

正月二十八日二代目澤村田之助（曙山）歿す、享年三十三、淺草誓願寺中受用院に葬る。

十一月中村座顏見世狂言の棧敷に於て、宿屋飯盛狂歌堂眞顏（戀川好町）と和す、四方山人之が調停者たり。

書目

清彦獨三郎兵衛 双岩園主郎狙 小萬呂双生種蒔 夏海作 自畫
しやらりん ふらりん 二八十六 打掛蠻療治 二 振鷺亭作 春亭畫
關小まん 丹波與作 竹春駒心之引綱 六 志滿山人作 自畫
己惚鏡の藝者 十寸鏡の全盛 傾城草履打 六 南北作 重信畫
けいこや小萬 やつこの小萬 五大力海賊 六 德升作 國貞畫
正本製 三編 當歳積雪白標紙 九 種彦作 同上

一名『顏見世物語』

鏡山 絲櫻 初春繪草紙番附 六 德瓶作 貞繁畫
龍神戀護 河童相傳 名立浪金作 三 正二作 美丸畫
五色潮來婀娜合奏 六 三馬作 國貞畫
伊達摸樣判官贔負 六 馬琴作 豐國畫
五大力 書直筆の輔制 三 種彦 者溪庵 合作 美丸畫
仕方 ばなし 屋津天御覽 三 一九作 春亭畫
お亀 與兵衛 鉢植物見松 三 正二作 同上
近松門 左衛門 曾我昔狂言 三 種彦作 國貞畫

本書は近松翁作の淨瑠璃『曾我多遊染』の趣向を其儘に修辭すと云ふ。

氣替而戲作問答 六 京傳作 豐國畫
鼠盤十二子金銀 二 半九作 月麿畫
鴨戸越出世島鯛 六 南北作 重信畫
福祿壽黄金釜入 六 同上 美丸畫
寄愛度金貢事 六 南山作 春信畫
百物語長者萬燈 六 馬琴作 春扇畫

福德三人呑氣話	二	三馬作	國重畫
七綾人笑爾吳竹	六	春信作	自畫
七綾化將門系譜	六	可山作	美丸畫
伊豫簀垂女純友	六	馬琴作	春扇畫
物見之松女熊坂	六	東里作	同上
女仇討菩薩角髪	三	鬼武作	美丸畫
高野山萬年草紙	六	種彥作	重信畫
伊勢道中戀紀行	六	南北作	春扇畫
夏祭衣裳分模樣	三	三笑作	春亭畫
市川流三升指南	三	南北作	貞繁畫
袖の梅月土手節	六	京傳作	豐國畫
世事第一口輕業	二	振鷺亭作	國丸畫
忠孝義理之詰物	六	種彥作	重信畫
宿の花朝顏物語	六	曙山作	國貞畫
四季花黃金鉢植	三	南北作	貞繁畫
織分浪花梅ヶ枝	六	東里作	美丸畫
古今彥惣昔唄猿狂言	六	京山作	重信畫
萬福長者音能寶入船	三	正二作	春亭畫
戀寶昔語契情畸人傳	五	三馬作	重信畫
人心播野莊子	三	京山作	美丸畫
はこぬき力男	三	一九作	春亭畫
桃太郎寶撰取	二	半九作	月麿畫
吾妻花娘氣質	六	京山作	重信畫
盤州將棊合戰	六	馬琴作	春扇畫
落噺機嫌上戶	三	一九作	國丸畫
一名「滑稽機嫌上戶」			
お夏清十郎曆對盃	三	志滿山人作	國信畫
鶴山後日囀	六	馬琴作・	國貞畫
東振浪花女	六	南北作	春扇畫
天人羽衣松	二	南山作	春信畫
艷容歌妓結	七	三馬作	國貞畫
娘歌舞留多	三	德瓶作	國芳畫
於琴通酒豐	二	穴猛作	國信畫
昔唄戀山崎		三笑作	春亭畫
化物大福餅	二	半九作	月麿畫
八當天保話	二	德瓶作	國丸畫
顏見世物語	九	種彥作	國貞畫
一名「當歲積雪白標紙」即ち正本製第三編なり。			
滑稽機嫌上戶	三	一九作	國丸畫
一名「落噺機嫌上戶」			

薮助風話　二　一九作　國丸畫

○

蓜雪曰、當年新作のうち縁喜に因める數種の戯作あるを見る、作者の意氣期せずして同時に同種の作を出す、また奇なりといふべし。

文政元戊寅年（文化十五年改元）

作者

東西庵南北

櫻川慈悲成　五十二歳

十返舍一九　五十五歳

山東京山　五十歳

東里山人　三十四歳

志滿山人

梅山人南北　氏名詳ならず東西庵南北の別號歟。

仙鶴堂　通稱鶴屋喜右衛門通油町の書肆なり、著作は他人の代作に係りて自著にあらず、天明八申年に生れ本年三十一歳なり。

三巴亭青江　通稱西村與八馬喰町の書肆なり、書林鱗形屋孫兵衛の男西村屋の養嗣となり二代目與八を襲ぐ、素より自著に非ず、されど代作者の名今詳ならず。

三亭春馬　通稱大文字屋市兵衛村田氏柿園と號す別號を文尙堂虎圍、又花街樓といへり吉原の娼樓なり、三浦若海の男にして大文字屋の養嗣となり村田氏を冒す、狂名加保茶裏成後元成と改む十返舍一九の門に入り九返舍一八と號し又式亭三馬の門人となり三亭春馬と號す、後二世八文字屋自笑と呼びしも行はれず、其後故ありて離縁となり山谷に住し質商を營み又三世十返舍一九と號したり。

畫工

梅山人南北　東西庵南北の別號にや、本年自畫作の草紙を出せり。

勝川春扇

歌川豐國　五十歳

歌川國貞　三十三歳

歌川國直　二十四歳

歌川國丸

志滿山人　歌川國信の作名なり。

板元

鶴屋喜右衛門
丸屋文右衛門
和泉屋市兵衛
西村屋與八
森屋治兵衛
鶴屋金助
丸屋甚八

雜記

二月二十一日感和亭鬼武歿す、享年五十九、此頃竹塚東子歿す。

書目

敵討二挺三味線	六	南北作	春扇畫
卽席大津繪山來	二	慈悲成作	國丸畫
辻法師當物双紙	三	梅山人作	自畫
四竹節二人白囃	六	南北作	春扇畫
筆始清書双紙	六	春馬作	國貞畫
息子の穴違人	二	一九作	國丸畫
腹中名所圖會	六	京傳作	國直畫

山東京山補とあり。

仙術獨稽古	二	一九作	春扇畫
寳船黄金梯	三	東里作	春扇畫
桂川那閑書	六	京山作	國丸畫
餘計の仕事	三	東里作	春扇畫
錦島替釣船	六	志滿山人作	自畫
七福神脩記	二	一九作	國直畫

文化三年板の再出なり。

繪本千本櫻		仙鶴堂作	豐國畫

曲亭馬琴の序文あり。
此冊子曲亭馬琴代作す。

古道具昔話	三	三巴亭作	國丸畫

一名「道具屋十七兵衛」
誰人かの代作なるべし。

□

蘢亭曰、今年出板の新著頗に其數を減せしは頗る不審なり、本書に脫漏せし所の物或はあるべし、されど實際に於ても蓋し出板數尠少なるべし、但し其原因を審にせず。

文政二己卯年

作　者

茗溪庵
福亭三笑
式亭三馬　四十五歳
東里山人　三十五歳
柳亭種彥　三十七歳
曲亭馬琴　五十三歳
山東京山　五十一歳
志滿山人
十返舍一九　五十六歳
東西庵南北
古今亭三鳥
玄光亭金壘
萬葉散人正二　五十二歳（卽萬壽亭正二なり）
晉米齋玉粒　四十五歳（文化十三年樂齋山壽の項參看）
月光亭松樹　別號笑壽畫工勝川春扇の妻女にして芝神明町に住せり。

畫　工

勝川春扇
勝川春亭　五十歳
歌川豐國　五十一歳
歌川國貞　三十四歳
歌川國安　二十六歳
歌川國直　二十五歳
歌川國丸
歌川國信
歌川貞繁
志滿山人　歌川國信なり。
喜多川美丸
十返舍一九　五十六歳
東西庵南北　文化五年作者の項を參看すべし。
二世勝川春好　勝川春扇の襲名せしなり。

板　元

和泉屋市兵衛
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門
岩戸屋喜三郎
西村屋與八

森屋治兵衛
丸屋甚八
鶴屋金助
西宮源六
山本平吉　芝口町河岸角に住し榮久堂と號す、屋標は鍵山形の下に久の字なり、天保初年頃日本橋葭町親父橋角に移店せり。

雜記

二月十一日北尾重政歿す、享年八十一。
七月七日萬葉山人正二（二世鈍木左膳）歿す、享年五十二、深川靈巖寺中正覺院に葬る法號善覺淨光居士、一に鈍木舍萬葉居士と稱す、辭世の句あり
「秋や今淸しと桐の一葉散る」
七月二十六日勝川春英歿す、享年五十八、淺草本願寺中善照寺に葬る
十月振鷺亭歿す、川崎驛大德寺に葬る。
京傳歿後三年を距て今年曲亭馬琴「蜑傳母記」を草し京傳が家庭の秘事を暴露す。

○

此頃「いつもお若いネ」といへる言葉流行す。

書目

お鶴が孝行亀吉が忠信萬福長者出世藏　三　三馬作　國貞畫
よしつね伊之助團花瀬戸草紙　六　東里作　春扇畫
湯尾餅採竹子由來　六　一九作　國直畫
播州佐用稻荷來由　四　同上　同上
國字小說三蟲拇戰　六　種彥作　國貞國丸畫
八百屋料理當年青物語　三　一九作　自畫
雪黄身替鉢之木　六　馬琴作　春扇畫
隅田春藝者容氣　六　京山作　豐國畫
其面影二葉丹前　六　東里作　春扇畫
胡蝶之夢幻物語　六　同上　同上
花上野譽之石碑　五　玉粒作　國丸畫
百合若軍法鐵櫻　六　志滿山人作　自畫
金王櫻鬼之鉢植　三　東里作　春亭畫
杉酒屋妹脊山々　六　正二作　國丸畫
蝙蝠羽織昔通人　六　南北作　春扇畫
信州繼食橋由來　六　一九作　國直畫
山吹長者戀物語　三　東里作　國丸畫
於初德兵衛戯遊　三　三鳥作　美丸畫
一名『初遊深川新話』

注文そめ滑稽多新形	三	東里作	美丸畫
於花半七狐拳の濫觴	三	茗溪庵作	國安畫
柳亭種彥校とあり。			
一の富當り眼	三	一九作	國直畫
千瀨川一代記	六	種彥作	國貞貞繁畫
於妻八郎兵衛	六	南北作	春扇畫
初遊深川新話	三	三鳥作	美丸畫
一名『於初德兵衛船遊』			
增補忠臣藏	六	玉粒作	豐國畫
春海月玉取	六	馬琴作	同上
本草盲目集	三	南北作	自畫
合鏡女俊寬	六	松樹作	春扇畫
累辭絹川堤	二	三笑作	春亭畫
化物年代記	二	玉粒作	國丸畫
夢合反魂香	三	正二作	國直畫
二世之浦島	二	金墨作	國信畫
歸咲古鄉錦	二	一九作	國直畫
瀧登黃金鱗	六	南北作	春扇畫
小紫權八	六	松樹作	二世春好畫

文政三庚辰年

作者

市二三
綠亭可山
柳亭種彥　三十八歲
福亭三笑
式亭三馬　四十六歲
山東京山　五十二歲
曲亭馬琴　五十四歲
東里山人　三十六歲
志滿山人
十返舍一九　五十七歲
古今亭三鳥
東西庵南北
晉米齋玉粒　四十六歲
月光亭松樹
玉亭光娥　柳亭種彥の門人ならむ。
二世戀川春町　戀川行町の襲號なり、寛政元年行町の項參看すべし。

畫工

勝川春亭　五十一歳
勝川春扇
柳川重信　二十四歳
歌川豐國　五十二歳
歌川國貞　三十五歳
歌川國重　四十四歳
歌川國安　二十七歳
歌川國直　二十六歳
歌川國丸
歌川國信
歌川廣重　安藤氏通稱德太郎、のち十兵衛と改め、更に又德兵衛と改む、一立齋と號し又立斎とも號せり、始め狩野派を學び後ち歌川豐廣の門に入れり、もと幕府の小吏にして大鋸町に住み次で常盤町に移り、後に中橋狩野新道に轉居せり、寛政九巳年に生れ當年二十四歳なり。
喜多川美丸
二世北尾重政　喜多川美丸の襲名せしなり。

板元

西宮源六
山本平吉
丸屋甚八
鶴屋金助
森屋治兵衛
西村屋與八
岩戸屋喜三郎
和泉屋市兵衛
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門

雜記

八月三日畫工勝川春亭歿す、享年五十一。
九月二十日窪田俊滿歿す、享年六十四、淺草正覺寺に葬る、法號善譽尚左俊滿居士。
一　當時「ちよーちよ靜にさし込め」といふ囃子ある唄流行す。

書目

お妻八郎兵衛時雨之嚢篋　三　可由作　美丸畫
忠臣藏二度目講釋　六　二世春町作　國安畫

大江山酒顚童子誕	六	一九作	國直畫
正本製四編 おきく幸助 七役草紙	六	種彥作	國貞畫
蘭蝶此糸 一箇裂手綱紫	六	同　上	同　上
お駒才三 仕立機昔八丈	三	三笑作	春亭畫
三人若衆獨權八	六	南北作	重信畫
松竹梅女水滸傳	十三	三馬作	國貞畫
籠細工竹取物語	六	馬琴作	春扇畫
四季物語廓寄木	六	三鳥作	美丸畫
梅主由兵衞頭巾	六	南北作	春扇畫
桔梗辻千種之衫	五	種彥作	國貞畫
安達原秋之錦木	六	馬琴作	豐國畫
月夜好於玉ケ池	六	同　上	同　上
淺間嶽煙之姿繪	六	種彥作	重信畫
うしろ面盆見鏡	三	玉粒作	美丸畫
七變化宿直荒事	六	松樹作	春扇畫
兄弟邂逅雨劍德	三	市二三作	美丸畫
弘法大師誓筆法	六	馬琴作	國貞畫
信田妖手白猿牽	六	同　上	豐國畫
鶴千年對面曾我	二	二世春町作	國重畫

此書「戀染木手管苧環」と合本にて出板せり。

碁太平記白石噺	五	三馬作	國貞畫

寬政七年並寬政八年板の前後二編を合し再板せしなり。

戀染木手管苧環	二	二世春町作	國重畫

此書『鶴千年對面曾我』と合本にて出板せり。

赤繩奇話 朝櫻曙草紙	二	京山作	國丸畫
畫傀儡雨面鏡	六	種彥作	國貞畫
化物世帶氣質	二	玉粒作	美丸畫
闇道女自來也	六	東里作	春扇畫
金草鞋十一編	六	一九作	國丸畫
黑白論濱眞砂	五	志滿山人作	國信畫
昔噺桃太郎	二	一九作	國貞畫
風流女舟前	四	志滿山人作	國信畫
合鏡對振袖	六	南北作	國貞畫
南色梅早咲	六	種彥作	二世重政畫
音曲情絲道	三	東里作	廣重畫
昔噺舌切雀	二	一九作	國貞畫
敵討闇夜烏	六	東里作	春扇畫
相撲勝負附	三	一九作	國直畫
滑稽當座帳	六	同　上	美丸畫

傾城客問答　三　東里作　春扇畫
金草鞋十編　六　一九作　美丸畫
色男大安賣　五　同上　春扇畫
奇哉男一家　三　光娥作　國丸畫
　柳亭種彥序文並校とあり。
　翌文政四年東里山人に本書と同趣向の作あり「安達原男一軒家」即是れなり。
額之小三　二　三笑作　春亭畫
金持評判　三　一九作　國直畫

文政四辛巳年

作者

茗溪庵
山東京山　五十三歲
福亭三笑
春亭三曉
柳亭種彥　三十九歲
曲亭馬琴　五十五歲
式亭三馬　四十七歲
烏亭焉馬　七十九歲
三亭春馬
綠亭可山
東里山人　三十七歲
志滿山人
萩原秋華
浮世喜樂　六十四歲（即橋本德瓶なり）
晋米齋玉粒　四十七歲
十返舍一九　五十八歲
東西庵南北
一筆庵可候　三十歲
五柳亭德升　二十九歲
二世戀川春町
月光亭笑壽　即月光亭松樹なり。
東福亭宮守　西宮氏通稱新六、本材木町二町目の書肆なり、西宮庵と號す又樂亭西馬、福亭綠馬等の別號あり、式亭三馬の門に入り戲作を出し又俳優の代作をなせり、文政十二年烏有の災に罹り家衰へ、京橋水谷町に移住して家主となり、名を久兵衛と改め備書の傍戲作をなせり、其出生寛政十一未年

にして本年二十三歳なり。
萍亭柳菊　別號柳屋菊彦、柳亭種彦の門人なり。
欣堂間人　通稱貞次郎向榮樓と號す、神田白壁町の質商なり、別號本蝶樓壽仙、始狂言作者となり松井寶作と呼び後寶田壽助と改む、欣堂間人及び本蝶山人の號を戯作名となす、又欣堂閑人とも記せり、寛政七卯年を以て生れ本年二十七歳なり。
市川團十郎　三十一歳（七代目）
三代目市川門之助　俳優なり、幼名辨松後男寅と改め、次で三世市川門之助を襲ぎ俳名を新車と曰ふ、市川男女藏の男にして寛政六寅年に生る本年二十八歳なり。
松朝女　櫻川慈悲成の女なり。

畫工

溪齋英泉　三十歳
勝川春亭　去年五十一歳の畫なるべし。
勝川春扇
歌川豐國　五十三歳
歌川國貞　三十六歳
歌川國安　二十八歳
歌川國直　二十七歳
歌川國信
歌川國丸
歌川廣重　二十五歳
歌川貞房　五亀亭と號す、横川町瓦師の男にて歌川國貞門人なり。
歌川芳信　歌川國芳門人なり。
志滿山人　卽ち歌川國信なり。
柳川重信　三十五歳
喜多川美丸
二世北尾重政　卽ち美丸なり。
二世勝川春好　卽ち春扇なり。

板元

鶴屋金助
丸屋甚八
山本平吉
西宮源六
森屋治兵衛
西村屋與八
伊藤屋與兵衛

和泉屋市兵衛
岩戸屋喜三郎
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門

雜記

九月三日梅暮里谷峨歿す享年七十二麻布古川曹溪寺に葬る法號乘蓮信士
市村家橘十二代目市村羽左衛門を襲ぐ。

書目

高尾かされ昔々あつた土佐節　六　京山作　國丸畫
お園六三仇文字ともしの留筆　三　三笑作　春亭畫
小比奈半兵衛浪の花月難波江　三　三曉作　國直畫
小かん平兵衛東餝錦額無垢　五　種彦梅彦合作　美丸畫
おはん長右衛門桂川戀佗濃　三　茗溪庵作　國直畫
あてたくかしく六三が文章　六　馬琴作　豐國畫
二代尾上忠義傳鏡山舊錦繪　五　玉粒作　國貞畫
高師直實傳小夜衣物語　六　一九作　同上
封文惠方吉書初　六　京山作　豐國畫
寶珠玉岩井模樣　六　南北作　重信畫
時花摸樣山禰染　六　三馬作　國貞畫
色も青山鶫萩澤　六　種彦作　國貞畫
東鑑由縁之奏見　五　欣堂閒人作　國丸畫
東海道小夜白浪　六　宮守作　同上
富士淺間雪の曙　六　笑壽作　春扇畫
娘修行者花道記　六　種彦作　國貞畫
光明眞言誓仇討　五　三曉作　國直畫
山洞流惡玉狂言　三　喜樂作　國丸畫
南國由見世物語　四　焉馬作　貞房畫
源氏山小金軍配　六　笑壽作　二世春好畫
宮戸川三社網船　六　馬琴作　豐國畫
合三國小女郎狐　六　種彦作　重信畫
娘金平昔繪草紙　六　同上　國貞畫
十種香萩の白露　五　東里作　國直畫
花街に寄戀白浪　五　可候作　英泉畫
茶漬腹名寄評判　二　荻聲作　美丸畫
鶴子寶常磐松枝　四　門之助作　豐國畫
　何人かの代作なるべし。
御三味線間爪彈　五　七世團十郎作　芳信畫
　五柳亭德升之を代作す。
安達原男一軒家　六　東里作　國直重信畫

文政三年光娥作『奇哉男一ッ家』と同趣向にて而も外題まで似通しは奇なり。

浮世形六枚屏風　六　種彦作　豐國畫

此書西暦千八百四十年(弘化四年)墺地利維也納に於て墺文に飜譯せられ出板せり。又明治二年東京に於て本書を英文に飜譯し、別に譯本一冊と共に四方梅彦之を出板せり、孰れも木板摺にて英譯本は紙數二十葉、又邦文の書は四十五葉あり、英文の彫板珍らしき時代なるに巧に成効せし苦心察すべし、二書孰れも梅彦の藏板なり。

嘘氣傳來開卷未來記　五　東里作　美丸畫

七小町盛衰記桃花流水　五　可候作　英泉畫

敵討船玉物語　三　松朝女作　國信畫

關亭傳笑補とあり。

飜案道中双六　六　種彦作　國貞畫

娘狂言三勝噺　六　同　上　同　上

天保十年再板せり。

成程鹽梅餘詩　二　春馬作　國安畫

守屋大臣太子物論　五　志滿山人作　自　畫

傾城盛衰記　六　種彦作　國直畫

女刈萱物語　六　東里作　二世春好畫

女灘右衞門　六　南北作　同　上

小說由井濱　六　京山作　國貞畫

葱賣對花籠　五　種彦作　同　上

絲櫻花振袖　六　可山作　春亭畫

戀衣仙女薫　二　二世春町作　二世重政畫

伏見常磐　二　種彦作　國貞畫

熊坂物語　二　同　上　廣重畫

高尾全傳　六　東里作　豐國畫

文政五壬午年

作　者

茗溪庵

神屋蓬洲

式亭三馬　四十八歲

柳亭種彦　四十歲

礫川南嶺

樂亭西馬　二十四歲(卽北龜亭宮守なり)

烏亭焉馬　八十歲

曲亭馬琴　五十六歳
萍亭柳菊
綠亭可山
山東京山　五十四歳
山東京傳　遺稿
欣堂間人　二十八歳
東里山人　三十八歳
志滿山人
蘭香亭薫　五十四歳（寛政十一年楮香保留參看すべし）
晋米齋玉粒　四十八歳
月光亭笑壽
東西庵南北
十返舍一九　五十九歳
市川團十郎　三十二歳（七代目）
墨川亭雪麿　田中氏通稱善三郎敬丹舍と號す、越後高田の藩臣にして江戸に住す、畫を喜多川歌麿に學び、著作は柳亭種彦を師とせるもの﹅如し、寛政九巳年を以て生れ本年二十六歳なり。
爲永春水　佐々木氏名貞高通稱越前屋長次郎、後鷦鷯正輔と改む、狂訓亭と號す、性來近眼なるを以て世人綽號して眼長と呼べり、住所を轉ずること數次、始橋町に住し次で通油町に移り又辨慶橋に轉じ牛島に移徙し下谷池の端より淺草寺地中に轉住し晩に神田多町一町目に居所を定めぬ、蓮池庵、金龍山人等の別號ある其住地に因みてなり、初め青林堂と稱する貸本屋なりしが、中頃羅書商となり、次に講釋師を業とし爲永正輔と呼びしも暫くにして罷めたりと云ふ、而して其作系は初式亭三馬の門に入り三鷺と號せしが、中頃二世の振鷺亭となり、更に二世南仙笑楚滿人を襲號し、其爲永春水と改めしは實は文政十一年頃なりといふ、其出生は寛政二戌年にして本年三十三歳なり。
花笠文京　東條氏通稱喬介字は來甫、鈍亭と號す、豐島新造、代作屋代作、魯鈍翁半窓、及び三芝居士等皆其別號なり、始芝神明前に住し次で室町に徙り後住吉町に轉住す、鶴屋南北の門人なり、天明五巳年を以て出生し本年三十八歳なり。
尾上梅幸　俳優尾上梅幸は幼名を辰五郎と呼び、榮三郎、松助、梅幸を歷て三代目尾上菊五郎を襲ぎ、

弘化四年梅壽と改め、次で菊屋萬平と改名して菓子商となり、嘉永元年更に大川橋藏と改めたり、著す所の戯作は皆他の代作に係る、安永九子年に生れ本年四十三歳なり。

畫工

神屋蓬洲
溪齋英泉　三十一歳
勝川春扇
歌川豐國　五十四歳
歌川國貞　三十七歳
歌川國安　二十九歳
歌川國直　二十八歳
歌川國次　二十三歳
歌川國丸
歌川貞房
歌川貞虎　通稱與之助五風亭と號す、歌川國貞門人なり。
志滿山人　即ち歌川國信なり。
喜多川美丸
二世北尾重政　即ち美丸なり。
二世勝川春好　即ち春扇なり。

板元

山本平吉
西宮源六
鶴屋金助
丸屋甚八
森屋治兵衛
西村屋與八
伊藤屋與兵衛
和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛
榎本屋吉兵衛
岩戸屋喜三郎
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門

雜記

閏正月六日式亭三馬歿す、享年四十八、深川雲光院地中長源寺に葬る、法號歡譽喜樂奏天信士。
六月二日烏亭焉馬歿す、享年八十、本所表町最勝寺に葬る、法號三樂院壽徳焉馬居士、其辭世に曰く

「思ひきやかたみの花を今さらに尋ねて杖を敷島の道」

○春より葺屋町河岸に於て唐人踊見世物出づ、かんかん踊とて市中一般に喧傳す。

書目

鶴屋半兵衛 鴻野浦賣 忠臣浮世市藏 六 玉粒作 美丸畫

山崎與二兵衛 明石五郎 契情吾嬬鏡 十 三馬作 豊國畫

一竹太右衛門 乙姫一話 敎草情奥義 二 蓬洲作 自畫

正本製 五篇 吾妻花双蝶々上 六 種彦作 國貞畫

下卷は文政六年出板す。

成田靈驗 大山奇瑞 繋馬鐙[illegible]郡 六 西馬作 國貞畫

宮本武者 巖流島書之 岸柳嶋物語 六 三馬作 同上

白人狂言 黑人見物 赤本昔物語 四 島馬作 同上

女阿漕夜網太刀魚 六 馬琴作 英泉畫

八百屋萬神樂太鼓 春水作 國貞畫

小女郎狐手引仇討 六 笑壽作 二世春好畫

お駒 才三 新織續紛八丈 五 柳菊作 美丸畫

柳亭種彦校とあり。

助六 上卷 家櫻[illegible]鉢植 六 京傳遺稿 豊國・英泉畫

由東京山補作せり。

下卷は名古屋 再度之逢引 六 笑壽作 春好畫

惠方土産梅鉢植 六 欣堂間人作 國丸畫

士農工商梅咲分 六 笑壽作 春好畫

其行衛白浪日記 六 東里作 春扇畫

由良湊娘甚孝記 十 南北作 春好畫

孝と貞兩岸一覽 六 種彦作 國直畫

黑白論濱の眞砂 五 志滿山人作 自畫

時代世話大内鑑 六 欣堂間人作 國丸畫

弘智法印岩坂松 六 雪麿作 國直畫

浮世一休廓問答 六 種彦作 國貞畫

浮世學者御伽噺 六 志滿山人作 自畫

昔語鳥羽遊戀塚 六 欣堂間人作 國丸畫

照子池浮名寫繪 六 馬琴作 英泉畫

難波梅室通早咲 六 笑壽作 春好畫

鯨帶博多合三國 六 種彦作 國貞畫

小柳島嫺娜帶留 六 雪麿作 國安畫

小絲佐七紫總絲 三 春水作 國直畫

小町琴柱謎差込 六 東里作 英泉畫

古今[illegible]鳥 五 玉粒作 國直・美丸畫

北里花雪白無垢	五	京山作	英泉畫
看々踊金羅唐金	五	薫　作	國安畫
江戸花二人助六	六	可山作	貞虎・貞房畫
女容鏡七人化粧	十二	三馬作	國貞畫
瑠璃紫江戸朝顔	六	七世團十郎作	豐國畫

何人かの代作なるべし。

玉藻前化粧姿見	六	梅幸作	國次畫

花笠文京之を代作す。

高尾、夕霧、小紫傾城三極子	六	南北作	豐國畫
お花半七〳〵操封〆	六	京山作	國貞・二世重政畫
昔語成田開帳	六	同　上	國貞畫
昔語玉菊草紙	五	一九作	美丸畫
假名手本團扇	三	南嶺作	
花角力娘大全	六	南北作	豐國畫
室育變生南枝	六	京山作	國丸畫
木曾秋錦旗揚	六	一九作	豐國畫
滑稽旅加羅壽	六	同　上	同　上
花競色讀賣	六	欣堂間人作	國丸畫
薬南志之藥	三	同　上	同　上
風流女丹前	四	志満山人作	自　畫
慾川乗合船	六	一九作	美丸畫
庭訓塵塚譚	六	京山作	豐國畫
風光白旗榮	六	一九作	同　上

古作の改題再板なるべし。

柳蔭桂川水	三	茗溪庵作	國直畫

柳亭種彦校とあり。

文政六癸未年

作・者

柳亭種彦　四十一歳
山東京山　五十五歳
東里山人　三十九歳
志満山人
曲亭馬琴　五十七歳
尾上梅幸　四十四歳
花笠文京　三十九歳（代作のみ）
樂亭西馬　二十五歳（代作のみ）
墨川亭雪麿　二十七歳

東西庵南北
古今亭三鳥
玄光亭金墨
月光亭笑壽
十返舎一九　六十歳
市川團十郎　三十三歳(七代目)
二世戀川春町
瀬川路考　俳優なり、五代目瀬川菊之丞となる、幼名を多門と稱す、故に俗多門路考と呼べり、別號東籬園俳名を路考と曰へり、著作は樂亭西馬、一筆庵可候及び畫工泉晁等の代作する所なり、享和二戌年に生れ本年二十二歳なり。

畫工

溪齋英泉　三十二歳
歌川豐國　五十五歳
歌川國貞　三十八歳
歌川國安　三十歳
歌川國直　二十九歳
歌川國信
歌川國丸
志滿山人　即ち歌川國信なり。
喜多川美丸
二世勝川春好

板元

和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛
伊藤屋與兵衛
岩戸屋喜三郎
近江屋權九郎
鶴屋喜右衛門
丸屋文右衛門
森屋治兵衛
西村屋與八
西宮源六
丸屋甚八
山本平吉
鶴屋金助

雜記

四月六日四方山人歿す、享年七十五、小石川白山本念寺に葬る、法號杏花園心逸日休居士、辭世に曰く

「時鳥啼つるかたみ初鰹春と夏との入相の鐘」

書目

音羽丹七 小絲左七 本朝育小絲苧環 六 雪麿作 美丸畫
正本製 六篇 吾妻花双蝶々下 六 種彦作 國貞畫
上編は文政五年出板なり。
美濃屋三勝 近江屋於金 夢合寐物語 六 京山作 國貞畫
小稻半兵衛 千代半兵衛 梅櫻春道行 五 同上 同上
童子教訓 古風仕立譬近道 四 東里作 二世春好畫
東里一篇 海道茶漬腹内幕 同上 英泉畫
七艸四郎傾城大寄 六 京山作 豐國畫
昔摸樣戲場雛形 十二 南北作 國貞畫
興行曲浮名佗色 六 雪麿作 國直畫
歌三味線東引船 五 志滿山人作 自畫
比翼紋松爾鶴賀 六 種彦作 豐國畫
水木舞扇之猫骨 六 同上 國貞畫
油橋河原之祭文 六 馬琴作 豐國畫
大內山月雪花志 九 東里作 國直 英泉 畫
東風流秋の七艸 三 二世春町作 國安畫
女郎花喩言粟島 六 種彦作 國貞畫
二重染曾我雁金 六 三島作 美丸畫

女夫織玉川晒布 六 馬琴作 豐國畫
藤屋染寐卷曉雲 六 金墨作 國信畫
諸時雨紅葉合傘 六 馬琴作 豐國畫
小脇差夢之蝶鮫 六 種彦作 國貞畫
花陣立白藤日記 六 笑壽作 春好畫
新靭八百屋藏開 六 種彦作 國貞畫
一番太鼓春の曙 六 七世團十郎作 豐國畫
誰人かの代作なるべし。
稽古本柳廼燕口 六 雪麿作 國直畫
柳亭種彦校とあり。
お房 小絲 結合緣色絲 六 梅幸作 國貞 國丸 畫
花笠文京之を代作す。
重妻岩藤摸樣 六 京山作 豐國畫
操競三人女 六 種彦作 同上
兩個妻姿姬 六 雪麿作 國直畫
花競操日記 六 三島作 美丸畫
楠歌舞妓礎 六 京山作 國貞畫
忍駒仇汐汲 六 路考作 同上
樂亭西馬之を代作す。
雪明常磐松 六 一九作 豐國畫

常磐松二編　六　一九作　國安畫
常磐松三編　六　同上　同上
常磐松四編　六　同上　同上
　第二編以下文政十二年までに渉り出板す。
京太郎物語　六　種彦作　豐國畫
　「撰競三人女」と同書なり。

文政七甲申年

作者

姥尉輔　七十歳
柳亭種彦　四十二歳
山東京山　五十六歳
欣堂間人　三十歳
閑亭傳笑
曲亭馬琴　五十八歳
尾上梅幸　四十五歳
花笠文京　四十歳(代作のみ)
東里山人　四十歳
志滿山人
爲永春水　三十五歳
蘭奢亭薫　五十六歳
東西庵南北
墨川亭雪麿　三十八歳
十返舍一九　六十一歳
市川團十郎　三十四歳(七代目)
初音樓一炷
五柳亭德升　三十二歳(代作のみ)

江南亭唐立　中田氏通稱慶次一に愚舍一得と號し狂歌に名あり十返舍一九門人にして淺草に住す。

忍岡常丸　藤本氏通稱甚兵衛、下谷上野町呉服商當陸屋の主人なり、十返舍一九と頗る親密の交際あるによれば、或は一九が門人なるやも知れず。

林屋正藏　通稱林屋正藏を以て作名とす文正三といへり、別號林泉また樂我、笑三及び可龍等の號あり本所林町に住せり、落語家にして三笑亭可樂の門に入り怪談師の創祖と稱せらる、後二世鹿野武左衛門を襲名せしが、故ありて再正藏に復名せり、其出生は天明元丑年にして本年四十四歳なり。

鶴屋南北　四世鶴屋南北は即姥尉輔の改名せしなり

其小傳文化五年姥尉輔の條下に記せり本年七十歲
式亭三馬　本年の書目中に其作見ゆるは不審なり、三馬は文政五年に歿したれば、本年出板せしは遺稿なる歟或は年代の組入れ違ひ耶、將たまた外題替の再板物なるかに相違なけれど、原本を閲せざれば今之を訂正するに途なし。

畫　工

歌川豐國　五十六歲
歌川國貞　三十九歲
歌川國安　三十一歲
歌川國直　三十歲
歌川國信
歌川國丸
溪齋英泉　三十三歲
志滿山人　卽ち歌川國信なり。
東西庵南北
喜多川月麿
喜多川美丸

板　元

岩戸屋喜三郎
鶴屋喜右衛門
丸屋文右衛門
榎本屋吉兵衛
和泉屋市兵衛
伊藤屋與兵衛
山口屋藤兵衛
西村屋與八
森屋治兵衛
今利屋丑藏
鶴屋金助
丸屋甚八
山本平吉
東屋大助　馬喰町一町目に住し東錦堂と號せり。
江崎屋

雜　記

三月二十一日北尾政美歿す、享年六十四、淺草永住町密藏院に葬る、法號彩淡蕙齋。
四月二十六日蘭香亭薫歿す、享年五十六。
五月九日曲亭馬琴剃髮して笠翁と號し、同月居を神田末廣町に移す。

七月二十七日三代目市川門之助歿す、享年三十一。
淺草田圃幸龍寺に葬る。
七月文人作者等相集り耽奇會を起す。
十一月藍亭晋米剃髪す。
阪東玉之助(秀佳の幼名)玉三郎と改名す。

書目

金生木跡見世曾和歌　五　當丸作　國直畫
(正本製七編)於染久松上　六　種彦作　國貞畫
中篇は文政八年出板す。
菊酒屋千歳諸白髪　六　雪麿作　國貞畫
(大星物語)いろは歌双巴　六　志滿山人作　自畫
(櫛八小紫)誂染由緣色揚　四　唐立作　國安畫
(金毘羅靈驗)吉事之正夢　六　尉輔作　豐國畫
若衆振古跡鎗梅　六　京山作　同上
狹夜衣戀歌謎々　二　欣堂間人作　國丸畫
玉櫛笥雨個姿見　六　雪麿作　國直畫
黄金花玉川奇談　五　傳笑作　美丸畫
着替浴衣團七島　六　欣堂間人作　國丸畫
童蒙話赤本事始　六　馬琴作　國貞畫
浮世心學夜店始　三　南北作　自畫
先開而三升世界　三　正藏作　國直畫
戲場佳人楓釣枝　六　欣堂間人作　國丸畫
篩節四季之替唄　四　京山作　同上
燈籠踊秋之花園　六　種彦作　國貞畫
大峰山陀羅助始　八　一九作　美丸畫
殺生石後日怪談　六　馬琴作　豐國畫
第二篇は文政八年出板す。
金毘羅船利生纜　六　馬琴作　英泉畫
第二編は文政八年出板す。
阪東太郎強盜譚　五　三馬作　豐國畫
中編並後編は文政八年出板す。
尙天保六年樂亭西馬此『後世譚』を著作せり。
當南枝稍妻表紙　六　七世團十郎作　豐國畫
代作者詳ならず
江戸繪双蝶曾我　六　團十郎作　國直 國貞畫
代作者詳ならず
皿屋敷反古合紙　六　梅幸作　國貞畫
花笠文京の代作なるべし。
(夫婦和合)駱駝之世界　二　唐立作　國安畫
女帶絲織八丈　六　南北作　英泉畫

開運菊一文字　六　一九作　英泉畫
絲櫻飜蝶分醉　五　京山作　國貞畫
海中箱入恩着　六　傳笑作　國信畫
後編『勸善辻談義』は文政九年出板す。
風俗女三國志　六　闇十郎作　豐國畫
代作者詳ならず。
福神寶山入　四　一九作　國安畫
金儲傳受書　二　東里作　國丸畫
通俗賣油郎　六　一九作　美丸畫
菊酒屋累扇　六　京山作　國貞畫
梅櫻對姉妹　六　馬琴作　豐國畫
御覽戀曲者　三　一炷作　月麿畫
戀湊客入船　四　欣堂間人作　國丸畫
曾我祭東鑑　六　鶴屋南北作　國貞畫
園雪花廼魁　二　春水作　英泉畫
襲褄辻花染　六　馬琴作　豐國畫
躾方浮世諺　二　薫　作　國安畫
釣狐花面影　五　東里作　英泉畫
三國白狐傳　六　闇十郎作　國貞畫
五柳亭德升之を代作す。
仇緣誓紙治　六　梅幸作　豐國畫
花笠文京之を代作す。
初便廓書傳　六　梅幸作　豐國畫
花笠文京之を代作す。

文政八乙酉年

作者
瀨川路考　二十四歲
爲永春水　三十六歲
山東京山　五十七歲
柳亭種彦　四十三歲
東里山人　四十一歲
林屋正藏　四十五歲
尾上梅幸　四十六歲
花笠文京　四十一歲（代作のみ）
曲亭馬琴　五十九歲
式亭三馬　本年式亭に作ある道理なし、文政七年作者の條下に其事由を記し置けり。
晋米齋玉粒　五十一歲

市川團十郎　三十五歳（七代目）
五柳亭德升　三十三歳
墨川亭雪麿　二十九歳
古今亭三鳥
江南亭唐立
十返舍一九　六十二歳
四世鶴屋南北　七十一歳
二世戀川春町

畫工

溪齋英泉　三十四歳
歌川豐國　五十七歳
歌川國重　四十九歳
歌川國貞　四十歳
歌川國安　三十二歳
歌川芳丸　一圓齋と號す、歌川國芳門人なり。
喜多川美丸

板元

和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛
伊藤屋與兵衛
丸屋文右衛門
鶴屋喜右衛門
岩戸屋喜三郎
西村屋與八
今利屋丑藏
森屋治兵衛
山本平吉
丸屋甚八

雜記

正月文人作家等相會し兎園會を起す。
正月七日歌川豐國歿す、享年五十七、三田聖阪功運寺に葬る、法號得妙院實彩麗毫信士、辭世の句あり
「燒筆のまゝか朧の影法師」
十一月三日千代春道（橋本德瓶）歿す享年六十八。
藍亭晋米名を改め二世司馬全交と稱す。

書目

尾上伊太八／局岩藤 歸咲古鄕錦繪　三　春水作　英泉畫
三日月お仙／笠森お仙 誂染袷帷子　六　京山作　同上
正本製八編 於染久松中　六　種彦作　國貞畫
下編は文政九年出板す。

六歌仙傳 小町形櫻の香宮 二 玉粒作 國安畫
成田山御手綱五郎 六 鶴屋南北作 豐國畫
吉野龍田二人山姥 六 路考作 芳丸畫
會席料理世界吉原 六 七世團十郎作 國貞畫
五柳亭德升之を代作す。
小萬與作 廓春道中双六 六 京山作 國貞畫
おふさ德兵衛 櫻時雨神笠 六 德升作 同 上
三日月太郎 其俤錦繪姿 十二 東里作 英泉畫
春小袖門松摸樣 四 京山作 國安畫
初霞江戸之立入 五 東里作 英泉畫
東風流妹脊鞠唄 三 玉粒作 國安畫
富士太郎廓初夢 六 京山作 豐國美丸畫
夏木立戀の繁枝 六 雪麿作 國貞畫
月娥眉尾花振袖 六 京山作 英泉畫
竹生島琵琶濁水 六 一九作 同 上
近江表座敷八景 六 種彥作 國貞畫
隅田川屛風八景 六 三馬作 國安畫
八人藝樂屋穜本 四 唐立作 同 上
唐人髷今國性爺 六 種彥作 國貞畫
昔男古堂德次譚 六 唐立作 國安畫

帶屋於蝶三世譚 六 正藏作 國貞畫
再度之敵討哉實 六 二世春町作 美丸國安畫
兒淵紫二人若衆 六 團十郎作 國貞畫
代作者詳ならず。
流行歌川船合奏 六 梅幸作 國貞畫
花笠文京之を代作す。
尾上松緑百物語 六 梅幸作 國重畫
花笠文京之を代作す。
縮緬博多小女郎 六 梅幸作 國貞畫
花笠文京之を代作す。
阪東太郎 強盜譚中編 五 三馬作 豐國畫
阪東太郎 强盜譚後編 五 同 上 同 上
初編は文政七年出板なり。
花紅葉名所扇 六 種彥作 國貞畫
金毘羅船二編 六 馬琴作 英泉畫
第三編は文政九年出板す。
戀者曲者 常夏物語 六 一九作 國貞畫
明烏雪惣花 六 京山作 同 上
緣結夕定紋 六 馬琴作 同 上
其俤白石噺 五 二世春町作 國安畫

女風俗東鏡　六　團十郎作　國重畫
代作者詳ならず。
傾城水滸傳　八　馬琴作　國安畫
八の卷に馬琴剃髪辭を載せたり。
第二編は文政九年出板す
殺生石二編　八　馬琴作　英泉畫
第三編は文政九年出板す。

○

葩雪曰、去年より長編物の合卷馬琴によつて始めらる、此作風漸次流行となり、遂に草雙紙の續物と呼ばるゝ一流を造り出したり。

文政九丙戌年

作者

瀬川路考　二十五歳
山東京山　五十八歳
柳亭种彥　四十四歳
東里山人　四十二歳
曲亭馬琴　六十歳
福亭綠馬　二十八歳（即樂亭西馬なり）
志滿山人
尾上梅幸　四十七歳
花笠文京　四十二歳（代作のみ）
閑亭傳笑
爲永春水　三十七歳
三亭春馬　代作のみ
墨川亭雪麿　三十歳
東西庵南北
五柳亭德升　三十四歳
市川團十郎　三十六歳（七代目）
十返舍一九　六十三歳
四世鶴屋南北　七十二歳
けふの里人　東里山人の匿名ならむ。
阪東秀佳　俳優阪東秀佳、幼名玉之助後玉三郎と改め、俳名を秀佳と號す、天保十年秀歌の字に改め、其後更にしうかと假名書にせり、其著作の多くは松島半二代作せりと云ふ、文化十西年に生れ本年齡僅に十四歳なり。
律秋堂

畫工

初代歌川豐國　昨年五十七歳の畫本年出板。

二世歌川豐國　五十歳即ち國重の襲名なり。

二世北尾重政　即ち美丸なり。

喜多川美丸

志滿山人

歌川國貞　四十一歳

歌川國安　三十三歳

歌川貞兼　歌川國貞門人なり。

菊川英笑　淺野氏春齋と稱す、菊川英山門人なり。

溪齋英泉　三十五歳

歌川國虎　通稱粂藏歌川豐國門人なり。

板元

西宮源六

山本平吉

丸屋甚八

西村屋與八

若狹屋與市

今利屋丑藏

森屋治兵衛

山口屋藤兵衛

伊藤屋與兵衛

和泉屋市兵衛

丸屋文右衛門

鶴屋喜右衛門

岩戸屋喜三郎

雜記

八月七日小枝繁歿す、享年六十八、市谷藥王寺町淨榮寺に葬る。

○

此頃より再一中節流行す。

書目

お梅久米之助お半長右衛門伊勢參個紀伊國　六　路考作　國貞畫

代作者詳ならず。

高尾十三郎伊達摸樣雲稻妻　六　京山作　豐國畫

いろは短歌新板役者目附繪　六　春水作　國安畫

正本製九篇於染久松下　六　種彥作　國貞畫

上編は文政七年中編は同八年出板なり。

一寸見南は扶巨登棲廼新版　六　七世團十郎作　國貞畫

夫は豐前是は近江毛谷村仇討　五　東里作　貞兼畫

鎌田又八強力譚　六　雪麿作　英泉畫
三日月太郎物語　六　東里作　同　上
人形筆五色絲藏　六　種彦作　國貞畫
奇妙々絲屋戀婿　三　四世南北作　英泉畫
大和莊子蝶々簪　六　馬琴作　國貞畫
傾城揚羽蝶花形　六　德升作　二世豐國畫
女夫松連理鉢植　六　京山作　國安畫
姬萬兩長者鉢木　六　馬琴作　國貞 美丸畫
指角力手管業物　三　律秋堂作　美丸畫
勝角力橋場庵崎　六　鶴屋南北作　國貞畫
雁金紺屋作早染　六　種彦作　同　上
江戶紫對之重着　六　祿馬作　二世重政畫
笹色の猪口曆手　六　種彦作　初代豐國 二世豐國畫
櫻月浮世之雛形　六　志滿山人作　自　畫
茶呑噺話之種瓢　六　雪麿作　國貞畫
笠松蜂雨夜菅簑　六　同　上　國安畫
傾城水滸傳二編　八　馬琴作　同　上
第三編は文政十年出板す。
四十七手本裏張　六　鶴屋南北作　國貞畫
後編『いろは緣起』は文政十年出板す。

黃金乃花作陸奧　四　里人作　國虎畫
東里山人校とあり。
後三年手管義家　六　七世團十郎作　國貞畫
五柳亭德升之を代作す。
濱眞砂築地白浪　六　團十郎作　國安畫
五柳亭德升之を代作す。
敵討四手垂鶯籠　六　團十郎作　國安畫
代作者詳ならず。
皇國文字娘席書　六　梅幸作　國貞畫
花笠文京之を代作す。
蛙の歌春上手筆　六　種彦作　國貞畫
此書中の雲形丹作は種彦に擬し、又色男六三は白
己の肖貌に擬して國貞之を描きしといへり。
箱入 後編 勸善辻談義　六　傳笑作　二世豐國畫
前編『海中箱入恩着』は文政七年に、又三編『寬能上
人御法書解』は文政十年に出板す。
繁馬七勇婦傳　四　春水作　英泉畫
七勇婦傳二編　六　同　上　同　上
第三編は文政十年出板す。
金毘羅船三編　六　馬琴作　英泉畫

第四編は文政十年出板す。

女扇忠義要	六	鶴屋南北作	國貞畫
兒鑑東孝經	六	東里作	英泉畫
昔男辯物語	三	一九作	美丸畫
褄重思亂菊	四	傳笑作	英泉畫
腹內覗機關	二	春水作	英笑畫
聞勇八幡祭	六	闇十郎作	美丸畫

五柳亭德升之を代作す。

兒櫻法花房	六	梅幸作	國貞畫

花笠文京之を代作す。

後編『誂染楓絹川』三は文政十年出板す。

情競傾城嵩	六	秀佳作	國安畫

北里五街樓の序文あり。

北里五街樓は卽ち三亭春馬の別號なれば蓋し春馬の代作ならん歟。

殺生石三編	八	馬琴作	英泉畫

第四編は文政十年出板す。

五八男昔譚		闇十郎作	國貞畫

五柳亭德升之を代作す。

○

龍雪曰、俳優の作名を附して出板する物益多きを加へぬ、婦女の歡心を買ひて新作物を賣附る書肆の計策は咎むるに足らねど、其代作に甘んずる筆者の不見識笑ふに堪えたり、就中五柳亭德升の如きは、序文中に已れの代作なる旨を明記する等、眞に呆然たらざるを得ず。

文政十丁亥年

作者

闇亭傳笑
尾上梅幸　四十八歲
山東京山　五十九歲
柳亭種彥　四十五歲
曲亭馬琴　六十一歲
爲永春水　三十八歲
花笠文京　四十三歲（代作のみ）
瀨川路考　二十六歲
市川闇十郎　三十七歲（七代目）
東西庵南北

五柳亭德升　三十五歳
江南亭唐立
墨川亭雪麿　三十一歳
一筆庵可候　三十六歳(代作のみ)
古今亭三鳥
十返舍一九　六十四歳
四世鶴屋南北　七十三歳
二世戀川春町
竹田出雲　竹田出雲は寶暦六年十月に歿したれば本年に名の見ゆる理由なし、何等の誤謬なるや原書を閲して訂正すべし。

書工

溪齋英泉　三十六歳
菊川英笑
歌川國丸
歌川國貞　四十二歳
歌川國安　三十四歳
歌川國芳　三十一歳
歌川廣重　三十一歳
歌川國次　二十八歳
歌川國兼　歌川國貞門人なり。
歌川貞景　小嶋氏通稱庄五郎五湖亭と號す、歌川國貞門人にて目白臺但馬屋敷に住せり。
貞齋泉晁　通稱吉藏、溪齋英泉の門人にして草双紙の代作物あり、別號を青蔦亭といふ。
喜多川美丸
二世北尾重政　卽ち美丸なり。
二世歌川豐國　五十一歳

板元

丸屋甚八
山本平吉
西宮新六
今利屋北藏
若狹屋與市
河內屋源七
西村屋與八
森屋治兵衛
鶴屋喜右衛門
丸屋文右衛門
和泉屋市兵衛

山口屋藤兵衛
伊藤屋與兵衛
岩戶屋喜三郎
佐野屋喜兵衛　芝神明前三島町角に住し喜鶴堂と號す屋標は井桁を用ゐ、佐野喜を通稱とす。

雜記

五月二日二世司馬全交歿す、享年五十三、二世全交は卽ち藍亭晋米なり。
六月畫工勝川春好歿す、麻布善福寺に葬る。
七月東西庵南北歿す。
秋曲亭馬琴名を篁民と改む。

書目

箱入三編 寛能上人御法書解　六　傳笑作　國兼畫
第二編『勸善辻談義』は文政九年に又第四編『安達織作廻國傳』は文政十二年に孰れも出板す。
通人料理しらしの献立　六　四世南北作　英泉畫
成田諏訪 菊三升利生乘合　六　七世團十郎 梅幸 合作　美丸畫
代作者詳ならず。
おさん茂兵衛 重妻比翼仕立　六　京山作　國貞畫
鎌倉山黃金千代鶴　六　團十郎作　國安畫
東國太郎西國太郎 兩雄奇人談　十　團十郎作　二世重政畫
五柳亭德升之を代作す。
手本裏張後日 いろは緣起　六　鶴屋南北作　國貞畫
前編『四十七手本裏張』は文政九年出板なり。
お駒才三 誂織八丈縞緬　六　京山作　二世豐國畫
若草伊之助 契情身持扇　六　同　上　國貞畫
筆綾絲三筋繼棹　六　唐立作　廣重畫
柳の絲花之組交　六　種彥作　國貞畫
牽牛織女願絲竹　六　馬琴作　同　上
女船頭矢口の渡　五　二世春町作　國安畫
嗚呼忠臣夜光珠　出雲作　同　上
伊達摸樣廓寬濶　六　德升作　同　上
戲場小鍛長壁譚　六　春水作　同　上
犬著聞傾城龜鑑　六　雪麿作　英泉畫
四家怪談後日譚　六　梅幸作　同　上
相合鴛江之島詣　六　雪麿作　國貞畫
戀角力赤繩取組　十二　同　上　重政畫
都鳥浮寐隅田川　六　團十郎作　國貞畫
五柳亭德升之を代作す。
傾城水滸傳三編　八　馬琴作　國安畫

第四編及五編は文政十一年出板す。

志賀春黄金の漣　六　團十郎作　美丸畫

花笠文京之を代作す。

連著子を松山晒　六　團十郎作　國芳畫

五柳亭德升之を代作す。

和歌三人之由來　四　路考作　泉晁畫

代作者詳ならず。

結緣日浮世雛形　六　路考作　英泉畫

濱村介校とあり。

此代作者は蓋し一筆庵可候なるべし。

見櫻後日諷染楓組川　六　梅幸作　豐國畫

前編「見櫻法花房」は文政九年出板なり。

花笠文京之を代作す。

手鞠唄昔物語　六　春水作　英泉畫

拍子舞紅梅箙　六　春町作　貞景畫

傾城戀三味線　五　雪麿作　英泉畫

金毘羅船四編　六　馬琴作　同上

第五編及六編は文政十二年出板す。

七勇婦傳三編　六　春水作　英泉畫

第四編は文政十二年出板す。

枝珊瑚京打簪　六　梅幸作　國貞畫

一筆庵可候之を代作す。

義經磐軍扇　六　德升作　國安畫

金敵夢世語　三　春町作　英笑畫

戀渡木曾棧　三　三馬作　國次畫

四天王其源　四　德升作　國安畫

弓削道鏡譚　六　一九作　同上

菅原實傳記　六　德升作　同上

想合對菅笠　六　梅幸作　豐國畫

花笠文京之を代作す。

扇扇姿書初　六　梅幸作　國貞畫

代作者詳ならず。

殺生石四編　八　馬琴作　英泉畫

第五編は文政十一年出板す。

菊壽童復盃　六　京山作　國貞畫

第二編「後日盃」は天保三年出板す。

繪本石橋山　四　國丸畫

古板の再出なりと云ふ。

文政十一戊子年

作者

柳亭種彥　四十六歲
志滿山人
曲亭馬琴　六十二歲
山東京山　六十歲
東里山人　四十四歲
爲永春水　三十九歲
瀨川路考　二十七歲
鬪亭傳笑
尾上梅幸　四十九歲
花笠文京　四十四歲（代作のみ）
市川團十郎　三十八歲（七代目）
墨川亭雪麿　三十二歲
十返舍一九　六十五歲
五柳亭德升　三十六歲
一筆庵可候　三十七歲（代作のみ）
叓福亭宮守　三十歲（代作のみ）
二世戀川春町
四世鶴屋南北　七十四歲

二世烏亭焉馬　山崎氏通稱賞次郎蓬萊山人と號す、別號松壽樓永年、深川古石場に住し其居宅を七國樓と呼べり、烏亭焉馬の門に入り遂に二世の焉馬となれり、弘化三年二世近松門左衞門を襲名せしも行はれざりしといへり、寬政四子年を以て生れ本年三十七歲なり。

小野田理童

式亭小三馬　菊地氏名德基通稱虎之助後大輔と改む別號本町庵、式亭三馬の男なり、始作名を式亭虎之助と呼び次で小三馬に改め、天保五年に父號を襲ひ二世三馬となれり、文化九申年に出生し當年十七歲なり。

菅良齋　通稱梅澤屋良介乾坤坊と號す、明和六丑年を以て生る本年六十歲。

岩井粂三郎　俳優なり、幼名久次郎後粂三郎と改め、天保三年六代目岩井半四郎を襲げり、五代目半四郎の長男にして梅我と號す、其出生寬政十一未年にして今年三十歲なり。

岩井紫若　亦俳優なり、幼名を松之助と稱し、五代目半四郎の二男にして即粂三郎の弟なり、兄と共に

戯作を出せしも皆代作者の手になるのみ、文化元
子年に生る當年二十五歳。

畫工

柳川重信　四十二歳
菊川英笑
溪齋英泉　三十七歳
歌川國貞　四十三歳
歌川國安　三十五歳
歌川國芳　三十二歳
歌川國徳
歌川國丸
歌川貞景
歌川貞房
志滿山人　即ち歌川國信なり。
二世歌川豐國　五十二歳
二世北尾重政

板元

川口正藏
蔦屋吉藏
西宮新六
山本平吉
丸屋甚八
森屋治兵衛
西村屋與八
河内屋源七
若狭屋與市
佐野屋喜兵衛
岩戸屋喜三郎
山口屋藤兵衛
和泉屋市兵衛
鶴屋喜右衛門

雜記

春五柳亭徳升作名披露の會を催す。
正月十八日二世巴扇堂歿す、享年五十、内藤新宿追分西方寺に葬る、法號清光院連山淨休居士、辭世に曰く「極樂の浪人者となりぬめり今日は此世のいとま貰ひて」
五月二十三日歌川豐廣歿す、享年五十六、西久保専光院に葬る、法號釋顯秀信士辭世あり「死でゆく地獄の沙汰は兎も角もあとの始末は金次第なる」

五月六樹園飯盛、狂歌堂眞顏の二人共に宗匠號を允許せらると云ふ。
岡山鳥歿す。
蓬萊山人初代焉馬の號を襲ひ二世烏亭焉馬と稱す
二世振鷺亭名を爲永春水と改む。

書　目

正本製十編 夕霧伊左衞門上　四　種彥作　國貞畫
　下卷は文政十二年出板す
湯井丸ケ瀨 封ㇾ不解庚申　六　七世團十郎作　國貞畫
　代作者詳ならず。
伊呂波引寺入節用　十二　種彥作　國貞畫
二枚折風呂前屛風　四　理童作　二世重政畫
　墨川亭雪麿補とあり。
お花半七 雛女夫櫻再咲　六　小三馬作　重政畫
小女郎新兵衞 風薰葛裏葉　四　志滿山人作　自　畫
　後編『玉屋晋兵衞補伏』は文政十二年出板す。
今戶土產女西行　六　馬琴作　國貞畫
御產池龍女利益　六　春水作　國兼畫
隅田川梅若緣記　六　二世春町作　貞景畫
鳶手歌梅由兵衞　六　雪麿作　重政畫
鹿子絞娘道成寺　六　京山作　英泉畫
繼子立浪迺濡衣　三　春町作　英笑畫
露時雨駕籠之渉　六　一九作　重政畫
初時雨矢口之渡　六　同　上　英泉畫
千葉摸樣好新形　六　東里作　二世豐國畫
褄摸樣沖津白浪　十四　鶴屋南北作　國貞畫
片男浪若浦田鶴　四　雪麿作　重政畫
於婢子育桂川鮎　六　同　上　英泉畫
花角力戀之百草　六　志滿山人作　自　畫
道外武者太平樂　三　一九作　英笑畫
入船蝶忠義之湊　六　雪麿作　英泉畫
汐汲車輪廻仇討　六　春町作　國安畫
三國妖狐殺生石　十五　小三馬作　同　上
粂皿山更紗團扇　四　雪麿作　國丸畫
篠塚太郎英勇話　六　春水作
扇富士曾我物語　六　德升作　豐國畫
逢見茶嫁入小袖　六　雪麿作　同　上
伊達姿辰巳八景　六　團十郎作　國安畫
　五柳亭德升之を代作す。
主哉誰問ど白藤　六　團十郎作　國芳畫

代作者詳ならず。

怪談巖倉萬之丞　六　鶴屋南北作　國貞畫

後篇「怪談鳴海絞」天保二年出板す。

黑雲太郎雨夜譚　六　菅良齋作　英泉畫

第二編は文政十二年出板す。

市川三升校とあり人氣を借りし策なるべし。

傾城水滸傳四編　八　馬琴作　國安畫

傾城水滸傳五編　八　同　上　同　上

第六編は文政十二年出板す。

色三昧線仇合彈　六　路考作　英泉畫

一筆庵可候の代作なるべし。

關東小六昔舞臺　十二　種彦作　重政畫

天保六年畫を貞秀に改め再板せり。

銀世界雪の振袖　六　團十郎作　重政畫

五柳亭德升之を代作す。

宮戶川三社網船　六　團十郎作　國芳畫

代作者詳ならず。

文政四年板曲亭馬琴作に同外題の著あり。

浦島太郎珠之宋土產　八　春水作　重政畫

紅葉狩東錦繪　六　亭馬作　國貞畫

金草鞋十八編　六　一九作　國安畫

忍笠時代蒔繪　四　種彦作　國丸畫

風俗女西遊記　六　春水作　國安畫

前々忠臣孝記　六　二世焉馬作　國貞畫

河內國姥火譚　六　傳笑作　國雞畫

東來奇代鬪取　四　京山作　重政畫

一名「大男」といふよし。

此大男と曰へるは、肥前國上益頭郡矢部庄田所村出生にて、名を大空武左衛門と呼び、身長七尺五寸體重三十五貫目掌大一尺二寸又足跡長一尺三寸五分あり、齡二十七歲にて文政十年江戶に下れり、眞に稀有の大男とて卉を脚色して今春出板せしなり、此時畫工蹄齋北馬に大男を詠る句あり「大空の時雨飴屋の傘借らむ」

尙十返舍一九にも大男の作あり。

狂言袴五紋畫　六　紫若作　重政畫

爽福亭宮守（樂亭西馬）之を代作す。

大男東下り旅道草　四　一九作　國安畫

此大男の事前項に詳記せり。

魁伊豆旗揚　四　一九作　重政畫

有喜世諺草	二	一九作	國安畫
懐中鏡山開	六	二世焉馬作	國貞畫
神風倭國功	五	一九作	貞房畫
繪本勇見袋	二	同上	英泉畫
忠臣後祭禮	三	同上	重信畫
爰伹天網島	六	關十郎作	國貞畫

五柳亭德升之を代作す。

杜若紫再咲	六	条三郎作	英泉畫

一筆庵可候之を代作す。

繡繪草白浪	六	梅幸作	英泉畫

花笠文京之を代作す。

後編四冊は天保元年出板す。

殺生石五編		馬琴作	英泉畫

第六編は文政十二年出板す。

○

葩雪曰、文化の末年よりして、著作の外題は、都て作風に準じ優しき名を命せしが、俳優の作名を附し、專ら婦女子を得意とする向きにありては、漸やく婀娜なる艶文字を外題に使用するに至れり、本年の新作中に『十七歳護聞』『白藤』など其一例なるべし、然れども、文化十二年京山の出せる『夏がみ開て水無月』の巧なるには如かず。

文政十二己丑年

作者

菅良齋	六十一歳
柳亭種彦	四十七歳
樂亭西馬	三十一歳
關亭傳笑	
山東京山	六十一歳
爲永春水	四十歳
欣堂間人	三十五歳
東里山人	四十五歳
曲亭馬琴	六十三歳
志滿山人	
林屋正藏	四十九歳
墨川亭雪麿	三十三歳
式亭小三馬	十八歳
一筆庵可候	三十八歳

五柳亭德升　三十七歳
十返舍一九　六十六歳
二世戀川春町
西來居未佛　毛受氏名は照寛字は善喜、別號瓢簞園又一寸法師と號す、尾州侯の御坊主たり、六樹園門人にて五側の判者なり。
多蒲人　爲永春水の門人なりと云ふ。

畫　工

溪齋英泉　三十八歳
菊川英笑
歌川國貞　四十四歳
歌川國安　三十六歳
歌川國芳　三十三歳
歌川國兼
歌川國丸
歌川國虎
歌川貞景
歌川安秀　歌川國安門人なり。
志滿山人　卽ち歌川國信なり。
英得　一陽軒と號す。
二世歌川豐國　五十三歳
二世北尾重政

板　元

山本平吉
西宮新六
丸屋甚八
蔦屋吉藏
川口正藏
西村屋與八
若狹屋與市
森屋治兵衛
佐野屋喜兵衛
岩戸屋喜三郎
鶴屋喜右衛門
山口屋藤兵衛
和泉屋市兵衛

雜　記

正月六日假名垣魯文生る。
六月六日戀川好町(狂歌堂眞顏)歿す、享年七十七、小石川極樂水光圓寺に葬る、法號俳諧歌場壽塋福

洞眞顏居士、辭世に曰く「味く喰ひ暖く衣て何不足七十七ッ南無阿彌陀佛」

十一月二十七日四世鶴屋南北歿す享年七十五、本所押上春慶寺に葬る、法號一心院法念日遍居士。

文政年中畫工歌川國丸歿す、享年三十餘。

文政年中畫工歌川國長歿す、享年四十餘。

書目

正本製十一編 夕霧伊左衞門下　四　種彥作　國貞畫

上卷は文政十一年出板なり。

京橋中橋お仙お萬 艶衣裳二人娘　六　西馬作　二世重政畫

綃入四編 安達織作廻國傳　六　傳笑作　國彙畫

第三編『寛能上人御法書解』は文政十年出板なり、此作四編にて大尾す。

江戶自慢藝者氣質　六　京山作　國貞畫

いさなしぐさ 泰平之錦繪　五　多滿人作　英得畫

盛衰記摺鉢無間　六　雪麿作　國安畫

菅原傳授竹部譚　六　二世春町作　貞景畫

愚智太郎懲惡傳　六　春水作　英笑畫

喜怒哀樂堪忍袋　六　小三馬作　國安畫

仇競意氣地鮫鞘　六　同　上　重政畫

俠客意氣地安賣　六　欣堂間人作　國丸畫

小女郎手昔編笠　六　雪麿作　國虎畫

紅粉繪賣昔風俗　六　同　上　英泉畫

今戶土產女西行　六　馬琴作　國貞畫

鎌倉山百人一首　三　春町作　安秀畫

蝶千鳥鎌倉模樣　六　春水作　英笑畫

光琳摸樣梅略畫　六　雪麿作　重政畫

新形染松の葉重　三　春町作　安秀畫

花紅葉吉野龍田　六　小三馬作　二世豐國畫

面白沙須磨雪平　六　東里作　國安畫

傾城怪談冬の月　六　菅良齋作　重政畫

昔語忠義智達磨　十　可候作　英泉畫

漢楚賽擬選軍談　八　馬琴作　國安畫

第二編は天保元年出板す。

西國奇談月夜樂　六　德升作　國芳畫

第二編は天保二年出板す。

玉屋晋兵衞補伏　四　志滿山人作　自　畫

前編『風薫葛裏葉』は文政十一年出板なり。

傾城水滸傳六編　八　馬琴作　國安畫

第七編は天保元年出板す。

諸譯博多小女郎譚　六　一九作　英泉畫
金草鞋十九編　六　同上　重政畫
金毘羅船五編　六　馬琴作　英泉畫
金毘羅船六編　八　同上　同上
第七編は天保元年出板す。
黑雲太郎二編　六　菅良齋作　英泉畫
初編は文政十一年出板、二編にて止む。
七男婦傳四編　六　春水作　英泉畫
第四編にて止む。
敵討鶉權兵衛　六　正藏作　重政畫
柳亭校合とあり。
偐紫田舍源氏　四　種彥作　國貞畫
初編「桐壺の卷」
桐壺の卷は尙二編に接げり。
本書は柳亭一生の最傑作として推重されし名著にして、本年より天保十三年まで十四年に亘り、毎編四冊づゝ三十八編を出板したり、然るに毫も讀者の倦厭を來さゞるのみか、發市するに隨ひ益々好評嘖々として次卷の刷出を迫らるゝの狀勢なりしと云へり、作者種彥の得意亦想ふべきなり。

於竹大日如來稚繪解　三　一九作　國芳畫
本朝班女扇　四　欣堂間人作　國丸畫
本朝斑猫傳　四　小三馬作　重政畫
七種粥物語　六　東里作　英泉畫
忠臣藏合鏡　六　未佛作　國兼畫
男結花緣記　六　一九作　重政畫
娘曆振袖初　四　小三馬作　國安畫
後編天保二年出板す。
風俗金魚傳　八　馬琴作　國安畫
第二編天保元年出板す。
風流列女傳　六　雪麿作　國貞畫
第二編天保元年出板す。
殺生石六編　馬琴作
第七編天保元年出板す。

天保元庚寅年（文政十三年改元）

作者
尾上梅幸　五十一歲
瀨川路考　二十九歲

山東京山　六十二歳
閑亭傳笑
曲亭馬琴　六十四歳
爲永春水　四十一歳(代作のみ)
柳亭種彦　四十八歳
志満山人
花笠文京　四十六歳(代作のみ)
一筆庵可候　三十九歳(代作のみ)
五柳亭德笑　三十八歳
西來居未佛
市川團十郎　四十歳(七代目)
墨川亭雪麿　三十四歳
十返舎一九　六十七歳
式亭小三馬　十九歳
二世戀川春町
二世烏亭焉馬　三十九歳
四世鶴屋南北　去年七十五歳作本年出板
五世鶴屋南北　通稱孫太郎可祐と號す、四世南北の孫にして、坂東彦十郎と呼び、俳優なりしも狂言作者となり勝俵藏と號しぬ、後年名を直江屋重兵衛と改め、深川仲町に娼樓を營めり、寛政八辰年に出生し當年三十五歳なり。

十字亭三九　絲井氏名は武、通稱鳳助上毛黒川の産なり、別號紀山人また花輪堂、赤城子等の號あり、狂歌を能くし、蜀山人の命名にて狂名を瀧の絲丈と呼びしが、後ち春興と改め梅園と號せり、畫を蹄齋北馬に學びまた丹青の妙あり、二十七歳にして十返舎一九の門に入る、よつて十字亭三九を其作名とせり、本年師號を襲ぎ二世十返舎一九と改め上野山麓に住す、後年は二世南仙笑楚滿人(卽ち爲永春水)に就き登仙笑呑人と號したり。

柳泉亭種正　柳亭種彦門人なり。

畫工

貞齋泉晁
溪齋英泉　三十九歳
春齋英笑
勝川春扇
歌川國貞　四十五歳
歌川國安　三十七歳
歌川國直　三十六歳

歌川國芳　三十四歳
歌川國信
歌川國丸
歌川安秀
歌川貞景
歌川貞房
歌川貞秀　橋本氏、通稱兼次郎名は玉蘭五雲亭と號す、また玉蘭齋とも號せり、歌川國貞門人たり貞秀は多く一時の匿名を用ゐ、古板の改作物を出せり、板元の依頼によりて歟否かは知らねど、見識なき畫工と見えたり。
志滿山人　卽ち歌川國信なり。
二世北尾重政

板　元

鶴屋喜右衞門
和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞
岩戸屋喜三郎
佐野屋喜兵衞
西村屋與八
森屋治兵衞
蔦屋吉藏
丸屋甚八
川口正藏
山本平吉

雜　記

正月十三日二の卯の日をトし四世鶴屋南北の葬儀を執行す、其式極めて滑稽を弄す。
閏三月二十四日六樹園宿屋飯盛歿す、享年七十八、淺草黑船町正覺寺地中哲相院に葬る、法號六樹院臺譽五老居士

書　目

浮世草子夢物語蝶雨羽二枚屛風　六　梅幸路考合作　英泉畫
一筆庵可候の代作なるべし。
繪組姉廿一幕妹廿之二丁續話　四　三九作　泉晁畫
花咲綱五郞二重衣北里色揚　六　京山作　國安畫
後編天保四年出板す。
小野小町浮世源氏繪　四　京山作　國貞畫
第二編天保二年出板す。
嗚呼忠臣楠子由來　五　德升作　貞秀畫

伊勢街道錢懸松　六　傳笑作　貞景畫
代夜待白女辻占　六　馬琴作　國貞畫
怪談波羅津々美　六　德升作　國芳畫
昔ながら今物語　六　四世鶴屋南北作　國貞畫
陸奥花雪之白旗　四　德升作　貞房畫
小倉袴女英勇錄　四編揃末佛作　國信畫
黃白菊蝶の曲舞　六　種正作　國貞畫
濱眞砂相續稗史　六　五世鶴屋南北作　春扇畫
　此書外題面より察するに、或は南北が五世を相續せし事を利かせしにあらずやと想はる。
擂鉢太郎豪傑譚　四　梅幸作　英泉畫
　爲永春水之を代作す。
江戶錦廓の春風　六　團十郎作　國貞畫
　五柳亭德升之を代作す。
昔々歌舞妓物語　四　種彥作　國丸畫
　初日夕霧藤の裏葉
　二日目の卷天保二年出板す。
逃染遠山鹿の子　二十四種彥作　國貞畫
　本年より天保七年迄に、每編四冊づゝ六編までを出板せるも、其年次不明に由り玆に合せ揭げたり。

五虎猛勇傳初編　六　雪麿作　二世重政畫
五虎猛勇傳二編　六　同上　重政畫
　第三編天保二年出板す。
風俗金魚傳二編　八　馬琴作　國安畫
　第三編天保二年出板す。
風流列女傳二編　六　雪麿作　國貞畫
　第三編天保三年出板す。
傾城水滸傳七編　八　馬琴作　國安畫
　第八編天保二年出板す。
小ひな半兵衛難波土產　四　志滿山人作　自畫
新製小人島廻　四　一九作　貞秀畫
怪談春雨草紙　六　德升作　國安畫
大嶋屋婚禮盃　六　雪麿作　英泉畫
擬選軍談二編　八　馬琴作　國安畫
　第三編天保二年出板す。
金毘羅船七編　八　馬琴作　英泉畫
　第八編天保二年出板す。
修紫田舍源氏　八　種彥作　國貞畫
　第二編　桐壺、帚木、葵の卷
　第三編　空蟬の卷

武勇功者譚	五	一九作	英笑畫
三國妖狐傳	六	德升作	國安畫
相撲推古傳	十二	二世焉馬作	國安國直畫
金備花盛場	三	一九作	安秀畫
魁緋役曾我	六	三九作	國安畫
御誂青島廻	三	一九作	同上
双面桂川水	六	小三馬作	同上
仇競梅花染	六	二世春町作	英泉畫
袖笠雪白砂	六	志滿山人作	自畫
江戸紫春曙	六	七世團十郎作	重政畫

代作者詳ならず。

傾城三國志	八	雪麿作	國貞畫

第二編天保二年出板す。

對白浪後編	四	梅幸作	英泉畫

北笠文京之を代作す。

前編『補繪對白浪』は文政十一年出板なり。

殺生石七編　馬琴作

第八編天保二年出板す。

○

蔵雪曰、挿繪の畫工は、漸次歌川派の專有する所となり、本年の畫工十六人中其十一人は皆歌川派に屬せり、年を逐ふて草雙紙の畫は全部同派の手中に歸す、其流行寔に隆むなりといふべし。

天保二辛卯年

作者	
柳亭種彦	四十九歲
東里山人	四十七歲
尾上梅幸	五十二歲
山東京山	六十三歲
曲亭馬琴	六十五歲
爲永春水	四十二歲
五柳亭德升	三十九歲
式亭小三馬	二十歲
墨川亭雪麿	三十五歲
十返舍一九	六十八歲
櫻川慈悲成	六十五歲
市川團十郎	四十一歲(七代目)
二世戀川春町	

二世烏亭焉馬　四十歳
五世鶴屋南北　三十六歳
笠亭仙果　高橋氏、名は廣道字は子由、通稱龜三郎後彌太郎と改む、尾張熱田の問屋役なり、狗々山人、轍齋、招祿翁等の別號あり、淺草新旅籠町に住し、柳亭種彥の門に入り笠亭仙果を作名とす、種彥歿後二世柳亭種彥を襲名せしも故ありて之を止め更に柳亭種秀と號せり、又四世淺草庵を襲げり、文化三寅年に生れ本年二十六歳なり。
松亭金水　中村氏、名は經年又保定と稱す、通稱源八積翠道人と號す、筆耕者谷金川門人にして筆耕を業とす、常に爲永春水の人情本を淨書し、自得する所ありて著作を始む、故に金川春水の各一字を取り金水を作名とせりと云ふ、初め神田大和町に住せしが淺草寺地内、小傳馬町三町目北新道等に轉じ後本郷附木店（菊坂附近）に移居す、其出生寛政九巳年にして當年三十五歳なり。

畫工

溪齋英泉　四十歳
貞齋泉晁
歌川國貞　四十六歳
歌川國安　三十八歳
歌川國芳　三十五歳
歌川廣重　三十五歳
歌川國丸
歌川安秀
歌川貞房
歌川貞秀
二世歌川豐國　五十五歳
二世北尾重政

板元

山口屋藤兵衛
和泉屋市兵衛
鶴屋喜右衛門
岩戸屋喜三郎
佐野屋喜兵衛
森屋治兵衛
西村屋與八
山本平吉
丸屋甚八

蔦屋吉藏
川口正藏

雜記

七月二十六日七珍萬寶（森羅亭）歿す、享年七十、西本願寺中妙延寺に葬る、法號釋玄蓮信士。

八月七日十返舍一九歿す、享年六十八、淺草土富店善龍寺地中東陽院に葬る、法號心月院一九日光信士、辭世に曰く「此世をばどりや御暇にせん香と共についにははい左樣なら」

書目

高木織右衛門 武勇水陸傳　十　徳升作　安秀畫
續編「矢猛心兵變」も本年出板す。
苅萱桑門筑紫蔦繪　六　二世蔦馬作　國貞畫
武者修行話 矢猛心兵變　十　徳升作　國芳畫
本年出板「武勇水陸傳」の續編なり。
正本製十二編 花咲綱五郎　四　種彥作　國貞畫
正本製今年にて終る。
倭假名懸想文賣　五　東里作　泉晁畫
富士裾野浮蝶鳥　四　種彥作　英泉畫
一の谷青葉後記　五　二世春町作　貞秀畫

天津各村異物語　六　東里作　二世豐國畫
小町紅牡丹隈取　六　鶴屋南北作　國貞畫
清盛榮華之嚴島　五　徳升作　貞房畫
二十四孝稚教訓　四　金水作　泉晁畫
出放題無智哉論　六　東里作　廣重畫
戲場稿本當現建　四　蔦馬作　國貞畫
戲場稿本第二編　四　同上　同上
第三編及四編天保三年出板す。
合物端唄の彈初　八　仙果作　國貞 國安畫
柳亭種彥校とあり。
娘曆振袖初後編　四　小三馬作　國安畫
前編文政十二年出板せり
浮世源氏繪二編　四　京山作　國貞畫
第三編及四編天保三年出板す。
傾城三國志二編　八　雪麿作　同上
第三編天保四年出板す。
五虎猛勇傳三編　六　雪麿作　二世重政畫
第四編天保八年出板す。
風俗金魚傳三編　四　馬琴作　國安畫
本編にて大尾す。

昔々歌舞妓物語　四　種彦作　國貞畫
二日目怪談三島於仙
初日の卷は天保元年出板なり二日目にて終る。
傾城氣質夜梅川　六　七世團十郎作　國貞畫
五柳亭德升之を代作す。
傾城水滸傳八編　八　馬琴作　國安畫
第九編天保三年出板す。
傾城外八文字　五　德升作　安秀畫
春狂言善惡鏡　六　二世春町作　二世豐國畫
伊勢海淮阿濱　六　雪麿作　重政畫
國字書三國志　六　同上　國貞畫
天下茶屋敵討　四　一九作　豐國畫
寛政十一年板『殿下茶屋聚仇討』の書を改め再板せしなり。
西國奇談二編　五　德升作　英泉畫
初編文政十二年板二編にして止む。
擬選軍談三編　八　馬琴作　國安畫
三編にて大尾す。
金毘羅船八編　八　馬琴作　英泉畫
八編にて大尾す。

偐紫田舍源氏　八　種彦作　國貞畫
第四編　夕顔の卷の上
第五編　夕顔の卷の下
菊黄金陸奥　四　德升作　貞房畫
今昔虚實錄　六　慈悲成作　二世豐國畫
北條時政記　五　德升作　貞房畫
新編金瓶梅　八　馬琴作　國安畫
第二集上卷天保三年出板す。
敵討湊の曙　六　春水作　國丸畫
口繪は柳川重信の筆なり。
殺生石八編　馬琴作
第九編天保三年出板す。
歌枕僞物語　四　梅幸作　英泉畫
僞物語二篇　四　同上　泉晁畫
松亭金水之を代作す。
嘉永二年一筆庵可候に『歌枕二世物語』の作あり。
怪談鴫見絞　六　鶴屋南北作　國貞畫
前編『怪談巖倉萬之丞』は文政十一年出板なり。

天保三壬辰年

作者

柳亭種彦　五十歳
山東京山　六十四歳
志滿山人
曲亭馬琴　六十六歳
笠亭仙果　二十七歳
松亭金水　三十六歳
五柳亭德升　四十歳
墨川亭雪麿　三十六歳
十返舍一九　去年六十八歳作（本年出板）
二世烏亭焉馬　四十一歳
二世十返舍一九　即十字亭三九なり。
歌扇亭三ッ丸
墨春亭梅麿　小山氏名は平吉後平七と稱す、號は春麵屋、また梅園及び梅舍春鳥を其別號となせり。
仙客亭柏琳　荒井氏通稱金次郎、相州大磯に住す、柳亭種彦の門人なり。
持丸　假設の人名なるべし
阪東簑助　俳優なり、俳名秀朝、今年四代目三津五郎を襲ぎ、嘉永年間十一代目森田勘彌を襲名す、亨和二戌年に生れ本年三十一歳なり。
烏有散人　歌川國芳のみ書けるを見れば、或は國芳の匿名なるやも知れず。

畫工

歌川國貞　四十七歳
歌川國安　三十九歳
歌川國芳　三十六歳
歌川安秀
歌川貞秀
溪齋英泉　四十一歳
貞齋泉晁
志滿山人
二世歌川豐國　五十六歳
二世北尾重政

板元

鶴屋喜右衛門
山口屋藤兵衛
和泉屋市兵衛
佐野屋喜兵衛

西村屋與八
森屋治兵衛
丸屋甚八
蔦屋吉藏
山本平吉

雜記

正月六日五代目瀨川菊之丞(多門路考)歿す、享年三十一、本所押上大雲寺に葬る。
閏十一月二十八日柳川重信歿す、享年四十六、下谷入谷宗慶寺に葬る、法號無覺院鐵牛良卯居士、辭世の句あり「投いれに水もととかす柳かな」
七代目市川團十郎名を海老藏と改む。
岩井粂三郎六代目半四郎と改名す。
阪東簑助四代目三津五郎を襲名す。
爲永春水人情本『春色梅曆』を著はす。

書目

宮城野小萩娘忍摺之色絹曾我振袖日記　八　梅麿作　泉晁畫
奇妙頂禮地藏之道行　二　種彥作　國貞畫
つれ〴〵艸玉の盃　六　京山作　國芳畫
第二編『日暮硯』天保四年出板す。
春霞ゆるしの廓　六　德升作　國芳畫
花櫻木春の夜話　四　種彥作　英泉畫
紙治小春天網島　六　二世焉馬作　國貞畫
時雨傘對の菱紋　六　志滿山人作　自畫
十二雄雌赤友錄　八　三ッ丸作　國安畫
千代褚良著聞集　八　馬琴作　同上
同著聞集第二編　四　同上　二世重政畫
二編にて終る。
金瓶梅二集上卷　四　馬琴作　國安畫
下卷天保四年出板す。
浮世源氏繪三編　四　京山作　國貞畫
浮世源氏繪四編　四　同上　同上
第五編天保四年出板す。
花街雀竹の夜遊　十　仙果作　國貞畫
柳亭種彥校とあり。
五節供稚童講釋　八　京山作　國安畫
後編天保四年出板す。
二鷹羽有馬之藤　二　持丸作　安秀畫
十返舍一九校とあり。
黒本の改作なりと云ふ。

風流列女傳三編　六　雪麿作　豐國畫
第二編は天保元年出板なり三編にて大尾す。
傾城水滸傳九編　八　馬琴作　國安畫
第十編天保四年出板す。
三瀬川上品仕立　二　種彦作　國貞畫
五代目瀬川菊之丞追善の作なり。
此菊之丞は俗に多門路考と曰ひ、天保三年正月六日三十一歳にて歿せり、本所押上大雲寺に葬る、二代目の濱村屋大明神と呼ばれし人氣役者なり。
熊谷武功軍扇　六　鳥有散人作　國芳畫
戲場稿本三編　四　二世焉馬作　國貞畫
戲場稿本四編　四　焉馬作　同　上
初編二編共に天保二年出板なり四編にて終れり。
偐紫田舍源氏　八　種彦作　國貞畫
第六編　若紫の卷
第七編　末摘花の卷
菊壽童續編後日盃　四　京山作　國貞畫
前編『菊壽童霞盃』は文政十年板又三編『三編盃』は天保八年に出板す。
忠臣狸七役　二　一九作　安秀畫

梅曆魁草紙　六　德升作　國安畫
義經越路松　六　一九作　貞秀畫
義仲朝日鎧　四　鳥有作　國芳畫
時話今櫻駒　六　金水作　泉晁畫
敵討相宿噺　六　德升作　國安畫
花吹雪綠柵　六　柏琳作　國芳畫
柳亭種彦校とあり。
向人廓山彦　六　簑助作　國貞畫
墨川亭雪麿之を代作す。
殺生石九編　馬琴作
文政七年初編出板より引續き九編にて大尾す、
女眉間尺　六　二世一九作　國安畫

天保四癸巳年

作　者

松亭金水　三十七歲
柳亭種彦　五十一歲
笠亭仙果　二十八歲
山東京山　六十五歲

曲亭馬琴　六十七歳
三亭春馬
林屋正藏　五十三歳
墨春亭梅麿
五柳亭德升　四十一歳
式亭小三馬　二十二歳
墨川亭雪麿　三十七歳
櫻川慈悲成　六十七歳
十返舍一九　再板物
二世烏亭焉馬　四十二歳
二世十返舍一九
瓢亭種繁　吉見氏柳亭種彦門人なり。
市村家橘　俳優家橘幼名龜之助、文政四年十二代目市村羽左衞門を襲ぐ、家橘は俳名なり、嘉永四年市村竹之丞と改名す、著作の名を出すと雖も皆墨川亭雪麿、松亭金水及び畫工泉晁等の代作する所なり、文化九申年に生れ本年二十二歳なり。
貞齋泉晁　通稱吉藏、畫工なり、能く他人の代作をなせり。

畫工

貞齋泉晁
歌川國貞　四十八歳
歌川國安　四十歳
歌川國直　三十九歳
歌川國芳　三十七歳
歌川廣重　三十七歳
歌川貞秀
歌川貞景
二世歌川豐國　五十七歳
二世北尾重政
眉山

板元

蔦屋吉藏
山本平吉
森屋治兵衞
西村屋與八
佐野屋喜兵衞
和泉屋市兵衞
山口屋藤兵衞
鶴屋喜右衞門

雜記

十二月十日仙鶴堂歿す、享年四十六。
歌川國貞英一珪の門に入る。

書目

初夷之商賣者御大相志日多發霽　四　二世一九作　眉山畫
小萬彥三野夫鶯訛投節　四　梅麿作　泉晁畫
菅原流梅の花形　五　金水作　貞秀畫
霞帶しめて如月　六　德升作　國安畫
吾妻花所縁襧襠　六　小三馬作　國貞畫
八花房藤王傳記　六　一九作　貞景畫
金瓶梅二集下卷　四　馬琴作　國安畫
出世奴小萬之傳　四　種彥作　國直畫
遠山鹿の子四編　四　同上　國貞畫
遠山鹿之子五編　四　同上　同上
鏡山故鄉之錦繪　六　雪麿作　二世豐國畫
伏見常磐熊阪譚　四　種彥作　國貞廣重畫
三國志畫傳七編　八　一九作　國安畫
朧笠雨小春容辯　八　仙果作　國貞畫
　柳亭種彥校とあり。
新八百屋靑獻立　四　仙果作　國安畫
　柳亭種彥校とあり。
輪廻機綱夢白浪　四　家橘作　泉晁畫
　松亭金水及畫工貞齋泉晁之を代作す。
忠臣藏替伊呂波　四　雪麿作　國貞畫
　第二編天保五年出板す。
花咲綱五郎後編　六　京山作　國安畫
　前編天保元年出板なり。
傾城三國志三編　八　雪麿作　國貞畫
　第四編天保六年出板す。
傾城水滸傳十編　八　馬琴作　國安畫
　第十一編天保五年出板す。
浮世源氏繪五編　四　京山作　國貞畫
　第六編天保五年出板す。
つれづれ草二編日暮硯　六　京山作　國芳畫
　初編「つれづれ艸玉の盃」は天保三年板又三編「見ぬ世の友」は天保九年出板す。
本朝武王軍談　六　二世一九作　國芳畫
笑談本養談數　四　慈悲成作　國貞畫
七奇越後砂子　六　雪麿作　國安、泉晁、貞秀合畫
稚童講釋後編　八　京山作　國安畫

前編は天保三年出板なり。
修紫田舎源氏　十二　種彦作　國貞畫
第八編　紅葉の賀の卷
第九編　紅葉の賀の卷
第十編　末摘花の卷
繪本武智袋　四　二世一九作　英泉畫
尾形鱗生傳　五　春馬作　二世重政畫
噺本笑富林　四　正藏作　同　上
春遊霞彩色　四　金水作　泉晁畫
兩顏忍夜櫻　四　二世焉馬作　國安畫
忍夜櫻二編　四　同　上　國芳畫
色上閣七島　六　種繁作　同　上
笠亭仙果序文あり。
忠臣店請狀　四　一九作　貞秀畫
寛政九年板の畫を改め再出せり。
化皮太皷傳　六　一九作　國芳畫
此書は文化元年絶板せられし『化物太平記』の畫と外題を改め再び出板せしなり。

天保五甲午年

作者
笠亭仙果　二十九歳
曲亭馬琴　六十八歳
市村家橘　二十三歳
瓢亭種繁
三亭春馬
山東京山　六十六歳
柳亭種彥　五十二歳
花笠文京　五十歳（代作のみ）
林屋正藏　五十四歳
墨春亭梅麿
墨川亭雪麿　三十八歳
式亭小三馬　二十三歳
仙客亭柏琳
二世烏亭焉馬　四十三歳
五世鶴屋南北　三十九歳
風亭馬流　淺見氏
中村芝翫　五十七歳
烏有山人

書工

貞齋泉晁
歌川國貞　四十九歳
歌川國安　四十一歳
歌川國直　四十歳
歌川國芳　三十八歳
歌川廣重　三十八歳
歌川國虎
歌川貞秀
西川景松
二世北尾重政

板元

山本平吉
蔦屋吉藏
竹内孫八
西村屋與八
森屋治兵衛
佐野屋喜兵衛
鶴屋喜右衛門
和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛

雜記

春正月曲亭馬琴蟹行散人の匿名を以て『江戸作者部類』を著し、自家の利害を打算しつゝ大に他の作家を月旦す。

四月十五日塵外樓石川清澄歿す、享年四十九、淺草正覺寺中哲相院に葬る、法號塵外樓清哲大澄居士。

七月六日畫工歌川國安歿す、享年四十一。

式亭小三馬父號を襲ぎ二世三馬と稱す。

書目

千本櫻花衣吉野葛織　四　梅麿作　泉晁畫
油町製茶種黄表紙　四　仙果作　貞秀畫
柳亭種彥校とあり。
千代見草調富貴組　四　仙果作　國安畫
柳亭種彥校とあり。
傾城水滸傳十一編　八　馬琴作　國安畫
第十二編天保六年出板す。
江戸紫藤の花鳥　四　馬流作　景松畫
宇治拾遺煎茶友　六　雪麿作　泉晁畫
大和染對の振袖　八　二世焉馬作　國芳畫

大小叢根の鮫鞘　八　雪麿作　二世重政畫
石橋山義兵白旗　四　烏有山人　國芳畫
戀山崎妹脊合鴛　六　小三馬　國貞畫
若衆哉梅之枝振　六　種彦作　同上
已成鐘響數千里　六　雪麿作　國直畫
其裏梅眞砂白浪　四　芝甑作　國貞畫
墨川亭雪麿之を代作す。
眞砂の白浪二編　四　芝甑作　國貞畫
墨川亭雪麿之を代作す。
眞砂の白浪三編　四　家橘作　國貞畫
墨川亭雪麿之を代作す。
蝶小蝶春の花園　六　芝甑作　重政畫
二世烏亭焉馬之を代作す。
旗飄莵水之葛葉　六　種繁作　廣重畫
柳亭種彦序文あり。
夜討曾我人形製　六　春馬作　國貞畫
後編天保八年出板す。
浮世源氏繪六編　四　京山作　國貞畫
第七編天保六年出板す。
正本製於仲清七　六　種彦作　國貞畫

文化十二年作の再板なり。
お花半七　開花繪扇　四　梅麿作　泉晁畫
此糸蘭蝶　廓花若木榮　六　京山作　國直畫
尾花振袖　祇王祇女傳　六　芝甑作　國貞畫
花笠文京之を代作す。
繪本曾我物語　六　重政畫
邯鄲諸國物語　八　種彦作　國貞畫
初編近江出羽の卷（藥王二郎の傳）
此冊子亦種彦名作の一に數へられしものにて、天保十二年迄に三編を著はし、種彦歿後に笠亭仙果其續編を出せしも柳亭の作に及ばざる事遙に遠く、左程に行はれざりしと云ふ。
替伊呂波二編　四　雪麿作　國貞畫
第三編天保六年出板す。
修紫田舍源氏　十二　種彦作　國貞畫
第十一編　葵の卷
第十二編　花の宴の卷
第十三編　榊の卷
噺本百家撰　四　正藏作　貞秀畫
國性爺合戰　六　雪麿作　國虎畫

睦月深仲町　六　五世鶴屋南北作　國貞畫
星下梅早咲　六　柏琳作　貞秀畫
柳亭種彥校とあり。
浮世世說　四　種彥作　國貞畫

天保六乙未年

作者

樂亭西馬　三十七歲
曲亭馬琴　六十九歲
爲永春水　四十六歲
萍亭柳菊
柳亭種彥　五十三歲
山東京山　六十七歲
東里山人　五十一歲
林屋正藏　五十五歲
笠亭仙果　三十歲
墨春亭梅麿
墨川亭雪麿　三十九歲
千歲亭松竹　七十餘歲
式亭小三馬　二十四歲
十返舍一九　遺稿歟
二世烏亭焉馬　四十四歲
二世十返舍一九

畫工

貞齋泉晁
溪齋英泉　四十四歲
歌川國貞　五十歲
歌川國直　四十一歲
歌川國芳　三十九歲
歌川貞秀
歌川貞房
西川景松
西川東一
二世北尾重政
歌川國安　去年畫きし物ならむ。

板元

蔦屋吉藏
竹內孫八
山本平吉

丸屋甚八
森屋治兵衛
西村屋與八
佐野屋喜兵衛
和泉屋市兵衛
山口屋藤兵衛
鶴屋喜右衛門

雜記

正月林屋正藏名を林泉と改む、後また正藏に復す。
五月千歳亭松武歿す、享年七十餘。
十一月朔日二世歌川豊國(國重)歿す、享年五十九。

書目

吾妻與五郎 銀金貝蝶對鋲　四　梅麿作　泉晁畫
おさん茂兵衛 朧染浮名色衣　四　同上　貞秀畫
天竺德兵衛異國話　四　西馬作　國芳畫
洗鹿子所緣江戸染　六　雪麿作　英泉畫
國字水滸傳十三編　四　種彦作　國芳畫
傾城水滸傳十二編　八　馬琴作　國安畫
第十三編天保七年出板す。
菅原傳授手習鑑　六　雪麿作　國芳畫
唄祭文縁の合彈　四　小三馬作　國貞畫
笠松峠戀の夢車　四　春水作　貞秀畫
復讐曲輪之達引　六　京山作　國芳畫
三國太郎再來傳　六　一九作　東一、國直、國芳合畫
上州機筆之綾織　六　柳菊作　貞秀畫
柳亭種彦校とあり。
阪東太郎後世譚　八　西馬作　二世重政畫
第二編上下の卷天保九年及十年出板す。
此作は文政七年板式亭三馬作の『阪東太郎強盜譚』の續編なり。
關東小六昔舞臺　種彦作　貞秀畫
文政十一年出板の書を改め再出せしなり。
傾城三國志四編　八　雪麿作　國貞畫
四編にして大尾す。
花紅葉一對若衆　四　種彦作　國貞畫
文化十三年作の増補再板なり。
浮世源氏繪七編　四　京山作　國貞畫
浮世源氏繪八編　四　同上　同上
第九編天保七年出板す。
花園平三 柳眉春朝妻　四　梅麿作　景松畫

風俗伊勢物語 四 東里作 貞秀畫
　第二編天保七年出板す。
替伊呂波三編 四 雪麿作 國貞畫
　第四編天保七年出板す。
邯鄲諸國物語 四 種彥作 國貞畫
　大和の卷前編（茂山鐘三郞之傳）
大和の卷後編天保八年出板す。
偐紫田舍源氏 十六 種彥作 國貞畫
　第十四編 榊の卷
　第十五編 榊の卷
　第十六編 花散里の卷
　第十七編 須磨の卷
自問自答戲言句合 二 種彥作 國芳畫
爲朝一代記 二 松竹作 貞秀畫
花兄魁草紙 六 二世焉馬作 國貞畫
其儞譽之碑 四 貞房畫
怪談桂川浪 四 正藏作 國貞畫
賴朝一代記 五 春水作 貞秀畫
枕琴夢通路 六 仙果作 同 上
　柳亭種彥校とあり

三國志畫傳 十篇 初代一九譯 國安作
　譯者並に畫工とも既に故人なれば遺筆なるべし。

天保七丙申年

作者

關亭傳笑	
曲亭馬琴	七十歳
瓢亭種繁	
林屋正藏	五十六歳
山東京山	六十八歳
松亭金水	四十歳
東里山人	五十二歳
柳亭種彥	五十四歳
笠亭仙果	三十一歳
墨春亭梅麿	
五柳亭德升	四十四歳
式亭小三馬	二十五歳
墨川亭雪麿	四十歳
仙客亭柏琳	

市川團十郎　四十六歳（七代目）

五世鶴屋南北　四十一歳

土橋亭りう馬　通稱彌太郎植木店に住居す、落語家にして初代烏亭焉馬の門人なり、初めりん馬と號し、次で二代目の龍生となり、後龍馬改めりう馬と號せり、寛政十一未年に生る本年三十八歳。

藤壽亭松竹　千歳亭松武の別號なり（文化五年の條參看すべし）昨年の著作を今年出板せしなるべし、松竹は去年夏歿せしなり。

寶田千町　中川氏、名は恭里通稱金兵衞賜堂と號す、小倉藩士にして下谷長者町に住し筆耕業たり、谷金川と號せり。

阪東秀朝　阪東蓑助の俳名なり、本年三十五歳（天保三年蓑助の項參看すべし）

畫工

西川景松

歌川國貞　五十一歳

歌川國直　四十二歳

歌川國芳　四十歳

歌川貞秀

歌川貞房

歌川貞虎

歌川國虎

歌川芳虎　通稱辰五郎（一に辰之助また辰三郎に作る）錦朝樓と號す、別號を一猛齋と曰ひ、歌川國芳の門人にして、長谷川町に住せり、其後師の歿後十三年忌に、故あり同門の爲めに忌み却けられ、遂に孟齋と改號せり、時に明治六年なり。

溪齋英泉　四十五歳

二世北尾重政

板元

山口屋藤兵衞

和泉屋市兵衞

鶴屋喜右衞門

佐野屋喜兵衞

森屋治兵衞

西村屋與八

大黑屋平吉　兩國吉川町に住し松壽堂と號す、俗稱大平。

川口正藏

蔦屋吉藏
山本平吉
竹内孫八

雜記

二月十九日欣堂閑人歿す、享年四十二、辭世に曰く「それ辭世さる程に又是までも昔の人の口眞似をして」

四月八日六代目岩井半四郎歿す、享年三十八、深川淨心寺に葬る。

八月十四日曲亭馬琴古稀の賀莚を柳橋萬八樓に開く、當日使用の膳部千二百八十四人前酒三樽半と其盛況想ふべし。

十一月十日馬琴其居を四谷信濃町に移す。

秋收冬藏歿す。

書目

夕ぎり伊左衛門 松爾藤屋襠雛形 四 梅麿作 景松畫
昔話五人男 常磐染雁金五紋 四 梅麿作 國貞畫
烏勘左衛門忠義傳 四 傳笑作 芳虎畫
傾城水滸傳十三編 四 馬琴作 貞秀畫
此書十三編にて大尾す。

鏡情三時世粧 鶯袖花鏡梅 四 梅麿作 貞秀畫
柳亭種彦序文並校とあり。
東國奇談月夜櫻 六 德升作 國芳畫
土筆長日之樂書 六 雪麿作 國貞畫
千本櫻後日仇討 四 雪麿作 貞虎畫
歌骨牌末廣文庫 六 松竹作 二世重政畫
勝角力二代顏觸 六 小三馬作 國貞畫
碁太平記白石噺 四 千町作 貞秀畫
力瘤三八之異傳 四 雪麿作 景松畫
稻葉山操之松枝 四 千町作 國芳畫
圍碁手段鶴巢籠 四 種繁作 貞秀畫
眞鳥兼道雛物語 三 小三馬作 貞房畫
滑稽話年中行事 四 正藏作 貞秀畫
やの字結戀彌天 四 雪麿作 英泉畫
伽三味線筆之操 四 小三馬作 國貞畫
雲綾瀨月夜合樹 四 雪麿作 同上
昔摸樣娘評判記 六 京山作 同上
初日於七吉三
天保八年二日目として第二編出板す。
東海道五十三驛 五世鶴屋南北作 國芳畫

第二編天保八年出板す。
浮世源氏繪九編　四　京山作　國直畫
浮世源氏繪十編　四　同上　同上
第十一編天保八年出板す。
噺本木像談語　四　正藏・りう馬合作　貞秀畫
小三馬賣物景物賑式亭　一　小三馬作　國貞畫
式亭自家商品の景物用に作れり。
平家物語初編　四　金水作　國直畫
平家物語二編　四　同上　同上
平家物語三編　四　同上　同上
平家物語四編　四　同上　同上
此作四編にて止む。
伊勢物語二編　四　東里作　貞秀畫
第三編及第四編天保八年出板す。
替伊呂波四編　四　雪麿作　國貞畫
第五編天保九年出板す。
偐紫田舍源氏　十六　種彥作　國貞畫
第十八編　明石の卷
第十九編　明石の卷
第二十編　明石の卷

第二十一編　明石の卷
操競優軍記　六　小三馬作　國貞畫
敵討梅繼穗　四　千町作　國芳畫
怪談花吹雪　四　金水作　景松畫
花蔭賤俳優　四　仙果作　國虎畫
柳亭種彥校とあり。
大和錦守袋　四　秀朝作　貞秀畫
墨川亭雪麿之を代作す。
紫房紋ゐ箱　六　柏琳作　貞秀畫
柳亭種彥校とあり。
裏表忠臣藏　十八　七世團十郎作　國貞畫
代作者詳ならず。
取合三組盃　四　京山作　國虎畫
第二編天保十一年出板す。
復讐千穀取　四　松竹作　國芳畫
一名『復讐寶之市』
文化七年板『千石通稚智惠鑑』の改題再板なり。
源平武者鑑　六　貞秀畫
寶田千町校とあり。
古板の再摺なるべし。

天保八丁酉年

作　者

爲永春水　四十八歲
山東京山　六十九歲
柳亭種彥　五十五歲
樂亭西馬　三十九歲
笠亭仙果　三十二歲
東里山人　五十三歲
寶田千町
三亭春馬
瓢亭種繁
曲亭馬琴　再板物
一亭萬丸　傳詳ならず。
墨春亭梅麿
五柳亭德升　四十五歲
墨川亭雪麿　四十一歲
式亭小三馬　二十六歲
五世鶴屋南北　四十二歲

二世十返舍一九

畫　工

歌川國貞　五十二歲
歌川國芳　四十一歲
歌川貞房
歌川貞秀
歌川廣重　四十一歲
西川景松
溪齋英泉　四十六歲
二世北尾重政

板　元

鶴屋喜右衛門
山口屋藤兵衛
和泉屋市兵衛
佐野屋喜兵衛
西村屋與八
森屋治兵衛
蔦屋吉藏
山本平吉
川口正藏

雜　記

四五年前より馬琴眼疾に惱み今年右眼の明を失ふ

○　横縞の衣物此頃より流行す。

書　目

（おふさ徳兵衛）妹脊結手匣玉章	四	梅麿作	貞秀畵
浮世源氏繪十一編	四	京山作	國貞畵
浮世源氏繪十二編	四	同　上	同　上

第十三編天保九年出板す。

（小栗照天）春駒小栗雜談	四	梅麿作	景松畵
（椀久松山）成瓢簞末廣盃	四	同　上	貞秀畵
（三勝半七）花枪對舞風流	四	同　上	國貞畵
讀宮城野忍の昔	四	種彥作	同　上
總累赤繩之取組	六	西馬作	英泉畵
襲伕小夜衣草紙	四	萬丸作	景松畵
鞍馬山源氏勳功	六	春水作	廣重畵
森羅萬象心意氣	四	德升作	國芳畵
晝夜帶雪與摺墨	四	雪麿作	貞秀畵
江戸紫手染色揚	八	小三馬作	國貞畵
一筋道雪廼眺望	四	仙果作	國芳畵

仙果此作より師翁柳亭より獨立の著作を許され、校閲の署名を免ぜられたり。

昔摸樣娘評判記	六	京山作	國貞畵

二日目お駒才三

三日目第三編天保九年出板す。

五虎猛勇傳四編	六	雪麿作	二世重政畵

第三編は天保二年出板なり、四編にて大尾す。

（風俗）伊勢物語三編	四	東里作	貞秀畵
（風俗）伊勢物語四編	四	同　上	同　上

第五編竝第六編天保九年出板す。

（夜討曾我）人形製後編	六	春馬作	國貞畵

前編は天保五年出板なり。

（白木屋おこま）淸書草紙	四	種繁作	貞秀畵

柳亭種彥の添削とあり。

琴聲女房形氣	四	京山作	國貞畵
邯鄲諸國物語	四	種彥作	同　上

大和の卷後編（茂山鐘三郎之傳）

此卷前編は天保六年殘編は天保九年出板す。

偐紫田舍源氏	十二	種彥作	國貞畵

第二十二編　澪標の卷

第二十三編　澪標、蓬生の巻　國芳畫
第二十四編　關屋の卷
五十三驛二編　五世鶴屋南北作　國芳畫
第三編天保十二年出板す。
菊壽盃三編盃　六　京山作　國貞畫
第二編「後日盃」は天保三年、第四編は天保九年出板す。
梅薫雪室咲　六　小三馬作　貞秀畫
花筏月浮船　四　同　上　同　上
豐年百姓鏡　四　京山作
結神未松山　六　一九作　國貞畫
讐討兒手柏　六　千町作　重政畫
視樂霞報條　三　馬琴作　國芳畫
寛政十二年作の畫を改め再板せり。

天保九戊戌年

作　者

寶田千町
笠亭仙果　三十三歳
三亭春馬
山東京山　七十歳
一亭萬丸
樂亭西馬　四十歳
東里山人　五十四歳
柳亭種彦　五十六歳
林屋正藏　五十八歳
墨春亭梅麿
式亭小三馬　二十七歳
墨川亭雪麿　四十二歳
五柳亭德升　四十六歳
大海舍金龍　畫工歌川貞秀の匿名なり。
丹頂庵鶴丸　畫工歌川貞秀の匿名なり。
通用亭德成　三好氏、野州栃木の人、唐衣橘洲門人にして狂歌を能くす、明和五子年に生れ本年七十一歳なり。

畫　工

西川景松
歌川國貞　五十三歳
歌川國直　四十四歳

歌川國芳　四十二歳

歌川貞秀

歌川芳重　歌川國芳門人なり。

板元

和泉屋市兵衛

鶴屋喜右衛門

山口屋藤兵衛

佐野屋喜兵衛

森屋治兵衛

西村屋與八

川口宇兵衛　海賊橋通坂本町に住す。

鶴屋金助

蔦屋吉藏

山本平吉

雜記

六月朔日山東京山剃髮し、同三十日七十歳の賀筵書畫會を開催す。

七月十三日中村芝翫（梅玉歌右衛門）阪地に歿す、享年六十一、大坂中寺町淨國寺に葬る。

書目

西鶴本の織留織鶴賀本の唐模様忠孝縷綵錦　四　梅麿作　貞秀畫

富士淺間お七吉三花櫓閣高峰太鼓　六　梅麿作　國貞畫

見世三味線一寸連彈　六　仙果春馬合作　貞秀畫

ごん八八重梅褄摸様比翼紫　六　梅麿作　芳重畫

つれづれ草三編見ぬ世の友　六　京山作　國芳畫

第二編『日暮硯』は天保四年出板なり。

浮世源氏繪十三編　四　京山作　國直畫

天保元年より本年に亘り十三編にて大尾す。

金花猫婆化粧屋敷　六　金龍作　貞秀畫

文化五年板式亭三馬作『復讐雨膜塚』の書を改め再板せしなり。

お菊幸介染揚衣菊新形　四　小三馬作　國貞畫

人形手新圖更紗　六　雪麿作　同上

松手寄由縁藤浪　八　德升作　貞秀畫

鏡ヶ池傾草履打　四　萬丸作　景松畫

畝鱗差身之業物　四　德成作　國芳門人寄合畫

笠亭仙果校とあり。

阪東太郎二編上　四　西馬作　貞秀畫

第二編下卷天保十年出板す。

昔摸樣娘評判記　六　京山作　國貞畫

三日目お半長右衛門
第四編天保十年出板す。
風俗伊勢物語五編　四　東里作　貞秀畫
風俗伊勢物語六編　四　同　上　同　上
此書六編にして終る。
讐仇假名茶話文庫　四　鶴丸作　貞秀畫
文化二年板山東京傳作「復讐煎茶濫觴」の書を改め再出せるなり。
大平權現飛礫助太刀　四　德成作　國芳門人畫
濡鐘五月雨噺　四　萬丸作　景松畫
昔古有多土佐　四　千町作　國芳畫
邯鄲諸國物語　四　種彥作　國貞畫
大和の卷殘編（茂山鐘三郎之傳）
偐紫田舍源氏　十二　種彥作　國貞畫
第二十五編　繪合の卷
第二十六編　松風の卷
第二十七編　薄雲の卷
替伊呂波五編　四　雪麿作　國貞畫
第六編天保十年出板す。
梅若松若竹取物語　四　京山作　國貞畫

竹取物語二編　四　京山作　國貞畫
第三編天保十年出板す。
和漢名畫功　六　小三馬作　貞秀畫
江戸名所杖　四　京山作　國貞畫
怪談春雛鳥　四　正藏作　同　上
第二編天保十一年出板す。
菊壽童四編　京山作　國貞畫
第五編天保十年出板す。

天保十己亥年

作者
一亭萬丸
山東京山　七十一歲
笠亭仙果　三十四歲
樂亭西馬　四十一歲
柳亭種彥　五十七歲
三亭春馬
松亭金水　四十三歲
曲亭馬琴　再板物

烏有山人

梅舍春烏　墨春亭梅麿の別號なり。

三浦錦二　畫工歌川芳政の匿名なりと云ふ。

白雲洞主人　畫工歌川貞秀の匿名なり。

墨春亭梅麿

式亭小三馬　二十八歳

墨川亭雪麿　四十三歳

南仙笑楚滿人　遺稿

綠亭仙橋。

美圖垣笑顏　通稱美濃屋甚三郎愛亭と號す、狂名は湧泉亭眞清新橋加賀町の質商なりしが、後書肆となり湧泉堂と號し、芝田町に移り住めり、寛政元酉年を以て生る本年五十一歳なり。

畫工

貞齋泉晁

歌川國貞　五十四歳

歌川國芳　四十三歳

歌川貞秀

歌川貞虎

歌川貞房

歌川芳政　通稱政次郎一天齋と號す、別號は靜齋といひ、歌川國芳門人なり。

板元

山本平吉

蔦屋吉藏

森屋治兵衞

川口宇兵衞

西村屋與八

鶴屋喜右衞門

山口屋藤兵衞

和泉屋市兵衞

雜記

櫻川慈悲成歿す、享年七十三。

阪東玉三郎名を秀歌と改め、後更にしうかの字に改む。

書目

重の井いろは手綱染餘作春駒　六　梅麿作　國貞畫

犬塚綠記八藤士傳　四　萬丸作　貞虎畫

名假宅見立六歌仙　四　同上　貞秀畫

大晦日曙草紙初編　四　京山作　國貞畫

大晦日曙草紙二編　四　京山作　國貞畫
　第三編及四編天保十一年出板す。
今昔娘評判記四編　六　京山作　國貞畫
　お染久松
　第五編天保十一年出板す。
其移香梅由兵衛　四　萬丸作　貞虎畫
柳蔭古着新見世　四　仙果作　貞秀畫
浪花男井筒雁金　六　小三馬作　國貞畫
江戸紫肌身白雪　楚滿人遺稿　貞房畫
時近江甲賀勝関　四　錦二作　芳政畫
佐野渡怨敵懸橋　六　仙橋作　貞秀畫
本調子三筋絲巻　六　京山作　同上
雪月花娘英勇傳　四　小三馬作　國貞畫
繁々夜話語園菊　四　春鳥作　貞秀畫
　畢春亭梅暦棧とあり。
阪東太郎二編下　四　西馬作　貞秀畫
　第二編上巻は天保九年出板なり。
無筆節用似字盡　三　馬琴作
　寛政九年の再板なり。
櫻風呂花の半開　四　白雲洞主人作　貞秀畫

　文化九年板京山作『孝行雀心竹馬』を改作し、畫を
改め出板せりと云ふ。
竹取物語三編　四　京山作　國貞畫
　第四編天保十一年出板す。
娘狂言三勝轟　六　種彦作　國貞畫
　文政四年の再板なり。
椿伊呂波六編　四　雪麿作　國貞畫
　第七編天保十一年出板す。
偐紫田舎源氏　十六　種彦作　國貞畫
　第二十八編　松風、朝顔の巻
　第二十九編　朝顔の巻
　第三十編　玉桂の巻
　第三十一編　玉桂の巻
清盛一代記　五　烏有山人作　國芳畫
霞帯雪窓解　四　春馬作　國貞畫
春色眉玉柳　四　笑顔作　泉晁畫
仇競花夕榮　四　金水作　貞房畫
菊襲艶揭妻　四　小三馬作　貞秀畫
菊壽童五編　京山作　國貞畫
　第六編天保十一年出板す。

天保十一庚子年

作者

柳亭種彦　五十八歳
山東京山　七十二歳
三浦錦二
三亭春馬
林屋正藏　六十歳
尾上梅幸　六十一歳
曲亭馬琴　再板物
式亭小三馬　二十九歳
墨川亭雪麿　四十四歳
松下樓麓谷　畫工歌川貞秀の匿名なり。
藤壽亭松竹　遺稿か外題替再板なるべし。
二世烏亭焉馬　四十九歳
美圖垣笑顔　五十二歳

畫工

歌川國貞　五十五歳
歌川國虎
歌川貞秀
歌川貞虎
歌川芳政
歌川國芳　四十四歳
歌川國直

板元

蔦屋吉藏
山本平吉
川口宇兵衛
西村屋與八
森屋治兵衛
加賀屋源助　下谷長者町一町目に住す。
山口屋藤兵衛
鶴屋喜右衛門
和泉屋市兵衛
藤岡屋彦太郎
山城屋藤右衛門

雜記

十一月曲亭馬琴終に盲す。

書目

お菊幸助 お夏清十郎 緣結月下菊 二　種彥作　國貞畫
大晦日曙草紙三編　四　京山作　同上
大晦日曙草紙四編　四　同　上　同　上
第五編天保十二年出板す。
今昔娘評判記五編　四　京山作　國貞畫
古今彥三
第六編天保十三年出板す。
梅若 松若 竹取物語四編　四　京山作　國貞畫
第五編天保十二年出板す。
大は金澤 是は鐵石 忠臣文庫　八　笑顏作　國貞畫
有智治春の七草　四　錦二作　芳政畫
秋色香千種花園　四　小三馬作　貞秀畫
東風流當世花誌　四　笑顏作　貞虎畫
稻妻染女伊達姿　六　小三馬作　國貞畫
仙女香七變化粧　六　春馬作　同　上
過世結彌生雛草　八　馬琴作　同　上
百人一首稚講釋　四　京山作　國虎畫
惠方土産蝶手遊　四　笑顏作　國直畫
異名手本林正藏　二　正藏作　貞秀畫
名所競睦珠歌話　四　笑顏作　國芳畫

妹脊山舊の錦繪　六　松竹作　貞秀畫
隅田川月の姿見　六　小三馬作　國貞畫
月の姿見第二編　六　同　上　同　上
取合三組盃二編　四　京山作　貞秀畫
前編は天保七年出板なり。
怪談春雛鳥二編　四　正藏作　國貞畫
第三編天保十二年出板す。
藻汐草須磨書替　麓谷作　貞秀畫
文化九年板曲亭馬琴作「行平鍋須磨酒宴」の書を改
め再出せしものなり。
尾上 梅幸 御家之化物　六　正藏 梅幸 合作　貞秀畫
正藏一人の著作なるべし。
辨慶狀武勇封　四　笑顏作　國直畫
俳優樂屋雜談　四　二世焉馬作　國貞畫
第二編天保十三年出板す。
邯鄲諸國物語　八　種彥作　國貞畫
播磨の卷前編（鈴の權三の傳）
播磨の卷中編（鈴の權三の傳）
此卷の後編天保十二年出板す。
替伊呂波七編　四　雪麿作　國貞畫

第八編天保十二年出板す。
修紫田舍源氏　十二　種彦作　國貞畫
第三十二編　乙女の卷
第三十三編　初音の卷
第三十四編　初音、蝴蝶の卷
花櫓詠義經　五　笑顏作　國芳畫
洗髮柳春雨　六　雪麿作　貞虎畫
新曲琵琶湖　四　小三馬作　國貞畫
菊壽童六編　京山作　同上
第七編天保十二年出板す。
敵討賽八丈　八　馬琴作
文化六年作の再板なり。

天保十二辛丑年

作者

山東京山　七十三歳
林屋正藏　六十一歳
柳亭種彦　五十九歳
曲亭馬琴　再板物
美圖垣笑顏　五十三歳
墨春亭梅麿
墨川亭雪麿　四十五歳
式亭小三馬　三十歳
五世鶴屋南北　四十六歳
寶亭文雪　寶齋と號す。

畫工

溪齋英泉　五十歳
歌川國貞　五十六歳
歌川國芳　四十五歳
歌川芳虎
歌川芳鶴　一聲齋と號す歌川國芳門人なり

板元

藤岡屋彥太郎
鶴屋喜右衛門
森屋治兵衛
川口宇兵衛
山本平吉
蔦屋吉藏

雜記

正月十六日紀定丸歿す、享年八十三、本郷元町三念寺に葬る、法號昇進院平生日勤敏翁居士、辭世あり「狂歌師もけふかあすかの身となりぬ紀定丸も定めなき世に」

秋八月馬琴著作の『里見八犬傳』大成す、全部一百六卷歳を閲する茲に二十八年。

書目

采女さま參る衛か 兄弟丸蒔繪の箱　六　雪麿作　國貞畫
大晦日曙草紙五編　四　京山作　同上
大晦日曙草紙六編　四　同上　同上
第七編天保十三年出板す。
梅若松若 竹取物語五編　四　京山作　國貞畫
梅若松若 竹取物語六編　四　同上　同上
第七編天保十三年出板す。
熊野御前花見車　四　梅麿作　英泉畫
小櫻姫閉月奇談　四　雪麿作　芳虎畫
一對若衆梅櫻樹　四　笑顏作　英泉畫
若紫吾妻顏見世　六　德升作　國貞畫
金縹題名將手鑑　四　笑顏作　國芳畫
世話俊寛島物語　四　仙果作　國貞畫
思妻赤繩廻絲遊　四　笑顏作　貞秀畫
萬年紙龜之開紙　四　仙果作　同上
浪花潟美樟差櫛　四　文雪作　國芳畫
美圖垣笑顏の序あり。
大師河原常夏話　六　馬琴作　國貞畫
文化三年板『大師河原撫子話』の再板なり。
小女郎蜘怨苧環　十二　馬琴作　國貞畫
文化六年の書を改め再板せしなり。
怪談春雛鳥三編　四　正藏作　國貞畫
第二編は天保十一年出板なり。
五十三驛第三編　四　五世鶴屋南北作　國芳畫
第二編は天保八年出板なり。
替伊呂波第八編　四　雪麿作　國貞畫
第九編天保十三年出板す。
和田酒宴 智勇兼備志　六　笑顏作　國芳畫
鳩八幡霞陣幕　六　同上　同上
邯鄲諸國物語　四　種彦作　國貞畫
播磨の卷後編(鎗の權三の傳)
此卷前編及び中編は天保十一年出板なり。
柳亭種彦の筆は此卷に盡き　嘉永元年笠亭仙果之

が續稿を出せり。

修紫田舍源氏　十二　種彦作　國貞畫
第三十五編　螢の卷
第三十六編　常夏、篝火、野分の卷
菊三十七編　野分、御幸の卷

菊壽童七編盃　四　京山作　國貞畫
第八編天保十三年出板す。

英雄男女競　六　笑顏作　芳虎畫
娘要文寶箱　四　同上　貞秀畫
祝言千箱玉　四　同上　芳鶴畫
惠花雨鉢木　四　同上　國貞畫
戀渡操八橋　四　小三馬作　同上

天保十三壬寅年

作者

寶田千町
爲永春水　五十三歲
山東京山　七十四歲
柳亭種彦　六十歲
笠亭仙果　再板物
松亭壽山　畫工歌川貞秀の匿名なりといふ。
松竹園秀山　畫工歌川貞秀の匿名なり。
二世烏亭焉馬　五十一歲
式亭小三馬　三十一歲
墨川亭雪麿　四十六歲
美圖垣笑顏　五十四歲

畫工

歌川國貞　五十七歲
歌川國芳　四十六歲
歌川貞秀
歌川芳虎
歌川芳鶴
歌川芳艷　通稱萬吉、英齋と號し本所に住す、歌川國芳門人なり。

板元

蔦屋吉藏
山本平吉
森屋治兵衛
和泉屋市兵衛

山口屋藤兵衛
藤岡屋彦太郎
鶴屋喜右衛門

雜記

六月四日幕府令を下し、俳優、妓女等の一枚摺錦繪の刷行並賣買を禁止し、且つ、合卷繪双紙の繪組に、俳優の似顔、狂言の趣向を用ゐ、或は、表紙上包に、一切彩色を施す事を嚴禁す。爲めに種彦の「田舍源氏」を始め、絶板せらるゝの冊子頗多し。

此月、爲永春水、卑猥の人情本を著作せりとて、手鎖の刑に處せらる、

六月五日林屋正藏歿す、享年六十二、淺草今戸慶養寺に葬る、法號該林論正善男。

七月十三日(十九日發表)柳亭種彦歿す享年六十歳、赤阪一ッ木淨土寺に葬る、法號芳寛院勇覺心禪居士、辭世の一に曰く「散ものと定まる秋の柳かな」

七月幕府更に令を發し、人情本の賣買貸借を禁止し、書肆藏する所の該書冊並板木を沒收せらる。

十一月晦日令を書肆組合世話掛名主に下し、合卷繪草紙の類、都て草稿中に、掛りの名主月番の認印を受け、出板の際査照せしむる事とせり。

書目

恵方富士初夢草紙	六	千町作	貞秀畫
大晦日曙草紙七編	四	京山作	國貞畫
大晦日曙草紙八編	四	同　上	同　上

第五編及六編は天保十二年出板なり。

今昔娘評判記六編	四	京山作	國貞畫
お菊幸助			

第五編は天保十一年出板なり。

梅若松若竹取物語七編	四	京山作	國貞畫
梅若松若竹取物語八編	四	同　上	同　上

第五編並六編は天保十二年出板なり。

結縁妹脊麪組絲	四	笑顔作	芳鶴畫
浮世又平名書畫	四	小三馬作	國貞畫
花紅葉錦伊達傘	四	笑顔作	芳艶畫
犬上太郎暴惡譚	六	雪麿作	芳鶴畫
江戸紫肌身白雪	六	春水作	貞秀畫
京鹿子振袖日記	六	京山作	國貞畫
朧月夜猫の草紙	四	同　上	國芳畫

猫の草紙第二編　四　京山作　國芳畫
松竹梅春着染色　四　笑顏作　芳鶴畫
笑門松和合琴唄　四　壽山作　貞秀畫
本書は古板の改作外題替なるべし。
歸雁故鄉の花園　四　壽山作　芳虎畫
本書は古板の改作外題替なるべし。
金澤萬八笑增談　秀山作　貞秀畫
本書は古板の改作外題替なるべし。
婚禮雛形鴛鴦鳥物語　四　京山作　國貞畫
繪卷物今樣姿　四　笑顏作　芳鶴畫
菊酒屋娘庭訓　四　京山作　貞秀畫
娘庭訓第二編　四　同　上　同　上
旅硯振袖日記　六　笑顏作　國貞畫
見目より草紙　四　仙果作　貞秀畫
本書は『萬年紙亀の聞書』の改作外題替なりといふ
樂屋雜談二編　四　二世焉馬作　國貞畫
初編は天保十一年出板なり。
替伊呂波九編　四　雪麿作　國貞畫
第八編は天保十二年出板なり。
偐紫田舍源氏　四　種彦作　國貞畫
第三十八編　藤袴、卷柱の卷
葩雪曰、此當時種彦の名聲は『田舍源氏』によりて益々籍甚たるのみか、此冊子も實に斯界の王と呼ばるゝまでに賣れ盛り、好評市中に喧しく、其發賣時期を迫らるゝの狀態なりしかば、種彦自身も亦其作意に全力を傾注し、熱心稿を續くるの決意堅かりしに、天なる哉、時の老中水野越州が、風俗上の極端なる改革令は、遂に『田舍源氏』の絕板を嚴命したり、種彦病間此事變を耳にし終に起たず、此年秋源語に因みし辭世の句を口にしつゝ歿しぬ、蓋種彦の名聲は『田舍源氏』に由りて發揚せられしも、亦是がために天壽の幾分を短縮せられしものゝ如し、然れども、翁の如きは、眞に操觚者たるの本分を全うし得たる者として、遺憾なかるべき也。
奇緣結赤繩　四　小三馬作　國貞畫
忠孝譽石碑　四　壽山作　芳虎畫
本書は古板の改作外題替なるべし。
菊壽童八編　四　京山作　國貞畫
第七編は天保十一年出板なり。

藍雪曰、草雙紙の全盛期は、此五六年以前より打續き、極彩色の表紙を附し、上包にまで彩色を施して、專ら美麗に仕立られありしに、此夏六月、閣老水野越前守が風俗矯正の條法は、是等の出板賣買を禁止し、同時に其絶板を斷行し、翌月は又人情本の賣買貸借を禁止するのみならず、現存の板木及び書冊を悉皆沒收し、冬に至りて原稿檢閱の制を嚴にする等、當時の出板界を驚動戰慄せしめたるは、大に峻酷の如くなるも、時の風紀を戒飾矯正し、奢侈淫風の盛んなる人心をして、勤儉主義に誘導するの策としては、時の有司の當然執るべき手段にして、水野閣老が果斷の措置を稱揚せざるべからず。

當時に於ける草雙紙の内容は、言ふまでもなく、男女の痴態情話を唯一の骨子として、作意となすの外、他に着想なきもの丶如く、又一面には、一層激烈なる人情本の行はる丶あれば、公然の祕密とも謂ふべき竹天屯日の冊子類、亦濶步横行する等、風俗の紊亂は、殆んど頂點に達したる墮落社會なれば、極端なる法令にあらずむば、到底腐弊の實を擧ぐること難かりしなるべし。

されば、此法網に包み纏はれたる當年の稗史界は、呆然自失したりしなるべく、加ふるに十一月晦日に下りし原稿檢閱令は、板元なる書肆に對して如何に大打擊を與へたりしか、想像するに餘りありと云ふべし。

天保十四癸卯年

雜記

十二月二十二日爲永春水歿す、享年五十四、築地本願寺中妙善寺に葬る、法號釋龍音信士。

假名垣魯文今年花笠文京の門に入り、作名を和堂珍海と稱す。

此頃畫工歌川國直歿す、享年五十歳前後なり。

○

藍雪曰、客歳に於ける水野閣老の出板界に對する嚴令は、遂に本年に一種の草雙紙をも出板せしめずなりぬ、蓋し客冬十一月晦日の原稿檢閱令は、出板業者には至大の打擊にして、到底年内に檢閱を

經、板木の彫刻並に摺立製本の工を竣ること能はざるのみならず、表裝の色摺りに新工風を案出せざれば、多年極美の表紙繪に慣されたる讀者の滿足を買ふべからざるは明瞭なるを以て、其考案に時期は經過し、吉例賣出しの新春出板物を刷出し得ざりしならむ。

以上は予の淺見に基きし想像說なれば、或は謬見の觀察にて實際發市の草雙紙あるやも知れず、されど予の臆說にして謬りなしとせば、此恐慌は單に本年のみに止まらず、翌弘化元年（天保十五年改元）にまで推及せしが如し、現に弘化元年新著の草雙紙は、僅々數部に止まり十種以內にあるもの丶如く、又其翌弘化二年も十餘種に過ぎず、其うち同春出板せし「釋迦八相倭文庫」初編の表紙を見るに、僅三遍位の色摺なるも、眼に着き易き赤紅色の極めて乏しき爲め、一見俳優の死繪に類するの觀ありて、かの『田舍源氏』等に眼を慣され居し當時の人々には、頗る異樣の感ありしならむ、かゝる實狀より推せば、今歲一部の新作物を見ざるも決して怪しむに足らざるべし。

されど三日法度の掟に漏れず、斯くの如く萎縮不振の逆境に陷りし草雙紙も、弘化三年頃よりは再び彩色を施し、漸次美觀を加へ來りて最早法度を忘れしもの丶如く、嘉永より安政と年を歷るに從ひ、彌增せる美裝を以て讀者の掌上に繙かれ、天保の全盛期を壓するに至りぬ。併しながら草稿檢閱の令のみは依然渝ることなく勵行せられ、弘化以降の作物には卷首に其檢印をも併せ刻し、明治年間までも傳へられしは、これのみ當時の法令の紀念として、其係を偲ぶの端ともなりぬべし。

年次不明

書目

鉢被葛の葉 物草夜寒平 信田襖昔繪草紙	六	京傳作	豐國畫
ともへはゝ水 うろこは龍 黃金花男道成寺	十	同上	
宇治名木 木曾名橋 由井濱晝夜物語		永壽作	勝川春山畫
江島利生 街道太郎邪物語	十	三馬作	
大部會俳優水滸傳	廿五	鶴屋南北作	國貞畫
三國一大御利生記	三	金澤山人作	美丸畫

三勝半七二七女歌舞妓　三　三馬作　國貞畫
繪本根元石橋山　楚滿人作　春英畫
御誂出來合女房　二　一九作　國直畫
毛谷村孝行次第　二　岡山鳥作　國丸畫
敵討馬士唄濫觴　京傳作
物草太郎正本所　七　同　上
咲分しもじの仇討　六　同　上　豐國畫
朧富士出口編笠　六　同　上
筆戀反古紙團扇　同　上
糠三合有掛入聟　二　一九作　國直畫
梅若丸花廼一家　南北作　重信畫
金草鞋第十三編　六　一九作
繪本日出之舞鶴
善惡振分道中數語錄　六　笑顏作　國貞畫
報仇奇譚自雷也話說　鬼武作
小春治平延紙の書置　六　京山作　國丸畫
渡邊綱一代記　五　楚滿人作　春亭畫
　文化二年の再板物なりと云ふ。
大盆天神記　五　德升作　（文政頃）　國安畫
夫婦和合神　六　三馬作　美丸畫

三日月お仙　三　東里作　（文政頃）　國芳畫
花咲爺譽魁　五　德升作　貞房畫
花白梅鎌倉　六　一九作　國丸畫
金草鞋八編　九　同　上　國直畫
金草鞋九編　四　雪麿作　豐國畫
走書柳禿筆　六　鶴屋南北作　國貞畫
大和女夫石　二　國芳畫
十二月稚遊　三　三馬作　國直畫
江戸水幸話
　文化九年外題を「江戸水福話」と改め再板せり。
三庄太夫　五　一九作
仙人物語　二　市二三作　（文化頃）　自　畫

索引

名作二十三部

金々先生榮花夢	春町作	安永四年板
高慢齋行脚日記	同　上	同　五年板
桃太郎後日噺	喜三二作	同　六年板
鼻峰高慢男	同　上	同　上
親敵討腹鼓	同　上	同　上
三升增鱗祖	春町作	同　上
三幅對紫曾我	同　上	同　七年板
楠無益委記	同　上	同　八年板
虚言八百萬八傳	本太郎作	同　九年板
鐘入七人化粧	喜三二作	同　上
大違寶船	全交作	天明元年板
長生見度記	喜三二作	同　三年板
啌多雁取帳	馬鹿人作	同　上
夫従以來記	爲輕作	同　四年板
大悲千祿本	全交作	同　五年板
莫切自根金生木	三和作	同　上
悦贔負蝦夷押領	春町作	同　八年板
文武二道萬石通	喜三二作	同　上
鸚鵡返文武二道	春町作	寛政元年板
拜壽仁王參	全交作	同　上
遊妓寔卵角文字	同　上	同　二年板
鼻下長物語	同　上	同　四年板
十四傾城腹の內	同　上	同　五年板

三未來記

楠無益委記	春町作	安永八年板
長生見度記	喜三二作	天明三年板
夫従以來記	爲輕作	同　四年板

二年代記

草双紙年代記	杜芳作	天明三年板
稗史億說年代記	三馬作	享和二年板

三字盡

廓簒費字盡	春町作	天明三年板
无筆節用似字盡	馬琴作	寛政九年板
麁想案文當字揃	同　上	同　十年板

桃太郎の異作

桃太郎手柄噺	清經畫	安永五年板
桃太郎後日噺	喜三二作	同　六年板
桃太郎かんこ鳥	吟雪畫	同　上

新板桃太郎	喜三二作		安永六年板
桃太郎元服姿	通笑作		同　八年板
十二支鼠桃太郎	鼎我作		同　九年板
山入鼠桃太郎噺		政美畫	同　上
桃太郎寶噺		同上	同　上
桃太郎一代記		同上	天明元年板
昔噺寶舌桃太郎	可笑作		天明二年板
八代目桃太郎	三蝶作		同　四年板
親動性桃太郎	奎交作		同　上
桃太郎再驪			同　上
桃太郎昔日記		政美畫	寛政元年板
桃太郎發端話説	京傳作		同　四年板
山入桃太郎昔話		菊册畫	同　上
桃太郎大江山入	慈悲成作		同　七年板
初寶鬼島臺	一九作		享和三年板
昔語桃太郎傳	楚満人作		文化二年板
桃太郎子寶双紙	松武作		同　六年板
桃太郎寶撰取	半九作		同十四年板
昔噺桃太郎	一九作		文政三年板

嫁入物の異作

日照雨狐の嫁入	通笑作		安永八年板
千秋樂鼠嫁入		清長畫	同　九年板
大通時代狆嫁入	通笑作		天明元年板
猫の嫁入	同上		同　二年板
無物喰狐聟入	同上		同　五年板
壽鼠之嫁入		長喜畫	寛政七年板
御誂向鼠嫁入	一九作		同　八年板
昔語狐娶入	景則作		同　上
赤本鼠黒本狐両評嫁入討	一九作		同十一年板
六賢狐縁組	同上		同　上
色揚鼠嫁入	同上		享和元年板
一陽來福鼠嫁入	同上		同　三年板
鼠嫁入	石上作		同　上
太郎稻荷婚禮	一九作		文化元年板
五風十雨狐嫁入	通笑作		同　二年板
猫の嫁入	楚満人作		同　三年板
化物の嫁入	一九作		同　四年板
朧月猫嫁入	楚満人作		同　上

道成寺の異作

桃酒雀道成寺		清經畫	安永五年板

鐘入七人化粧	喜三二作	安永九年板
八眞似道成寺	鳴瀧作	天明五年板
大笑止耄氣鐘入	萬象作	同　六年板
大笑止浮氣鐘入	萬寶作	寛政元年板
京鹿子娘泥鰌汁	全交作	同　三年板
親々道成寺	爲輕作	同　六年板
其跡幕婆道成寺	三馬作	同　十年板
從夫道成寺	三笑作	享和元年板
妙黄粉穀道明寺	馬琴作	文化二年板
道成寺傳記	京傳作	同　四年板
道成寺現在鱗	焉馬作	同　六年板
敵討道成寺	東里作	同　九年板
傾城道成寺	德瓶作	同　上
日高川清姫物語	三馬作	同　十年板
已鳴鐘男道成寺	馬琴作	同十一年板
鹿子絞娘道成寺	京山作	文政十一年板
黄金花男道成寺	京傳作	年次不明板

忠臣藏の異作

案內手本通人藏	喜三二作	安永八年板
家內手本町人藏	艶美作	天明元年板
髮手本通人藏	霍志藝作	天明四年板
穀鐵砲挑灯具羅	爲輕作	同　五年板
假名手本不通人藏	杜芳作	同　七年板
眞名手本義士筆力	京傳作	同　八年板
大千世界變人藏	二世喜三二作	寛政元年板
眞似手本小人藏	象睡作	同　上
茶成抹茶番狂言	萬寶作	同　五年板
忠臣藏	同　上	同　上
忠臣藏前世幕無	京傳作	同　六年板
忠臣藏卽席料理	同　上	同　上
尤世界忠臣藏	慈悲成作	同　七年板
中華手本唐人藏	善好作	同　八年板
御慰忠臣藏之攷	馬琴作	同　十年板
家內手本用心藏	三和作	同　上
假名手本胸之鏡	京傳作	同十一年板
稚衆忠臣藏	一九作	同十二年板
半奈手本萬歳藏		同　上
假多手綱忠臣鞍	京傳作	享和元年板
化物忠臣藏	見越入道作	同　上
桃燈庫暗夜七扮	田樂作	同　二年板

忠臣藏籬鑑	清澄作	文化八年板
增補忠臣藏	南嶺作	同　十年板
御無事忠臣藏	東子作	同十一年板
忠臣藏曾我物語	山壽作	同十三年板
あな手本通臣藏	焉馬作	同　上
增補忠臣藏	玉粒作	文政二年板
忠臣藏再度講釋	二世春町作	同　三年板
忠臣浮世市藏	玉粒作	同　五年板
假名手本團扇	南嶺作	同　上
四十七手本裏張	鶴屋南北作	同　九年板
忠臣後祭禮	一九作	同十一年板
忠臣藏合鏡	未佛作	同十二年板
忠臣藏替伊呂波	雪麿作	天保四年板
裏表忠臣藏	七世團十郎作	同　七年板
異名手本林正藏	正藏作	同十一年板
曾我の異作		
若緑色曾我	清經畫	安永四年板
珍獻立曾我	喜三二作	同　六年板
三幅對紫曾我	春町作	同　七年板
吉原藝者曾我	春常畫	同　上
似た山曾我	可笑作	安永八年板
時花兮鶯茶曾我	全交作	同　九年板
大通聞違曾我	喜三二作	同　上
大通故事附曾我	當世作	天明元年板
金持曾我	通笑作	同　二年板
化物曾我		同　上
染直鳶色曾我	喜三二作	同　上
惡抜正直曾我	春町作	同　三年板
諸事無世話曾我	通笑作	同　四年板
間似合嘘言曾我	歸橋作	同　五年板
御富興行曾我	雞告作	同　六年板
今渡唐織曾我	春町作	同　七年板
春遊獵曾我		寛政二年板
朝比奈茶番曾我	慈悲成作	同　五年板
皐下旬蟲干曾我	京傳作	同　上
大仕掛三階曾我	眞顔作	同　上
年寄之冷水曾我	全交作	同　上
春遊七福曾我	春英作	同　上
根無草曾我和物	笑丸作	同　七年板
富士色板絞曾我	楚滿人作	同　九年板

曾我物語嘘實錄	三和作	寛政十年板
無雜作行形曾我	楚滿人作	同十一年板
魁曾我筆之命壽	三友作	文化十年板
女曾我兄弟鏡	志滿山人作	同十三年板
忠臣藏曾我物語	由壽作	同　上
蝶千鳥曾我傳	京傳作	同　上
曾我昔狂言	種彦作	同十四年板
鶴千年對面曾我	二世春町作	文政三年板
二重染曾我雁金	三鳥作	同　六年板
江戸繪双蝶曾我	二世團十郎作	同　七年板
曾我祭東鑑	鶴屋南北作	同　上
扇富士曾我物語	德升作	同十一年板
蝶千鳥鎌倉摸樣	春水作	同十二年板
魁梅枝曾我	三九作	天保元年板
富士裾野浮蝶鳥	種彦作	同　二年板
娘曾我振袖日記	梅麿作	同　三年板
夜討曾我人形製	春馬作	同　五年板

増補續青本年表終

合卷外題集

（選人逸名）

合卷繪草紙表題作者名目集

山東京傳
山東京山
曲亭馬琴
十返舍一九
式亭三馬
式亭小三馬
古今亭三鳥
德亭三孝
益亭三友
春亭三曉
福亭掾馬後樂亭西馬
樂亭山壽
朝亭三笑
柳亭種彦
笠亭仙果
萍亭柳菊
仙客亭柏琳
瓢亭種繁
三亭春馬
柳泉亭種正
玉亭光娥
墨川亭雪麿

山東京傳

文化元年
江戸砂子娘敵討三冊　紅翠齋畫　板元つるや
山東奇談机之塵原本復讐後ノ祭祀　同上　同上

同　二年
敵討煎茶ノ始三冊　同上　つる喜
同上

敵討南輪車六冊（河内ノ錢ノ衣話）　紅翠齋畫　つる喜
文化三年
敵討奥州狼河原六冊　豐國畫　蔦屋重三郎
同　上
敵討孫太郎蟲六冊　重政・豐廣畫　つる喜
同　上
於杉於玉二見仇討六冊　豐國畫　同　上
同　四年
敵討岡崎女郎衆六冊　醉放逸人（重政）畫　同　上
同　上
於六櫛木曾仇討七冊　豐國畫　西村與八
同　上
敵討千鳥ノ玉川六冊　北尾重政畫　蔦屋重三郎
同　上
敵討白藤源太談七冊　豐國畫　つる喜
同　五年
糸車九尾狐九冊　――　西村屋
同　上
岩井櫛粂野仇討七冊　豐國畫　同　上
同　上

俠客双蝶々九冊　豐國畫　和泉屋市兵衛
文化五年
女達三ヽ月阿仙傳六冊　同　上　丸屋文右衛門
同　上
綾葉五郎強勢話五冊　――　蔦屋重三郎
同　上
萬福長者榮花物語三冊　豐廣畫　西村屋與八
同　上
八重霞かしくの仇討七冊　豐國畫　――
同　上
箱湯仇討話六冊　同　上　蔦　重
同　上
松ヽ梅竹取物語十五冊　國貞畫　西村屋
同　六年
志道軒昔講釋七冊　豐國畫　つる喜
同　上
笠森娘錦之笈摺六冊　同　上　丸　文
同　上
岩戸神樂劍威德六冊　春亭畫　岩戸屋喜三郎
同　上

梅ノ於由女丹前六冊　春扇畫　泉市

—

戲場花牡丹燈籠六冊　國貞畫　岩戸屋

文化七年

昔織博多小女郎七冊　清峯畫　丸屋甚八

同　上

親ノ敵うとふノ俤六冊　豐國畫　つる喜

同　上

姉ハ二十一代集ハタマキ 妹ハ廿卷萬葉集 糸櫻本朝文粹十二冊　豐國 清峯畫　西村

同　上

咲替テ花之二番目六冊　國貞畫　岩戸屋

同　八年

梅由兵衛紫頭巾六冊　豐國畫　鶴屋金助

同　上

曉傘時雨古手屋六冊　春扇畫　蔦重

同　上

娘景清襤褸振袖　—　泉市

同　上

男子草履打六冊　豐國畫　同上

同　上

櫻姫筆再咲七冊　豐國畫　鶴喜

文化八年

今昔八丈揃六冊　同上　—

同　九年

釣狐昔塗笠六冊　口畫豐國 本文國丸畫　蔦重

同　上

妹脊山長柄文臺六冊　豐國畫　鶴喜

同　上

梅川忠兵衛 二人虛無僧九冊　同上　西村屋

同　上

升繫男子鏡　—　—

同　上

籠釣瓶丹前八ツ橋　—　—

團七黑茶椀 釣身之花入 朝茶湯一寸口切　—　伊賀屋

朝妻舟柳三ヶ月六冊　—　—

文化十年

ヘマムシ入道昔語六冊 天竺德兵衛 於初德兵衛　國直畫　泉市

同　上

重井筒娘千代能六冊　前美丸、後國丸書　森治
文化十年
無間鐘娘縁記六冊　豊國書　つる金
同　上
安達ヶ原氷姿見六冊　――　つる喜
同　上
會談三ッ組盃六冊　春扇書　泉市
同十一年
黄金花奥州細道六冊　國直書　森屋次兵衛
同　上
不破名古屋稲妻表紙七冊　豊國書　蔦屋 つる金 合行
同　上
磯馴松金糸腰簑六冊　同上　丸甚
同　上
繪看板子持山姥九冊　同上　同上
同十二年
女達摩之由來文法語七冊　同上　つる金
同　上
獲猴著聞水月談六冊　國直書　森次
同　上

石ノ枕春宵抄七冊　豊國書　泉市
文化十三年
蝶千鳥曾我傑六冊　國貞、國直、國芳書　三河屋源七
同　上
黄金花万寶善書六冊　柳川重信書　岩戸屋
同　上
琴聲美人傳六冊　豊國書　丸甚
同　上
大磯俄のねり物六冊　同上　山口屋藤兵衛
同十四年
袖之梅月之土手節　同上　つる金
同　上
竹井甚五郎 差櫛於六 長髦姿蛇柳六冊　國貞書　河内屋
同十三年
風流御三味線十冊　春亭書　泉市
同　六年
物草姫昔雛形六冊　春扇書　同上
同　八年
かたき討三冊　――　――
さくらの名木に事起り芦水澤之烝が娘芳女父の仇

伴助を討取
安積沼後日之仇討六冊　豐廣畫　つる喜
文化四年
春相撲花之錦畫六冊　國丸畫（四の巻國直畫）　蔦重
同　十年
草履打所縁色揚六冊　美丸畫　岩戸屋
同十二年
（鳴神左衞門絶間之助）勇雲外氣節（記カ）六冊　豐國畫　大坂屋秀八
同　九年
女俊寛雪之花道五冊　國貞畫　森治
同　八年
播州皿屋鋪物語六冊　春扇畫　丸文
同　上
兒ヶ淵櫻之振袖六冊　國直畫　河内屋源七
同　十年
娘清玄振袖日記六冊　豐國畫　西村
同十二年
薄雲猫之舊話六冊　國貞畫　岩戸屋
同　九年
敵討天竺德兵衞六冊　豐國畫　伊賀屋

文化五年
累井筒紅葉ノ打鋪八冊　豐國畫　蔦重
同　六年
（小いな半兵衞）夜ノ鶴親父形氣八冊　同上　泉市
同　七年
（男江口女西行）富士太郎梅隱家八冊　同上　丸文
同　上
（□之丞孝行記）勸善辻談義八冊　同上　伊賀屋
文政六年
二日替連理ノ花王十冊（前編京傳後編京山）　同上　泉市
同　上
敵討木曾ノ棧六冊　――　榎本
文化五年
熊女越路之仇討六冊　豐國畫　西村
同　上
（鉢被葛葉物草夜寒平）信田妻昔繪艸紙六冊　同上　大坂屋秀八
隅田ノ春梅若譚六冊　同上　つる喜
文化十一年
（小野頼風女郎花始）歌字盡青柳硯八冊　同上　伊賀屋

文化七年

善惡…人形氣六册　豐國畫　泉市

文政三年

…升矢箭ノ節陰六册　よし丸畫　岩戸屋

文化十一年

…黄金花男道成寺十册　豐國畫　西村

朧富士出口ノ編笠六册　―　―

筆意次古張團扇　―　―

物草太郎正本所七册　―　―

敵討馬士歌ノ始　―　―

氣ヲ替ヘ戯作問答　―　森治

文化十四年

山東京山（原名豐山／別號涼山）　岩瀬利一郎　又辭々軒／又百樹

敵討妹脊山物語五册　豐國畫　江見屋

文化四年

鏡山譽之仇討五册　豐國・國貞畫　江見屋

同　五年

敵討富士之白酒五册　豐國畫　丸文

同　上

敵討三味線由來五册　同上　伊賀屋

同　上

同後編其後日三五大切五册豐國畫　伊賀屋

同　六年

敵討女今川六册　同上　江見屋

同　五年

女六部仇宇津ノ谷六册　春亭畫　榎本吉兵衛

同　上

小春紙治早引說要集十册　國貞畫　西村源六

同　上

正說娘南木六册　春亭畫　近江屋權九郎

同　上

昔語紫色揚六册　豐國畫　西村

同　上

開道初音ノ仇討三册　清峯畫　同上

文化六年

千本櫻成關守六冊　豐廣畫　丸甚

同　上

都ノ春仇ヲ討掛緒六冊（本ノマヽ）　同　上　岩戸屋

同　上

孝行酒屋舉劔菱七冊　豐國畫　泉市

同　上

敵討勝山結五冊　國貞畫　岩戸屋

同　上

敵討二子ノ渡　春扇畫　つる喜

同　上

五人女都ノ紅筆六冊　清峯畫　西村

同　上

粂平內剛力譚六冊　春亭畫　丸文

同　上

躾草娘庭訓八冊（於半長右衛門）　豐國畫　伊賀屋

同　上

江島御利生對菅笠六冊　春扇畫　丸甚

同　七年

誂染歌舞伎模樣六冊　國貞畫　丸文

文化七年

鶴子宜身代ノ音頭六冊　春扇畫　泉市

同　上

積思雪鉢ノ木六冊　春亭畫　森治

同　上

（關取鬼王 傾城月小夜）化粧坂懐中鑑七冊　清峯畫　西村

同　上

（古今 彦三）昔雛女房氣質六冊　國貞畫　岩戸屋

同　上

高尾丸劔ノ稻妻六冊　同　上　蔦重

同　上

懐兒夜ノ編笠五冊　豐國畫　同　上

同　八年

出世櫻譽ノ詠歌三冊　國丸畫　西村

同　上

極彩色額ノ小三五冊　北嵩畫　同　上

同　上

稻妻摸樣提ノ鞘當六冊　國貞畫　同　上

同　上

花角力白藤源太六冊　同　上　泉市

文化八年

出世娘摂待日記六冊　國貞畫　大坂屋秀八

同　上

鎗ノ權三梅ノ魁六冊　豊國畫　西村

同　上

二人若衆娘櫓八六冊　清峯畫　丸甚

同　上

奴勝山娘丹前三冊　目録豊國 本文國満畫　津村屋三郎兵衛

同上、京傳讀席文入

妹脊山後緒島六冊　美丸畫 後重政　森治

同　九年

先讀三國小女郎六冊　國貞畫　つる金

同　上

女將門七變化粧六冊　春扇畫　岩戸屋

同　上

歳男黄金之豆蒔九冊　國貞畫　西村

同　上

山莊太夫晄分娘六冊　春亭畫　丸文

同　上

早便梅川物語五冊　柳川重信畫　西村

文化十年

園ノ梅かしくの枝ぶり六冊　豊國畫　蔦重

同　上

紙治小春 後日話 大幅帳手代鑑六冊　國丸畫　つる金

同　上

八ツ目縵因縁物語三冊　春亭畫　泉市

同　七年

比翼紫春花境譚二冊 春信女作 京山校并序　美丸畫　森治

同十二年

夏が衣開水無月六冊　豊國畫　丸甚

同　上

繪半切しらしの文月五冊　國直畫　同上

同十一年

宝貴婿ノ入舟六冊　同上

同　上

於千代半兵衛庚申待女房五冊 立斎　美丸畫　森治

同　上

赤前垂祇園女御六冊　國直畫　泉市

同　上

睡マシ月八百屋門松六冊　同上　同上

文化十二年
冬編笠由縁月影六冊　國直畫　丸甚
同　上
吾妻花娘氣質六冊　柳川畫　同上
同十四年
桂川都開書六冊　國丸畫　森治
文政元年
隅田春藝者容氣六冊　豊國畫　西村
同　二年
綱五郎小糸大江山入五冊　清峯畫　森治
文化八年
息子株身持扇五冊　國丸畫　丸甚
同　三年
封文惠方吉書初六冊　豊國畫　山本
文政四年
忠義ノ汗綾染五郎三冊　春扇畫　丸甚
文化七年
若衆振水備丹前六冊　春亭畫　丸文
同　八年
信夫貢對ノ振袖六冊　柳川畫　西村

文化十一年
画面摺娘年代記六冊　國貞畫　西村
同十二年
二人若衆對紫色六冊　春亭畫　鶴金
同十三年
昔語成田開帳六冊　國貞畫　山口屋
文政五年
室育變生南枝六冊　國丸畫　丸甚
同　上
北里花雪ノ白無垢五冊　英泉畫　岩戸屋
同　上
小説由井ヶ濱六冊　國貞畫　森治
同　四年
楠歌舞妓礎六冊　同上　同上
同　六年
若衆振古跡鎗梅六冊　豊國畫　今利屋
同　七年
明烏雪之惣花六冊　國貞畫　森治
同　八年
春小袖門松摸樣四冊　國安畫　つる喜

文政八年		
月ノ眉尾花猿袖六冊	英泉畫	森治
同　上		
富士太郎錦初夢六冊	前編豐國 後編美丸畫	丸甚
同　上		
三日月お仙花菓子給雛子六冊	英泉畫	丸文
同　上		
女夫松連理鉢植六冊	國安畫	丸甚
同　九年		
伊之助實情身持扇六冊	國貞畫	森治
同　十年		
お駒才三誂織八丈縞六冊	二代豐國畫	同上
同　上		
稲妻迸雙仕立六冊	―	若戸屋
同　上		
其俤昔八丈五冊	國丸畫	蔦重
文化九年		
菊壽童霞ノ盃六冊前編	國貞畫	山本
文政十年		
同續篇後日ノ盃四冊二編		同上
天保三年		
同三編盃六冊三編	―	山本
同　八年		
東雲奇代ノ關取四冊一名大男	重政畫	森治
文政十一年		
鹿子絞娘道成寺六冊	英泉畫	丸甚
同　上		
江戸自慢藝者氣質六冊	國貞畫	森治
同十二年		
薄雲櫻古跡ノ曙六冊	國直畫	丸甚
文化十年		
浪鶯故郷ノ錦繪六冊	前編國貞 後編國滿畫	伊賀屋
同　九年		
青午彦惣昔唄猿の狂言六冊	柳川畫	泉市
同十四年		
[illegible]權ノ封じの六冊お化半七	前編國貞 後編重政畫	森治
文政五年		
重妻若藤摸樣六冊	豐國畫	丸甚
同　六年		
夢合寢物語六冊近江のおかね三勝	國貞畫	山本

文政六年

梅櫻春ノ道行五冊小稻半千代半　國貞畫　若戸屋

同　上

糸櫻𩹶蝶分醉五冊　同　上　同　上

同　七年

菊酒屋累肩六冊　同　上　森　治

同　上

籬節四季の替歌四冊　國丸畫　つる喜

同　上

花咲綱五郎二重衣北里色揚六冊　國安畫　森　治

同十四年

蔭曰　文政十三年改元天保、文政十四年は否なるべし、文政十二年か。

同後編六冊　同　上　森　治

天保四年

小野小町浮世源氏畫四冊初編　國貞畫　同　上

文政十四年

同二編　同　上

同　上

同三編、四編　同　上

天保三年

同五編　國貞畫

同　四年

同六編　同　上

同　五年

同七編、八編　同　上

同　六年

同九編　同　上

同　七年

同十編　國直畫

同　七年

同十一編、十二編大尾　國貞畫

同　八年

小野小町十三編四冊　國直畫　森　治

同　九年

五節供雅童講釋八冊　國安畫　つる喜

同　三年

同後編八冊　同　上　同　上

同　四年

琴聲女房形氣四冊　國貞畫　つる屋

天保八年
五大力筆鶴拵三冊　春扇畫　丸甚
文化八年
つれ〴〵艸主の盃六冊　國芳畫　山口屋
天保三年
同二編日幕ノ硯六冊　同上　同上
同　四年
同三編みぬ世の友六冊　同上　同上
同　九年
善悪両道染和解手綱　前編國貞畫 後編春扇畫　岩戸屋
文化八年
此糸蘭蝶廓ノ花若木榮六冊　國直畫　森治
天保五年
腹ノ佳和あふむ八藝一冊　豊國畫　伊賀屋
文化七年
取合せ三ツ組盃四冊　國虎畫　川口正蔵
天保七年
同二編　貞秀畫　藤岡
同十一年
昔摸様娘評判記六冊 お七吉三 初日　國貞畫　泉市

天保七年
同二日目六冊 お駒才三　――　泉市
同　八年
同三日目六冊 お半長右衛門　國貞畫　同上
同　九年
江戸名所杖四冊 初編　同上　佐の喜
同　上
おふむ八藝臺所物語一冊 前編　同上　伊賀屋
文化八年
隼若松若竹取物語八冊 初編四冊 二編四冊　同上　森治
天保九年
敵討熊ノ腹帶六冊　――　伊賀屋
文化五年
今昔娘評判記四編六冊 お染久松　國貞畫　泉市
天保十年
同五編 古今彦三
同十一年
同六編 おさく す助
同十三年
孝行雀心ノ竹馬六冊　美丸畫　つる喜

文化九年
女鳴神名歌短册六册　清峯畫　丸甚
同　上
大晦日曙草紙 初編二編 毎編四册　國貞畫　つた吉
天保十年
同三編、四編
同　十一年
同五編、六編
同十二年
同七編、八編
同十三年
朋烏旭ノ紅染六册 浦里時次郎　春扇畫　泉市
文化九年
朝日櫛廓之曙六册　春亭畫　つる金
同十一年
本調子三筋糸巻六册　貞秀畫　山口屋
天保十年
朧月夜猫之草紙 初編二編 毎編四册づゝ　國芳畫　山本
同十三年
菊酒屋娘庭訓 初編二編 毎編四册づゝ　貞秀畫　つた吉

天保十三年
菊壽童四編
同　九年
同五編
同　十年
同六編
同十一年
同七編
同十二年
同八編
同十三年
竹取物語三編
同　十年
同四編
同十一年
同五編、六編
同十二年
同七編、八編
同十三年
祇禮ひな形 をし鳥物語初編四册　國貞畫　つる喜

天保十二年
子寶舟七人兄弟六冊　畫不明　丸甚
文化十三年
京鹿子振袖日記六冊初編　國貞畫　藤岡屋彦太郎
天保十三年
百人一首雅講釋四冊初編　國虎畫　つる喜
同　十一年
左甚五郎髭淵仇討六冊　豊國畫　伊賀屋
文化五年
錦木塚孝女仇討　國貞畫　丸文
同　上
於初 徳兵衛 路ノ雪柳ノ腰帯六冊　美丸畫　森治
同十三年
小まん 貞作 鄰春道中双六六冊　國貞畫　丸文
文政八年
五郎 染分 風流五思氣娘七冊　國直畫　丸甚
文化十年
鳥羽屋 綱島屋 昔話夜船始七冊　春亭畫　近江屋
文政六年
高尾 かされ 昔々あつた土佐節六冊　國丸畫　丸甚

文政四年
萬葉 若鶯 磨直大内鏡六冊　國直畫　——
文化十年
女郎殺大 太鼓殺大 復讐油屋於染七冊　國貞畫　丸文
同　五年
小せな 判兵衛 咲替ァ梅ハ武士八冊　豊國畫　西村
同　九年
七艸四郎傾城大寄六冊　同　上　丸甚
文政六年
人心播溜莊子三冊　美丸畫　森治
文化十四年
ぬれ燕お牛 放駒長右衛門 椎川紅葉振袖六冊　國直畫　丸甚
同十二年
高尾 十三郎 伊達摸樣雲稲妻六冊　豊國畫　今利屋
文政九年
揚巻助六 七代つゞく 家櫻霞引幕六冊　國貞畫　泉市
文化九年
助六 上巻 家櫻纏總ノ鉢植 前編 後編 六冊 京傳遺稿 京山補作　豊國畫 英泉　泉市
文政五年
三人長兵衛譽ノ忠ノ字三冊　國貞畫　丸文

文化十二年
仇敵手打新蕎麥六冊　豐廣畫　泉市
同　四年
手打新蕎麥以下松の寄木迄楚満人作也京山作にあらず。
末項虎が雨は不明、楚満人は文化四年歿。
敵討姉脊扇五冊　豐廣畫　西村
文化三年
敵討轆轤首娘六冊　同上　同上
同　四年
敵討柳四郎兵衛六冊　豐國畫　同上
同　三年
昔語姑獲鳥ノ仇討三冊　豐廣畫　同上
同　三年
敵討松ノ榮六冊　豐國畫　同上
同　四年
親ノ敵宇津ノ山彦五冊　豐廣畫　同上
同　三年

敵討旭ノ相解五冊門人面徳齋作　國長畫　榎本舍
文化三年
敵討女夫似我蜂三冊中本　豐廣畫　丸文伊賀屋合板
敵討雅木ノ花王五冊　同上　江見屋
文化四年
敵討三ッ重忠孝貞九冊　同上　泉市
同　上
敵討島廻幸助舟六冊　同上　同上
同　上
虚空太郎六冊　同上　同上
享和二年、武者修行咄舍弟仇討。
丹波國しつぺい太郎三冊　豐國畫　同上
寛政八年
敵討時雨ノ友三冊　豐廣畫　西村
享和二年
敵討金糸ノ結縫六冊門人面徳齋作　同上　榎本吉兵衛
文化二年
風流板メ曾我三冊　豐國畫　泉市

敵討淺茅ノわたし六冊　豐廣畫　泉市
文化四年
敵討紀州千貫橋二冊　國長畫　西村
同　上
敵討蘇生娘六冊　豐國畫　同上
同　上
繪本巴女一代記五冊　同上　西宮
同　上
敵討吉野龍田六冊　豐廣畫　西村
同　上
仙物語仙家ノ花二冊遺稿　國貞畫　伊賀屋勘右衛門
同　六年
敵討松ノ寄木（やどりぎ）三冊　豐廣畫　泉市
享和二年
留鯛ハ竟ニ帽貝 黑鯛ハ衛ニ蟀々 虎が雨晴テ大磯六冊　九甚
文化九年

曲亭馬琴　初大榮山人京傳門人 門人鳧儷子は名有て人なし是馬琴別號なり

高尾千字文五冊中本　長喜畫　蔦屋重三郎

寛政八年
時代世話足利染五冊　北尾紅翠齋畫　鶴喜
同十年、魁雷子作
墨田川柳之禿筆三冊　同上　同上
享和二年
五大力三ツノ書訓（コミヤ）三冊　同上　同上
同上、一名雨談德用草紙。
繪本忠臣講釋三冊　豐國畫　同上
享和二年、魁雷子作
曲亭傳奇花叙兒二冊中本　――　蔦屋重三郎 濱松屋幸助合板
文化元年
敵討二人長兵衛三冊　紅翠齋畫　蔦重
同　上
五人囃子部物語三冊　同上　鶴喜
同　上
小夜中山夜啼ノ石文三冊　豐廣畫　同上
同　上
武者修行杢齋傳六冊　同上　蔦重
同　二年
清談 変ニ有身ニ成ル金言二冊　紅翠齋畫　鶴喜

文化二年
二代順禮再度復仇奉打札所誓三冊　月丸書　蔦重
同　上
猫ノ奴妻忠義ノ合奏三冊　豐國書　鶴喜
同　上
敵討阿古屋ノ松五冊　豐廣書　同上
同上、傀儡子作
敵討雜居寢物語六冊　紅翠齋書　鶴喜
同　三年
大師河原撫子話六冊　同上　蔦重
同　上
敵討かなえの壯男五冊　同上　鶴喜
同　上
盆石山之日記二冊中本
同後編二冊　豐廣書　同上
同　上
敵討紀念之長舟前後六十丁　豐國書　鶴金
同四年、一名誰也行燈（佐野、八ツ橋）
島色蟹湊之仇討六冊　豐廣書　鶴喜
同　上

鼓ヶ瀧幼稚敵討六冊　豐廣書　鶴喜
文化四年
復仇岬之洞六冊　春亭書　蔦重
同上、一名賣茶郎談
小鍋丸手石入船六冊　豐國書　鶴喜
同　五年
敵討兒手柏木五冊　同上　江見屋
同　上
敵討身代リ名號六冊　北齋書　鶴喜
同　上
敵討白鳥ヶ關六冊　豐廣書　泉市
同　上
歌舞妓傳助忠義話六冊　春亭書　山城屋藤右衛門
同　上
復仇甚三ヶ紅絹五冊　同上　同上
同上、門人琴川作
二人平太郎二人おりう敵討女夫柳六冊　同上　同上
同上、門人琴川作
旬全伽羅之柴舟三冊　國貞書　丸文
同　六年

上の山下万丸と云油元結の見世開に出す。

玉櫛笥石堂丸物語二冊　北斎書　鶴金

文化六年

敵討襲八丈六冊　國貞書　―

同上

釣鐘彌左衛門奉加助太刀十冊　豊廣書　泉市

同上

小女郎蜘蛛怨苧環十二冊　春亭書　鶴喜

同上

山中鹿之助雜記十冊　春亭美丸書　山城屋藤右衛門

同上

松の月新刀明鑑六冊　春亭書　泉市

同　七年

打也敵野寺鼓婢三冊　春扇書　同上

同上

敵同士石ト木枕二冊中本　豊廣書　伊賀屋

同上

姥櫻女清玄六冊　春亭書　鶴喜

同上

相馬内裡後之雛棚六冊　春扇書　泉市

文化八年

梅津吉兵衛發心記六冊　春扇書　鶴喜

同上

行平鍋須磨之酒宴六冊　同上　同上

同　九年

鳥籠山鸚鵡助太刀六冊　美丸書　同上

同上

浪之花桂ノ夕汐六冊　春扇書　泉市

同上

傾城道中双六六冊　同上　同上

同上

千葉館世継雜談六冊　國貞春亭書　岩戸屋

同上

敵討仇名物好寄三冊　春亭書　鶴喜

同上

敵討勝爾乘掛六冊　春扇書　泉市

同　十年

芦名辻塞仇討六冊　國丸書　鶴喜

同十一年

皿屋敷浮名染著六冊　清峯書　同上

文化十一年		
西ノ都大内鑑六冊	國丸畫	鶴喜
同　上		
已鳴鐘男道成寺六冊	豐國畫	同上
同　上		
驛路鈴與作春駒六冊	國貞畫	岩戸屋
同　上		
比翼紋目黒色揚六冊	豐國畫	泉市
同十二年		
かぐや姫竹の世話六冊	柳川重信畫	岩戸屋
同　上		
龜王丸齡ノ島臺六冊	國直畫	丸文
同　上		
手鞠唄三人長兵衞六冊	國貞畫	泉市
同十三年		
鷀（鵜カ）山後日ノ囀六冊	同上	丸文
同十四年		
伊豫簀垂女純友六冊	春扇畫	泉市
同　上		
伊達摸様判官ひいき六冊	豐國畫	鶴喜

文化十四年		
百物語長者万燈六冊	春扇畫	岩戸屋
同　上		
盤州將棋合戰六冊	同上	泉市
同　上		
雪責身替リ鉢木六冊	同上	同上
文政二年		
春ノ海月之玉取六冊	豐國畫	鶴喜
同　上		
信田妖手白ノ猿牽六冊	豐國畫	同上
同　三年		
安達ヶ原秋ノ錦木六冊	同上	山本平吉
同　上		
籠細工竹取物語六冊	春扇畫	泉市
同　上		
弘法大師誓筆法六冊	國貞畫	森治
同　上		
月夜好ミ阿玉ヶ池六冊	豐國畫	鶴喜
同　上		
宮戸河三社網舟六冊	同上	同上

文政四年
めで度しとし六三ヶ文車六冊　豐國畫　泉市
同　上
女阿漕夜網之太刀魚六冊　英泉畫　同上
同　五年
照子ヶ池浮名寫畫六冊　同上　森治
同　上
女夫織玉川晒布六冊　豐國畫　西村
同　六年
諸時雨紅葉合傘六冊　同上　泉市
同　上
油橋河原祭文六冊　同上　鶴喜
同　上
殺生石後日怪談自初編至五編合本五冊　初編豐國二編以下英泉畫　山口屋藤兵衛
同　七年
金毘羅船利生纜自初編至八編合本八冊　英泉畫　泉市
同　上
童蒙話赤本事始六冊　國貞畫　森治
同　上
梅櫻對之姉妹六冊　豐國畫　泉市

文政七年
襲褄辻花染六冊　豐國畫　西村
同　上
縁結文ノ定紋六冊　國貞畫　同上
同　八年
傾城水滸傳初編　國安畫　鶴喜
同上、上下帙にて毎編八冊づゝ。
同續編第二編より第十二編まで八冊づゝ　國安畫　同上
天保三年
同第十三編上帙四卷　貞秀畫　同上
同　六年
大和莊子蝶々簪六冊　國貞畫　泉市
文政九年
姫万兩長者鉢木六冊　前國貞后美丸畫　森治
同　上
牽牛織女願糸竹六冊　國貞畫　西村
同　十年
今戸土產女西行六冊　同上　森治
同　十一年
漢楚賽擬選軍談自初編至三編毎編八冊　國安畫　西村

文政十二年、同十三年に渡る。
風俗金魚傳 自初編至三編 二十冊　國安畫　森治
同上、一二編八冊づゝ三編四冊。
代夜待白女ノ辻占六冊　國貞畫　西村
同十三年
新編金瓶梅 自初編至六編 毎編八冊づゝ　初編二編國安評 自三編六編國貞畫
天保二年、同十三年に渡る　泉市
千代褚良著聞集 初編八冊二編四冊 十二冊　初編國安畫 二編重政畫　西村
同　三年
覗藥霞ノ報條（ヒキフダ）四冊 再板　國芳畫　鶴喜
同　八年

十返舍一九 通油町重田與七 一九の妻は於民と云歟作書の畫中にまゝ見へたり畫面にては隨分婀娜ものなり一笑

假名文章女忠臣三冊　一九自畫　西村
寛政十年
昔話味緣熟三冊　同上　岩戸屋
同十二年、一名金ノ蔓堀出しブゲン
坂東七英士三冊　春亭畫
享和元年

敵討岸柳島物語五冊　一九自畫　岩戸屋
享和元年
敵討夜居鷹三冊　菊丸畫　村治
同　二年
播州赤穗 車川仇討實記三冊　一九自畫　西村
同　上
艶男狸ノ金箔三冊　同上
同　上
一九畫作團七嶋五冊　―　榎本
同　上
敵討合邦辻三冊　豐國畫　同上
同　三年
風之森狐ノ仇討三冊　豐國畫　西村
同　三年
駿河阿部川仇討話五冊　一樂亭榮水畫　村田
同　上
色外題浮氣表紙三冊　―　―
同　上
化物太平記　一九自畫　山口屋忠助
文化元年

後文政之頃化之皮太鼓傳と稱して山口屋藤兵衛より發賣。
鳳凰英語三桐山合本一冊　菊麿書　村田
文化元年
じそうだんしつこなし（前編三冊 後編三冊）六冊（前編月麿書 後編一九自書）　山口屋忠助
同　二年
防州氷上宮利生仇討五冊　豐國書　村田次郎兵衛
同　上
敵討阿部曲輪六冊　月丸書　村田
同　上
銘ハ正宗刀之珍說五冊　豐國書　西村
同　三年
面皮千枚ばり三冊　月丸書　山口屋忠助
同　上
法ノ花輪廻ノ仇討三冊　豐廣書　岩戸屋
同　上
敵討矢指ヶ浦（前 後）十三冊　豐國書　村田
同　上
青嵐柳下陰五冊　一九自書　――
同　上

敵討猿番梅柏餅五冊　長喜書　――
文化元年
敵討連歌怪談三冊　一九自書　――
同　四年
敵討大悲之誓二人ゞ孝行五冊　豐廣書　村田
同　上
諏訪湖狐怪談（前 後）十冊　同　上　同　上
同　上
甲州矢倉仇討六冊　春亭書　泉市
同　五年
商人金之釆配　一九自書　山口忠助ヵ
同　上
忠信姥ヶ餅七冊　豐廣書　村田
同　上
同後編武者傾禮捨松噺七冊　同　上　同　上
同　八年
敵討浪速男十冊（前編五冊 後編五冊）（前編豐國 後編國貞書）　西村
同　五年
敵討葛ノ松原六冊　豐廣書　泉市
同　上

勇略女敎訓五冊　北齋畫　岩戸屋
文化五年
花疊都仇討五冊　春亭畫　同上
同上
皷艸花ノ仇討五冊　紅翠齋畫　江見屋吉右衞門
同上
（前編）嵐山花ノ仇討五冊　豐廣畫　岩戸屋
同上
（後編）春霞女廻國五冊　同上　同上
同上
三ツ浦難波復讐六冊　國貞畫　森治
同上
忠孝二筋道七冊　清峯畫　西村
同上
桑名屋德藏廻船噺六冊　豐廣畫　近江屋權九郎
同上
東男連理ノ緒七冊　國貞畫　村田
同　六年
敵討女用文章六冊　春扇畫　若狹屋
同上

敵討女諸禮鏡五冊　豐廣畫　豐榮堂
文化六年
敵討和布刈海門八冊　春亭畫　泉市
同上
關野太郎物語六冊　春扇畫　同上
同上
大矢數意恨仇討六冊　同上　同上
同上
座頭ノ宮由來三冊（越後話）　豐廣畫　西村
同上
敵討鷲娘之由來七冊　春亭畫　鶴金
同上
彦山靈驗英嶽仇討噺六冊　國貞畫　森治
同上
三峰山御狼助太刀七冊　春亭畫　鶴喜
同上
御嶽山誓仇討七冊　月丸畫　山口屋藤兵衞
同上
紙治小春大雜書六冊　豐廣畫　西村
同　七年

力競一對男三冊　春亭書　村田
文化七年
敵討西海硯六冊　國貞書　近江屋
同　六年
大慈大悲利劍之助太刀三冊　國満書　鶴喜
同　七年
今昔矢口ノ仇浪三冊　昇亭北壽書　森治
同　上
男達三筒太鼓五冊　國滿書　西村
同　上
三世相女手鑑六冊　春亭書　鶴喜
同　八年
雛祭妹背仇討八冊　式麿書　村田
同　上
敵討法ノ花合邦ヶ辻三冊　春扇書　鶴喜
同　上
新居帽魔附紐由來三冊　美丸書　大坂屋秀八
同　上
忠臣一代八卦七冊　月丸書　山口屋
同　上

美濃近江寢物語七冊　春亭書　西村
文化八年
成程根売一九か作三冊　國丸書　鶴喜
同十一年
黄金花咲薩與双紙六冊　春亭書　同上
同　上
信州雛食稲由來六冊　國直書　同上
文政二年
湯尾峠孫嫡子由來六冊（竹イ）　同上　山本
同　上
大江山酒顚童子談六冊　同上　鶴屋
同　三年
はえぬき力男三冊　春亭書　同上
文化十四年
昔話玉苗艸紙五冊　美丸書　伊藤與兵衛
文政五年
木曾秋錦篠揭六冊　豐國書　山本
同　上
開運菊一文字六冊　英泉書　伊藤
同　七年

竹生嶋琵琶湖水六冊　英泉書　山本
文政八年
雪明常盤松自初編至四編全廿四冊毎編六冊づゝ
同六年、同十二年に渡る。　初編豐國二編以下國安書　山口屋
弓削道鏡譚六冊　國安書　鶴喜
同　十年
初時雨矢口渉六冊　英泉書　山本
同十一年
露時雨駕籠ノ渉六冊　重政書　同上
同　上
魁伊豆ノ旗揚四冊　同上　西村西宮合板
同　上
男結花ノ緣記六冊　同上　山本
同十二年
清談博多小女郎譚六冊　英泉書　泉市
同　上
新製小人島廻リ四冊　貞秀書　岩戸屋
同十三年
天下茶屋敵討四冊　二世豐國書　同上
天保二年

原板寬政十一年
義經越路ノ松六冊　貞秀書　山口屋
天保三年
忠臣店請狀四冊　同上　同上
同　四年
三國太郎再來傳六冊　東一、國直、竹内國芳書　竹内
同　六年
結神末松山六冊　國貞書　山口屋
同　八年
曲輪育操松三冊　月丸書　近江屋
文化七年
伊勢音頭戀ノ手跡　同上　山口屋
同　十年
敵討高野楓五冊　同上　村田
同　七年
敵討丹州手々打栗五冊　一九自書　蔦重
同　二年
敵討浪花之梅三冊中本　――　上總屋忠介
同　上
忠臣跡のまつり三冊　重信書　鶴喜

文政十一年
色摺新形染 二冊（下谷常陸屋 呉服物引札）　春亭畫　村治
文化四年
面白黒心學草紙 三冊　國丸畫　森治
同十二年
欲ノ川乗合船 六冊　美丸畫　鶴金
文政五年
敵討蝦蟇妙藥 五冊　式麿畫　村田
文化六年
復仇奥州黒岡坂 三冊　月丸畫　近江屋
同　上
旅硯伊賀越日記 三冊　美丸畫　森治
同十一年
敵討余世波與往津多（コセハヨウツタ） 三冊　春亭畫　村治
同　十年
附祭踊ノ子新書 五冊（幽月庵元熈作 一九校合）　伊藤
文政六年
滑稽田舎鶯 二冊（元熈作 一九校）　春亭畫　同上
同　上
敵討連ノ書葉 六冊　豊廣畫　西村

文化元年
敵討桔梗ヶ原 五冊　豊廣畫　村田
同　上
俗言種狐拳 三冊　鳥居清峯畫　西村
同　五年
多羅福注文帳 三冊　豊廣畫　榎本吉
同　上
紅葉闘七時雨傘 三冊　月丸畫　森治
同　六年
敵討替手杜 三冊　同上　岩戸屋
同　上
唐土茶番狂言ノ記原 三冊　同上　山口屋
同　上
伊賀越讐討主従待合噺 六冊　美丸畫　森治
同　七年
位山誉之横綱 六冊　春亭畫　鶴喜
同　九年
妙義靈應女道草 二冊　國丸畫　森治
同十一年
富當眼 三冊　國直畫　森治

文政二年
滑稽當座帳六册　美丸畫　鶴金
同　三年
八ハ武士弓茂引方三册 門人初音樓一炷作 一九校　月丸畫　榎本
文化八年
身延山誓ノ仇討三册 柴舟庵一双作 一九校　同上　近江屋
同　七年
白石噺 潤色風薫ル女ノ仇討二册　一九自畫　岩戸屋
同　元年
滑稽旅がらす　豐國畫　鶴喜
初編文政四年、二編同五年
大男 東下り旅ノ道艸四册　國安畫　松村
文政十一年
金のわらじ　四編より十一編國丸畫 十八編國安畫　森治
―
玉柏二八男三册　月丸畫　山口屋
文化十年
一休 話 草庵茶漬飯三册　同上　同上
同　六年
高師直實傳小夜衣　國貞畫　伊藤

文政四年
二ッ鷹ノ羽有馬ノ藤二册 持丸作 一九校　安秀畫　森治
天保三年
赤本の直しなり
義ハ光ル夜功ノ珠五册　一九自畫　村田
寛政十年
縁はいな物味な物好三册　月丸畫　山口屋
文化九年
奥州大悲山利益 吉名村孝士玉市傳記 大蛇物語二册 一九校　美丸 國信畫　森治
同十三年
奴五斗平名譽瀧水三册 五返舎半九作 一九校　月丸畫　山口屋
同　十年
滑稽 機嫌上戸三册　國丸畫　鶴喜
同十四年
敵討此方世界二册　一九自畫　山口屋忠助
同　三年
戀ハ 曲物 常夏物語六册　國貞畫　山口屋
文政八年
浮氣艸紙三册 蘭衣作 一九校　北馬畫　―
文化三年

富士左近淺間左衛門仇討金剛杖六冊　豐廣畫　榎本
文化七年
大峯山院權助始八冊　美丸畫　同上
文政七年
仕形ばなし形屋津天御覽三冊　春亭畫　丸文
文化十四年
於夏清十郎中昔戀道行三冊　美丸畫　村田
同十二年
おふじ傳兵衛敵討戀友猿三冊　國長畫　丸文
同　六年
色男大安賣五冊　春扇畫　泉市
文政三年
越中立山幽靈村仇討六冊　豐廣畫　鶴喜
文化五年
うさぎ五郎吉仇討上州絹三冊　月丸畫　丸文
同　六年
敵討先程ノ御笑艸三冊　同上　山口屋
同十二年
神風倭國ノ功　貞房畫　岩戸屋
文政十一年

昔々赤地法印二冊　國丸畫　森治
文化十二年
梅川忠兵衛戀の初旅二冊　同上　同上
同　上
蒲原入道獨魂二冊　美丸畫　同上
同　上
善惡兩道夢ノ浮橋三冊　國丸畫　鶴喜
同　九年
菅原流清書草紙六冊　春亭畫　同上
同　十年
海陸西國往來三冊　美丸畫　同上
同　上
梅薫筑紫神垣三冊　月丸畫　森治
同十一年
彦山靈驗毛屋村孝行男二冊　美丸畫　同上
同　上
風光ル白旗榮六冊後編　豐國畫　山口屋
文政五年
昔男癖物語三冊　美丸畫　森治
同　九年

博多小女郎戀仇討狐介太刀三冊　豐國畫　西村
文化元年
駿州靈蛇之唐衣三冊一双作　月丸畫　村田
同　八年
石上布留仇討六冊　春扇畫　若狹屋
同　六年
猪熊入道物語六冊　同上　同上
同上
通俗賣油郎六冊　美丸畫　伊東
文政七年
御覽戀ヾ曲者三冊初音樓一炷作　月丸畫　榎本
同上
玉櫛笥二人奴三冊　國長畫　岩戸屋
文化三年
福ノ神寶ノ山入四冊　國安畫　江崎屋
文政七年
敵討越後獅子五冊柴舟庵一双作　月丸畫　榎本
文化七年
於臍加福茶番四冊　同上　西村
同十一年

貞操ノ柳三冊　北馬畫　同上
文化七年

式亭三馬 亦稱四季山人姓は菊地字は久德名は太輔別號遊戲堂喋囃哩樓遊戲道人

婚禮三ツ組昔形福壽盃三冊　美丸畫　西宮
文化七年
箱根靈驗躄仇討六冊　豐廣畫　同上
同　四年
雷太郎強盜物語十冊　豐國畫　同上
同上
復讐娵おどし谷六冊　同上　同上
同上
玉藻前三國傳記三冊　春亭畫　森治
同　五年
二人禿對ノ仇討十二冊　國貞畫　鶴喜鶴金合板
同上
蟒蛇於長柳草紙七冊　同上　濱松屋幸助
同上
玉藻前龍宮物語三冊　同上　近江屋

文化五年
昔語丹前風呂六冊　國直畫　鶴金
同　九年
契情畸人傳五冊　重信畫　森治
同十四年
腹鼓狸ノ忠信二冊　美丸畫　鶴金
同　六年
根なし艸夢物語三冊　春亭畫　近江屋
同　上
原本芝全交作親ノ敵現歟夢也三冊附
日高川清姫物語五冊　國直畫　鶴喜
同　十年
復仇安達太郎山五冊　豐廣畫　西宮
同　四年
昔語釜ヶ淵　國貞畫　鶴金
同　八年
於竹大日孝鏡七冊　春亭畫　鶴喜
同　七年
難有孝行娘三冊　同上　森治
同　五年

敵討宿六ノ始十冊　豐國畫　西宮
文化五年
鬼兒島譽ノ仇討八冊　同上　同上
同　上
鶉權兵衛俠客話三冊　英山畫　鶴喜
同　七年
親ノ爲孝太郎物語四冊　美丸畫　西宮
同　上
冠詞筑紫不知火八冊　豐國畫　鶴喜
同　上
昔語兵庫ノ築嶋六冊　美丸畫　鶴金
同　上
女戲場時世粧六冊　國貞畫　西宮
同十二年
左甚五郎腕ノ彫物三冊　國滿畫　鶴金
同　七年
唄祭文阿三藻平六冊　國貞畫　森治
同　上
却說浮世之助話六冊　同上　鶴金
同　上

井筒業平 全盛合奏 一對男時花歌川十二冊 前編豐國畫 後編豐廣畫 伊賀勘

文化七年

其寫畫戲場ノ俤七冊 豐國畫 同上

同 上

吾妻花歌妓氣質六冊 前國貞 後國直畫 森治

同 十年

艶競二人忠兵衛六冊 國貞畫 西宮

同 八年

腹ノ內戲作ノ種本三冊 美丸畫 鶴喜

同 上

二枚續吾嬬ノ錦繪六冊 豐國畫 同上

同 上

武者修行英勇傳五冊 國丸畫 大坂屋秀八

同 上

鯖頓兵衛幼草紙六冊 國滿畫 鶴喜

同 九年

舊內裡眞鳥譚六冊 國貞畫 森治

同 上

万字屋玉櫛燈籠番附六冊 國直畫 鶴喜

同十一年

五色瀨來婀娜合奏六冊 國貞畫 鶴喜

文化十四年

當世織續紛八丈六冊 國直畫 西宮

同十一年

名ノ總角二人助六六冊 國貞畫 鶴金

同 上

播隨法花 任俠中男鑑六冊 同上 同上

同 上

異魔ノ昔於寄雜談六冊 國直畫 森治

同十二年

艶客歌妓結七冊 國貞畫 西宮

同十四年

松竹梅女水滸傳十三冊 同上 山本平吉

文政三年

棊太平記白石噺五冊 原板寛政七年 再板三馬之序 國貞畫 西宮

時花摸様由禪染六冊 同上 同上

文政四年

坂東太郎強盜譚十五冊 前中後 豐國畫 西村

初編文政七年、中編、後編文政八年

雲龍九郎偸盜傳十七冊自初編至四編　國貞重政畫　西宮
初編寛政十年、二編同年、三編、四編同十二年
風雲井物語七冊　國貞畫　鶴喜
文化八年
大津土產吃又平八冊　同上　鶴金
同　五年
堀名五郎雅話釋五冊　美丸畫　同上
同　八年
吾妻街道婦女敵討三冊　豊國畫　西宮
寛政十年
稗史億說年代記三冊　三馬自畫　同上
享和二年、一名再度燒直ノ鉢被姫
親ノ敵內股膏藥三冊　豊廣畫　同上
文化二年
嫐を訓歌字づくし三冊　同上　泉市
同　上
小野道風獨鈷駄六己巳巳巳歌字盡六冊　國直畫　西宮
同　十年
あづま與五郎和合神所緣赤繩五冊　美丸畫　森治
同十一年

毬歌娘形氣五冊　豊國畫　森治
文化七年
戀山崎與二兵衛物語三冊　美丸畫　同上
同　上
宮本武者巖窟雷玄岸柳島物語六冊　國貞畫
文政五年
其浦嶋七世孫助六冊　同上　鶴喜
文化十一年
衣川怪談三俣小說累摸樣楓ノ襠六冊　同上　同上
同　上
無交擬安寶（まじりなしたはけ）三冊　國直畫　同上
同　上
ゐ生の再纏うき世夢助魂膽枕三冊　國貞畫　同上
同　上
女容鏡七人化粧廿卷　同上　西宮
文政五年
山崎與二兵衛明星月五郎契情吾嬬鏡十冊　豊國畫　同上
同　上
江島利生街道太郎邪物語十冊　同上

お鶴が孝行亀吉か忠心万福長者出世藏三冊　國貞畫　森　治
文政二年
三世相應二世物語女房氣質おつな赤縄五冊　國直畫　西　宮
同十二年
おしゆん傳兵衛有田唄お猿ノ仇討六冊　國貞畫　濱松屋幸助
文化五年
打譚（タソケモノガタリ）一冊　豐國畫　山城屋藤右衛門
同　六年
江戸ノ花三升格子六冊　國貞畫　西　宮
同　四年
女房氣質後編合鏡女風俗五冊　國直畫　同　上
同十三年
梅孝（幸茶イ）蘭娳娜染色六冊　國貞畫　同　上
同　上

式亭小三馬（三馬實子幼名虎之助）
娘曆振袖初メ四冊初編　國安畫　山口藤
文政十二年
同後編四冊　同　上　同　上

天保二年
仇競意氣地鮫鞘六冊　重政畫　川口正藏
文政十二年
喜怒哀樂堪忍袋六冊　國安畫　鶴　喜
同　上
花紅葉吉野龍田六冊　二世豐國畫　岩戸屋
同　上
本朝斑猫傳四冊初編　重政畫　西　宮
同　上
双面桂ノ川水六冊　國安畫　泉　市
天保元年
吾妻ノ花所縁ノ襦六冊　國貞畫　山本平吉
同　四年
戀ノ山崎妹脊合鴛六冊　同　上　鶴　喜
同　五年
歌祭文綠ノ合彈四冊　同　上　山　本
同　六年
伽三味縁（線カ）筆操四冊　同　上　同　上
同　七年
操競優軍記六冊　同　上　同　上

天保七年
勝角力二代ノ顔觸六冊　國貞畫　泉市
同上
小三馬賣物景物賑式亭　同上　小三馬藏板
同上
梅薫雪宝咲六冊　貞秀畫　山口藤
同　八年
江戸紫手染色揚八冊　國貞畫　佐野喜
同上
花筏月ノ浮舟四冊　貞秀畫　蔦吉
同上
和漢名畫ノ功六冊（イサホシ）　同上　同上
同　九年
池楊衣菊ノ新形四冊（於菊幸介）　國貞畫　同上
同上
浪花男并簡雁金六冊　同上　森治
同　十年
雪月花娘英勇傳四冊初編　同上　川口宇兵衛
同上
菊襲艶揚妻四冊　貞秀畫　泉市

天保十年
新曲琵琶ノ湖四冊初編　國貞畫　泉市
同十一年
秋ノ色千種花園四冊　貞秀畫　蔦吉
同上
稻妻染女伊達姿六冊　國貞畫　同上
同上
隅田川月ノ姿見十二冊（初編六冊二編六冊）　同上　山本
同上
奇縁結ノ赤縄四冊初編　同上　藤岡屋彦太郎
同十三年
戀渡ッ操ノ八ッ橋四冊　同上　同上
同十二年
浮世又平名畫ノ譽四冊初編　國重畫　同上
於花半七雛女夫櫻ノ二度咲六冊　重政畫　西宮
文政十一年
古今亭三島（三馬門人花川戸住三河屋吉兵衛）

熊坂長兵衛金賣於吉花盛雛献立三冊　美丸畫　森治
文化十三年
昔語本田ノ始リ三冊　國直畫　鶴喜
同　十年
廓薫(サトカホル)曲輪ノ梅川五冊　貞幸畫　森治
同十二年
玉藻前雲井ノ檜扇五冊　國次畫　鶴金
同　九年
妻乞鹿火串ノ鄙唄六冊　國直畫　西宮
同十一年
四季物語廓寄リ木六冊　美丸畫　同上
文政三年
二重染會我雁金六冊　同上　同上
同　六年
花競操日記六冊　同上　森治
同　上
戀渡ル木曾ノ棧三冊　國次畫　西宮
同　十年
隅田川屛風八景六冊　國安畫　森治
同　八年

於初德兵衛船遊び三冊　美丸畫　西宮
文政二年、一名初遊深川新話
江戸櫻全盛色里六冊らん蝶この糸　國安畫　森治
文化十二年
おしゆん傳兵衛水馴棹浮名堀川三冊　國丸畫　西宮
同十一年
福德三人客氣話二冊　國重畫　同上
同十四年
春霞繼穗梅枝六冊　國直畫　同上
同十二年
本町育戲作淸書三冊　美丸畫　同上
同　上
大當リ桂ノ月弓三冊　國丸畫　同上
同十三年

德亭三孝 三馬門人

書習廓文章五冊　國次畫　西宮
文化九年
都鳥吾妻育三冊　國直畫　丸甚

文化十二年

益亭三友 三馬門人 別號吳竹園

春花魁曾我 五冊 國丸畫 西宮

文化十年

五人揃紋日之大寄 三冊 國安畫 同上

同 八年

左文字鍾義刀ノ切味 五冊 國丸畫 同上

同 上

吾嬬育露ノ荒事 三冊 同上 同上

同 九年

髭大盡廓之全盛 五冊 國次畫 同上

同 上

花鳥風月仇討話 六冊 歌川文治畫 同上

同 六年

鐘卷市右衛門與助太刀 五冊 國丸畫 同上

同 七年

鶴龜杏對ノ山門 五冊 同上 同上

同 八年

笑物黄金嶋臺 二冊 國次畫 西宮

文化八年

浮身姿女友盛 國丸 國次 畫 同上

同 上

四天王婦女出入 三冊 國丸畫 同上

同 十年

春亭三曉 三馬門人

隅田堤二人連彈 五冊 國丸畫 西宮

文化十一年

光明眞言誓仇討 五冊 國直畫 岩戶屋

文政四年

十種香萩の白露 五冊 同上 山本

同 上

雷神丸劔ノ稻妻 三冊 美丸畫 鶴金

文化九年

猪ノ助若艸 仇競浮名ノ一節 三冊 同上 西宮

同十二年

小ひな半兵衛 浪ノ花月ノ難波江 三冊 國直畫 丸文

文政四年

福亭掾馬 後に樂亭西馬三馬門人別號夷福亭宮守 通稱西宮新六本材木町二丁目地本屋

江戸紫對之重着六冊　重政畫　西宮

文政九年

總累赤繩ノ取組六冊　英泉畫　山本平吉

天保八年

天竺德兵衛異國話四冊　國芳畫　丸甚

同　六年

坂東太郎後世譚八冊初編　重政畫　山口屋

同　上

同第二編八冊　貞秀畫　同上

上帙文政九年、下帙同十年

東海道小夜ノ白浪六冊　國丸畫　西宮

文政四年

宮守作と有り。

成田靈驗大山奇瑞 繫馬鐙ノ總郡(フサクニ)六冊　國貞畫　同上

同　五年

京橋お仙中橋お万 艶衣裳二人娘六冊　重政畫　若狹屋

文政十二年

樂齋山壽 號藍亭晋米ならん歟

松ノ春邊出世景淸三冊　國直畫　西宮

文化十三年

忠臣藏曾我物語二冊　國丸畫　同上

同　上

宮城ノ信夫團七黒平 團碁白市話六冊　國直畫　同上

同　上

福亭三笑 三馬門人牛込住 手習師森貞雄

果報寢物語三冊　豐廣畫　泉市

享和三年

染替ヶ團七島六冊　春亭畫　山口屋

文化五年

於園六三 仇文字しらしの留筆三冊　同上　山本

文政四年

夏浴衣染分摸樣三冊　同上　岩戸屋

文化十四年
松論仕立機替八丈三冊　春亭書　丸文
文政三年
昔唄戀ノ山崎　同上　岩戸屋
文化十四年

柳亭種彦

奴ノ小万物語四冊中本　優遊齋桃川書　山崎平八
文化四年、初編二冊二編二冊
江戸紫三人兄弟八冊四編一編ノ一冊づゝ　同上　同上
同四年より同八年迄、一名總角譚
鱸庖丁青砥ノ切味七冊　蘭齋北嵩書　西村
同　八年
京一番娘羽子板六冊　柳川重信書　同上
同　九年
梅櫻振袖日記三冊　國丸書　同上
同　上
春霞布袋本地三冊　重信書　同上
同　十年
錦帶淮無間六冊　重信書　西村
文化十年
花吹雪若衆宗玄六冊　春扇書　同上
同　上
花紅葉一對若衆三冊　重信書　同上
同十三年
女摸樣稻妻染六冊　同上　同上
同　上
忠ト孝義理ノ詰物六冊　同上　同上
同十四年
近松門左衛門曾我昔狂言三冊　國貞書　同上
同　上
高野山万年草紙六冊　重信書　岩戸屋
同　上
滑稽鷸鳥ノ嘴二冊　國丸書　同上
同十二年
女合法辻談義六冊　清峯書　西村
同　九年
正本製初編六冊於花半七　國貞書　同上
同十二年

同再板八冊　國貞畫　西村
天保五年
正本製二編六冊（小いな半兵衞）　同上　同上
正本製三編九冊（二代源氏物）　同上　同上
文化十四年、一名顔見世物語
正本製四編（おきく幸助）七役草紙六冊　同上　同上
文政三年
正本製（五編六編）二ッ蝶々十二冊（五篇六冊六篇六冊）　同上　同上
五編文政五年、六編同六年
正本製（七編八編九編）十八冊（お染久松毎編六冊づゝ）　同上　同上
七編文政七年、八編同八年、九編同九年
正本製（十編十一編十二編）十二冊（夕霧伊左衞門花咲綱五郎毎編四冊づゝ）　同上　同上
十編文政十一年、十一編同十二年、十二編天保二年
國字小説三蟲拇戰（ムシケン）六冊　前編國貞後編國丸畫　同上
合三國小女郎狐六冊　重信畫　丸文
文政二年
同　四年
千瀬川一代記六冊　前編國貞後編貞繁畫　同上
同　二年

桔梗ノ辻千種ノ衫（カタビラ）五冊　國貞畫　鶴金
文政三年
南色梅ノ早咲六冊　重政畫　同上
同　上
此糸らん蝶二箇裂手綱ノ紫六冊　國貞畫　丸文
同　上
書傀儡二面鏡六冊　同上　西村
同　三年
淺間ヶ嶽煙ノ姿繪六冊　重信畫　同上
同　上
娘修行者花ノ道記六冊　國貞畫　山本
同　四年
娘金平昔繪草紙六冊　同上　鶴喜
同　上
傾城盛衰記六冊　國直畫　西村
同　上
雛案道中双六六冊　國貞畫　同上
同　上
浮世形六枚屏風六冊　豐國畫　同上
同　上

浪花狂言三勝噺六冊　國貞畫　鶴金

文政四年

小かん平兵衛床飾錦ノ額無垢五冊柳菊合作　美丸畫　同上

同　上

忍貴對ノ花籠五冊　國貞畫　岩戸屋

同　上

色ゝ吉由縁ノ藤澤六冊　同上　伊藤與兵衛

同　上

浮世一休廓問答六冊　同上　西村

同　五年

孝ト貞兩岸一覽六冊　國直畫　同上

同　上

操競三人女六冊　豐國畫　山本

同　六年

鯨帶博多ト三國六冊　國貞畫　伊藤

同　五年

比翼紋松爾鶴賀六冊　豐國畫　西村泉市合板

同　六年

女郎花喩言ノ粟嶋六冊　國貞畫　西村

同　上

水木舞扇ノ猫骨六冊　國貞畫　西村泉市

文政六年

新靱八百屋ノ藏開キ六冊　同上　鶴金

同　上

小脇差夢ノ蝶鮫六冊　同上　伊藤

同　上

燈籠踊秋ノ花園六冊　同上　山本

同　七年

唐人髷今國性爺六冊　同上　鶴喜

同　八年

近江表座鋪八景六冊　同上　泉市

同　上

花紅葉名所扇　同上　伊藤

同　上

雁金紺屋作ノ早染六冊　同上　鶴喜

同　九年

笹色ノ猪口ハ暦手六冊　前編豐國二編二世豐國畫　西村

同　上

人形筆五色ノ糸藏六冊　國貞畫　山本

同　上

蛙ノ歌春ノ土手節六冊　國貞畫　伊藤
文政九年
柳ノ糸花の組交六冊　同上　同上
同　十年
伊呂波引寺入節用十二冊同　上　鶴喜
同十一年
忍笠時代蒔繪四冊　國丸畫　西宮西村合板
同　上
關東小六昔舞臺十二冊　重政畫　西宮西村合板
同　上
同再板八冊　貞秀畫　西村
天保六年
誂染遠山鹿子廿四冊 自初編至六編 毎編四冊づゝ　國貞畫　山本
文政十三年より天保七年
昔々歌舞妓物語四冊 初日夕ぎり藤うら菜　國丸畫　西村
文政十三年
同二日目怪談三嶋お仙四冊　國貞畫　同上
天保二年
富士裾野うかれの蝶鳥四冊　英泉畫　蔦吉
同　上

花ハ櫻木春ノ夜語四冊　英泉畫　蔦吉
天保三年
三ッ瀬川上品仕立追善物二冊　國貞畫　山本
同　上
奇妙頓禮地藏ノ道行二冊　同上　西村
同　上
出生奴小万ノ傳四冊　國直畫　鶴喜
同　四年
邯鄲諸國物語 近江出羽之卷 八冊　國貞畫　西村
同五年、藥王二郎傳
同二編大和の卷十二冊 毎編四冊づゝ 同上　同上
前編天保六年後編八年殘編九年しげ山鐘二郎傳
同三編播磨の卷 前中後 十二冊 毎編四冊づゝ 同上　山本
前編天保十一年、中編後編同十二年、鈴ノ權三ノ傳
讀テ宮城野忍昔四冊　國貞畫　森治
天保八年
自問自答戲言句合二冊　國芳畫　鶴喜
同　六年
おきく幸介 お夏清十郎 緣結月下ノ菊三冊中本　國貞畫　加賀屋源介
同十一年

近松門左衛門曾我昔狂言二冊 柳亭修辭 國貞畫 西村
文化十四年
ふしみときはくまさか物語四冊 國貞廣重畫 同上
天保四年
娘丹波奴惠能堀川歌女猿曳六冊 重信畫 同上
文化十一年
昔話浦島ぢゝい三冊 芥子形 貞秀畫 ――
きちちやんとん〳〵三冊 芥子形 同上 ――
火焚ばゝ二冊 芥子形 同上 ――
茶番いろは二冊 芥子形 同上 ――
偐紫田舍源氏初編 柳亭 國貞畫
文政十二年、毎編四冊づゝ 鶴屋喜右衛門
同二編 桐壺、帚木、あふひ
同十三年
同三編 空蟬
同 上

同四編 夕顔の上
天保二年
同五編 夕顔の下
同 上
同六編 若紫
同 三年
同七編 末摘花
同 上
同八編 紅葉の賀
同 四年
同九編 紅葉の賀
同 上
同十編 末摘花
同 上
同十一編 あふひ
同 五年
同十二編 花の宴
同 五年
同十三編 榊
同 上

同十四編　榊
天保六年
同十五編　榊
同　上
同十六編　花散里
同　上
同十七編　須磨
同　上
同十八編　明石
同　七年
同十九編　明石
同　上
同二十編　明石
同　上
同廿一編　明石
同　上
同廿二編　みをつくし
同　八年
同廿三編　みをつくし、蓬生
同　上

同廿四編　關屋
天保八年
同廿五編　繪合
同　九年
同廿六編　松風
同　上
同廿七編　薄雲
同　上
同廿八編　松風、朝顔
同　十年
同廿九編　朝顔
同　上
同三十編　玉桂
同　上
同三十一編　玉桂
同　上
同卅二編　乙女
同十一年
同卅三編　初音
同　上

同卅四編　初音、胡蝶
天保十一年
同卅五編　螢
同十二年
同卅六編　常夏　かゞり火、野分
同　上
同卅七編　野分、みゆき
同十二年
同卅八編　藤袴、巻ばしら
同十三年

笠亭仙果 種彦門人尾張熱田の住 聞屋役通稱高橋彌太郎

合せ物端唄彈初八冊種彦校　前編國貞畫 後編國安畫　鶴喜
天保二年
花街雀（サトスヾメ）竹ノ夜遊十冊種彦校　國貞畫　同上
同　三年
肱笠雨小春ノ客辮八冊種彦校　國貞畫　西村
同　四年
千代見草調ノ富貴組四冊種彦校　國安畫　山本
天保五年
油丁製紫種黄表紙四冊種彦校　貞秀畫　鶴喜
同　五年
枕琴夢ノ通路六冊種彦校　同上　同上
同　六年
花ノ舞賤ノ俳優四冊種彦校　國虎畫　西村
同　七年
一筋道雪ノ眺望四冊　國芳畫　鶴喜
同　八年
柳陰古着ノ新見世四冊　貞秀畫　山本
同　十年
見世三味線一寸連彈六冊春馬合作　同上　西村
同　九年
見目より草紙四冊　同上　山本
同十三年、萬年紙龜の閑書外題改め。
敵鰹差身ノ業物四冊仙果校 通用亭徳成作　畫國芳門人寄合
同　九年　鶴金

柳亭種彦校合物 門人に不限

お花半七狐拳之濫觴三冊　國安畫　丸文
文政二年、茗溪庵作（本郷お茶の水住人）
柳蔭桂ノ川水三冊茗溪庵作　國直畫　岩戸屋
同　五年
敵討鶉權兵衛六冊林屋正藏作　重政畫　西村
同十二年
五大力書直ス筆鞘割三冊茗溪庵合作　美丸畫　同上
同十四年

萍亭柳菊 柳屋菊彦と號す種彦門人

お駒才三新織續紛八丈五冊種彦校　美丸畫　鶴金
文政五年
小かん平兵衛床飾對ノ額無垢五冊種彦校　同上　同上
同　四年
上州機筆綾織六冊種彦校　貞秀畫　鶴喜
天保六年

仙客亭柏琳 種彦門人相州磯邊住通稱荒井金次郎

花吹雪緣ノ柵六冊種彦校　國芳畫　鶴喜
天保三年
星下リ梅ノ早咲六冊種彦校　貞秀畫　同上
同　五年
紫房紋ノ文箱種彦校　同上　同上
同　七年

瓢亭吉見種繁 種彦門人

色上ヶ鬮七島六冊仙果序　國芳畫　西村
天保四年
旗飄菀水ノ萬葉六冊種彦校　廣重畫　鶴喜
同　五年
園碁手段鶴ノ巢籠四冊　貞虎畫　西村
同　七年
白木屋於駒淸書草紙四冊種彦添削　貞秀畫　同上
同　八年

一二亭春馬 原名九返舍一八改故一九門人中頃獨立して專ら著述あり後は柳亭社中に等し

尾形鱗生傳五冊　重政畫　山本

天保四年

是合卷作の初なり跋に一九の口上あり。

夜討曾我人形製十冊前編六冊後編六冊　國貞畫　山本

前篇天保五年、後篇天保八年

見世三味線一寸連彈六冊　貞秀畫　西村

同九年、仙果合作

霞帶春ノ空解四冊　國貞畫　山本

同　十年

仙女香七變化粧六冊初編　同　上　同　上

同十一年

柳泉亭種正 種彥門人

紅白蝶ノ曲ヶ舞六冊　國貞畫　蔦　吉

文政十三年

玉亭光娥

奇哉男一ツ家三冊種彥序幷ニ校合　國丸畫　西村

文政三年

敵討淺草利生記三冊　豐國畫　――

享和頃カ

墨川亭雪麿

弘智法印君坂ノ松六冊　國直畫　山本

文政五年

小柳島綱娜帶留六冊　國安畫　丸文

同　上

兩個妻姿之嫐六冊　國直畫　山本

同　六年

興行曲浮名ノ仇色六冊　同　上　鶴喜

同　上

稽古本柳燕(ツバクラ)口六冊種彥校　同　上　鶴金

同　上

玉簾筒兩個姿見六冊　同　上　丸文

同　七年

菊酒屋千歲諸白髮六冊　國貞畫　東屋大助

同　上

夏木立戀ノ楽ヲ枝六冊 國貞畫 山本
文政八年
笠松峠雨夜ノ菅蓑六冊 國安畫 丸文
同 九年
茶筌賣話ノ種瓢六冊 國貞畫 山本
同 上
鎌田又八强力譚六冊 英泉畫 丸甚
同 上
戀角力赤繩ノ取組十二冊 重政畫 若狹屋
同 十年
相合駕江ノ島詣六冊 國貞畫 山本
同 上
犬著聞傾城龜鑑六冊 英泉畫 佐野喜
同 上
傾城戀三味線五冊 同 上 丸甚
同 上
入舟蝶忠義ノ湊六冊 同 上 佐野喜
同十一年
粂野皿山さらさ團扇四冊 國丸畫 西與 西宮
同 上

片男浪吾ノ浦田鶴四冊 重政畫 西與 西宮
文政十一年
紅葉狩東錦繪六冊 國貞畫 泉市
同 上
逢見ノ茶嫁入小袖六冊 豐國畫 山本
同 上
芦手歌梅のよし兵衞六冊 重政畫 川口正藏
同 上
於婢子育桂ノ川鮎六冊 英泉畫 同上
同 上
二枚折風呂前屏風四冊 小野田理童作 重政畫 西宮
同 上
風流列女傳十八冊 初二國貞 三豐國畫 山本
自初編至三編每編六冊づゝ
初編文政十二年、二編十三年、三編天保三年
盛衰記摺鉢無間六冊 國安畫 同 上
文政十二年
小女郎手書編笠六冊 國虎畫 同 上
同 上
紅紛繪賣告風俗六冊 英泉畫 佐野喜

文政十二年
光琳摸樣梅ノ略書六冊　重政畫　丸　甚
同　上
傾城三國志三十二冊　國貞畫　佐野喜
自初編至四編毎編八冊づゝ
初編文政十三年、二編天保二年、三編同四年、
四編同六年
五虎猛勇傳二十四冊　重政畫　川口正藏
自初編至四編毎編六冊づゝ
初編、二編文政十三年、三編天保二年、四編同八
年
大島屋嬌濃盃六冊　英泉畫　蔦　吉
文政十三年
國字書三國志六冊　國貞畫　山　本
天保二年
伊勢海誰阿漕六冊　重政畫　同　上
同　上
忠臣藏替伊呂波自初編至九編　毎編四冊づゝ　國貞畫　蔦　吉
同　四年
同二編

天保五年
同三編
同　六年
同四編
同　七年
同五編
同　九年
同六編
同　十年
同七編
同十一年
同八編
同十二年
同九編大尾
同十三年
鏡山故郷ノ錦畫六冊　二世豐國畫　山　本
同　四年
七奇越後砂子六冊　國安、泉晁、貞秀畫　佐野喜
同　上
宇治拾遺煎茶友六冊　泉晁畫　同　上

天保五年
已成鐘響數千里六册　國直畫　山口屋
同　上
大小霰恨ノ鮫鞘八册前後　重政畫　竹内孫八
同　上
國性爺合戰六册　國虎畫　山本
同　上
洗鹿子所縁江戸染六册　英泉畫　佐野喜
同　六年
乜ノ字結戀ノ弶天（ワナテン）四册　同　上　同　上
同　七年
雲綾瀬月ヲ夜合樹（モムノキ）四册　國貞畫　山口屋
同　上
土筆長日ノ樂書六册　同　上　山　本
同　上
千本櫻後日仇討四册　貞虎畫　同　上
同　上、林亭とあり
力瘤三八異傳四册　景松畫　蔦　吉
同　上
晝夜帯雪と摺墨四册　貞秀畫　同　上

天保八年
人形手新圖更紗六册　國貞畫　山　本
同　九年
洗髪柳ノ春雨六册　貞虎畫　蔦　吉
同十一年
小櫻姫閑月奇談四册　芳虎畫　同　上
同十二年
兄弟丸（ヱトノマル）壽ノ文箱六册　國貞畫　山　本
同　上
犬上太郎暴惡譚六册初編　芳鶴畫　蔦　吉
同十三年
音羽丹七小糸左七本町育小糸苧環六册　美丸畫　西　宮
文政六年

合卷繪草紙表題作者名目集

春廼屋梅麿
東里山人

東西庵南北
感和亭鬼武
關亭傳笑
竹塚東子
松亭金水
市川三升
五柳亭德升
尾上梅幸
振鷺亭
林屋正藏
鶴屋南北
二世立川焉馬
西來居未佛
岳亭春信
萬葉散人
絲亭可山
梅暮里谷峨
晉米齋玉粒
一亭万丸
乾坤坊良齋

江南亭唐立
岡山鳥
櫻川慈悲成
志滿山人
爲永春水
一筆庵可候
橋本德瓶
戀川春町
二代目一九
欣堂間人
市二三
樹下石上
月光亭笑壽
本野素人
藤壽亭松竹
寶田千町
神屋蓬州
中本形混合
俳優名目混雜
雜之部

作者畫工俗姓住居

春廼屋梅麿（號墨春亭）

天保三年
（宮城野小萩／忍摺ノ色詣）曾我振袖日記八冊（前後）　泉晁畫　蔦吉

同　四年
（小まん／彥三）野夫鶯訛ノ投節四冊　同　上　同　上

同　五年
（阿花／半七）半開花ノ畫扇四冊　同　上　同　上

同　上
（千本櫻／飜案）花衣吉野ノ葛織四冊　同　上　同　上

同　上
（吾妻／與五郎）銀金貝蝶ノ對鋏四冊　泉晁畫　同　上

同　六年
（阿さん／茂兵衛）朧染浮名ノ色衣四冊　貞秀畫　同　上

同　上
（花園／平三）柳眉春ノ朝妻四冊　景松畫　同　上

同　上
（五人男／昔話）常盤染雁金五紋四冊　國貞畫　同　上

天保七年
（夕ぎり／伊左衛門）松爾藤屋襠雛形四冊　景松畫　蔦　吉

同　上
（鎗ノ權三／時世粧）鶯袖花ノ鎗梅四冊　柳亭序幷校貞秀畫　同　上

同　八年
（小栗／照天）春ノ駒小栗雜談四冊　景松畫　同　上

同　上
（わん久／松山）成瓢簞末廣盃四冊　貞秀畫　同　上

同　上
（阿房／德兵衛）妹背結千匣ノ玉章四冊　同　上　泉　市

同　上
（三勝／半七）花艷對ノ舞風流四冊　國貞畫　蔦　吉

同　九年
（西鶴本ノ織留機／鶴賀本ノ唐模樣）忠ト孝縷糸錦四冊　貞秀畫　山　本

同　上
（富士淺間／阿七吉三）花櫓閣高峯ノ太鼓六冊　國貞畫　蔦　吉

同　上
（ごん八／八重梅）褄摸樣比翼ノ紫六冊　芳重畫（國芳門人）　泉　市

同　上
（重の井／いろは）手綱染餘作ノ春駒六冊　國貞畫　蔦　吉

天保十年

繁々夜話語園菊 四冊 梅丸校 梅舍春鳥作 貞秀畫 蔦吉

同上 熊野御前花見車 四冊 英泉畫 同上

同十二年

東里山人 別號

文化七年

照天松黄昏艸紙 六冊 春扇畫 岩戸屋

同十二年

め出度しかし二度目ノ清書 六冊 國丸畫 同上

清川文七元結ノ始リ 六冊 美丸畫 同上

同 七年

片言雜話田舍講釋 國信畫 同上

同十二年

茶番狂言口切のせりふ 三冊 春扇畫 岩戸屋

同 八年

松浦佐與姫 五冊 注文通書物語 美丸畫 同上

同十三年

念猫もの語 六冊 春扇畫 岩戸屋

文化八年

中將姫蓮ノ糸織 六冊 同上 泉市

同十三年

清姫太郎日高影 三冊 美丸畫 岩戸屋

同 九年

繼分浪花ノ梅ヶ枝 六冊 同上 同上

同十四年

梅若塚 松若姫 梅ト柳筆ノ繼分 六冊 春扇畫 同上

同 九年

其俤二葉丹前 六冊 同上 泉市

同 二年

玉菊全傳天岩戸曙艸紙 六冊 國直畫 岩戸屋

同 十年

胡蝶ノ夢幻物語 六冊 春扇畫 丸甚

文政二年

葉櫻姫卯月物語 六冊 同上 泉市

文化十一年

黄金花作も陸奥 四冊 東里校 けふの里人作 岩戸屋

文政九年

とかく浮世は元陽意氣三冊　春扇書　泉市
文化十一年
敵討闇ノ夜烏六冊　同上　丸甚
文政三年
音曲情ノ糸道三冊　廣重書　岩戸屋
同　上
大和假名懸想文賣五冊　泉晁書　泉市
天保二年
傾城客問答三冊　春扇書　同上
文政三年
風俗伊勢物語自初編至四編毎編四冊づゝ　貞秀書　同上
天保六年、同八年に渡る
女莿萱物語六冊　春好書泉扇改　同上
文政四年
風俗伊勢物語五編六編　貞秀書　——
天保九年
安達ヶ原男一ッ家六冊　柳川重信書　岩戸屋
文政四年
物見松女熊坂六冊　春扇書　泉市
同十四年

嘘ノ傳來開卷未來記五冊　美丸書　岩戸屋
文政四年
累きく返〳〵壽草紙六冊　春扇書　泉市
文化十二年
初霞江戸ノ立入五冊　英泉書　同上
文政八年
敵討筆ノ山大全六冊　春英書　岩戸屋
文化四年
三ヶ月太郎其俤錦畫姿十二冊前後　英泉書　同上
文政八年
菊童子配リ盃六冊　豐國書　泉市
文化四年
千葉摸樣好新形六冊　二世豐國書　岩戸屋
文政十一年
大内山月雪花志九冊　國直英泉書　同上
同　六年
七種薺物語六冊　英泉書　泉市
同十二年
兒鑑東孝經六冊　同上　同上
同　九年

出傍題無茶論六册　廣重畫　岩戸屋
天保二年
面白妙須磨ノ雪平六册　國安畫　泉　市
文政十二年
鵙向ハ大幟摸褙掲巻若衆の助六六册　國直畫　岩戸屋
文化十一年
玉屋新兵衛金光ノ筆跡室そだち花ノ魁六册　春扇畫　泉　市
同　十年
夫ハ豐前是ハ近江彦山靈驗の毛谷村仇討五册　貞兼畫　岩戸屋
文政九年
安部晴明辻占艸紙二册　國信畫　同　上
文化十三年
山吹長者欲物語三册　國丸畫　同　上
文政二年
馬鹿多譯合鑑二册　豐國畫　泉　市
文化十三年
金王櫻兜ノ鉢植二册　春亭畫　岩戸屋
文政二年
其行衛白浪日記六册　春扇畫　泉　市
同　五年

金儲傳受書二册　國丸畫　岩戸屋
文政七年
酒ハ燗酌ハ娘一本氣噓ノ切口三册　春扇畫　泉　市
文化十年
よしの伊之助園花薄雪草紙六册　同　上　同　上
文政二年
滑稽奇談尾笑艸三册　美丸畫　岩戸屋
文化八年
餘計ノ仕業三册　春扇畫　泉　市
文政二年
童子教訓古風仕立聲近道四册　春好畫　岩戸屋
同　六年
いろと酒欲はかたきぞ花の頃浮世街道敎近道三册　美丸畫　同　上
文化十三年
世界ハ芝居がくやすゞめ三册　同　上　同　上
同　上
人はみめよりたゞこゝろ敎草戯言試筆三册　國信畫　同　上
同十二年
東里一編海道茶漬腹内幕　英泉畫　泉　市
文政六年

小町ことち詸ノ差込六册　英泉畫　泉市
文政五年
注文染滑稽多新形三册　美丸畫　岩戸屋
同　二年
於臍茶番品切ノせりふ三册　春扇畫　同上
文化八年
天津空村雲物語六册　豐國畫　岩戸屋
天保二年
開道女自來也六册　春扇畫　同上
文政三年
小町櫻花ノ面影三册　國丸畫　同上
文化九年
鈎狐花ノ面影五册　英泉畫　同上
文政七年

東西庵南北

敵討源五郎鮒六册　春扇畫　山田屋三四郎
文化五年
敵討大日坊物語六册　同上　若狹屋

文化六年
鏡山後日ノ俤六册　春扇畫　泉市
同　七年
お千代半兵衛初夢噺三册　同上　同上
同　上
筆初ノ日ノ出ノ松三册　歌川金藏畫　同上
同　上
吾妻染大和屋絞三册　春扇畫　丸甚
同　上
丁子車引手爪音三册（お妻八郎兵衛）　同上　若狹屋
同　上
花曇笠屋連彈六册　同上　泉市
同　八年
扇蝶於染ノ簪五册　同上　若狹屋
同　上
美人膚雪ノ白木屋六册　同上　泉市
同　九年
夜蕎麥賣名代鈍菊六册　同上　若狹屋
同　上
鹿子娘八百屋振袖六册　同上　泉市

文化十年
子曳松一夜撿校六冊　國滿畫　西村
同　上
富士太郎梅ノ隱家五冊　國丸畫　同上
同　上
岡七島於夏か浴衣六冊　春扇畫　泉市
同十一年
都染於花振袖六冊　國直畫　西村
同　上
江戸形氣女蝶兵衛六冊　美丸畫　岩戸屋
同　上
天岩戸初日ノ門松六冊　竹齋龍子畫　同上
同十三年
みの屋笠屋花雪降六冊　豐國畫　泉市
同十二年
紅仕立女達摩小比奈半兵衛　柳川重信畫　西村
同十三年
國性爺倭話六冊　貞繁畫　同上
同十二年
二ッ蝶々菜花双紙六冊　豐國畫　泉市

文化十三年
東振浪花女六冊　春扇畫　丸甚
同十四年
伊勢道中戀紀行六冊　同上　泉市
同　上
土蜘太郎一代話六冊　同上　同上
同十三年
梅櫻二人權八六冊　柳川畫　西宮
同　上
福緑壽黃金釜入六冊　美丸畫　西村
同十四年
鳴戸越出世島鯛六冊　柳川畫　西宮
同　上
瀧登黃金鱗六冊　春扇畫　丸甚
文政二年
蝙蝠羽織菩通人六冊　同上　同上
同　上
梅ノ主由兵衛頭巾六冊　同上　泉市
同　三年
合セ鏡對ノ振袖六冊　國貞畫　山本

文政三年
女灘右衛門六册　春好書　泉市
同　四年
寶珠ノ玉岩井摸様六册　柳川書　丸甚
同　上
由良湊娘甚孝記十册　春好書　泉市
同　五年
花角力娘大全六册　豐國書　丸甚
同　上
女帶糸織八丈六册　英泉書　泉市
同　七年
通人料理しらしの献立六册　同上　同上
同　十年
濱眞砂相續稗史六册　春扇書　岩戸屋
同十三年
綱手車花ノ藤澤六册　美丸書　西村
文化十三年
敵討二挺三味線六册　春扇書　泉市
同十五年
浮世心學夜見世ノ始リ三册　南北自書　丸甚

文政七年
女庭訓喜左衛門茶碗七册　春扇書　丸甚
同　六年
三度笠江嶋遊六册 梅川忠兵衛　同上　丸文
文化八年
本草盲目集三册　南北自書　泉市
文政二年
鶯娘梅ノ相宿三册 ゑびらや源太けいせい梅ヶ枝　春扇書　丸甚
文化九年
敵討團七嶋　西村
文政七年
二人左衛門二人葛之葉壽字染小万ヶ紅筆六册　春扇書　同上
文化九年
身振いろは藝三册　登龍斎書 春扇別號　山田屋三四郎
同　七年
市川流三升ノ新琴三册　貞繁書　河源
同十四年
五ツ連立春之雁金六册　若狹屋與市
同　七年
若艸猪之助男梅ヶ枝花魁三册　竹齋龍子書　西村

文化十二年
女合法戀之修行五冊　歌川金藏書　泉市
同　九年
己惚鏡ノ養者十寸見金盛傾城草履打六冊　柳川書　西宮
同十四年
四ツ竹節二人白藤六冊　春扇書　丸甚
同十五年
戀ノ矢齋當ル商賣息女草履打六冊　同上　奥市
同十二年
敵討角兵衛獅子六冊　同上　丸甚
同　六年
鏡山化粧の紅筆五冊　國丸書　丸文
同　九年
うてや鳴昔物語巴のおせん三冊　春扇書　西村
同　七年
高尾夕霧小紫傾城三極子六冊　豐國書　丸甚
文政五年
大入角力一番太鼓三冊　國直書　西村
文化十二年
於妻八郎兵衛六冊　春扇書　泉市

文政二年
奇妙々糸屋戀婿三冊　英泉書　泉市
同　九年
姥ヶ池汀ノ山吹四冊　國直書　河内屋
文化十二年
化たりな歌右衛門艸紙三冊　春亭書　村治
四季花黄金鉢植三冊　貞繁書　河源

感和亭鬼武 淺草千光院地内 通稱前野曼七

文化元年
金澤彌二郎廻國話六冊 前豐國 後北周(北齋門人)畫
響ハ數千里虎ノ尾峠六冊　春亭書　村田
同　三年
復讐鴫立澤二冊　北馬書　伊勢屋藤六
同　上
仁王阪英雄ノ二木六冊　豐廣書　岩戸屋
同　四年
化粧坂闇ノ仇討五冊　北馬書　村田

文化四年
寳入舟七福大帳二冊　松爾樓書　村田
同　五年
淺草寺開帳見立滑稽略緣記稗蒔仇討二冊　北馬書　同上
同　六年
敵討業平塚由來六冊　式麿書月麿門人　同上
同　上
敵討十三鐘ノ由來六冊　同上
同　六年
初昔濃茶ノ口切鬼武校不乾齋雨戶作　月麿書　津村
同　八年
敵討於半ヶ紅粉五冊　美丸書　村田
同　六年
贅女仇討信夫摺錦ノ伊達染五冊　豐國書　同上
同　元年
敵討最上ノ紅花染三冊鬼武校三よしの多賀安作　國長書
同　五年　榎本吉兵衛
滑稽異瘵寢鼾種三冊（イビキグサ）　一九書
享和二年
三國昔噺和漢蘭雜話三冊　可候北斎書

享和三年　山口屋忠右衛門
敵討怪談鬼武作物語五冊　北周書
文化二年
愼道迷盡誌三冊　春亭書　榎本
享和三年
女仇討菩薩ノ角髪三冊　美丸書　森治
文化十四年
昔譚宮城野信夫二冊鬼武校雨聲作　月麿書　同上
同　十年
女夫池おし時代摸樣室町織二冊　北馬書　鶴喜
同　七年
三嶋娼化粧水莖三冊　同上　鶴金
同　上
敵討十三塚由來三冊　國丸書　森治
文化十二年
浮樂鏡虫義見通三冊　英山書　西村
同　九年

闘亭傳笑 別號月池山人又築地全交 築地門跡前本多家中關平四郎

新撰生姜市之始六冊　豐廣畫　泉市
文化八年
諺草籠之仲之鳥五冊　美丸畫　村田次郎兵衛
同　九年
烏勘左衛門忠義傳四冊　芳虎畫　鶴喜
天保七年
兒ヶ淵拐ヶ仇討七冊　北尾紅翠齋畫　榎本
文化六年
黄金花玉川奇談五冊　美丸畫　鶴金
文政七年
運ハかゞやく長者萬燈二冊　國長畫　西村
文化九年
海中箭入恩着六冊　歌川國信畫　鶴金
文政七年
同後編勸善辻談義六冊　二世豐國畫　森屋
同　九年
同三編蓮能上人御法書解六冊　國兼畫　同上
同　十年
同四編安達織作廻國傳六冊　同上　森屋
同十二年

褄重おもひの亂菊四冊　英泉畫　若狹屋
文政九年
御産池龍女利益六冊古人　國兼畫　森屋
同十一年、古人杣人遺稿
敵村寢物語五冊　國長畫　榎本吉兵衛
文化四年
孝行娘妹脊仇討六冊　豐廣畫　泉市
同　五年
敵討猫股橋ノ由來七冊　春扇畫　同上
同　六年
勸善近江八景六冊　北嵩畫　西村
同　七年
鷲頭山非人之助太刀三冊　國滿畫　同上
同　上
怪談木ノ花艸紙三冊　國長畫　榎本
同　四年
信州戶隱御擁奇談三冊　―　―
昔今猿ノ人眞似三冊　―　鶴金

伊勢街道錢懸松六冊　五湖亭貞景畫　山口屋
文政十三年
敵討猿田ヶ淵六冊　春扇畫　濱松屋幸助
文化五年
敵討船玉物語三冊　國信畫　鶴金
同　四年
河内國姥火譚六冊　國兼畫　山口
文政十一年
河州大森塚三冊　國滿畫　西村
文化八年

竹塚東子（別號風水坊 千住在竹塚住）

敵討名譽一文字三冊　豐廣畫　西村
文化元年
敵討岩手ノ梅ヶ香五冊　北周畫　―
同　二年
敵討若松晰五冊　紅翠齋畫　鶴喜
同上、一名親ノ敵現ノ腹皷
片身打他力ノ燒繼六冊　北周畫　岩戸屋

文化三年
敵討浮氣ノ龜ヶ瀬五冊　國長畫　西宮
同　四年
雷幸藏轟話六冊　春亭畫　同上
同　五年
春ノ景物茶番狂言三冊　國滿畫　同上
同　六年
双子山仇討噺六冊　柳谷畫　―
同　上
敎訓雅土産三冊　國丸畫　西宮
同　七年
飛秀蝶々ノかんざし　三冊　美丸畫　西村
同　八年
忠臣藏茶番狂言五冊　―　―
十三七ッ月ノ曙三冊　國丸畫　岩戸屋
同　十年
一人娵婿八人七變人緣ノ色糸三冊　國滿畫　同上
同　上
滑稽穗寶恵美艸三冊　國直畫　西村

文化十一年
敵討忠孝大鷄塚六冊　英山畫　西村
同　七年
滑稽尾わらい艸三冊　美丸畫　——
同　八年
人孝奇談實錄六冊　英山畫　西村
同　九年
忠臣藏滑稽話豐のいろは　——　——
前條に有茶番の事也。
同　七年
敵討雛子雛山三冊　國長畫　岩戸屋
同　八年
何でも角でも三國傳來茶釜前抜子物語三冊　美丸畫　西村
同　十年
鼻木討誓羽團扇三冊　重信畫　同上
御無事忠臣藏三冊　國房畫　岩戸屋
同十一年

松亭金水　筆耕書　通稱中村源八

二十四孝雅敎訓四冊　泉晁畫　蔦吉
天保二年
歌枕二世物語八冊　初編二編　初英泉二泉晁畫　丸甚
同　上
時話今櫻ノ駒六冊　泉晁畫　蔦吉
同　三年
平家物語十六冊　自初編至四編毎編四冊づゝ　國直畫　大黑屋平吉
同　七年
菅原流梅ノ花形五冊　貞秀畫　森治
同　四年
春遊霞ノ彩色（イロドリ）四冊　初編　泉晁畫　鶴喜
同　上
怪談花ノ吹雪四冊　景松畫　鶴吉
同　七年
仇競花ノ夕榮四冊　初編　貞房畫　森治
同　十年
故人柚人遺稿とあり。
江戸紫肌身ノ白雪　貞秀畫　西村
同　上

七代目市川三升　代作 五柳亭徳升 花笠文京

伊達道具鳥羽累六冊　國貞畫　河内屋
文化十二年
孜算女行列六冊　春亭畫　山口屋
同　上
瑠理紫江戸朝顔六冊　豊國畫　同　上
文政五年
一番太鼓春ノ曙六冊　同　上　西　村
同　六年
當リ南枝稲妻表紙六冊　同　上　同　上
同　七年
濱眞砂筑地白浪六冊五柳代作　國安畫　岩戸屋
同　九年
後三年手管義家六冊五柳代作　國貞畫　今利屋
同　上
敵討四ツ手垂駕籠六冊　國安畫　山　本
同　上
志賀春黄金ノ漣六冊花笠代作　美丸畫　同　上
同　十年

三國白狐傳六冊五柳代作　――――　鶴　喜
文政七年
風俗女三國志六冊　豊國畫　山　本
同　上
會席料理世界吉原六冊五柳代作　國貞畫　岩戸屋
同　八年
皃ヶ淵紫二人若衆六冊　同　上　泉　市
同　上
女風俗東かゞ美六冊　豊重畫　今利屋
同　上
江戸錦廓之春風六冊五柳代作　國貞畫　泉　市
同十三年
江戸紫春ノ曙六冊　重政畫　森　治
同　上
運ハ子ヲ松山噺六冊五柳代作　國芳畫　泉　市
同　十年
伽三味線閨ノ爪彈五冊五柳代作　芳信畫　同　上
文化四年
湯井丸ヶ瀨ふうじ文不解庚申六冊　河内屋源七
同十一年

ぬしや誰とへど白藤　國芳畫　佐野屋
文政十一年
五人男昔譚　五柳代作　國貞畫　泉市
同　九年
裏表忠臣藏　自初編至十編　同上　同上
天保七年
伊達姿辰巳八景　六冊　五柳代作　國安畫　山本
文政十一年
鬪勇八幡祭　六冊　德升代作　美丸畫　伊藤
同　九年
宮戸川三社網舟　六冊　國芳畫　山口屋
同十一年
江戸繪双蝶曾我　六冊　前編國貞 後編國直畫　同上
同　七年
錦世界雪ノ振袖　六冊　五柳代作　重政畫　森治
同十一年
東調太閤 西調太閤 南總奇人談　十冊　德升代作　同上　同上
同　十年
愛ニ佃天網島　五柳代作　國貞畫　鶴喜
同十一年

五柳亭德升

両國奇談月夜桀　六冊　國芳畫　佐野屋
文政十二年
同二編　五冊　英泉畫　同上
天保二年
怪談春雨草紙　六冊　國安畫　山本
同　元年
同波羅づゝ美　六冊　國芳畫　山口屋
同　上
三國妖狐傳　三冊　上卷唐土 中卷天竺 下卷日本　國安畫　鶴喜
同　上
傾城外八文字　五冊　安秀畫　山口屋
同　二年
高木織右衛門武勇水陸傳　十冊　同上　森屋
同　上
矢猛心兵交　十冊　武者修行話　國芳畫　鶴屋
同　上
傾城氣質夜梅川　六冊　國貞畫　山口屋

天保二年
梅暦魁艸紙六冊　國安畫　山本
同　三年
敵討相宿噺六冊　同上　佐野屋
同　上
霞の帶しめて如月六冊　同上　鶴屋
同　四年
東國奇談月ノ夜櫻六冊　國芳畫　佐野屋
同　七年
森羅万象心意氣四冊　同上　鶴屋
同　八年
松ヶ手寄ゆかりの藤浪八冊　貞秀畫　鶴喜
同　九年
春霞ゆるしの廓六冊　國芳畫　山本
同　三年
葵勝德兵衛櫻時破ノ神笠六冊　國貞畫　山口屋
文政八年
もろたづな鄙山染六冊　春亭畫　同上
文化十三年
都鳥染寢隅田川六冊　國貞畫　泉市

文政十年
賤富士曾我物語六冊　豐國畫　岩戸屋
同十一年
けいこや小万やつこの小万五大力海賊六冊　國貞畫　河源
文化十四年
傾城揚羽蝶花形六冊　豐國畫　宇利屋
文政九年

尾上梅幸代作花笠文京

想合對ノ菅笠六冊　豐國畫　山本
文政十年
玉藻前化粧姿見六冊　國安畫　伊藤
同　五年
初便廓ノ青傳六冊　豐國畫　丸甚
同　七年
流行歌川船ノ合奏六冊　國貞畫　同上
同　八年
皇國字娘ノ席書六冊　同上　丸甚
同　九年

見櫻ノ法花房六冊　國貞畫　泉市
文政九年
屆々笈ニ書初六冊三朝作　同上　河源

繡繪對之白浪二冊前六卷後四卷　英泉畫　丸甚
文政十一年、後天保元年
摺針太郎豪傑話四冊爲永春水代作　英泉畫　同上
天保元年
お房小糸結合緣ノ色糸六冊　國貞國丸畫　山口屋
文政六年
仇緣誓紙治六冊　豐國畫　丸甚
同　七年
尾上松緣百物語六冊　豐重畫　鶴喜
同　八年

振鷺亭一名金龍山人通稱與兵衛本船町家主後に大師河原隱遁

卯月八日物語三冊十二月晦日五郎六月朔日九郎　國直畫　鶴喜
文化九年
のし進上水引草三冊　國丸畫　同上

文化十一年
大時代唐土ノ化物三冊　春亭畫　鶴喜
同十三年
世事第一口ノ輕業二冊　國丸畫　同上
同十四年
鰻谷かぶきの條書三冊お妻八郎兵衛　美丸畫　同上
同十一年
甲州猿橋ノ由來五冊門人關東米作　春亭畫　つむらや
同　九年
丸山權太左衛門大女大崎ヤマミツテングトキニオホヤマ㕝大山　國丸畫　鶴喜
同　十年
大吉屋茂兵衛大國四お三かくれがの茂兵衛簸本浮世繪抄三冊　美丸畫　同上
同　上
しやらりん二八ぷらりん十六打掛蠻療治二冊　春亭畫　同上
同十四年
芝居好家內安全二冊　國丸畫　同上
同十二年
晋其角蓑五郎新春草紙ノ顏見世三冊　國直畫
同　上

林屋正藏

帶屋於蝶三世譚六册　國貞畫　西村
文政八年
敵討鶉權兵衛六册柳亭校合　重政畫　同上
同十二年
嘶本笑富林　同上　同上
天保四年
同百家撰四册　貞秀畫　同上
同　五年
怪談桂ノ川浪四册　國貞畫　同上
同　六年
滑稽話年中行事四册　貞秀畫　同上
同　七年
新本木像談語土橋亭りう馬合作　同上　同上
同上、一名おどけ異賓
異名手本林正藏二册　同上　川口宇兵衛
同十一年
尾上梅幸お家ノ化物六册梅幸合作　同上　川口
同　上

怪談春ノ雛鳥自一編至三編十二册毎編四册づゝ
一名文彌話　一編貞秀畫 二三編國貞畫　川口宇兵衛
一編天保九年、二編同十一年、三編同十二年
まづ開而三升ノ世界三册　國直畫　東屋大助
文政七年

鶴屋南北

金比羅御利生敵討乘合噺六册姥尉介　國貞畫　伊賀屋
文化五年
敵討爰ニ高砂六册姥尉介　同上　同上
同　六年
戀女房仇討双六六册姥尉介　同上　同上
同　九年
昔摸樣戲場ノ雛形十二册　同上　丸文
文政六年
成田山御手綱五郎六册　豐國畫　今利屋丑藏
同　八年
女扇忠義ノ要六册　國貞畫　丸文
同　九年

曾我祭東鑑六冊　國貞畫　丸文
文政七年
四十七手本ノ裏張六冊　同上　今利屋
同　九年
同後日いろは縁起六冊　同上　同上
同　十年　同
怪談磐倉万ノ丞六冊　同上　山本
同十一年
積摸[illegible]沖津白浪十四冊　同上　泉市
同　上
昔ながら今物語六冊　同上　山本
同十二年
小町紅牡丹ノ猥取六冊　同上　泉市
天保二年
怪談鳴見絞リ六冊　同上　山本
同　上
睦シ月深ノ仲町六冊　同上　泉市
天保五年
東海道五十三驛自一編至三編　國芳畫　山本
一編天保七年、二編同八年、三編同十二年

大都會侠傻水滸傳自一編至五編五冊毎編一冊づゝ　國貞畫　加賀屋
勝角力橋場菴崎六冊　同上　今利屋
文政九年
大和女夫石六冊　同上　同上

二世立川焉馬一名蓬來山人

懐中鏡山間六冊　國貞畫　岩戸屋
文政十一年
萌々忠臣孝記六冊　同上　西村
同　上
同十三年
相撲推古傳自一編至三編十二冊毎編四冊づゝ　一二編貞安畫 三編國直畫　岩戸屋 西村
苅萱桑門筑紫寫繪六冊　同上　蔦吉
天保二年
戯場稿本病現建（ケイヤウブミアタルスガタミ）自一編至四編十六冊毎編四冊づゝ　同上　西村
一二編天保二年、三四編同三年

紙治小春天網島六冊初編　國貞畫　泉市
天保三年
雨顏忍夜櫻（フタナモテ）八冊自一編至二編　一編國安 二編國芳畫　同上
同　四年
大和柿對ノ振袖八冊　國芳畫　森治
同　五年
花ノ兄戲草紙六冊　國貞畫　山口屋
同　六年
俳優樂屋雜談自一編至二編八冊毎編四冊づゝ　同上　西村 山口屋
一編天保十一年、二編同十三年

西來居未佛別號瓢簞園一寸法師　尾州公坊主毛受吉喜
並元祖談州樓本所立川相生町和泉屋和介 桃栗山人別號種々あり

忠臣藏合ハセ鏡六冊　國粲畫　森治
文政十二年
小倉袴女英勇錄四編　國信畫　岩戸屋
同十三年
龍宮怪談小幡後平次三冊元祖焉馬作　月丸畫　山口屋
文化六年

雨國山見世物語四冊元祖焉馬作　貞房畫　西村
文政四年
春ノ月蒲生櫻三冊鱗馬亭三千歳作 焉馬序　春亭畫　鶴喜
文化九年
白人[illegible] 黒人[illegible] 赤本昔物語立川焉馬作　國貞畫　山本
文政五年
道成寺現在鱗十冊焉馬作　月丸畫　山口
文化六年

岳亭春信畫作共同人別號堀川多樓又陽齋南山 青山久保町丸屋宇之吉

七變人笑爾吳竹六冊　河内屋源七
文化十四年
都ノ名將 深山ノ快童 春ノ山媼花ノ鉞三冊　泉市
同十二年
二人靈 二人牛若 奇ナ愛度金貴吉事六冊　同上
同十三年
戻リ鴛再モ合肩三冊　河内屋源七
同十二年

葛葉散人 止二一（戯場家万壽亭 又鳳凰軒篠田金治）

愛敬紺屋娘六冊　國丸畫　鶴　金
文化十年
奉納額小三六冊　同　上　同　上
同十一年
男達鹿子勘兵衛六冊　春亭畫　村　田
同十二年
女文字すゝき文章六冊　國丸畫　西　宮
同　上
みさほの糸駒引錢三冊　春亭畫　丸　文
同上、一名三寶荒神ニ見仇討
艶姿吉彌結六冊　同　上　鶴　金
同十三年
杉酒屋妹背山々六冊　國丸畫　西　村
文政二年
春ノ花魁曾我下編二冊　同　上　西　宮
文化十年
上編三冊は三友作其續作なり。
敵討朝顔鏡六冊　春亭畫　鶴　金

文化十二年
踊唄繁花ノ街三冊　國丸畫　西　宮
同十一年
守護於初天神記六冊　同　上　鶴　金
同　上
（お亀与兵衛）鉢植物見ノ松三冊　春亭畫　丸　文
同十四年
（籠釣瓶河市相傳）名ハ立浪金作リ三冊　美丸畫　西　宮
同　上
昔語丹波小雪　春亭畫　山口屋
同十一年
（萬歳長者）音能寶入舟三冊　同　上　同　上
同十四年
拵（モテアソブ）ふし見人形三冊　同　上　同　上
同十二年

緑亭可山（越前公藩中 小林律二郎）

（官女ノ菖蒲 遊女ノ眞菰）賴政扇芝樂二冊　春扇畫　丸　甚
文化十年

法ノ花再度咲後寛六册　春扇畫　西村
文化十年
妻重男葛ノ葉三册　國直畫　丸甚
同十一年
あひ〳〵傘屋雨濡事　美丸畫　鶴金
同十二年
一軒八百屋娘姉妹六册　同上　同上
同十三年
糸櫻花振袖六册　春亭畫　丸文
文政四年
江戸ノ花二人助六六册　前貞虎 後貞房 畫　山口屋
同　五年
七變化將門系譜六册　美丸畫　鶴金
同十四年
隅田景圖梅若詣三册　春扇畫　丸甚
文化九年
初曆蔵ノ徳若三册　貞綮畫　河内屋
同十二年
百合若丸弓勢名譽三册　美丸畫　鶴金
同十一年

お妻八郎兵衛時雨ノ猿簑三册　美丸畫　森治
文政三年

梅暮里谷峨　埋堀黒田家中豐州 友町與左衛門

女達島ノ於勘六册　北嵩畫　丸文
文化十年
鬪七島六册　國丸畫　同上
同十二年
傾城買二筋道三編揃
寛政十年
敵討大山道中二筋道八册 前編四册 後編四册　前西川東子畫 後北嵩畫　丸文
文化六年

晋米齋玉粒　通稱藍場 晋兵衛

東風流妹脊ノ鞠唄三册　國安畫　伊藤
文政八年
古今雛對ノをし鳥五册　前國直畫 後美丸畫　山口屋
同　五年

うしろ面釜見の鏡三册　美丸畫　西　宮
　文政三年
寶曆年中兵庫鴻野屋某　忠臣浮世の市藏六册　同　上　山口屋
同　五年
增補忠臣藏六册　豐國畫　山　本
同　二年
二代目中村忠義傳　鉢山舊錦繪五册　國貞畫　西　宮
同　四年
化物忘代記二册　國丸畫　同　上
同　二年
花上野譽石碑五册　同　上　同　上
同　上
小町形櫻之香箕二册　六歌仙傳　國安畫　山口屋
同　八年

一亭万丸

襲俠小夜衣草紙四册　景松畫　蔦　吉
　天保八年
鏡池俤草履打四册　同　上　同　上

　天保九年
犬塚綠記八犬士傳四册　貞虎畫　蔦　吉
同　十年
其移香梅由兵衞四册　同　上　同　上
同　上
名古屋宅見立六歌仙四册　貞秀畫　同　上
同　上
濡鷺五月雨噺四册　景松畫　同　上
同　九年

乾坤坊良齋　講釋師良介

黑雲太郎雨夜譚　初編二編各六册　英泉畫　蔦　吉
　一編文政十一年、二編同十二年
傾城怪談冬の月六册　重政畫　同　上
　文政十二年

江南亭唐立　淺草邊住居

昔男古實德次譚六册　國安畫　鶴　喜

文政八年
筆ノ綾糸三筋繼掉六冊　廣重畫　伊藤與兵衛
同　十年
ごん八小紫誂染由緣ノ色揚四冊　國安畫　鶴　喜
同　七年
八人藝樂屋ノ種本四冊　同　上　丸　文
同　八年
夫婦和合駱駝之世界二冊　同　上　森　治
同　七年

岡山鳥（初名曲亭門人 節亭琴我）

艶容一對男三冊　國房畫　丸　文
文化七年
岸流島手染色揚四冊　國貞畫　——
同　六年
袈裟御前操之松枝五冊　同　上　——
同　八年
弓張月篁紫動五冊　國房畫　岩戸屋
同　十年

文化七年
ふとり娘八人聟新曲調之糸竹二冊　國房畫　西　源

櫻川慈悲成（芝樂亭 宇多川町）

人面樹鼻ノ親玉三冊　國滿畫　西　村
文化十年
定紋花ノ輪違三冊　國直畫　同　上
同　九年
今昔虛實錄六冊　二世豐國畫　同　上
天保二年
笑談本養談數四冊　國貞畫　山本平吉
同　四年
達摩大通花見氈　豐國畫　榎　本
文化七年
趣向は赤本文句は淨るり福鼠子寶噺三冊　豐廣畫　——
同　六年
即席大津繪ノ由來　國丸畫　西　與
同十五年

志滿山人（一名一禮齋國信壽作、又一陽齋と改陽岳舎）

女見臺錦ノ筆三冊　西村
文化十一年
かるかや物語六冊　鶴金
同十二年
竹ノ春駒心ノ引網六冊　森治
同十四年
風流女丹前四冊　泉市
文政五年
歌三味線東引舟五冊　西村
同　六年
いろは双ッ巴六冊　森治
同　七年
櫻月浮世雛形六冊　若狹屋
同　九年
玉屋晋兵衛桶臥四冊　森治
同十二年
花角力戀ノ百艸六冊　西村
同十一年
袖ノ笠雪白砂六冊　西村
文政十三年
（小ひな半兵衛）難波土産四冊　森治
同　上
時雨傘對ノ菱紋六冊　西村
天保三年
錦嶋替リ釣舟六冊　鶴金
文化十五年
浮世學者御伽噺六冊　岩戸屋
文政五年
黒白論濱眞砂五冊　森治
同　五年
（寺屋大臣）太子物語五冊　同上
同　四年
（お房徳兵衛）教文女筆始三冊　鶴金
文化十三年
（小女郎新兵衛）風薫葛裏葉四冊　森治
文政十一年、桶伏の前編
（お夏清十郎）魁對盃三冊　岩戸屋
文化十四年

朝比奈藤兵衛 英　藤兵衛 女曾我兄弟鏡三冊　森治
文化十三年
熊王昔物語二冊　同上
同　上
百合若闘（軍カ）法鎧櫻六冊　鶴金
文政二年
色紙短冊名歌重寶三冊　玄光亭作 志満校　丸文
文化十三年、一名梅のよし兵衞
爲永春水　中頃二代の南杣笑楚満人と成り又元の春水と改る人情本書なり
尾上伊太八 岩藤 歸咲古鄕錦繪三冊　英泉畫　西村
文政八年
手鞠唄昔物語六冊　同上　同上
同　十年
八百や萬神樂ノ皷　國貞畫　丸文
同　五年
繫馬七勇婦傳 初編四冊 二編六冊　英泉畫　西村
同　九年
同三編六冊

文政十年
同四編六冊
同十二年
風俗女西遊記六冊　國安畫　西村
同十一年
蝶衛鎌倉摸樣六冊　英笑畫　若狹屋
同十二年
おろち太郎物語六冊　同上　同上
同　上
笠松峠戀ノ苧車四冊　貞秀畫　西村
天保六年
敵討湊ノ曙六冊　國丸畫 口繪重信　同上
同　二年
篠塚太郎英勇話六冊　―　西村 西宮 合板
文政十一年
小糸佐七紫ノ總糸三冊　國直畫　西村
同　五年
戯場小錄長壁譚六冊　國安畫　鶴喜
同　十年
浦嶋太郎珠ノ家土產八冊　重政畫　西宮 西村 合板

文政十一年
閨ノ手花ノ魁二冊　英泉書　西村與八
同　七年
腹ノ内覗（覗カ）機關二冊　英笑書　同上
同　九年
一筆庵可候 實畫工溪齋英泉なり 通稱池田善次郎書作兼
花笠春ノ朧夜五冊　九文
文化十三年
花街ニ寄戀白浪五冊　鶴喜
文政四年
昔語忠義智達磨十冊　川口正藏
同十二年
杜若紫再度咲六冊　蔦吉
同十一年
小野小町一代記桃花流水五冊　鶴喜

橋本德瓶 筆耕者なり 初名千代春道
敵討緣ノ小車五冊　春亭書　濱松幸助
文化五年
阿波大盡鳴門ノ寫書前六冊　國貞書　大阪屋秀八
同　八年
常盤松艶櫻草六冊 夕霧伊左衞門 筑紫ノ權六　貞繁書　河内屋源七
同十三年
小野小町戲場ノ化粧六冊　豊國書　伊賀屋
同七年、作名春道
傾城貞操鑑六冊 清川文七　菊川英山書　西村
同　七年
無間鐘傾城道成寺三冊　國丸書　大阪屋秀八
同　九年
出世ノ春千兩幟五冊　國直書　伊賀屋
同　上
黑舟染姉川頭巾五冊　英山書　西村
同　上
若みどり照天ノ松三冊　國清書
同　八年
小夜中山靈物語四冊　英山書　同上

文化八年
敵討鹿島宮笥いたこぶし三冊 徳瓶校 扇島徳秀作 貞繁畫 河内屋
同十三年
伊達摸樣紅葉打掛六冊 三浦高尾 お房徳兵衛 春扇畫 森治
同十二年
鏡山糸櫻初春繪艸紙番附六冊 貞繁畫 丸文
同十四年
娘歌嘉留多三冊 國芳畫 河源
同 上
山洞流惡玉狂言三冊 浮世喜樂作 徳瓶改名 國丸畫 西與
文政四年
お房徳兵衛三津扇双八大和屋六冊 春扇畫 大阪屋秀八
文化九年
八當てつぽう嘶二冊 國丸畫 丸文
同十四年
諺有之曰高野蝶三月貞金三冊 紫竹堂作 徳瓶改名 同上 西村
同 九年

戀川春町 元名 行町

金ヶ敵夢ノ世語三冊 英笑畫 鶴喜
文政十年
拍子舞紅梅箙六冊 五湖亭作 貞景畫 山口屋
同 上
女船頭矢口ノ渡五冊 國安畫 丸文
同 上
隅田川梅若縁記六冊 貞景畫 山口屋
同十一年
繼子立浪之濡衣三冊 英笑畫 鶴喜
同 上
汐汲車輪廻之仇討六冊 國安畫 泉市
同 上
鎌倉山百人一首三冊 歌川安秀畫 鶴喜
同十二年
新形染松之葉重三冊 安秀畫 同上
同 上
菅原傳授竹部物語六冊 貞景畫 山口屋
同 上
仇顏戀之花染六冊 英泉畫 泉市
同十三年

春狂言善惡鏡六册　二世豐國畫　鶴喜
天保二年
一谷二葉後記五册　貞秀畫　―
同　上
東風流秋の七艸三册　國安畫　丸文
文政六年
忠臣藏二度目講釋六册　同　上　鶴喜
同　三年
戀濡衣手管ノ學環二册　鶴田千年贔屓曾我二册　合本　二世豐國畫　同　上
同　上
戀衣仙女ノ薫二册　竹内孫八略畫本附　重政畫　西村
同　四年
再度ノ敵討哉實六册　前編美丸　後編國安畫　山口屋
同　八年
其儘白石噺五册　國安畫　丸文
同　上

二代目一九　初名十字亭三九糸井と呼一度二世種人の門に入登仙笑人

魁梅ノ枝曾我六册　國安畫　鶴喜

文政十三年
一筋斷四册　泉晁畫　川口正藏
同　上
女眉間尺六册　國安畫　森治
天保三年
八ツ花房藤王傳記六册　貞景畫　鶴喜
同　四年
本朝武王軍談六册　國芳畫　森治
同　上
三國太郎再來傳

欣堂間人　別號向栄樓後に狂言作者實田壽助

東鑑由緒姿見五册　國丸畫　西宮
文政四年
惠方土産梅鉢植六册　同　上　鶴喜
同　五年
花競色讀賣六册　同　上　山本
同　上
昔語鳥羽戀塚六册　同　上　同　上

文政五年
時代世話大内鑑六册　國丸畫　西宮
同　上
戯場仕入楓釣枝六册　同　上　山口屋
同　七年
侠客意氣地安賣六册紫著名入　同　上　西宮
同十二年
本朝斑女扇四册　同　上　同　上
同　上
着替浴衣團七島六册　同　上　鶴喜
同　七年
葉南志之簾（イケス）三册　同　上　森治
同　五年
狭夜衣戀歌謎々二册　同　上　山口
同　七年
戀ノ湊客入船四册　同　上　山口屋

市二三（しぶざう）シブザと訓なり　別號高麗井
伊達娘常陸小形三册　國滿畫　蔦重

文化九年
老秤二度榮三册　國丸畫　鶴金
同　八年
敵討振合ちがひ三册　同　上　蔦重
同　上
姉小谷妹小紅孝婦傳六册　同　上　津村三郎兵衛
同　九年
傾城高尾傳六册　同　上　同　上
同　十年
珍説飛々敵討三册　北尾紅翠齋畫　蔦重
同五年、醉放逸八とあり。
敵討女鉢木三册　春扇畫　同　上
同　六年
奇哉夜光珠三册　國滿畫　同　上
同　七年
四國左司平千疋猿三册　國丸畫　同　上
同　九年
天地遍敵討ノ濫觴三册　春扇畫　泉市
同　上
兄弟邂逅兩嫡德三册　美丸畫　森治

樹下石上

敵討根笹ノ雪三冊　豊國畫　西村
享和元年
同袴之勝負草三冊　國長畫
文化三年
同錦之謹袖三冊　豊廣畫　同上
同　元年
金生樹榮花鉢植三冊　豊國畫　泉市
同　二年
福良雀金之出來秋三冊　同上　同上
享和三年
鎌倉街道女敵討三冊　豊廣畫　—
同　上

月光亭笑壽（前名松旭）

合鏡女俊寛六冊　春扇畫　西宮
文政二年
七種化直宿ノ荒事六冊　春扇畫　泉市
文政三年
富士淺間雪ノ曙六冊　同上　同上
同　四年
源氏山小金ノ軍配六冊　春好畫　鶴喜
同　上
士農工商梅ノ咲方六冊　同上　同上
同　五年
不破名古屋再度ノ達引六冊　同上　泉市
同　上
難波梅室ノ早咲六冊　同上　岩戸屋
同　上
小女郎狐手引仇討六冊　同上　山本
同　上
小紫權八六冊　同上　泉市
同　二年
花陣立白藤日記六冊　同上　同上
同　六年

木野素人

敵討鶴見ノ里六冊　春扇畫　山田屋三四郎

文化六年

於半長右衛門娘實語教六冊南北校合　同　上　同　上

同　上

藤壽亭松竹 千歳亭松武事 實は山口屋藤兵衛先代

伊賀越御堂時鳥相宿噺五冊　國貞畫　山口屋

文化五年

復讐化粧水三冊　月丸畫　同　上

同　七年

同千穀取四冊　國芳畫　同　上

天保七年

原板千石通雅智惠鏡（文化七年出板）

妹脊山舊ノ錦繪六冊　貞秀畫　同　上

同十一年

千穀通雅智惠鏡六冊　月丸畫　山口屋藤兵衛

文化七年

桃太郎子寶艸し三冊　同　上　山口屋

文化六年

寶田千町 筆耕者 別號谷金川

敵討梅ノ繼穗四冊　國芳畫　川口正藏

天保七年

恭太平記白石噺四冊　貞秀畫　泉　市

同　上

惠方富士初夢草紙六冊　同　上　藤岡屋彦太郎

同十三年

神屋蓬洲 通稱春川吾七此人の傳畫ならず作者畫工筆耕彫刻共に自分成すと云

一竹太右衛門乙姫ノ話龍孫ノ憂玉二卷前編　自　畫　榎　本

文政五年、、名教草情の奥義

敵討小万ヶ紅粉三冊前編上中下　同　上　榎　本

文化五年

觀音利生天緣奇遇三冊大本　同　上　西源外三人合板

同　九年

中本形混合

東海道松ノ白浪十冊　熊坂傳記　豐國畫　西村

文化元年

春水亭九好撰

敵討松ノ葉六冊　作者不明　百齋畫　板元不明

同三年

奇談七里ヶ濱三冊　一溪庵作　豐國畫　村治

同五年、一名島川太兵衞犬神話

天の羽衣二冊　六樹園作　江南畫　西村與八外二人

同　上

俳優名前混合

近江源氏湖月照六冊　澤村訥子作　其實岡山鳥なり　國貞畫　金文刻堂

文化八年

鶴ノ子寶當盞ノ松ヶ枝四冊　市川門之助作　豐國畫　丸甚

文政四年

忍ビ駒仇ナ汐波　瀨川路考　西宮新六代作　國貞畫　西宮

同　六年

吉野龍田二人山姥六冊　北川芳丸畫　伊藤

文政八年

杜若紫再咲六冊　岩井粂三郎作　英泉代作　英泉畫　蔦吉

同十一年

狂言綺五ツ紋盡六冊　岩井紫若　英福亭代作　重政畫　西宮

同　上

向人廓山彦六冊　坂東秀調作　國貞畫　山口屋

天保三年

輪廻機網夢白浪四冊　市村家橘作　金水泉晁代作　泉晁畫　蔦吉

同　四年

祇王祇女傳尾花ノ振袖六冊　中村芝翫作　花笠魚助代作　國貞畫　山口屋

同　五年

蝶小蝶春之花園六冊　中村芝翫作　二世焉馬代作　重政畫　泉市

同　上

其裏梅眞砂白浪十二冊　自初編至三編每編四冊づゝ　中村芝翫作　三編家橘

同上、墨川亭代作　國貞畫　竹内

大和錦守袋四冊　秀調作　墨川亭代作　貞秀畫　同上

同　七年

情競傾城ヶ嵩六冊　故秀佳作　北里玉街樓序　國安畫　鶴喜

文政九年

糸衣天狗俳諧六冊 故芝翫作 梅玉なり 春亭畫

――

文化十四年

宿の花朝顏物語六冊澤村訥山作 國貞畫 河内屋源七

於梅条助 於半長右衛門 伊勢參廻紀伊國路考作 同 上 西の宮

文政九年

兒櫻 後日 眺染楓絹川六冊三升作 豐國畫 丸 甚

同 八年

繽織博多小女郎六冊花笠作 國貞畫 同 上

同 上

皿屋鋪反古ノ合紙六冊梅幸作 同 上 山口屋

同 七年

成田 諏訪 菊三升利生乘合六冊團十郎 路考合作 美丸畫 伊 藤

同 十年

色三味線仇合彈六冊路考 英泉 若狹屋

同十一年、村介著

浮世曾子 夢物語 蝶兩翅二枚屛風梅幸 路考合作 英泉畫 ――

同十三年

結緣日浮世雛形路考作 濱村介校 同 上 若狹屋

同 十年

枝珊瑚京打鋳梅幸作 英泉代作 國貞畫 佐野喜

文政十年

和歌三人ノ由來四冊路考作 泉晁畫 若狹屋

同 上

雜之部

太々太平記五冊 北尾重政畫 西 村

繪本太功記の噓亭主人作胥本なり。

文武二道万石通志三冊喜三二作 行丸畫 蔦 重

――

敵討春告鳥五冊眉壽亭作 紅翠齋畫 鶴 喜

文化三年、一名二葉松

故鄉土產東錦畫六冊楓亭楢錦作 豐廣畫 西 宮

享和三年、一名四万譚

兩面出世姿鑑五冊虛呂利作 豐國 北齋畫 岩戸屋

文化元年

ぢん幸記三冊 ―― ――

――

大中黑本種虛呂利作 長喜畫 岩戸屋

享和三年
晃文珠雅叙調三冊　時太郎可候書作（葛飾北斎の替名）　北斎畫　蔦重
同　元年
新編月ノ熊坂話前編　北斎畫作　同上
文化八年
早替リ工夫ノ仇討三冊　硯亭墨山作　月丸畫　同上
同　七年
敵討月附書之始メ三冊　同　上　同　上　同　上
敵討報之蛙柳六冊　松下井三和作　北斎畫　同上
同　八年
面影仇ノ討志縮三冊　錦ノ久留丸作　國満畫　同上
同　六年
戻駕忠義ノ操三冊　一亭五園作（久留丸改名）　月丸畫　丸文
同　八年
追善對之晴衣二冊　壯周堂花蝶作　國直 春亭畫　東永堂
同　十年
復讐縁之小車五冊　千代春道作　春亭畫
同　五年　濱松屋幸助
清水寺利生ノ仇討六冊　解亭眉山作　美丸畫　森治

文化四年
彦山仇討孝貞六助誓ノ力働六冊　春亭 國丸畫
同　五年　眉山作　森治
皿屋鋪後日之燒繼六冊　小枝繁作　北偕畫　同上
同　九年
薄化粧垣根ノ卯花六冊　醉月梅笑作　國直畫　泉市
同　十年
看々踊キンラノ唐金五冊　蘭香亭蕉作　國安畫
文政五年　山口屋
藤屋浪寢卷曉雲六冊　玄光亭金墨作　國信畫　鶴金
同　六年
東横連理薬籠六冊　礫川南嶺作　春亭畫　山口屋
同　上
金ノ生木見世會和歌五冊　忍ケ岡常丸作
同　七年　國直畫　山本
十二雛離赤友錄八冊（初編二編）　歌扇亭三ツ丸作　國安畫　丸甚
天保三年
江戸紫藤ノ花鳥四冊　風亭馬流作　景松畫　蔦吉
同　五年
時衛近江甲賀勝関四冊　三浦錦二作　芳政畫

天保十年　山口屋
有智治春ノ七種四冊　三浦錦二作　芳政畫　同　上
同十一年
讐仇假名茶話文庫四冊　丹頂庵鶴丸作 實は貞秀作　――　鶴　喜
同　九年
馬琴作の煎茶の始を書直したるものなり。
櫻風呂花之半開四冊　白雲洞主人作 實は貞秀作　貞秀畫　同　上
同　十年
京山作の孝行雀を書直なり。
藻汐艸須磨ノ書替　松下棲蕣谷作 實は貞秀作　――　同　上
同十一年
馬琴作の行平鍋書直し。
金澤万八笑増談　松竹園秀山作 實ハ貞秀作　貞秀畫　同　上
同十三年
笑門松和合ノ琴唄四冊　松亭壽山作　同　上　藤岡屋彦太郎
同　上
忠孝譽ノ石文四冊　同　上　芳虎畫　同　上
同　上
歸ル雁故郷ノ花園四冊　同　上　同　上　藤岡屋彦太郎
同十三年

忠臣四十七文字三冊　鳥居清經畫作　西　村
安永七年
同再板義臣平生三冊　恒酔夫作　北尾畫　同　上
享和三年
敵討今川状三冊　川弄樓主人作　國滿畫　――
文化七年
金花猫婆化粧屋鋪六冊　大海舍金龍作 實は貞秀作　貞秀畫　鶴　喜
天保九年
三馬作猫又屋敷の書直し
成程瓢梅餘詩二冊　文尙堂春馬作　國安畫　丸　文
文政四年
筆始清書艸紙六冊　文尙堂作　國貞畫　同　上
同　元年
敵討備前徳利二冊　馬光仙作　舟調畫　山口屋
享和三年
二世の浦嶋二冊　玄光亭金墨作　國信畫　――
文政二年
奇談立山物語三冊　素速竹作　久信畫　山城屋
文化六年
足柄山峯ノ仇討三冊　年彦作　國房畫　榎　本

文化七年
福來笑門松五冊　素速竹作　久信畫　山城屋
同　五年
(七役 半替)敵討記平汝(ヲホヘタカウヌ)三冊　六樹園作　醉放逸人畫　蔦重
同　上
指角力手管業物　律秋堂作　美丸畫　森治
文政九年
桔槹粂眠山三冊　千代春道作　春亭畫　西村
文化七年
千羽鳥山路踏三冊　硯亭墨山作　月丸畫　森治
同　七年
復讐奇談東雲草紙二冊　墨山作　春亭畫　榎本
同　五年
虫盡ヶ世話ノ移氣三冊　長亭五蘭作　國丸畫　大阪屋秀八
同　九年
宮戸川三社由來七冊　五蘭作　春亭畫　濱松屋幸助
同　五年
雛方浮世諺二冊　蘭奢臺作　國安畫　鶴喜
文政七年
松ノ春色出世景清三冊　國直畫　西宮

文化十二年
通神百夜車　西川光信作　國安畫　鶴喜
同　上
俄遊廓之山門三冊　當山傳光畫作　河内屋源七
同　上
假名手本三度淸書　礫川山人南嶺作　春亭畫　伊東
文政七年
嗚呼忠臣夜光珠　竹田出雲作　國安畫　鶴喜
同　十年
春霞園ノ仇討三冊　長亭五蘭作　國房畫　岩戸屋
文化七年
(蝉彦彌三郎噺 女ノ若彌三郎猫)小萬呂双生種蒔絵ノ夏海畫作(佐渡作)　西宮
同十四年
三國一大御利生記三冊　金澤山人作　美丸畫　村田
敵討裏見瀧六冊　松下井三和作　豐廣畫　蔦重
同　六年
(小ひな 半兵衛)乗合船浪花ノ噂三冊　當山傳光作　國直畫　河内屋源七
同十一年
敵討船玉物語三冊　櫻川女作

佛實兵衛菊料日記三冊

作者畫工俗姓住居

歌丸畫工　大丸新道　小川市太郎
二世歌丸　馬喰町　北川鐵五郎
山巴亭青江　馬喰町　西村與八
蘭香亭薫　元飯田町煙草店　三河屋彌平次
柳々居辰齋　通新石町　滿納半二
守信亭赤城山人　小日向水道橋　本屋忠五郎
春夏秋冬　竹島町　笹本藤次郎
春町元祖　松平房州家士　倉橋壽平
式丸畫工　牛天神下　東海林平次右衛門
北嵩畫工　明神下伊勢屋佐兵衛内　某
柳谷畫工　鳥越松浦公家士
紅翠齋　金杉御嶽向山　北尾太助
山月庵古柳　馬喰町油店　米澤屋四郎兵衛
平秩東作　内藤新宿　稲毛屋八右衛門
北馬畫工　新堀三筋町中ノ町　有坂五郎八
芝金交　神谷町　能役者　山本藤十郎

森羅萬象　櫻田善右衛門町　福島屋仁右衛門
北溪　永井町　肴屋初太郎
英山　糀町六丁目　佐花屋万吉
朱樂菅江　大久保サギ町　山崎郷介
春亭勝川　和泉町　山口長十郎
春英九徳齋　新和泉町　家主久次郎
唐來三和別號伊豆守　松井町　大和屋源藏
豐國　上槇町　倉橋熊吉
豐春　檜物町　正次郎
國貞　初五ツ目渡シ場　龜田屋庄五郎
戴斗先北齋錦袋舍　石原片町　中嶋鐵藏
國丸一輕雲亭、彩霞樓一圓齋　通四丁目後ニ本町　伊勢屋伊八
二世風來山人桂川甫周弟甫齋　築地門跡脇　森嶋仲良
蓬洲神屋蓬萊亭　御弓町　青木龜助

合卷外題集終

草雙紙書目

例言

一本稿は弘化元年より慶應三年まで二十四年間の草雙紙を基礎となし、『新青本年表』と命名し、以て正續青本年表に接續せしむるの考按なりしも、事豫想に反し、書目の蒐輯すら豫測の約半數に達せず、且つ作者、畫工の履歴等に至つては、參考すべきの書籍に乏しく、之を完成せしむるには、到底短期日に終了し能はざるにより、今日まで蒐收せし書目のみを列記して、僅に歳次を續くることとせり。

一該期間中の草雙紙出板數は、千二百種以上の推測なるも今載する所の書目は、僅に六百六十七種に過ぎず。

一今期は長編の續物流行の時期とて、明治以降に亘りしものあれど、慶應末年迄を採り、其以後は本書に録せず。

一上記の事實なれば、錯誤脱漏もとより多かるべし、是等は考訂完成の上、他日公にすることを期す、覧者幸に其杜撰を責めたまふ勿れ。

明治三十九丙午歳二月

大久保葩雪識

草雙紙書目

大久保豐輯

弘化元甲辰年（天保十五年改元）

書目

福德天長大國柱四冊　應賀作　豐國畫
其昔忍戻摺四冊　金水作　英泉畫
新編金瓶梅十篇　馬琴作　豐國畫

弘化二乙巳年

書目

釋迦八相倭文庫初篇　應賀作　豐國畫
繪本篠塚一代記初篇　楚滿人作　國芳畫
磁石山浮世精靈四冊　應賀作　同上
無漏早咲兩行操六冊　一九作　豐國畫
姥ヶ池因緣物語二冊　南北作　國直畫
猫兒牝忠義合奏四冊　馬琴作　國芳畫
紫菜淺草土產初篇　一九作　豐國畫
敵討貞女鑑三冊　京山作　同上
大國初夢話四冊　應賀作　同上
貧福欲換得四冊　一九作　同上
下戸實氣勸善飯二冊　同上　貞秀畫

弘化三丙午年

書目

武藝立身館雙六初篇　應賀作　豐國畫
女郎花五色石臺二篇初篇　馬琴作　同上
繪本篠塚一代記二篇　應賀作　國芳畫
釋迦八相倭文庫自二篇至四篇　同上　豐國畫
戲作花赤本世界四冊　小三馬作　同上
朧月猫の草紙自初篇至四篇　京山作　國芳畫
紫菜淺草土產二篇　一九作　豐國畫

弘化四丁未年

書目

遊仙窟春雨草紙 初篇二篇　川柳作　豐國畫
女郎花五色石臺 三篇四篇　馬琴作　同上
釋迦八相倭文庫 自五篇至七篇　應賀作　同上
新編金瓶梅 十篇再板　馬琴作　同上
紫菜淺草土産 三篇　一九作　同上
忠義敵討赤松物語 初篇　如淵外史作　同上
甲越勇士鑑 初篇　奇山作　芳虎畫
翁草千歳盃 初篇　應山作　豐國畫
櫻姫𠎁雙紙 初篇二篇　京山作　芳虎畫
其紫鄙廼𠎁 初篇二篇　可候作　豐國畫
義經千本櫻 自初至三篇　種清作　國貞畫

嘉永元戊申年（弘化五年改元）

書目

蝦蟇妖術大蛇怪異 兒雷也傑譚 九輯　笑顏作　豐國畫
中將姫一代記 雲雀山蓮絲織 初篇　玉蘭齋作　貞秀畫
雪梅芳譚犬の草紙 初篇二篇 一名八犬傳犬の草紙　仙果作　豐國畫
小さん金五郎 梅雨濡仲町三冊　種清作　國貞畫

重井菱染別小紋 初篇　春水作　豐國畫
忠義敵討赤松譚 二篇三篇　如淵外史作　同上
遊仙窟春雨草紙 自三至五篇　川柳作　同上
釋迦八相倭文庫 自八至十篇　應賀作　同上
五十三驛梅東路四冊　五瓶作　豐國 貞秀畫
友三味線操合奏四冊　小三馬作　豐國畫
昔語小栗實記 初篇　金水作　同上
紫菜淺草土産 四篇　一九作　同上
忠臣藏之助立四冊　應賀作　貞房畫
其紫鄙廼𠎁 三篇　可候作　豐國畫
勸善浮世車四冊　金水作　貞房畫
兩筋戀山道四冊　應賀作　國芳畫
黄菊花都路三冊　古瓶作　同上

嘉永二己酉年

書目

松會讀本竹本正本 引書語三荘太夫 自初至四篇　西馬作　國輝畫
妻は白縫妾は能江 源氏雲弦月 初篇二篇　種員作　國芳畫
第一番左鹽屋文正 古今草紙合 一輯二輯　仙果作　豐國畫

雪梅芳譚犬の草紙 自三篇至七篇 一名八犬傳犬の草紙　仙果作　豐國畫
五色染亭環冊子 初篇二篇　小三馬作　同上
寶入秋花野薊菅 自初篇至三篇　種員作　國輝畫
忠義教諭赤松譚 四篇　如淵作　豐國畫
勸善懲惡乘合話 六篇　種員作　同上
釋迦八相倭文庫 自十一篇至十三篇　應賀作　同上
日本武者年代記 六冊　玉蘭齋作　貞秀畫
釣花生梅三日月 四冊　雪麿作　英泉畫
譚柄瑠璃牽牛花 初篇 一名朝がほ草紙　一凰作　國芳畫
三庄太夫正本由良湊 初篇二篇　笑顔作　芳鶴畫
七草四郎若菜讀子白縫譚 初篇　種員作　豐國畫
新靱田舍物語 初篇二篇　一九作　同上
御贔美少年始 三篇　同上　同上
假名讀八犬傳 自五篇至七篇　春水作　國芳畫
兒雷也豪傑譚 十一輯　笑顔作　豐國畫
大晦日曙草紙 十四篇　京山作　同上
武勇藝能名譽 六冊　正惠作　廣重畫
日蓮記旭本 初篇　應賀作　豐國畫
神代漢讀草 初篇　同上　同上
柳風花白波 初篇二篇　仙果作　國輝畫
歌枕二世譚 四冊　可候作　豐國畫

嘉永三庚戌年

書目

兒ヶ淵雙弟は敦盛名取草雙蝶々 初篇　種員作　豐國畫
黃金赤縄黑白明斷青陽石應礎 三篇四篇　同上　芳虎畫
一番之左雙屋文正古今草紙合 三篇　仙果作　國輝畫
一番之左雙屋文正古今草紙合 四篇上　同上　同上
一番之右油屋於染古今草紙合 四篇下　同上　同上
破軍太郎七星奇談 初篇二篇　種員作　豐國畫
同國網捷五郎英雄美人錄 四篇五篇　京山作　同上
初昔見聞沙有紙 初篇　有人作　芳盛畫
俠客傳仮撰略記 自初篇至三篇　西馬作　豐國國輝畫
伊呂波藏水滸傳 自初篇至三篇　五瓶作　豐國畫
譚柄瑠璃牽牛花 二篇　一凰作　國芳畫
重井菱染別小紋 二篇　春水作　豐國畫
敵討九里伊賀越 四篇五篇　英壽作　國輝畫
忠義教諭赤松譚 五篇　如淵作　豐國畫
足利絹手染廼紫 六篇　仙果作　同上

八犬傳犬の草紙 自八篇至十三篇	仙果作	豐國畫
釋迦八相倭文庫 自十四篇至十七篇	應賀作	同上
妹脊築山七組入子枕 初篇二篇	仙果作	國芳畫
昔語小栗實說 二篇三篇	金水作	豐國畫
新翻田舍物語 三篇	一九作	國輝畫
紫菜淺草土產 五篇	同上	豐國畫
教訓乳母草紙 七篇	京山作	同上
假名讀八犬傳 自八篇至十篇	春水作	國芳畫
兒雷也豪傑譚 十二輯	種員作	豐國畫
大晦日曙草紙 十五篇	京山作	同上
浮牡丹全傳 初篇二篇	種員作	國芳畫
本朝金剛傳 初篇二篇	應賀作	同上
岸柳四魔譚 自初篇至三篇	西馬作	國輝畫
日蓮記旭衣 二篇	應賀作	豐國畫
神代藻鹽草 二篇	同上	同上
英雄五大力 五篇	同上	同上
繪圖見西行 十篇	京山作	同上
義仲旭軍配 四冊	種員作	芳虎畫
甲越武功傳 四冊	西馬作	同上
白縫譚 二篇三篇	種員作	豐國畫

嘉永四辛亥年

書目

一番之右 油屋於染 古今草紙合 五篇六篇	仙果作	國輝畫
二人靜 二人忠信 裏表千本櫻 六冊	種員作	豐國畫
前太平記 船櫓黑崎合戰 四篇	西馬作	貞秀畫
嶋巡浪間朝日奈 初篇二篇	種員作	國輝畫
關太郎鈴鹿故語 初篇二篇	西馬作	同上
淺間嶽面影草紙 初篇二篇	種員作	同上
初昔見聞沙有紙 二篇三篇	有人作	芳盛畫
今業平昔廼面影 二篇四篇	仙果作	芳虎畫
俠客傳仮摸略記 四篇五篇	西馬作	國輝畫
勸善懲惡乘合話 七篇八篇	種員作	國貞畫
阪東太郎後世譚 九篇十篇	西馬作	貞秀畫
八犬傳犬の草紙 自十四篇至十七篇	仙果作	豐國畫
釋迦八相倭文庫 自十八篇至廿一篇	應賀作	同上
御伽曾我春歳玉 六冊	種員作	同上
假名手本忠臣藏 四冊	西馬作	芳虎畫
江戸鹿子紫草紙 四冊	梅彦作	豐國畫

新編金瓶梅全輯再板	馬琴作	豐國書
祥瑞白菊物語初篇二篇	川柳作	芳虎書
名取草雙蝶々二篇	種員作	豐國書
御贊美少年始四篇五篇	一九作	國輝書
新靭田舍物語四篇五篇	同上	同上
教訓乳母草紙八篇	京山作	同上
假名讀八犬傳十一篇十二篇	春水作	國芳書
大晦日曙草紙十六篇	京山作	國輝書
春柳錦花皿初篇二篇	一九作	同上
詞花董草紙初篇二篇	雪麿作	同上
松園白妙譚二篇三篇	瓢々閑人作	國明書
神代藻鹽草三篇	應賀作	國麿書
七組入子枕三篇四篇	仙果作	國芳書
岸柳四魔譚四篇五篇	西馬作	國輝書
琴聲美人錄六篇七篇	京山作	豐國書
今樣八犬傳七篇八篇	春水作	國芳書
繪圖見西行十一篇	京山作	豐國書
鷄聲粟帽子四冊	西馬作	芳虎書
伊賀越仇討四冊	同上	國周書
濡燕雨逢傘四冊	雪住作	芳員書
傚像水滸俠銘鑑三篇四篇	西馬作	國輝書
白縫譚自四篇至六篇	種員作	豐國書

嘉永五壬子年

書目

一休禪師諸國物語初篇二篇	德升作	國芳書
一番之右油屋於染古今草紙合七篇八篇	仙果作	國輝書
長壁狐妖婦奇談初篇	西馬作	芳虎書
二重染菊花雁金初篇二篇	種蔭作 種員校	國輝書
連理翅山鷄奇緣初篇二篇	西馬作	國政書
縛音手綱乃染分自初篇至三篇	新七著 梅彥篇	國貞書
譚柄瑠璃牽牛花三篇	一鳳作	國芳書
島巡浪間朝日奈三篇四篇	種員作	國輝書
今業平昔廼面影四篇五篇	仙果作	芳虎書
女郎花五色石臺五篇	種員作	國輝書
俠客傳仮撲略記六篇七篇	西馬作	同上
忠義教誡赤松譚八篇	應賀作	國麿書
八犬傳犬の草紙自十八篇至廿三篇	仙果作	豐國書
釋迦八相倭文庫二十二篇二十三篇	應賀作	同上

木下影眞砂摸繪四冊　吐蚊作　國政畫
富士額天人お七六冊　仙果作　芳虎畫
其昔花街任侠氣六冊　西馬作
新編金瓶梅全輯三板　馬琴作　豐國畫
祥瑞白菊物語三篇四篇　川柳作　芳虎畫
御贊美少年始六篇七篇　一九作　國輝畫
新靫田舍物語六篇七篇　同上　同上
教訓乳母草紙九篇十篇　京山作　同上
教草女房形氣十一篇十二篇　同上　豐國畫
大晦日曙草紙十七篇十八篇　同上　國政畫
兒雷也豪傑譚自十八篇至二十八篇　種員作　國輝畫
假名反古一休草紙初篇二篇　同上　同上
輪廻應報新編絲櫻三冊　同上　豐國畫
品定五人娘初篇二篇　京山作　芳虎畫
櫻姬粧春雨初篇二篇　西馬作　國輝畫
初若菜雪曙初篇二篇　光彥作　國芳畫
忠義七星鎌自初篇至四篇　乾坤作　芳虎畫
葛葉九重錦自初篇至五篇　應賀作　豐國畫
造榮櫻叢紙自初篇至六篇　梅彥作 文京閣作　芳虎畫
春柳錦花皿三篇四篇　一九作　國輝畫

七組入子枕五篇六篇　仙果作　國芳畫
繪圖見西行十二篇　京山作　豐國畫
木下闇綠林六冊　一九作　國輝畫
東山櫻莊子五冊　南北作　國芳畫
根源實紫初篇二篇　仙果作　豐國畫
塵塚物語自初篇至三篇　京山作　同上
白縫譚自七篇至八篇上　種員作　同上
白縫譚自八篇下至十八篇下　同上　國貞畫

嘉永六癸丑年

書目

鹽屋文正油屋於染古今草紙合十九篇　仙果作　國輝畫
與話情浮名橫櫛初篇二篇　如皐著 好文編　國芳畫
星月夜窓下白梅初篇二篇　種春作 種員校　國輝畫
花山吹百人女郎初篇二篇　種彥作　豐國畫
松浦船水棹婦言初篇二篇　仙果作　國芳畫
花簑笠梅稚物語初篇二篇　西馬作　國輝畫
八重撫子累物語初篇　仙果作　國貞畫
長壁狐妖婦奇談二篇　西馬作　芳虎畫

御伽譚博多新織自初篇至三篇　知皐篤子文作　國芳畫
春小袖對佳賀紋自初篇至四篇　仙果作　國貞畫
連理翅山鶴奇緣三篇四篇　西馬作　芳綱畫
譚柄瑠璃牽牛花四篇　一鳳作　國芳畫
島巡浪間朝日奈五篇　種員作　國輝畫
今業平昔麵面影六篇七篇　補果作　芳虎畫
春のなくらし草紙七篇　京山作　豐國畫
俠客傳仮摸略記八篇　西馬作　國輝畫
俠客傳仮摸略記九篇　同上　國綱畫
八犬傳犬の草紙自廿四篇至廿七篇　仙果作　豐國國貞畫
釋迦八相倭文庫二十四篇　應賀作　豐國畫
釋迦八相倭文庫二十五篇二十六篇　同上　國貞畫
通天橋念之一枝三冊　春水作　豐國貞秀畫
伊賀越道中雙六三冊　玉蘭齋作　貞秀畫
追局八犬傳後日譚自初篇至三篇　春水作　國芳畫
時代世話神吏十種曲三篇四篇　西馬作　國輝畫
堀川唄眞實錄四篇　仙果作　國芳畫
祥瑞白菊物語五篇六篇　川柳作　芳虎畫
御贔美少年始八篇九篇　一九作　國綱畫
邯鄲諸國物語十六篇十七篇　柳亭種彥仙果作　豐國畫

大晦日曙草紙十九篇　京山作　芳綱畫
兒雷也豪傑譚自廿一篇至廿三篇　種員作　國輝畫
滑稽笑談浮世文庫一冊　種員種安合作
假名反古一休草紙三篇四篇　種員作　國輝畫
瀧櫻花過浪初篇二篇　種久作　國貞畫
三都妖婦傳二篇　仙果作　豐國畫
日蓮記鎧衣三篇　應賀作　國芳畫
品定五人娘三篇四篇　京山作　芳虎畫
神代藻鹽草四篇　應賀作　國貞畫
春柳錦花皿五篇　一九作　芳綱畫
薄紫宇治曙六篇　仙果作　豐國畫
櫻紅葉命棧四冊　琴彥作　芳虎畫
增補忠臣藏三冊　玉蘭齋作　貞秀畫
根源寶紫三篇　仙果作　豐國畫
白縫譚自十一篇至十四篇　種員作　國貞畫

安政元甲寅年（嘉永七年改元）

書目

小栗十騎金澤八景照天松操月鹿毛初篇二篇　柳枝作　國輝畫

宮城忍摺 七草白揚 結鹿子紺屋小說 自初篇至三篇	花咲作	豐國畫
鞭屋文正 油屋於染 古今草紙合 十一篇 十二篇	仙果作	國輝畫
愛娘出世太平記 初篇	春水作	國卿畫
嵯峨奥猫魔多話 初篇 二篇	好文作	國貞畫
鄙物語業平雙紙 初篇 二篇	光彦作	同上
小幡小平次物語 自初篇至三篇	五瓶作	同上
與謝武郎戀夜語 自初篇至四篇	文京 笑壽作	豐國、國貞、國輝畫
御所春公東日記 自初篇至五篇	應賀作	芳虎畫
八重撫子累物語 二篇	仙果作	國貞畫
長壁狐妖婦奇談 三篇	西馬作	芳虎畫
佐野渡雪乃八橋 三篇	春水作	國廣畫
松浦船水棹婦言 三篇	仙果作	國芳畫
花簑笠梅稚物語 三篇	西馬作	國輝畫
重井菱染別小紋 三篇 四篇	春水作	豐國畫
與話情浮名横櫛 自三篇至五篇	好文作	國芳畫
御伽譚博多新織 四篇	同上	同上
春小袖對住賀紋 五篇	仙果作	國貞畫
連理翅山鷄奇緣 五篇	西馬作	芳綱畫
島巡浪間朝日奈 六篇	種員作	國貞畫
春のみどり草紙 八篇	京山作	同上
忠義教誡赤松譚 九篇 十篇	應賀作	豐國畫
俠客傳仮摸略記 十篇 十一篇	西馬作	國綱畫
釋迦八相倭文庫 自二十七篇至二十九篇	應賀作	國貞畫
八犬傳犬の草紙 自二十八篇至三十二篇	仙果作	豐國 國貞畫
花紅葉解脫絹川 三冊	好文作	國芳畫
ぬれつばめ稲妻草紙 五篇揃	調布作	國貞畫
黄金水大盡盃 初篇 二篇	春水作	同上
比翼紋小紫染 三篇	英壽作	芳玉畫
八犬傳後日譚 四篇	春水作	國芳畫
堀川唄眞實錄 五篇	仙果作	同上
御贊美少年始 十篇 十一篇	同上	國綱畫
教草女房形氣 自十三篇至十五篇	京山作	國貞畫
邯鄲諸國物語 十八篇	仙果作	同上
大晦日曙草紙 二十篇	京山作	芳綱畫
假名讀八犬傳 二十一篇	琴童作	國芳畫
兒雷也豪傑譚 二十四篇 二十五篇	種員作	國輝畫
假名反古一休草紙 五篇 六篇	同上	同上
神刀浪白鞘 初篇	仙果作	國貞畫
風俗淺間嶽 初篇 二篇	種久作 種員校	同上
夢結蝶鳥追 自初篇至四篇	種清作	芳幾畫

浮寢鳥朧󠄀䜭自初篇至五篇	花咲作	豐國畫
品定五人娘五篇六篇	京山作	芳虎畫
造栄櫻叢紙自七篇至十篇	梅彥作	同　上
朝顏物語五篇	京山作	同　上
竹取物語十六篇	同　上	同　上
白縫譚自十五篇至十七篇	種員作	國貞畫

安政二乙卯年

書　目

孝子は志度六兒子は寛度六童謠妙々車初篇二篇	種員作	國貞畫
天地人脚色正本初篇二篇	新七作	國芳畫
瀧櫻箱根之朝露初篇二篇	雪佳作	芳虎畫
南柯之夢女舞衣初篇二篇	西馬作	國芳畫
愛娘出世太平記二篇	春水作	國鄉畫
照天松操月鹿毛三篇	柳枝作	國輝畫
八重撫子絫物語三篇	仙果作	國貞畫
鄙物語業平草紙三篇四篇	光彥作	同　上
牡丹園女子莊子自三篇至五篇	仙果作	國輝畫
松浦船水棹婦言四篇	同　上	國芳畫
雲雀山蓮乃絲織四篇	玉蘭齋作	貞秀畫
花簑笠梅雅物語四篇	西馬作	國輝畫
佐野渡雪乃八橋四篇五篇	春水作	國貞畫
重井蔓染別小紋五篇	同　上	同　上
譚柄瑠璃牽牛花五篇	一鳳作	國芳畫
御伽譚博多新織五篇六篇	好文作	同　上
女郎花五色石臺六篇	種員作	國輝畫
與話情浮名横櫛六篇七篇	好文作	國芳畫
嶋巡浪間朝日奈七篇八篇	種員作	國綱畫
春のゑにし草紙九篇	京山作	國貞畫
俠客傳仮摸略記十二篇	西馬作	國綱畫
釋迦八相倭文庫自三十篇至三十二篇	應賀作	國貞畫
八犬傳犬の草紙自三十三篇至三十五篇	仙果作	豐國國貞畫
當寫殿下茶屋驛六冊	魯文作	國貞畫
紙鳶美代之春風三冊	小三馬作	國輝畫
菜種廼花雙蝶々二冊	仙果作	同　上
玉櫛笥箱根仇討三冊	同　上	貞秀畫
北雪美談時代加賀見自初篇至三篇	春水作	國貞畫
昔語室壁太郎初篇二篇	同　上	同　上
絲櫻春蝶奇緣初篇二篇	馬琴遺作	房種畫

黃金水大盡盃三篇四篇　春水作　國貞畫
八犬傳後日譚五篇　同上　國芳畫
堀川唄眞實錄六篇　仙果作　同上
御贊美少年始十一篇十二篇　同上　國綱畫
邯鄲諸國物語十九篇　同上　國貞畫
大晦日曙草紙二十一篇　京山作　芳綱畫
假名讀八犬傳二十二篇　琴童作　國芳畫
兒雷也豪傑譚自廿六篇至廿八篇　種員作　國輝畫
假名反古一休草紙七篇　同上　國光畫
旅雀我好話自初篇至三篇　種清作 種員閱　國貞畫
神刀浪白鞘二篇　仙果作　同上
善知鳥物語三篇　京山作　芳虎畫
風俗淺間嶽三篇四篇　種久作　國貞畫
教訓武藏鐙五篇六篇　應賀作　同上
薄紫宇治曙七篇　仙果作　同上
新編金鷄談四册　春水作　國芳畫
朝顏物語六篇　京山作　芳虎畫
竹取物語十七篇　同上　同上
白縫譚十八篇上　種員作　豐國畫
白縫譚自十八篇下至二十篇下　同上　國貞畫

安政三丙辰年

書目

前太平記續篇衣伊達奥州合戰六册　西馬作　芳員畫
桃太郎鬼島記椿說鬼魅談語自初篇至五篇　春水作　國輝畫
鹽屋文正油屋於染古今草紙合十三篇十四篇　仙果作　國貞畫
浮世風呂端唄入混四册　鈍通作
お七吉三松梅竹取物語初篇二篇　西馬作　國貞畫
於組三郎總三郎琴聲美人錄十三篇　京山作　芳員畫
新當織帶屋綴合初篇二篇　西馬作　國貞畫
新增補西國奇談初篇二篇　春水作　同上
須磨浦后廼白浪初篇二篇　瓢々亭作　房種畫
座頭殺宇津谷峠初篇二篇　種久作
名高手鞠諷實錄自初篇至三篇　種清作　國貞畫
再茲相馬之舊譯二篇　瓢々亭作　房種畫
瀧櫻箱根之朝露三篇　雪住作　芳虎畫
照天松操月鹿毛四篇　柳枝作　國輝畫
長壁狐妖婦奇談四篇　西馬作　芳虎畫
八重撫子累物語四篇五篇　仙果作　國貞畫

闇太郎鈴鹿故話五篇　西馬作　芳員畫
松浦船水棹婦言五篇　仙果作　國久畫
花簑笠梅稚物語五篇　西馬作　國清畫
重井菱染別小紋六篇　春水作　國貞畫
春小袖對作賀紋六篇　仙果作　同上
女郎花五色石臺七篇　種員作　國盛畫
俠客傳仮摸略記十三篇　西馬作　國綱畫
釋迦八相倭文庫自三十四篇至三十七篇　應賀作　國貞畫
八犬傳犬の草紙三十六篇至三十七篇　仙果作　同上
八幡太郎智勇譚八冊　春馬作　國久畫
義經以佐維軍記八冊　同上　同上
北雪美談時代加賀見五篇六篇　春水作　國貞畫
八犬傳後日譚六篇　同上　國芳畫
邯鄲諸國物語二十篇　仙果作　國貞畫
大晦日曙草紙二十二篇　京山作　芳綱畫
假名讀八犬傳二十三篇二十四篇　琴童作　國芳畫
兒雷也豪傑譚二十九篇三十篇　種員作　國盛畫
假名反古一休草紙八篇　同上　國光畫
櫻姫傳草紙初篇　京山作　芳虎畫
三都妖婦傳三篇　仙果作　豐國畫

神刀波白鞘三篇　仙果作　國貞畫
童謠妙々車三篇　種員作　同上
善知鳥物語四篇　京山作　芳虎畫
薄紫宇治曙八篇　仙果作　國貞畫
朝顔物語七篇　京山作　芳虎畫
竹取物語十八篇　同上　同上
白縫譚廿一篇廿二篇　種員作　國貞畫

安政四丁巳年

書目

前世はお花半七後世はお半長右衛門三世相縁之緒車三篇揃　種清作　國貞畫
淺緑短刀深緑茶入笹野權三梅花鎗初篇二篇　種員作　同上
笑題夕霧追善鬢籠文月娘伊左衛門八冊　梅彥作　豐國畫
筆頭當振仕形はなし仇櫻戀白濤初篇二篇　春馬作　國貞畫
お組義三郎琴聲美人錄自十四篇至十六篇　京山作　國郷畫
花兄弟陸奥名所初篇二篇　仙果作　國貞畫
緣結浮世之雛形初篇二篇　種員作　同上
鼠小紋東君新形初篇二篇　種清作　同上
雜談雨夜之質庫初篇二篇　春水作　國郷畫

新當織帶屋綴合 三篇	西馬作	國貞畫
愛娘出世太平記 三篇	春水作	國鄉畫
新增補西國奇談 自三至五篇	同上	國貞畫
夢想兵衛勸略枕 四篇五篇	仙果作	國芳畫
牡丹園女子莊子 自四至六篇	同上	國貞畫
雲雀山蓮之絲織 五篇	玉蘭齋作	貞秀畫
佐野渡雪乃八橋 六篇七篇	春水作	國貞畫
重井菱染別小紋 七篇	同上	同上
俠客傳仮摸略記 十四篇	西馬作	國綱畫
曲亭翁女水滸傳 十五篇	馬琴作	豐國畫
八犬傳犬の草紙 三十八篇三十九篇	仙果作	國貞畫
歲德曾我松島臺 三篇揃	種清作	同上
小夜衞白浪草紙 四冊	仙果作	芳虎畫
惡源太猛勇物語 四冊	春馬作	國久畫
金毘羅利生傳記 六冊	魯文作	登里畫
男達吾褄花川戶 六冊	同上	直政畫
北雪美談時代加賀見 自七至十篇	春水作	國貞畫
昔語室壁太郎 三篇四篇	同上	同上
黃金水大盡盃 五篇六篇	同上	同上
八犬傳後日譚 六篇迄再板	同上	國芳畫

八犬傳後日譚 七篇	春水作	國芳畫
風俗伊勢物語 十篇	仙果作	貞秀畫
大晦日曙草紙 廿三篇	京山作	國清畫
千羽鳥名畫擧 前篇後篇	瓢長作	國貞畫
水滸傳正本製 八冊	梅彥作	豐國畫
報讐自來也物語 初篇二篇	種清作	國貞畫
假名反古一休草紙 九篇	種員作	同上
惠花祐天櫻 初篇	春水作	國鄉畫
入船倭取楫 初篇二篇	種清作	國貞畫
蝶衞龜山染 自初至三篇	同上	同上
操松月景清 自初至三篇	魯文作	芳幾畫
娘庭訓金鷄 自初至三篇	京山作	同上
梅雨濡仲町 三篇揃	種清作	同上
童謠妙々車 四篇五篇	種員作	國貞畫
風俗金魚傳 五篇	馬琴作	國安畫
風俗淺間嶽 五篇	種久作 種員校	國貞畫
國字水滸傳 二十篇	仙果作	國芳畫
三國志畫傳 自廿一至廿三篇	貞一作	直久畫
義經一代記 四冊	重山作	芳虎畫
義仲勇戰錄 四冊	春馬作	國周畫

月宴更科譚四冊	梅彥作	國芳畫
復讐田宮譚四冊	西馬作	芳晴畫
根源實紫自十篇至十二篇	仙果作	國貞畫
白縫譚二十三篇二十四篇	種員作	同上

安政五戊午年

書目

一夜附茶番雛形初篇二篇	春馬作	國貞畫
絲時雨越路一諷初篇二篇	種清作	同上
紀文大盡入船帳初篇二篇	應賀作	國麿畫
岩見重太郎實記初篇二篇	貞山作	
時代摸樣箍蔓錦自初篇至三篇	雪住作	芳虎畫
鼠小紋東君新形三篇	種清作	國貞畫
新當織帶屋綴合四篇五篇	西馬作	同上
照天松操月鹿毛五篇	柳枝作	國輝畫
女郎花五色石臺八篇	種員作	同上
八犬傳犬の草紙三十九篇	仙果作	國貞畫
新田足利龍虎錄四冊	春馬作	國明畫
晴摸樣染衣更衣四冊	種清作	國貞畫

忠臣貞婦伊呂波文庫初篇二篇	種久作 種員校	國貞畫
花傳美少時代加賀見自十一篇至十五篇	春水作	同上
おなつ清十郎都正本製自初篇至三篇	梅彥作	國輝畫
黄金水大盡盃七篇八篇	春水作	國貞畫
大晦日曙草紙二十四篇	京山作	國清畫
假名讀八犬傳二十七篇	琴童作	國芳畫
兒雷也豪傑譚自三十一篇至三十三篇	種員作	國貞畫
假名反古一休草紙十篇	同上	同上
薄倖幻日記自初篇至三篇	春水作	同上
惠花祐天櫻二篇	同上	國鄉畫
仇櫻戀白浪三篇	春馬作	國貞畫
入船倭取楫三篇	種清作	同上
敵討噂古市三篇摘	同上	同上
風俗淺間嶽六篇	種久作 種員校	同上
賴朝青雲錄四冊	春馬作	國周畫
正成誠忠錄四冊	同上	國鄉畫
白縫譚二十五篇二十六篇	種員作	國貞畫

安政六己未年

書目

錦木新七 お梅粂之助 萬年草新渡鉢植三冊　種員作　豐國畫
假名手本忠臣藏初篇　種清作　國芳畫
假名手本忠臣藏二篇　同上　芳房畫
花山吹百人女郎二篇迄再板　種彥作　國貞畫
乘初曾我青砥驊三篇揃　種清作　同上
江戶櫻清水清玄三篇揃　同上　同上
一夜淸脚色正本自三篇至五篇　春馬作　同上
重井蔆染別小紋八篇　春水作　同上
八犬傳犬の草紙四十篇 四十一篇　仙果作　同上
北雪美談時代加賀見十六篇 十七篇　春水作　同上
大晦日曙草紙廿五篇 廿六篇　京山作　國淸畫
假名反古一休草紙十一篇　種員作　國貞畫
戀車淀翡翠自初篇至三篇　種清作　同上
仇櫻戀白浪四篇 五篇　春馬作　同上
風俗淺間嶽七篇　種久作　同上
千兩幟初篇 二篇　西馬作　國鄉畫
白縫譚廿七篇　種員作　國貞畫

萬延元庚申年（安政七年改元）

書目

色表紙曾我物語初篇　春水作　國貞畫
三世相錦繡文章初篇 二篇　種清作　國鄉畫
三人吉三廓初買自初篇至三篇　一瓢作　國貞畫
金瓶梅曾我賜寶自初篇至三篇　種清作　國芳畫
釋迦八相倭文庫自四十三篇至四十六篇　應賀作　國貞畫
蝶衛裾野皐月雨二冊讀切　種久作　芳幾畫
小幡怪異雨古沼四冊　種清作　國貞畫
結鹿子紺屋小說四冊再板り・花咲作　同上
佐寄宮本名響武術譽自初篇至三篇　西馬作　同上
北雪美談時代加賀見自十八篇至廿一篇　春水作　同上
きられ與三郎浮世講談初篇 二篇　種清作　芳春畫
花摘五十三驛自初篇至四篇　同上　國綱畫
金華七變化自初篇至三篇　秀賀作　國貞畫
英皎諷一節自初篇至三篇　種清作　同上
風俗淺間嶽八篇　種久作　同上
流行橫濱拳二冊　出子散人作　芳盛畫
白縫譚二十八篇 二十九篇　種員作　國貞畫
白縫譚三十篇　種員遺稿　同上

白縫譚三十一篇　種員遺稿 種彦校　國貞畫

文久元辛酉年（萬延二年改元）

書目

龍三升高根實夢 自初篇至三篇　五柳作　國貞畫
御所奉公東日記 自十一篇至十三篇　應賀作　芳虎畫
足利絹手染紫 二十一篇二十二篇　金水作　國貞畫
北雪美談時代加賀見 自廿二篇至廿四篇　春水作　同上
太鼓櫓惠之礎 自初篇至三篇　五柳作　同上
童繪解萬國噺 自初篇至四篇　魯文作　芳虎畫
御所櫻梅松錄 自初篇至五篇　秀賀作　國貞畫
教草女房形氣 廿一 廿二篇　同上　同上
金華七變化 四篇 五篇　同上　同上
薄俤幻日記 自四篇至七篇　春水作　同上
風俗淺間嶽 九篇　種久作　同上
源家武勇鑑 四冊　秀賀作　芳虎畫
白縫譚 自三十二篇至三十四篇　種員遺稿 種彦校　國貞畫

文久二壬戌年

書目

二君に仕へし忠臣の功 兩夫に見へし賢女の鏡 柳春秋色櫻 初篇二篇　有人作　芳幾畫
權現堂堤復讐 假名情談戀畔倉 初篇　如皐作　國貞畫
弘法大師[illegible] 海四國聞書 自初篇至三篇　種彦作　同上
[illegible]時次郎 明鴉墨繪補禱 四篇　春馬作　同上
[illegible]浦里時次郎 明鴉墨繪補禱 五篇　種彦作　同上
戀夫帶娘評判記 初篇　種清作　同上
須磨浦後廼白波 初篇 再板　鼠々亭作　房種畫
若葉梅浮名横櫛 初篇 二篇　金次作　國貞畫
勝相撲花乃顏觸 初篇 二篇　五瓶作　芳虎畫
東談語宇都山笆 自初篇至三篇　種彦作　國貞畫
青砥稿花紅彩畫 自初篇至三篇　新七著 梅彦篇　同上
世界裕蝶々小紋 自初篇至三篇　種清作　同上
瀧櫻箱根適朝露 四篇　雪住作　芳虎畫
八犬傳犬の草紙 四十三篇　種彦作　國綱畫
北雪美談時代加賀見 自廿五篇至廿七篇　春水作　國貞畫
蘇防染櫻摸樣 初篇二篇　貞雅作　國貞 國孝畫
絲櫻春蝶奇緣 三篇　一笑齋作　房種畫
花曇朧夜草紙 五篇　春水作　國貞畫

鏡花猫目鬘初篇	魯文作	芳虎畫
東紫哇文庫初篇	同上	芳幾畫
花軍應仁譚初篇二篇	同上	芳員畫
音聞百物語初篇二篇	五瓶作	國貞畫
櫻姬俤草紙三篇	京山作	芳虎畫
善知鳥物語五篇	同上	國貞畫
金華七變化自六篇至九篇	秀賀作	同上
薄俤幻日記九篇十篇	春水作	同上
神刀波白鞘十篇	種彦作	同上
風俗淺間嶽十篇	種久作	同上
童謠妙々車自十四篇至十六篇	種彦作	同上
池園物語初篇二篇	有人作	同上
朝顔物語八篇	京山作	同上
白縫譚三十五篇三十六篇	種員遺案柳亭修辭	同上

文久三癸亥年

書目

源平櫻之御所染初篇二篇	有人作	國綱畫
假名情談戀評合二篇	如皐作	國貞畫

元治元甲子年(文久四年改元)

江戸紫端唄文庫二篇	魯文作	芳幾畫
十勇士尼子之礎五篇六篇	同上	芳虎畫
稻妻形怪鼠標子七篇	西馬稿魯文作	國明畫
雨夜鐘四谷雜談九篇十篇	魯文作	芳虎畫
其由縁鄙廼面影自二十篇至廿二篇	種彦作	國貞畫
北雪美談時代加賀見六篇再板	春水作	同上
北雪美談時代加賀見自廿八篇至三十篇	同上	同上
筆海四國聞書自四篇至六篇	種彦作	同上
明鴉墨繪褔襠六篇七篇	春馬種彦作	國貞畫
春色墨田川自初篇至三篇	種彦作	同上
鏡花猫目鬘二篇	魯文作	芳幾畫
鄙都大內譚四篇五篇	種彦作	芳虎畫
花封莕玉章六篇七篇	同上	國貞畫
金華七變化自十篇至十三篇	秀賀作	同上
薄俤幻日記十一篇	春水作	同上
風俗淺間嶽十一篇	種久作	芳幾畫
白縫譚自三十七篇至四十篇	種彦作	同上

書目		
伊達闘戲場取組 初篇	權十郎作	國貞畫
二人長者榮華譚 初篇二篇	[illegible]作作	春定畫
戀女帶娘評判記 二篇	種清作	國貞畫
端唄文庫春雨卷 三篇	魯文作	芳虎畫
假名情談戀畔倉 三篇	如皐作	國貞畫
曾我綏俠御所染 三篇揃	書彥 桃壽 作	同上
室町源氏胡蝶卷 自初至五篇	種彥作	同上
八犬傳犬の草紙 四十六篇 四十七篇	同上	國綱畫
小夜衛白波草紙	仙果作	芳虎畫
三鱗形鎌倉雙紙 四冊	西馬作	
聖德太子大和鑑 四冊	應賀作	國貞畫
咲替而朝顏日記	仙果作	國輝畫
雲龍九郎偸盗傳 六冊	三馬遺稿 西馬增補	國芳畫
弓張月春廼宵榮	西馬作	國輝畫
北雪美談時代加賀見 自三十一篇至三十四篇	春水作	國貞畫
濡衣霧雨雙紙 初篇	梅彥作	同上
雜談雨夜質庫 六篇七篇	春水作	豐國 國久畫
筆海四國開書 自七篇至九篇	種彥作	國貞畫
明鴉翠繪補襠 自八篇至十篇	春馬 種彥作	同上
大晦日曙草紙 二十五篇	京山作	豐國畫
假枕巽八景 初篇二篇	魯文作	國周畫
高都大內譚 六篇	種彥作	芳虎畫
庭訓武藏鐙 六篇揃	應賀作	國貞畫
花封苔玉章 八篇九篇	種彥作	同上
風俗淺間嶽 十二篇	種久作	芳幾畫
薄俤幻日記 自十二篇至十四篇	春水作	國貞畫
金華七變化 自十一至十六篇	秀賀作	同上
童謠妙々車 十七篇十八篇	種彥作	同上
戀衣嫐雜史 六冊	西馬作	芳玉畫
竹雀千代囀 四冊	同上	國輝畫
白縫譚 四十一篇 四十二篇	種彥作	芳幾畫

慶應元乙丑年(元治二年改元)

書目		
蓬萊[illegible]延壽盃 傀儡子筆操 初篇二篇	魯文作	國綱畫
報讐殿下茶屋聚 初篇二篇	同上	國直畫
不思議塚小說櫻 六篇	種清作	芳幾畫
室町源氏胡蝶卷 六篇七篇	種彥作	國貞畫

忠臣貞婦伊呂波文庫八篇九篇	種久作	芳幾畫
北雪美談時代加賀見三十五篇	春水作	國貞畫
水鏡山鳥奇談自初篇至三篇	秀賀作	國周畫
御所櫻梅松錄九輯	同上	芳虎畫
黄金水大盡盃十六篇十七篇	春水畫	芳幾畫
兒雷也豪傑譚四十一篇四十二篇	種員作	同上
假名反古一休草紙十五篇	種久作	同上
鐄花猫目鬘三篇	魯文作	同上
風俗淺間嶽十三篇	種員作	同上
金華七變化十七篇十八篇	秀賀作	國貞畫
童謠妙々車十九篇	種彥作	同上
白縫譚自四十三篇至四十七篇	同上	芳幾畫

慶應二丙寅年

書目

籔鶯黄八幡不知初篇	有人作	芳虎畫
假名手本忠臣藏初篇二篇	文里作	國輝畫
花御所九重日記自初篇至三篇	秀賀作	同上
淺草刕十社緣起自初篇至五篇	種彥作	國貞畫
假名情談戀畔倉四篇	如皐作	國貞畫
端唄文庫雪巴卷四篇	魯文作	芳虎畫
七不思議葛飾譚自五篇至八篇	種彥作	國貞畫
不思議塚小說櫻七篇八篇	種清作	同上
室町源氏胡蝶卷自八篇至十一篇	種彥作	同上
滑稽道中膝栗毛十篇十一篇	一九作	英泉畫
八犬傳犬の草紙四十八篇四十九篇	種彥作	國綱畫
小女郎蜘怨苧環三篇再板揃	馬琴作	國芳畫
女郎花五色石臺十篇再板揃	同上	豐國畫
忠臣貞婦伊呂波文庫九篇十篇	種久作	國貞畫
北雪美談時代加賀見三十六篇三十七篇	春水作	同上
水鏡山鳥奇談四篇五篇	秀賀作	國周畫
筆海四國聞書自十篇至十二篇	種彥作	國貞畫
明鴉墨繪補襠自十一篇至十三篇	同上	同上
黄金水大盡盃十七篇十八篇	春水作	同上
兒雷也豪傑譚四十三篇四十四篇	種員作	同上
假名反古一休草紙十六篇十七篇	種久作	同上
新局九尾傳自初篇至四篇	春水作	同上
傀儡師筆操三篇四篇	魯文作	國綱畫
柳蔭月朝妻自四篇至六篇	有人作	國貞畫

花封茗玉章十篇　種彥作　國貞畫
風俗淺間嶽十四篇　種員作　同上
薄俤幻日記自十五篇至十七篇　春水作　同上
童謠妙々車自二十篇至廿二篇　種彥作　同上
櫻蔭花閣守三篇摘　種久作　芳虎畫
白縫物語自四十八篇至五十一篇　種彥作　芳幾畫

慶應三丁卯年

書目

名譽の義俠は柿木金輔名代の孝女は枝豆お市浪輝黃金鯱初篇　其水、有人、交來、如皐合作　芳幾畫
同　浪輝黃金鯱二篇　魯文、芳幾、其水、有人合作　同上
同　浪輝黃金鯱三篇　支魚、如皐、魯文、其水合作　同上
和歌業小町文章初篇　秀賀作　國周畫
當南身延御利生自初篇至三篇　如皐著種清篇　國貞畫
當九字萬倍曾我自初篇至三篇　魯文作　國輝畫
假名淸譚戀畔倉三篇迄再板　如皐作　國貞畫
傾城曾我廓龜鑑六冊　其水案言彥、琴咲篇　同上
周防染櫻花模樣自四篇至六篇　貞雅作　同上

北雪美談時代加賀見三十八篇三十九篇　春水作　國貞畫
梅春霞引初三篇摘　魯文作　國周畫
新局九尾傳五篇六篇　春水作　國貞畫
濡衣女鳴神十篇摘　秀賀作　同上
白縫譚自五十一篇至五十五篇　種彥作　芳幾畫

年次不明

書目

黃金赤繩黑白明斷靑陽石廳礎初篇二篇　英泉作　豐國畫
伊達競於國歌舞妓四冊　春馬作　國綱畫
假名手本忠臣藏二冊　露光作　芳員畫
圭水櫻實緣白絲四冊　春馬作　國綱畫
教訓有喜世目鏡六冊　應賀作　英泉畫
三子纖神百迄語十二冊　三馬作
染模樣秋廼七種初篇二篇　五柳作　國貞畫
倭國字西洋文庫自初篇至三篇　魯文作　芳虎畫
櫓太皷鳴音吉原自初篇至三篇　言彥作　國貞畫
旅硯富士見西行　應賀作
菖蒲太刀對俠客自初篇至三篇　言彥作　國貞畫

月見花名書一軸 自初篇至四篇　梅彦作　國貞畫
雨面織花田物語 自初篇至五篇　種彦作　芳幾畫
拍掌奇談品玉匣六冊　半俗退士作　英泉畫
新增補西國奇談 自六篇至廿篇　春水作　國貞 芳虎畫
瀬川 玉敎 情花廓文章　仙果作　國貞畫
上總 木綿 小紋乃單地　諺藏作　國輝畫
復讐道中雙六四冊　種員作　豐國畫
娘評判善惡鏡 自初篇至三篇　其水案 諺藏篇　國貞畫
緣組大福帳四冊　應賀作　豐國畫
踊形容花競　種清作　同上
增補枯樹花　佳香作　英泉畫
まさる商十二篇　小三馬　豐國畫

草雙紙書目終

笑話書目

例言

一本書收錄する處の書目四百七十五種、之を元和より慶應の末年まで二百四十餘年間の星霜に比較して、其數の頗る尠少なるを覺ゆ、蓋し書目に漏れしもの多きに由るなるべし。

一茶番並に三題話に屬する著書をも、併せて茲に收錄せしは、其系統、笑話に關聯するを以てなり。

一幸田露伴君は所藏の笑話書目錄を寄せられ、編者に至大の便益を與へられたり、特に同君の厚意を深謝す。

明治三十九年二月下浣

大久保葩雪識

笑話書目

大久保葩雪編

元和九癸亥年

書目

醒睡笑　八　安樂庵策傳作

所載の笑話三百〇六則。

萬治元年再板す、一說に寛永板もありと云ふ。

作者安樂庵策傳は京都誓願寺の塔中竹林院の僧侶にして、足利氏の末世より德川氏の初期に及ぶまで長壽を保ち、晩年安樂庵を營みて此所に住し、淸閑老を養ひ、天性嗜む所の茶事のかたはら、諸謔を談じて訪人を笑はし、快樂に歲月を送りし淸僧なりといへり、寛永十九年正月四日示寂す享年八十九歲なり。

寛永十三丙子年

書目

昨日波今日の物語（笑話百五十四則）　二

出板の年月詳ならねど活字本の古板ありといふ。

萬治元戊戌年

書目

醒睡笑　八　安樂庵策傳作

元和九年の再板なり。

寛文元辛丑年（萬治四年改元）

書目

私加多咄　三　中川喜雲作

寛文九己酉年

書目

目覺草高わらひ　一

寛文十一辛亥年
書目
給入しか多ばなし　四　中川喜雲作　菱川師宣畫

寛文十二壬子年
書目
狂歌咄つれ〴〵草　三
一休關東咄

延寶三甲卯年
書目
秋夜の友　五

延寶八庚申年
書目

囃物語　三　幸佐集

元祿三庚午年
書目
枝珊瑚珠　五　石川流宣畫
鹿之子餅　三

元祿四辛未年
書目
御存じのかる口露がはなし　五　露の五郎兵衞作

元祿五壬申年
書目
鹿の卷筆　五　鹿野武左衞門作
元祿三年作歟。

元祿七甲戌年

書目

正直噺大鑑　五　石川流宣作　菱川師宣畫

輕口をとこ　五

元祿十四辛巳年

書目

露の五郎兵衛新ばなし　笑話十五則　一　露の五郎兵衛作

本書は京寺町通り松原上ル町菱屋治兵衛開板なるが、寶永五年大阪象牙屋よりも同名の書出板あり。

輕口ばなし

寶永二乙酉年

書目

輕口あられ酒　五

寶永三丙戌年

書目

御前なぞ判じ物　二

寶永四丁亥年

書目

露休置土産　五

寶永五戊子年

書目

露の五郎兵衛新ばなし　露の五郎兵衛作

本書の板元は大坂平野町象牙屋三郎兵衛なり、元祿十四年京の菱屋板にて同名の書出たれば、其求板再摺にや、或は別本なるや疑はし。

寶永六己丑年

書目

かぞいろ頓作　五　東の頓作

正德元辛卯年（寶永八年改元）

書　目

當世輕口七福神　五

正德二壬辰年

書　目

露休はなし　五

享保元丙申年（正德六年改元）

書　目

輕口福藏主　五

享保五庚子年

書　目

笑々舞　三

享保十三戊申年

書　目

うたひ判じ物　一

黴雨の梅　一

元文五庚申年

書　目

輕口新年袋

寛保元辛酉年（元文六年改元）

書　目

輕口新歳袋　五

元文五年の『新年袋』なるべし、出板の年孰れが是なるや。

寶曆元辛未年（寛延四年改元）

書目

譯準開口新語　一　岡白駒作

明和七庚寅年

書目

波奈志笑話三十六則　一

安永元壬辰年（明和九年改元）

書目

鹿之子餅笑話五十六則　一　山風作

後編『譚嚢』本年出板あり。

珍話樂牽頭六十九則　一　稲穗案作

譚嚢　一　馬場雲壺作

本年出板『鹿之子餅』の後編なり。

安永二癸巳年

書目

俗談今年ばなし笑話四十九則　一　南蛙坊作

今年咄附録口拍子五則　一　同上

御伽艸溜咄三十七則　一　城戸樂丸作

俗談口べうし六十五則　一　輕口耳扱作　勝川春章畵

はなし雀　二　能樂齋作

千里の翅　一　同上

再來餅六十則　一　江岳庵作

安永三甲午年

書目

輕口五色紙　三　百尺亭竿頭作

嘶稚獅子七十四則　一　千三萬八郎作

安永四乙未年

書目

新落ばなし一のもり五十五則　一　來風山人作

出板年次不明『茶の子餅』の後編なり。

風流はなし龜　二　富川吟雪畫
風流はなし鳥　二　同　上
春遊機嫌袋十則　二　戀川春町作　自　畫
序文中に「詩歌に六義あり……落し咄にまた是あり、昔々躰、化物躰、馬鹿聟躰、行過躰、仕形躰、下懸躰いわゆる此たぐゐなり云々。

安永五丙申年

書　目

書集津盛噺十四則　二　鳥居清經畫
夜明茶呑咄十八則　二　同　上
初音草大鑑　五　寓言子作
元祿の再板歟。
年忘噺角力　五　對山作
立春噺大集　五　後素軒蘭庭作
高わらひ　一　陳奮翰作
一の富　一　見德齋作

安永六丁酉年

書　目

時勢咄大全　五　橘香亭吾瓶作
新咄買言葉　二
新咄雨夜友　二

安永七戊戌年

書　目

新板落咄梅の笑顏　二
笑顏福の門　五　其磧作
春笑一刻　一　千金子作
千金子は四方山人なりと同翁の手記中に見えたり。

安永八己亥年

書　目

壽々葉羅井五十八則　一　志丈作
鯛の味噌ず五十五則　一　新場老次作

心能春雨噺二十則　二　鳥居清經畫

安永九庚子年

書目

顛作時雨月　三　鳥居清長畫

口合噺目貫

笑話 御臍で茶　三　臍下逸人作　北尾政演畫

落噺 茶呑友達　三　北尾政美畫

初ばなし　一　魚京作

初登り

天明元辛丑年（安永十年改元）

書目

落噺し御望次第 御席料理十八則　一　日出亭作

おとしばなし 福壽盃三十一則　三　伊庭可笑作　北尾政美畫

いかのぼり　一

當世新話 初松魚三十七則　一　新場散人作

福壽草三十五則　一　松竹軒梅林作

天明二壬寅年

書目

初語の御伽　竹川治助 砂川悟齋作

落噺 福わらひ　四方山人作

落噺 玉手箱　四方山人作歟

春帖噺　一　必々舍馬宿作

語滿在　非徒話樂翁作

天明三癸卯年

書目

落噺 節季夜行　三　戀川春町作　自畫

寬政元年再板せし歟

新作 今年噺　三　市場通笑作　北尾政美畫

落噺 玉の春　二　伊庭可笑作

天明四甲辰年

書目

新作落咄笑上戸　二

天明五乙巳年

書目

落噺新米太鼓持　　北尾政美書

寛政元年改板再出せし歟。

天明六丙午年

書目

氣のくすり五十四則　一　朋誠堂喜三二作

柳巷訛言　一　喜三二作

後年『福わらひ』と改題再板す。

落噺笑男子　三　浮世伊之助作　北尾政美書

はなし鳥　古河三蝶作　自書

天明七丁未年

書目

新作落咄徳治傳　二

おとし噺　一　三陀羅法師作　泉有円書

天明八戊申年

書目

落咄下司の智惠　二　市場通笑作　北尾政美書

評判の俵三十二則　一　深川珍話序

寛政元己酉年（天明九年改元）

書目

談州樓雅莚咄し家大人自はなし賣二十一則　一　談州樓撰

百福茶大年噺　三

落咄御臍の煮花　二　莞津喜笑顔作　喜多川歌麿書

落話爐開噺口切　二　浮世伊之助作

落咄樽酒聞上手　二　　喜多川千代女書

落話新米牽頭持　二　清遊軒作　政美、柳郊、榮之、蘭徳、春朗、豐國、合書

天明五年板の書を改め再出せしものといふ。

落話 笑ひなんし　一　杉皐作　政美畫

落話 笑ふ門　一　清遊軒作　同上

右二本を合し『新米牽頭持』と名づけ北尾政美の畫作せしものとの說あり。

落咄 節季夜行　三　戀川春町作　自畫

天明三年の再板ならむ。

輕口 かたい噺　二　子龍畫

ふくら雀　雀躍堂百成作

福は門二十八則　一　虎溪山人作

寛政二庚戌年

書目

赤表先生 御伽噺四十三則　三　魯鈍齋作

御慶三笑三十二則　一　無銘作

寛政三辛亥年

書目

落噺 腹筋問答　二　內田新好作　北尾政美畫

落咄 笑の書拔　二

寛政四壬子年

書目

梅の魁　咸和亭鬼武作

寛政五癸丑年

書目

青樓育咄雀十八則　二　桃栗山人作　歌川豐國畫

花ゑくぼ　曲亭馬琴作

寛政六甲寅年

書目

滑稽即興噺　五　山東京傳作歟

寛政七乙卯年

書目

落噺和賀笑美壽
落噺百囀　一
笑の種蒔　一　石部琴好作

寛政八丙辰年

書目

喜美談語　談州樓みます連作
卽答笑合　四　東都舍樂齋作
春の行邊　三　一雄作
落話風の神　二　十返舍一九作　自畫

寛政九丁巳年

書目

新板新作話の繪合三才智惠　二　櫻川慈悲成作　歌川豐國畫
落噺六義詞葉の花五十一則　一　烏亭焉馬撰
新話違なし　五　野暮天作　（烏羽繪風）
臍が茶　五　梅山作

寛政十戊午年

書目

無事志有意　一　烏亭焉馬判
天保十年『開卷百笑』と改題再刊す。
鶴の毛衣十四則　一　櫻川慈悲成作

寛政十一己未年

書目

戲聞鹽梅餘史　一　曲亭馬琴作
新製欣々雅話　五　欣々作
松魚風月　並木六兵衛作
意戲常談　一　正德鹿馬輔作
帆たて貝
腮の掛金二十二則　一　櫻川慈悲成作

寛政十二庚申年

書目

當世嘲捨彼傳九則　二　烏亭焉馬作　歌川豊國畫

兒智のはたけ十九則　一　櫻川慈悲成作

臍煮茶呑噺　二　永壽堂作　十返舍一九畫

一九代作にて自畫作なり。

享和元辛酉年（寛政十三年改元）

書目

落噺三番叟之福神詣　二　十返舍一九作　自畫

櫻川話帳綴　二　櫻川慈悲成作　歌川豊國畫

花間笑語　式亭三馬作

落噺笑嘉登二十三則　一　立川銀馬作　喜多川月麿畫

滑稽好二十則　一　櫻川慈悲成作

享和二壬戌年

書目

賣切申候切落話十七則　三　曲亭馬琴作　北尾重政畫

『六冊懸徳用草紙』の下段にあり。

一粒撰噺の種本十七則　三　櫻川慈悲成作　歌川豊廣畫

そこぬけ釜二十五則　一　鍬山人信普作

へそくり金　十返舍一九作

落噺水の行衛　一　蹄齋北馬作

新撰勸進話　五　百川堂灌河選

享和三癸亥年

書目

臍沸西遊話十六則　三　曲亭馬琴作　喜多川秀麿畫

はしか落話　穿山甲作

咄の開帳二十一則　一　蔦唐丸作

福山椒　萬藏庵龜人作

安政五年再板せし歟。

輕口噺二十則　一　櫻川慈悲成作

後年本書を抜萃し『今様ばなし』と題し出板せり。

文化元甲子年（享和四年改元）

書目

機嫌上戸噺の序開十一則　一　英屋一作述
甲子待鼠噺口豆飯二十則　一　櫻川慈悲成作
めでた物語　二　手柄岡持作
落噺年男笑種　一　紀尾佐丸作　葛飾北斎畫
彌次郎口十二則　一　十返舎一九作
　文化十三年再板せし歟。
東都眞衛　三笑亭可樂作
　文化六年『江戸前新話』と改題出板せり。
　又本書中より三則の笑話を抜摘し『初夢御枕紙』と
題し文政年中出板したり。
新板落噺御臍茶　橋本千鳥畫
落噺腰巾着十三則　一　十返舎一九作
繪本江戸錦　二　櫻川慈悲成作　歌川豐春畫
笑長者四十二則　一

文化二乙丑年

書目

しみのすみか物語　一　石川雅望作
かはびらこ　阿金堂一蒔作

曲亭馬琴の序あり。
落話叶福助　十返舎一九作

文化三丙寅年

書目

おとしばなしみになる金　一　千代春道作
振鷺亭噺日記　一　振鷺亭作
　文政六年晋米齋の序文を入れ再板す。
百なりばなし　一　瓢亭百成作
落話店開大安賣十五則　一　十返舎一九作
とらふくべ十八則　一　瓢亭百成作
正月もの十六則　一　花月齋雪雍作

文化四丁卯年

書目

口あけ咄の安賣　咸和亭鬼武作
通人田舎みち十一則　二　歌川國丸畫
新作口合はなし饅二十一則　二　十返舎一九作　勝川春亭畫

翌五年改題再刊せし歟。

落噺 瓢百集十七則　一　瓢亭百成作

文化五戊辰年

書目

江戸前はなし鰻　一　十返舎一九作　勝川春亭畫

去年出板の改題再出なるべし。

新板しかた噺 浪速土産　二

落話 恵方土産三則　一　感和亭鬼武作　喜多川美丸畫

落咄 春雨夜話　一　十返舎一九作　同　上

落噺 塵取談　一　千歳亭松武作　喜多川月麿畫

落噺 百千鳥　一　三笑亭可樂作　歌川國安畫

落噺 曲形瓢　一　瓢亭百成作

作□ 落し話　一　三笑亭可樂作　北鵞畫

文化六己巳年

書目

忠臣蔵 落噺 春慶物茶番狂言　三　竹塚東子作　歌川國滿畫

文化九年『豐のいろは』と改題再板す。

いさみにつき馬生類三句去六則　一　三笑亭可樂作

文化八辛未年

書目

茶番狂言 口切のせりふ　三　東里山人作　勝川春扇畫

妙伍天連津十七則　一　十返舎一九作

百の笑　一　十返舎一九判

文化九壬申年

書目

豐のいろは　三　竹塚東子作　歌川國安畫

文化六年板『春慶物茶番狂言』の書と外題を更ため再刊せしなり。

臍の宿替　五　桂文治作　淺山蘆國畫

文化十癸酉年

書目

願叶福助噺 六則　一
落話百生瓢 二十四則　一　瓢亭百成作
滑稽好 十則　一　櫻川慈悲成輯

享和元年にも此書名見ゆ、併し笑話の數に差違あり、恐らくは享和板の拔萃ならむ。

文化十一甲戌年

書目

花競璃寛噺　一　一九老人谷十九作　菅松峰畫
花競芝翫噺　二　同　上　同　上

右二本を合せて
二卷ばなし
と名づく、阪地の出板なり。

於臍綳茶番　四　十返舍一九作　喜多川式麿畫
富久喜多留　一　談語樓銀馬作

文政六年晋米齋玉粒之を再板す。

文化十二乙亥年

書目

おとぎぐさ春の壽　一　曲亭馬琴作

文化十三丙子年

書目

茶番狂言初子待　二　十返舍一九作　歌川國丸畫
落話穴手本通臣藏 十二則　二　烏亭焉馬作　同　上
新話輕口滑稽福笑　五　墨洲山人作
落咄彌次郎口　一　十返舍一九作

文化元年の再板なるべし。

文化十四丁丑年

書目

仕形ばなし屋津天御覽　三　十返舍一九作　歌川春亭畫
落噺機嫌上戶 一名屠蘇きげん　三　同　上　歌川國丸畫
屠蘇きげん 一名機嫌上戶　三　同　上　同　上

文政元戊寅年

書目

おとしばなし福ねずみ　一　十返舍一九作
落噺 咄の笑出し　一　同上
口取さかな　一　同上
疱瘡請合 輕口噺　一　同上

文政二己卯年

書目

笑の種 十七則　一　神亭阿波多作

文政三庚辰年

書目

商賣百物語 一癖話 三十六則　初篇　春日舍復古作　遙舟畫
一名 噺のみなと
落話 生鯖船　一　玉虹樓一泉作　柳川重信畫
「新のみなと 一名 商賣百物語 一癖話　一　春日舍復古作　遙舟畫

噺の藏入 二十五則　一　十返舍一九作
落噺 笑竹

文政四辛巳年

書目

仕形落語 工風智惠輪　一　東里山人作　勝川春好畫
天保二年『仕形ばなし』と外題を改め、手入れをなし再板す。
滑稽邯鄲枕　三　龜水軒浮木作
茶番早合點　初編　式亭三馬作　歌川國貞畫
第二編文政七年に出板す。

文政五壬午年

書目

新作 はなしのいけす　三　欣堂間人作　歌川國丸畫
浮世學者御伽噺　二　志滿山人作　歌川國信畫
春興噺萬歲 五十五則　二　桂文來作　三木探月畫

文政六癸未年

書目

小倉百首類題話　三　曉鐘成作　自畫

振鷺亭噺日記　晉米齋玉粒序作

文化三年板振鷺亭作の再刊なり。

江戸前新話　三笑亭可樂作

文化元年『東都眞衞』の改題再板なり。

富久喜多留　一　晉米齋玉粒作

文化十一年談語樓銀馬作の再板なり。

江戸自慢　一　三笑亭可樂作

輕口浮瓢簞六十三則　五　探花齋羅山作

文政七甲申年

書目

茶番早合點　二編　式亭三馬作　歌川國貞畫

初編は文政四年出板なり。

落話屠蘇喜言　一　櫻川慈悲成作

新作噺土産　一　旭久亭作

文政九丙戌年

書目

流行噺の安賣五十六則　三編　東里山人作

落噺腮の掛鎖　五　和來山人作

江戸嬉笑二十一則　一　福亭三笑作

嘉永三年再板せり。

升おとし七則　一　林屋正藏作

譯準笑話二百則　一　鵬齋作

文政元年の序あり、本年板は再板なるべし。

文政十丁亥年

書目

洒落の種本三十九則　二　粹野骨頂作　歌川廣重畫

文政十二己丑年

書目

譯解笑林廣記三百〇五則　二　一噱道人譯解
七福神落噺十一則　一　論幹堂主人作
開口新話◯の林　一　林屋正藏作

天保二辛卯年

書目

増笑話笑双紙　一　林屋正藏作　歌川貞秀畫
仕形ばなし　一　東里山人作　勝川春好畫

文政四年板『工風智恵輪』に筆を入れ、改題再板せしなり。

天保二年又之を再板せし歟。

新作笑話の林　一　林屋正藏作二世歌川豊國畫
十二支紫十五則　一　三笑亭可樂作
落咄大佛柱十九則　一　都蝶作

天保三壬辰年

書目

十二趣向當の俄寄話繪　一　磯間眞路作　歌川國芳畫

滑稽噺圖繪五十二則　四　豊時成作　菊麿畫

天保四癸巳年

書目

落噺笑富林　四　林屋正藏作　北尾重政 歌川貞秀畫
延命養談數　四　櫻川慈悲成作　歌川國貞畫

天保五甲午年

書目

落咄四季の園二十九則　二　林屋正藏作　歌川貞秀畫

一名『年中咄』

天保七年『年中行事』と改題再板す。

新作笑話百家撰　四　林屋正藏作　歌川貞秀畫
口上茶番早合點　一　五柳亭德升作

天保六乙未年

書目

茶番のいろは　二　柳亭種彦作　歌川貞秀畫

天保七丙申年

書目

落咄年中行事　四　林屋正藏作　歌川貞秀畫

天保五年板『四季の園』の改題再板なり。

噺本木像談語　土橋亭りう馬 林屋正藏合作　歌川貞秀畫

天保八丁酉年

書目

俳諧水滸宇加禮奇人集五十四則　二　青林堂錦八作

落噺仕立おろし二十七則　一　五返舍半九作

天保九戊戌年

書目

笠亭主人待受一會東海道中滑稽話　一　花山亭笑馬作

天保十己亥年

書目

明増而日出度咄四十六則　一　東里山人作

浪華土産新板一口咄　一　今井黍丸作

咄の寶ばへ　一　愛敬亭壽々女作　歌川芳虎畫

開卷百笑六十二則　二　談州樓焉馬評

一名『無事志有意』卽ち寛政十年の改題再板なり。

天保十一庚子年

書目

腷わらひ十則　一　柳橋庵鶯好作

天保十三壬寅年

書目

はなしさい見語用松五則　一　三笑亭可樂作

四季の見臺十一則　一　愛橋舍雅信作

新作神玉水四則　一　三笑亭可樂作

天保十四癸卯年

書目

新著一辨戯噺五十六則　一　鈍亭魯文作

天保新話會席噺袋　三　梅友軒秋六編

風流童書噺二十四則　一　彌生庵雛丸作

弘化元甲辰年（天保十五年改元）

書目

たとへ草咄大全九則　一　梅亭種春作　歌川貞房畫

新作古今秀句落噺十五則　一　一筆庵英壽作

はなし大全　一　柳下亭種員作　歌川國芳畫

弘化二乙巳年

書目

笑ます落こち話二十九則　一　一筆庵英壽作　自畫

縁取ばなし二十四則　一　鼻山人作　胡蝶園春升畫

仕形ばなし　一　東里山人作

天保二年の再板ならむ

落噺魁草紙　五　儘川成作

弘化三丙午年

書目

新作噺の大よせ七則　司馬龍生作　仲齋英松畫

年次不明、出板の「新作昔ばなし」と同本なり。

古今秀句噺十五則　一

床開端唄咄十七則　一　一筆庵英壽作　自畫

弘化四丁未年

書目

蜀山圖會狂歌噺八則　一

嘉永元戊申年（弘化五年改元）

書目

臍の茶わかし十七則　一　五返舎半九作

嘉永二己酉年

書目

落咄 一口茄子三十三則　一　歌川國盛畫

落咄 浪花土産　三

茶番落話　初編　梅亭金鵞作　歌川貞房畫

第二編嘉永五年出板す。

梅の笑顔

笑府 衿建米　二　曲亭馬琴作　北尾政美畫

寛政板の再刊なり。

嘉永六年にも三板を出したり。

嘉永三庚戌年

書目

落しばなし　一　梅亭金鵞作　歌川貞房畫

巻中には半九作とあり。

落噺 江戸嬉笑　一　二世福亭三笑作　歌川國輝畫

文政九年の再板なり。

放生會　一　東里山人作

嘉永四辛亥年

書目

俳諧發句一題噺十八則　二　空中樓花咲翁作歌川貞秀畫

鬼も笑福茶釜五則　初編　五明樓玉輔作　歌川芳宗畫

第二編翌五年出板す。

嘉永五壬子年

書目

鬼も笑福茶釜九則　二編　梅亭金鵞作　梅泉畫

初編は昨四年出板なり。

春の早わらひ十八則　一　柳雨亭作

茶番頓智論　一　愛染連輯

甘口ばなし　一　松琴亭傳舍作　一筆庵英壽畫

茶番落話　二編　梅亭金鵞作　梅泉畫

初編は嘉永二年出板なり。

嘉永六癸丑年

書　目

（庭蚊仕出）お茶のお肴　一　葉陀樓壽山作

（戯談）華ゑくぼ再板　一　感和亭鬼武作

（笑府）衿建米　二　曲亭馬琴作　北尾政美書

寛政板の三出なり。

安政元甲寅年（嘉永七年改元）

書　目

はなし茶番　一　無茶苦茶庵作

安政三丙辰年

書　目

笑の種蒔二十三則　一　金龍山人谷峨作

安政四丁巳年

書　目

三都寄合噺二十一則　二　鶴亭秀賀作　歌川芳虎畫

浮世ばなし十則　一　歌川芳藤作　自畫

聞童子

安政五戊午年

書　目

福山椒一口噺四十三則一　五足齋作

享和三年の再板なりといふ。

安政六己未年

書　目

二ノ口ばなし百則　一　笠亭仙果作

萬延元庚申年（安政七年改元）

書　目

口拍子二十則　一

文久二壬戌年

書目

流行麻疹輕口噺三十則　一　出古散人作

浪花咄　月亭翁作

文久三癸亥年

書目

粋興奇人傳二十六則　一　山々亭有人 假名垣魯文 輯　一蕙齋芳幾畫

今様三題噺九則　一　山々亭有人作　歌川芳盛畫

元治元甲子年（文久四年改元）

書目

春色三題話二十七則　初編　春の屋幾久撰

慶應二年に第二編出板す。

慶應元乙丑年（元治二年改元）

書目

扇開はなし新作二十八則　一　百花堂作

追善落語梅屋集　一　春廼屋幾久作

慶應二丙寅年

書目

春色三題噺　二編　春廼屋幾久輯

初編は元治元年出板せり。

二十八家の三題話を集錄せり。

年次不明

書目

御蔭參滑稽本振舞茶話聞書　一　笠亭仙果作

寫本のみにて出板せざるなるべし。

南國海奇鯨菩薩百ひろ建立　一

唐人通人のはなし

はなしたり水と魚二十則二　鳥居清經作　北尾政美畫　自畫

噺出洗濯こゝしや　一

新作三輿興人はおとし噺　一　文福社中作

茶番ものがたり　一　山岡山人作

大あたり噺の的　一　藤本常丸作

恒例落しばなし　二　北尾政演畫

十二趣向茶番噺　一　磯間眞路作　歌川國芳畫

唐人品川ばなし

輕口噺福おかし　五

輕口噺千代萬歲　五

輕口噺春ふくろ　五

かるくちばなし四十一則　五

最初に「碁を知らぬ人助言をいふ」笑話を載せしもの。

つれづれ御伽草二十三則一

さる人のはなし十則　一

一粒より一口噺四十八則一　林屋連中　歌川直政畫

新作落語無鹽諸美味　一

新話輕口滑稽福助話　五

市川團十郎評判圖會　一　壽亭とよ丸作

未の年板。

しかたばなし福だわら　一　十返舍一九作　勝川春亭畫

しんのはなし席壽賀書　一　山旭亭作

鳥渡一口御土產噺五十二則一　一生亭無事成作

鹿野武左衞門口傳咄

貞享板

雨夜のつれづれ三題噺　一　文福社著述

はなしのはきだめ春の駒　一　濱邊松風作

三題噺落し噺流醴上戶　二　中注軒作

はなしのほやほや自在餅　二

初音草咄大鑑

元祿板。

安永五年再板せし歟。

もらひゑくぼ

元祿板。

おとし噺初鰹二十九則三　富川吟雪作　自畫

安永板。
大寄噺の尻馬　三　桂文治、一九、立田上瓶等作　長谷川貞信書
天保板。
友だちばなし十八則　二　鳥居清經作　自畫
露休しかた咄
噺手本忠臣藏　振鷺亭作
滑稽榮花の夢　三
輕口噺耳通寶　五
開化一口談語
やぶにまぐは　三
落噺驛路馬士唄　初編二編　戀川春町作
安永板。
新咄我まゝ草紙　五
會本はまちどり　一　四方山人作
餅耳きらずぐち　孫店隅入作
繪本顔畫し落噺　一　曉鐘成作　浦川一船畫
新作落しばなし　一　三笑亭可樂作
新板落咄難波の梅二十則　鳥居清經畫

寶暦板。
おとしばなし山の笑二十二則
戌の年板。
はなしせり合初日待　二　北尾政演畫
おとしばなし流行畫　一　鼻山人作　歌川國盛畫
はなし大全二十五則　三
享保板。
青樓ばなし
安永板。
壽の字三獻
寛政板。
笑倍新問屋
寛政板。
初夢御枕紙三則　一　三笑亭可樂作
文政板。
文化元年板『東都眞衛』の拔萃物なり。
今樣ばなし五則　一　櫻川慈悲成作
享和三年板『輕口噺』の拔萃物なり。

江戸すゞめ九則　一
豐年俵百噺十八則　二　鳥居清經作　自畫
申の人眞似九則　一
再咲一宵談四則　一　曲亭馬琴作
　再板物なり。
はなし物語五十六則　三
輕口春の山四十六則　五
當世はなし二十則　二　鳥居清經作
さしまくら　一　蛸壺庵作
　『飛談語』の二編なり。
違ひない中（一名噺的中）　一
落しばなし　一
　文屋の仲丸の替あるもの。
はなしの種　一　北尾三次郎畫
繪本噺山科　二　田鶴丸作
繪本御伽種　祐代畫
うぐひす笛　一　蜀山人序
一雅話三笑　一　感和亭鬼武作
往古噺の魁　自初編至三編　曉鐘成作
輕口居合刀　五　松壽堂作

輕口春の遊　五
輕口筆彥噺　五
輕口大矢數　五
輕口利益噺　五
輕口曲手鞠　四
惠方の春駒　一
茶番趣向帳　一
あてこすり　一
頓作萬八噺
按古於當世　五　南華坊作
　寫本にて刊本の存否詳ならず。
落噺錦の敷初　一
　寛政板。
落噺木の葉猿　一　櫻川慈悲成作　歌川豐廣畫
　寛政板欤。
新作昔ばなし　一　司馬龍生作　仲齋英松畫
　弘化三年板『新作噺の大よせ』と同本なり。
笑門瓢の百成　一　多滿人作

落板新話太郎花　二　山東京傳作　北尾政美畫
　寛政板。
新作落語室の梅　一
音曲芝居はなし　一
新板落咄福來樽　二
おとしばなし福相　一
　寛政板。
聞き上手　一　小松屋百龜作
　落し噺小冊の最初の物なりと云ふ。
五志記咄赤黄の部　二
　元祿板。
うかれ話
　元祿板。
十千萬兩
　明和板。
茶の子餅　一　唐邊僕作
　安永板。
　後編『一のもり』は安永四年出板なり。

噺の入船　一
　寛政板。
龜水輕口
　文政板。
落ばなし　一　烏丸千子作　櫻舟畫
　子の年板。
　最初に「初夢」といふ笑話を載せしもの。
如是我聞七十四則　一　觀益道人作
船頭新話　一
　寫本のみにて刊本の存否詳ならず。
譃隙餘言　一　放蕩居士作
　寫本のみにて刊本の存否詳ならず
新ばなし　二　北尾政演作　自畫
　最初に「もぐらもち」の笑話を載せあるもの。
獨樂新話二十八則　一　虎溪山人作
福わらひ　一
　天明六年板『柳巷訛言』の改題再板なり。
噺の親玉　一　櫻川慈悲成作　歌川豐廣畫
一口饅頭　一　同　上
種がしま　一　三笑亭可樂作

話の山々　一　光齋作
輕口初笑　五　松泉編
輕口笑袋　五
福わかし　一
笑の書拔　一
山の笑顏　一
駿河茄子　一
豆はたけ　一
豆だらけ　一
戀の苧環　三　好亭主人作
笑府衿建米　二　曲亭馬琴作　北尾政美畫
　寬政板。
　嘉永二年に再板し同六年に三板を出せり。
諧作百の種　一　三笑亭可樂作
落噺熟煮柿　一　十返舍一九作
落噺白夫婦　一　並木舟治作　松林齋秀麿畫
鬼外福助噺　一　邑二作
嘉笑可喜征　一
話噺聞上手六十四則　一

御前男
　元祿板歟。
咄角力
　安永板。
噺大集
　安永板。
太郎月二十三則　旭間薬行作
　寬政板。
談奈志　一　青山白峯作
　寬政板。
寄合噺
　弘化板。
腹筋集十七則　一
落し咄　一　林屋正藏作
　最初に「三番叟」の笑話を載せあるもの。
無題號
　最初に「松竹の話」を載せあるもの。
無題號
　最初に「江戶見物」の笑話を掲げあるもの。

無題號　一　櫻川慈悲成作
「きが樂のつらね」を掲げあるもの。
飛談語　一
二編を「さしまくら」と名づく。
噺的中 一名違ひない中　一
梅の笑　一　村飄子作
曲亭馬琴の著作なりとの說あり。
鬥雅話　一　振鷺亭作
春可勢　一　文机亭作
口まめ　都樂作
春の時　北尾政演畫
はなし　一　山旭亭作
梅屋舖
福の笑
笑顏始　一
豆談語　一
春の色　一
惠方棚
噺献立
臍が茶
蝶夫婦
笑布袋
鳥の町
年の市　一
著聞通
呵之通　一
扇の的　三

笑話書目終

洒落本目錄

緒言

德川時代の俗文學は、天和、貞享に萠芽を發して元祿に至り浪華に榮えしもの、正德の末年より享保、元文、寬保、延享乃至寬延を通じて、寶曆に至るの間、其中樞は全く京都に移りて、俗文學の覇權は洛地作者の掌裡に歸し居り、其盛華を文壇に飾りて其榮譽を獨占し居りぬ。

之に反して、江戶の俗文學なるものは、僅に赤本及び黑本の如き、兒童の玩具に過ぎざりし繪草子のみにて、極めて幼稚の時代なりしが、何時までか斯くてあるべき、寶曆の末年には具體的の戲作も顯れ、明和には稍々其數を加へ、安永に至り愈々發達し、一方黑本の進步せし物所謂靑本と相合し、江戶文學の基礎を鞏固ならしむると同時に、德川俗文學の覇權を江戶に收め得るに至れり、斯かる因緣と功蹟とを有する戲作とは何ぞ、靑本の共同提擊者たりし著作とは何ぞ、是卽ち「洒落本」其ものなり。

然るに世俗の弊として、洒落本は、娼婦遊客の嬌態痴態を活寫する物として、士君子間に遠ざけられ、徒らに覆醬の故紙となり了りし傾向なりしが、近年に至り靑本と共に其名譽を恢復せられ、俗文學中錚々たる聲名を今日の文壇に高むるに至りしは、洒落本の爲め大に慶すべきの事なりとす。

洒落本の由來槪略斯くの如し、而して其變遷に就ては、其內容の多方面なると共に、數十百言に之を悉くすを難し、されど其大槩に就て一言せば、洒落本の初期は、目的を遊里花街にのみ懷きしものに非ずして、文章に重きをおきしが如し、漢文體の戲文になりし作等は蓋し其一なり。

又た諷刺を目的とせしものあり、卽ち當時の風俗を主として、警世的に嘲罵の筆を弄び、時弊を喝破するものにして、風來山人、四方山人等の一派は之に屬せり。

次には場所を花街遊里に擇ぶとするも、其主趣はこれに非ずして、其人物の言語動作を描し、當時の人

情を穿つに汲々たりし一派にして、強て其例を擧れば「遊子方言」等は寧ろ此類なるべし。

然るに安永末年より天明、寛政と年を經るに從ひ、硬骨なる筆鋒は、漸次軟化し初め、材の何たるを問はず、たゞ滑稽洒落に筆を弄する物と、一方には花柳界裡に深入し、所謂其通を振廻さむが爲めに、不知不識の間、筆を痴態に染め、諸譯手管の競爭を試むるものとの二派に別れ、此兩派互に逆行して遂には洒落本の舞臺にては、其活躍に狹隘不便を感ずる所より、甲者は領地を中本界卽ち滑稽本に開拓し、また軟派連は人情本てふ新地を領土として、互に其健筆を誇りしものゝ如し。

要するに、明治今日の文學なるものも、明治の特產物に非ずして、文學の系統を推究すれば、其淵源は實に是等洒落本靑本乃至讀本等に胚胎し、其進化せしものと、泰西の文華と結緣して、玆に大成したるものにして、これに異論なしとせば、文學史上に、將た文明史上に、是等の作を硏究するは、文學者が當に盡すべき義務なるべしと確信す。

今洒落本目錄を編するに際し、蛇足を顧みず、聊か所思を述ぶと云爾。

明治三十九年三月

大久保葩雪識

洒落本目録

例言

一此洒落本目録は、廣き範圍に於て蒐集し、蒟蒻本と稱する種類は、悉く網羅せるも、見聞の及ばざるものにして、漏れたるもあるべし。

一其内容に於ては、中本、人情本又は笑話に屬すべきものと雖も、普通洒落本と稱せらるゝ物は、また本書目にも之を收錄したり、但し狂詩に屬する物の多くは之を採らず。

一今書目に收錄する所の洒落本は其數五百種、而して遊里に關する物は、約三分の二を占むべし。

一此洒落本目錄は、幸田露伴君の藏書に據る所多し深く同君の厚意を謝す。

編者識

洒落本目錄

大久保葩編

享保十三戊申年

書目

艶詞兩巴巵言　一　撃鉦先生作

寶曆七丁丑年

書目

聖遊廓　一　可亭作

後年「雪月花」と改題再板せしと云ふ。

第二篇「列仙傳」寶曆十三年出板せり。

北州 異素六帖　二　光々道人作

澤田東江の作なり。

新月花餘情　一

寶曆八戊寅年

書目

永月無物語　一

三國獨合點　一　藩嶽散人作

寶曆十三癸未年

書目

列仙傳　一　可亭作

寶曆七年板「聖遊廓」の第二編なり。

明和三丙戌年

書目

飛だ噂の評　一　風來山人作

花前詞　一

明和四丁亥年

書目
春遊興　一　僧大我作

明和五戊子年

書目
自惚先生夜話　一　本田嘘作
痿陰隱逸傳　一　風來山人作
閑居放言　一　玩世道人作

明和六己丑年

書目
百人一首見立三十六歌仙風流娘　一
當時市中の名妓茶屋女等の評判記にて、笠森お仙を卷頭に出し、大極上々吉の位附を與へたり。
賣飴土平傳　一　舳羅山人作　鈴木春信畫
四方山人の作なり。
あづまの華　三
娘評判記なり。

開帳合早粹　一　史魯德應作
あつめもの　一
郭中奇譚　一　淡海三麿作　岷江畫
一書に曰岡先生著とあり。
後年外題を「船窓笑語」と改め再板せりといふ。
明和伎鑑　一　淡海三麿作
此書絕板となり、作者栗本兵庫の手代主人に代り遠島の刑に處せられしと云ふ。

明和七庚寅年

書目
蕩子筌枉解　一　茶釜散人作
辰巳の園　一　深川參人作
安永二年再板す。

明和八辛卯年

書目
俠者方言　一

安永元壬辰年（明和九年改元）

書目

無益頻禁抄　一　阿宇齋作

安永二癸巳年

書目

當世風俗通　一　金錦作

戀川春町の作なり。

安永四年後編「安風俗通」出板す。

當世氣轉草　一　金金先生作

當世作之種　一　兵百作

南閨雜話　一　夢中散人作

藪さがし　初編　藪井竹齋作

作者は森羅亭萬象なるべし。

天明六年第二編を出せり。

辰巳の園　一　夢中散人作

明和七年の再板なり。

鸚鵡盃　一　田[illegible]夢中作

文政五年石橋庵眞醉「假口鸚鵡返」を作り後編として出板せり。

安永三甲午年

書目

吉原細見里の苧環評　一　風來山人作

遊君花すまひ（一名目千本）　二

昔語花咲男放屁論　風來山人作　飯塚春武畫

安永六年後編出板す。

婦美車紫鹿子　一　道良吉先生作

後年再板す。

掃溜青樓占　一　金里羅山人作

一目千本（一名遊君花すまひ）　二

投扇興　一　擧闇作

安永四乙未年

書目

東都青樓八詠並略記　一　懶臥散人作
當世故事附選怪興　一　眞赤堂大嘘作
寸南破良意　一　南鐐堂一片作
放蕩虛誕傳　一　變手古山人作
不仁野夫鑑　一　東湖山人作　歌麿畫
四方山人の作なり。
甲驛新話　一　風鈴山人作
四方山人の作なり。
女風俗通　一　戀川春町作
安永二年板『當世風俗通』の後編なり。
樂女好子　一　雲中舍山蝶作
青樓樂種　一

安永五丙申年

書目

天狗髑髏鑒定緣起　一　風來山人作
明和七年の作今年出板す。
當話問答聞きはつり　一　無智庵作
當世爰かしこ　一　京傳作
當世さようさ　一　新吾三作
風俗問答　一　劉道醉作
力婦傳　一　風來山人作
豔歌選　一　烏有子作

安永六丁酉年

書目

青樓名娼圖會（一名娼妃地理記）　一　道蛇樓麻阿作
朋誠堂喜三二作なり。
三十番優頭合　一
放屁論後編　一　風來山人作　春武畫
前編は安永三年板なり。
役者穿鑿論　一
絕板物なり。
娼妃地理記（一名青樓名娼圖會）　一　道蛇樓麻阿作
櫻川御女傳
今おせん傳
商人繁榮門　二
山下雜談

北極穴知鳥　一　松壽軒東朝作
中洲雀　一　道樂散人作
大通傳　一　高慢齋作
功慶子　一　戀川春町作
杜撰商　一　同　上

安永七戊戌年

書目

當風ものは朝商　一　拍采舍作
十八大通百手枕 一名傾城買指南所　一　田螺金魚作
廣街一寸間遊　一　献笑軒作
當話問答之卷　一　道樂山人作
傾城買虎之卷 一名當世虎之卷　一　田螺金魚作
淫女皮肉論　一　同　上
大通祕密論　一　夢中庵作
妓者呼子鳥　一　田螺金魚作
當世虎之卷 一名傾城買虎之卷　一　同　上
胡蝶の夢　一　犬莊子作
南江驛話　一　北左農山人作

一事千金　一　田にし金魚作
遊里名所　一

安永八己亥年

書目

鮫不食兒訓曾我　一　烏亭焉馬作
吉原花の姿色名寄　一　柿本臍丸作
伊賀越増補合羽の籠　一　蓬萊山人歸橋作
家暮長命四季物語　一　蓬萊山人作
無頼通說法　一　戀川春町作
廻覧奇談深淵情　一　楓某作
大抵御覧　一　朱樂菅江作
百安楚飛　一　時雨庵作
深川新話　一　千里亭作
龍虎問答　一　蓬萊山人作
偏屁子邊　一
雜文穿袋　一　似山先生作　重政畫
　朱樂菅江作なり。
女鬼産　一　無氣しつちう作

安永九庚子年

書目

仙術金のなる木	一	
貧事先生多佳餘字辭	一	不埒散人作
當世假山氣登里	一	上戸庵辭人作
玉菊燈籠辨	一	南陀迦紫蘭作
美地の蠣殼	一	蓬萊山人作
風來六部集	二	二世風來山人序
風俗砂拂傳	一	隨松子作
遊婦里會談	一	蓬萊山人作
色陣指南所	一	よし田錦江作
初ばなし	一	魚京作
芳深交話	一	穴好作
多荷論	一	田にし金魚作
青樓占	一	金平山人作
初登	一	

天明元辛丑年（安永十年改元）

書目

傾城異見之規矩	一	呉綾軒作
にやんの事だ	一	止動堂馬呑作
通仁枕言葉	一	蓬萊山人作
通人三國師	一	夢中樂介作
契情極秘卷	一	無茶坊作
紳かがみ	一	眞顔作
通黠興	一	花街作
眞女意題	一	天竺老人作

天明二壬寅年

書目

世話双紙歌舞妓の華	一	客楊菴作
世界の幕なし	一	本膳亭坪平作
白髮變內變的論	一	混自笑作
古今三通傳	一	夢中庵作
魂膽手引草	一	青木氏作
富賀川拜見	一	蓬萊山人作

通人の寐言 — 桃栗山人作
起原情語 — 行過作
ゑせ物語 — 止動堂馬呑作
當世導通記 — 天竺老人作

天明三癸卯年

書目

古今無三人連 — 戻釜散人作
契情手管智恵鑑 — 雲樂山人作　歌麿畫
愚人贅漢居續借金 — 蓬萊山人作
遊君雅言柳巷訛言 — 知久良作
金錦三調傳 — 早田五猿作
辞都洒美撰 — 志水燕十作
大通紀山寺 — 南発羅法師作
南國しをり — 丹波助之丞作
通神孔釈三教色 — 唐來三和作　歌麿畫
飛花落葉 — 四方山人集
卵地臭意 — 鐘木庵主人作
通扇興 —

天明四甲辰年

書目

二日醉大人觴 — 萬象亭作　政演畫
李不盡通詩選 — 四方山人作
浮世の四つ時 — 南陀迦紫蘭作
狂訓彙軌本紀 — 島田金谷作
甲驛妓談角雞卵 — 自亭可笑作
太平樂記 — 桃栗山人作
富岡大論 — 萬象亭作
殘座訓 — 鈍九齋章丸作
小紋裁 — 山東京傳作

天明六年後編「小紋新法」出板す。

天明五乙巳年

書目

野島通夜物語 — 茶樂山人作
無駄酸辛甘 — 千差萬別作

和唐珍解　一　唐來三和作
令子洞房　一　山東京傳作　政演畫
現金論　一　百馬作

天明六丙午年

書目

入込浴室情流理　一　山東京傳作
俗に「油揚本」と稱する形の本なり。
當世雛形小紋新法　一　山東京傳作　政演畫
天明四年「小紋裁」の後編なり。
天保六年再板す。
無彈善南子　一　多羅福孫左衛門作
客衆肝膽鏡　一　山東京傳作
籔さがし　二編　籔井竹齋作
初編は安永二年出板なり。
寒暖寐言　一　呂佶作　百喜畫
内所圖會　一　小金厚丸作
指面草　一　山東京傳作

天明七丁未年

書目

百人一首馬鹿講釋始衣抄　一　山東京傳作　自畫
通詩選諺解　一　四方山人作
福神粹語錄　一　萬象亭作
妓者虎之卷　一　田螺金魚作
安永七年の再板なり。
古契三娼　一　山東京傳作
通言總籬　一　同　上　鷄告畫
田舍芝居　一　萬象亭作
本書の序文によれば山東京傳怒て作者萬象亭と絶交せりと云ふ。
猫謝羅子　一　正德鹿馬輔作　子興畫
曲亭馬琴の作なり、されど馬琴崇拜家は多く之を否認せり。
不賓錄　一　島田金谷作

天明八戊申年

書目

一向不通善菩運　　一　甘露庵蜂滿作
女郎買糠味噌汁　　一　赤蜻蛉作
虛實情の夜櫻　　一　梅松亭庭鷲作
傾城優曾我　　一　瀨川如皐作
夜半の茶漬　　一　山東鷄告 山東唐洲 作
青樓五雁金　　一　梅月堂梶人作
寛政二年後編「染拔五所紋」出板す。
吉原楊枝　　一　山東京傳作　自畫
曾我糠袋　　一　山東唐洲作
一目土堤　　一　內田新好作
傾城觿　　一　山東京傳作　自畫
鴫通力　　一　內田新好作
別の鐘　　一　梅松亭庭鷲作

寛政元己酉年（天明九年改元）

書目

驛路風俗廻り床浦久羅　　一　山手山人作
中洲の華美　　一　內田新好作
見た京物語　　一　二鍾亭作

通氣粹語傳　　一　山東京傳作
南極驛路雀　　一　逸我作
廓の大帳　　一　山東京傳作
新造圖彙　　一　同　上
ふくら雀　　一　雀躍堂百成作
自惚鏡　　一　振鷺亭作
假根擇　　一　鳶鳥堂作

寛政二庚戌年

書目

五雁金後編 染拔五所紋　　一　梅月堂梶人作
前編『青樓五雁金』は天明八年出板なり。
傾城買四十八手　　一　山東京傳作　政演畫
大通間語補　　一　篗浦錦成作
美止女南話　　一　七珍萬寶作
洞房妓談 [illegible]干話　　一　山東京傳作　政演畫
京傳餘誌　　一　同　上　同　上
格子戲語　　一　振鷺亭作
田舍談義　　一　竹の下の翁作　政演畫

竹塚東子の作なり。

學通三客　一　秋收冬藏作　自畫

　內田新好の作なり。

辰巳之園　一　夢中散人作

　安永二年の第三板なり。

文選臥座　一　狂爾、湖舟、谷峨合作

小紋雅話　一　山東京傳作

風俗通　一　松風亭如琴作

寛政三辛亥年

書目

意學丸呑傾城眞之心　一

青樓晝の世界錦の裏　一　山東京傳作　自畫

　絕板物。

大磯風俗仕懸文庫　一　山東京傳作　自畫

　絕板物。

手段詰物娼妓絹籭　一　山東京傳作

南品傀儡　一　青海舍主人作

肉道秘鍵　一　品動堂馬乘作

○山東京傳本年著作の洒落本に就て處罰せらる、事は『增補青本年表』寛政三年の項、雜記の條下に記せり、參照せらるべし。

寛政五癸丑年

書目

合刻兩都妓品　一　游戲主人作

『史林殘花』『兩巴巵言』を合刻したるものにて、享保板の改刻なりといひ、多少考證を要するものなるべし。

三國傳來鑾瓜穴甕 一名秘事傳授囊　一　振鷺亭作

客人女郎取組手鑑　一　同上

秘事傳授囊 一名鑾瓜穴甕　一　同上

附會倡賣往來　一　十返舍一九作

寛政六甲寅年

書目

北華通情　一　花丸作

ひろふ神　一

山東京傳及び本膳亭坪平の戲章を輯錄せしものなり。

寛政八丙辰年

書目

錦鷄帳　一　正月堂作

寛政九丁巳年

書目

三絃一致うかれ草紙　一　莊鹿作

廓通遊子　一　青松亭藍江作　國政畫

寛政十戊午年

書目

當變木眼倉八卦　一　十返舍一九作

傾城買二筋道　一　梅暮里谷峨作　雪華畫

後編「廓の癖」翌十一年出板す。

石場妓談辰巳婦言　一　式亭三馬作　歌麿畫

此書絶板となりしが文化年間に再板す。

後編『船頭深話』其後出板す。

怪談愁草　一　內田新好作

寛政十一己未年

書目

傾城買猫の卷　一　遊里山人作

灘泉遊子仲街艷談　一　三多樓作

青樓夜世界闇明月　一　小金厚丸作

後編二筋道廓の癖　一　谷峨作　雪華畫

第三編「宵の程」翌十二年出板す。

傾城買談客物語　一　式亭三馬作　根岸山人圖

手管早引廓節用　一　樂山人馬笑作

式亭三馬補正とあり。

鹽糅餘史　一　曲亭馬琴作

品川楊枝　一　天狗山人作

百千鳥　一　泉花堂三蝶作

寛政十二庚申年

書目

青樓夜話 鄽數可佳妓　一　成三樓鳳雨作　厚丸畫
二筋道三編 宵の程　一　梅暮里谷峨作
青樓眞廓誌　一　やはし雲亭序
大磯新話 風俗通　一　松風亭主人作
松登妓話　一　豐年貢作
大通契語　一　鈴々成作
南門鼠　一　鹽屋主人作
通俗子　一　昌平庵渡橋作
白狐通　一　梅暮里谷峨作

享和元辛酉年（寛政十三年改元）

書目

一名曰 遊僊窟煙の花 抔鐙去　二　薄倖先生作
再板なり中本形二冊物とす。

傾城買甲子夜話　一　梅暮里谷峨作
後編『婬意怩思』翌二年出板す。
傾城買中夢盜汗　一　谷峨作
後編『妓情返夢解』翌二年出板す。
上橋妓談 喜和美多里　一　擔柴樵夫作
契情買言告鳥　一　谷峨作
後編『廓の櫻』も本年出板す。
言告鳥後編 廓の櫻　一　谷峨作
前編と共に本年出板す。
惠比良の梅　一　十返舍一九作
野良の玉子　一　同　上　榮水畫
後年中本形となし再板す。
青樓夜話 色講釋　一　十返舍一九作
假廓南洿 比翼紫　一　宇田樂庵作
仕懸莫幕 仇手本　一　小金あつ丸作
後編『通神藏』翌二年出板す。
月雪二蒲團　一　醉醉水吉作
匂囊　一　鹽屋艶二作
後編『香ひ袋』翌二年出板す。

享和二壬戌年

書目

傾客眞話傳授之卷 廓意氣地　一　十返舍一九作　長喜書

甲子夜話後編 粹意忖思　一　梅暮里谷峨作　長喜書

前編は享和元年出板なり。

夢藿下後編 婦情?返夢解　一　梅暮里谷峨作　長喜書

前編は享和元年出板なり。

祇園祭挑燈庫　一　蘭奢亭作

青樓娼謎 狐窓道人　一　十返舍一九作

角子本後編 通神藏　一　小金あつ丸作

前編は享和元年出板なり。

起承轉合後編 遊冶郎　一　十返舍一九作　自書

前編は同じく本年出板なり。

後編包ひ袋　一　鹽屋艶二作

前編は享和元年出板なり。

魂膽胡蝶枕　一　著々樂齋作　北溪書

嫖客三讀志　一　鹽屋艶二作　同上

傾客廢學問　一　十返舍一九作　自書

青樓松之裡　一　同上　同上

青樓小鍋立　一　成三樓作　子興書

青樓娼言解　一　蘭奢亭作　長喜書

青樓 素見數子　一　十返舍一九作　自書

廓中夜興 商内神　一　同上　同上

手管早寫 獨稽古　一　富久亭三笑作

狂言雜話 五大力　一　鹽屋艶二作　北溪書

通氣多志 婦足鑑　一　成三樓作　子興書

直に絶板せらる。

文政三年再板す。

其後『雪の梅』と改題三たび出板す。

起承轉合　一　十返舍一九作　自書

後編『遊冶郎』も本年出板す。

吉原談語　一　十返舍一九作　自書

後編『夜廓行燈』も其後出板す。

青樓日記　一　白陽東魚作

南門鼠歸　一　鹽屋艶二作

夜廓行燈　一　桃猿舍犬雉作

本年出板『吉原談語』の後編なるが、本年出板といひ、または文化年間の開板といひ、或は文化年間に再板せしともいひて詳ならず、但し作者は十返

舍一九なること疑ひなし。

享和三癸亥年

書目

滑稽素人芝居　一　櫻川慈悲成作　豐國畫
火事用心集　一
痲疹戲言　一　式亭三馬作
遊子語言　一
奇妙圖彙　一　山東京傳作　自畫

文化元甲子年（享和四年改元）

書目

傾城買花角力　一　匊黄舍雲裡作　自畫
教訓相撲取草　一　一竹齋作
辰巳世界　一　東來山人作
東都眞衞　一　三笑亭可樂作
白狐傳　一　鹽屋艶二作　北溪畫
酌縁起　一

文化二乙丑年

書目

叶福助略縁記　一　振鷺亭作

文化三丙寅年

書目

見通鄙戲場　一　柳陽舍蘭鷄作
即興跡引上戸　一　十返舍一九作　自畫
今昔物語夜慶話　一　宇田樂庵作
江戸嬉笑　一　馬笑、三笑、三鳥　式亭三馬評
誹諧通言　一　並木舍五瓶作
鳴子瓜　一　振鷺亭作

文化四丁卯年

書目

口開話の安賣　一　感和亭鬼武作

當世廓中掃除　一　玉水館作
花街滑稽一文塊　一　金太樓作
三都廓通言　一　並木舍五瓶作

文化五戊辰年

書目

比絲兵庫結　一　至極亭樂成作
函嶺復讐談　一　感和亭鬼武作

文化七庚午年

書目

伊吾物語　一　梅暮里谷峨作　北嵩畫

文化九壬申年

書目

四季日待春廿三夜待　一　岡山鳥作　國貞畫

文化十一甲戌年

書目

旅芝居田舍正本　一　萬壽亭正二作　春亭畫
姿身振八景　一　三笑亭可樂作　美丸畫

文化十二乙亥年

書目

四天王廓の茶番　一　南仙笑楚滿人遺稿

文化十三丙子年

書目

寒紅丑の日待　二　振鷺亭作　國直畫
文政五年外題を『珍說丑の日待』と改め、三冊物となし再板す。

文化十四丁丑年

書目

願懸注文帳　一　東西菴南北作　重信畫

京傳居士談　一　馬鹿山人作

娼妓美談雛の花　一　鼻山人作

後編『廓宇久爲壽』文政元年出板す。

文政元戊寅年（文化十五年改元）

書目

雛の花後編廓宇久爲壽　一　東里山人作　英泉畫

前編は文化十四年出板す。

歌舞伎雜談　一

文政二己卯年

書目

廓中餘情由佳里の月　二　鼻山人作

水中魚論丘釣話　二　岡山鳥作　鳴蟲畫

樓妓選　一　里南鐐作

文政三庚辰年

書目

情のちまた　一　道々亭馬鏡作

初恵比壽　一　十返舍一九作

婦足諳　一　成三樓作

享和二年絶板後始めて再刊す。

後更に『雪の梅』と改題出板せり。

文政四辛巳年

書目

東海探語　一　美芳野山人作

文政五壬午年

書目

珍說丑の日待　三　振鷺亭作　國直畫

文化十三年板の改題再板なり。

似口鸚鵡返　一　石橋庵眞醉作

安永二年『鸚鵡盃』の後編に擬して出せり。

玉覇全傳 花街鑑　二　鼻山人作

後編『花街壽々女』文政九年出板す。

文政六癸未年

書目

田舍通言 驛路之鈴　一　東里山人作　春扇畫

青樓女庭訓　一　同上

享和二年板『倡客竅學問』の後編なりと作者は序文中に記せり。

文政七甲申年

書目

娼婦敎導 花街風流解　三　大眼子作　竜嶺畫

武江彦物志　一　岩崎常正作

廓惨籠語　一　年昔堂花守作　英泉畫

文政八乙酉年

書目

傾城肝粒志初編　一　鼻山人作

傾城肝粒志二編　一　同上

第三編翌九年出板す。

青樓曙草　一　鼻山人作

文政九丙戌年

書目

八百八後家 節穴さがし　一　千兩庵頃持作

廓鑑餘興 花街壽々女　三　鼻山人作

文政五年板『花街鑑』の後編なり。

傾城肝粒志三編　一　東里山人作

初編並二編は文政八年出板なり。

文政十丁亥年

書目

（寄雑談餘興）北里通　三　東里山人作　英泉畫

文政十一戊子年

書目

谷中の月　一　十字亭主人作

天保三壬辰年

書目

山あらし　一　出東庵作

柳亭種彦の作なり。

天保六乙未年

書目

（當世雛形）小紋新法　一　山東京傳作　政演畫

天明六年の再板なり。

年次不明

書目

（一名曰挑燈夫）遊僊窟煙之花　一　薄倖先生作

後享和元年二冊物となし再板す。

（翁曽我後編）見通三世相　一　關東米作

新發幸大寺不寶錄　一　島田金谷作

（華里通商考拾遺）六町一里　一　萬亭高慢仙作

（新潟八百八後家）後の月見　一　廿泉醉翁序

辰年板。

むすぶのみす紙　一

明和年間板。

好色諸國もの語　一　笑山作

亥年板。

契情實之巻後編　一　滅法海作

市が榮ゆる除夜　一　振鷺亭作

安名手本執心廓　一　東西散人作

同　後編　一　同　上

曾我拍子舞子濱 一

風來紅葉金唐革 一

拾遺枕草紙花街抄 一

雜談野路の多和言 一 樂山子作

戌年板。

客衆氷面鏡 一 山東京傳作

艶書筆談しら川夜船 一 同 上

寛政板。

輕井茶話道中粹語錄 一名變通輕井茶話 一 山手馬鹿人作 春章畫

東西南北突當富魂膽 一 西奴作

青樓小襠孔雀染勒記 一 山旭亭作

世界諸處花の下物語 一 長二樓乳足作

揚花水性浮華川客氣 一

廓中奇言根古野魔起 一

心魂鎖匙巽夢卒術屋 一

月花餘情後編陽臺遺編 一 獻笑閣主人作

色里三十三所息子順禮 一

辰巳婦言後編船頭深話 一 式亭三馬作

前編は寛政十年出板なり。

數の子後編夜半冷酒 一 十返舍一九作

前編は享和二年出板なり。

いろは醉故傳 一 振鷺亭作

寛政板。

奇談書繫禿筆 一名傾城買禿筆 一 山手馬鹿人作 春章畫

變通輕井茶話 一名道中粹語錄 一

深川手習雙紙 一 十方茂內作

青樓惚多手貝 一 異双樓花咲作

振鷺亭噺日記 一 振鷺亭主人作

南客先生文集 一

富札買樣祕傳 一

大通多名於路志 二 閑言樂山人作

新著契情實之卷 一 楚登美津作

後編出板あり。

奥州街道子待驛樓 一 風月堂主人作

亥年板。

青樓實記 大門雛形 一名不粋照明房情記 一 山東京傳作

契情奇談 妓娼情子 二 鶯蛙樓作

『遊子娛言』の後編なり。

滑稽鄙談 息子氣質 一 振鷺亭作 國直畫

東山見番 意妓の口 一 同上

嫖客新話 驛路の花 一 醉春亭序

青樓快談 玉野語言 一 玉齋笑馬作

花妓素人 面和倶嘶 一 遠櫻亭主人作

世說新語茶 一 山手馬鹿人作

明和板。

舌講油通汚 一 南陀迦紫蘭作

安永板。

惡酒雜言鑑 一 瓦寮亭作

天明の作なるべし。

通詩選笑知 一 四方山人作

天明板。

公大無多言 一 行成山房作 春朗畫

巳年板。

魂膽心氣樓 舊名和漢同評 一 四方山人作

華里通商考 一 遊里軒作

後編『六町一里』出板あり。

傾城買禿筆 一名奇談書繋禿筆 一

古今若色婦 一

茶屋女の評なり。

色道養生訓 一名黄素妙論 一 道三先生作

浪花今八卦 一 備四軒作

今いま八卦 一 放蕩軒作

狸の穴這入 一 强異軒作

通言東至船 一 富樂齋作

誰が袖日記 一 寶嘉僧作 春童畫

なまけもの 一 花月坊作

部屋三味線 一 遊女某作

客衆一華表 一 闟東米作

小說白藤傳 一 玩世敎主作

もみぢがり 一 南郭山人作

太平樂卷物 一 天竺浪人作

甲驛夜の錦 一 宇治茶釜作

古今吉原嘶 一 山東京傳作

面美知之娌　一　南朝山人作　笑丸畫
遊客年々考　一　望學齋時中作
疇昔の茶殼　一　艶二樓主人作
北廓鷄卵方　一　韓信堂色人作
金の和良路　一　山旭亭主人作
投扇興講序　一
話のやうだ　一
魂膽情深川　一
古文手毬歌　一
雅俳小夜嵐　一
見番太平記　一
品川呼子鳥　一
娼註銚子戯語　一　盃臺先生作
女肆三人酩酊　一　戯家山人作
新織藝子酒戯　一
辰巳船頭部屋　一　猪牙山人作
清川全傳雪の梅　一　成三樓酒盛作
　享和二年板「婦足齒」の改題なり。
不粋照明房情記一名大門雛形　一　山東京傳作
四日八日作妓鑑　一　神田あつ丸作
東新氣娼廓膽競　一　同　上
手管見通五臓眼　一　同　上
教化別傳籠細工　一　東里山人作
遊子方言　一　多田爺作
　明和板。
賣花新驛　一　玉川常水作
　安永板。
本草妓要　一　承露主人作
　安永板。
月花餘情　一
　寶暦板。
　後編『陽臺遺編』出板あり。
遊子娛言　二　鶯蛙樓作
　辰年板。
　後編『妓娼情子』あり。
其あんか　一　中橋散人作
　午年板。

酒の徒雅　一　衞いじ作

亥年板。

俗談諺種　一　塵塚山人作

亥年板。

品川八景　一　振鷺亭作

一說に安永八年板とあるは疑はし。

和漢同評　一　四方山人作

後『魂膽心氣樓』と改題す。

黃素妙論 一名色道養生訓　一　道三先生作

廓中閒語　一　強巽軒作

廓部事始　一　玉川調布作

吉原帽子　一　煙花浪子作

北華通帖　一

馬糞夜話　一　紀南子作

春鶯折甲　一　大雅堂作

品川海苔　一　關東米作

永代談語　一　振鷺亭作

驛舍三友　一　紀南子作

良夜靜掻　一　藍川風通作

富が遠佳　一　豐川里舟作

狂言綺語　一　風來山人作

狂言綺語　一　式亭三馬作

祕事眞告　一　普穿山人作

煙華漫筆　一　張葛居辰作

船頭夜話　一　四季山人作

喜來大根　一　梨白散人作

二もと松　一　越路の浦人作

粹町甲閨　一　山手馬鹿人作

北川蜆殼　二　二斗庵幸雄作

通俗雲談　一　雲雀亭春麿作

言葉の玉　一　春光園花丸作

山下珍作　一　奈蒔野馬乎人作

見通し占　一　十返舍一九作

地者八景　一

百花評林　一

根津見衣　一

定家文庫　一

四ッの谷　一

山下新話　一

謎春の友　一

嶠陽英華　一

穿當珍話　一　祖親我子孫彥作

刊行の年月未詳なるも、其稿本らしき物を閱れば、「寛政二戌末秋、口合盡、祖親我子孫彥述、座連歌」とあり、また其作例は「巴生囀遊ぶ」とあり、刊本には黑白道人題と記し天放元甲子年云々と見えたり。

奇談假根草　一　紅月樓主人作

卯年板とあり。

富岡八幡鐘　一　かはきち作

戌年板とあり。

新富穴學問　一　紀南子作

春色南夜噺　一　鐘下亭一狐作

翁曾我　一　關東米作

後編に『見通三世相』あり。

玉の牒　一　關東米作

入門雅話　一　振鷺亭作

紀南子　一　紀南子作

遊仙窟　一　釣山人作

成子綱　一　遠櫻亭作

甚孝記　一　烏亭焉馬作

飄金窟　一　烏有先生作

南樓丸　一　銅樂山人作

讃極史　一　千代丘草庵作

井中水　二　頭陀樂雲水作

相合傘　一

論娛交　一

晉家法　一

玄々經　一

契國策　一

穽の廓　一

音羽瀧　一

廓文章　一

南圖抄　一

長者敎　一

柳亭種彥の說によれば、室町家の頃の俗書にて、寛永四年開板の物なれど、本書は其改作にかゝり、小本に直し出板せしものなるべし。

奴通　一　堂駄先生作

酒落本目錄終

中本書目

例言

一中本の名稱は、半紙本と、小本卽ち半紙半截形の中間に居る形の書册なりとの意にて、書籍の種類に過ぎざれども、一面には又著作の種別に用ゐられたり、卽ち繪雙紙ならぬ滑稽作は、皆此中本によつて梓行發市せらる、故に中本物といへば、挿繪少き滑稽物なるを知るなり、されば古來の稱呼に從ひ、『中本書目』を以て本書の題名となせり。

一此書目に收め得たる滑稽作の數は、僅々二百、五種に過ぎず、これに漏れたる物は、他日を竢つて增補なすべし。

一尙揭げたる物の中に誤れるも多かるべし、倉卒の間になりしものなれば、素より杜撰の責を免れず、讀者深くな咎めたまひそ。

明治三十九年二月　　　　葩　雪　記

中本書目

大久保葩雪輯

寶暦六丙子年

書目

善悪道中獨案内　一　雄飛亭作

後年の戯作物中道中記の體裁に作述せしもの、例之ば天竺老人の『導通記』山東京傳の『悟道迷所獨案内』及び弘化年間より續出せし一筆庵の『善悪道中記』等の類は、皆本書を摸擬せしものなりと云ふ、此種の作は此以前にあらざりしものと見ゆ。

續百化鳥　三　古面堂作

『百化鳥』正編の刊行年次詳ならず。

寶暦九己卯年

書目

滑稽雌黄　四　桂井蒼八作

器物に口を假りて教訓の意を表す作意、滑稽物といはむより寧ろ教訓物と謂つべし、されど馬琴の『質屋の庫』或は京傳の『腹筋鸚鵡石』等に類する作風は、多少範をかゝる作より採りしかとも想はるるなり。

寶暦十一辛巳年

書目

古文鐵砲前後集　一　桂井蒼八作

寶暦十三癸未年

書目

評判龍美野子　三　泉山坊・梁鶴州合作

八文字屋の評判記に擬し、川魚、海魚、貝類を評判せしもの、評判記の異作中や、古きものなるべし。

明和七庚寅年

書目

一心相傳極祕卷　五　半田山人作　重政畫

安永九庚子年

書目

當世阿多福假面　一　粥腹得心作

天明二壬寅年

書目

當世導通記　一　天竺老人作

天明三癸卯年

書目

大通紀山寺　一　南陀羅法師作

今の落語にある「山號寺號」の開山なるべし。

天明六丙午年

書目

當世雛形小紋新法　一　山東京傳作　北尾政演畫

天保六年再板せり。

先に出せし『小紋裁』の後編なり、『小紋裁』の刊行年次詳ならず。

指面草　一　山東京傳作

天明七丁未年

書目

百人一首和歌始衣抄　一　山東京傳作

寛政二庚戌年

書目

萬更大師異圖本　一　錄山人信普作

小紋雅話　一　山東京傳作

寛政五癸丑年

書目

三國一本松魚智恵袋　一　山東京傳作

附合借貸往來　一　十返舍一九作

寛政六甲寅年

書目

敎訓繪兄弟　一　山東京傳作

繪合七番あり詞書面白し。

寛政十戊午年

書目

快談文章　一　內田新好作

寛政十一己未年

書目

自由自在濡手で粟　五

享和二壬戌年

書目

東海道中膝栗毛初編　十返舍一九作

享和三癸亥年

書目

忠臣藏岡目評判　一　十返舍一九作

文政年間外題を「忠臣藏心實論」と改め再板せり。

安政四年平亭銀鷄更に「忠臣藏皮肉論」と改題して出板せり。

東海道中膝栗毛後編　十返舍一九作

滑稽素人芝居　一　櫻川慈悲成作

奇妙圖彙　一　山東京傳作　自畫

文化元甲子年（享和四年改元）

書目

東海道中膝栗毛三編　十返舍一九作
五百崎蟲之評判　三　市川白猿 烏亭焉馬作
假名手本穿鑿抄　一　瀬川路考案 篠田種々堂編
本年の出板といへど奈何にや。
風流田舍草紙　六　十返舍一九作
諸用附會案文　一　同　上
後年東里山人之に改作を加へ同書名にて出板せり
樂屋方言　三　鐵砲堂作

文化二乙丑年

書目

東海道中膝栗毛四編　十返舍一九作
有喜世物眞似舊觀帖初編　感和亭鬼武作
寄談自癡聞集　一　同　上

文化三丙寅年

書目

東海道中膝栗毛五編追加　同　上
戲場粹言幕之外　二　式亭三馬作
小野篁譃字盡　一　同　上
無而七癖酩酊氣質　二　同　上
有喜世物眞似舊觀帖二編上　感和亭鬼武作
有喜世物眞似舊觀帖二編下　十返舍一九作
癡漢三人傳　一　感和亭鬼武作　雪馬畫
鳴子瓜　一　振鷺亭作

文化四丁卯年

書目

板元書肆作者三人寄合文字之智畫　一　十返舍一九作
東海道中膝栗毛六編　同　上
東國滑稽羽栗毛初編　宇田樂嬉丸亭
栗毛後駿足　二　瀧亭鯉丈作　歌川國直畫
旅枕裏青海前編後編　彥玉作　藍月畫
文政七年「播州廻膝栗毛」と改題再板す。

文化五戊辰年

書目

東海道中膝栗毛七編　十返舎一九作
長門本忠臣藏　一　石川清澄作　北嵩畫

文化六己巳年

書目

木曾道中滑稽華の鹿毛　三　河間亭作　永曲畫
東海道中膝栗毛八編　十返舎一九作
滑稽江之島家土産初編　同　上　春亭畫
諸國無茶修行　一　山東亭月々作　等琳畫
當世七癖上戸　式亭三馬作
諢話浮世風呂初編　同　上　美丸畫
田舍芝居樂屋雜談　二　七文舎鬼笑作　清峰畫
　文久元年桂花園綾守に同名の作あるも全く別作なり。
有喜世物眞似舊觀帖三編　感和亭鬼武作
　此書三編にて止む。

文化七庚午年

書目

滑稽江之島家土産二編　十返舎一九作
金毘羅參詣續膝栗毛初編　同　上
諢話浮世風呂二編　式亭三馬作
紅毛影繪於都里伎　一　十返舎一九作　月麿畫

文化八辛未年

書目

滑稽一日噺大晦日の部元日の部　二　十返舎一九作　北齋畫
串戯教訓六阿彌陀詣初編　同　上
滑稽諺言大師めぐり初編　同　上
身振いろは藝初編二編　東西庵南北作　春扇畫
田舍通言驛路の鈴　一　東里山人作
狂言田舍操　四　式亭三馬 樂亭馬笑合作　美丸畫
諢話浮世風呂三編　式亭三馬作

宮島參詣續膝栗毛二編　十返舍一九作

文化九壬申年

書目

忠臣藏偏痴氣論　二　式亭三馬作　國直畫

辭所謂四十八癖初編　同　上　同　上

四季日待物語　三　岡山鳥作　國貞 國繁畫

木曾街道續膝栗毛　三　十返舍一九作

六阿彌陀詣二編　同　上

世中貧福論初編　同　上

後編文政五年出板す。

諢話浮世風呂四編　式亭三馬作

柳髮新話浮世床初編　同　上　國直畫

文化十癸酉年

書目

世界譜事花の下長物語一名花の下道中膝栗毛　一　長二樓乳足作

人間萬事虛誕計前編　式亭三馬作　國直畫

後編は鯉丈作にて天保四年出板す。

王子道中膝栗毛一名花の下長物語　一　長二樓乳足作

木曾街道續膝栗毛四編　十返舍一九作

六阿彌陀詣三編　同　上

通俗巫山夢　五　同　上　春亭畫

柳髮新話浮世床二編　式亭三馬作　國直畫

假名手本藏意抄　一　萬葉散人作　國貞畫

酩酊一盃綺言前編　式亭三馬作

四十八癖二編　同　上　國直畫

文化十一甲戌年

書目

昔々新話旅芝居田舍正本　一　萬壽亭正二作

素人狂言紋切形　三　式亭三馬作　國直畫

田舍芝居忠臣藏二編　同　上　同　上

壽賀多島振八景　一　三笑亭可樂作　美丸畫

木曾街道續膝栗毛五編　十返舍一九作

古今百馬鹿　三　式亭三馬作　國直畫

文化十二乙亥年

書目

木曾街道續膝栗毛六編　十返舍一九作

滑稽[illegible]之内紙　三　同　上

後編『雜司ヶ谷紀行』文政四年出板す

哆[illegible]嘜嘜草　二　振鷺亭作　春亭畫

文化十三丙子年

書目

茶番の樂屋　二　櫻川慈悲成作

木曾街道[illegible]七編　十返舍一九作

從木曾善光寺續膝栗毛八編　同　上

文化十四丁丑年

書目

有情非情大千世界樂屋探初編　式亭三馬作　豐國畫

大山道中膝栗毛初編　瀧亭鯉丈作

四十八癖三編　式亭三馬作　重信畫

文政元戊寅年

書目

大山道中膝栗毛二編　瀧亭鯉丈作

四十八癖四編　式亭三馬作　重信畫

四編にして止む。

文政二己卯年

書目

善光寺道中續膝栗毛九編　十返舍一九作

本[illegible]百目集　二　東西庵南北作

水中魚台闘釣話初編　岡山鳥作　錦亭鶴蝶畫

文政三庚辰年

書目

上州草津温泉道中續膝栗毛十一編　十返舍一九作

花暦八笑人初編　瀧亭鯉丈作

文政四辛巳年

書目

ぬしにひかれて善光寺參詣　二　岡山鳥作　貞房畫

大山道中膝栗毛三編　瀧亭鯉丈作

雜司ヶ谷紀行　三　十返舍一九作

文化十二年板『堀之内詣』の後編なり。

花暦八笑人二編　瀧亭鯉丈作　英泉畫

文政五壬午年

書目

討は致さぬ金がかたき世中貧福論後編　十返舍一九作

前編は文化九年出板なり。

上州草津温泉道中續膝栗毛十二編　十返舍一九作

文政六癸未年

書目

太平樂之卷物　一　烏亭焉馬作

柳髮新話浮世床三編　瀧亭鯉丈作

文政七甲申年

書目

唄祭文勸化帳今西行吾妻旅路　二　振鷺亭作

序によれば文化九年の作なり。

播州廻り膝栗毛前編後編　彦玉作　藍月畫

文化四年『旅枕東青海』の改題再板なり。

滑稽牛嶋土産　三　瀧亭鯉丈作　英泉畫

文政八乙酉年

書目

譯氣話來道軒浮世講釋　三　桃花園三千麿作　貞晴畫

稿本なり刊本の存否詳ならず。

滑稽笑譚妙傳壽行　三　桃山人作

稿本なり、刊本の存否詳ならず。

博多俳諧 旅寿々女　三　瀧亭鯉丈作

文政九丙戌年

書目

戯訓貧福太平記 上巻中巻　葉林翁作　盈々書
戯訓貧福太平記 下巻　とぬけ庵作　画工
青柳新語 五節句 一名 女浮世床 初編　三馬原稿 楚満人補　英笑書

此書初編にて止む。

文政十丁亥年

書目

家財集萃抄 前編後編　十返舍一九作　貞景書
滑稽有馬紀行　三　大根土成作　白瑛書

文政十二己丑年

書目

浮世名所圖會　二　奥山四娟作

奥山四娟は平亭銀鶏なり。

滑稽甲子待 初編　立川焉馬作　國直書

天保二辛卯年

書目

忠臣藏縁起式　二　村上氏作
續々膝栗毛 初編二編　十返舍一九作
蝙蝠考　一　笠亭仙果作　自畫

天保三壬辰年

書目

滑稽驛路梅　二　石草庵増補作　梅亭華溪畫

天保四癸巳年

書目

人間萬事虛誕計 後編　瀧亭鯉丈作

前編は三馬作にて文化十年出板なり。

天保五甲午年

書目

道外寶語教　一　寶田千町作

花暦八笑人四編　瀧亭鯉丈作

花暦八笑人追加　同　上

天保六乙未年

書目

當世雛形小紋新法　一　山東京傳作　政演畫

天明六年の再板なり。

滑稽和合人初編　瀧亭鯉丈作

天保七丙申年

書目

滑稽和合人二編　瀧亭鯉丈作

滑稽和合人二編　同　上

天保八丁酉年

書目

昔々百夜噺　一　林屋正藏作　貞秀畫

後年作者名の一書を缺き林屋正藏となし、且つ『忠臣藏道化縁記』と改題再板せり。正しく書肆の姦策なるべし。

天保十二辛丑年

書目

滑稽和合人三編　瀧亭鯉丈作

潮來婦誌　六　式亭三馬作

三馬の遺稿なるべし。

弘化元甲辰年

書目

人間一生獨案内善惡道中記　一　一筆庵可候作　英泉畫

滑稽五人女中記　二　戲作舍見笑作　國直畫
滑稽和合人四編　為永春水作
滑稽富士參合　一　柳下亭種員作　國芳畫
温泉土産箱根草初編　瀧亭鯉丈作

弘化二乙巳年

書目

教訓童話魂膽夢輔譚初編二編　一筆庵可候作
滑稽水掛論一名　一　十返舍一九作
温泉土産箱根草三編　為永春水作

弘化三丙午年

書目

教訓善悪稽古三味線　三　一筆庵可候作
善悪道所圖會　一　一筆菴主人作　英泉畫
『善悪道中記』の二編なり。
魂膽夢輔譚三編　一筆庵主人作　英泉畫
温泉土産箱根草四編　為永春水作

嘉永元戊申年

書目

奥羽一覽道中膝栗毛初編　二世十返舍一九作　梅笑畫
奥羽一覽道中膝栗毛二編三編　同　上
善悪道所一覽　一　一筆庵主人作　國芳畫
『善悪道中記』の第三編なり。
魂膽夢輔譚四編五編　一筆庵可候作

嘉永二己酉年

書目

奥羽一覽道中膝栗毛四編　二世十返舍一九作
貧福俗道捷徑　一　一筆庵可候選 修善堂編選　貞秀畫
『善悪道中記』の第四編なり。

嘉永三庚戌年

書目

善惡兩道浮世奇看　一　樂亭西馬作　國輝畫
『善惡道中記』の第六編なり。
奥羽一覽道中膝栗毛五編　一世十返舍一九作
善惡色欲二道　一　樂亭西馬作　國輝畫
『善惡道中記』の第五編なり。

嘉永四辛亥年

書目
草履は長刀草鞋は蛐人眞似目覺旅路初編　永樂舍一水作　芳盛畫

嘉永六癸丑年

書目
善惡胸の機關　一　三世十返舍一九作
文化七年板式亭三馬作『早替胸機關』の改題再板なり。
教訓迷子札　一　爲永春水作

安政三丙辰年

書目
滑稽鈍智奇論自初編至三編　岳亭丘山作　一筆菴英壽畫

安政四丁巳年

書目
忠臣藏皮肉論　一　平亭銀鷄作
享和三年板一九作『忠臣藏岡目評判』のおつかぶせ物なり、且つ近松翁の遺稿となす銀鷄の言は非なり。
妙竹林話七偏人初編　梅亭金鵞作

安政五戊午年

書目
安政五年面白さう紙　一　三遠亭作
當時のコロリ流行病に關する事實と流言類を記したるものなり。
妙竹林話七偏人二編　梅亭金鵞作

文久元辛酉年

書目

田舍芝居樂屋雀 四編　桂花園綾守作
滑稽江戸久居計 初編　岳亭春信作　一燕齋芳幾畫
妙竹林話七偏人 三編　梅亭金鵞作

文久二壬戌年

書目

妙竹林話七偏人 四編　梅亭金鵞作

文久三癸亥年

書目

善惡迷蹤誌　一　一筆庵英壽作
「善惡道中記」の第七編なり。
妙竹林話七偏人 五編　梅亭金鵞作
此書五編にして大尾す。

年次不明

書目

色は思案の外 欲は分別の中 貴色安本丹 上　十返舍一九作
色は思案の外 欲は分別の中 貴色安本丹 下　爲永春水作
歌舞伎樂屋通 俳優家贔負氣質　一　式亭三馬作　歌川豊國 歌川國政畫
おのおの 馬鹿むれ 身振づくし　一　東西庵南北作
御蔭手本抽神藏　二　珍々亭睦丸作　岳亭定春畫
忠臣藏樂屋問答　二　歌川國直畫
忠臣藏道化縁記　一　林至止藏作　歌川貞秀畫
天保八年「昔々百夜噺」の改題再板なり。
東海道中栗毛彌次馬　二　十返舍一九原著 岳亭春信校　一燕齋芳幾畫
春笑能樂奇談　三　清川山住作
教訓浮世眼鏡　一　萬亭應賀作　溪齋英泉畫
風流初咲梅暦　一
戲場百人一首　一　紀尾佐丸作
道化百人一首　一　近藤清春畫
寶永、正德頃出板。
滑稽三人生醉 初編　十返舍一九作

稿本にて存す、刊行せざる物なるべし。

忠臣藏心實論　一　十返舍一九作

文政板。享和三年『忠臣藏岡目評判』の改題再板なりしも、支障ありて製本一百以内にして板を止むといふ。安政四年に至り平亭銀鶏此『心實論』を『忠臣藏皮肉論』と濫りに改題し、自序を加へて板に上せ刊行せり。

教訓捷徑大學笑句　一　爲永春水作

天保頃出板。

浮世滑稽附會案文　一　東里山人作　溪齋英泉畫

文化元年十返舍一九作『諸用附會案文』の丸抜物なり。

川童一代噺　五　後笑窟主人作

花暦八笑人三編　瀧亭鯉丈作

花暦八笑人三編追加　同　上

文字畵指南　一　つるマムシ道人作

大通獨案内繪圖一葉附　一　桃栗山人作

天明年中出板。

馬士の效袋　一　十返舍一九作

鹿島紀行中の畫讃狂詠類を集録せしものなり。

民間圖誌口八町　二　神屋蓬洲作　自畫

白癡物語　一　遠藤春足作

中本書目終

人情本目錄

緒　言

德川時代の晩年に於て、稗史界に飛躍を試み、比較的成效の實を擧げ得たる物は、人情本に如くものあらじ、其内容の價値如何は姑く措き、また其作者の品質性行を論ずることは姑く措き、兎に角、一新生面を當時の文壇に開き得し技倆は、作家の筆に一威力あることを認めざる可らず。

人情本は蓋し洒落本の變體にして、靑本の合卷に變化せしと態度を同うし、短篇物に厭氣を生ぜし讀者に對して其希望に副はむが爲めに、漸次に筆を延ばし〻結果、何時とはなしに、長篇物の流行を來たし、茲に人情本てふ一派の勃興を招きしもの〻如く、其時機は蓋し文政年間なりしなるべし。

然るに天保二年曲山人の出せし『娘節用』は大に時好に適し、好評嘖々たる所より、例の爲永春水は、數次の失敗を補償するは、此機會の他に求むべきものあらずとなし、直に筆を此方面に走らし、翌三年彼の『梅暦』初編を出板しぬ、此作亦た非常の喝采を以て江湖に迎へられしかば、春水は直に次編を年毎に續出し、且つ數種の新作を每歲頻に上梓し、自ら人情本の開祖と唱へ、婦女子の歡心を買ふに勉めし苦心空しからずして、遂に一方の旗頭となりしは、眞に僥倖の男と謂つべし。

文才よりは商才に長じ、貸本屋の魂性を脫し得ざる春水の筆は、遂に邪路に奔り、人情の微細を描寫すとの口實の下に、時には折花の境裡に筆を及ぼし、故意に醜汚の消息を描く等、俗受專門の俗物と嘲罵せられしも、毫も屈するの色なく旺んに人情本を出板せしが、遂に天保十三年水野越州の爲めに處罰せられ、人情本の現存するものは、書肆並に板木共官に沒收せられ、根本的に人情本一派は破壞せられをはんぬ。

されど水野越州罷役の後は、再び其頭を擡げ出し、人情本の著作ありしも、春水は既に歿して、其門下の徒輩們が摸倣の筆になりし物のみにて、稱すべき

の作とては一もあらず、其末路を辿り居るまゝに世は明治の維新となり、德川の世紀はこゝに終りぬ。斯く彼述し去れば、人情本は、眞に一文の價値なきが如くなるも、一概に斯かく斷定すべきに非ず、當時の風俗其儘を描寫するに努めたるだけに、また能く當年の世態を明治の今日に傳へ得たる點も決して尠きにあらず、七十年前の江戸に於ける或る一部分の面影は、慥に彼們が微細の筆に依つて、充分に今日知悉し得ることあるを信ず。此感を懷いて『娘節用』を閲みし、また机上に『梅暦』を繙く者は、たゞに予一人のみにはあらざるべし。僻見果して當れりや否や、記して諸賢の教を俟つ。

時に明治三十九年彌生月の初め

春雨の點滴を耳にしつゝ

大久保葩雪識

人情本目錄

例言

一人情本書目を編むに際し、原本の收集を圖りしに、其方法拙なるが爲め歟、將た現存の書冊稀少なるが爲め歟、甚き不結果を以て終り、蒐集することを得ざりし故に、對校の便を失ひ、書目に誤謬多かるべし、幸に其杜撰を深く尤むる勿れ。

一此書目に掲記し得し人情本の數は僅に一百七十種、而して其過半は出板の年次を、又其三分の一は作者の名を詳にせざるは、遺憾に堪えざる所なり。

一されど上記不明の分は、天保年間の出板に係るもの多く、爲永春水の著作多數を占め、其他松亭金水を始め、後には有人、金鵞等の筆になりしもの蓋し多かるべし。

編　者　誌

人情本目錄

大久保葩雪輯

文政二己卯年

書目

清談 峰の初花 初編　　十返舍一九作

文政四辛巳年

書目

生死 清談 玉散袖　五　東里山人作　英泉畫
安政四年再板せり。

文政五壬午年

書目

六三 としを 八重霞春夕映　三　二世南仙笑楚滿人作　英泉畫

文政六癸未年

書目

風聲 玄話 所縁の藤浪 前編 後編　十返舍一九作
後編は安政六年板ともいへり。
仇競戀の浮橋　二　東里山人作
兒女 美談 梛の二葉　三　志滿山人作
十返舍一九の序あり。

文政七甲申年

書目

早春 喜之助 藤枝戀情柵　五　二世楚滿人作　英泉畫
給夏小袖吉手屋　同上　同上
奇觀 秋夕夢物語　三　玉川亭調布作
南仙笑楚滿人校とあり。
傾城 此糸蘭蝶記 初編　鼻山人作
傾城 此糸蘭蝶記 二編　同上
第三編より八年出板す。

文政八乙酉年

書目

時雨の笠屋 夕陽の茜屋 園雪三勝草紙　三　二世楚満人作　英泉畫

第二編翌九年出板す。

蘆葭寝物語 一名新撰花衣　三　二世楚満人作　英泉畫

傾城此糸蘭蝶記 三編　鼻山人作

初編及二編は文政七年出板なり。

時雨の袖 前編　瀬川路考作

後編翌九年出板す。

新撰花衣 一名蘆葭寝物語　三　二世楚満人作　英泉畫

文政九丙戌年

書目

園雪三勝草紙 二編　二世楚満人作

初編は文政八年出板なり。

深情侫言 婦女今川 初編　二世楚満人作

深情侫言 婦女今川 二編　同　上

第三編文政十一年出板す。

時雨の袖 後編　瀬川路考作　英泉畫

前編は文政八年出板なり。

文政十丁亥年

書目

榮屋榮え のゐ屋甕吉 涼浴衣新地誂織　五　桃山人作 南仙笑楚満人校　英笑畫

丹波與作 關の小萬 春駒驛談 初編　柳泉亭種正作　廣重畫

廓雜談 餘興 北里通　三　東里山人作　泉壽畫

後年再板せし歟。

露籬 遠山日記　五　知山路獵雄作

玉石 奇情 赤縄　三　文亭綾繼作　英泉畫

文政十一戊子年

書目

婦女今川 三編　二世楚満人作

初編竝二編は文政九年出板なり。

文政十二己丑年

書　目

孝女二葉錦初編　二世梅暮里谷峨作

初代谷峨の『二筋道』の後編に擬せり。

人情其儘女大學前編　司馬山人作

後編翌天保元年出板す。

天保元庚寅年（文政十三年改元）

書　目

人情其儘女大學後編　司馬山人作

前編は文政十二年出板なり。

天保二辛卯年

書　目

小さん金五郎假名文章娘節用前編　一名教外俗文娘消息　曲山人作

清談常磐の色香　四　笠亭仙果作

教外俗文娘消息前編　一名假名文章娘節用　曲山人作

水緣奇遇都の花　三　菅垣琴彦作

天保三壬辰年

書　目

假名文章娘節用後編　曲山人作

春色梅兒譽美初編　爲永春水作　重信畫

春色梅兒譽美二編　同　上

天保四癸巳年

書　目

仇競今樣櫛三編　二世十返舍一九作

春色梅兒譽美三編　爲永春水作

春色梅兒譽美四編　同　上

天保五甲午年

書　目

假名文章娘節用三編　三文舍自樂作　重信畫

梅暦餘興 春色辰巳園初編　爲永春水作
梅暦餘興 春色辰巳園二編　同　上
さとのいろ花物語前編　鼻山人作

天保六乙未年

書目

さとのいろ花物語後編　鼻山人作
春色辰巳園三編　爲永春水作
春色辰巳園四編　同　上
清談春雨日記　同　上
貞烈美談園の花　同　上
廓中奇談浪花夢 五　平亭銀鷄作　貞廣 貞宗畫

天保七丙申年

書目

春色惠の花二編　爲永春水作
清談花佳都美前編　十返舎一九作　國直畫

天保八丁酉年

書目

榮枯盛衰娘太平記操早引二編　曲山人遺稿 松亭金水補
春抄媚景英對暖語初編　爲永春水作

梅暦拾遺別傳とあり。

春抄媚景英對暖語二編　爲永春水作
清談花佳都美後編　十返舎一九作　國直畫

天保九戊戌年

書目

倭寵愛兒英餘摸妓春色戀白浪初編　爲永春水作
辰巳清談梅の春初編　同　上
春色雛の梅初編　同　上

春告鳥に殘りし傳とあり。

春色雛の梅二編　爲永春水作

天保十己亥年

書目

娘太平記操早引三編　松亭金水作
春色戀白浪二編　爲永春水作
閑情末摘花初編　松亭金水作
春色籬の梅三編　爲永春水作
辰巳清談梅の春二編　同　上
英泉畫

天保十一庚子年

書目

娘太平記操早引四編　松亭金水作
閑情末摘花二編　同　上
閑情末摘花三編　同　上

天保十二辛丑年

書目

春色梅美婦禰四編　爲永春水作
梅園叢書の拾遺とあり。
閑情末摘花四編　松亭金水作
閑情末摘花五編　同　上

天保十三壬寅年

書目

多氣競四編　三亭春馬作

安政四丁巳年

書目

生死流轉多滿智留袖　三　東里山人作　英泉畫
文政四年板「玉散袖」三の再板なり。

安政六己未年

書目

風俗文話所緣の藤浪後編　二世十返舍一九作
前編と共に文政六年出板ともいへり。

年次不明

書　目			
榮枯盛衰娘太平記操早引　初編		曲山人作	
第二編は天保八年出板なり。			
里の花川の月春秋二季種　初編二編		三亭春馬作	
里の花川の月春秋二季種　三編四編		松園梅彦作	
里の花川の月春秋二季種　五編		竹園梅彦作	
帶屋白木屋軒並娘八丈　初編		二世楚満人作	英泉畫
風俗本朝別女傳	三	振鷺亭作	
重陽嘉言應喜名久舍　初編二編		爲永春水作	
塞之三編戀の宇喜身	三	松亭金水作	
貞操妓談津多加津羅	三	二驛亭佳雪 花山亭笑馬 合作	
人情美談吹雪の花笠			
廓中餘情由佳里の梅　初編二編		爲永春水作	
廓中餘情由佳里の梅　三編		同　上	
第三編は卯の初春板とあり。			
小春治兵衛花の島臺　自初編至三編		松亭金水作	
春色梅美婦禰　自初編至三編		爲永春水作	
春色梅美婦禰　五編		同　上	
第四編は天保十二年出板なり。			
春色初旭の出　自初編至四編		狂言亭春雅作	
春色田舍の花		爲永春水作	
其小唄戀情紫			
花廼壽賀多美			
教訓娘加雅美			
貞操婦女八賢志　自初編至六編		爲永春水作	
梅雪閑解春の若草　自初編至四編		爲永春水作	
夜三廻月柳の横櫛　自初編至五編		梅亭金鵞作	
後編『春宵新話風見草』出板あり。			
仇競今樣櫛　初編		紀山人作	
仇競今樣櫛　二編		二世十返舍一九作	
明烏後正夢　初編			
明烏後正夢　二編		二世楚満人作	英泉畫
菊の井草紙　自初編至三編		爲永春水作	

花暦封じ〆 初編二編　山々亭有人作　芳虎畫
清談和歌翠 初輯　曲山人作
清談和歌翠 自二編至四編　同　上
春色惠の花 初編　爲永春水作
第二編は天保七年出板なり。
春色籬の梅 四編五編　爲永春水作
第三編は天保十年出板なり。
孝女二葉錦 自初編至三編　二世梅暮里谷峨作
まゆみの花 自初編至三編
貞操深雪松 初編二編
〆のはやし 初編
女中庸發端　三
かりの婦美　爲永春水 柳山人 合作
春情濡小袖　談壽樓白園作　國景畫
多佳年の花　松亭金水作
春色流の曙　同　上
春色江戸紫　山々亭有人作
富士の白雪
阿古屋の松

辰巳清談梅の春 三編四編　爲永春水作
第二編は天保十年出板なり。
風月花情春告鳥 初編　爲永春水作
第二編は天保八年出板なり。
風月花情春告鳥 自三編至五編　爲永春水作
春宵新話風見草 自初編至三編　梅亭金鵞作
「一夜三廻月欄横櫛」の後編なり。
園の朝顏 自初編至四編　松亭金水作
春色玉兎 自初編至三編　爲永春水作
京染衣羅　二　正里山人作
英對暖語 自三編至五編　爲永春水作
第二編は天保八年出板なり。
野晱の梅　梅亭金鵞作
二もと松 自初編至三編　越路浦人作
春色花暦
桂の落葉
處女七種 自初編至五編
お玉が池 自初編至三編
戀の若竹 自初編至三編

さとの櫻 自初至三編
新話糸柳 自初至三編
花がたみ 自初至三編
小磯物語 自初至三編
花佳雅美 自初至四編
黄がね菊 自初至四編
八幡佳年 自初至六編
辰巳婦言 八
地廻り節 初編
小説江戸紫 五
多氣競 自初至三編 三亭春馬作
第四編は天保十三年出板なり。
多氣競 自五至七編 三亭春馬作
旭の梅 初二編
雪月花 初二編
月の梅 自初至三編
巽の梅 自初至三編
其小吹 自初至三編

出世娘 自初至三編
錦打袿 自初至四編
女中膚 自初至四編
時雨傘 自初至四編
娛色絲 自初至四編
いと柳 自初至四編
百千鳥 自初至四編
錦の繪 自初至四編
箱根草 自初至四編
懷中暦 自初至四編
初若菜 自初至五編
湊の花 自初至五編
娘七草 自初至七編
三人娘 自初至三編
雪の梅 前後編
六玉川 初二編
月花菊 初編
鶯日記
紅絞 前後編

若

紫自初編至三編

人情本目錄終

讀本年表

凡例

一此編は、德川時代に於ける小說の一種類の、世に所謂讀本といへるものを、年代に順つて羅列せるものなり。

一此編の年別、多くは板元書賈の梓行發販の年に依ると雖も、其年月の無きものは、著者の序文、或は跋文に見えたる年號を用ひ、猶且著者の序文も無きものに至つては、卷末に有疑未詳の部門を設け、姑く其の名目を收錄せり。

一物之本江戸作者部類以來、人多くは明和十年卽ち安永二年の本朝水滸傳を以て讀本の嚆矢となせども、其以前に於ても元祿前後の好色本、氣質物を除き、繪入にして自から讀本の體をなせるものは。之を網羅せり。

一讀本と世に所謂軍談物との境界線は甚だ不分明にして、到底其の性質上より嚴正なる區劃をなすを得ず、蓋し讀本の稱たる、もと繪入り讀み本といへる語の略なるが如きを以て、編者は假に兩者を別つに挿畫の有無を以てせり、卽ち其初めて世に出づるに當つて挿畫の無かりし前太平記、前々太平記、或は通俗十二朝軍談の如きは、太平記、保元平治物語、通俗兩漢紀事等と同視して之を除き。眞書太閤記、繪本楠公記、繪本甲越軍記、通俗三國志の如き、初めより挿畫のありしものは皆之を收錄したり。

一正德享保の頃より下つて寬政享和に至る凡そ百年の間、怪談奇說、俗傳雜事を記せるの書、其の系統上及び性質上、全く讀み本の前驅、若くは純然たる讀み本を以て目すべきもの、思ふに甚だ少なからざるべし、たゞ編者の寡聞、今悉く之を網羅收錄する事能はず、博覽の士、此編の增訂を吝まずば幸甚。

編　者　識

讀本年表

漆山天童編

正德三年

和漢乘合船六卷　落月堂操巵著　畫工不明

享保二年

九州今和藤内もろこし舟三卷　閑樂子著　畫工不明

怪醜夜光魂五卷　晋久著　同上

享保十七年

太平百物語五卷前編　祐佐著　高木貞武畫

元文五年

諸國怪談御伽空穗猿五卷　摩志田好話著

寛延二年

風俗遊仙窟四卷　淺井由易著

寛延三年

怪談登志男五卷繪入　慙雪舍素及著

萬世百物語五卷前編　烏有庵著

寶暦二年

古今實物語四卷　北璐著　畫工不明

著聞雜々集五卷　醉雅子著　同上

寶暦三年

桃太郎物語五卷　布袋室主人著　畫工不明

寶曆四年

里俗教談 錢湯新話五卷　伊藤單朴著　畫工不明

和州非人敵討實錄五卷　多田一芳著　同上

寶曆五年

槃下雜談五卷　陳珍齋著　畫工不明

雉鼎會談五卷前編　藤貞陸著

化物判取帳四卷　敬阿著　畫工不明

古今奇異 茅屋夜話五卷　隱几子著　同上

寶曆七年

諸國怪談帳五卷繪入　作者不明

寶曆十年

豐年珍話談五卷繪入　靜觀房好阿著

寶曆十一年

世說麒麟談五卷　烏醉雅子著　畫工不明

明和二年

後編古實今物語五卷繪入　清涼井蘇來著

怪談實錄五卷繪入　紀常因著

明和三年

古今奇談 繁野話（しげしげやわ）五卷繪入　近道行者著 千里浪子校

明和四年

新說百物語五卷　高古堂主人著　畫工不明

明和五年

湘中八雄傳五卷　聚水庵壺游著　富川房信畫

明和六年
雨窓譚五卷繪入　雷梭著
明和七年
龍都朧夜語五卷繪入　宜布著
近代百物語五卷　鳥飼醉雅序　畫工不明
操草紙五卷一名纈草紙　淡海子著　橘帆江畫
安永元年
古今實說怪談御伽童五卷繪入　作者畫工不明
怪談記野狐名玉五卷　谷川琴生糸著　畫工不明
文武酒色賦五卷　與路著　同上
安永二年
本朝水滸傳十卷初編　建部綾足著

怪談名香富貴玉五卷　琴紫著
中世二傳奇二卷　荳蔲老人著　畫工不明
安永五年
今古怪談雨月物語五卷　上田秋成著
青樓奇事烟花清談五卷繪入　葎原駿著　隣松畫
安永七年
坂東忠義傳十卷繪入　三木成久著　北尾重政畫
狩野友正川留魚成繪本六本杉五卷　青江友耕著
雨劍奇遇五卷繪入　浦邊椿園著
今古奇談翁草五卷　椿園主人著　浦邊源曹畫
古今奇談清誠談四卷　江文坡著　畫工不明
安永八年
女教訓不取敢婦人話四卷繪入　不醉著
雪窓夜話四卷繪入　金蛇觀主翁著

實話東雲鳥五卷　麗白主人著　畫工不明

天明元年

今古小説唐錦四卷　伊丹椿園著

勸化實補隅田河鏡池傳五卷　西向庵春帳著

兵庫築島傳四卷　釋圓信著

怪異談叢五卷　椿園主人著　畫工不明

天明二年

平がな繪入忠孝人龍傳五卷　秋里湘夕著

臥遊奇談五卷　一夕散人著

今古怪談深山草四卷　椿園主人著　畫工不明

天明三年

女水滸傳四卷　伊丹椿園著　畫工不明

閑栖劇話五卷　東隨舍著　同　上

今古口實唐土の吉野五卷　作者不明　同　上

天明六年

怪談深雪草四卷　壺屋子著

天明七年

奇傳新話六卷　蜉遊子著　北尾紅翠齋畫

天明八年

鬼面靈驗壬生謝天傳五卷繪入　江文坡著　畫工不明

寛政二年

泉州信田白狐傳五卷　釋誓譽著

怪異前席夜話五卷　文榮堂著　畫工不明

寛政三年

怪談旅硯五卷　紅葉園主人著　畫工不明
通俗白狐通四卷　作者不明　同上

寛政四年
圍考卷説苑道園五卷　桑楊菴光著
柏掌奇談こがらし草紙五卷　森羅子著
近代見聞靈魂得脱物語二卷　臨水軒傳阿著

寛政五年
古今奇談垣根草五卷繪入　草官散人著
古今奇談四方義草五卷　前田[illegible]窗子著

寛政七年
怪史雷草五卷　源溫故著　畫工不明
覺世奇觀渚の藻屑四卷　一庇道人著　同上

寛政八年
古今奇談紫草紙五卷繪入　白塵洞主人著
高尾千字文五卷中本　曲亭馬琴著　長喜畫
怪談旅之曙四卷　波天奈志小浮禰著　畫工不明

寛政九年
邂逅物語五卷　天歩子著
袈裟物語五卷繪入　一物子著
怪談東雲雙紙五卷　東山人著　畫工不明
怪談夜半鐘四卷　耳學齋著　同上
北遊記四卷　勢州山人著　同上

寛政十年
棧道(カケハシ)物語五卷繪入　雲府觀天歩著　畫工不明
月下清談五卷繪入　森羅子(森島中良)著
心學蟲豸夜話淺茅草三卷　安勝子著
奇怪越路之雪五卷繪入　魚鷹著　畫工不明
漫遊記五卷　建部綾足著　玉山畫

寛政十一年

繪本宇多源氏十卷　西岡忠利著　櫻井等雪畫
難波奇談樹々能美登利五卷繪入　竹馬比賴著
忠臣水滸傳五卷前編繪入　山東京傳著　北尾重政畫
新編奇談秋雨物語四卷繪入　流霞窓主人著　畫工不明

寛政十二年

古今奇談警世通話五卷繪入　鈴木故道著　鈴木政鎮畫
繪本膽太郎夢物語五卷　樗齋主人著
豔郭通覧五卷　洞蘿山人著　畫工不明
怪談破几帳五卷　流霞窓主人著　同上
古今奇談旅行集話四卷　水月堂著

享和元年

忠臣水滸傳五卷後編繪入　山東京傳著　北尾重政畫
保元平治鬪爭圖會十卷　秋里舜福著幷畫
日本水滸傳十卷　佐々木高吉著
怪談藻鹽草五卷　速水春曉齋畫作

享和二年

小野小町一代記六卷　夾撞散人著　堀田連山畫
燈下戯墨玉之枝五卷　森羅子著
中古奇談雙葉草五卷　東男子著　十返舍一九畫

享和三年

復讐奇談安積沼五卷一名小幡小平次死靈物語　山東京傳著 拜田泥牛校
奇談環雙紙五卷繪入　成三樓主人著　畫工不明
怪物輿論五卷　十返舍一九著幷畫
復讐小說月氷奇緣五卷　曲亭馬琴著
曲亭傳奇花釵兒(カンシ)二卷中本　同上
繪本二島英勇記十卷　平賀梅雪著　速水春曉齋畫
繪本彥山權現靈驗記十卷　平賀圣齋序　速水春曉齋畫

繪本箱根山靈應傳六卷　速水春曉齋畫作
近代見聞怪婦錄五卷　斜橋道人著　畫工不明

文化元年

今古奇談一閑人四卷繪入　生々瑞馬著
優曇華物語六卷　山東京傳著　可菴武清畫
復讐奇譚石言遺響五卷　曲亭馬琴著　蹄齋北馬畫
小說比翼文二卷七編 中本　同　上　北齋辰政畫
繪本三國妖婦傳十五卷三編　高井蘭山著
童蒙古實今物語五卷繪入 再板　清涼井蘇來著
新編水滸畫傳十卷初編　曲亭馬琴譯　北齋畫
富士淺間三國一夜物語八卷　曲亭馬琴著　豐國畫
復讐稚枝鳩五卷　同　上　同　上

文化二年

復讐奇談繪本東嫩錦五卷　小枝繁著　葛飾北齋畫
四天王剿盜異錄十卷　曲亭馬琴著　豐國畫
椿說弓張月六卷前編　同　上　北齋畫

盆石皿山の記二卷前編　曲亭馬琴著　豐廣畫
敵討誰也行燈二卷　同　上　豐國畫
櫻姫全傳曙草紙五卷　山東京傳著　一陽齋豐國畫
繪本合邦辻十卷　速水春曉齋畫
古今奇談閑書雨夜友五卷繪入　東隨舍編　里鄕畫
今古奇談五卷繪入　煙波山人著　畫工不明
競奇遺聞五卷繪入　梅翁著　松堂畫
繪本玉藻譚五卷　岡田玉山畫作

文化三年

春夏秋冬四季物語四卷春卷　振鷺亭著　一陽齋豐國畫
泉親衡物語五卷　福内鬼外森島中良著　北尾重政畫
阿也可之譚九卷一名自繇傳　石田玉山畫作
昔話稻妻表紙五卷　山東京傳著　歌川豐國畫
繪本孝婦傳五卷　作者不明　合川珉和畫
盆石皿山記二卷後編　曲亭馬琴著　歌川豐廣畫
繪本復讐放家僧談四卷　節亭山人著　淺山蘆溪畫
畫像義經磐石傳六卷　蒔鬪月著　大原東野補
復讐小說親子墳墓月華惟考五卷　烟水散人著　石田玉山畫

奇談古し路の章六卷前編　手塚兎月著　谷本月丸畫
繪本沈香亭十卷　三宅匡敬著　速水春曉齋畫
坂東奇聞濡衣艸紙五卷　芍藥亭長根著　蹄齋北馬畫
敵討裏見葛葉五卷　曲亭馬琴著
善知安方忠義傳五卷八册前編上帙四册下帙四册　山東京傳著　歌川豐國畫
周遊奇談五卷繪入　昌東舍眞風著　蹄齋北馬畫
繪本西遊記十卷第一編　江湖日木山人譯　大原某畫

文化四年

標註園の雪五卷　曲亭馬琴著
墨田川梅柳新書六卷　同　上
阿波之鳴門五卷　柳亭種彥著　葛飾北齋畫
俠游傳繪本浪華男五卷　西洲散人序　竹原春泉畫
夜話風聲翁丸物語二卷　十返舍一九著　蹄齋北馬畫
昔話蟹猿奇談五卷　栗枝亭鬼卵著　靑陽齋蘆國畫
繪本敵討孝烈傳三卷　手塚兎月著　月齋畫
八百屋於七繪本胡蝶夢五卷　同　上
復讐奇怪完義武進談三卷繪入　盛田小鹽著

小說東都紫六卷　昌房著
因緣奇談柳可美三卷　千世蔭著　高さかえ畫
倭琴高誌五卷　盛田小鹽著　歌川豐秀畫
雲妙間雨夜月五卷　曲亭馬琴著　豐廣畫
新累解脫物語五卷　同　上
椿說弓張月六卷後編　同　上　北齋畫
松浦佐用媛石魂錄八卷前編　同　上
括頭巾縮緬紙衣三卷　同　上
千代曩媛物語五卷　振鷺亭作　北馬畫
復讐奇談那智白糸五卷　高井蘭山著　同　上
國字鵺物語（なんなもじぬえものがたり）五卷　芍藥亭著　北齋畫
敵討朝妻船三卷　手塚兎月著　豐秀畫
淺草靈驗記十卷　速水春曉齋畫
繪本雪鏡談十二卷　春曉齋畫
新編水滸畫傳八十卷自二編至九編　高井蘭山譯　北齋畫
　自文化四年至文政十一年
繪本忠臣藏十卷前編　春曉齋畫作

文化五年

近江縣物語五卷　石川雅望著　北尾重政畫
天羽衣二卷　同上　江南司馬俊畫
敵討枕石夜話三卷　曲亭馬琴著　歌川豐廣畫
三七全傳南柯夢六卷　同上　葛飾北齋畫
賴豪阿闍梨恠鼠傳十卷（前編後編）　同上　北馬畫
繪入双名傳五卷　振鷺亭主人著 曲亭馬琴校　同上　小石堂一指畫
石井物語五卷　盛田小塩著　合川珉和畫
繪本孝感傳十卷　春曉齋畫作
春寄奇譚繪本璧落穗十卷（前編後編）　小枝繁著　葛飾北馬畫
繪本甲賀三郎巖窟語五卷　平秩鬼月著　歌川豐秀畫
孝子嫩物語五卷　高井蘭山著　蹄齋北馬、蘭亭北嵩畫
復讐手本後日の文章五卷　立川焉馬著　葛飾北齋畫
赤縄小說佐野の雪五卷　成三樓主人著　雪齋源琇畫
鶴殿山姫聚義雜法談六卷　手塚兎月著　蘭亭北嵩畫
近世怪談霜夜星五卷　柳亭種彥著　葛飾北齋畫
復讐車僧櫂物語五卷　鶴床主人著　歌川豐秀畫
柚物語仙家花二卷　南仙笑楚滿人著　歌川國貞畫
異本椿生譚五卷　月花亭東漁著　東春嶺畫
復讐古實獨搖新語五卷　熟睡亭主人著　榮松齋長喜畫
由利稚野居鷹五卷　万亭叟馬著　葛飾北齋畫

復讐奇談七里濱二卷　一溪菴著　歌川豐廣畫
報讐巷談文七髻結緒二卷　感和亭鬼武著　蹄齋北馬畫
三鼎復讐眞弓の敵六卷（繪入）　手塚兎月著　豐秀畫
物草太郎十卷　西湖散人著　合川珉和畫
小說奇談夢裡往事四卷　手塚兎月著
伊勢金剛名技傳六卷　優々館主人著　合川珉和畫
旬殿實々記十卷（前編後編）　曲亭馬琴著　豐廣畫
俊寛僧都島物語八卷（前編後編）　同上　同上
松染情史秋七草六卷　同上　同上
椿說弓張月六卷（續編）　同上　北齋畫
新編復讐蜻蛉の卷五卷（六冊）　栗枝亭鬼卵著　桃溪畫
星月夜鎌倉顯晦錄五冊（前編）　高井蘭山著　北馬畫
星月夜顯晦錄五冊（二編）　同上　同上
飛彈匠物語六卷　六樹園著　北齋畫
唐金藻右衛門金花夕映五卷　梅暮里谷峨著　北嵩畫
月宵鄙物語十卷（前編後編）　四方歌垣著　辰齋畫
復讐怪談久智梵石文三卷五冊　千鶴庵萬龜著　雪馬畫
金毘羅神靈記十卷　速水春曉齋畫
俊德丸謠曲演義五卷　振鷺亭著　北齋畫
三十三間堂棟材奇傳柳の糸五卷　小枝繁著　北馬畫

崇禪寺復讐譚會稽松の雪七卷　小枝繁著　洋堂畫
愛護復讐神獲傳二卷前編中本　同　上　盈齋北岱畫
復讐奇話勿來關四卷五冊　感和亭鬼武著　長喜畫
越路の章後編六卷　手塚兎月著　月丸畫
繪本忠臣藏十卷後編　春曉齋畫作
浪華俠夫傳六卷　鬼卵著　松牧齋畫
被草紙五卷　津川亭著　北岱畫
津國女夫池二卷　鬼武著　北馬畫
婦人撃讐麓の花三卷中本　同　上　北溪畫
辨才天御利生建久女敵討六卷　與風亭梧井著　北岱畫
安褥多羅賢物語五卷（八イ）　振鷺亭著　北齋畫
繪本室八島六卷　晦所著　玉峯畫
繪本金花談十五卷　速水春曉齋畫
敵討猫俣屋舖一卷中本　振鷺亭著　蹄齋北馬畫

文化六年

愛護復讐神獲傳三卷後編　小枝繁著　盈齋北岱畫
淺間嶽面影草紙三卷　柳亭種彥著　蘭齋北嵩畫
小說浮牡丹全傳四卷前編　山東京傳著　歌川豐廣畫
本朝醉菩提稲妻表紙後編十卷初編六卷後編四卷　山東京傳著　一陽齋豐國畫
阿古義物語十一卷前編五卷後編六卷　式亭三馬著後編爲永春水著
復仇尼城錦三卷　葛飾青滿著　蹄齋北馬畫
忠孝潮來府志六卷　談州樓焉馬著　葛飾北齋畫
復讐繪本檻褸錦三卷　一芳著　春曉齋畫
繪本鎌倉新話六卷　手塚兎月著　西村中和畫
山椒太夫榮枯物語五卷　梅暮里谷峨著　葛飾北齋畫
松井家譜優寃史三卷一名松井民次郎物語　赤城山人著　北川眞厚畫
復讐奇說田村物語五卷　天風坊魚寝老人著　蹄齋北馬畫
十嘉榮利花五卷　良々軒器水著　盈齋北岱畫
おりく幸すけ戀夢艋（ユメノウキハシ）八卷前後　樂々菴桃英著　葛飾北齋畫
椿說弓張月五卷拾遺　曲亭馬琴著　北齋畫
夢想兵衞胡蝶物語五卷前編　同　上　豐廣畫
梅川忠兵衞赤繩奇緣傳木之花双紙三卷　歡鱗陳人著　北齋畫
竹篦太郎犬猫奇談五卷　栗枝亭鬼卵著　畫工不明馬圓カ
繪本小櫻姬風月奇觀三卷　山東京山著　國貞畫
敵討氷上霜六卷　箕山文亭著　蘆溪畫
驚談傳奇桃花流水五卷　山東京山著　豐廣畫

繪本菅原寳記六卷　巨勢法橋秀信畫作
北越奇談六卷　崑崙道人畫作
星月夜鎌倉顯晦錄五卷三編　高井蘭山著

文化七年

復讐奇談葦牙雙紙八卷　錢格子著　石田玉峯畫
繪本夜船譚五卷　速水春曉齋畫作
陝陝（フンヤウ）妹脊山六卷　振鷺亭著　葛飾北齋畫
双蝶白絲冊子五卷　蔦樂亭長根著　同　上
繪本長曾我部物語六卷　小塚兎月著　石田玉峯畫
小説峯農雪吹六卷　三熊野文丸著　合川珉和畫
夢想兵衞蝴蝶物語四卷後編　曲亭馬琴著　一柳齋豐廣畫
昔語質屋庫五卷　同　上　勝川春亭畫
常夏草紙五卷　同　上　同　上
椿說弓張月五卷殘編　同　上　北齋畫
繪本催馬樂奇談六卷　歡鯛陳人著　北馬畫
御堂前敵討繪本顯勇錄十卷　速水春曉齋畫
勇婦全傳更科草紙五卷前編　栗杖亭鬼卯著　石田玉山畫
赤ほしさうし二卷補入　秋里湘夕著

星月夜鎌倉顯晦錄五卷四編　高井蘭山著

文化八年

加之久全傳香籠草六卷　梅暮里谷峨著　歌川豐國畫
忠孝比玉傳六卷一名法花七里道　養拙菴著　四方歌垣校　溪齋英泉畫
繪本昔話松虫墳六卷　聽雨軒著　桂向山人畫
非簑情史夕霜傳記五卷一名丙午俗辨論　手塚兎月著　豐秀畫
青砥藤綱摸稜案五卷前編　曲亭馬琴著　北齋畫
古夢南柯後記八卷前編後編　同　上　同　上
朝顏日記十卷　雨香園柳浪著　北川春政畫

文化九年

復讐奇談在原草紙五卷　感和亭鬼武著　一峰齋馬圓畫
おちよ半兵衞今昔庚申譚五卷　栗枝亭鬼卯著　淺山蘆國畫
金屋金五郎全傳五卷一名情椿守文　金太樓主人著　石田玉山　淺山蘆國畫
櫻木物語五卷　東漁著　石田玉山畫
淺間嶽後帙逢州執着譚五卷　柳亭種彥著　蘭齋北嵩畫
太萬廼佐志玖之五卷　茅停平魚著　野田羅月畫

觀音利生天縁奇遇三卷　神屋蓬洲著並畫
繡像奇談雙三弦五卷　神谷蓬洲著並畫
經島履歷松王物語五卷附錄一卷　小枝繁著　葛飾北齋畫
青砥藤綱摸稜案五卷後編　曲亭馬琴著　北齋畫
絲櫻春蝶奇縁八卷前編後編　同　上
雙蝶記六卷　山東京傳著　豐國畫
矢矧長者淨瑠璃姬物語五卷八冊　文麿著　華月、蘆國畫
寒燈夜話小栗外傳十五卷　小枝繁著　北齋畫
繪本一休譚六卷　遠水春曉齋畫作
勇婦全傳更科草紙五卷後編　栗杖亭鬼卵著　石田玉山畫

文化十年

敎盛外傳青葉笛五卷　高井蘭山著　一峰齋馬圓畫
矢口讀話新田神靈忠孝貞婦傳六卷　濱松歌國著　同　上
念佛壇高砂松則定仁勇傳八卷前編四卷後編四卷　此君亭仙蛾著　石田玉山畫
螢狩宇治奇聞六卷　五島清通著　一峰齋馬圓畫
綟手摺昔木偶五卷　柳亭種彦著　柳川重信畫
皿々鄉談六卷　曲亭馬琴著　北齋畫

美濃舊衣八丈綺談五卷　曲亭馬琴著　蘭齋北嵩畫
伊達模樣和漢の染分五卷　五島清道著　一峰齋馬圓畫
おさん茂兵衞大經師宗像暦六卷　ちぬ平魚著　同　上

文化十一年

繪本黄草紙六卷　玉泉堂膽丸著　淺山蘆國畫
五大力後日物語五卷　狂蝶子文麿著　一峰齋馬圓畫
キノ二全傳駿河舞六卷　濱松歌國著　同　上
北野靈驗二葉の梅六卷　栗杖亭鬼卵著　同　上
骨董新話花標因縁車五卷　萬壽亭正二著　勝川春亭畫
奇談手引絲五卷　高井蘭山著　淺山蘆洲畫
南總里見八犬傳五卷第一輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
朝夷巡島記五卷第一編　同　上　豐廣畫
身延山利生記甲州鰍澤報讐二卷五冊　十返舍一九著　春亭畫

文化十二年

假粧水千貫櫃覧六卷　濱松歌國著　淺山蘆國畫
日本回國勸懲記五卷　同　上

菖蒲草簷五月雨三卷　文東陳人著　歌川國芳畫
秋月奇觀松風村雨物語五卷前編　文東陳人著　歌川國直畫
通俗巫山夢五卷　十返舍一九著　松高齋春亭畫

文化十三年

油賣郎　芝屋芝叟著　春川亀廣畫
天津羽衣譚六卷　雫冲子著　速水春曉齋畫
一休譚後編薄紫五卷　是水叟菊亮著　同　上
再榮花川譚四卷　曲亭馬琴著　歌川豐國畫
鎗の權三累襂五卷　五寶軒奈々美津著　一峰齋馬圓 狂畫堂蘆洲畫
夕霧書替文章五卷　栗枝亭鬼卵著　東南西北雲畫
南總里見八犬傳五卷第二輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
朝夷巡島記五卷第二編　同　上　豐廣畫

文化十四年

報讐竹の伏見六卷　佐藤魚丸著　中邑長秀畫
丹州鬼孃傳五卷　栗枝亭鬼卵著　北堂墨山畫
無雙相藥語平井權八 松葉屋濃紫五卷　作者不明　淺山蘆國畫

文政元年(文化十五年)

春夏秋冬四季物語五卷夏卷　栗枝亭鬼卵著　淺山蘆國畫
昔語打出の濱五卷　其樂人著　北亭墨仙畫
謠曲春榮物語五卷　栗枝亭鬼卵著　北亭墨仙畫
復讐奇談幸物語六卷　同　上　葛飾北齋畫
南總里見八犬傳五卷第三輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
朝夷巡嶋記五卷第三編　同　上　豐廣畫

文政二年

今昔二枚繪草紙六卷　濱松歌國著　淺山蘆國畫
薄雲傳奇廓物語五卷　狐廓亭主人著　百齋墨僊畫
小野篁八十島かげ八卷　是水叟菊亮著　速水春曉齋畫
高麗若全傳逆櫓松六卷　南里亭其樂著　北齋戴斗畫
復讐美鳥林六卷　同　上　葛飾北洋畫

文政三年

小櫻姫風月後記六卷　櫟亭琴魚著　北明樓戴僕 合川珉和 畫
昔語茨の露六卷　好花堂野亭著　葛飾戴斗畫
南總里見八犬傳五卷第四輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
朝夷巡島記五卷第四編　同　上　豐廣畫
斯波遠說七長臣五卷　梅暮里谷峨著　溪齋英泉畫

文政四年

刀筆靑砥石文六卷一名驚水箴語　櫟亭琴魚稿　歌川國直畫
　曲亭馬琴添削
福聚奇遇玉照物語五卷　醒々堂烏有著　百齋墨仙畫
勇婦全傳繪本更科草紙五卷三編　栗枝亭鬼卯著　玉山畫
春宵奇談園の梅五卷　梅園主人著　英泉畫
詠咏寄譚三卷狂歌繪入　萩の屋烏龕等著
朝夷巡島記五卷第五編　曲亭馬琴著　豐廣畫

文政五年

源平外記染分草五卷　東里山人著　勝川春好畫
頓々表紙三卷　曉鐘成著幷畫

朝顏日記　雨香園主人著
南總里見八犬傳六卷第五輯　曲亭馬琴著　柳川重信 溪齋英泉 畫

文政六年

以呂波草紙五卷　曉鐘成著幷畫
奇談情之二筋道四卷　尙古老人著　溪齋英泉畫
勸善常世物語五卷再刻　曲亭馬琴著
復讐嵐山故鄕錦五卷　晶山照月著　速水春曉齋畫

文政七年

繡像名月夜話六卷　晶山保躬著　柳川重信畫
繪圖醜寃根篠雪六卷　文亭箕山著
夢の浮世白壁草紙六卷　東里山人著　岳亭春信畫

文政八年

おはん長右衛門月桂新話十二卷前編六卷後編六卷　栗枝亭鬼卯著　葛飾北齋 柳川重信 畫
復讐奇談五人振袖六卷　蜉蝣子著　東西南北雲畫

梅暦奇談 魁草紙五卷　式亭三馬著　歌川國安畫
鳥邊山調綫五卷　鶴鳴堂主人著　一楊齋正信畫
秋月奇談 松風村雨物語五卷後編　文東陳人著　溪齋英泉畫
星月夜鎌倉顯晦錄五卷五編　高井蘭山著

文政九年

繪本[illegible]花氷裂七卷　山東京傳著
會稽三浦譚六卷　濱松氏助著　東南西北雲畫
朝夷巡島記五卷第六編　曲亭馬琴著　豐廣畫
南總里見八犬傳六卷第六輯　同　上　柳川重信 溪齋英泉畫
忠孝繪話 玉井物語五卷　桃華山人著　畫工不明北齋門人
蓮華銀助 忠臣山賤傳六卷　桃花園三千丸著　葛飾北泉畫
星月夜鎌倉顯晦錄五卷六編大尾　高井蘭山著

文政十年

西國順禮 幼婦孝義錄十卷　爲永春水著　溪齋英泉畫
蓮生法師行脚日記 鞋廼露五卷前編　小枝繁著　同　上
新柳髮物語三卷　柳園種春著　曉鐘成畫

賢女[illegible] 千代物語十卷前後　鼻山人著　溪齋英泉畫
復讐[illegible]物語六卷　金太樓主人著　一楊齋正信畫
松浦佐用姬石魂錄七卷後編　曲亭馬琴著
南總里見八犬傳七卷第七輯上帙四卷下帙三卷　曲亭馬琴著　柳川重信畫
凉浴衣新地誂織五卷　桃山人著　英笑畫
繪本西遊記十卷第二編　譯者不明

文政十一年

[illegible] 金石譚五卷前編　山田案山子著　柳齋重春畫
名勇發功譚五卷　十返舍一九著　春齋英笑畫
嵯峨月[illegible] 大和物語五卷　森川保之著幷畫　東籬亭校
通俗排悶錄六卷　石川雅望譯　池田英泉畫
近世說美少年錄五卷第一集　曲亭馬琴著
俊傑神稻水滸傳五卷第一編　岳亭定岡畫作

文政十二年

三所靈驗 檀風物語五卷　東籬亭主人作　森川保之畫

忠孝伊吹物語五卷　鶏鳴舎曉鐘成著幷畫
都鄙物語五卷前編　手塚兎月著　柳齋重春畫
近世説美少年錄五卷第二集曲亭馬琴著
俊傑神稻水滸傳五卷第二編岳亭丘山畫作
松士全傳忠孝顯名錄六卷　文東陳人著　英齋泉壽畫

天保元年

中國外傳出雲物語五卷　紀美廉呂著 東雛亭補　森川保之畫
復讐琴松譚六卷　柳園種春編　柳齋重春畫
總猨僣語十五卷　瀬川如皐 白頭子柳魚著　溪齋英泉 岳齋丘山畫
初編五卷、二編五卷、三編五卷
蟬丸傳記半月夜話十卷初編五卷後編五卷　白頭子柳魚著　岳亭丘山畫
本朝悪狐傳十卷　岳亭丘山著　英齋國桌畫
三人姉妹戀情穿語六卷　二世南仙笑楚滿人著
嫩髭蛇物語五卷　金亭主人著　英泉畫

天保二年

復讐忠孝二見浦五卷後編　楠里亭其樂著　柳齋重春畫
疏矢松山柳巷話說五卷　曲亭馬琴著
南總里見八犬傳上套五卷第八輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
開卷驚奇俠客傳五卷第一集曲亭馬琴著　溪齋英泉畫

天保三年

孝子美談津摩加佐補五卷　小枝繁著　歌川國直畫
復讐越女傳五卷前編　作者不明　柳川春種畫
近世説美少年錄五卷第三集曲亭馬琴著
南總里見八犬傳下套五卷第八輯　曲亭馬琴著　柳川重信畫
開卷驚奇俠客傳五卷第二集同　上　同　上

天保四年

遊屋形金雞新話十卷前編五卷後編五卷　岳亭丘山著
復讐曠世奇談五卷　振鷺亭著　月光亭墨仙畫
尼子九牛七國士傳五卷初集爲永春水著　松亭金水合作

開卷驚奇俠客傳五卷第三集　曲亭馬琴著　柳川重信畫　國貞畫
繪本西遊記十卷第三編　岳亭丘山譯　北齋畫

天保五年

嵐峽花月奇譚十卷前編五卷後編五卷　瀨川恒成著　菱川清春畫
繪本和田軍記十卷　速水春曉齋著　柳齋重春畫
爲朝外傳琉球軍記十卷　東西菴主人著　石田玉山畫
開卷驚奇俠客傳五卷第四集　曲亭馬琴著　二世柳川重信畫
南總里見八犬傳六卷卷の一より第九輯卷の六に至る　曲亭馬琴著　二世柳川重信畫
俊傑神稻水滸傳五卷第三編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

天保六年

能登守教經外傳西海浪間月五卷　森保之著幷畫
南總里見八犬傳六卷卷の七より第九輯卷の十二に至る　曲亭馬琴著

繪本西遊記十卷第四編大尾　岳亭丘山譯　北齋畫

天保七年

草話風狸傳五卷　一口泉老人著　溪齋英泉畫
柳亭種彥校
歡詩野路の玉川九卷前編五卷後編四卷　作者不明　滄海堂主人畫
南總里見八犬傳六卷卷の十三より第九輯卷の十八に至る　曲亭馬琴著

天保八年

南總里見八犬傳五卷卷の十九より第九輯卷の二十三に至る　曲亭馬琴著

天保九年

南總里見八犬傳五卷卷の二十四より第九輯卷の二十八に至る　曲亭馬琴著

天保十年

繪本曾我物語十卷　一笑居士著

南總里見八犬傳四卷五冊卷の二十九より卷の三十二に至る第九輯　曲亭馬琴著

南總里見八犬傳三卷五冊卷の三十三より卷の三十五に至る第九輯　曲亭馬琴著

和漢今昔犬猩草紙六卷　曉鐘成畫作

嫩髻蛇物語五卷二編　松亭金水著　英泉畫

天保十一年

芳薰巧話好文士傳五卷初輯　爲永春水著　溪齋英泉畫

南總里見八犬傳五卷卷の三十六より卷の四十に至る第九輯　曲亭馬琴著

天保十二年

重局五十三驛五卷　梅菊翁著　歌川影松畫

復讐小史三傑奇譚五卷前編　東雛著　柳齋重春畫

櫻姫全傳曙草紙二卷　山東京傳著

南總里見八犬傳九卷卷の四十一より卷の四十八に至る第九輯　曲亭馬琴著

初輯刊行より二十八ヶ年にして大成

天保十四年

海川夜話仙家月五卷　八島岳亭著幷畫

鎌倉年代記一名鎌倉年代圖會　高井蘭山著

俊傑神稻水滸傳五卷第四編知足館松旭著　一錦亭富雪畫

報仇高尾外傳五卷　楚滿人著　春川英笑畫

弘化二年

新局玉石童子訓卷の一より卷の二十に至る二十卷　曲亭馬琴著

美少年錄續編

弘化三年

俊傑神稻水滸傳五卷第五編知足館松旭著　一錦亭富雪畫

新局玉石童子訓五卷卷の二十一より卷の二十五に至る　曲亭馬琴著

弘化四年

新局玉石童子訓五卷（卷の二十六より卷の三十に至る） 曲亭馬琴著

晝寢續夢五卷 大藏龜翁著 溪齋英泉畫

弘化五年

俊傑神稻水滸傳五卷第六編 知足館松旭著 千錦亭富雪畫

嘉永元年

（寶箏奇談）春雨譚五卷 高井蘭山著 速水春曉齋畫

俊傑神稻水滸傳五卷第七編 知足館松旭著 千錦亭富雪畫

嘉永二年

（甚五郎外傳）左刀奇談五卷 手塚兎月著 松川半山畫

善知安方忠義傳五卷二編 松亭金水著 葛飾爲齋畫

開卷驚奇俠客傳五卷第五集 森園散人著 柳川重信畫

嘉永三年

（[illegible]）[illegible]倉大[illegible]家譜五卷 [illegible]山著 歌川貞秀畫

俊傑神稻水滸傳五卷第八編 知足館松旭著 千錦亭富雪畫

嘉永四年

（忠孝美話）敵討勝山草紙十卷 花笠京英著

前編五卷後編五卷 柳川重信畫

俊傑神稻水滸傳五卷第九編 知足館松旭著 千錦亭富雪畫

同上五卷第十編 同上 同上

傾城畸人傳五卷 淵齋子著 山東京傳閲 玉山畫

艶廓通覽と同本

朝夷巡島記五卷第七編 松亭金水著

嘉永六年

（南宋外傳）木石餘譚六卷第一輯 [illegible]周南著并畫 世々馬琴著

俊傑神稻水滸傳五卷第十一編　知足館松旭著
千錦亭富雪畫
同上五卷第十二編　同　上　同　上
同上五卷第十三編　同　上　同　上
和漢今昔犬の草紙六卷　鷄鳴舍曉晴翁著　畫工不明
勸善夜話五卷後編　大藏龜翁著　島英琳畫

安政元年

英雄智計雜談三卷　笠亭仙果著
朝鮮征伐記四卷繪入　菊地某著
俊傑神稻水滸傳五卷第十四編　知足館松旭著
千錦亭富雪畫
近世美談大川仁政錄五卷第一輯　松亭金水著　歌川芳梅畫

安政二年

芳叢好話高木廼實傳五卷初輯　松亭金水著　葛飾爲齋畫
俊傑神稻水滸傳五卷第十五編　知足館松旭著
千錦亭富雪畫
近世美談大川仁政錄五卷第二輯　松亭金水著　歌川芳梅畫

安政三年

俊傑神稻水滸傳五卷第十六編　知足館松旭著
千錦亭富雪畫
近世美談大川仁政錄五卷第三輯　松亭金水著　歌川芳梅畫

安政四年

芳叢好話高木廼實傳五卷二輯　松亭金水著　葛飾爲齋畫
善知安方忠義傳五卷三編　同　上　柳川重信畫
俊傑神稻水滸傳五卷第十七編　知足館松旭著
千錦亭富雪畫
同上五卷第十八編　同　上　同　上
朝夷巡島記五卷第八編　松亭金水著
近世美談大川仁政錄五卷大尾第四輯　松亭金水著　歌川芳梅畫
嫩髻蛇物語五卷三編　同　上　靜齋英一畫

安政五年

俊傑神稻水滸傳五卷第十九編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

同上五卷第二十編　同　上　同　上

錦襖全傳初瀨物語六卷　栗杖亭鬼卵著　葛飾北明畫

安政六年

和氣清麿一代記本朝錦繪談圖會五卷　東籬亭著

俊傑神稻水滸傳五卷第二十一編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

萬延元年

俊傑神稻水滸傳五卷第二十二編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

文久元年

新編野鹿傳五卷初編　松園主人著　歌川國貞畫

星月光[illegible]下華祥記五卷　爲永春水著　歌川國安畫

俊傑神稻水滸傳五卷第二十三編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

文久二年

新說二熊傳十九卷　松園主人著

初編七卷、二編六卷、三編六卷　歌川國貞畫

俊傑神稻水滸傳五卷第二十四編　知足館松旭著　千錦亭富雪畫

同上五卷第二十五編　同　上　同　上

明治十年

俊傑神稻水滸傳五卷第二十六編　友鳴吉兵衞著

明治十二年

俊傑神稻水滸傳五卷第二十七編　友鳴吉兵衞著

有疑未詳

鐘由来夜啼石狭夜之中山敵討五卷　作者不明
和漢嘉話宿直譚四卷　三宅嘯山著　速水春曉齋畫
難波濕猫の舊語三卷　振鷺亭主人著　蹄齋北馬畫
敵討猫俣屋舖と同本
怪談御伽櫻五卷繪入　雲峰著
報仇安達原六卷　文亭主人著　石田蓼華畫
風聲夜話天橋立三卷　十返舍一九著　畫工不明一九畫か
再開高臺梅六卷　栗杖亭鬼卯著　畫工不明北齋畫か
復仇武藏鐙五卷　石倉堂著　浦川一船畫
玉すだれ七卷　作者不明
本朝水滸傳十五卷後編寫本　建部綾足著
松風蘿月青葉奇說錄一名虚空物語　風月堂南畡著　江湖堂石舟畫
宮城野しのぶ繪本敵討白石話六卷　作者不明
蘭物語五卷寫本　雲府觀天步著
柳荒美談五十卷前編二十五卷後編二十五卷　作者不明
實說名畫血達摩十二回　同上

敵討高田馬場　作者不明
三都勇劔傳三卷　同上
西國巡禮八月赤子娘敵討五卷　同上
繪本孝勇傳八卷　東籬亭作　西村中和畫
繪本義勇傳六卷　速水春曉齋畫作
繪本龜山話十卷　同上
復讐岩見英雄錄七卷初編
同二編七卷　玉藻隱士嗣述
同三編七卷　小澤東陽主人嗣述　六花亭富雪畫
同四編七卷　玉藻主人嗣輯　歌川芳梅畫
繪本誠忠傳十卷　速水春曉齋畫作
忠孝美善錄十卷　東籬亭菊人編　春曉齋畫
繪本伊賀越七卷　春曉齋畫作
鏡山烈女功五卷　作者不明
繪本荒川仁勇傳十卷　同上
繪本雙忠錄十卷　東籬亭著　柳川重信畫
森岡貢物語寫本　作者不明
岩井實記寫本　同上
島川太平犬神物語五卷　一溪主人著　北齋畫
河內木綿團七島五卷　栗枝亭鬼卯著　一峰齋馬圓畫

小野道風 筆海紀事五卷　小枝繁著　蹄齋北馬畫
忠夫貞婦 景清阿古屋松の操五卷　同　上　北岱畫
蜑少女玉取草紙七卷　東漁著　馬圓畫
巨勢金岡 名技傳六卷　優々館著　琅和畫
繪本平泉寶記十二卷　春曉齋畫作
繪本自來也說話十二卷　感和亭鬼武著
繪本口之碑五卷　千鶴庵萬龜著　蹄跡齋雪馬畫
茶店墨江草紙八卷　栗枝亭鬼卵著　蘆州畫
長柄長者 繪本黃鳥塚六卷　同　上　石田玉山畫
新編熊阪物語五卷　同　上　馬圓畫
文學上人 行狀記 橋供養五卷　小枝繁著
濡燕栖傘雨談十卷　墨川亭雪麿著 馬琴 校　柳川重信畫
景清外傳十五卷　小枝繁著　歌川國直畫
箭口神靈 新田功臣錄十卷　同　上　北齋畫
新田功臣錄拾遺五卷　小枝繁稿 爲永春水著
木曾義仲 鼎臣錄二十卷 自前編至四編　眞川如泉著　英泉畫
伊勢新九郎大志傳十五卷　爲永春水著
大內興隆 十杉傳三十三卷　同　上
復讐譽通矢七卷　南里亭其樂編　東南西北雲畫
古今奇說 怪異夜話五卷　清涼井蘇來著　畫工不明

春雨物語 寫本　上田秋成著
夕鵑奇談 二二草(ひとふたぐさ)五卷　振鷺亭著
情花奇語 奴の小まん　柳亭種彥著
祐天上人一代圖會六卷　作者不明
宇都宮金淸水十卷　同　上
義公黃門仁德錄三十卷　同　上
護國女太平記　同　上
天保太平記五卷　同　上
見語大鵬撰十七卷 一名 金澤文庫　知是候著
四國田宮物語正說大全 十卷　作者不明
石井明道士三十卷　望月志隨軒著
關東潔競傳十卷　作者不明
大岡政談　同　上
繪本甲越軍記六十卷 自初編至五編　速水春曉齋著幷畫
楠廷尉秘鑑百三十卷 寫本　著者不明
眞田三代記　同　上
幡隨院長兵衞一代記二卷　奇瓣道人著
天魔水滸傳二十五卷　瓢々舍千成著
神明强勇傳二十五卷　作者不明
鎌倉北條九代記十二卷　同　上

平家物語圖會十二卷　高井伴山校　蹄齋北馬畫

自文政十二年至嘉永二年

參考北條時頼記圖會五卷　東籬主人著

圖會清正記六卷　作者不明

神功皇后三韓退治圖繪五卷　同　上

扶桑皇統記圖會十三卷　好華堂野亭著

前太平記圖會六卷　秋里籬島著　中和畫

保元平治物語十卷　同　上　同　上

鎭西菊地軍記五卷文政十年　曉鐘成畫作

繪本石山軍記三十卷自一編至三編　土屋正義著　松川半山畫

繡像國姓爺忠義傳廿三卷前編十三卷後編十卷　石田玉山畫作

繪本應仁記十五卷　高井蘭山編　溪齋英泉畫

繪本楠公記三十卷自初編至三編　山田得翁著　春曉齋畫

自享和六年至文化六年

繪本太閤記八十四卷自寛政九年至享和二年　岡田玉山畫作

繪本豐臣勳功記八十卷自一編至八編　八功舍德水著

義經勳功圖會十卷　作者不明

義仲勳功圖會十卷　同　上

繪本和田軍記十二卷　同　上

繪本鎌倉太平記十二卷　作者不明

妙見感應清正眞傳記六卷　作者不明

楠正行戰功圖會十一卷　同　上

楠二代軍物語五卷　同　上

大內多々羅軍記六卷　同　上

太田道灌雄飛錄六卷　同　上

重修眞書太閤記自一編至十二編三百六十卷　栗原柳庵著　玉山畫

繪本通俗三國志自初編至八編七十四卷　池田東籬著

古今奇談英草紙五卷　作者不明

八尾地藏通夜物語五卷　浪華散人一樂子著　畫工不明

讀本年表終

参考今昔操淨瑠璃外題年鑑引

今昔操淨瑠璃外題年鑑は、一樂子の編するところにして、寶暦七丁丑年二月大坂島之内八幡筋南綿町書肆文華堂増田源兵衛より出板せり。後明和五戊子年、同じ編者同じ書肆の手より増補せられて出板せられ、又寛政五癸丑年に至り、新訂出板せられたり。今三本を對照して、具に其の異を存し、覽者をして甲乙を讎閲し、彼此を渉獵するの勞を省き、兼ねて自ら其の適從せんとするところを擇ましむと云爾。

明治乙巳冬　　齋藤素影識

參考今昔操淨瑠璃外題年鑑

凡例

一本文はすべて寶暦本に依る。假名づかひ、字づかひ、ならびに假字等、今の眼には如何はしく見ゆるもの少からずと雖も、姑らく舊に據り古を存し、猥りに武斷して改むること無し。

一明和本と付記しあるは、明和五年の刊本に至りて、初めて其文あるものなり。

一寛政本と付記しあるは、寛政五年の刊本に其の文あるものなり。

一各原本共、文字細大種々ありて一ならず、今一々其の舊に準ぜんことを欲すれども、活字の細大おのづから一定の樣式ありて意に任すことを得ず。強ひて舊に準ぜんとすれば、過小の活字を用ひて、人を苦むるに至るの虞あり。よりて文字はすべて一樣の大さとなし、從つて所謂角書（ツノガキ）の類をも一行に書き下したるあり。解事者もとより之を咎むる無かるべきのみ。

一原本多く傍訓を附す。今其の煩を厭ひて、すべて之を省略す。然れども人名地名等、特殊の訓ありて、傍訓無き時は誤訓難訓の嫌あるものは、舊に依りて傍訓を施せり。

明治三十八年冬　編者識

今昔操浄瑠璃 外題年鑑叙

夫浄瑠璃外題の起りは小野のお通と云し女の作られし浄瑠璃物語十二段を始めとす此物語を聞嘗したる後瀧野角澤の兩撿挍大職冠八島高館等の舞の章雅に節を付是を浄るり節と云習はせしより惣名とはなれり其後薩摩次郎右衛門新作を綴り曲節を語り出さる併し其文句何れも短かくして今の世の景事道行抔の類也其上三絃に合するといふ事もなし右の手の爪先にて扇の骨を拆鳴して拍手を取語りたる由江戸鹿子に見えたり其後角澤撿挍三絃に合し始られぬ此角澤の門人京都東の洞院二條の住人目貫屋長三郎と云人都巡り見物左衛門と云外題の五段續を作らる夫より相續き好者の遊人衆或は俳諧師達次第〳〵に新作を編出されたり西鶴翁宇治嘉太夫錦文流近松門左衛門紀海音村上嘉介西澤一風松田和吉長谷川千四竹田出雲爲永千蝶並木宗輔同丈輔等より當時の作者達に連綿せり扨又京都の山本土佐掾宇治加賀掾大坂に井上播磨掾竹本筑後掾豊竹越前掾等の芝居にて語り來られし浄るり段々に繁昌し外題の數凡そ數百千番にも及びなん然るに古代には當時竹本豊竹兩座の別ち有と違ひ同じ浄るりを何れの座にても語られしと見えたり譬ば井上氏の跡目論加賀掾自作のいろは物語山本氏の四十八願記等の例のごとし又井上氏の花山院を弘徽殿嫉妬打と加賀掾方にては外題を替又井上氏の日向景清を松本治太夫方にては鎌倉袖日記と替山本氏方の都志王丸を岡本文彌は山桝太夫と變じ加賀掾方の團扇曾我を筑後掾芝居にては百日曾我と變題されし樣成例無數からず其上前々は不葉流成浄るりは板本にも成らざる由勿論井上氏山本氏の時代には繪入細字の讀本計りにて稽古本といふは曾てなし貞享二乙丑年に七ッ伊呂波の浄るり五段を大字八行に板行させ宇治加賀掾節章を指し直の正本と號して出さる是稽古本の最初也其後寶永七庚寅の年竹本筑後掾の語られし吉野都女楠の時よりも大字七行と成し始是より前々の當り浄るり共をも改め七行に再板せられし也然るに寶永年中京都二度の大火事次に享保辰の年大坂大火の砌古來の正本板木燒失して傳はらざるも多し然れ共予若年の比より此道を好る餘りに

古流の名に觸し外題共を次第の前後に搆(カヽハ)らず思ひ出せるまゝに拾ひ集め次に竹本豊竹兩芝居共に近頃の分は初日の年月日を記し次に名高き太夫達の出勤退座の節を顯はし此道を好き給ふ衆中の慰み共ならんかしと並出せり勿論年舊し事成ば流儀部分の相違近來の分は初日の月日闕及びの違ひ外題文字の誤り等も多からんなれば用捨を希而已

寶暦七丁丑年二月　八十翁　一樂

参考今昔操浄瑠璃外題年鑑

目録

古流井上播磨掾分
同　門弟井上市郎太夫分
同　同清水理兵衛分
同　山本土佐掾(角太夫事)分
同　門弟松本治太夫分
同　同　都太夫一中分
同　宮古路國太夫事
同　岡本文彌分
同　門弟阿波太夫分
同　宇治加賀掾(嘉太夫事)分
同　門弟野田若狹富松薩摩分
同　伊勢島宮内同佐太夫事
同　道具屋吉左衛門分
同　表具又四郎分

當流竹本喜與太夫分
同　伊藤出羽掾座分
同　明石越後分
同　陸竹小和泉分
同　江戸豊竹肥前掾並來歴分
同　京都竹本義太夫座の事
同　大坂諸所稽古浄瑠璃場始り之事
當流祖竹本筑後掾分
同　豊竹越前掾分
正徳享保已來両座替り浄瑠璃初日年月日記
明和本、寛政本、正徳、享保を改めて貞享元祿と有
古今太夫受領年月記
両座太夫出座退座の事
出語出遣始りの事
時代事世話浄瑠璃始りの事
出語太夫ワキツレ三絃人形出遣日記
芝居の表へ幟進物等到來の始り
間の狂言道具建の事

舞臺に小幕を引初る事
正面の床を横床に直す時節の事
兩座諸事の始りの事

寛政本

堀江市の側豐竹此太夫座の分
大坂所々新淨るりの分
江戸表新淨るりの分
京都新淨るりの分
讀本淨るりの分
　作者附のならびに同上とこれあるは二度目のことにはあらず作者付なり

参考今昔
操浄瑠璃 外題年鑑

一楽子 編

古流井上播磨掾 並門人井上市郎太夫 清水理兵衛分

新十二段
是は古への十二段を作り直したる物なり
二王の本地
日本廻り
是は中古の見物左衛門を綴直せしなり
舟遺恨
粟津の太郎が敵討の事なり
女袖鏡
是は後に作り直し日向景清と號す
都女商人
放下僧の能をやつせしものなり
二親孝行
是はみのゝ國太郎介が行跡なり

金平法問諍（アラソヒ）
白旗の由來
八幡太郎よしいへの事を作りしなり
敵討の遺恨
五天笠
祇園精舎
天鼓
大友眞鳥
日本王代記
荏柄平太
神道蟻通
百合若麿
甲賀三郎
源平戀の遺恨
道釋禪師傳
長谷寺利生記
土蜘蛛退治
金剛兵衛左文字刀
兵庫の築嶋
二代の敵討
田村將軍初觀音

三浦北條軍法競
楠千早合戰
河津相撲の遺恨
東大寺大佛緣起
佐々木藤戸先陣
三浦大助老後譽
源氏十五段　井上市郎太夫
五大力菩薩　同上
待宵物語　清水理兵衞
源氏東の門出
上東院　同上
松浦五郎旅日記
井上氏一生に語られし淨るり百餘番も有之由西澤氏の操年代記に見へしか共予見聞及ばざれば爰に止まる追々考へかき加ふべし

山本土佐掾（角太夫事）幷門弟松本治太夫
都太夫一中分
楠天外兵法問答　寛政本
角田川
利屈物語
一休物語
賴光跡目論
源氏箙紫合戰
根元曾我物語
聖德太子傳記
業平一代記
源氏熱田合戰
賴義北國落
花山院物語
賴朝七騎落
菅原親王行狀記
蒲御曹司東踏歌
金剛山合戰
大曾我富士牧狩
賢女手習鑑
日向景淸
信濃源氏木曾軍記
大職冠知略玉取
大念佛由來

小野篁
むらさき野　寛政本
天親菩薩
愛子の若
阿漕平次
傳教大師記
王照君
生捕八百人　寛政本
清水晴玄
源氏蓬萊三ッ物
三條小鍛冶
女人往生記
行基誕生記　寛政本
久米仙人
都志王丸
飛驒内匠
天王寺彼岸中日
善光寺開帳
信田小太郎
信太妻

熊井太郎孝行巻
西敎寺七万日廻向
三世二河白道
小敦盛
鉢被
小栗判官
逆髮王子横車
因幡堂開帳
眉間尺物語
石童丸
浦嶋太郎
入鹿大臣
四十八願記
平親王將門
花山法皇順禮記
袈裟御前物語
酒呑童子
日蓮聖人德行記
高砂　松本治太夫
牛若東下向　同上

源氏烏帽子折　松本治太夫
此時藤九郎盛長瀧谷金王丸二ツの人形に初て足を付たり
石川五右衛門　松本治太夫
鎌倉袖日記　同上
八島合戰　同上
清水寺利生物語　同上
傳授小町　都太夫一中
万屋助六心中　同上
椀久末の松山　同上
業種の花盛　同上
幸崎浪枕　同上
彥三近江八景　同上
愛染明王影向松　同上
おしゆん傳兵衛川原の心中　同上

岡本文彌幷門弟阿波太夫分

三桝太夫
源翁上人記
曇鸞大師記
大職冠方便の玉
阿彌陀坊
守屋大臣
日親上人法難記
中將姫蓮臺陀羅
三田八幡御傳記
戀塚物語
百合若高麗攻
契史國物語
長命寺開帳
中山利生物語
雁金文七
元祿十五年壬午八月十六日に御仕置に合同九月九日初日なり
善光寺開帳
照天姫操車
當世嫁續日本紀
卅三間堂棟由來
岡本文彌同阿波太夫松本治太夫都太夫一中等は何

れも先師土佐掾又は井上氏の淨るりを多分語られし故新作多からず別して一中の弟子宮古路國太夫は竹本豐竹の世話淨るり共を取直し語られしゆへ一生の間新作五段續の時代事を勤められしを聞及ばず

宇治加賀掾(嘉太夫事)並門弟衆の分

大磯虎遁世記
小晒物語
百人一首
西王母
一心五戒玉
身替問答
融大臣
今川了俊
柿本人丸
大佛供養
西行物語
染殿后

吉備大臣
淨藏貴所八坂塔
俵藤太
和田軍
中將姫
柏崎
弓削道鏡
當流小栗物語
元服曾我
融通大念佛　寛政本
阿部宗任東大全
日本武尊
丹生山田　寛政本
小袖曾我
衣通姫和光玉
梅雨左門由來　寛政本
三井寺狂女
十六夜物語
清明道滿行力諍
夜討曾我

摩耶山開帳
小野道風額揃
法隆寺開帳
弘徽殿嫉妬打
源頼家鞠始
神武帝潤正月
薩摩守忠度
惟喬惟仁位諍
大原問答
三社の託宣
須磨寺青葉笛
富貴曾我
門出八島
浦島太郎七世緑
遊行上人名號記
暦
傾城反魂香
蒲冠者鞠初
賢女相生松
弱法師

徒然草
いろは物語
天神御本地
鳥羽戀塚物語
世繼曾我
此淨るりの時朝比奈の人形に足を付初しより諸流
共に立物人形に足をつけたり
伏見常盤
葵の上
藍染川
凱陣八島
東山殿子日遊
本領曾我
關東小六東六法
辨慶京土産
平安城都遷
頼朝由井濱出
おなつ清十郎歌念佛
吳羽中將廿三夜待
曾我七ッ以呂波

桑原女之助
津戸三郎往生要集
遊君三世相
源三位頼政
葛葉道心物語
主馬判官盛久
團扇曾我
義經懐中硯
壽永忠則
刈萱道心物語
結城七郎小袖買
石山寺開帳　野田富松
吾妻歌七枚起請　同上　寛政本
吉岡染房染　同上
新腰越訴状　同上
舎利　寛政本
難波五人男　同上
西明寺殿行脚松　同上　寛政本
忠臣身替物語　同上　寛政本
傾城妻見池　同上

夕霧笹の袂　同上
富士淺間舞樂諍　同上
今様伊路葉物語　同上
辛崎一木松　同上
白髭壽命髪置　同上　伊藤流枝作　寛政本
桅久狂亂笠　同上
魂産君觀音　宇治
誓願寺名號記　同上
女人即身成佛記　同上
傾城今西行　同上
傾城八重櫻　同上
鞍馬山師弟杉　同上　清水三郎兵衛作　寛政本
曾我花橋　同上
玉黒髪七人化粧　同上
南部御影森　同上
念佛往生記　同上
加增曾我　同上　寛政本
条盛久地獄ゑとき　同上　寛政本
遊行念佛記　同上
頼政歌道扇　同上　享保四年十月十一日

伊藤流枝、清水三郎兵衛作
傾城我立柚　同上
傾城淺間嶽　同上
龍城連理鐘　同上
伊勢御遷宮　宇治
傾城浮洲岩　同上
八幡宮和光白旗　野田富松作
三井寺豐年護摩　同上
大黑天万寶御藏　同上
南大門秋彼岸　同上
愛宕山旭峯　同上
大和歌五穀色紙　同上
傾城紋日曆　同上
忠臣伊呂波夜討　立花
關東小六丹前姿　富松
扇の芝　寛政本

加太夫の先師伊勢嶋宮内淨るりも江戸の大ざつま杯と同前に五段續の外題を聞及ばず宮内門人佐太夫後に節齋と云し人京都北野にて芝居を興行し久々勤められしか共數年の間加賀掾と井上氏との淨るりを語られしなり又加賀掾弟子野田若狹北野七本松糸屋伊右衛門定芝居の太夫にて久々勤められしか共新作の淨るり多からず此外に富松さつま宇治さがみ立花河內等右に同じ就中富松氏は四條宇治加太夫定芝居にて宇治宮內等と同座にて永々勤められし中は大坂竹本豐竹兩座の新淨るり共を替る〴〵語られし故自分の新作すくなし

道具屋吉左衛門節

四天王雷論
蔦紫問答
金平地獄破
鎭西八郎
三原合戰

表具又四郎節

木曾義仲
難波八景

草紙洗小町
忠臣兵揃
右の兩人は井上氏の淨るりを多分語られし也

竹本喜世太夫曾根崎芝居にて 享保四年
龍宮東門阿波鳴戸
熊野權現烏午王
此人道頓堀にて芝居興行せられし節は古淨るりなり

伊藤出羽掾芝居にて當流
一心二河白道 寛政本
雁金文七 寛政本
前内裏嶋都遷 享保十七壬子年十二月十二日初日
作者豐田新助土木待賈
伊藤伊太夫初出座
孝謙天皇倭文談
是は少しの間の興行にて本不出此節より芝居斷絶

したり

明石越後曾根崎芝居にて
三軍桔梗原 延享乙丑二年一月十三日初日
作者櫻井賴母文瀾堂陸竹伊豆太夫竹本源太夫
延喜帝秘曲琵琶 同年孟夏上の三日
作者紀甘谷

陸竹小和泉芝居道頓堀にて
歌枕棣棠花合戰 延享三年丙寅八月三日初日
作者春草堂並木宗助
唐金茂右衛門東鑑 延享二年十二月朔日
作者櫻井賴母並木和助
女舞劔紅葉 同三年十月廿一日
作者春草堂大當り
鎮西八郎射往來 同四年二月廿一日
作者春草堂
氷室地大内軍記

大田出語り、和佐太夫　　寛政本
此外古代に虎屋喜太夫次に陸奥茂太夫二ツ井彦太夫永島重太夫竹本源太夫辰松八郎兵衛等大坂表にて芝居興行在りしが其何れも井上竹本の淨るりを語られし故別に新作を見聞及ばず

江戸豐竹肥前掾（新太夫事）

享保十九甲寅の年御江戸表に立越四五年の間は若松丹後掾といふ名代にて芝居を興行せられ其後又辰松氏の芝居にても勤められしが元文年中に今の芝居を求め普請成就し豐竹肥前掾藤原淸正と新たに櫓幕を揚られたり當座淨るりの外題

石橋山鎧重　　寛保二年八月朔日
作者豐岡彌平爲永太郎兵衛
義經新含狀
寛政本に無し
日蓮記見硯　　寛延二年十月八日
古人近松門左衛門作並木宗助添削
肥前座　　寛政本

增補日蓮記　後江戸の分の見硯　　寛延三年八月朔日
小山判官信田小太郎新板車物語
作者並木良助
霞の關寺鐘の渡守八幡太郎東海硯　　寛延四年八月朔日
作者、二三輔
親鸞聖人繪傳記
十五男女太平記枕詞　　寶暦二年七月廿一日
作者安田蛙文
聖德太子職人鑑　　寶暦八年八月朔日
四天王寺伽藍鑑也　　寛政本
當座に限らず江戸表の外記辰松等の操芝居此二三十ヶ年の間は何れも大坂竹本豐竹兩座の淨るり共を替る〴〵に勤らるゝ故新作の外題を見聞及ばず

京都竹本義太夫芝居

寶暦三年癸酉の春より始る當座は大坂表の太夫達入替りて勤らる勿論大坂本家芝居の淨るりを勤る故別に新作はなし

追加

寶永四丁亥年二月大坂生玉御社の境内におゐて竹本豊竹の淨瑠璃稽古場始る夫より諸方の寺社境内にて興行有日を追て益々繁昌す

京都竹本義太夫芝居

寶暦三酉春より多分大坂本家の淨るりなり　寛政本

花系圖都鑑　寶暦十二年〃三月廿一日
寛政本

契情阿古屋の松　寶暦十四年申　正月
寛政本

京羽二重娘形氣　同年四月十七日
寛政本

當流竹本筑後掾(義太夫事)

竹本義太夫は攝州天王寺村農家の出産成しが若年の比より井上播磨掾の淨瑠璃を好みて修行せられ延寶年中大坂虎屋喜太夫芝居を勤め天和年中京都へ登り宇治加賀掾芝居を勤め貞享二年大坂へ歸り道頓堀にて自分に櫓を揚て常芝居を興行せられ其後筑後掾と受領せらる最初貞享二年より明和四年迄八十三年なり而益々繁昌せり最初より替り淨るり初日年月日に及び他所行又は名高き太夫衆の出座退座委細に記す

寛政本

當流竹本筑後掾(義太夫事)

大坂道頓堀にて芝居興行の始めは貞享二年乙丑の二月也最初の淨瑠璃は世繼曾我次に藍染川其次はいろは物語此三番は加賀掾方の古物其次に井上氏方の賢女手習鑑頼朝七騎落以上五替りは先師達の語られし右淨るりにて仕廻同三年寅の春より近松門左衛門京都より新物を作り越さる其第一は

出世景清

是は近松門左衛門氏竹本義太夫新淨るり作の最初

なり此節は近松氏京都住居なり後に大坂へ下り多
分新作をせられしなり當夏京都へ行　寛政本
世繼曾我　貞享二年乙丑二月朔日初日
宇治加賀掾方の古淨るり也　寛政本
藍染川　同年四月八日
右同斷　寛政本
いろは物語　同年七月十五日
右同斷　寛政本
一心五戒玉
右同斷　寛政本
賢女手習鑑　同年九月二十一日
井上播磨掾方の古淨るりなり　寛政本
頼朝七騎落　同三年正月二日
右同斷　寛政本
佐々木大鑑　同年七月十五日
又佐々木先陣とも　右同斷
多田滿仲記　同年九月十三日
達磨の本地　貞享四丁卯年正月八日
當三月より中國路所々旅行
源氏冷泉節　貞享五戊辰年正月二日

當夏江州大津より伊勢へ行
大塔宮熊野落　元祿元年十月十二日
同年九月改元
定家卿小倉色紙　同二年正月二日
天智天皇　元祿二年三月三日
當夏泉州堺より紀州へ行
今様柏木　元祿二年八月十五日
當冬京都北野へ行
自然居士　元祿三庚午年正月十四日
源氏十二段　同年三月三日
當夏秋堺奈良和州へ行く
讃談記　同年十月十一日
今様柏崎　元祿五壬申年正月二日
當春京都七の社へ行　寛政本
日本西王母　同年四月八日
作者近松門左衛門
當秋冬西國中國所々へ行　寛政本
愛子若都富士　元祿六癸酉年正月二日
平假名太平記　同年三月三日
新本領曾我　同年五月六日

當秋冬和州美濃尾張へ行
辨慶出生記　元祿七年甲戌正月九日
寛政本
松風村雨束帯鑑　同年三月三日
作者近松門左衞門
當夏京都中御靈の社内秋冬は北野七の社行
寛政本
齋藤別當實盛　元祿八年乙亥正月二日
多田院開帳　同年三月六日
釋迦如來誕生會　同年四月八日
作者近松門左衞門
當夏秋堺奈良和州所々行
鎌田兵衞名所盃　同年十月十二日
忠信二十日正月　元祿九丙子年正月八日
當夏伊勢へ行
當麻中將姫　同年四月十四日
當夏讃州より宮嶋へ行
義經追善女舞　同年九月九日
那須與市小櫻威　元祿十丁丑年二月朔日
新板腰越狀　同年四月六日

當夏泉州堺より奈良へ行
賴朝伊豆日記　同年七月十五日
作者近松門左衞門
百日曾我　同年十月十三日
初めは團扇曾我と號せし京都宇治加賀掾淨るりに
て近松の作成し定日百日相勤めしゆへにことぶき
て百日曾我と云此時分は百日と勤めし事は珍しき
がゆへなり　寛政本
今様小栗判官　元祿十一戊寅年二月十四日
作者近松門左衞門
小野道風記　同年五月五日
義經東六法　同年六月五日
當秋伏見中書嶋夫より伊勢へ行
源氏烏帽子折　二度目　元祿十二己卯年正月二日
當春泉州堺へ行　山本土佐椽古淨るり
本海道虎が石　同年五月六日
當秋備中宮内藝州宮嶋へ行
浦嶋年代記　同十三年正月六日
作者近松門左衞門
長町女腹切　正月六日

作者近松門左衛門
淀鯉出世瀧德　同年四月八日
作者近松門左衛門
當夏堺奈良へ行
因幡藥師傳記　同年九月九日
當春より休足京へ行
蟬丸　元祿十四年辛巳五月六日
作者近松門左衛門
竹本義太夫筑後掾藤原博教と勅許受領の弘めを勤
める今年五十一才なり
神記粟万石　同年八月朔日
前、十二段長生嶋臺　同年九月九日
切、大掛物十幅對　同　上
作者近松門左衛門　寛政本
曾我五人兄弟　同年十一月朔日
同　上
前、傾城八花形　元祿十五壬午年正月二日
切、豐年富貴万歳　同　上
當春の末伊勢へ行
大磯虎稚物語　同年五月二十八日

同　上
加古教心七墓巡　同年七月十五日
同　上
新一心五戒の玉　同年九月九日
來春堺より奈良へ行
西明寺殿百人上臈　同十六年未正月四日
作者近松門左衛門
前、日本王代記　同年五月七日
切、おはつ德兵衛曾根崎心中　同　上
此心中は當四月二十三日也
作者近松門左衛門
是世上世話浄るりの始めにて竹本氏古今の大當り
なり　寛政本
前、悦賀樂平太　元祿十七甲申年正月十五日
切、源五兵衛おまん薩摩歌　同　上
作者近松門左衛門
前、甲賀三郎　當四月改元　寶永元甲申年四月十六日
切、おふさ德兵衛心中重井筒　同　上
同　上
當秋冬太夫病氣休息是まで筑後掾自分の座本なり

用明天王職人鑑　　寶永二乙丙年三月二日
同　上
今度より竹田出雲掾竹本芝居の座本と成る人形の衣裳に及び道具建等まで立派になりしなり鐘入の段太夫筑後掾三味線竹澤權右衞門おやま人形辰松八郎兵衞出語り出遣ひ今度より仕初る
雪女五枚羽子板　　同年七月十四日
同　上
傾城反魂香　　同年八月十五日
同　上
前、木曾軍記　　同年十一月二十一日
切、お夏清十郎笠物狂　　同　上
義經將棊經　　寶永三丙戌年正月二十五日
前、本領曾我　　同年三月二十七日
切、心中二枚繪草紙　　同　上
作者近松門左衞門　　寛政本
兼好法師物見車　　同年五月五日
同　上
碁盤太平記　　同年六月朔日
同　上

同跡追一段物　　同　上
同　上　　寛政本
曾我扇八景　　同年七月十五日
同　上
前、扇八景三段目迄　　同年九月二十一日
切、おさん茂兵衞大經師昔暦　　同　上
同　上　　寛政本
吉野忠信　　寶永四丁亥年正月二十日
前、吉野忠臣三段目迄　　同年二月十五日
切、堀川波の鼓
寛政本
前、今川了俊　　同年四月二十一日
切、おかめ與兵衞卯月紅葉　　同　上
寛政本
前、根元曾我　　同年六月朔日
切、後日卯月の色上ゲ　　同　上
寛政本
前、源氏十二段　　同年六月廿四日
切、關小まん丹波與作待夜小室節　　同　上
酒呑童子枕言葉　　同年九月九日

作者近松門左衛門
前、酒呑童子三段目迄　寶永五戊子年四月十六日
切、おむめ久米之助心中萬年草　同　上
同　上
當夏奈良伊勢へ行
秋より冬備中宮内藝州宮島へ行　寛政本
今川制詞條目　寶永六丑年正月二日
おなつ清十郎五十年忌歌念佛
寛政本
前、今川三段目迄　同年三月三日
切、上卷助六千日寺心中　同　上
寛政本
前、新天鼓　同年四月八日
切、おきさ源五兵衛蘆分船　同　上
當夏伊勢へ行
紅葉狩劔本地　同年九月九日
作者近松門左衛門
當冬伏見中書島行
曾我虎が石磨　寶永七庚寅年正月二日
前、虎が石磨三段目迄　同年正月廿三日

切、おきさ二郎兵衛掛鯛心中　同　上
寛政本
大原問答靑葉笛　同年三月四日
作者近松門左衛門
百合若大臣野守鏡　同年五月六日
同　上
前、野守鏡三段目迄　同年六月十六日
切、心中氷の朔日　同　上
同　上　寛政本
前、根元曾我三段目迄　同年七月廿四日
切、夕霧阿波鳴戸　同　上
當秋より冬堺伏見大津へ行　寛政本
新いろは物語　寶永八辛卯年正月九日
作者近松門左衛門　寛政本
前、いろは三段目迄　同年三月五日
切、梅川忠兵衛冥途飛脚　同　上
同　上　寛政本
當五月正德と改元當夏和州より伊勢へ行
吉野都女楠　正德元辛卯年九月十日
同　上

前、傾城掛物揃　正徳二壬辰年三月四日
切、丹波與作　二度目　同　上
同　上
今度和歌竹政太夫始て出座道中双六出語り後に竹本と改む
弘徽殿鵜羽産家　同年五月五日
同　上
二百番の内娵山姥　同年七月十五日
作者近松門左衛門
傾城吉岡染　同年十一月二日
同　上
河内國姥が火　正徳三癸巳年正月二日
作者松田和吉
天神記　同年二月廿五日
作者近松門左衛門
今度彦太夫初て出座後に大和太夫と名を改む天拜山節事出語り
孕常盤　同年七月十六日
同　上
新撰大職冠　同年十一月朔日
同　上
相撲入道千匹犬　正徳四甲午年四月八日
同　上
瀧口横笛娯(カホヨ)歌がるた　同年八月朔日
同　上
筑後掾事當八月中旬より病氣にて引込保養に相叶はず終に當九月十日行年六十四歳にて死去せらる法名は釋道喜と號せり此人芝居興行貞享二乙丑年より當正徳まで年暦三十ヶ年淨るり九十四番を操に掛て勤められたり其助の衆中には豊竹若太夫陸奥茂太夫長嶋重太夫二ッ井彦太夫多川源太夫内匠理太夫竹本難波豊竹万太夫竹本喜代太夫竹本頼母若竹政太夫竹本彦太夫竹本文太夫其外の衆中年々に替りてつとめられたりこれより筑後掾死後の分
嵯峨天皇甘露雨　同年十月十五日
同　上
此節の太夫竹本頼母内匠理太夫竹本政太夫豊竹万太夫竹本文太夫大和太夫退座　寛政本
二人靜胎内探　同五年未正月二日
同　上

當春伊勢へ行

持統天皇歌軍法　同年八月朔日

同　上

此節迄は淨るり短かき故間の物にのろま人形のどうけ或はからくり有こくせんやよりはかゝる事もなし

筑後掾芝居興行貞享二年より已來三十二三ヶ年の間井上氏宇治氏先師達の勤られし淨るり凡五六十番餘も語られしかども前の部分に出せる故爰に略す此外近松氏に及び其他の新作百餘番都合百五六十番餘を操に掛て芝居を勤め正德四年甲午九月十日六十四歳にて死去せらる豐竹若太夫陸奥茂太夫二ツ井彦太夫内匠利太夫竹本難波多川源太夫豐竹萬太夫竹本賴母竹本喜代太夫竹本政太夫竹本大和太夫竹本文太夫等の衆中筑後掾存生の内勤められしなり筑後掾死後國性爺よりは替り淨るり初日の年月日に及び他所行又は名高き太夫衆の出座退座を記す

嘉平治おさが生玉心中

同　上　寵政本

父は唐土母は日本國性爺合戰

初日正德五年乙未十一月朔日より三年越十七ヶ月勤む來申正月閏有

九仙山竹本賴母内匠理太夫竹本文太夫三枝鶴澤三二三段め同政太夫豐竹万太夫同ワ波作者近松門左衞門

種は日本産は唐土同後日合戰

同　上　享保二年丁酉二月十五日

大幕の上に小幕を引き初む此度吉田文三郎初て出座

曾根崎心中　二度目　同年八月朔日

鎗權三重帷子　同年八月二十二日

同　上

聖德太子繪傳記　同年十一月十六日

同　上

文太夫退座

山崎與次兵衞壽門松　享保三年戊戌正月二日

同　上

大和太夫再出座

日本振袖始　同年二月二十二日

同　上
曾我會稽山　　同年七月十五日
同　上
日蓮上人記　閏十月有　同年十月十二日
同　上
傾城酒呑童子　同年十月二十五日
同　上
いづみ太夫事澤太夫初て出座
博多小女郎浪枕　同年十一月二十日
同　上
國太夫出座
善光寺御堂供養　同年十二月十三日
同　上
本朝三國志　享保四年己亥二月十四日
同　上
女倭寛女牛若平家女護島　同　上　同年八月十二日
島原蛙合戰　同年十一月六日
同　上
出語り大和太夫ツレ國太夫三絃鶴澤三二
國性爺合戰　二度目　享保五年庚子正月二日

九仙山頼母三絃三二事鶴澤友二郎
井筒業平河内通　同年三月二日
同　上
出語太夫頼母ツレ澤太夫三絃友二郎
双子隅田川　同年八月三日
同　上
日本武尊東鑑　同年十一月四日
同　上
陸奧茂太夫再勤
小春治兵衞心中天網島　同年十二月六日
同　上
文太夫又出座
攝津國夫婦池　享保六年辛丑二月十七日
同　上
千疊敷出語大和太夫ツレ國太夫三絃友二郎
女殺油地獄　閏七月有　同年七月十五日
同　上
信州川中島合戰　同年八月三日
同　上
山すだれをはりぬきの本山に作り初む

唐船噺今國性爺　同七年壬寅正月二日
同　上
式太夫出座
浦嶋年代記　二度目　同年三月三日
心中宵庚申　同年四月二十二日
同　上
祇王祇女佛御前扇軍　同年九月朔日
作者松田和吉
當冬茂太夫退座
大塔宮曦鎧　享保八年卯二月十七日
作者竹田出雲松田和吉
お吉容月櫻町昔名花　同年十一月二十四日
將軍太郎良門出羽冠者賴平關八州繫馬
作者近松門左衛門　同九年正月十五日
當三月二十一日大坂中大火芝居類燒故四月八日よ
り假芝居にて酒呑童子持統天皇相模入道十日替に
相勤むる
三國志大全諸葛孔明鼎軍談　同年七月十五日
作者竹田出雲
右大將鎌倉實記　同年十一月四日

同　上
當十一月二十二日近松門左衛門死す
出世奴雛物語　同十年乙巳五月九日
同　上
和泉太夫退座
復鳥羽戀塚　同年六月十五日
喜太夫出座
大內裏大友眞鳥　同年九月十八日
作者竹田出雲
此節政太夫大和太夫文太夫式太夫喜太夫等相勤む
翌年午六月より南都へ行大友眞鳥河內通鎌倉實記
伊勢平氏年々鑑　同十一年丙午九月十三日
同　上
道行出がたり政太夫大和太夫三紋友二郎
敵討未刻の太鼓　享保十二年丁未正月十五日
同　上
前淨るり鼎軍談　正月に間有
小野炭燒深草土器師七小町　同年四月十八日
同　上
三莊太夫五人孃　同年八月朔日

作者竹田出雲
工藤左衛門富士日記　同十三年戊申三月二十二日
同　上
加賀國篠原合戰　同年五月二十三日
同　上
初て正面の床を横へ直す
尼御臺由井濱出　享保十四年己酉二月十五日
大塔宮曦鎧　二度目　同年六月十八日
眉間尺象貢　同年八月朔日
作者竹田出雲長谷川千四
當九十月京都へ行大友眞鳥三莊太夫
京土産名所井筒　同年十一月廿五日
作者長谷川千四
三浦大助紅梅鞆　同十五年庚戌二月十五日
作者長谷川千四文耕堂
信州姨捨山　同年八月朔日
同　上
須磨都源平躑躅　同年十一月十五日
同　上
國性爺合戰　三度目　享保十六年辛亥五月五日

天滿繪負組より芝居の表に初て幟を立る
鬼一法眼三略卷　同年九月十三日
同　上
增補用明天皇　二度目　享保十七年壬子四月朔日
鑓入出語政太夫三絃友二郎出遣人形桐竹三右衛門
伊達染手綱　二度目　同年六月八日
作者近松門左衛門
前淨るり　信大小太郎
檀浦兜軍記　同年九月九日
作者文耕堂長谷川千四
大内裏大友眞鳥　二度目　享保十八年癸丑二月朔日
當三月十二日大和太夫死す
太平記住吉卷車返合戰櫻　同年四月八日
作者文耕堂
和泉太夫又出座
今度大盛彥七人形にゆびさきの動事を仕初む當六月三十日芝居類火假家芝居にて景事攝夫より上京
鬼一法眼國性爺
椀久松山元日金年越　同年十一月十五日
同　上

七太夫出座
應神天皇八白旛　享保十九年甲寅二月朔日
政太夫義太夫と名を改む
河内通　二度目　同年六月八日
蘆屋道滿大内鑑　同年十月五日
作者竹田出雲　桒卯年三月聞有
三輪太夫出座内匠太夫と名改む
此節義太夫式太夫和泉太夫喜太夫七太夫常太夫等
勤む今度與勘平より人形の腹ふくるゝ様に切初る
當秋京へ行大内鑑
甲賀三郎窟物語　同廿年乙卯九月十四日
作者竹田出雲文耕堂
赤松圓心綠陣幕　同廿一年丙辰二月朔日
作者文耕堂三好松洛
受領の祝儀に進物を芝居の表に餝り初む
享保廿年乙卯十一月義太夫事勅許受領竹本上總少
掾藤原喜教祝儀出語天神記莫加松三紘鶴澤友二郎
敵討襤褸錦　同年五月十二日
作者文耕堂三好松洛
前浄るり四季十二段出語和泉太夫三味せん友二郎

猿丸太夫鹿巻毫　同年十月十三日
同　上
御所櫻堀川夜討　元文二年丁巳正月廿八日
同　上
上總掾播磨少掾に變名す
太政入道兵庫岬　十一月に聞有　同年十月十日
作者竹田小出雲竹田正藏
美濃太夫出座合羽伊太夫事
行平磯馴松　同三年戊午正月廿五日
作者文耕堂三好松洛
此節和泉太夫死す
小栗判官車街道　同年八月十九日
作者千前軒文耕堂
美濃太夫事此太夫と名を改む
ひらがな盛衰記　同四年己未四月十一日
島太夫初て出座
今川本領猫魔館　同五年庚申四月十一日
作者文耕堂千前軒
將門冠合戰　七月聞有　同年七月朔日
同　上

前、百日曾我　二度目　同十一月十一日
切、戀八卦柱暦　同　上
近松門左衛門十七回忌追善
伊豆院宣源氏鑑　同六年辛酉正月十四日
同　上
百合太夫紋太夫初て出座
新うす雪物語　寛保元年酉五月十六日
作者文耕堂竹田小出雲
此節出勤之衆此太夫島太夫百合太夫當冬七太夫江
戸へ行播磨掾内匠太夫紋太夫七太夫三絃鶴澤友二
郎相勤むる
花衣いろは縁起　寛保二年壬戌二月十四日
去冬内匠太夫退座
室町千疊敷　夫婦池也二度目　四月十七日
出語太夫此太夫ヶし島太夫三絃友二郎
男作五雁金　同年七月二日
作者竹田出雲
當冬河内太夫事　駿河太夫出座追付死す
入鹿大臣皇都諍　四月閏有　寛保三年癸亥四月六日
丹州爺打栗　同年五月十八日

作者竹田小出雲三好松洛
大内裏大友眞鳥　三度目　同年十月廿五日
政太夫初て出座ざこば重二勝事
兒源氏道中軍記　同　上　延享元年甲子三月六日
當七月廿五日播磨掾死す行年五十四歳
ひらがな盛衰記　二度目　同年十一月十六日
錦太夫出座和佐太夫事紬太夫出座
切、播磨掾追善八曲鑑掛繪
出語此太夫政太夫百合太夫紬太夫島太夫錦太夫紋
太夫其太夫三絃鶴澤友二郎同平五郎
軍法富士見西行　同二年乙丑二月十三日
作者並木千柳竹田小出雲
夏祭浪花鑑　十月閏有　同年七月十六日
同　上
今度人形に帷子衣裳を着せ初む
楠昔噺　延享三年丙寅正月十四日
作者並木千柳竹田出雲
前、備御前扇軍　二度目
初日法樂　播磨掾三回忌追善　同年五月四日
切、心中重井筒

筑後掾卅三年忌同出語太夫此太夫ツレ政太夫三み
せん友二郎人形出遣ひ吉田文三郎山本伊平治
菅原傳授手習鑑　　同年八月廿一日
傾城枕軍談　　延享四年丁卯八月廿三日
作者並木千柳竹田出雲
文字太夫信濃太夫出座紋太夫退座
義經千本櫻　　同年十一月十六日
作者竹田出雲並木千柳
假名手本忠臣藏　　寛延元年戊辰八月十四日
同　上
當十月此太夫島太夫百合太夫友太夫退座
蘆屋道滿大内鑑　二度目　　同年十一月廿二日
十月閏有
此冬大隅掾再勤内匠太夫事千賀太夫長門太夫土佐
太夫出座古參政太夫錦太夫佐野太夫上總太夫又出
座文字太夫退座
栗島譜嫁入雛形　　寛延二年己巳四月十八日
同　上
切出語太夫大隅掾ツレ千賀太夫三みせん友二郎
双蝶々曲輪日記　　同年七月廿四日

同　上
當夏三味せん鶴澤友二郎死す
源平布引瀧　同　上　　同年十一月廿八日
當冬總太夫死す
國性爺合戰　四度目　　寛延三年庚午七月十六日
九仙山大隅掾ツキ千賀太夫三絃野澤喜八郎
文武世繼梅　同　上　　同年十一月廿四日
今の紋太夫初て出座
戀女房染分手綱　　六月閏有　同四年辛未二月朔日
作者吉田冠子三好松洛
道成寺所作事シテ吉田文三郎大鼓吉田才治笛吉田
彦三郎盆より切に操踊人形ワキ同甚五郎小鼓桐竹
門三郎太鼓桐竹助三郎
役行者大峯櫻　　同年十月十七日
作者竹田外記
大隅掾大和掾に變名す
名筆傾城鑑　　寶暦二年壬申三月廿三日
作者吉田冠子三好松洛
世話言漢楚軍談　　同年五月十八日
作者竹田外記

敵討襤褸錦　二度目　　同年七月十六日
前淨るり川中島三段目迄
伊達錦五十四郡　　同年十一月十六日
同　上
春太夫陸奥太夫出座
愛護稚名歌勝鬨　寶曆三年癸酉五月五日
政太夫錦太夫京都行組太夫折太夫初出座
菖蒲前操弦　二月閏有　寶曆四年甲戌二月三日
作者竹田出雲三好松洛
大和掾上京陸奥太夫退座信濃太夫又出座
小袖組貫練門平　同年四月十七日
新うす雪物語　二度目　同年七月十六日
信濃太夫退座
小野道風青柳硯　同年十月三日
作者竹田出雲三好松洛
染太夫家太夫初て出座
前、相摸入道　二度目　寶曆五年乙亥七月十六日
後、庭凉操座鋪　同　上
大和掾歸京
前、拍子扇淨瑠璃合　同年十一月十六日

後、年忘座敷操　同　上
友太夫出座桐太夫初て出座
崇德院讃岐傳記　寶曆六年丙子二月朔日
錦太夫上京森太夫仲太夫出座
鬼一法眼三略卷　二度目　同年六月朔日
播磨掾十三回忌追善
男作五鴈金　二度目　同年八月二日
於曾根崎芝居政太夫上京
平惟茂凱陣紅葉　十一月閏有　同年十月十五日
作者竹田出雲三好松洛
千賀太夫出座
姫小松子日の遊　同七年丑二月朔日
作者吉田冠子三好松洛
政太夫京より歸三紘野澤喜八出座
薩摩歌妓鑑　同年九月三十日
大和掾上京百合太夫再勤當時出勤の衆政太夫錦太夫千賀太夫染太夫百合太夫紋太夫中太夫島太夫等也　明和本
昔男春日野小町　同年十二月十五日
作者竹田出雲同瀧彥

春太夫京より歸る　明和本
敵討崇禪寺馬場　同八年三月十三日
作者竹田小出雲竹田瀧彥　明和本
菅原傳授手習鑑　二度目　同年五月十五日
曾根崎にて一ヶ月勤め七月十五日より道頓堀へ歸
り盆中勤る　明和本
蛭小島武勇問答　同年八月十九日
作者竹田小出雲同瀧彥
大和掾京より歸る　明和本
日高川入相花王　同九年二月朔日
作者竹田小出雲二歩堂
大和掾吉田文三郎休
當五月四日芝居類燒せしゆへ假屋芝居にて右日高
川四段目迄切に
用明天皇職人鑑を一段
五月二十一日より出語り太夫政太夫人形出遣ひ吉
田文吾當里七月人形吉田文三郎同文吾父子共退座
明和本
大平記菊水の卷　同年九月十六日
作者二歩堂三好松洛

此節大和掾又上京音太夫岬太夫初て出座人形吉田
文吾再勤三郎兵衛と名を改む　明和本
ひらがな盛衰記　三度目　寶曆十庚辰年五月六日
竹本播磨掾十七回忌　明和本
極彩色娘扇　同年七月二十一日
作者二歩堂三好松洛
八木太夫初て出座　明和本
前、國性爺二段目迄　同年十一月廿八日ゟ十日の間
切、年忘座鋪操
曾根崎芝居にて太夫不殘大和掾錦太夫染太夫音太
夫八木太夫出がたり政太夫其太夫中太夫岬太夫
明和本
安倍晴明倭言葉　寶曆十一辛巳年正月廿日
三絃野澤喜八紋太夫綱太夫等出座　明和本
由良湊千軒長者　同年五月十六日
作者二歩軒三好松洛
錦太夫休
當九月堺へ行ひらがな盛衰記卅日の間　明和本
冬籠難波梅　同年十月廿一日
人形顏見世夜芝居十日の間相つとむ　吉田三郎兵

衛名改文三郎と云江戸へ行暇乞出遣ひ　明和本
古戰場鐘懸の松　同年十一月廿日
作者二歩軒三好松洛
志賀太夫喜太夫出座紋太夫中太夫退座　明和本
戀女房染分手綱　二度目　寶曆十二年七月二日
政太夫上京百合太夫死去す　明和本
奥州安達原　同年九月十日
政太夫歸京　明和本
假名手本忠臣藏　二度目　同十三年未正月十八日
當正月九日竹田芝居類燒に付竹本座へ相かり淨るりあやつり竹田からくり狂言打込七切迄出し拾文づゝいたし候
初日、山城國畜生塚　同年四月十三日
作者近松半二竹本三郎兵衛
生駒太夫出座濱太夫退座　明和本
後日、天竺德兵衛鄕鏡
磯太夫出座
前後一日替り　明和本
前、諸葛孔明鼎軍談二段目迄
同年八月三日中太夫退座　明和本
後、御前懸り淨瑠理相撲
大和掾一世一代三味せん喜八
五月十八日切にて堺へ行
明和本
御所櫻堀川夜討　同年未十二月九日
極月十八日切當申年座中江戸表へ行　明和本
京羽二重娘形氣　同十四年甲申五月廿八日
作者近松半二竹本三郎兵衛
京都新作尤京座中大坂へ引相勤
岡太夫初て出座　明和本
敵討雅物語　同年七月十五日
寛政本
江戸櫻愛敬曾我　同年十一月十七日
江戸表より歸夜五日晝十日の間相勤　明和本
假名手本忠臣藏　三度目　同閏十二月廿五日
明和本
蘭奢待新田景圖　明和二年乙酉二月九日
作者近松半二竹本三郎兵衛
春太夫京へ行く　明和本
愛護稚名歌勝鬨　二度目　同年五月六日
春太夫京より歸る　明和本

御祭禮棚闘車操　同年六月十五日
當七月十日竹本政太夫死去　明和本
姻袖鏡　同年九月十二日
作者近松半二竹本三郎兵衛
中太夫出座　明和本
會狂言役者双六　同年十一月五日
鐘太夫出座錦太夫退座
霜月十八日にて堺表へ行　明和本
富士日記菖蒲刀
寛政本
事始室早咲　同年十二月七日
堺よりかへり中太夫江戸へ行　明和本
本朝廿四孝　明和三年戌正月十四日
作者近松半二竹本三郎兵衛
島太夫出座若太夫事　明和本
前、兒源氏二段目迄　同年五月十九日
後、和田合戰三段目迄
明和本
小夜中山鐘由來　同年七月十八日
組太夫出座　明和本

太平記忠臣講釋　同年十月十六日
作者近松半二竹本三郎兵衛　明和本
四天王寺稚木像　同四年亥五月五日
明和本
夏祭浪花鑑　二度目　同年六月十二日
明和本
前、花筆壽永春　同年八月四日
後、關取千兩幟
作者近松半二竹本三郎兵衛
堺へ行京へ行
石川五右衛門一代噺　同年十月十四日
同　上
京都太夫不殘下り相勤　明和本
泉州小田若茶屋攝州殿下茶屋三日太平記
同　上　同年十二月十四日
木々太夫の太夫出座
中太夫江戸より歸政太夫と改名〆　明和本
傾城阿波の鳴門　明和五子年六月朔日
名代近松門左衛門
此節島太夫竹本にて出勤鐘太夫染太夫君太夫綱太

夫等也　寛政本
きのふのお初けふの徳兵衛よみ賣三巴　同年七月朔日
作者近松半二竹本三郎兵衛
寛政本
初櫓操目録　同年九月十四日
寛政本
殿造千丈嶽　明和六丑年八月朔日
同　上
竹本豊竹打込にて座本豊竹万三　寛政本
近江源氏先陣舘　同年十二月九日
同　上
再興座本竹田新松　寛政本
近江源氏太平頭鍪飾　明和七寅年五月廿二日
同六月十六日切に相止む
本不出　寛政本
廓の名は陸奥國の名は長門萩大名傾城敵討
寛政本　同年八月十六日
敵討襤褸錦上中下　同年九月廿一日
寛政本
用明天王鐘入之段　同　上

出語り竹本鐘太夫ツレ染太夫文太夫三絃鶴澤文藏
人形吉田才二　寛政本
切、穴意探
おどけ上るり近松門左衛門
鶴澤友二郎竹本筑後　寛政本
忠臣藏武士鑑忠臣講釋通矢數四十七本
寛政本
椀久松山由緣の十徳　同年十一月十五日
此節吉田文三郎江戸より登り故人文三郎十三回忌
追善出遣ひ所作事　寛政本
切、神靈矢口渡
此節竹本春太夫スケニ出る但し忠臣講釋道行
寛政本
十三鐘絹懸柳妹脊山婦女庭訓　明和八卯年正月廿八日
此節春太夫染太夫綱太夫咲太夫筆太夫三根太夫梶
太夫等也　寛政本
今年四月下旬より大坂表おかげ參りはやり候に付
あやつりに取組出がたり出遣ひ也其外題左に
寛政本
艶覗詞太々神樂　同年五月

本不出　寛政本
色爲替曲輪之通　同年七月
外題計本不出　寛政本
彦三古今朝迎三途雲　同年八月十一日
本不出　寛政本
亭主方東山殿上客一休禪師櫻御殿五十三驛
同年十二月廿九日座本竹田榮藏
此節竹本大隅十七回忌政太夫十三回忌追善として
明に古上るり毎日取かへ十日ヶ間相つとむ寛政本
大切、おどけ上るり雷太郎君代言葉
籠太夫出座　寛政本
躾方武士鑑　明和九辰年四月廿八日
寛政本
とりあへず見取淨瑠利　同年八月朔日
寛政本
刀屋半七鯉初花　安永二巳年正月九日
寛政本
逢摸樣愛敬曾我　同　上
座本竹田氏吉本不出　寛政本
小田角髮狩柴產髮島原千疊鋪　同年八月廿一日

本不出　寛政本
三十二相刀双鏡　同年十一月五日
本不出　寛政本
性根競姉川頭巾　同三年四月六日
作者近松半二座本竹田縫之助　寛政本
役者評判身振操　同年十一月六日
座本近松半二
古上るりよせもの本不出　寛政本
東海道七里艇梁　安永四未年二月廿三日
座本竹本義太夫　寛政本
鹽俵七島雅陳取　安永五申年九月廿三日
座本竹田万二郎　寛政本
日本歌竹取物語　安永六酉年二月朔日
座本竹本染太夫　寛政本
繁花地男鑑　安永八年亥七月廿六日
座本竹本義太夫　寛政本
立春姬小松　安永九年子正月七日
座本竹本義太夫
新板歌祭文　同年九月廿八日
作者近松半二座本竹田新松太太夫竹本組太夫

寛政本
時代織室町錦繡　天明元年丑二月廿四日
染太夫出座竹本義太夫座　寛政本
道具屋お龜　同二年寅六月廿六日
竹本内匠太夫出座　寛政本
新うす雪物語　同三年卯正月
寛政本
加々見山舊錦繪　同　上
座本竹本太市江戸竹本住太夫出座　寛政本
伊賀越道中雙六　同年四月廿四日
作者近松半二
此節竹本染太夫同住太夫同男德齋名太夫事同鐘太
夫鶴澤文藏吉田才治同冠藏等出勤　寛政本
比良嶽雪見陣立　同六年午六月五日
座本竹本千太郎　寛政本
彥山權現誓助劔　同年十月十八日
政太夫麓太夫内匠太夫　寛政本
安德天皇兵器貢　同七年未五月朔日
内匠太夫退座竹本染太夫三根太夫事出座　寛政本
増補織合襴七島　同年六月十八日

本不出　寛政本
鬼一法眼三略卷　同年八月九日
麓太夫退座　寛政本
宗明寺殿由緒礎　同八年申十二月廿五日
豐竹錦太夫出座本不出　此節太夫竹本政太夫同彌
太夫同咲太夫同内匠太夫同中太夫和太夫事同氏太
夫　寛政本
濱眞砂千町封疆　天明九改元寛政元年酉九月廿三日
座本竹本文治郎本不出　寛政本
此節豐竹麓太夫竹本梶太夫竹本鐘太夫豐竹駒太夫
竹本綱太夫野澤吉兵衛勤森太夫事竹本三根太夫
寛政本
壇浦琴責　同年十月二十八日
故豐竹駒太夫十三回忌追善
出語豐竹麓太夫同駒太夫　寛政本
繼傳授文武陣立　同二年戌十一月十五日
座本竹本德松　此節竹本政太夫竹本内匠太夫竹本
賴太夫竹本越太夫　寛政本
太平嶋戸の船諷　寛政五年三月九日
寛政本

横山郡領信行小栗判官兼氏照天姫操車
作者豊田新助　寛政本
蝶花形名歌嶋臺
寛政本

當流豊竹越前少掾

初は若太夫と號す道頓堀にて芝居興行の始めは元祿十二年の比成井上宇治竹本等の先師達の淨瑠璃を語られたり傾城懷内子是新作の初め也京都堺紀州南都等にても芝居を興行せられ其後元祿十五壬午年より道頓堀にて定芝居を勤らる最初よりの新淨るり外題どもを集む

東山殿子ノ日ノ遊　元祿十二己卯年三月十一日
宇治加賀掾古淨るり　明和本
源三位賴政　同年五月六日
右同斷　明和本
鎌倉袖日記
寛政本
大職冠知略ノ玉取　同年七月十五日
井上播磨掾古淨るり　明和本
傾城懷子　同年八月二十八日
新作　明和本
佐々木大鑑　同年十月十三日
竹本筑後掾古物　明和本
新板佐々木大鑑
明和本
前、末廣十二段　元祿十五壬午年五月二十八日
切、心中涙の玉の井　同　上
作者紀海音
前、源氏烏帽子折　同年八月朔日
明和本
切、金屋金五郎浮名ノ額　同　上
東岸居士　同年九月九日
小野小町都年玉
作者紀海音　寛政本
新百人一首　同年十月十五日
新板兵庫築嶋　元祿十六癸未年正月七日
作者紀海音
今様殺生石　同年二月十五日

當春泉州堺へ行　明和本
坂ノ上ノ田村麿　同年五月五日
今川了俊青砥刀　同年七月十五日
信田森女占　同年九月十一日
熊谷三ッ子盃　同年十一月朔日
寛政本
増補佐々木大鑑　元祿十七甲申年正月二日
寛政本
前、東大全　同年二月十五日
切、八百屋お七歌祭文　同　上
當四月寶永と改元　明和本
いろはノ始千丈ヵ瀧　寶永元甲申年六月朔日
女長田早櫻　同年七月二十日
當秋奈良へ行
傾城富士ヵ嶽　同年十月二十一日
美濃近江寨物語　寶永二乙酉年正月二日
三井寺狂女　同年一月十五日
寛政本
泉州杜物語　同年四月八日
寛政本

傾城二河白道　同年七月十五日
曾我三部經　同年九月九日
播州曾根松　同年十一月二十八日
傾城躑躅ヶ岡　寶永三丙戌年正月九日
作者清水三郎兵衛
前、紀三井寺開帳　同年三月四日
切、男色加茂侍　同　上
作者錦文流これは筑後浄るりなり
前、元服曾我三段目迄　同年四月十二日
寛政本
切、彌市お高梅田心中
曾根崎新地芝居にて
聖徳太子舎利都　同年六月二日
前、舎利都三段目迄　同年七月十六日
切、傾城千日ノ鐘　同　上
當秋より讃州より宮嶋へ行　寛政本
増補富貴曾我　寶永四丁亥年正月二日
寛政本
増補日向景清　同年三月三日
今様女神鑑　同年五月五日

寛政本
頼朝七騎落　三度目　同年七月十六日
當秋泉州堺より紀州へ行　寛政本
身替問答　同年十一月十八日
寛政本
今様西行物語　寶永五戊子年正月二十日
前、新利屈物語　同年三月三日
切、椀久末の松山　同　上
秦始皇帝太夫松　同年七月十五日
山桝太夫戀慕濛（本ノマヽ）　同年十月十三日
寛政本
前、藍染川　三度目　寶永六己丑年二月五日
切、敵討難波梅
寛政本
富仁親王嵯峨錦　同年六月朔日
作者紀海音
前、嵯峨錦三段目迄　同年八月二十三日
切、笠屋三勝二十五年忌　同　上
寛政本
赤染衛門榮花物語　同年十月三日

頼光新跡目論　寶永七庚寅年正月二日
前、跡目論三段目迄　同年三月二十日
切、心中戀の道中　同　上
寛政本
佐與ノ中山夜泣ノ石　同年七月十四日
前、夜泣石三段目迄　同年十月十六日
切、椀久熊谷笠　同　上
寛政本
前、本朝五翠殿　寶永八辛卯年正月二十日
切、淨るり古今序　同　上
前、五翠殿三段目迄　同年四月八日
切、油屋お染袂の白絞　同　上
作者紀海音
當夏堺へ行　寛政本
北國源氏金の山吹　元德元年辛卯九月九日
平安城細石　正德二壬辰年正月十六日
前、藤戸ノ前陣　同年四月八日
切、今宮心中ノ腰連理松　同　上
寛政本
前、信の源氏　同年五月十七日

切、新艘太夫丸　同　上
寛政本
前、松浦五郎　同年七月十六日
切、七枚起請吾妻雛形
寛政本
八幡太郎東初櫻　正徳三年癸巳二月朔日
作者紀海音
傾城國性爺　同年五月六日
同　上
當秋京都四條へ行
仁徳天皇万歳車　同年七月十五日
同　上
前、播州曾根松　同年十月十二日
切、傾城三度笠　同　上
同　上
曾根崎新地芝居にて　寛政本
鬼鹿毛武藏鐙　同年十二月朔日
同　上
小敦盛花鞁　正徳四甲午年四月朔日
當夏泉州堺へ行

御前曾我姿ノ富士　同年七月十五日
愛子若塒箱　同年十月朔日
吉野忠信錦着長　正徳五乙未年正月廿日
前、吉野忠信三段目迄　同年五月五日
切、傾城思舛屋
寛政本
記錄曾我玉笄髷　同年六月二日
作者戸川不鱗
天智天皇豐年ノ秋　同年九月十日
是は筑後淨るり也
鎌倉尼將軍　正徳六丙申年二月朔日
當七月享保と改元
花山院都巽　享保元丙申年七月十六日
作者紀海音
當冬奈良へ行
甲陽軍鑑今樣粧　享保二丁酉年正月三日
同　上
西行法師墨染櫻　同年五月二十二日
作者錦文流
照日前都姿　同年九月二十八日

鎌倉三代記　初日享保三戊戌年正月二日
作者紀海音
今年太夫本上野少掾藤原重勝と受領す
此節は喜世太夫万太夫文太夫等相勤むる
傾城吉原雀　十月閏有　同年八月朔日
今様賢女手習鑑　同年十一月五日
義經衣高舘　享保四年己亥正月廿日
作者紀海音
神功皇后三韓責　同年五月十五日
同　上
當秋泉州堺へ行
業平昔物語　同年十月朔日
同　上
鎮西八郎唐土船　享保五年庚寅正月二日
同　上
富仁親王嵯峨錦　二度目　同年六月三日
日本傾城始　同年九月廿一日
同　上
山桝太夫藤原雀
同　上　寛政本

三輪丹前能　享保六年辛丑正月廿日
同　上
伏見常盤昔物語　七月閏有　同年五月十六日
呉越軍談比翼臺　同年九月十一日
作者紀海音
大友王子玉座靴　享保七年壬寅正月二日
同　上
心中二ッ腹帯　同年四月六日
同　上
當夏秋堺より紀州へ行
東山殿室町合戰　同年十一月朔日
同　上
玄宗皇帝蓬萊鶴　同八年正月廿日
作者紀海音四段目出語太夫上野掾
記祿曾我　同年五月六日
同　上
傾城無間鐘　同年七月
同　上
井筒屋源六戀ノ寒晒
作者西澤一風田中千柳

日本五山建仁寺供養　同年十一月三日
同　上
三輪太夫初て出座　内匠事
賴政追善芝　四月閏有　享保九年甲辰二月朔日
同　上
此節源太夫喜世太夫左内等勤む
當三月廿一日大坂中大火芝居も類燒に付四月廿三日より堺の芝居にて建仁寺供養夫より又曾根崎新地にて六月廿三日より建仁寺供養賴政追善芝
此節道頓堀今の芝居屋敷地を買求め普請の間秋中伊勢に立越芝居相勤九月下旬に大坂に立歸新造の芝居にての外題
女蟬丸　享保九年甲辰十月十六日
同　上
切、昔米万石通　享保十年乙巳正月二日
同　上
前淨るり女蟬丸三段目迄
南北軍問答　同年三月三日
同　上
身替弓張月　同年五月六日

同　上
和泉太夫品太夫初て出座
大佛殿万代礎　同年十月二日
文耕堂
當冬京都に行鎌倉三代記
曾我錦几帳　享保十一年丙午二月朔日
作者安田蛙文
新太夫初て出座
北條時賴記　享保十一年丙午四月八日
來未正月閏有
作者西澤一風田中千柳
切、雪の段
太夫上野掾ワキ和泉太夫三絃野澤喜八郎出遣ひ人形藤井小三郎近本九八郎中村彥三郎　此節喜世太夫品太夫三輪太夫等相つとむ
作者西澤一風並木宗助安田蛙文
淸和源氏十五段　享保十二年丁未二月十五日
作者並木宗助安田蛙文
四段目攝待太夫ワキ三絃右に同ツレ品太夫
攝津國長柄人柱　同年八月十五日

同　上
切、芦苅出語
太夫上野掾出遣ひ人形藤井小三郎ワキ和泉太夫三
みせん野澤喜八郎
尊氏將軍二代鑑　享保十三年戊申二月朔日
同　上
南都十三鐘　同年五月十五日
同　上
當秋冬奈良ニ行濤和源氏時頼記長柄人柱
後三年奥州軍記　享保十四年己酉正月二日
同　上
藤原秀郷俵系圖　九月閏有　同年九月十日
同　上
切に出語太夫上野掾ワキ和泉太夫三みせん竹澤藤
四郎
蒲冠者藤戸合戰　同十五年庚戌正月七日
作者並木宗助安田蛙文
切に出語右に同
本朝檀特山　同年五月六日
作者西澤一風田中千柳

切に出語右に同
楠正成軍法實錄　同年八月朔日
作者並木宗助安田蛙文
和田七人形に目のはたらく事を仕初る
源家七代集　享保十六年辛亥正月二日
同　上
切に女丹前出語太夫上野掾ワキ和泉太夫三絃竹澤
藤四郎
和泉國浮名溜池　同年四月二日
同　上
酒呑童子枕言葉　同年六月朔日
間の物出語太夫左近ワキ右近三みせん野澤文次郎
赤澤山伊藤傳記　同年十月十六日
同　上
今度天満橋三右衛門と云人初て幟一本進上す。
當九月卅日太夫本祝儀出語蓬萊山　大夫越前掾
勅許受領越前少掾藤原重泰　ワキ和泉太夫　三絃
竹澤藤四郎
八百屋お七戀緋櫻　二度目
享保十七年壬子正月廿日

前、鎌倉三代記三段目迄　同　上
湊太夫初て出座
今様返魂香　五月閏有　同年五月七日
待賢門夜軍　同年九月十日
當冬和泉太夫三輪太夫退座
前、吉野忠信三段目迄　享保十八年癸丑二月二日
要太夫初て出座に付芝居の表に進物を初て餝る
切、お初天神記
観音廻り出語太夫越前掾ツレ湊太夫出つかひ人形
藤井小三郎三絃竹澤藤四郎
鎌倉比事青砥錢　同年四月十五日
作者安田蛙文
伊太夫出座甘鹽事
莠(フタバ)伶人吾妻雛形　同年七月十六日
作者並木宗助同丈助
切、忠臣金短冊　同年十月朔日
品太夫河内太夫と變名す
北條時頼記　二度目　享保十九年甲寅正月二日
正面の床を横床になす
切、雪の段太夫越前掾

ワキ河内太夫三絃竹澤藤四郎出遣人形藤井小三郎
同小八郎中村勘四郎
曾我昔見臺　同年六月朔日
作者並木宗助同丈助
新太夫江戸へ行
那須與市西海硯　同年八月十三日
同　上
當冬伊太夫退座
南蠻鐵後藤目貫　享保二十年乙卯二月七日
清和源氏十五段　同年二月十二日
攝待太夫越前掾ワキ河内太夫ツレ湊太夫
万屋助六二代衾　同年五月六日
作者並木丈助
苅萱桑門築紫𨏍(イヘヅト)　同年八月十五日
駒太夫初て出座
和田合戰女舞鶴　同二十一年丙辰三月四日
作者並木宗助
安部宗任松浦簦　元文二年丁巳正月十五日
同　上
釜淵双級巴　同年七月二十一日

同　上
和佐太夫初て出座錦武事
前、蟬丸　二度目　十一月閏有　同年七月二十一日
前、傾城無間鐘　二度目　来午正月二日
丹生山田青海舖　元文三年戊午四月八日
作者並木宗助
右の淨るり暫く相勤芝居普請に付五月六日より曾根崎新地にて和田合戰と八百屋お七纐纈櫻を勤めし内に普請成就し新造芝居にて七月十五日より又丹生の山田を相勤む
新寳祝義出語
太夫越前掾ツキ湊太夫駒太夫三味せん竹澤藤四郎
茜染野中の隱井戸　同年十月八日
作者原田由良助
要太夫死す
前、鎭西八郎　同　上
奥州秀衡有髪壻　元文四年己未二月朔日
作者並木宗助
佐渡太夫出座
建仁寺供養　二度目　同年五月六日
湊太夫退座
狹夜衣鴛鴦劒翎　同年八月十五日
同　上
當冬堺へ行和田合戰女舞鶴
鵜山姫捨松　元文五年庚申二月六日
同　上
佐渡太夫退座
本田義光日本鑑　七月閏有　同年四月十日
柚太夫出座
武烈天皇艤　同年九月十日
作者爲永太郎兵衞
文字太夫出座
佐手彦の人形眉毛うごく事を仕初る。
本朝班女扇　元文六年辛酉三月四日
同　上
靑梅撰食盛　二度目　同年五月二十一日
二ッ腹帶也　作者紀海音
前、淨るり後三年三段目迄　同　上
播州皿屋鋪　同年七月十五日
作者爲永太郎兵衞淺田一鳥

河内太夫駿河太夫と變名す
田村麿鈴鹿合戰　同年九月十日
作者淺田一鳥豐田正藏
内匠太夫再勤
當冬より太夫元越前少掾駒太夫江戸豐竹肥前掾芝
居へ行
百合稚高麗軍記　寛保二年壬寅三月三日
作者爲永太郎兵衞
切、宮嶋八景出語
太夫内匠太夫ツレ文字太夫三絃野澤喜八郎
道成寺現在鱗　同年八月十一日
越前掾駒太夫江戸より歸り勤む
鎌倉大系圖　同年十月二日
作者爲永太郎兵衞
來亥春南都に行大系圖釜淵駿河太夫退座
風俗太平記　四月閏有　寛保三年癸亥三月四日
同　上
久米仙人吉野櫻　同年八月朔日
同　上
潤色江戸紫　延享元年甲子四月二日

同　上　同年九月十日
柹本紀僧正旭車
道太夫春太夫出座和佐太夫杣太夫退座
同　上
遊君衣紋鑑　同年十二月二日
詩（カラウタ）近江八景　延享二年乙丑二月朔日
作者淺田一鳥爲永太郎兵衞
增補大佛殿万代礎　二度目　同年五月四日
陸奥太夫出座
浦島太郎倭物語　十二月閏有　同年八月五日
作者淺田一鳥爲永太郎兵衞
北條時賴記　三度目　延享二年乙丑十一月三日
式三番三を勤む伊勢太夫初て出座
切、雪の段
出語越前少掾ワキ内匠名改上野掾三絃野澤喜八郎
太夫元一世一代六十五才出遣人形藤井小八郎同小
三郎若竹藤九郎
酒呑童子出生記　同三年丙寅五月六日
作者梁塵軒
當秋京行越前掾一世一代久米仙人吉野櫻

花筏巖流島　同年十一月三日

錦重紅梅服　延享四年丁卯二月十三日
作者淺田一鳥但見彌四郎
上總太夫出座竹太夫事

万戶將軍唐土日記　同年三月廿二日

同　上
鐘太夫初て出座上野文字太夫退座

惡源太平治合戰　同年七月十五日
作者淺田一鳥
四段目に操掛を仕初る人形方豐松書竹藤井等

容競出入湊　延享五年戊辰正月二日
作者並木丈助淺田一鳥
升太夫出座陸奥太夫退座

東鑑御狩卷　十月閏有　同年七月十五日

同　上
當十月太夫元堺にて一世一代を勤む東鑑と惡源太

攝州渡邊橋供養　寬延元年戊辰十一月十四日

同　上
陸奥此太夫島太夫百合太夫友太夫阿曾太夫等出座
也駒太夫江戶へ行上總太夫道太夫元太夫春太夫等
は退座也當冬床改め出勤の太夫此太夫島太夫伊勢
太夫桝太夫百合太夫鐘太夫阿曾太夫狩野太夫等也

八重霞浪花濱荻　寬延二年己巳三月廿六日

前、橋供養二段目迄　同　上

前、花和讃新羅源氏　同年七月十五日
前斗り替る
切に操大踊いせ音頭茶屋掛あんどう雀踊の仕出し
珍重
右ともしの趣向は三月十八日十九日の事也廿日に
外題を出し五六日の間に出來作者並木丈助及び惣
役者中の働前代未聞

十帖源氏物ぐさ太郎　同年十一月四日
作者淺田一鳥浪花三藏
駒太夫江戶より歸り伊勢太夫江戶へ行八重太夫初
て出座す
當九月廿三日此太夫事勅許受領筑前小掾藤原爲政
祝儀に出語を勤む

切、ともし追善惣太夫出語　來年三月十八日より

梅川新七夏楓連理枕　寬延三年庚午六月朔日

同　上

和田合戰女舞鶴　二度目　同年八月七日
島太夫若太夫に名改和歌八景出語
玉藻前曦袂　同四年正月十五日
作者浪岡橘平安田蛙桂
浪花文章夕霧塚　六月閏有　同年四月廿五日
同　上
頼政扇子芝　二度目　同年七月十五日
水操切に踊
日蓮聖人御法海　同年十月十日
百合太夫退座
一谷嫩軍記　寶暦元年辛未十二月十一日
作者淺田一鳥吉八並木宗助
並木宗輔名殘作來甲の盆より切に踊
此時出勤の衆八重太夫時太夫と名改
筑前操駒太夫阿曾太夫友太夫以上八人
若太夫鐘太夫信濃太夫今度より出座
倭假名在原系圖　同二年壬申十二月七日
作者淺田一鳥豊竹甚六
森太夫志賀太夫出座友太夫退座
雄結勸助島　寶暦三年癸酉七月廿八日

紫桑門荊萱築轢　二度目　同年十月朔日
十七太夫出座信濃太夫志賀太夫座
相馬太郎莩文語　二月閏有　同四年甲戌二月廿一日
作者並木永輔豊竹千落
前、義經腰越狀　同年七月廿九日
切、釜淵双級巴　二度目　同　上
天智天皇荊穗菴　同年十二月十五日
作者並木永助
森太夫退座
當冬伊勢太夫江戸より歸り新太夫と變名す阿曾太夫江戸へ行伊豆太夫式太夫初て出座
三國小女郎曙櫻　同五年乙亥四月廿一日
作者難波三藏豊竹上野
双扇長柄松　同年七月七日
作者並木永助豊竹上野
切に操踊　當秋堺行後三年奥州軍記
後三年奥州軍記　二度目　同年十一月朔日
鰭太夫初て出座
義仲勳功記　十一月閏有　寶暦六年子三月十八日
作者淺田一鳥豊竹應律

切、亂菊枕慈童藤井小八郎
甲斐源氏櫻軍配　　同年閏十一月朔日
同　上
諏訪太夫初て出座
寫儘足利染　　寶曆七年丁丑正月廿六日
同　上
前九年奧州合戰　　同年三月廿日
作者並木宗助安田蛙文　　明和本
以下皇兜弓勢鑑まで明和本
清和源氏十五段　三度目　　同年八月朔日
筑後掾一世一代暇乞山伏攝待出語りをつとむツキ
鐘太夫ツレ時太夫事今度名を改此太夫
祇園祭禮信仰記
作者中村阿契淺田一鳥
同年十二月五日より丑寅卯三年越勤む
此節出勤若太夫駒太夫鐘太夫此太夫十七太夫伊豆
太夫伊勢太夫事新太夫と名改麓太夫恒太夫初て出座
芽源氏鶯塚　　寶曆九己卯年三月三日
作者淺田一鳥豐竹應律
此節久米太夫喜美太夫豐太夫初て出座十七太夫恒
太夫人形藤井小八郎江戸豐竹座へ行
難波丸金鷄　　同年五月十四日
作者中村阿契
當冬筑前掾一世一代に堺へ行
先陣浮洲巖　　同年十二月七日
作者淺田一鳥
十七太夫諏訪太夫江戸より歸る
櫻姬賤姬櫻　　寶曆十庚辰年三月十一日
攝津國長柄人柱　二度目　　同年八月十五日
祇園女御九重錦　　同年十二月十二日
作者若竹笛躬中村阿契
加賀太夫鶴太夫喜代太夫初て出座新太夫伊豆太夫
諏訪太夫喜美太夫退座
寶曆十一辛巳年二月十四日芝居類燒につき曾根崎
新地芝居にて
前、一谷嫩軍記二段目迄　　三月十一日
切、八重霞浪花濱荻　二度目　　同　上
筑前掾暫く助に出る

祇園女御九重錦　二度目　四月十九日
同所にて
おはつ德兵衛曾根崎模様　五月十八日
同所にて
人丸萬歲臺　同年九月十日
作者豐竹應律福松藤助
新造芝居祝儀式三番三牛出遣ひ
切、惣太夫出語り高砂人形出遣ひ
三好長慶礎軍記　寶曆十二壬午年二月廿四日
作者梁塵軒
岸姫松轡鑑　同年閏四月十八日
作者豐竹應律並木永助
當時出勤衆若太夫駒太夫鐘太夫麓太夫氏太夫品太
夫富太夫米女太夫淺太夫八曾太夫初て出座此太夫
加賀太夫久米太夫豐松藤五郎藤井小三郎伊勢へ行
當九月より京へ行
藤原秀鄉俵系圖　二度目　寶曆十三未正月四日
當正月九日芝居類燒堺へ行京へ行
洛陽瓢念佛　同年三月六日
寛政本

新舞臺式三番叟三十石艠始　同年四月九日
新建芝居にて古淨るりよせ物當夏秋南都へ行
番場忠太紅梅箙　同年極月八日
駒太夫江戸へ行
官軍一統志　同十四年申四月十日
當夏堺へ行
九月十三日越前掾死去す行年八十四才
娘景清八島日記　明和元年申十月廿一日
越前追善筑前掾相勤豐竹若太夫退座
伊呂波歌義臣兜　同年閏極月十七日
駒太夫江戸より歸出座
此太夫若竹藤九郎江戸へ行
ゑきしま操軍記　同二年酉三月十六日
内助手柄淵　同年七月廿五日
當八月晦日切にて相續難成歌舞妓芝居に成
星兜弓勢鑑　明和四年亥正月三日
豐竹座再興
麓太夫十七太夫恒太夫組太夫喜代太夫當二月中旬
より座中伊勢へ行
同年四月八日より古淨るり一段づゝ札錢十文追出

し芝居に成る錦太夫出座

以下悉く寛政本

壽永攝元暦梅源平鵯鳥越　明和七寅九月十九日
豐竹座再興座本豐竹此吉太夫島太夫駒太夫此太夫
時太夫生駒太夫入太夫紬太夫房太夫

北條時頼記　同年十一月十九日
座本豐竹和歌三
今年故越前少掾七回忌追善として鉢木出語り鐘太
夫相勤む此節此太夫時太夫退座

朝鮮細見九州與治兵衛灘　明和八卯年正月廿三日
此節竹本三郎兵衛出勤此後都て新浄るり此人の作
なり

お梅久米之介角額嫌蛇柳　同年五月廿三日

壇浦兜軍記　同年七月廿八日
切、忠臣藏道行九段目　同　上
此節竹本政太夫出座忠臣藏九段目相勤

梅の由兵衛迎駕籠死期茜染　同年八月十四日

嗚呼忠臣楠氏旗　同年十二月廿八日

茜屋半七みのや三勝艶容女舞衣
岡太夫出座　明和九辰年十二月廿六日

ゑのだ妻今物語　安永二巳年閏三月十五日
本不出

釜淵双級巴　同年十一月廿二日

櫻鍔恨鮫鞘　同　上
綱太夫出座

惣纈北男鑑　安永三午年十二月廿六日
本不出

菅原傳授手習鑑　安永四未年三月十日
豐竹島太夫一世一代
此後豐竹和歌三座斷絶故新上るり不出古上るり見
どり物是迄に度々出れども一切物故略之

艶歌唐音艶頭德藏汐境七草噺　天明二年寅十月
名代近松門左衛門太夫豐竹氏太夫
此時太夫豐竹氏太夫同文字太夫同綱太夫

釜淵双級巴　同年十一月八日
座本近松門左衛門
此節內匠太夫和佐太夫出座綱太夫吉田文三郎退座

石高千五百冊數四十七歸禁色雪の茶會

同七年未九月廿六日
座本竹本千太郎豐竹此太夫
東の芝居にて豐竹此太夫豐竹時太夫竹本中太夫竹
本咲太夫竹本政太夫豐竹賴太夫豐竹百合太夫
韓和聞書帖　同年十二月廿三日
座本竹本千太郎豐竹此吉
此節太夫竹本政太夫豐竹此太夫豐竹時太夫竹本中
太夫　江戸鶴澤三二事蟻鳳出勤
初嵐元文噺　寛政元年酉五月十日
本不出
兒淵東軍記　同年七月十九日
本不出
豐竹此太夫竹本政太夫
天王山杜鵑合戰　同年九月八日
本不出
座本豐竹此吉

北堀江市の側芝居

座本豐竹此吉太夫豐竹此太夫

今年明和三戌のとし北堀江市側にて豐竹座新芝居
興行新淨るり外題左にしるす
染摸樣妹春門松　明和四亥年十二月十五日
駒太夫此太夫生駒太夫時太夫入太夫氏太夫八重太
夫光太夫紋太夫佐太夫槇太夫
忠孝大礒通　明和五子年九月廿二日
此節鐘太夫出座
助六揚卷紙子仕立兩面鑑　同年十二月廿一日
四天王寺伶人櫻　明和六丑年二月廿四日
前上るり、北濱名物黒舟噺　同年七月廿八日
後上るり、雙紋刃巢籠　同　上
義經腰越狀　明和七寅年正月十五日
是は四段目丸一段新作なり
此節道頓堀豐竹芝居にて島太夫駒太夫此太夫三人
にて新上るり興行外題は道頓堀豐竹の部に出す此
後堀江荒木芝居にて鐘太夫此太夫にて新上るり興
行外題與に出す
澪標浪花筏　明和八卯年八月十日
本掛復昔暦　同年十二月廿五日
鐘太夫退座

忠臣後日噺　明和九辰年四月七日
千種結替繪艸紙　同年八月十九日
麓太夫出座
後太平記瓢實録　安永元辰年十二月廿四日
攝州合邦辻　安永二巳年二月五日
綱太夫出座
廻請方便品書置壽量品伊達娘戀緋鹿子
此節麓太夫退座君太夫出座　同年四月六日
南無三寶亜三追善極樂往來蓮奇初　同年七月
本不出
綱太夫相勤む
呼子鳥小栗實記　同年八月廿七日
けいせい戀飛脚　同年十二月廿三日
綱太夫君太夫退座
此節一座曾根崎新地芝居にて右上るり相勤
時太夫死去麓太夫出座
花襷會稽褐布染　安永三午年八月十三日
堀江へ戻り興行此節鐘太夫江戸より歸り出座
軍術出口柳　安永四未年正月廿九日
此節鐘太夫死去

倭歌月見松　同年九月八日
網屋貞柳歳旦闘　安永五申年正月廿二日
作者近松半二出勤
三國無双奴請狀　同年四月三日
作者近松東南出勤
蓋壽永軍記　同年九月八日
お半長右衛門桂川連理柵　同年十月十五日
此節綱太夫死去
唐丸新艘始
外題ばかり尤本不出
端手姿鎌倉文談　安永六酉年正月廿五日
伊賀越乘掛合羽　同年三月廿六日
置土產今織上布　同年五月十九日
融大臣鹽竈櫻花　同年八月十五日
女小學平治見臺　同年十二月廿六日
本不出
御堂前菖蒲帷子　安永七戌年正月廿六日
以呂波行狀記讃州屛風浦　同年八月十六日
妹脊結町家仙人　同年十一月十日より
あやつり顏見世

田村丸鈴鹿合戰三の切迄　同年十二月廿一日
風流戲曾我、夏浴衣淸十郎染　同　上
今樣亂柏子
麓太夫時太夫町太夫鶴澤三二豐松十五郎出がたり
出つかひ
近江國源五郎鮒　同八年亥八月十三日
今臨戀緋櫻　同年十月十九日
色嘶庚申待　同年十二月十九日
八重太夫出座
東山殿幼雅物語　同九年子二月九日
稻荷街道墨染櫻　同年九月廿三日
後太平記十三卷目時代織室町錦繡　天明元年丑二月廿四日
碁太平記白石噺　同　年
是は七つ目丸一段新作此太夫場
合詞四十七文字　同年九月十三日
本不出
此比淨瑠理評判の礫出板
吾妻海道茶屋娘　同二年寅九月廿六日
此節豐竹此太夫豐竹賴太夫豐竹村太夫豐竹麓太夫
豐竹梶太夫等出勤若竹友五郎死す
義仲勳功記　同三年卯
近頃河原の達引　同　上
豐竹八重太夫勤む
太平義臣礎　同四年辰正月二日
本不出
豐竹氏太夫死去す
木下蔭狹間合戰　寛政元年酉二月廿一日
此太夫麓太夫駒太夫時太夫
博多織戀鏽　同年五月九日
座本豐竹此母此節豐竹此太夫豐竹内匠太夫豐竹彌
太夫
床改り豐竹中太夫等出座豐竹麓太夫同駒太夫同時
太夫退座
有職鎌倉山　同年八月十五日
弓太夫事豐竹岡太夫出座
星月夜百人上臈　同二年戌
近江八景石山遷　同　年
彫刻左小刀　同三年亥三月四日
江戸豐竹紋太夫出勤伊太夫事鐘太夫と改

會稽故郷錦
甲斐信濃世話南國志
花楓都模様　寛政三年六月十一日
攝津國長柄人柱　寛政四年九月廿八日より
四段目まで
切、義律勤功記三の切
一世一代豊竹此太夫三味線鶴澤寛治勤
鼻子本膳銀藏　同五年九月晦日より
顔見世座附

大坂取々新淨瑠利混雜

須磨内裏鞨弓勢　寶暦十四申正月三日
北の新地北本和泉座
正保四年雅水絹川堤　明和五子年二月十五日
あみだ池門前座本幾竹島吉
小春治兵衛中元暦掛圓　明和六丑年七月廿八日
同東の芝居座本竹本綱太夫
東口雕西口寄傾城花おだ卷　明和九子年十一月十四日
同門前幾竹座

振袖天神記　明和六丑年正月廿七日
道頓堀角の芝居座本竹本義太夫
連管三番叟　明和五年子九月
闘取二代勝負附　同　上
同龜谷芝居座本並木正三
夏衣裳國染　明和七寅壬年六月廿二日
同芝居にて座本竹本春吉
聖德太子利生の池水　同年八月十二日
同座にて
小いな半兵衛廓色上　明和五子年十一月十九日
あみだ池東の芝居竹本綱太夫座
紹重浪花八文字　明和六丑年二月十二日
同座にて
初物八百屋献立　同　年
同座にて　本不出
平家義臣傳
同座にて　本不出
勇將兼道猛將眞鳥魁鐘碑　明和七寅年十二月十五日
同芝居にて座本豊竹若太夫
園生の竹本　明和六丑年九月廿九日

道頓堀龜谷芝居竹本義太夫座
時代蒔書世話模様いろは藏三組盃　安永二丑七月廿八日
北新地芝居座本竹本染太夫
心中紙屋治兵衛　安永七戌四月廿一日
同芝居座本竹田万二郎太夫竹本染太夫
染太夫政太夫梶太夫咲太夫彥太夫文字太夫
道中鍋由噺　同年七月十七日
同座
往古曾根崎村噂　同年九月廿三日
同座
政太夫退座
假名寫閇土問答　安永九年正月四日
竹本染太夫座
襤褸錦今様織留　天明元年丑九月十八日
堀江西之芝居　座本竹田新松
太夫竹本政太夫男徳齋彌太夫巻太夫中太夫
此浄瑠理は先に古浄るり敵討つゞれの錦興行の節
古今の大あたりに付大安寺堤の段より先増補にて
九新作也
替唱歌糸の時雨　同二年寅三月

北新地芝居竹本染太夫氏太夫綱太夫
女節用操鏡　同三年卯四月
本不出北の芝居にて竹田軒松座
太夫竹本組太夫豐竹駒太夫竹本彌太夫豐竹磯太夫
年忘長生噺　同年七月
竹本男徳齋勤
大功艶書合　同七年未十月十九日
道頓堀竹田芝居にて座本竹本万作　豐竹麓太夫竹
本内匠太夫竹本磯太夫竹本染太夫竹本彌太夫
近松半二死去
碁太平記白石噺　同八月十二日
北の新地芝居にて座本豐竹此吉太夫豐竹此太夫豐
竹賴太夫豐竹百合太夫豐竹時太夫鶴澤寛治
晴勝負方兩器物
陸竹常吉座北の新地芝居にて

江戸

鋤鋳駄六一代噺　安永三九月二日
義經新含狀　延享元三月

東金茂右衛門　明和六六月七日
吉野合戰名香兜　寶暦十四正月二日
神靈矢口渡　明和七正月十六日
弓勢智勇湊　明和八正月二日
源氏大草紙　明和七八月十九日
鎌倉山鎌擧勝閧　安永四正月四日
時代世話女節用　明和六七月十九日
吉野静一目千本　安永四正月二日
蝦夷錦摂袖雛形　明和六三月十六日
忠臣いろは實記　安永四七月十五日
初冠賤東帯　安永四五月廿八日
前太平記古跡鑑　安永三正月十三日
櫻姫操大全　安永五正月二日
江戸自慢戀商人　安永六三月
増補河内通
　初冠の外題がへ
志賀の敵討
驪山比翼塚　安永八亥七月二日
　肥前座
和泉の三郎

八幡の太郎
關取石の鳥井
當世摸様社古噺
往昔模様龜山染
嫩葉相生源氏　安永二年四月晦日
　新太夫座
けいせい扇富士　明和七年八月朔日
　新太夫座
糸櫻本町育　安永六年三月十一日
　新太夫座
戀娘昔八丈　安永四年九月廿五日
　新太夫座
色揚瀬川染　安永五年二月廿三日
　昔八丈後編　新太夫座
伊達競阿國戯場　安永八年三月廿一日
　肥前座
増補會稽山
　けいせい扇富士外題がへ也
和泉式部軒端梅　明和三年
　大當り也肥前座駒太夫出座

壽万歳島臺　安永四
新太夫座若太夫勤
東歌名物男
東唄操文章　天明七三月
薩摩外記座
增補腰越狀
肥前座
後日菅原
汐境七草双紙
納太刀譽鑑　安永八年七月六日
新太夫座
靈驗宮戸川　同九年三月三日
肥前座
碁太平記白石噺　同九年正月二日
新太夫座紋太座八重太夫島太夫
裙重血紅彂　同九年正月廿五日
肥前座
むかし唄今物語　天明元年正月二日
肥前座
鎌倉三代記　天明元年三月廿七日

肥前座
萬代曾我二番目おちよ半兵衛　天明元年丑七月
肥前座
荒御玉新田神德　安永八年二月八日
結城座
萬代曾我二番目お夏淸十郎　天明元年七月
肥前座
萬代曾我二番目お半長右衛門　天明元年丑七月
肥前座
加々見山舊錦繪　天明二年寅正月二日
新太夫座
伊達娘戀緋鹿子　天明元年卯正月二日
肥前座
七草若菜功　同二年七月十五日
肥前座
伽羅先代萩　同五年正月
結城座
石田詰將碁軍配　同三年卯正月二日
肥前座竹本政太夫紋太夫越太夫
內百番富士太皷　同年十月廿五日

肥前座竹本政太夫
おしゆん傳兵衛近頃河原の達引　同五年九月九日
肥前座
花上野譽の石碑　同八年八月廿一日
肥前座竹本住太夫同政太夫豊竹村太夫三輪太夫
此節薩摩座豊竹新太夫死去に付座本竹本新太夫座
と替る
筆始いろは曾我　寛政三年亥二月
薩摩座
曠勝負廓環　安永二年壬二月廿一日
竹本岡太夫

京都

浪花の地染洛陽の潤色壇補女舞劔楓
座本扇谷豊前掾　明和元申八月四日
都剛詠東管絃住吉誕生石　寛延元辰九月三日
竹茂都大隅
咲分赤間關　明和四亥九月九日
竹本義太夫

小田舘雙子日記　明和七寅八月十一日
扇谷和歌太夫
肥前座
鏡伊勢物語　安永四未八月十二日
豊竹島太夫
此浄るりは大坂中の芝居嵐松二郎座に致せし歌舞
妓狂言なり島太夫春太夫相勤む
源平二張弓　明和
本不出
富士日記菖蒲刀　明和二年五月十七日
竹本義太夫座
佐々木高綱武勇譽　安永七年二月朔日
竹本義太夫座
本不出
伽羅千代萩　同年九月
三段目まで浄るり太夫竹本春太夫出來
此時竹本春太夫一世一代花景闘都鏡相勤む
苅萱桑門筑紫𨏍　同八年
豊竹島太夫一世一代

よみ本上るり

宇賀道者源氏鑑　寶暦九卯正月
木曾冠者旭系圖　同年七月
櫻井御前舞女御前都鳥東古跡　明和三戌三月
誓義士三人兵郎　明和四亥六月
假名雑後日菅原　同年八月
源氏の弓流平家の矢合船軍凱陣兜　明和八卯三月
聖徳太子守屋大臣四天王寺伽覽（藍カ）鑑
座本大松百介並木正三作　寶暦七丑四月六日
鏡伊勢物語　安永四未四月五日
中の芝居座本嵐松二郎
平家朗詠源氏管絃相生轉の松　安永七戌九月
花飾三代記　天明元年丑八月
是は先に興行の佐々木高綱也
花櫓名取闘
下總國かさね説　安永八年亥八月
今昔妹脊服帯　寶暦十三年未三月
宮薗豊前座
亂曲扇拍子
越後座

豊竹伊太夫事鐘太夫豊竹和佐太夫事若太夫竹本町太夫事春太夫豊竹弓太夫事岡太夫竹本森太夫事三根太夫竹本葉太夫事倭太夫竹本武太夫事鐘太夫竹本濱太夫事綱太夫竹本三根太夫事染太夫竹本重太夫事咲太夫竹本和太夫事氏太夫竹本梶太夫事染太夫

参考今昔操浄瑠璃外題年鑑終

黒川眞道
矢野太郎　校

明治三十九年五月二十日印刷
明治三十九年五月二十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
編輯兼發行者　國書刊行會代表者　市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷者　本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷所　東京活版株式會社

大正十四年二月

寿代節様

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02977 5137